

---

# リリカル銀魂ライダー～異世界鎮魂歌～

黒龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜

### 【Nコード】

N4963S

### 【作者名】

黒龍

### 【あらすじ】

この小説は赤夜叉さんの『『銀魂×魔法少女リリカルなのは』〜魔法少女と銀髪の侍〜』と黒神さんの『『リリカル銀魂 Story』〜攘夷戦争鎮魂歌〜』を参考に書いた話です。

万事屋一行は源外の依頼で発明品の実験に付き合う事になった。しかし、装置の誤作動で『魔法少女リリカルなのは』の世界に来てしまう!?

そこで万事屋一行はとんでもない事件に巻き込まれる。

これは、魔法少女と侍に起こった小さな事件・・・

オリキャラと他作品キャラを万事屋に加え、オリジナル設定を盛り込んでいます。

それでも主役は我らが銀さんです。

## 第一訓：始まりは良くシリアスで始まる（前書き）

黒龍「ちくしょうおおおおおおお！！！！ 書き直したああ  
ああああああ！！！！（涙）」

銀魂「やっぱりキンハはダメだって事だな」

ソラ「それでもキンハの設定を抜かないあんたはすごいと俺は思う  
ぜ」

黒龍「まあ前のに負けない位の作品してみせる！」

銀魂「おう頑張れ！そして俺の出番を！」

ソラ「やっぱりお前はそれだな」

黒龍「頑張ります！！」

## 第一訓：始まりは良くシリアスで始まる

ここはとある研究所。

今の時刻は夜。

そこに牢屋のような部屋に閉じ込められた一人の少年がいた。月の光が牢屋を照らし、少年の姿を照らしている。

少年ははっきり言えば美形のとても端整の良い顔立ちで、容姿は『しゅごキアラ』の『月詠<sup>つきよみ</sup> 幾斗<sup>いくと</sup>』を黒髪にして幼くした姿である。瞳は某ソルジャーのような、空のように綺麗な瞳をしていた。

彼はこの研究所で日々実験のモルモットとして、苦痛を与えづつけられていた。

来る日来る日も与えられる痛みは常人なら、発狂するか自殺して自分の命を絶とうと思うほど苦しいものだった。

しかし少年はこの研究所から出るといふ強い思いと信じられなくらいの精神力で苦痛の日々を耐え抜いていた。

そして少年がいつものように鉄格子から見える景色を眺めていると、コツコツと廊下から足音が聞こえる。

少年「ん？」

少年は不意に廊下を見る。

白衣を着た二人の研究員が少年のいる牢屋の前まで来る。研究員の一人は二人子供を両脇抱えていた。

もう一人の研究員は一人の子供を抱えていた。

そして研究員の一人が牢屋を開け、子供達を乱暴に牢屋に投げ入れ

る。

少年「おい。もう少し易しく入れやったらどうだ？」

研究員「モルモット如きが私に意見するな！」

研究員は常備していた棒で少年の頭を殴る。

少年「ぐっ！」

少年は痛みを我慢しながら殴った研究員Aを睨みつける。

研究員「なんだその目は！」

研究員はまた少年を殴ろうとすると、もう一人の研究員が研究員の腕を掴んで殴るのを止める。

研究員「止めておけ。こいつは所長のお気に入りで。下手に傷つけたらマズイだろ？」

もう一人の研究員の言葉を聞いて研究員は舌打ちしながら棒を仕舞う。

そして研究員は少年を見下すような目で見る。

研究員「その三体は今日からお前の新しいルームメイトだ。出来損ないどうし仲良くするんだな！」

研究員はそう吐き捨てて廊下を歩いて行く。

研究員「01号。明日はもったときつい実験だ。今の内に覚悟してお

け」

もう一人の研究員は嫌味な笑みを見せた後に廊下を歩いて行く。  
少年は研究員達がいなくなったのを見た後にため息を尽き、自分の牢屋に放り投げられた三人の子供を見る。

赤髪の少年「……ひぐ……えぐ………お父さん……お母さん……  
どうして迎えに来てくれないの？」

少女の子に見える顔立ちをした赤紙の少年は涙を流しながら悲しそうな、苦しそうな声で泣く。

水色髪の少女「……………」

水色髪の少女はジーツと少年の顔を見ていた。  
容姿は『迷い猫オーバーラン』の『霧谷 希』<sup>きじや のぞみ</sup>の幼少期見たいな感じである。

かなりの美少女だと言えるだろう。

緑髪の少女「……………」

緑髪の少女は何もかもがどうでも良さそう壁に寄りかかりながら窓の景色を見ていた。

容姿は『コードギアス』の『C・C』を幼くした感じである。  
こちらもはつきり言ってかなりの美少女である。

少年（女二人は大丈夫そうだが……男の方はダメそうだな。とりあえず落ち着かせるか）

少年は三人をそれぞれ見た後に考えを纏めて行動する。

少年「その泣いてるの」

赤髪の少年「え？ ぼ、僕？」

赤髪の少年は驚いて一瞬驚いた後、おどおどしながら自分を指で指して確認を取る。

少年「ああ。とりあえず落ち着け。COOLになれ」

少年は冗談交じりに行ってなんとか赤髪の少年を落ち着かせようとする。

赤髪の少年はビクビクしながらも泣き止むを止める。

少年「良い子だ」

少年は微笑して赤髪の少年の頭を撫でる。

赤髪の少年は照れているのか、頬をほんのり赤くしていた。

少年「じゃあ落ち着いた所で、とりあえず自己紹介するか。俺はここで01号って呼ばれてる。お前は？」

赤髪の少年「え、えっと……僕はエリオ・モンディアルです」

エリオは戸惑いながら自己紹介をした。

少年（名前があるって事はここで『生まれた』奴じゃないな）

少年は二人の少女の方に顔を向ける。

少年「お前達は？」

水色髪の少女「にゃ……私は02号って呼ばれてる。でも、この名前は気に入らない」

緑髪の少女「私には名前はない。あいつらの付けた番号など気に入らないからな」

水色髪の少女は無表情で何故か猫のような声を出して答える。そしてその声にはどこか怒気の隠れていた。

緑髪の少女は不機嫌そうに答えた。

ちなみに緑髪の少女はこの研究所では03号と呼ばれている。

少年「そうかよろしくな」

少年は微笑みながら挨拶をした。

緑髪の少女「////////////////!?! あ、ああ////////////////」

水色髪の少女「うん////////////////」

二人は頬を赤くさせながら挨拶した。

少年は何故二人の顔が赤くなったのか分からなかった。

少年「なあ二人共研究員の付けた番号が嫌なら俺が代わりに二人の名前を考えてもいいか？」

少年の言葉に02号と03号は一瞬目を見開いた後、03号が少年に質問する。

03号「どうしてだ？」

少年「俺は二人が嫌っている番号を言う気がないからな。だからそれだと呼び名がないから名前を付けようと思ったんだが、嫌だったか？」

03号「くくく……お前、面白い奴だな」

03号はこの牢屋に入って初めて笑みを浮かべ、可笑しそうな声を漏らす。

少年「そうか？」

少年は自分がおかしな事を言っただけという自覚はあまりなかったので首を傾げた。

03号「連中よりも、お前の考えてくれた名前の方が1億倍良いな。よろしく頼む」

03号は笑顔で了承した。

02号「私も、お願い／＼／＼」

02号も恥ずかしそうにしながらお願いする。

少年「分かった」

少年は頷いた後、腕を組んで考えた。  
少しの間考えていた後、何かを思い付いたような顔になる。

少年「お前が『アリス』。それで、お前が『アリア』でどうだ？」

少年は『アリス』と言う名前の時は緑髪の少女を指で指し、『アリア』と言う名前の時は水色髪の少女を指で指した。

少年が考えた名前を聞いた二人は少しの間黙考した後に感想を言う。

アリス「アリスか。中々言い名前だな」

アリア「アリア……ありがとう」

二人は満足そうに少年の付けた自分の名前を復唱する。

エリオはその時少年の事を不思議な人だなあー、と思った。

少年、アリス、アリア、エリオが会ってから1ヶ月が過ぎた。  
少年以外の他のメンバーは少年と同じ牢屋に入る前はずっと苦しい実験を受けていた。

だが、少年の牢屋に入るようになってからは実験がなくなった。  
それは自分がアリスとアリアとエリオの実験を受ける代わりに三人には何もしないと言う約束を研究員達に取り付けたからである。  
意外にも研究員達は少年の条件を受け入れた。

そして今日も少年は体をボロボロにしながらエリオ達のいる牢屋に入れられた。

エリオ「どうして……僕達のためにそこまでするの？」

エリオは泣きそうな顔で少年に質問した。

横で無表情だが心配そうにしているアリスと心配そうな顔をしているアリアもどうして自分達のために己の身を犠牲にしてまで助けてくれるのか知りたかった。

少年「——これは俺の勝手だ。だから気にするな。ただ……」

エリオ「……ただ？」

少年「……ほつとけないと思ったただけだ」

少年は小さく呟いた。

アリス・アリア・エリオ

『『え？』』

三人は少年の言った言葉が良く聞こえなくて、少年に再度聞いたが少年はそれ以上は何も言わなかった。

それから瞬く間に一ヶ月が経った。

アリスとアリアとエリオは今までの非人道的な実験のせいで心も体もボロボロの状態だったが、少年が身を挺して実験から守った事と少年との会話が三人の傷ついた心と体を少しずつ癒していた。

そして今では……。

少年「……なんで俺に寄りかかってんだ？」

アリス「気にするな」

アリア「すう」

アリスは嬉しそうな顔で少年の体に寄りかかり、アリアは幸せそうな顔で少年に寄りかかりながら寝ていた。

エリオはその様子を苦笑しながら見ているとある事を思いつき、少年に声を掛ける。

エリオ「あの01号さん。ちょっといいですか？」

少年「ん？　なんだ？」

少年は自分に付けられた番号は気に食わなかったが、これ以外自分を指す名前がなかったのでエリオが自分を01号と呼んでも得に気にする事なく返事をする。

エリオ「えつと……01号さんの事、兄さんて読んでも良い？」

少年「……なんでだ？」

エリオの突然の提案に少年は哑然として、話を聞いていたアリスも少なからず驚いた顔をしていた。

理由を聞かれたエリオは言い難そうにしながら、理由を話す。

エリオ「えつ、いやつ、その……僕、心の何処かで“兄さんみたい

な人が欲しいかな”と考えていた事があって……と言ってもこの思いは僕のオリジナルの子の思いかもしれないけど……」

少年「なるほどな」

少年とアリスは納得する。

エリオはモンディアル家の長男として生まれた——というのはまやかしの記憶。少年は“エリオ”という少年のコピーとして生み出されただけの偽りの存在だった。

研究所に着いてからの研究者たちは、違法な経緯で生み出されたエリオを人間と見ておらず、非人道的な扱いを通り過ぎた扱いをしていた。

エリオには“オリジナルであるエリオ”には無かった強い魔力を持っていた。研究者たちはそこに目をつけ、エリオの魔力を強化する実験を施した、

この事は少年とアリスとアリアはエリオから話を聞いているので知っている。

そしてまた、少年とアリスとアリアもまたエリオと同じ技術で生み出された存在だ。

だが、三人はエリオとは違う点がある。

それは自分達の元になった人間が多数いると言うことである。

一人の存在のコピーではなく、多数の人間の細胞を組み合わせられて生み出された存在。

ただ、強い生物兵器としてこの研究所で生み出された存在なのだ。

エリオ「ダメ……かな？」

エリオは不安そうに尋ねる。

少年「弟か……悪くないかもな」

少年は考える仕草をした後にそう呟く。

エリオ「えっ、じゃあ……」

エリオは嬉しそうな期待に満ち溢れた顔で少年の答えを待つ。

少年「ああ。お前の兄さんって奴になってやるよ」

少年は笑みを浮かべる。

エリオ「やったー!!」

エリオは嬉しそうに両手を上げて歓喜する。

今のエリオにとって、研究所の連中に連れて行かれそうになった自分を助けなかった両親よりも、この研究所で自分を守ってくれた目の前の少年の方がずっと家族のような存在に見えた。

エリオはつい喜んでしまったが、大げさなリアクションを取ってしまった事に気づき恥ずかしそうに顔を赤くさせた。

少年はそんなエリオの様子を見て、本当に嬉しいんだな、と思った。

エリオ「じゃあ兄さん、早速だけど名前を決めようよ」

少年「そうだな。俺も01号って名前は気に入らないからな」

少年が01号と言う名前が気に入らないからと言う事で、アリスとアリアが前に少年の名前を決めようと提案したのだが、どれも没案

になった。

なにせ出て来た案が、『クラウド』とか『セフィロス』とか『黒崎一護』とか『孫悟空』とかだからである。

さすがにそれはないと少年は思った。何故だかは本人も分からなかったが……。

エリオ「う~~~~ん……」

少年「……そんな真剣にならなくてもいいぞ……」

少年は真剣な顔で考え込むエリオを見て苦笑する。

考えながら低く唸っているエリオはふと頭の中にある言葉が浮かんだ。それに閃いたのか、エリオは笑みを浮かべる。

エリオ「兄さん、“ソラ”……っていうのはどうかな？」

ソラ「ソラ……か。悪くないな」

と言う事で少年の名前は“ソラ”に決まった。何でもソラが時々口ずさんでいる言葉の中に「青空」という部分があったのを思い出してこの名前にしたそうだ。

5歳位の子供の考えれる範囲ではこれが妥当だろう、とソラが思ったのはエリオには内緒だ。

アリス「そうか。だが、私はソラよりも『ラオウ』とか『ケンシロウ』の方が良いと思うのだがな」

ソラ・エリオ

『『それはない』』

二人はアリスの提案を即効で没にした。

ここは研究所にある、研究室の一つ。

ここでは研究所の所長を含めた何人かの研究員達が話し合っていた。

研究員「所長。そろそろ01号への実験はしつくしてしまいましたし、そろそろ廃棄処分した方が良くはありませんか？」

所長「そうだな。01号はどんな実験にも耐える最高のモルモットだったのだから。そろそろ潮時か」

所長は残念そうな顔をする。

ただそれは自分の大切な研究材料を失うと言うモノだ。そこに良心や同情の呵責はなく、ただ冷徹にソラを研究材料として見ているための意見に他ならない。

研究員「仕方ありません。01号は身体能力は人間ではあり得ないほどのですが、リンカーコアは死滅していて、とても兵器としては使い物になりませんから」

リンカーコアとは魔導師が魔法を使う上で必要な器官なのである。

ソラは度重なる実験のせいでリンカーコアそのものを失くしてしまっている。

魔法の力こそが何よりも強い力だと思い込んでいる研究員達はソラはもう兵器としてもモルモットとしても使い物にならないと判断したのだ。

所長「ふむ。なら最後に管理局上層部から贈られたこのロストログィアの実験を01号ですとしよう」

所長は顎鬚を撫でながら、机の置かれたベルト状の物を見る。

研究員「確かそれは滅びたリントとか言う種族の遺跡にあったミイラが腰に装着していたロストログィアですよね？」

所長「ああ。こいつはなんでもSSSランク以上の凄い物らしいのだ。しかし、どの実験動物に装着しても全員精気を吸われたようなミイラになってしまう。廃棄処分にするなら最後にこのロストログィアのデータを取るための役になってもらおうと思つてな」

所長は怪しい笑みを浮かべる。

研究員「なるほど。確か01号はリントの遺跡で発見されたミイラの細胞をベースにし、更にはあらゆる細胞を掛け合わせて作り出したから、もしかしたら今までとは違うデータが取れるかもしれないですね」

所長「ふふふ……そういうことだ。もしこのロストログィアの使用方法を私が解き明かしたとなれば、最高評議会の方々の目に私が止まるかもしれないからな。くくく……あーはっはっはっはっはっはっはっ……」

所長は嬉しそうに高笑いをする。

だが、彼らは知らなかった。これから自分達<sup>が</sup>する事が破滅を招く行為に繋がる事に……。

## 第一訓：始まりは良くシリアスで始まる（後書き）

黒龍「やっぱソラがライダーになるここははずせないでしょ！」

ソラ「俺はどこまでいってもクウガなんだな」

銀時「じゃあねえよ」

黒龍「次回。『例えどんな姿になっても変わらない』にテイクオフ！」

## 第二訓：例えどんな姿になっても変わらない（前書き）

黒龍「一から書き直しだけど、なんか前よりも面白い設定が色々でてきて書きやすい」

ソラ「まあ、黒龍も大分小説の書き方に慣れたからな」

銀時「前よりも俺の出番を増やして欲しいもんだぜ」

アリス「『リリカル銀魂ライダー』始まるぞ」

## 第二訓：例えどんな姿になっても変わらない

研究所では、ソラの最後の実験として牢獄から連れ出そうとしていた。しかしその研究者たちの様子がいつもと違うと感じたのか、エリオは自ら電気を発生させて研究者たちに襲い掛かった。

エリオは度重なる実験のおかげで魔力変換資質で『電気』を保有しているのでできる芸当である。

エリオに続いてアリスとアリアも研究員達に襲い掛かった。

エリオ「このお！！ 兄さんを離せ！！」

アリア「ソラを離せ！」

アリス「お前ら……！」

研究員「ぐわああああっ！！」

研究員Aは感電して上にアリスとアリア殴られて吹っ飛ばされた。アリスとアリアもソラ程ではないが、かなり身体能力を有している。その辺の大人くらい軽く倒せる。

研究員「このガキがつ！！！」

警備員「おとなしくしろ！！」

研究員が電気を遮断する道具を持ってエリオを叩き伏せれ、アリスとアリアは周りにいた警備員に棍棒で叩き伏せられてしまった。

三人は研究員と警備員の一撃で気を失って倒れてしまった。

ソラ「エリオ！ アリス！ アリア！」

ソラは三人の元に駆け寄ろうとしたが、研究員にスタンガンのような物で気絶させられてしまい、研究室に連れて行かれてしまった。

研究所のある一室、そこに両手両足を鎖で拘束されたソラの周りに研究者たちが冷たい笑みを浮かべながら石化したベルトを運んできた。

所長「さて、この奇妙なベルト状の物体がこの実験体にどのような効果をもたらすかな？」

研究員「まあデータファイルの中にあつた実験動物たち同様の結果になりそうな気がしますかね…」

研究員がベルトをソラの腰に装着させようとする。ソラは抵抗しようとするが、両手両足を拘束された状態では何も出来ないでいた。今まではエリオやアリスやアリアを実験台にさせないためにあまり抵抗はしていなかったが、今回はソラ自身も何かいやな予感がしていた。

ソラの抵抗も虚しくソラの腰に石化したアークルが置かれると彼の体中に激痛が走り、痛みに苦しみ出す。研究者たちはこの状態が続

けばファイルの中にあつた状態へと変わっていくと誰もが思っていた。しかしいつまで立つてもソラ自身に変化がなく、代わりにデータファイルの中にはない反応がアークルから観測されていた。

所長「こつ、これは……何が起こっている!？」

研究員「こんな現象、あのファイルの中にはなかったぞ!!」

見た事のない現象に混乱する研究員達をよそに、ソラ自身には激痛と共に頭の中に何かの光景が写っていた。

ソラ（なっ、何だこれは？ 角の生えた……者？）

ソラの目の前には頭に二本の角の生え、赤い大きな瞳の戦士が何者かと戦っている光景が見えていた。そしてどんどん光景が移り変わりながらソラの頭の中に流れ込んでくる。そして最後には黒い何かが見えた。

ソラ（何だ？ 一体何なんだ……俺自身が知らない事ばかり頭に流れ込んでくるのに何処か覚えている気がするのは……）

そしてソラの頭に謎の声が響いてきた。

【アークルに選ばれし者よ。主にクウガの力を授けよう】

ソラ（ク、ウ、ガ？）

ソラはアークルと言うのは今自分がつけているベルトだと言う事が分かったが、クウガと言う部分が分からなかった。

【汝は選ばれた。クウガの力を解放し、己が道を切り開け】

ソラ（どう言う事だ？）

ソラが頭の中で混乱する中、台の上で暴れるソラを見ていた研究者の一人があることに気づいた。ソラの腰に巻かれているアークルの表面が光を発しながら徐々に輝が入り始め、割れた瞬間石の下から銀色の装甲が現われた。そしてアークルの中心にある大きな部分がオレンジ色に光り出したのだ。

研究員「何だ、このオレンジ色の光は！？」

研究員「とにかく取り押さえるんだ！！」

研究者たちは暴れるソラを体を張って取り押さえようとした時、ソラの腕を拘束していた鎖が切れてしまつて研究者の一人にソラは左手で殴りかかった。その瞬間、ソラの左手から肩にかけて白い手甲に覆われ手首には金色に白い宝石が埋め込まれている物に変化した。

所長「なっ！？ 腕が変わつたぞ！！」

ソラに殴られた研究者が驚いているとソラは次々と鎖を断ち切り、研究員たちに襲い掛かった。そして殴る蹴るを繰り返しているとソラの姿は、頭にクワガタのような小さな角が二本生え、赤い瞳に白いプロテクターを身につけた白き戦士『クウガ・グロージングフォーム（今後はクウガGFと記述）』へと変身した。

そして変身が終わつたクウガGFは自分の顔や体を触った後、近くにあった鏡で自分の姿を見た。

クウガGF「これが俺か？」

クウガGFは今の自分の姿が信じられなかった。なにせ身長は成人男性くらいになり、体はアーマーのような鎧を着た異形の者へと変わったからである。

だが今の自分の姿がどうあれ、これならここにいる研究員達を倒し、この研究所からエリオ達を連れて逃げ出せると思ったクウガGFは我先にと逃げようとしている研究員達を見た。

クウガGF「とにかく、これは都合がいいかもな」

クウガGFは握り拳をボキボキ鳴らしながら逃げ惑う研究員達に向かって歩いて行った。

そのころエリオ達のいる牢屋では、すぐに気絶状態から目覚めたエリオとアリスとアリアがどうにかソラを助け出そうと檻を破るために色々と行動を起こしていた。

エリオ「うおー！！」

まずはエリオが体に電気を纏わせて檻に体当たりしたが、鉄格子びくともしない。

アリス「はッ！」

アリスが風を纏わせた蹴りで鉄格子を破ろうとするが、やはりびくともしない。

アリスは度重なる実験で、魔力変換資質で『風』を保有しているの  
でこう言う技が使える。

アリア「えい！」

アリアが手を横薙ぎに振って水の斬撃を鉄格子当てるがびくともしない。

アリアは度重なる実験のおかげで、魔力変換資質で『水』と『氷』  
を保有しているのである。

エリオ「ダメだ！　いくらやってもびくともしない！」

エリオは悔しそうに濡れた鉄格子見る。

いくら三人が高い魔力量を持っている上に魔力変化資質と言うレア  
スキルを持っても、そう簡単に鉄格子は壊れない。

この鉄格子はエリオ達ように研究員達が作った特別製の鉄格子で、  
A A Aランク級の攻撃じゃなきゃ壊れないくらいの頑丈さを誇って  
いる。

その上、実験ばかりで魔法を使う訓練などまったくしていないエリ  
オ達ではいくら魔力量が多くてもA A Aランク以上の攻撃が使える  
はずがない。

さらには食事や実験のせいで体力も満足にない状態の彼らでは到底  
鉄格子を壊してソラを助けに行くのは不可能に近い。

それはエリオ達も分かっている。

アリス「諦めるな。ソラは何がなんでも助け出す」

エリオ「うん！ 絶対兄さんを助けてみせる！」

アリア「うん」

だが、例え分かっているとしても彼らは諦めない。

自分達の大切な人を助けたいと言う強い思いがあるからである。  
だから何度も何度も攻撃繰り返し、鉄格子を破ろうとする。

その甲斐あつてか、鉄格子にも小さな傷ができてきたが、もう既に  
エリオ達の体力は限界だった。

アリス「ハア、ハア、ハア、あと、もう少しだ……！」

アリスは両手を膝に付いて息を荒くして汗を流しながら鉄格子を睨  
み付ける。

エリオとアリアも、アリスと同じように息を乱しながら目の前の  
鉄格子を見る。

そしてアリスは風、エリオは電気、アリアは水を纏う。

そして最後の力振り絞って三人同時に鉄格子に体当たりした。

バキン！

鉄格子は砕け、三人は勢いに乗ったまま廊下に出て、体を廊下の床  
にぶつける。

ついに鉄格子を破る事はできたが、三人はもう疲労が限界に達して  
おり動く事ができずに廊下に寝そべった状態のままになっていた。

アリス（くそ……！ 折角鉄格子を敗れたと言うのに………！）

アリスはなんとか自分の体を動かそうとするが、如何せん体言う事を聞かなかった。

それはエリオとアリアも同じだった。

早くソラの元に行つてソラを助けたのに助けられない。

このまま何せずに動けなければ、また研究員達に捕まり牢屋に逆戻りだつて言つ展開もありえる。

体が動かないという悔しさだけがエリオとアリスとアリアの心を巡っていた。

ドカーン！

アリス・エリオ・アリア

『！？』

倒れている三人の前にあつた壁が壊れ、そこから頭にクワガタのような小さな角が二本生え、赤い瞳に白いプロテクターを身につけた異形の者、クウガが歩いてくるのが三人の目に映った。

目の前に異形の存在が現れたら普通の人間なら恐怖を感じてすぐに逃げ出すだろう。

だが、三人が感じたのは恐怖でなくどこか懐かしいような安心感と嬉しさだった。

三人はあまりの疲労に自分達の感覚が麻痺したのだと思つたが、すぐに安心感が生まれた理由が分かった。

クウガGF「大丈夫か？」

クウガGFは急いでエリオ達に近寄った。

エリオ達にとってクウガGFの声はとても聞き覚えのある声だった。

アリス「お前は、もしかしてソラ、なのか？」

クウガGF「ああ。姿が変わっているが、俺は正真正銘お前達に“青空を見せてやる”って言ったソラだ」

クウガGFはしゃがみながら頷く。

前にソラがエリオ達に「いつかここを出たら青空を見せてやる」と言う約束をした。

そしてこの約束はエリオとアリスとアリアしか知らない四人だけの秘密だ。

その言葉だけで三人は目の前のクウガGFがソラだと言う事が分かった。

アリスとアリアとエリオは嬉しさのあまりふらつきながらもなんとか立ち上がってクウガGFに寄りかかるように抱きついた。

アリス「お前にまたあえて私は嬉しいぞソラ」

アリア「ソラ……」

エリオ「兄さん……」

アリスとアリアとエリオは嬉しそうな顔で涙を流しながらクウガGFに抱きついていていた。

クウガGFも易しくアリス達を抱きしめた。

研究所の別の場所では、次々に研究員達が殺されていた。

研究員「た、助けてグハツ!!」

研究員「く、来るな!! ゴハツ!!」

研究員「ひっ! に、逃げ! ゴボハツ!!」

研究員「ぎゃああああああああああ!!」

ある者は顔を深く切り裂かれ、またある者は内臓が潰れ、またある者は首の骨が折れていた。

???「ザボゾロガ」

謎の言葉を発しながら死体を次々に作る異形の怪人は、グロンギの一人。『ズ・グムン・バ』である。

この世界のグロンギはダグバ以外はるか昔にクウガに倒されている。

では何故グムンがこの研究所にいるかというと、この研究所の研究員達がグムンの細胞を偶然見つけ、そのままグムンのクローンを作ったのだ。

ただ、グムンのクローンはオリジナルの記憶を引き継いでしまったので、言う事を聞かず手が付けられなかった。

そして今まで牢屋に閉じ込められていたのだが、さっきクウガGFが暴れしまったので牢屋のロックが外れてしまい牢屋から出て暴れているのである。

グムン「クウガ、ツギパ ダゴグ。リント バス」

グムンにとってここはどこか分からなかったが、そんな事はどうでもよかった。

ただクウガへのリベンジと自分を閉じ込めた人間<sup>リント</sup>を狩る事意外グムンの頭にはなかった。

そしてグムンは次々研究員を殺しながら進んで行った。

そしてここはまた別の研究室。

そこには石化した巨大なクワガタのような物が大の上に置かれていた。

これは過去にクウガと共にグロンギと戦ったクウガの相棒のような存在、『ゴーラム』である。

そしてそのゴーラムはこの研究所でロストロギアとして持ち込まれ研究対象として今もなお研究されている。

研究員「おい！ 早く運び出せ！ 大事な研究材料だぞ！」

警報が研究所中に鳴ったので研究員達は急いでゴーラムを運び出そ

うとしていた。

しかし、ゴーラムはあまりにも重かったので中々運び出せず手をこまねいていた。

研究員達がゴーラムを運び出そうとすると、急にゴーラムの背中についている宝石のような物が光だし、ゴーラムの表面に輝が入っていきそしてその砕けてしまう。

しかし、砕けたのはゴーラムを覆っていた石のような部分だけで、石が砕け落ちると黄金と黒の装飾が施されたゴーラムが現れた。

研究員「な、なんだ！？ 一体どうなっている！？」

研究員達が突然の事体に慌てているのをよそにゴーラムは羽を羽ばたかせ、そのまま壁を破りどっかに行ってしまった。

研究員達はその光景を呆然と見ている事しかできなかった。

一方クウガGF達は研究所の廊下を走っていた。

さっきまではクウガGFがアリスとアリアとエリオをおぶっていたのだが、あらかた体力が戻ったアリス達はクウガGFの背中から降りて走っていた。

ちなみにクウガGFは自分がどうして異形の姿になった理由をアリス達には話している。

アリス「それにしても、どうやったらソラは元の姿に戻るんだ？ 私としては元の姿に戻って欲しい所なんだがな」

アリスは心配そうにクウガGFを見ながら言う。

アリスはもしかしたら一生ソラがこのままかもしれないと思っていて不安なのだ。

クウガGF「俺もどうやって戻れるのか分からないが、とりあえずここから出てから考える」

アリス「……それもそうだな」

アリスはクウガGFの言葉を聞いて、まずこの最悪研究所から出てからゆっくり考えようと決めた。

エリオ「兄さん！ 出口が見えてきたよ！」

エリオが嬉しそうに言う。エリオの指の先には外の光景が広がった扉があった。

どうやら研究員達が慌てて出て行ったので、そのままドアが開いたままになってしまったようである。

そしてエリオ達はついに研究所から出ることができた。

クウガGF「どうやら、今は夜のようだな」

牢屋で見た時は夕方だったが、すっかり日も落ち外は夜になっていた。

だが、研究所は火事で燃えているので暗闇で目が利かないと言う心配はない。

アリアやアリスはエリオは嬉しそうに外の景色を眺めていた。

やっと自由が手に入った。これでもう実験動物にされる事もない。その嬉しさからつい笑顔になってしまった。

クウガGFも素顔は分からないが、顔は笑っているだろう。

エリオ「兄さん、これからどうする？」

クウガGF「そうだな。とりあえず、この研究所から離れるのが先決だな。研究所の奴らが俺達を捕まえに来るかもしれないしな」

クウガGF達は研究所を離れようとした時、突然悲鳴が聞こえてきた。

「助けてー！ー！ー！ー！！！！！」

クウガGF・エリオ・アリス・アリア

『！！？』

四人が悲鳴のした方を見ると、小人のような30cmくらい身長の子が入ったケースを持ちながら走っている所長がいた。

クウガGFは咄嗟に所長の前に立ちはだかった。

所長「き、貴様01号！！！」

所長は慌てて立ち止まる。

クウガGF「よう。あんたにはかなり貸しがあったな。悪いがここで利子付けて返還させてもらう」

クウガGFは腕をボキボキ鳴らしながらにじり寄る。

所長「だ、黙れ！！ 貴様のようなモルモットのせいで私の研究所も地位も全てがパーだ！！ 貴様だけはここで殺してくれる！！！」

所長は服の中から拳銃を出す。  
質量兵器は管理局では禁止されているが、違法研究をしている彼らにはそんなのは関係ない。  
用心のために普段から持っていたのである。

クウガGF ちよっと……まずいかもな

クウガGFは焦った。

今の自分はかなり力を持っているが、今の体はどこまで丈夫なのか分からない。

銃弾を受けて平気でいられる自信はあまりない。

所長「くくく。いくら貴様でも銃弾を喰らっては生きていられまい。死ね!!」

所長は躊躇なく引き金を引いた。

バン!

銃弾はそのままクウガGFの頭に当る。

所長はクウガGFが死んだと確信したが、

クウガGF「いて……」

全然死んではいなかった。

所長「へっ?」

所長は啞然として間抜けな声を出してしまった。

所長「……………いや“いて”ってなんだ！？　なんだそのドツ  
ジポール当たったみたいな感じは！！　普通死ぬだろ！！　銃弾喰  
らって無傷ってどんだけ丈夫なんだ貴様は！！」

所長はクウガG Fが無傷な事にビックリしてつい冷静さをかいていた。

アリス「よっ」と

グサ！

そのスキにアリスが所長の後ろに回りこんでそこら辺あつた木の枝を所長の尻の穴にぶつさした。

所長「おんごわあああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああああああ  
 ああああああああああああああああああああああああああ  
 あ!!!!!!!!!!!!」

所長は痛みのあまりケースを空中に放り投げてしまった。

クウガGF「おっと」

クウガGFがケースをキャッチした。

アリア「むしる……」

アリアは木の枝が尻の穴に刺さって倒れて悶えている所長の頭を毛をむしり取り始める。しかもバリカンとか使わず素手で。



クウガGF「おい大丈夫か？ 今助けてやる」

クウガGFはケースを空け、中に入っていた少女助け出す。  
少女は髪が長髪で、身長が30cmくらいだった。  
少女はケースが空いた後に空中をフワフワと浮く。

リリス「ありがとうございます。私はリリスと言います」

クウガGF「あ、ああ。ソラだ」

クウガGFは空を飛びリリスに少し面を食らったが、無難に挨拶した。

ちなみに身長的事でも既に少し驚いていたのであしからず。

この後リリスが自己紹介をした後にアリスとアリアとエリオとも自己紹介を済ませた。

リリスが自分の事について話そうとした時、

ドカーン！！

黒い馬「ヒヒーン！！」

????「ラデー！！」

頭にユニコーンのような角を生やし、黒い綺麗な毛並みの馬が研究所の壁をぶち破ってグムンと共に出てきた。

## 第二訓：例えどんな姿になっても変わらない（後書き）

黒龍「今度どう言う方針にするかアンケートを取ってみよう」

ソラ「どんなアンケートを取るんだ？」

黒龍「???機関をオリキャラで出すか、やっぱりそのまま原作メンバーで出すかどうか」

銀時「お前、まだ諦めてなかったんだな」

黒龍「だって、???機関は敵キャラでも高杉並にキャラが立つんだもん」

銀時「おい、まったくかわいくねえぞ」

ソラ「はあゝ。次回、『異世界に行っても人は強く生きられる』にテイクオフ」

### 第三訓：異世界に行っても人は強く生きられる（前書き）

黒龍「ふっやっところまできた」

銀時「やっぱ一から書き直すは大変だよな」

黒龍「でも頑張ります！」

銀時「とにかく俺の出番を早くしてほしいものだぜ。そんじゃ『リカル銀魂ライダー』異世界鎮魂歌』始まるぜ」

### 第三訓：異世界に行っても人は強く生きられる

黒い馬「ヒヒーン!!」

グムン「ラデ!!」

頭にユニコーンのような角を生やし、黒い綺麗な毛並みの馬が研究所の壁をぶち破ってグムンと共に出てきた。

グムンは壁を飛び出して来た黒い馬の後を追うように走る。

黒い馬は外に出たと同時に角から雷を出してグムンに当てようとするが、グムンの横を通り過ぎてしまう。

グムン「ギベ!!」

グムンはすかさず黒い馬にパンチ食らわせる。

黒い馬「ヒヒーン!!」

黒い馬は痛そうに鳴き、倒れてしまう。

そしてグムンは黒い馬を踏みつける。

黒い馬は苦しむように呻く。

その光景をエリオ達は啞然として見ていた。

ユニコーンのような黒い馬もそうだが、それよりもグムンの方がエリオにとっては恐怖を与えていた。

目の前で黒い馬を足蹴にしながら謎の言葉を発するグムンが怖くて仕方なかった。

エリオ（な、なんだあれは!?!）

明らかに目の前の怪人は温厚な相手ではない事は一目瞭然だ。  
なら怪人が黒い馬に気を取られているスキに逃げるのがセオリーだ  
が、エリオは足がすくんで動けなかった。  
エリオは横目でアリス達を見た。

アリス「あの怪人は一体なんだ？」

アリア「あの黒い馬……様子が変？」

リリス「あの蜘蛛の怪人は一体？」

三人は戸惑いの色を見せているが、特に怯えている様子はなく、現  
状を理解しようとしていた。

エリオはそんな彼女達の様子を見て、男である自分が怯えている事  
が情けなくなった。

ここは自分が前に出て女の子であるアリスとアリアとリリスを守る  
所なのに体が動かない。

黒い馬「ヒヒーン!!」

グムン「ゴラゲグ ガギション ゲロボザ」

グムンは足に力を入れて、そのまま黒い馬の首を折ろうとする。

エリオはその光景を見る事しかできなかった。  
その時、クウガGFが前グロインフォームに出た。

クウガGF「気に入らないな」

エリオ「兄さん？」

クウガGFがエリオの横を通り過ぎ、グムンに向かっていく。  
エリオはそんなクウガGFの姿を不安そうに見ていた。

クウガGF「おい」

グムン「っ！！」

クウガGFはグムンにパンチをし、グムンは吹っ飛ぶ。

クウガGF「さすがに殺すのはやりすぎだろ」

クウガGFはパンチを突き出しながら言う。

グムンは体を起こしながら驚いた声を出す。

グムン「クウガ！？」

クウガGF「クウガ？……やっぱ今の俺の姿はクウガって言うのか」

クウガGFは改めて頭の中で聞いた謎の声の『クウガ』と言う言葉  
がなんなのか、なんとなくだが理解した。

グムン「ツボグ チギガブ バダダバ」

グムンは怒りが入り混じった声を出し、クウガGFに突っ込む。

クウガGF「何言ってるんだ、こいつ？」

クウガGFは少し混乱しながらも応戦する。

だが、クウガGFは苦戦していた。  
明らかに攻撃してくる Gum の方が戦い慣れている。パンチの一発一発が鋭い。

だが、クウガGFは今まで戦った事ない戦闘においてはまったくの素人。

いくらクウガGFの力が凄いと言ってもこれでは不利である。

Gum 「ビゲソ！」

クウガGF 「ぐっ！」

Gum は渾身の一撃をクウガGFの胸に叩き込む。クウガGFは胸を押さえながら後ろに下がる。

Gum が追撃をしようとした時、

Gum 「！？」

Gum の足が凍りついていた。

アリア 「ソラを傷つけさせない」

アリアが Gum を睨みながら手から白い冷気を出していた。

アリアが氷結で Gum の足を凍りつかせたのだ。

アリス 「悪いがお前の相手はソラだけではないぞ」

アリスが所長の持っていた銃を拾い Gum に撃ち、弾は全て Gum の胸に命中する。

しかし、Gum に向かって撃たれた銃弾は Gum の体の中から出てくる。

Gum 「ザボゾロガ」

Aris 「本当に化け物だな……」

Aris は汗を流す。

多少なりとも銃が効くかと思ったが、Gum にはまったくのノーダメージだった事に焦る。

Gum は自分の足を凍りつかせている氷を砕き、そのまま素早い動きで Aris の首を掴む。

Aris 「ぐっ！」

Aris のその小さく華奢な体は持ち上げられ、Aris は苦しみながら足をバタつかせ、Gum の手を振りほどこうとするがまるでビクともしない。

幾ら Aris の身体能力が相当高いと言っても、所詮は子供。グロングで最下級に位置する Gum とは言え、その力はかなりのものである。

Gum 「ギベ」

Gum が手に力を入れて Aris の首をへし折ろうとすると、

Kuga GF 「お前の相手は俺だ！」

Gum 「ぐはッ……！」

Kuga GF が思いっきり Gum の顔を殴る。Gum は突然の攻撃で

アリスを放してしまう。

アリス「ケホッ！ コホッ！」

アリスは首を押さえて咳き込みながら肺に空気を入れようとする。  
アリアがアリスに駆け寄り、心配そうに背中を擦る。

グムン「クウガ！」

グムンは怒りを露にしながらかウガGFを睨む。

クウガGF「悪い、アリス、アリア」

クウガGFはアリスとアリアを見ながら申し訳なさそうにする。

アリス「気に、するな。私達が、勝手にした事だ」

アリア「私達はソラが大事だから」

アリスは咳き込みながらも心配すると言う風に微笑を浮かべる。  
クウガGFはアリアとアリスの言葉を聞いて、グムンを見る。

このまま自分がやれてしまえば、次にアリスやアリア、そしてエリオがああ怪物に殺されてしまう。

——それだけはさせない。なんとしてでもこいつは俺が倒す。

クウガGFがそう思った時、ベルトの中心部分が赤く光始める。  
研究所で燃えている炎のようにクウガGFの装甲が赤くなり、角が大きくなる。

クウガGFはクウガマイティフォーム（これからはクウガMFと記述する）と超変身する。

アリス「鎧の色が変わった？」

アリア「……………角も大きくなった？」

アリスとアリアは姿が変わったクウガMTを見て若干驚く。

グムン「ロドビ　ロゾダダバ」

グムンはクウガMTを見てもさほど驚かず、すかさず攻撃しようと突っ込むが、クウガMFがグムンの腹にパンチを決め、グムンは怯む。

グムン「ゴボセー!!」

クウガMF「はっ！」

怯んだグムンに連続でパンチやキックを食らわせていく。

グムンはクウガMTの協力な攻撃にダメージを受け、胸や腹や腕から血を出す。

クウガMF「これで終わりだ」

そしてクウガMFは一旦離れた後、クウガMFは右足に力を込めるとクウガMFの右足に炎が纏わり始める。

そしてそのまま走り始め、ジャンプをしそのままグムンの胸に炎を纏ったキックを当てる。

『クウガマイティキック』がグムンに炸裂した。

後ろに後ずさるグムの胸にはクウガの紋章が浮き出る。

グム「ボソグ……ジャデデジャス……ボ、ボ……ボソグ！……  
ジャデデジャス……ボ……クウガ！」

グムは最後の言葉を残して大爆発をする。

そしてその爆発の光はクウガMFとアリスとアリアとアリスとアリアの近くに寄っていたリリスと倒れて事の成り行きを見ていた黒い馬を包み込み始める。

クウガMF「なんだ……？」

アリス「眩しい！」

リリス「目が開けられません！」

エリオ「一体何が！？」

遠くで見ていたエリオも目を細めながら光を見ていた。

その時エリオの目に、大きなクワガタのような物が光の中に突っ込んでいる所が見えた。

そして光が収めると、そこにクウガMFとアリスとアリアとリリスと黒い馬の姿はなかった。

その光景をエリオは信じられないと言う顔で見た。

エリオ「兄……さん？……兄さ――――！！！！ん  
！！！！ん」

エリオの叫び声が夜空に虚しく響き渡った。

ソラとリリスと黒い馬はどこかの荒野に倒れていた。

ソラ「……ん。んん」

ソラはゆっくりと瞼を開き、起き上がる。

ソラ「ここは、どこだ？」

ソラは起き上がってすぐに頭を働かせる。

確か編な蜘蛛みいたな化け物と戦って、そして化け物を倒したら光に包まれて……。

ソラはそこまで考えると回りを見渡す。

明らかにさっきまでいた研究所の近くの森ではない事は一目瞭然だった。

鉛色の空にどこまでも続く荒野のような場所だった。

ソラ（あれ？　そう言えば、俺いつの間にか元の姿に戻っているな）

ソラは自分が元の人間の姿になっている事に気づく。

ソラはとりあえず、近くで倒れているリリスと黒い馬に近づく事にした。

ソラ「どうやら、死んではいないみたいだな」

ソラはリリスと黒い馬の命に別状がない事に安堵する。

ソラは黒い馬を見た時、黒い馬の首の辺りに首輪のような物が巻かれているのに気づく。

その首輪は色々と機械のような部分があるメタリック感のある物だった。

ソラ「これは確か……」

ソラは首輪のような物に触れた。

ソラはこの首輪に見覚えがあった。

確かこの首輪は手に負えない動物を無理やり言う事を聞かせる為の首輪で、さらには無理やり洗脳する機能や電流が流れる機能がある事を思い出した。

ソラ「取ってやるか」

ソラは手際よく黒い馬から首輪を外した。

リリス「ん……」

その時、リリスが目を覚ました。

ソラ「起きたか」

ソラはリリスに近寄る。

体を起こして目を開けてソラを見ると、リリスは目を点にする。

ソラ「どうした？」

リリス「あなた誰ですかああああああ！？」

リリスはいきなり自分の目の前に知らない人間がいたので思わず声を上げてしまった。

ソラはリリスの叫び声を聞いて驚く。

人間状態のソラの姿を見ていないのだから当然の反応である。

ソラ（そう言えば、リリスにはクウガの姿以外見せていなかった）

ソラ「落ち着けリリス。俺だ。ソラだ」

ソラは手を前に出しながらリリスを落ち着かせようとする。

リリス「へっ？……あ、あたな、ソラ様なんですか？」

ソラ「なんで様を付けるんだ？」

二人して問いかけてしまうと、微妙な空気ができてしまった。

リリス「ソラ様……かっこいいです！／／／／／」

リリスは顔を赤くさせる。

ソラ「そうか？　ありがとな（ニコ）」

ソラは笑顔でお礼を言う。

リリス「はぁうゝゝ！／／／／／」

リリスはソラの笑顔を見てさらに顔を赤くさせる。何故か鼻血を出しながら。

???「——なるほど。そっちが本当の姿なのだな」

ソラ「ああそうだ……………ん？」

ソラはつい返事をしたが、今の声が誰の物か分からず疑問に思い声をした方に振り向くと、さっきまで気絶していた黒い馬が立っていた。

しかし、黒い馬以外に誰もいないので、誰が声を掛けたんだ?、とソラは考えた。

黒い馬「今の声は私だ」

ソラ「馬が喋った……」

ソラは馬が喋った事に啞然としてしまった。隣にいるリリスも啞然としている。

黒い馬「私は人語が喋れるのでな」

黒い馬は洪い声で説明する。

ソラ「すごいな……」

ソラは今思っている正直な感想を述べた。

そしてとりあえず落ち着いた後、リリスと黒い馬以外に周りにはア

リスもアリアもエリオもない事を確認した後、どうするかを二人と一匹で自己紹介をした。

リスは古代にあった『エグザス』と言う所で生まれた『融合騎』、つまり『ユニゾンデバイス』である。

『エグザス』と言うのはベルカとミッドと並び立つ程の魔法文化の発達した世界だったのだが、すでに滅んでいる。

エグザスの魔法形態はベルカ式とミッド式の両方の魔法技術を使う世界だった。

ちなみに滅んだ理由は古代ベルカの古文書に『究極の闇によってエグザスは滅びた』と記されている。

リスが何故あの研究所にいた理由は、自分を封印していた魔法が偶然にも研究所の関係者に解かれそのままあの研究所で実験を受けさせられ続けていたと言う事。

次に黒い馬は幻獣種の中でもさらに珍しい『ナイトホース』と言う種族で一匹で、その中でも上位の存在らしい。

だが、仲間を逃がすために研究所の関係者に運悪く捕まり今まで過酷な実験をさせられてきた。

それに本当ならさっきの蜘蛛のような怪人<sup>グムン</sup>も楽に倒せたはずなのだが、首輪のせいで力はまともに使えない上に首輪を付けている間はずっと激痛を味わっていたからだと説明した。

リスと黒い馬の説明を聞いた後、ソラは「お前らも苦労したんだな」と言って慰めた。

そしてその後は自分の説明もし、この後どうするかを話し合っている。

ソラ「俺はアリスとアリアとエリオを探すつもりだが、お前達はどうする？」

リリス「私はもう決めています。助けてくれた恩のあるあなたを今後『雷雲の聖槍・リリス』は『マイスター』と認め、一生貴方に仕えていくことを誓います」

黒い馬「私も彼方を主と認め、着いて行く事を誓おう」

リリスは空中に浮遊し、礼儀正しいポーズでお辞儀をしながら言い、黒い馬は頭を下げる。

ソラ「そうか。だがそれなら一つ条件がある」

黒い馬・リリス

『『条件？』』

一匹と一人は首を傾げる。

ソラ「俺との関係は主従とかそんなじゃなくて、まあそつだな。仲間として接してくれ」

ソラは一瞬家族と言おうとしたが、それはさすがに恥ずかしいと思ったので、言うを止めて仲間と言いつけた。

リリスと黒い馬はソラの言葉を聞いて、意外そうな顔をする。ただし黒い馬の表情はソラに分からないが……。

ソラは「ダメか？」と聞いたが、

リリス「はい」

黒い馬「了承した」

とリリスは笑顔で、黒い馬は嬉しそうな声で了承した。  
リリスと黒い馬はこの時、やっぱり目の前の少年を主に選んで本当に良かった、と思った。

黒い馬「それで主。一つ頼みたい事があるのだが……」

ソラ「なんだ？」

黒い馬「私の名前と変身する物を決めてくれないか？ 私には名前がないのでな」

ソラ「名前の方は別に構わないが、変身って一体どう言う事だ？」

ソラは黒い馬の変身と言う単語に首を傾げた。

黒い馬「私には二つだけ、どんな物質にもなれると言う特殊能力があるのだが、まだ私はコレを決めていなくな、折角なので主に決める手欲しいと思ったのだ」

ソラ「なるほど。まあ変身の方はまだいいか。二つしか選べないなら焦って決める事もないしな」

黒い馬「そうだな」

ソラ「となると、名前の方は……」

ソラは指を顎に当て考え始める。  
やはり黒だから『ブラックホース』とかは捻りがない。なら『暗黒

騎士ガイア』はなんだか使ってはいけない気がする。と言うか、名前だけでなくそれでは異名になってしまう。

ソラはそうやって色々と考えている内に黒い馬が雷を角から出している事を思い出した。

ソラ「……なら、『ライホース』って言うのはどうだ？」

ライホース「ライホースか……中々良い名前だな。では、これからはライホースと名乗らしてもらおう」

黒い馬の名前は『ライホース』に決まった。

ソラもライホースが名前を気に入ってくれた事に安堵する。

リリス「ではソラ様。早速アリスさんとアリアさんを探しに行きましよう」

リリスの言葉を皮切りに進もうとすると、空から突然巨大なクワガタのような物、『ゴウラム』が羽を飛ばたかせながら降りてくる。ソラとリリスとライホースはゴウラムを見て、一瞬驚いた後にゴウラムを警戒する。

リリス「大きな、クワガタ？」

リリスはゴウラムの姿を見て、そのまま感想述べる。

ゴウラムはソラの前まで降りた後、空中を浮遊しながら嬉しそうに体を揺らす。

まるで久しぶりに戦友に会ったかのように――。

リリス「カラー！ 何ソラ様を見つめているんですか！？ ハサミ

ムシ！」

リリスはソラとゴウラムの間に割り込んで、ゴウラムを睨み付ける。幾らソラが好きだと言っても、虫のような生き物相手に突つかかるのはどうだろうか……。

ソラ「り、リリス。とりあえず落ち着け」

ソラは何でリリスが怒っているのか分からなかったが、とにかく落ち着けた後、ゴウラムに近づく。

ソラはゴウラムには敵意が感じられなかったので、近づいて触れてみる事にした。

なんとなくだが、そうすることで目の前のゴウラム（クワガタ）の事が分かると思ったからだ。

リリスは心配そうな目でソラの様子を見ていた。

ソラはゆっくりゴウラムの頭の部分に触れる。

ソラ「っ!？」

そうすると何かの映像が頭に流れ込んできた。

まるで昔の記憶が一気に蘇るような感覚だ。

そしてパツと手を離す。

ソラ「なるほど。お前はゴウラムって言うのか……」

リリス「え!？」 ソラ様、そのハサミムシの事が分かるんですか？」

リリスは驚いた顔でソラに問いかける。ライホースもソラがいきなりゴウラムの事を言った事に驚いていた。

ソラ「ああ、ゴウラムに触ったら何故かゴウラム（こいつ）の事が分かったんだ。どうやらゴウラムはクウガの相棒、つまり俺の相棒のような存在らしい」

ソラはリリスにゴウラムの説明をする。

ソラ自身何故ゴウラムの情報が自分に流れ込んだか分からないが、とにかくゴウラムは自分の仲間だと言う事が分かった。

リリスはソラの説明を聞いてゴウラムが仲間である事に没々ながらも納得した。

ライホースもゴウラムを少々警戒しているが、とりあえず仲間として同行を許す事にした。

ソラ「じゃあ行くか」

ソラはライホースに乗り、アリスとアリアとエリオを探すたびを始めようと決めた。

ちなみにソラは子供なのでライホースがしゃがまないと乗れなかったりする。

ソラ（アリス、アリア、エリオ。絶対お前ら見つけてやるからな）

ソラは自分大切な仲間と家族の事を思い浮かべ、新たな決意と共に荒野を進む。

だが、ソラ達はまだ知らない。

この世界が始まっている、『攘夷戦争』と言う名の苦しく悲しく残酷な戦争ことに――。

時が経ち、ソラはこの世界の事を色々と知った。

まず、この世界は自分のいた世界とはまるで違う事。

それは魔法が存在しないと言う事である。

ソラのいた世界は魔法が常識と言っても良い位だったが、この世界に魔法はまったく存在しない。存在しないどころか、それは御伽噺の産物として扱われている。

だから間違いなく自分の元いた世界とは違うと分かった。

そして『侍』と言う存在や、『攘夷戦争』が今現在行われている。

そしてソラはこの世界で必死に生きようとした。

死んだ侍の刀を奪い、それを武器に戦う。自分やリスやライホーの命が危ない時、どうしようもない時は命を奪う行為をしてきた。そうでもしなければこの世界ではとても生き残れない。攘夷戦争まったか中のこの辛い世の中を生き残れないのだ。

そして屍から物を剥ぎ取り、生き延びると言う生活を続けた。

やがてソラは『鬼』とまで呼ばれる程の存在となった。

カラス「カーカー」

そこは一面死体の山。攘夷戦争で死んで逝った者達の成れの果て。その死体の肉をカラスが食べていた。

その時、カラスの目に死体の上で座っている一人の少年が映った。

少年の姿は黒い髪に青空のような綺麗な瞳をした少年だった。

少年は刀を持ちながら死体から剥ぎ取った握り飯を食べる。

使える物を探しに行った自分の仲間を待っていた。

少年が握り飯を食べようとした時、1人の男が彼の頭に手を載せる。  
少年はゆつくりと男を見上げると男は話しかける。

???「屍<sup>かばね</sup>を食らう鬼が出ると聞いてきてみれば……君がそう?」

何やら笑っている様子で言い出す男は話を進める。

???「また随分と、可愛い鬼がいた者ですね」

男が言い終わると少年は男の手をはじき後ろに下がる。それは仲間以外何もかもに怯える目であり、仲間以外信じないような瞳である。この殺伐した攘夷戦争が起こる世界ではこうなってしまうのも仕方ないことであろう。

少年は男を睨みつけながら自分の頬についたご飯粒を舐め取り、ゆつくりと刀を鞘から抜く。

その刀は、攘夷戦争で命を落とした者の所有物をはぎ取った物で、刀身は少しボロボロで血が染み付いている。

???「それも屍<sup>かばね</sup>からはぎ取ったのですか? わらし1人で屍<sup>かばね</sup>の身ぐるみを履き、そうして自分の身を守ってきたのですか」

まだ子供とは思えない修羅の生き様に感心する。

???「大したもんじゃないですか。………だけど、そんな剣もっ

「要りません」

男の話を全く聞く気も無く少年は男を睨みつけて刀を構える。

「……人に怯え、自分を守るための剣なんて……もう捨てちゃいなさい」

男はそう言い、自分の脇に差している刀を鞘から抜くのではなく、鞘ごと取り出してソラに投げ渡す。

少年「っ……………!？」

少年は男の思わぬ行動に驚きだし、投げられた刀を掴むと体がバツクしてコケそうになった。

それ以上に自分の得物を他人に渡すなんて大胆な行動に啞然とする。そして少年は男の方を向くと、

「……「くれてあげますよ、私の剣」

男は少年に自分の剣を渡すと、振り向いてこの場をゆっくりと去りながら少年に言い出す。

「……「そいつの本当の使い方を知りたいや、ついてくると良い」

少年は渡された剣を見て、そして男の背中を見つめると、その男の背中がとてつもなく大きく、同時に安心に感じた。

そして男——吉田松陽よしだしやうとの出会いが少年——ソラの運命を大きく変えていく事はまだ、誰も知らない……。



### 第三訓：異世界に行っても人は強く生きられる（後書き）

黒龍「なんとかここまで来たー！ー！！」

銀時「これで序章は終わりだな」

黒龍「言え、まだ終わりません」

銀時「えっ！？マジで！？」

黒龍「マジです。幼少期の話をした後、色々と話を入れてやっと本編に入ります」

銀時「マジかよ……まあ俺の出番もあるしいいか」

黒龍「まあ銀さんと桂と高杉以外の銀魂メンバーにはまだ出番がないんだけどね…（汗）」

新八「一体僕の出番は何時になるんだああああああああああああああああああ！！！！！！」

神楽「早く私を出すアルウウウウウウウウウウウウ！！！！！！」

ドカ！バキ！ドコ！

黒龍「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

黒龍は新八と神楽にボコボコにされた。

銀時「はあゝ。ええつと、次回、『子供の性格の80%は幼少期に決まる』にテイクオフだ」

#### 第四訓：子供の性格の80%は幼少期に決まる（前書き）

黒龍「随分変えてきたが、これからどうするか」

新八「あの〰️お悩みの所悪いんですけど…僕と神楽ちゃんの出番はいつになるんですか？」

黒龍「それはまだ先です」

神楽「出番を〰️出番を早く寄こすアル！！」

黒龍「お願いだからもう少し我慢して」

新八「もう少しってどのくらいですか？」

黒龍「百年？」

神楽・新八

『ふざけるなアアアアアアアアアアア！！！！！！』

黒龍「あんぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

黒龍は二人にボコボコにされた。

銀時「『リリカル銀魂ライダー』始まるぜ」

#### 第四訓：子供の性格の80%は幼少期に決まる

そこな子供達が集まる寺子屋。

桜の花弁が舞い散る中、そこで吉田松陽による授業が行われた。

そこには銀髪で天然パーマの少年——『坂田銀時』さかたぎんときが刀を抱きながら壁に寄りかかって寝ていた。

銀時の隣には黒髪の少年——『天道ソラ』てんどうが壁に寄りかかりながら寝ていた。

それを見た他の子供達はため息を付いた。

寝ている銀時とソラを見て松陽は微笑みながら本を読んでいた。

銀時とソラと一緒に何人かの子供達が話しながら寺子屋の廊下を歩いていた。

「???」まったく、お前はいつも松陽先生の話を聞かず授業を受けおつて、松陽先生に申し訳ないとは思わないのか？」

黒髪の少年——桂小太郎かつらしたろうは居眠りしていた二人をジト目で見ながら文句を言った。

銀時「いいんだよ。寝る子は育つと言っ言葉を知らないのか？ ツラ」

桂「ツラじゃない桂だ」

銀時は悪びれもせずに耳の穴をほじる。

ソラ「そう言うことだ。それにアレは居眠りじゃなくて睡眠学習だ」

黒髪に青空のような綺麗な瞳をした少年——『天道ソラ』は眠そうにあくびをしながら体を伸ばす。

天道と言っ苗字は松陽からソラの名前にちなんでもらった苗字である。

???「まったく……」

黒髪に少し紫色が混じった髪の色をした少年——『たかすぎしんすけ高杉晋助』は呆れながらため息を付く。

???「くくく、相変わらずソラと銀時は自由奔放だな」

???「うん……」

???「でもそれがソラ様と銀時君らしいです」

笑みを浮かべる緑髪の少女——アリス。

アリスの言葉に同意する水色髪の少女——アリア。

そしてニコニコしながら話すの金髪の少女——リリス。

何故アリスとアリアがこの寺子屋にいるかと言うと、この世界に来てすぐに松陽に拾われたからである。

そしてそのままソラと再会したと言っわけである。

ちなみにソラに再会した時、涙を流しながら抱きついた。

松陽から苗字を付ける提案されたが、アリスもアリアもリリスもいつか自分達の苗字は天道になるから必要ないと言って断った。

その時、松陽は「そうですか」と微笑しながら言った。

ソラ「ま、授業はちゃんと受けてんだから良いだろ」

銀時「そう言うことだ」

桂・高杉

『『だったらもつとマジメに受ける』』

彼らはこんな他愛もない話をしながら毎日を過ごしていた。

銀時、桂、高杉、ソラ、アリス、アリア、リリスはこの寺子屋に来てからよく一緒にいることが多い。所謂友達と言う関係である。いや、むしろ親友と言っても過言ではない。

それだけこの光景は当たり前のものなのである。

ソラが寺子屋にいる時に偶然にも最初に話したのが銀時であり、そしてそれを境に一緒にいる事が多くなり、そのまま桂や高杉とも一緒にいるようになった。

ソラの事を好きであり、研究所でも辛苦を共にしたアリスとアリアとリリスがソラと仲良くなった銀時と桂と高杉と仲良くなるのも当然と言えば当然である。

ちなみにリリスの今の姿は10歳くらいの子供の姿である。

リリスはこれくらいの大きさにまで大きくなれるのである。  
ただ大きくなると魔法の燃費は悪いらしい。

ソラ「それで、次は何をするんだ？」

桂「お前はそれも分らず歩いているのか？」

相変わらず松陽の話を聞かないソラに桂は呆れる。

銀時「あ、俺も知らねえや」

高杉「まったく……」

高杉も銀時の適当な態度呆れる。

アリス「次は道場で剣の稽古のはずだ」

銀時「メンドーだから俺パス」

思い出したように言ったアリスの言葉を聞いて、銀時はすぐにサボる事を決める。

アリス「そんな事言わずたまには私と手合わせしないか銀時」

アリスは口元に笑みを浮かべる。

銀時「なんで俺なんだよ。俺よりもお前の大好きなソラとやれよ」

銀時は嫌そうにする。

アリアとアリスとリリスがソラの事を好きなのは銀時だけでなく桂

と高杉も知っている。

ちなみにソラ本人はその事をまだ知らない。

銀時の言葉もソラは今桂と話していたので、聞こえていない。

アリス「確かにソラとやりたいのは山々なんだがな……」

銀時「おーい、いま“や”のニュアンス可笑しくなかったか？」

アリス「たまには違う奴と稽古するのも面白いだろ。ついでにお前をボコボコにして楽しむと言うオマケもあるしな」

アリスは銀時のツツコミを華麗に無視して理由を説明する。

銀時「明らかにオマケが本命だろ！！ それ聞いたら余計にお前となんか手合わせしたくなかった！！」

アリス「なんだ、怖いのか？」

アリスの言葉を聞いて銀時は片眉を上げる。

銀時「何が？」

アリス「私の負けるのが怖いからそうやってやりたくないと言ってるんだろ？」

銀時は額に青筋を浮かべる。

アリスのニヤケながら言う顔、声のトーン全てが銀時の癪に障った。子供と言うのはすぐに相手の挑発に乗ってしまうもの。

それに銀時としても、女を怖がる臆病者などと言うレッテルは貼られたくない。

そして銀時は口元をヒクつかせながら言う。

銀時「いいぜ。ならやってやろうじゃねえか。お前なんかすぐにボコボコにしてやるからな！」

アリス「望むところだ」

アリスは笑い浮かべる。

その笑みは間違いなくドSの笑みだった。

アリア「……………」

高杉「……………」

銀時とアリスの会話を聞いていたアリアと高杉は、相変わらずアリスは銀時の扱いがソラ並に上手い、と思った。

アリス「そりゃ！」

バシーン！

銀時「いてっ！！」

アリスは思いつきり銀時の脳天に竹刀で面打ちを食らわせる。

銀時「このやる！」

アリス「ほれ」

銀時「アボっ！」

向かってきた銀時の胸にアリスが突きを食わせる。

銀時「おりゃー！」

アリス「ほいっ」と

銀時「ブッ！！」

竹刀を振り下ろした銀時の攻撃を華麗に避けてそのまま銀時の頬を竹刀で叩く。

結局銀時は一撃もアリスに当てることなくボコボコにされた。

頭にはいくつものタンコブが団子状に重なり、顔は傷だらけだった。銀時は道場の隅で治療を受けている。

銀時の近くには治療をしているリリス、治療されてる姿を見ているソラとアリスとアリアと桂と高杉がいる。

リリス「だから止めといた方が良くって言ったじゃないですか」

リリスは呆れながら銀時の傷口に消毒液を塗る。

リリスが呆れるのも無理はないだろう。

アリスは女の身でありながらも、剣の腕はこの寺子屋で1、2を争うほど強いのである。

挑発したのはアリスと言え、アリスとマジの試合をするのは無謀と言えるだろう。

銀時「いてっ！」

銀時は消毒液が染みてつい声を出してしまう。

治療が終わり銀時の顔には絆創膏がいくつも付いていた。

ソラ「今日はまたこっ酷くやられたな」

ソラは苦笑する。

銀時がアリスに稽古でボロボロにされるのは見慣れた光景なのだが、どうにも苦笑せざるおえない。

桂「まったく……アリスは俺達の中でも一番の剣の腕を持つというのにそれを承知で挑むとは無謀としか言いようがないぞ」

桂は呆れながら傷を擦っている銀時を見る。

今の所剣の強さの順位は、アリス>アリア>桂〓高杉>ソラ〓銀時と言っ感じである。

ソラと銀時の剣の才能は鬼才と呼べるほどあるのだが、なにぶん稽古をサバるのでこっ言っ構図になってしまっ。

銀時「うるせえな。男には退けない時もあるんだよッラ」

銀時はふて腐る。

人間分かつている事を言われると不快な気分になるものだ。

桂「ッラじゃない桂だ。まったく、稽古も禄にしない奴が勝てるほど勝負は甘くない」

桂の厳しい言葉に銀時は顔をしかめる。

高杉「アリスもさすがにやりすぎなんじゃないか？」

高杉もさすがにここまでボコボコにせず、手加減の一つでもした方が良いんじゃないかと思った。

アリス「くくく。稽古をサボる罰だっ」

アリスは愉快そうな顔をする。

高杉（ホントにアリスはSだな）

高杉はこの時、アリスだけは敵に回したくないと思った。

アリア「ソラ、稽古しよ」

アリアは銀時の怪我の治療が終わったのを見て、ソラと一緒に稽古しようとする。

ソラと稽古するのはアリアの楽しみの一つである。

ソラ「あ、俺銀時が心配だからもう少し此処にいるな（棒読み）」

銀時がボロボロになったのを見てもまだ稽古をサボろうとするソラはある意味肝が据わっているだろう。

アリア「いいから行こ」

ソラ「あ、おい」

アリアはソラの手を引っ張って稽古をしに連れて行った。

アリス「まで、私もソラと稽古するぞ」

アリスもアリアとソラの後について行った。

ソラ「いや、俺としては遠慮したいと言うか、お前とは稽古したくないんだが……」

さすがにはあんな場面を見て、アリスと稽古する気にはなれなかった。

アリス「安心しろ。ちゃんと手加減する。それにもし怪我しても私が誠心誠意込めて看病してやる」

アリスは笑顔でソラとアリアの後を付いて行きながら言う。

ソラ「いや、その、だな。それはそれでいろんな意味で嫌な予感があるな。ぎ、銀時、ツラ、高杉、助けてくれ」

ソラは三人に助けを求めるが、

銀時「やだ」

ツラ「ツラじゃない桂だ。お前もたまにはマジメに稽古しろ」

高杉「安心して逝って来い」

三人は即答で見捨てた。

ソラ「薄情者」

ソラは恨めしそうな目で三人を見ていた。  
三人は思いっきり目を逸らした。

リリース「あ、まってください！ 私もソラ様と稽古します！」

リリスは急いで救急箱を締まってソラの後を追いかけた。銀時と桂と高杉はソラに合唱した。

さすがにアリスだけでなくアリアとリリスの相手まですればソラでもいろんな意味でただでは済まないと思った。

ちなみに他の稽古をしている子供達はソラに殺してしまいそうな程の嫉妬の眼差や羨ましいと言う眼差しを向けていた。

まあこれは仕方ない。

アリスとアリアとリリスはつきり言つてかなりの美少女。そんな彼女達に好意を寄せられているソラを見れば嫉妬してしまうのも仕方ない。

その上この寺子屋に女子はほとんどいない。  
はつきり言つて紅一点、戦場に咲く一輪の可憐な花と言ってもま  
たく過言ではない。

そんな中でハーレムを作っている（本人にその気はない）ソラに嫉妬するなど言えば、「無理じゃクソボケエエエエエエエエエエ」と言ってしまうくらいである。

ソラはどうして皆が殺意の籠った視線を浴びせてくるのか分からないが……

ちなみに嫉妬のあまり稽古と称してソラをボコボコにしてやろうと

する輩がいるが、ソラに勝てるのは桂と高杉とアリスとアリア以外いないので負ける事もボコボコにされる事もまずなく、振り返ちにしている。

ちなみに高杉と桂と銀時はソラに嫉妬するほど器の小さい子供ではないのであしからず。

ただソラは鈍感だと思っ事があるだけだ。

そして、こんな道場での光景も彼らにとっては日常的な光景である。だから気づかない。人間は当たり前だと思っっている事程、それがどれだけありがたい物が失うまでは気づかないのである。

時間はすっかり経ち、夜になっていた。

夜の空には星は満遍なく広がり、芸術作品とも呼べるような美しさを醸し出していた。

そんな夜空を見ながら寺子屋の廊下をソラが歩いていた。

どうにも今日は寝付けなかったからである。ちなみに自分の布団に潜り込んでいるアリスとアリアとリリスの三人を起こさないようにそうつと出てきた。

一応ソラの尊厳のために言っておくが、彼女達が勝手にしている事である。

ソラが夜風に当たりながら廊下を歩いていると、目の前に廊下に座っている松陽とその隣で座っている銀時の姿が目映った。

ソラ「松陽先生、こんな夜更けにどうしたんですか？」

ソラは近づきながら松陽に質問した。

松陽と銀時はソラの声でソラがいる事に気づき、ソラの方に顔を向ける。

松陽は微笑を浮かべる。

松陽「少し夜風に当たりにきたら綺麗な月があったので、つい見れてしまいましたね」

松陽はそう言いながら月を眺める。

ソラは松陽の横に座る。

銀時「お前こそ、どうして起きてるんだ？」

ソラ「ん？ ああ、今日はどうにも寝つきが悪くてな」

ソラは後頭部を掻きながら銀時の問いに答える。ソラは「そう言うお前こそどうして起きてるんだ？」と聞いて、銀時は「俺もお前と同じだ」と無難に答えた。

その後、夜空を眺めていたソラが唐突に松陽に声を掛けた。

ソラ「松陽先生」

松陽「なんですか？」

ソラ「どうして俺の力の事や俺やアリスやアリアやリリスが別の世界の人間で、しかも普通とは違う生まれ方をした事を知っている俺達をここに置いてくれるんですか？」

ソラはこの寺子屋に来てから随分経つが、今だに不安だった。本当に自分達はここにいて良いのか。

自分達は研究所で生まれたクローンのような存在。はっきり言って普通の人間とは違う。

化け物だと言われても否定できない。

だが、松陽は自分達の秘密を知ってもなお、家族のように親しく接してくれる。

でもどうしてそんな態度を取るのかソラには分からなかった。だから思い切って聞いてみたのである。

ちなみにソラ達の秘密を知っているのは松陽以外では銀時と桂と高杉である。

松陽「深刻な顔で聞いてくるから何かと思えば、そんな事ですか」

ソラ「え？」

ソラは少し驚いた顔をした。

なにせ自分達の秘密をそんな事で済ませたからである。

松陽「私にとってはそんな事は些細な事です。生まれ方で人であるかどうか決まりません。人であるかどうかは魂ソウルで決まります」

ソラ「こころ？」

松陽「ええ。どんな生まれ方をしても魂ソウルがなければそれは人ではありません。人とは魂ソウルがあつて始めて人になれるのです」

ソラと横で聞いていた銀時は松陽の言った言葉を深く考えた。人として存在するのに姿や形はそんなのは関係ない。必要なのは自分を貫き通すための信念。それがあって初めて人として生きていける。

松陽はソラ、そして銀時にその事を伝えようとしている。

松陽「ソラ、それに銀時。誰がなんと言おうと、あなた達は立派な人……いや、立派な『侍』です」

松陽は微笑ながらソラと銀時の頭を易しく撫でる。

銀時・ソラ

『『先生……』』

ソラは嬉しかった。自分を人としてだけでなく、侍として認めてくれる事に。

ソラはスーッと心の中に掛かった暗雲が晴れていくように感じた。

銀時も喜びを感じていた。

松陽に侍として認めてくるた事に……。

松陽「そして、私にとって誇りであり、大切な教え子です」

ソラ「はい」

ソラは笑顔で頷いた。

もうソラに悩みなどはなかった。松陽の言葉を聞いてすっかりソラの迷いは消えていた。

これからも銀時やアリスや高杉やヅラやアリアやリリス、そして松

陽先生と一緒に生きていこう。そう心に誓って……。

ソラ「松陽先生。俺もう寝ます。なんか、眠くなっただんで」

ソラはそう言って、微笑しながら立ち上がり部屋に行こうとする。その顔には迷いや悩みの色は見られなかった。

松陽はそんなソラの顔を見てまた微笑む。そして部屋に戻ろうとするソラに言葉を掛ける。

松陽「ソラ。自分の信念<sup>ルール</sup>を貫き通しなさい。立ち止まるれば辿り着く事はできませんが、一歩でも歩き続ければ辿り着きく事ができます。あなたの大切なモノに……」

ソラ「はい……」

ソラは頷いて歩いた。

ソラはその言葉の意味が分かった。

離れ離れになってしまった血の繋がっていない弟であるエリオを見つける事ができると。

どんなに険しく遠い道でも、自分の信じる信念<sup>ルール</sup>を持って進めばいつかは辿り着ける。だから止まらず歩き続ける。どんなに困難な道になったとしてもいつか辿り着けると信じて……。

ソラはそう心に誓って自分の部屋に戻って行った。

#### 第四訓：子供の性格の80％は幼少期に決まる（後書き）

黒龍「なんか、ちゃんとできたか心配だ……」

銀時「まあ、ダメなら駄目だししてくる奴いるだろ」

黒龍「ま、まあとにかくこの調子で頑張って早く話を進めなければ  
！」

銀時「そうだよな。とにかく頑張れ」

黒龍「ちなみに次回は以外な二人が登場します」

銀時「えっ？ 誰それ？」

黒龍「それは秘密です」

銀時「すんげー気になる」

ソラ「次回、『差別するのは褒められる行為ではない』にテイクオ  
フ」

## 第五訓：差別するのは褒められる行為ではない

高杉「銀時、次はこっちの箱を運べ」

銀時「メンドくせえな」

銀時は嫌々ながらも物置の中から箱を運び出す。

今日は子供達と松陽で寺子屋の大掃除をしている。

ソラ、銀時、高杉、アリスは物置の整理をしている。

アリアと桂とリリスは他の子供達と一緒に教室の掃除をしている。

ソラ「まあしょうがないだろ。くじでハズレ引いた俺達が悪い」

ソラは目を細めながら積み重なった書物を運んでいく。

掃除の場所はくじで決めた。

物置は広い上に大きい物から小さい物まで色々とある。

だから寺子屋の中でも一番掃除が大変な場所なのである。

そして物置の担当になったのはくじでハズレを引いた銀時、高杉、ソラとなった。

では何故アリスがいるかというと、溺愛しているソラと一緒に掃除がしたかったから。

それならアリアとリリスも一緒にするはずなのだが、アリアとリリスまで物置の掃除をしていたら他の場所が疎かになってしまうのでアリスとアリアとリリスがジャンケンしてアリスがソラと一緒に掃除をする権利を手に入れた。

アリアとリリスもソラと一緒に掃除がしたいなら銀時と高杉が代わればいいと言う話なのだが、くじが負けた人が物置の掃除するのは毎回の決まりなのでそれはない。

まあ自分から物置の掃除をしたいと言っるのはアリスとアリアとリリスが始めてではあるが……

アリス「しかし、本当にここには珍しい物があるな」

アリスは兜を持ちながら物置の中をマジマジと見る。

アリスの言うとおり物置の中には年代物の人形やらジャンプやら古そうな鎧や書物や掛け軸やカラクリなど他にも珍しい物が色々あった。

高杉「なんでも、松陽先生がこの寺子屋を譲り受けた頃からこの物置には色々な物があるそうだ」

高杉は外に出した物を雑巾で拭く。

高杉は前に松陽から物置の事を聞いた事があったので知っていた。

ソラ「それに松陽先生が知り合いから貰った物を此処で保管しているからいまだに物が増えるんだと」

ソラは本の束を外に出す。

アリス「なるほどな。松陽先生の人脈は広いからな」

アリスは納得したように言いながら箒で物置の中を掃く。

ソラ「ん？　なんだコレ？」

ソラは書物を整理している時、変わった本を見つけた。

その本は西洋のような赤い本で、どこかの国の文字で題名が書かれ

ていたのでソラには読めなかった。

だが、読めなかったがその本には何か不思議な物を感じたのでどうにも気になって仕方なかった。

アリス「異国の言葉で書かれているな。なんて書かれているんだ？」

ソラ「言葉を聞いたアリスが近寄りながら本を見てソラに問い掛ける。」

アリスは研究所にいた頃に魔法の知識やその他にも色んな知識を無理やり植えつけられたので、子供とは思えないほど知識量を誇っている。

それはソラとアリアも同じである。

だが、その知識は前に自分達がいた世界の知識なので銀時や松陽の世界では役にはたたない知識も多い。

ちなみに銀時達の世界の文字の知識はソラ達にはなかったので、ひらがなや漢字を覚えるのに苦労した——と言う事はなく、天才的な学習力ですぐに覚えた。そんなソラ達を見た銀時がかなり悔しかったのはまた別の話。

ソラ「分からない。俺にも読めない」

だが、多くの知識を持っているソラとアリスにもこの本の文字は読めなかった。

銀時「ん？ あ、俺もそれと同じような本見つけたぜ。今持つてくる」

銀時はソラの持っている本を見た後、さっきサボっていた時に見つけた本を持つてくる。

ちなみにサボっている時に高杉に殴られた。

銀時の持って来た本は青い本で、ソラの持っている本と同じような謎の文字で大きさも同じだった。

ソラ「確かに似てるな」

ソラは自分の持っている本と銀時の本を見比べる。

銀時「俺はどうにもこの本を見た時気になってな、ついなんだろう？って見てたんだよな」

銀時は自分の持っている青い本をマジマジと見る。

ソラ「俺もだ。どうにもこの本が気になる」

ソラも銀時と同じように本を見る。

高杉「おい、何やってんだ？ 掃除をしろ掃除を」

ソラと銀時とアリスが本に夢中になっていて掃除をしていない事に気付いた高杉が顔をしかめながらソラ達に近づく。

アリス「高君、実はな、ソラと銀時が気になる本を見つけてな」

高杉「誰が高君だ誰が！」

ソラ「高君、コレを見てみる」

高杉「お前まで高君呼ばわり！？」

銀時「いいからコレ見ろよ高君」

高杉「お前に高君呼ばわりされたくないんだけど!!」

高杉は慣れないツツコミにゼエゼエ息を漏らしながら銀時とソラから本を受け取る。

高杉は本を見るが、高杉にとってはわけの分からない文字が書いてある本ぐらいにしか見られなかった。

ソラ「なんか不思議な感じとかしないか？」

高杉「特に何も感じねえよ。お前らの気のせいだろ？本はいいからとにかく掃除しないと日が暮れるぞ」

高杉は銀時とソラにそれぞれ本を返しながら箒を取り、掃除の続きを始めた。

アリスも「とにかく追わせるのが最優先か…」と言いながら掃除を始めた。

銀時とソラもまだ本が気になったが、とにかく掃除をしなければならぬ事は事実なので掃除を再開した。

本の事は後で考えようと思いながら……

ソラ「やっと終わったな」

銀時「ああ」

銀時とソラは物置の入り口の扉に寄りかかりながら休んでいた。高杉とアリスは掃除が終わった事を伝えに言っている。

ソラと銀時はやっと重労働が終わった事に安堵してため息を漏らす。その時、ソラが横に置いてあるさっきの赤い本を取る。

ソラ「それにしても、なんでこんなに気になるんだこの本？」

ソラは文字も読めないこの本が気になるのかまるで検討がつかなかった。

これに似た本を前に見たわけでもなければ、欲しい本でもない。大雑把に言えば、自分の何かがこの本に引きつけられると言う感じだ。

銀時「俺もだ。そう言えばお前、この本開いたか？」

ソラは首を横に振りながら答える。

ソラ「いや、まだだ」

実の所、気になっているが、まだ本の中をソラも銀時も見ていないのである。

掃除が忙しくて今の今まで開けられずにいた。

ソラ「とりあえず、本の内容を確かめてみよう。俺達がこの本に感じている『何か』の正体がかかるかもしれない」

銀時は頷く。

銀時とソラは同時に本のページに手を触れる。

そして二人は生唾を飲み込み、ソラが「いくぞ」と言う掛け声と共に

に二人は本の用紙を開いた。

ソラ・銀時

『『!?!?』』

すると、開いた本のページが光り輝く。二人が何が起こったのか分からず混乱していると、二人の前に光の線が二つ地面に現れ、そのまま何かの模様が描かれ始める。

銀時「お、おおおおおい。こ、ここここコレどうなってんだ!？」

ソラ「お、俺が分かるわけないだろ……」

混乱する二人が目の前で描かれていく光の模様はやがて二つの魔方陣のような物になっていく。

そしてその二つの魔方陣から光の粒子が現れ始め、それぞれの魔方陣から一人の人間が姿を現す。

銀時「ひ、人!？」

二人が驚きながら目を凝らして見ていくうちにいきなり現れた人は段々姿がはつきりとしていく。現れたのは二人共女性だった。

一人は金色の髪を青いリボンで後ろに結び、青いドレスの上に立派な銀色の甲冑を身に纏い、いかにも騎士といった格好をしている。顔も意思の強そうな、凜とした表情をしていた。そして何より目を奪われそうなほど美しい姿だった。

もう一人は紫色の長髪に、同色のアイマスクを付けた美女である。短いスカートで動きやすい黒のスーツを身に纏い、スタイルの良い高身長で妖艶さと存在感を漂わせている。

そして甲冑の女性が目を開き、ソラを見ながら口を開く。

「……サーヴァントセイバー……召喚に従い参上した」

ソラはフリーズさせた思考を一生懸命フル回転させ、今の状況を把握しようとした。

「えっ？ 何コレ？ えっ？……本開いていきなり変テコな陣がでてきたら甲冑着た美人登場？何コレ？」

「……問おう。あなたが私のマスターか？」

甲冑を着た金髪の女性——『セイバー』は凜とした顔でソラに尋ねた。

ソラは呆然として何も答えられない。だがセイバーはソラの脳内処理が終わらないまま次の言葉を延べていく。

セイバー「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに契約は完了した」

ソラ「……えっ？ いや、何を……？」

セイバー「契約を完了したと言ったのです」

ソラの言葉に答えるセイバー。

そもそも契約も何も全てが全く分からない今の状態で契約って何？

フオワッツ？　みたいな感じである。

そんなソラで同時進行して同じような事が行われていた。

「……サーヴァントライダー……召喚に従い参上いたしました」

マスクを付けた紫髪の女性――ライダーは礼儀正しく方膝を付いて頭を下げてお辞儀をした。

銀時「……えっ？　……何？　……仮面ライダー？」

銀時は何がなんだか分からず、ソラと同じようにただ呆然とライダーの話を聞くしかなかった。

ライダー「これより私はあなたマスターと認め、主従の関係を結ぶ事をここに誓います。これにより契約は完了しました」

銀時とソラは互いの顔を見た。はつきり言っただけの顔は戸惑い一色だった。

銀時（おいしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！　何！？　何なのこの変な人達！？）

ソラ（俺に分かるか……とりあえず、この人達から詳しい話を聞くのが最優先だ）

二人の考えが相手に届いているはどうして？　と言っつつコミはなしの方向で願います。

兎にも角にも落ち着いて目の前のセイバーとライダーから情報を聞きだすのが最優先。二人はすぐにする事を決め、互いに頷いた後、

ライダーとセイバーを見ると、二人は何故か武器を持って対峙していた。

銀時・ソラ

『『えっ？』』

二人はその光景に啞然とした。

セイバー「貴様がライダーか。まさかいきなり他のサーヴァントに出くわすとは」

セイバーは凜とした表情を険しくさせながら不可視の剣を構える。

ライダー「偶然にも互いのマスターが同時に呼び出すとは、さすがに私もこれには驚きました」

ライダーは鎖で繋がった二つのダガーを構えながらセイバーを見る。

セイバー「マスターに危害を加えると言うなら容赦はしません」

ライダー「それはこちらとて同じ事」

二人は互いに足に力を入れ攻撃しようとした時、二人の間に銀時とソラが割り込む。

セイバー・ライダー

『『っ！！』』

二人は咄嗟に足を止める。

銀時「ちょっ、待てお前ら！」

ソラ「何が何だか分からないが、とりあえずここで暴れるのは止める」

二人が両手を出して二人を止められと言うポーズを必死にアピールする。

セイバー「どいてくださいマスター。そこにいるのはサーヴァントライダー。敵です」

ライダー「マスター。セイバーは明らかに敵意を持っています。排除するべきです」

ソラ「いや、別にお前らが争うのは別に構わないけどな——」

銀時「ここは松陽先生の寺子屋だ！　ここで暴れるのは俺達が許さねえ」

ソラと銀時はいまだに状況は上手く理解できていない。だが、この二人が戦えば、間違いなくその巻き添えでこの寺子屋が壊れてしまう。

それは二人にとってはとても許せる事ではない。松陽はたぶん二人が暴れたとしても怒りはしないだろう。だが、悲しまないと言う訳ではない。二人は松陽の悲しむ姿など見たくなかった。

セイバーとライダーの二人はたぶん自分達が呼び出してしまった者二人の言葉でそれくらい察しはソラと銀時にもついた。だから自分達がなんとしても止めなくてはならないと思った銀時とソラが咄嗟にセイバーとライダーの間に出たのである。

セイバーとライダーは一瞬考えた後、構えとき武器を仕舞う。

セイバー「分かりました。マスターの命令とあれば仕方ありません」

ライダー「私も……マスターのご指示とあれば致し方ありません」

二人が攻撃を止めた事を見た銀時とソラは安堵する。

そしてとりあえずこの二人から話を聞いた後、松陽を含め寺子屋の皆にどうし説明しようか考えた時、

松陽「おや、これはまた随分綺麗なお客様が来ていますね」

高杉とアリスを連れた松陽が現れた。

セイバー・ライダー

『『何者だ！』』

松陽を敵だと間違えて攻撃しようとしたセイバーとライダーを銀時とソラが必死に止めるはめとなった。

セイバーとライダーとさらには二人の存在に驚いた高杉とアリスを落着かせているうちに時刻は既に夜中となってしまった。

もう一つ驚く事と言えば、あの状況で同様もせず冷静沈着だったのが松陽と言うのもかなり驚きだった。さすがは銀時達の恩師と言えよう。

そして今現在状況把握をかねてセイバーとライダーを含め、銀時、桂、高杉、ソラ、アリス、アリア、リリスそして松陽が寺子屋にある和室の一つに集まって話している。

他の子供達は？、と言うと、大勢いると話がスムーズに進まないと判断した松陽は自分の見解でソラと銀時と一番中の言い関係のアリアとリリスと桂を呼んで話し合おうと決めたのである。

全ての情報が纏まった後に追って他の子供達に事情を話す。松陽はこの考えをすぐに思いつき実行に移したと言うわけだ。

今銀時達が座っている形は四角と言う形で、右から銀時、ライダー、セイバー、ソラと言う順で座り、その正面に松陽が座っている。そして松陽とライダー達の間の右側に桂と高杉、左側にアリスとアリアとリリスが座っているという形になっている。

松陽「では、まずはあなた達の事を教えてくれませんか？」

松陽は柔らかい笑みを作る。

セイバーは松陽に自分の名前を言って良いかどうか悩んでいたが、ソラは目で「名前を言え」と言っていたので言う事にした。

セイバー「私はソラのサーヴァント、セイバーです」

セイバーは少し頭を下げて自己紹介をした。

正座をしている所、やはり礼儀が良いという所が伺える。

ライダーも銀時に小声で「お前も自己紹介しろ」と言われたので言う事にした。

ライダー「私はギントキのサーヴァントライダーです。以後お見知

りおきを」

ライダーも正座をしながら礼儀正しくお辞儀をする。

ちなみに何故セイバーとライダーが銀時とソラの名前を知っているかと言うと、アリア達を集めるまでに時間があつたので、名前を教え合うなどの自己紹介などは済ませている。

松陽も高杉とアリスがアリア達を呼びに行っている間にだいたいの事情を銀時とソラから聞いている。

セイバーとライダーは松陽を警戒している雰囲気だったので、銀時とソラが代わりに松陽に説明したのである。

松陽「そうですか。私は吉田松陽と言う者です。あなた達がマスターと呼ぶその子達の教師のようなモノですね」

松陽は笑みを崩さずに淡々と答える。

松陽が名前を教えたので、高杉達も自分達の名前を教えることにした。

高杉「俺は高杉晋助だ」

桂「俺は桂小太郎だ。ちなみに好物は蕎麦だ」

アリス「私はアリスだ。好きな者はソラだ」

アリア「私はアリア。好きな者はソラ……」

リリス「私はリリスです。好きな人はソラ様です」

高杉は「いや、好物も好きな者も言わんでいいだろ……」と半眼でアリス達を見ながら呆れていた。

松陽「自己紹介も済んだ所で、私の質問に答えてもらってもよろしいでしょうか？　なにぶんソラと銀時もあなた達の事については知りたがっているのです」

松陽はソラと銀時を付け加えることで、セイバーとライダーが答えにくるように誘導していた。

二人のマスターであるソラと銀時も自分達の事について知りたがっているならば答えなくてはならないと思わせるためである。

まあ実際ソラも銀時もセイバーとライダーについて知りたがっているので、松陽の誘導尋問に何の問題もないが……。

セイバーとライダーは少し考えた後、答える。

セイバー「分かりました。私に答えられる事であれば答えましょう」

ライダー「私もです」

松陽「そうですか。ありがとうございます」

松陽は笑みを浮かべた後、お礼を言う。

松陽「では、まずあなた達サーヴァントは魔術師が召喚し、使役する存在。英霊で間違いないですね？」

松陽の質問に二人は頷く。

銀時とソラは英霊と言う言葉を聞いて顔を青くさせる。なにせ二人は幽霊などの類が苦手なのである。

銀時に関してはこれを全力で否定し、ソラはとりあえず怖いと認めではいるが、やっぱり否定する。

だが、桂達はセイバーとライダーが英霊と言う事にも驚いたが、松陽が『魔術師』の事について詳しい事にも驚いていた。桂達も『魔術師』の存在は知っている。

魔術師は昔から存在している。昔は人々の生活を魔術で裕福にするなど、ごく一般的に魔術師は存在していた。

だが、時代が進むに連れ魔術師の数は減っていき、さらに魔術師の絶滅に拍車を掛けたのが、『幕府』と言う存在。

『幕府』は魔術と言う異能の力を使う魔術師達を恐れ、『魔術師狩り』と言うモノを行つた。それにより魔術師は差別され殺されていき数をみるみると減らしていった。

異端者は恐れられる存在とは良く言われるが、魔術師絶滅の危機もその良い例であつた。

生き残つた魔術師達の中には幕府に戦いを挑む魔術師達もいたが、『侍』や『忍び』と言う魔術師と肩を並べる程の強い存在が幕府側に付いていたために幕府を落とそうとした魔術師達は全員殺されていった。

そして生き残つた魔術師達は人目を離れ、ひっそりと暮らす者しかいなくなつた。

だが、『魔術師狩り』は『あまんと天人』と言う存在が現れた事により一時取り止めとなつた。

あまんと天人の存在が幕府の注目を魔術師からあまんと天人に移し変える事になつた。それにより、絶滅しかけている魔術師達はなんとか難を逃れた。

この事は松陽が歴史の事について教えてくれた時に桂達は知っていた。

ちなみに幕府が教える歴史では、「魔術師は怪しい術を使う化け物だ！」と言う感じで語られているのだが、松陽は魔術師と言う存在がいたと言う事だけを教え、化け物だとかそういう事はまったく教えていない。

だが、魔術師はさつきも言った通り絶滅寸前にまで数を減らしている。知識を得られる手段はほとんどない。それに魔術師でもない松陽が魔術師だけが持っているはずの知識を持っているのはおかしい。不思議に思った桂は松陽に質問した。

桂「松陽先生。どうして魔術師の知識をあなたが持っているんですか？」

気になった桂は松陽に質問を投げかけた。

松陽「実は昔ある男の人を助けたね」

高杉「その男の人が魔術師だったんですね」

察しの良い高杉は松陽が答えようとしている事を言い当てた。

松陽は「ええ」と頷きながら答えた。

松陽「その男の人を助けて、ここにいてもらう間に魔術師の事について色々教えてもらいました」

松陽の話を聞いてその場にいる全員はなるほどと納得する。

だから松陽はセイバーとライダーの事を知っても特に驚いた素振りもみせなかったと言うわけである。

そして松陽はセイバーとライダーに確認を取りながら『サーヴァント』の事について語り始めた。

『サーヴァント』とは魔術師が使役する一種の使い魔のような存在である。そして、そのサーヴァントと言うモノは『聖杯戦争』と言う、七人の魔術師と七人のサーヴァントで行われる戦争で生まれた存在である。

ちなみに『聖杯戦争』で勝ち残れば、『聖杯』によりどんな願いも叶えて貰える。

サーヴァントとは英霊で、『聖杯』により呼び出される存在だったのだが、それは大きく変わった。

まず、『聖杯戦争』とは今から1、2年前くらいに行われるはずだったのだが、何者かに『聖杯』を奪われてしまい『聖杯戦争』はできなくなってしまった。

ちなみにこの『聖杯戦争』は『第五次聖杯戦争』と言われており、過去に四度聖杯戦争は行われている。

なら何故『聖杯戦争』で呼び出されるはずのセイバーとライダーがソラと銀時のサーヴァントとして召喚されたかと言うと、サーヴァントと言うシステムそのものが変わってしまったためであるらしい。

それはある一人の魔術師がサーヴァントのあり方を変えたと言われている。

サーヴァントとマスターの関係を良き理解者、パートナーとして関係に変えた。そのサーヴァントである英霊達の中にはそれぞれ望みがある。そんな英霊達の望みを叶えるマスター達の下に英霊達が召喚されると言うシステムまで作った、と言う噂だ。

実際はどうなったのかは定かではない。

ちなみにサーヴァントは一度現世に召喚されると、ほとんど人間と大差ない存在になる。つまり死ぬときは死ぬし、食事も取るし、眠

りもする。本当は食事も睡眠もサーヴァントにはいらないのだが、ある魔術師がそんな細かい所まで変えてしまった。

唯一人と違う所と言えば、とんでもない戦闘力や回復力や歳を取らない事である。

サーヴァントが消える時、それはマスターが死ぬ時か、思い残す事なく願いが成就した時らしい。

松陽「私はその方からサーヴァントはマスターと共に歩いていく存在だと教えてもらいました」

松陽の話聞き終わった全員は内心驚いていた。

魔術師であろうと差別することなく受け入れる松陽の器の大きさに驚いていたのである。

松陽「私の説明は以上ですが、他に質問はありますか？」

松陽の話はとても分かりやすく、特に質問する所はなかったので、誰も質問を投げかける者はいなかった。

松陽は周りを見た後、ソラと銀時を見る。

松陽「銀時、ソラ。あなた達はセイバーとライダーを自分のサーヴァントとしますか？ どうするかはあなた達次第です」

松陽の言葉を皮切りに全員の視線がソラと銀時に集まる。

ソラと銀時はメンドクサそうに頭を掻きながら言う。

ソラ「はあゝ分かった」

銀時「なってやるよ。マスターって奴に」

二人の言葉を聞いたセイバーとライダーは嬉しそうに笑みを浮かべていた。

だが、この時アリスがある事に気付いた。

アリス「なあ一つ気になるのだが、なんで魔術師でもない銀時とソラはマスターになれたんだ？」

アリスの疑問は最もである。そもそもサーヴァントを使役できるは魔力の持った魔術師のはずなのだが、銀時とソラは魔術師ではまったくない。侍の卵と呼ぶべき存在である。

実の所、これについてはセイバーとライダーも気になっていた。自分のマスターが子供である事にも驚いたが、魔術師の知識どころか、魔術師の事も祿に知らない事に内心驚いていた。

なので、松陽の話が済んだ後に聞こうと思っていたのである。

この疑問についても松陽がすぐに教えてくれた。

松陽「そう言えば、まだその事については話していませんでしたね」

松陽は一回間を置いた後、説明を始める。

松陽「別にサーヴァントのマスターになるのは魔術師限定と言う訳ではないそうです。魔術師と同じように魔力を持った者、また魔力に順ずる力を秘めている力を持っている者もサーヴァントのマスターになれるそうです」

ソラ「つまり、俺達には魔力的な何かがあると言う事ですか？」

松陽「そう言う事ですね」

松陽はゆっくりと頷いてソラの質問に答える。

銀時「な、なあ……じゃあ俺達には魔力があるってことなのか？」

銀時はライダーに顔を向けながら聞く。

ライダー「ええ。ギントキは信じられないくらい魔力を保持しています」

銀時「マジで!？」

銀時はまさか自分にそんな凄い力があるとは思わず驚く。

ソラ「俺にはあるのか？」

ソラはセイバーに聞いたが、ソラ自身どう言う答えが返ってくるのか分かっていない。

ソラは研究所で行われた過度な実験のせいで魔力は無いに等しい状態なのだ。

だからセイバーから魔力がないと言われるのは分かっているが、念のために聞いてみた。

そしてセイバーからは思わぬ答えが返ってきた。

セイバー「ソラにも信じられないほどの魔力があります。これほどの魔力を持っている事に、私も正直驚いています」

ソラ「……えっ？」

ソラは内心驚いてしまった。

驚いているのはソラだけではなく、ソラの魔力がないことを知っているアリスとアリアとリリスでもある。

セイバー「ただ、ソラから感じる魔力には少々違和感を感じます」

ソラ「違和感？」

セイバー「ええ。ソラの魔力には私との魔力ラインの他にもう一つ魔力ラインが繋がっているのです。それにどうにも魔力の源はソラの中ではなく、その魔力ラインの先にいる『何か』のようです」

セイバーの話聞いてソラは更に驚いた。まさか自分にはいつの間にか知らない何かと魔力ラインと言うモノで繋がっていたとは色々な意味でショックだった。

とは言え、これでソラに何故か魔力がある理由も分かったわけである。

また新たにできた謎についてソラや話を聞いていた他の面々も考え始めたが、パンツ、と言う松陽の手を叩く音で全員の視線が松陽に向いた。

松陽「とりあえず、今考えても分からない事を考えるよりもこれからすべき事をしましょう」

松陽はそう言って立ち上がる。

松陽「彼女達を他の子供達にも紹介しなければなりませんし、歓迎会もしなければなりませんね」

松陽の言葉を聞いた銀時、ソラ、高杉、桂、アリス、アリア、リリスは立ち上がりすぐに準備を始める。

セイバーとライダーが戸惑う中観劇会は行われた。

寺子屋の子供達もセイバーとライダーがサーヴァントだと知っても

快く迎え入れた。

その時セイバーとライダーは良いマスターに巡り合えたそう  
だ。

セイバーとライダーは寺子屋の新たな一員となった。

## 第五訓：差別するのは褒められる行為ではない（後書き）

黒龍「自分でも書いててなんだけど、こんな内容で大丈夫だろうか？」

銀時「いや、いいんじゃない？ やりたいよにやれば」

セイバー「そうですね。前よりは設定が凝っているいいんじゃないですか」

銀時「ああ、前はなんかほとんど勢いでセイバー出してた感じだったもんな」

ソラ「まあとにかく早く投稿して読者が楽しめるようにしていくしかないってことだな」

黒龍「頑張ります！」

ライダー「次回はアンケートとなるそうなので、よろしくお願いします」

## 第六訓：子供は良く、不思議場所を発見する

セイバーとライダーが新たな寺子屋の仲間になって、さらに月日が経った。

今ではすっかりセイバーとライダーも子供達と馴染めている。

セイバーは普段着に白のブラウスに青いタイ、青いスカートの恰好をしている。まあ簡単に言えば、原作の私服の恰好をしている。

ライダーは目を覆っているマスクを外し、眼鏡にGパン姿で紫色の長袖のシャツと言う、こちらも原作の格好している。

ちなみにライダーがマスクや眼鏡をしている理由は、『キュベレイ』と言う石化の魔眼を持っているので、その力を封じるために宝具である『自己封印・暗黒神殿<sup>ブレイカー・ゴルゴーン</sup>』を使っている。

なんでも眼鏡もマスクもその宝具の一つらしい。

ただ、眼鏡やマスクがなくても、自分の魔眼が操れるように影ながら訓練していそつだ。

そして今、セイバーは子供達と道場で剣の稽古をしている。

セイバー「どうしました？ そんな事では立派な侍にはなれませんかよ」

セイバーは竹刀の先端を目の前で倒れている子供達に向ける。

全員スタボロで、ゼエゼエ、と息を漏らしながら汗を流して倒れていた。

言うまでもないが、これは全てセイバーにボコボコにされました。その中には桂や高杉や銀時やソラがいる。

ちなみにアリアとアリスとリリスは部屋の隅で、お茶を飲んで稽古を見学しているライダーの隣でお茶を飲んでいる。

銀時「ハア、ハア……………ちよっ……………ゼエ、ゼエ……………もう無理  
ヒューフー……………」

銀時は息も絶え絶えにこれ以上動けないと言った所だろう。

ソラ「少し……………休ませろ……………」

ソラも汗だくの顔で休憩を要求した。

セイバーはソラに近寄り、片膝を付く。

セイバー「ソラ……………別に私はあなたが憎くてこんな苦行をしいているのではありません。あなたに強い侍になってもらうために涙を飲んで稽古をつけているのです」

セイバーは凜とした顔でまっすぐソラを見つめる。

銀時・高杉・桂

『いや、俺達はアアアアアアアアアアアアアアアア！！؟؟？』

銀時と高杉と桂が額に青筋を浮かべながらセイバーにツツコム。他の子供達は死屍累々の状態なのでツツコミはできません。

彼らの言いたい事も分かる。セイバーはソラにしか励ましの言葉を掛けていなのだから。

セイバー「なんですか？いきなり？」

セイバーは三人のツツコミに首を傾げる。

銀時「なんでソラだけなんだよ！！ 俺達は！？ 俺達のためにもやっっているんだよね！？」

セイバー「一応あなた達のためにもやっています」

桂「一応ってなんだ！？ 一応って！？ 俺達はそんなついでみたいな扱いなのか！？」

セイバー「まあそんな感じですね」

高杉「こいつ最悪なんだけど！？」

なんの戸惑いも無くソラ以外の子供達をついで扱いするセイバーはある意味凄いと言えよう。

銀時と桂と高杉は疲れも忘れてセイバーに文句を言い続ける。

そんな銀時達の様子を見ていたライダーがタオルを持って銀時に近づく。

ライダー「まあまあ落ち着いてくださいギントキ。あなたの言いたい事も分かりますが、少しは休んだ方が良いでしょう」

ライダーは苦笑しながら銀時の汗を拭く。

銀時は「そうだな……」と言いながらライダーに汗を拭いてもらっているの、動きを止めた。

ナイスバディーの美女であるライダーに汗を拭いてもらうシーンを見た桂と高杉とソラ以外の倒れていた男性人が銀時に対して嫉妬の炎を燃え上がらせる。



アリスとアリアは呑気にお茶を啜っていた。

セイバー（こ、こんなに怖いライダーの見るのは初めてです!!）

騎士王であるセイバーさえ顔を青くさせてしまうほど今のライダーは怖かった。

ライダー「あなた達はどうやらまだ体力が有り余っているようです  
ね。なら、次は私が相手しましょう」「ゴゴゴゴゴゴゴゴ

ライダーは黒い笑みを浮かべながら鎖で繋がった二本のダガー出す。そしてそのまま飛び上がって、男性人に突っ込んで行った。

男性人

[illegible]

子供達の悲鳴が天に響いていった。

ライホース「まったく……何をやっているのだから……」

黒い肩まであるボサボサの髪型をした、イケメンと呼べる男性——

ライホースは黒いユニコーンのような馬ではないのですか？、と言  
う疑問はあるのだが、その答えは簡単である。

ライホースには二つまでどんなモノにも変身できると言う特殊能力があり、変身できるモノの一つを『人間』にした。

それにより人の姿になれるのである。

ちなみにライホースは昼食の時間なので、皆を呼びに来て、今の場面に出くわしたと言うわけだ。

あ、そう言えば、久しぶりの登場ですね。

ライホース「大きなお世話だ!!」

昼食を食べて後、ソラとアリスは廊下を歩きながら話していた。

アリス「そう言えばソラ。前にセイバーを呼び出した本はどうしたんだ？」

アリスはつい頭にソラがセイバーを呼び出すきっかけとなった赤い本の事を思い出し、ソラに聞いた。

それとあの本は、サーヴァントを呼び出すための魔術師の魔術道具の一つらしい。

なんでもあの本は一定の魔力が封じ込めてあり、サーヴァントを呼び出すさいに全ての魔力を使ってサーヴァントを呼び出すのが役目で、溜めていた魔力がなくなるとただの本に戻る。

ちなみに銀時の本も同じ物である。

ソラ「まあ……思い出の品として、俺の部屋に置いてある」

ソラは頭を掻きながら説明した。

魔術師達専用の言葉で書かれた本なので、読めはしないが一応何かの役に立つかもしれないので取って置いてある。

アリス「しかし、セイバーとの契約の証がその腕の紋様とはな」

アリスはソラの手の甲に描かれている原作で言う所の『令呪』のよ  
うな模様の紋様を見る。

ちなみに原作と違う所はサーヴァントと無理やり従わせる力はなく、  
サーヴァントとの契約の証と言う役割であるので、あしからず。

ソラ「ま、特に気にしてないけどな」

ソラは手の甲の紋様を見る。

アリス「お前らしいな」

アリスは「くくく」と笑う。

そしてある事を思い出し、ソラに念を押す。

アリス「今夜の怪談はちゃんとこいよ。私が練り練った最高の話を  
聞かせてやる」

アリスは笑みを浮かべながら嬉しそうにする。

今夜は子供達とさらにはセイバーとライダーを交えて怪談を話す事  
になっているのである。

アリスは話の作り方が上手く、良く皆を怖がらせている。アリスは

自分の話で怖がる皆を見る事を楽しみにしているので、いつも怪談には参加している。

ソラ「はいはい」

ソラは無難に返事をした。

ソラとしては怪談はまっぴらご免だが、いかないとアリスやアリアやリリスが涙目＋上目遣いをしてくるので断る断れなかったりする。

そして時刻は夜中。

寺子屋の子供達のほとんどが一つ和室に集まっている。

そして今、アリスの恐怖の怪談が始まっていた。

アリス「この寺子屋の近くの森の置くには、洞窟があるんだ」

早を照らす光は蝋燭一本の光のみ。それがまた恐怖を引き立てる。

外で鳴る風の音もまた、恐怖を与えるスパイスとなる。

アリスの話を聞いているセイバー、ライダー、高杉、桂、ソラ、アリア、リリスの表情も真剣で強張ったモノになっている。

周りの雰囲気が良い感じに恐怖に染まっていく事を感じながらアリスは話を続ける。

アリス「そこからはたまーに妙な音が聞こえるそうだ。何の音かは誰も分からなかった」

それといい忘れていたが、今の季節は夏なので、怪談には絶好の季節だ。

アリス「そして……ある男がその音の正体を確かめようと、夜にその洞窟に行ってみたそうだ……」

アリスの話はまさしく恐怖を感染させ、話が進むにつれて子供達は顔を青ざめて冷や汗を流し始める。

リリスは恐怖のあまりソラに抱きつき、震えている。

アリアはまったく怖がっている風には見えないが、ソラに抱きつける絶好の機会なので抱きついている。

ちなみに抱きつかれているソラが内心一番怖がっていたりなかったり……。

アリス「そして男は洞窟にやって来た。その時、男は見た。洞窟の入り口にいる……一つの影を」

話はずいに終盤にはしかかり、恐怖は更に増していく。

リリス（こ、怖いですウウウウウウウ！！！！！！！）

リリスは恐怖のあまり涙目になっていた。

セイバーは騎士王だけあって、凜とした表情をまったく崩していないが、背中には汗だくだった。

ライダーは話の展開がこれからどうなるのか楽しみにしていた。

高杉と桂は普通に顔を青くさせていた。

アリス「影は洞窟の中に消えて行き、男もゆっくりと影の後を追いかけるために洞窟の入り口に近寄った。そして男は洞窟の入り口の



アリス「銀時、何をするんだ！ 折角の私の最高の落ちが台無しじゃないか！」

アリスは自分の怪談を台無しにされた事に怒りを露にしながら銀時に文句を言う。

銀時「うるせえな。折角食後の後のデザートに宇治銀時丼食べようと思ったのに、小豆が足りなくて台無しなんだよ」

銀時が持っているドンブリには白飯の上に小豆が乗った銀時特製『宇治銀時丼』があった。

桂「いや、もう十分かかっているだろう！ つうかなんだそれは！  
？ 明らかに常人が食べるような物じゃないぞ！」

桂は宇治銀時丼を見て気分を悪くさせながら文句を言う。

銀時は相当な甘党なので、こう言う物も平気食べられる。ちなみにソラも銀時並の甘党である。

リリスには「いつか二人は糖尿病になります」と言われるくらいだ。

男の子「た、大変だアア！」

銀時に注目が集まっている中、一人の男の子が声を上げる。

男の子「ソラとリリスとセイバーがアアアアア……！」

その声を聞いてソラとリリスとセイバーを見ると——三人は泡を吹いて気絶していた。

高杉「ちよつ、お前ら大丈夫か!？」

桂「三人が小豆で気絶した!! 最悪だアアアア!!!!」

高杉は気絶した三人を揺らし、桂はあまりの事態に頭を抱える。

ライダー「いえ、ソラは小豆で気絶したんじゃないやありません」

桂・高杉

『『えっ?』』

ライダーの言葉に桂と高杉は疑問の声を出し、他の者も首を傾げる。  
では何でソラは気絶したと言っのか?

ライダー「私は偶然にも見たのですが、ソラはあまりにも怖がつて  
いたりリスにおもいつきり首を絞められて気絶していました」

その時全員は思い出す。全員が叫び声を上げた時、ゴキッ!と何  
かが折れる音が聞こえたような気がした事に……。

高杉・桂

『『余計に最悪だあああああああ!!!!!!』』

高杉と桂は頭を抱えて叫び、他の面々は急いでソラを治療室に連れ  
て行った。

銀時はため息をつきながら和室出て行った。

銀時は別の部屋で宇治銀時井を食べていた。

銀時「（モグモグ）……たく……（モグモグ）……何が怪談だ。（モグモグ）……下らない事しやあがつて……（モグモグ）」

銀時は『宇治銀時井』を食べながらブツブツと文句を言う。

アリス「お、ここに居たか銀時」

銀時「……………アリス」

銀時は箸の動くを止めてアリスを見る。

アリス「怪談が終わった後に言うつもりだったんだが、明日さっきの怪談に出てきた洞窟にソラとアリアとリリスと高杉と桂と行く。お前も来るんだぞ」

銀時「……………えっ？」

銀時はアリスの言葉を聞いて、呆然とする。

実の所言うと、銀時は幽霊とかの類が苦手なのだ。さっきも、怪談の内容があまりにも怖くなったので強引に邪魔したのである。

そしてこれで怖い思いはせずに済んだと思ったのに、アリスがいきなり怪談に出てきた洞窟に行こうなどと言うので、啞然としてしまう。ちなみに怪談に出てきた洞窟は実際にあって、幽霊が出るなどで結構有名になっている。

アリスは用件を伝えたので、部屋を出て行こうとする。

アリス「ああ、それと……」

足を止めて顔だけを銀時に向けながら黒い笑みを作る。

アリス「もし来なかったらお前が怪談を邪魔した本当の理由+昔私の怪談を聞いてお漏らしした事を皆にバラすからな」(黒笑)「

アリスはそう言って、部屋を出て行った。

銀時は何も反論できないまま、固まって部屋を出て行くアリスを見る事しかできなかった。

翌日。

今の時刻は昼間で、寺子屋の近くの森の入り口にはアリス、アリア、リリス、ソラ、銀時、桂、高杉、セイバー、ライダーがいる。セイバーとライダーは子供だけで森に行くのは危険だと判断したので付いて行く事にした。

アリス「それでは、今から例の洞窟を見に行く。準備は良いな」

桂「それではいくぞ!」

アリスと桂の言葉を合図に銀時達は森に入っていく。

ただテンションが異様に低く、暗いオーラさえ出しているのは、ソラと銀時とリリスだった。

はつきり言つて、この三人はこのメンバーの中でも幽霊の類が苦手だ。幽霊がいるかもしれない洞窟になど、めちやくちや行きたくないのだが、もし洞窟に行くのを嫌がれば自分が幽霊が怖いと認めてしまう事になってしまうので止めるに止められない。

銀時に関しては、アリスに幽霊が大の苦手である秘密を握られているので最早逃げ道無し。

ソラとリリスと銀時は思い足取りで進んで行った。

高杉「（おい、なんか、銀時とリリスとソラが妙に暗い気がするんだが、気のせいかな？）」

高杉は三人の異様な雰囲気気付いて、桂に小声で話し掛ける。

桂「（いや、俺にも明らかに沈んでいるように見える）」

桂も小声で高杉と話しながらテンションダダ下がりの三人を見ていた。

アリス「どうやら着いたようだな」

いつの間にか目的の洞窟の前に着いていた。

洞窟の入り口は生い茂る草木に覆われており、大人でも女性位ならしゃがんで入れそうな程の入り口だった。

洞窟の入り口からは動物か怪物か定かではないが、何かの呻き声のような物が聞こえた。

それは余計にソラと銀時とリリスの恐怖心を煽った。

アリス「よし。私が銀時とソラと一緒に中を確かめてくるから他の奴はここで待っている」

さすがは言い出しっぺだけはあって、他の者に任せず自分から中の様子を先に見て来るといいうのは中々道理が通つていえると言えよう。だが、銀時とソラはアリスの言葉意義を唱えた。

ソラ「お、俺はアレだ。ここで皆のメンドーを見てるからお前は銀時と行ってくれ」

銀時「いやいやいや、俺はここで出口確保しとくからソラがアリスと一緒に帰ってくれ」

二人は互いに譲り合う。つとて言うか、ただ怖いから行きたくないのを誤魔化しながら嫌な仕事を相手に押し付けているだけなのが見え見えだ。

そこでアリスがソラに近づいて奥の手を使う。

アリス「一緒に来てくれないのか？（涙目＋上目遣い）」

ソラ「うっ……」

ソラの心に精神的ダメージ！美少女のコレを見て断れる男子はこの世にはそういないだろう。

ソラはアリスの涙目と上目遣いにたじろく。

アリス「一緒に来てくれ、頼む。怖いんだ……（涙目＋上目遣い）」

アリスはさらに涙目と上目遣いのレベル上げる。全然怖がっていないのに良くこんなでまかせ言えるものだ。

こんな事言われて更にこんな顔を見たらさすがのソラも……

ソラ「分かった……」

と最終的に折れてしまった。

アリスはソラに気付かれないようにガッツポーズした。アリスはソラと怖い所に行くと言うシチュエーションで、二人の仲が急接近と言う事も考えているからソラを誘ったのだ。

高杉・桂

（（アリス、それは反則だろ……））

高杉と桂は美少女にしかできない反則技をしたアリスに呆れ、同時に恐怖も覚えた。

銀時「え、えつと……俺は行くの止め……」

銀時はやんわり行くのを断ろうとするが、アリスがそれを即却下する。

アリス「あ、お前はこい。万が一怪物か何かがいたら真っ先にお前を餌にするから」

銀時「行けるかあああああああああああああああああああああ  
あ！！！！！！！」

真顔でとんでもない事言うアリスの言葉に銀時は額に青筋を浮かべてツツコム。

銀時「餌にされるの前提で行けるわけないだろ！！」

銀時は餌にされるなんて言われてついて行く程お人好しではないの

で、行くのを断ろうとするが、アリスが銀時に近づいて耳元囁く。

アリス「（こないとバラすぞ）」

銀時「わ、分かりましたアアアアアアアア！！！！！」

銀時は軍隊顔負けの敬礼のポーズをしながらシャウトする。アリスも「よろしい」と笑顔で言う。

銀時は敬礼しながら内心滝のように泣いていた。初めて人を本気殺してやりたいと思った。

アリス「では、行くか」

アリスは銀時とソラと一緒に洞窟の中に入って行った。

アリス「——っで……何でお前達まで付いて来ているんだ？」

アリスはこめかみをヒクつかせて額に青筋を浮かべながらソラの腕に抱きついている。

アリア「にゃ〜……気にしない」

アリアもまたアリスと同じようにソラの左腕に抱きついている。二人の美少女に両腕を抱きつかれているソラはため息をつきながら歩いていた。

実は、ソラとアリスと銀時が洞窟の中に入った時、アリアとリリスとセイバーとライダーと高杉と桂も結局一緒にいて着たのだ。

アリアとリリスとて、ソラとアリスが洞窟で良い雰囲気なるような状況になる可能性があるのに、それを見逃す程甘くない。こっそり三人の後を付いて着たのである。リリスは怖かったが、ソラへの愛で恐怖を抑えて付いて来た。

セイバーとライダーも何かあるといけないと思ったので、結局付いて来た。残された高杉と桂も折角なので付いて行く事にした。

これではさっきのやり取りはほとんど無駄だと言っていいだろう。兎に角にも全員洞窟の中に入る事になったと言うわけである。

セイバー「しかし、入り口は狭いですが、仲は結構広いですね」

セイバーは石でできた通路を見る。通路は十分な広さと高さがある。これがホントに自然の物だと言うのだから驚きだ。人が作ったと言っても、疑わないだろう。

桂「ん？ どうやらここで行き止まりらしいな」

一同は円形の広間のような広い場所に着いた。どうやらここで行き止まりのようだ。その場所の天井は穴が煙突のように穴が開いていて、日の光が差し込んでいた。壁は石でできていて、木の根がところどころ顔を出している。

高杉「どうやら、あの呻き声の正体は風の反響した音のようだな。あの穴から風が通って音出していたって、所だな」

高杉は添乗に空いた穴を見ながら冷静に分析する。子供にしてはこ

の分析力は中々の物と言っているだろう。

アリス「どうやら、怪物でも幽霊でもないらしいな。餌はいらなかったな」

銀時「お前！ 俺を本気で餌にするつもりだったのか！？」

アリス「何を当たり前の事を聞いているんだ？」

アリスはさも当然と言う顔で言う。銀時はアリスの言葉を聞いて、口元をヒクつかせて額に青筋浮かべていた。

銀時（こいつ、いつか絶対泣かす！）

銀時はアリスに何時か復讐してやろうと思った。だが、それができるのは何時になることやら……。

ソラ「ん？ 何だアレは？」

ソラは広間の突き当たりに木で出来た扉のような物があるのを見つける。

それはまさしく扉と言うのに相応しい物だった。形は綺麗な楕円形で、表面は無駄のない物だった。

自然にできた物なのか、それとも誰かが作った物なのかは定かではないが、扉だと一目見れば分かるほどよくできた物だった。

ライダーは扉のような物に近づいて、触りながら調べる。

ライダー「ドアノブも鍵穴もありませんし、たぶん自然にできたものでしょう」

ライダーは調べて、扉のような物は木の根が自然に扉のような形にできた物だと判断した。

アリア「どうする……？」

アリアはアリスにこれからどうするか聞く。

アリス「もう用はないし、帰るか」

アリスはもう飽きたらしく、両手を後頭部に当てながら洞窟を出て行こうとする。

他の皆も得にここでする事はないので、アリスの後を付いて行きながら話していた。

銀時「なあ、折角見つけたんだし、ここ俺達の秘密基地にしようぜ  
ツラ」

桂「ツラじゃない桂だ。それには俺も賛成だ」

ソラ「じゃ、今度なんか持ってくるか」

そんな事を話しながら歩いて行く。

その時、高杉は足を止めて、扉のような物を見た。

高杉「……………」

扉のような物の真ん中には金色で装飾された模様と大きな鍵穴のような物が現れていた。

高杉はそれ少しの間見た後、皆の後を追って行った。高杉はさつき

見た鍵穴の事を皆に言う事はなかった。

第六訓：子供は良く、不思議場所を発見する（後書き）

黒龍「ええ、次回アンケートの結果発表とお知らせがあります」

銀時「なんだ？ お知らせって？」

黒龍「的キャラである？？機関に関して重要な事です」

銀時「なんか…すんげー気になるんだけど…」

黒龍「では、次回、『なんか凄い武器を手に入れた時は気をつける』にテイクオフ」

## 第七訓：なんか凄い武器を手に入れた時は気をつける

時刻は夜。

ソラは寺子屋をこっそり抜け出して、前に自分達の秘密基地にした洞窟の前に来ていた。

ソラは寝ている時に頭の中に不思議な声が聞こえてきた。

言っている事は良く聞こえず、理解できなかったが、何だか自分の事を呼んでいるように聞こえた。

そして呼び寄せられるようにこの洞窟まで足を運んだのである。

ソラ（たく、さっきから頭の中で響くこの声はなんなんだ？）

少し間をおいて、謎の声は聞こえてくる。

ソラはさっきから自分の頭の中で響く声に若干の苛立ちを感じていた。とにかく早くこの声の正体を見つけられない事には眠る事はできない。何より気になってしょうがない。

ソラは洞窟の奥から不思議な気配を感じていた。たぶん謎の声の正体とこの気配の正体は同一の物だとなんとなく分かった。なんとなくとは言え、どうして謎の声と気配の正体が同一の物だと分かるのかソラ自身にも分からなかったが、自分の何かがそう感じ取ってしまった、と言う感じである。

ソラは頭を掻きながら洞窟の入り口に入ろうとすると、誰かの声が聞こえてきた。

「??? お前、こんな時間に何やってんだ？」

ソラは声のした方を向く、月明かりがあるおかげで、その正体はす

ぐに分かった。銀時である。

銀時はソラに歩きながら近寄る。

ソラ「銀時……」

銀時「何やってるんだ、お前？」

ソラ「いや、ちょっと、な」

ソラは言いずらそうに言葉を濁す。さすがに頭の中に謎の声が聞こえてきて、その声の主の気配を頼りにここまで来ましたが、とても言えない。例え言ったとしても、明日から自分の半径2メートルには誰も近づかなくなるだろうとソラは思った。まあ実際はたぶんそんな事にはならないだろう。

ソラはどう説明しようか、考えを巡らしていると、先に銀時が口を開いた。

銀時「もしかして……頭の中に変な声が聞こえて、その声の正体の気配を感じてここまで来たって事はないよな？」

ソラ「……えっ？」

ソラは銀時の言葉を聞いて唖然とした。なにせここにきた理由を思いつき言い当てられたからである。ソラは確かめるように銀時に聞いた。

ソラ「えっ……もしかして、お前も……？」

ソラはおずおずと言った感じで、一指し指で銀時を指しながら聞い

てみた。

銀時「えっ？…………お目もって事は、お前も…………？」

銀時もソラと同じように一指し指で相手を指しながら言う。

銀時「……………」

ソラ「……………」

二人に妙な沈黙が訪れた。  
そしてソラが言葉を発する。

ソラ「じゃあ、互いに…………」

銀時「同じ理由でここに…………」

こんな偶然あるのだろうか？ いや、ありえない。謎の声が頭の中から響く事するありえない事なのに、ましてやそんな状態の人間が二人も同時刻で現れるなど、もはや何らかの意思が介入しているとは思えない。

ソラ「じゃあ、行くか」

銀時「ああ…………」

最早二人の間にこれ以上の会話いらない。とにかく謎の声と謎の気配の正体を確かめて帰って寝る。

二人の考えは既にこれで決まった。

つつか、謎の声の時点で不気味なのでこれ以上話して恐怖煽るのが

嫌だけと言つのもあるが……。

ソラと銀時は真剣な顔で汗をかきながら洞窟に奥に入って行った。

タラリラッタラ♪（ドラえもん風）

ソラと銀時はキーブレードを手に入れた。

二人は経験値を1000手に入れた。レベルが上がった。二人は勇者にジョブチェンジした。

え？……ふざけんな？ ちゃんと説明しろ？ やだ………ちよつと止めて！！ 石投げないで！！ 説明する！！ 説明しますから！！！！

コホン！ 二人は洞窟を進んだ後、広間にある、あの扉のような物

の前に立っていた。

ソラ「なあ銀時？ 俺、この扉の奥からあの変な感覚を感じるんだが？ 気のせいかな？」

銀時「あ、ああ。俺もこの扉の奥から感じる……」

そう、謎の気配はこの扉の奥から感じるのである。しかし、前にライダーが調べたが、この扉はドアノブもなければ鍵穴もない。高杉がこの扉から現れた鍵穴を見たが、二人はその事を知らない。とにかくこの扉を開ける方法はないのである。

ソラ「どうする？」

銀時「どうするって言われてもな」

銀時は腕を組んで「うーん」と唸りながら考える。だが、どうにも良い考えが見つからない。

ソラ「しょうがない。壊すか」

ソラはそう言いながら、どこから出したのか、ピコピコハンマーを出す。

銀時「いや、それどこから出したんだよ！？」

ソラ「四次元ポケットから」

銀時「ドラえもん！？ つつか、ドラえもん引つ張りすぎだろ！！  
って、無理だから！！ そんなんじゃ扉壊れないから！！」

銀時のツッコミを無視して、ピコピコハンマーで扉を壊そうとするソラにまたツッコムが、ソラは気にせずピコピコハンマーで扉を叩く。

ピコ！

なんとも可愛らしい音がした。すると、扉がバツ！、と勢いよく開いた。

ソラ・銀時

『『えっ？』』

銀時だけじゃなく、ピコピコハンマーで壊そうとしたソラまでその光景に啞然としてしまった。

そして、扉は勢い良く空気を吸い込み始める。

銀時「うわあああああああ！！！！」

ソラ「くっ！」

二人は成す術も無く扉に吸い込まれてしまい、二人を中に吸い込んだと同時に扉をバン！と閉まった。扉の前にはピコピコハンマーしかなかった。

銀時は怒りを露にして怒鳴る。

そして起き上がった銀時が、開口一番にソラに文句を言った。銀時はピコピコハンマーで扉が開いて、ここに来てしまったと思ったからである。

ソラはほくそ笑みながら自慢げに言う。

ソラ「いや、全然」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

なんとも世界仰天ニュースで放送されそうな、面白い内容だ。まあ銀時にとっては全然面白くないが……

ソラ「まあ、人生楽ありや苦もあるさ」

ソラは銀時の肩に手を置いて慰める。

銀時「お前は水戸黄門か!!」

銀時はソラのせいでこう言う事態になってしまったと思っているが、実は二人が来た事により扉が開いただけである。その事を銀時が知る方法はないが……。

ソラ「ん?……おい銀時、あそこに何かあるぞ」

ソラは目の前に何かがあるのに気付いた。

遠目で見えないが、形のある何かがある事に気付いた。薄暗いと言え、ソラの視力はかなり高いのだが、そのソラの目を以つても得体が知れないとなると、結構遠くにある事が分かる。

ソラ「どうする? 行ってみるか?」

銀時「じゃあねえ。他に何もねえし、とりあえず行ってみるか……」

銀時俯きながら歩き出し、ソラも銀時の後に続く。

二人は十分程歩いた後、その物体の前に着いた。

銀時「なんだコレ?」

ソラ「鍵……?」

二人はその物体を見て首を傾げた。

物体の正体は、盛り上がった地面に刺さった、鍵のような形をした剣だった。

剣は二本あり、×字のようにクロスした形で地面に突き刺さっていた。

二人はその剣を見てどうしようか考えていると、またも二人の頭の中に謎の音が響く。しかもそれははっきりと理解できる言葉だった。

―来てくれましたか……私の主―  
マスター

銀時・ソラ

『『えっ?』』

二人は聞こえた声に啞然とする。さつきまで、言葉がどうか理解できないほど聞こえなかったのに、いきなり鮮明に聞こえたとなれば、無理もない。

それと、同時に二人の前に光が現れると、その光は人の形を成していき、二人の女性が現れた。

一人は薄い紫色の長髪の女性で、かなり美女である。

胸なんかはE―F位あり、まさしくかなり美貌と言えよう。

イメージは『祝福のカンパネラ』の『チエルシー・アールコット』です。あ、あと服もまったく同じです。

もう一人、銀髪にで長い髪をリボンで一纏めにした、こちらもかなり美女だ。

胸は隣の女性と同じ位大きく、スタイル抜群と言えよう。

イメージは『おまもりひまり』の『緋鞠<sup>ひまり</sup>』を銀髪にした感じです。あ、服はひまりの着ていた和服です。

「???」やつと会えましたね、マスター」

薄紫の髪の女性はニコツと笑顔で嬉しそうに言う。

「???」私達はマスターが来るのをずっと待っておったぞ」

銀髪の女性も笑顔で嬉しそうに言う。

ソラ・銀時

『……………』

二人は目の前の美女の言葉など、耳にまったく入っていなかった。いきなり人間、しかも美女が現れるなど、どこのラノベやマンガの話だと言いたい。

二人は次から次と起こる突然の事態に脳内処理が追いつかず、立ち尽くしていた。

「???」えつと……マスター？」

「???」どうしたんじゃ？」

二人の女性は、ソラと銀時がまったく反応しない事を不思議に思い首を傾げる。

ソラと銀時はそのままUターンして帰ろうとする。

「???」ちよつと、マスター……！」

「???」何を帰ろうとしているんじゃ!?!？」

薄紫の髪的女性はソラの肩を、銀髪的女性は銀時の肩を掴み引き止める。

慌てる二人の美女に白い目でソラと銀時は言う。

ソラ「いや……」

銀時「なんか……もう疲れたんで、帰ろうかと……」

???「ちよつ、何ですかそのイタイ人を見るような目は!？」

???「とりあえず落ち着け! ちゃんと分けを説明する!！」

二人の美女はなんとかソラと銀時を説得して、自分達の事を説明した。

この二人は盛り上がった地面に突き刺さった鍵の形をした剣……キーブレードの意思で、銀時とソラを呼んだのもこの二人?である。薄紫の髪的女性の名前が『チェーン』で、銀髪的女性が『シルバー』と言っらしい。

キーブレードとは『世界』が作りあげた特別な剣で、キーブレードに選ばれた者しかキーブレードを扱う事はできない。

その力は未知数で、使用者の心の力によってその力をいくらでも上げる事ができるそうだ。

『チェーン』と『シルバー』はそのキーブレードの中でも更に特別な剣なのだそうだ。

なんでも普通のキーブレードは喋らないらしい。

『チェーン』と『シルバー』は今迄ずっとこの世界にいた。昔いた

自分達の持ち主以外、自分達を扱える者がおらず、数え切れない程の年月をここで過ごしてきた。人ならとつくにおかしくなっているほどに。

そしてやっと、二人？は新たな主を見つけた。二人？にとってはこの上なく嬉しい事だった。

だからわざわざ此処に来てもらったのだ。

チェーン「——っと言っわけです。マスター」

チェーンは一通り説明を終える。

それを聞いたソラと銀時は内心驚いていた。なにせそんなとんでもなく凄い剣の主に選ばれたのだから。

ソラはさっきのチェーンの説明を確かめるように聞く。

ソラ「つまり、俺はチェーン、銀時はシルバーの主として選ばれたって事でいいか？」

チェーン「ええ」

チェーンは頷く。

ソラ「そうか……じゃ」

ソラと銀時はまたUターンして帰ろうとする。

チェーン・シルバー

『『だからなんで帰るんですか（じゃ）！？』』

チェーンとシルバーは慌ててソラと銀時の肩を掴んで引き止める。ソラと銀時はまた冷めた目をする。

ソラ「いや別に……」

銀時「俺ら好きで選ばれたわけじゃないし……」

チェーン「いや、おかしいでしょその反応!？」

シルバー「私達に選ばれる事は、天地がひっくり返るくらい凄い事なんじゃぞ!」

シルバーの言う事は本当である。キープレードでも更に特別な二人?に選ばれる事は三億円の宝くじを連続で千回当てる事よりも確立が低い事なのだ。まあぶっちゃけて言うと、そんなくらい凄いや言う事だ。

だが、ソラと銀時に関して言えば、なんか厄介物を押し付けられる気分なので、あまり乗り気ではなかった。

そんな二人の様子を察したのか、チェーンとシルバーは手を離す。

チェーン「マスターが私を必要としていないなら仕方ありません……」

シルバー「我等はマスターの意思を第一に考えるからの……」

チェーンとシルバーはそうは言っているが、目には涙が溜まり今にも泣きそうで、とても悲しそうな顔だった。

マスターである銀時とソラがシルバーとチェーンを欲しくないと言うなら、無理強いはできない。

ソラと銀時はチェーンとシルバーの顔を見て、良心がかなり痛んだ。

チエーン「次は、一体何億年掛かるのでしょね？」

シルバー「仕方なかるうチエーン。例え何兆年掛かるうと待つしかない」

銀時とソラは二人の話を聞いて、汗を流し始める。二人の良心にチエーンとシルバーの言葉が突き刺さる。

チエーン「でも……やつと私達の新たなマスターが見つかったのに……」

シルバー「言うなチエーン！！マスターの意思を第一に考える！例えまた何百兆年掛かる事になってもじゃ！！」

銀時「いや、ちよつ……」

銀時とソラは更に汗を流す。もはや二人の良心は突き刺されすぎて蜂の巣だ。

チエーン「そう、ですね。たとえ何千兆年掛かってもマスターを待ちましよう……」

シルバー「そうじゃ。たとえ無料対数年掛かっても……」

銀時「分かった！！分かりました！！」

ソラ「お前のマスターになってやるからもう言つの止める」

二人はドツと汗を流しながらキープレード使いになる事を決めた。ソラと銀時の言葉を聞いたチエーンはパーッと顔を明るくさせてチ

エーンはソラを、シルバーは銀時を抱きしめる。

チエーン「よろしくお願いしますマスター」

シルバー「これから頼むぞ」

二人はほんのり目に涙を溜めながらとても嬉しそうに言う。  
それだけ新しい主が見つかった事が嬉しいと言う事だろう。

銀時とソラは二人？の豊満な胸に顔を埋めてと言うより埋められて  
いるので言葉を発する事ができない。

嬉しいような苦しいような、状況に陥っていた。

銀時「ブハッ！　ちょッ、苦しい！」

ソラ「嬉しいのは分かったから、とりあえず降ろせ」

銀時とソラはなんとか胸のから顔を出して、降ろさせるように言う。

チエーン「す、すみませんマスター！」

シルバー「すまなかったの」

二人は慌ててソラと銀時を降ろす。ただ降ろした後の顔が少し残念  
そうだったのは気のせいだとソラと銀時は思った。

降ろされた二人は先ほどまで苦しかったせいで息遣いが荒い。決し  
てハッスルしたからではない。

チエーン「では、そろそろここを出ましよう」

シルバー「そうじゃな」

チェーンとシルバーはそう言うと、光だし消えた。それを見て驚いた銀時とソラはどこに行ったのか、周りを見回していると、自分の利き手に重みを感じた。

ソラの手には持ち手を黄色で装飾され、刀身が銀色の鍵のような形をした剣——『キープレード』が握られていた。

銀時の手にはソラのキープレードよりも刀身が長く平たくできて、全体的に銀色で装飾されたキープレードが握られていた。

ソラ「もしかして、チェーンか？」

チェーン「はい、マスター」

銀時「つつことは、こっちはシルバーだな」

シルバー「そうじゃ」

二本のキープレードはそれぞれ主の言葉に答えた。

これで、二人はキープレード使いとなったわけである。そして同時に銀時とソラが光に包まれた。

銀時「なんだ!？」

ソラ「これは……?」

二人は眩しさのあまり目を瞑り、光が収まり二人が目を開けると……そこは自分達の秘密基地の中で、あの謎の扉の前に立っていた。

ソラ「……………どうやら戻ってこれたみたいだな……………」

銀時「……………そうだな……………」

二人はそう言った後、疲れたように寺子屋まで歩いて行った。

とにかくもう眠かったので、チェーンやシルバーの事を寺子屋の皆に説明する事、他にも色々としなければならぬ事はあったが、とりあえず帰ることにした。

翌日。

セイバー・ライダー

『『どう言う事ですかソラ（ギントキ）？』』ゴゴゴゴゴゴゴゴ

とてつもなく怖いオーラを出しながら笑顔で聞いてくるセイバーとライダーの前にはもの凄い量の汗を流しながら正座したソラと銀時がいた。

何故このような事態になってしまったかと言うと、ソラと銀時を起こしに来たセイバーとライダーが、人の姿でチェーンとシルバーがそれぞれ自分の主であるソラと銀時を抱きしめながら寝ている場面を見て、道場で問い詰められていると言うのが今の現状である。

そして、銀時とソラの隣には人の姿のチェーンとシルバーが座っている。二人もセイバーとライダーのともなく黒く恐ろしいオーラに当てられてドツと冷や汗を流している。

ちなみにチェーンとシルバーには人間の姿になれるかと言う、『擬人化』と言う能力があるので人の姿になれるのである。

特別なキーブレードならではの力だと言えよう。

まあぶっちゃけ今そんな事気にしている余裕などソラと銀時にはまったくないが……。

ソラ・銀時

（（な、なんで俺がこんな目に……））

二人の今思う事はコレだった。自分達は夜遅くチェーンとシルバーに起こされた挙句、眠いのを我慢して秘密基地まで行ってそのまま無理やりな感じにチェーンとシルバーを手に入れて、眠いの我慢してやっと眠れたのに、起こされてそうそうめちやくちやおっかないセイバーとライダーの前に正座させられているってどうよ？ 自分達まったく悪くないのにこの扱いはどうよ？

不幸としか言いようがない事態にソラと銀時は泣きなくなった。

セイバー「それで、一体誰なんですかその者達は？」

ライダー「正直に教えてください」

ソラ・銀時

『『は、はい……』』

二人は嘘偽りなく昨夜あった出来事を話した。

正直言って二人の話した内容はおいそれと信じられる話ではなかったが、今の二人がセイバーとライダーに嘘などは付けない事と『チェーン』と『シルバー』が証明のためにキーブレードの姿になったので、信じるしかなかった。

桂「しかし、セイバーとライダーの事といい、今回の事といい、銀時とソラには何か不思議な天命でもあるのか？」

高杉「俺はそんな事はどうでもいいけどな」

桂は銀時とソラに起こる不思議現象に何か運命的ものを感じて考えこみ、高杉はどうでもよさそうに欠伸をする。

アリス「しかし、ソラが他の女と添い寝していた事は気に食わない」  
「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」

「うん……」

リリース「そうですね……」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

アリスは黒笑を浮かべ、アリアとリリスは瞳を単色にしながら怖いオーラを出す。

三人を見た他の男子達は「ひいひいひいひいひい！！！」とかなりビ  
ビッていた。

まあその後なんやかんやあり、チエーンとシルバーも寺子屋の仲間になりました。

え？なんやかんやじゃ分かんない？つまり、松陽を含めて寺子屋の  
皆が仲間だと認めたと言う事だ。

だったら最初からそう説明しろ？うるさい……………ちよつ痛い！  
 やめて！！石投げないで！！あ、手榴弾！？すいませんすい  
 ませんすいませんもうしません……………。

さっきのは忘れてください。

そして時間は経ち夜になる。

ソラと銀時は夜風に当たりながら縁側に仰向けになって寝ながら星を見ていた。

ちなみにチェーンとシルバーは消してある。なんでも消えている間は二人の意識はなく、その間は銀時とソラのプライバシーを知ることとはない。そして出す時に一瞬でチェーンとシルバーに伝えたい情報を伝える事ができると言う、なんとも都合主義な能力を持っている。

話はそれだが、銀時とソラは前のように寝付けなかった事と、星や月が綺麗だったので、縁側に出て星を見ていたのである。  
その時、銀時が口を開いた。

銀時「なあソラ」

ソラ「なんだ？」

ソラは返事はしているが、視線は星に向いたままだ。

銀時「お前、夢とかあるか？」

ソラ「なんだ、いきなり？」

ソラは普段の銀時なら聞いてこないような発言に目を細める。

銀時「なんとなく思いついた」

ソラ「そうか……」

ソラはその時、やっぱり銀時らしいな……、と思った。

銀時「つで、どうなんだ？」

ソラ「ねえな。そう言うお前は？」

銀時「ねえな」

ソラ「お前、ホントに子供か？」

ソラは少し笑いながら言う。

銀時「お前こそ」

銀時も可笑しいのか少し笑いながら言う。  
二人少し笑った後、また星を見る。

やがて時は経ち……銀時とソラはすっかり大人に成長していた。

二人は子供の時のように屋根の上に仰向けで寝ながら星を見ていた。

銀時は白い衣に鎧を着た姿。ソラは黒い衣に鎧を着た姿だった。

ソラ「行くか……」

銀時「ああ……」

二人は起き上がり、横にある刀を取る。  
そして屋根の上から飛び降りて向かう。戦場へと……。  
今、『攘夷戦争』の中を二人の夜叉が行く……自分の背負う物ために……。

『お知らせ』

黒龍「ええ、前回アンケート結果を発表します」

銀時「ああ、そう言えば、そんなのやってたな」

ソラ「っで、結局どうなったんだ？」

黒龍「結果はこんな感じです」

1 番：三票

2 番：三票

3 番：一票

銀時「おいおい、一番と二番は同じかよ」

ソラ「どうすんだ黒龍？」

黒龍「ええ、俺も試行錯誤した挙句、こう決めました。??機関は原作キャラの名前を変えてオリキャラ扱いで出そうと言う結論に至りました!!!」

ソラ「つまりどう言う風になるんだ？」

黒龍「こんな感じです」

アクセル↓レクセル

銀時「なるほどな。これなら、禁止されていたキンハの原作キャラ使えるじゃねえか」

黒龍「そうでしょ。じゃあこの路線で決定…」

新八「ちよつと待て——————!!!!!!」

まだ本編一切登場していない新八が現れた。

銀時「あ、新八」

新八「あ、新八」つじや、ねえよ!!黒龍!あんだ、また危ない橋渡るつもりですか!今度は削除されるどころか、ニジファンの出入り禁止されますよ!!!」

黒龍「えっ？やっぱダメ？」

新八「ダメに決まってるでしょうが！！」

銀時「おいおい新八、何言ってるんだ？キン八のキャラ？これは私の考えたオリキャラですが何か？」

新八「いや、だからそれが危ないんですって」

黒龍「とにかくアンケート取っちゃったし、もう後には引けません。また削除されたとしてもコピー取ってあるので大丈夫」

新八「しつこい！？」

銀時「とにかく新八、これでやってみようぜ。もしダメってんならもう？？機関の原作キャラは一切出さないでいいじゃねえか」

新八「どうなっても知りませんよ……それにしても、何時になつたら僕は出るんですか？」

新八はジト目で黒龍を見る。

黒龍「次回から始まる『攘夷戦争編』が終わったら出します」

新八「一体何時になるんだあああああああああ！！！！！！」

新八は涙を流しながら頭を抱えて叫んだ。

本当に自分は原作の銀魂でレギュラーなのか激しく不安なつた。

黒龍「次回も楽しみにしてください」

銀時「次回、『戦争は絶対するな』にテイクオフだ」

ソラ「じゃあな」

新八「早く僕を出して――――！！！！！！」

## 第八訓：戦争は絶対するな

そこは戦場。

鉛色の空の下には、ボロボロの血が付いた刀が地面に刺さり、多くの屍が大地を埋め尽くす。

それは人、または異形の存在。

数多の屍の中に、二人の侍……いや、夜叉が立っていた。

一人は銀髪に白い衣の上に鎧を着、血の付いた刀を手にした侍。

もう一人は黒髪に黒い衣の上に鎧を着、血の付いた二本の刀を手にした侍。

その二人は悲しそうな、苦しそうな、辛そうなんとも言えない表情で曇天の空を見上げていた。

周りの屍だけではない、ずっと前から自分達は多くの屍を築いてきた。

そんな事を一体何時まで続ければいいのか……。

だが、それでも刀で敵を倒す事を止めるわけにはいかない。自分の背負う物を守るために……。

そして雨が降り始める。

そして敵の軍勢がやってくる。

二人の侍はまた刀を構え、そして敵の軍勢に挑む。  
自分の大切なモノを守るために……。

攘夷戦争が始まってから年月はかなり経っていた。

突然宇宙から飛来してきた宇宙人である天人<sup>あまんと</sup>。

高圧的に開国を迫ってきた天人<sup>あまんと</sup>に危機感を感じた侍は一斉蜂起して戦った。

しかし、天人<sup>あまんと</sup>の強大な力を見て弱腰になった幕府は、侍達を置き去りに不平等な条約を締結した。

幕府の中枢を握った天人<sup>あまんと</sup>は侍達から刀を奪い、侍達を無力化していた。

だが、侍達もこのまま黙っていなかった。例えば幕府から見捨てられようと天人<sup>あまんと</sup>と戦う道を選んだ。

技術的差から天人<sup>あまんと</sup>側の圧勝ですぐに勝負は終結すると思われたが、侍達の強さは天人<sup>あまんと</sup>の予想を超えていた。

侍と天人<sup>あまんと</sup>の戦い、後に『攘夷戦争』と呼ばれるこの戦争は誰もが予想しない長期戦となっていた。

攘夷戦争により作られてた死体は数え切れないモノになっていった。

それからまた時間が経ち、今現在三人の侍が天人あまんとの軍勢に囲まれている。

血の臭いに乗せた風が通る中、三人の侍は互いに背を向けて目の前の天人あまんとの軍勢と対峙していた。

???「ハア、ハア……………もはやこれまでか」

方膝を突き、剣を杖代わりにしながら体を支えているのは黒髪の長髪の侍——桂小太郎。

子供の時の姿からすっかり成長し、立派な姿になった桂。彼の着ている鎧や服には血が染み付いていた。

これは数え切れないほどの天人あまんとから受けた返り血である。

桂「敵の手にかかるより、武士らしく、最後は潔く腹を切ろう」

最早援軍は望めない状況。幾ら斬っても減らない敵。

絶望的とも言えるこの状況なら、いつその事侍らしく腹を切って死ぬ。もうそれしかない、桂が諦めかけた時、後ろの二人が声を揃えて言う。

『『バカ言つてんじゃないやねえよ』』

桂は後ろを振り向く。

桂と同じように膝をついていた二人の侍は立ち上がる。

一人は白い衣に鎧を着た銀髪の侍。

もう一人は黒い衣に鎧を着た黒髪の侍。

???「美しく最後を飾る暇があるなら、最後まで美しく生きよう

「じゃねえか」

銀髪の侍——坂田銀時は刀を構える。

銀時も子供からすっかり大人へと成長して、立派な侍になっていた。

???「そうだな。カッコつけて死ぬ暇があるなら、最後までカッコつけて生きようぜ」

黒髪の侍——天道ソラは刀を構える。

ソラも子供の姿からすっかり大人へと成長して、立派な侍になっていた。

桂は二人の言葉を聞いて、フツと笑み漏らす。  
そして立ち上がり、刀を構える。

銀時・ソラ

『『行くぜ、ツラ』』

桂「ツラじゃない、桂だ」

そう言つて三人は天人あまんとの軍勢に突っ込む。

黒髪と銀髪の侍。その髪に血を浴び、戦場を翔けるその姿はまさしく夜叉。

そしてまた時間は経ち、攘夷浪士達が根城にしている屋敷。

そこには、坂田銀時と桂小太郎と天道ソラの他にもアリスやアリアやリリスやセイバーやライダーや高杉晋助と言う、そうそうたる顔ぶれがあつた。

そして、屋敷の道場のような場所では、ソラと一人の黒髪の男が話をしていた。

???「どうだ、怪我の具合は？」

男の名は高杉晋介。彼もすっかり子供から大人へと成長し、立派な侍になっていた。

あまんと

天人の軍勢に対し、銀時と桂とソラの三人だけで戦いボロボロになつて先ほど戻つて来た。今は治療を受けている。

そして高杉が治療を受けた終わったソラに話し掛けてきた。

ソラ「お前らしくないな。相手の怪我の具合を聞くなんて」

ソラは屋敷の柱に寄り掛かりながら目を瞑っている。

確かに仲間が怪我をしても、怪我の心配はしない高杉が声を掛けてくるのは珍しかった。

高杉「暇だつたんでな」

ソラ「俺の怪我の具合を聞くのは暇つぶしかよ」

そうは言っているが、彼の言葉に不満などは感じられなかった。  
ソラは両手を枕にして頭を壁に寄り掛からせる。

高杉「それにしても、また随分と敵を斬ってきたな」

高杉はソラの横に置いてある、血のベツトリ付いてボロボロになった刀を見る。

高杉の顔はどこか笑っている風にも見えた。

ソラ「嬉しいか？ 俺が敵を殺す事が？」

ソラは目を細めながら高杉を見て言う。

高杉「くくく、さあな」

高杉はそう言って、どこかに行ってしまう。たぶん高杉の部隊である、『鬼兵隊』の様子でも見に行ったのだろうとソラは思った。

高杉を中心とした部隊、『鬼兵隊』。その強さは名前の通り鬼のように強いと言われ、所謂精鋭部隊である。

ソラは横目で治療を受けている銀時や桂を見た。

ソラはその時、自分達がどうしてこうなってしまったのかを思い出す。

ソラや銀時の幼馴染である桂や高杉やアリスやアリアやリリス。それに自分や銀時のサーヴァントであるセイバーやライダー。

松陽が死んだ後、ソラ達は攘夷志士となり、今現在幕府、そして天<sup>あま</sup>人と戦っている。

主に部隊を率いて戦う高杉や桂はこの攘夷戦争で英雄と呼ばれる程の存在になった。

部隊を率いてないとは言え、戦いの中で一番の活躍、つまり敵を多く殺しているソラと銀時はそれぞれ、『黒夜叉』、『白夜叉』と言う異名が付くほどの敵も味方からも恐れられる存在になった。

アリスやアリアも女だからと、他の侍達からは軽視されていたが、凄まじい強さと戦場を舞うような美しい姿から二人は『風舞う戦姫』、『氷結の戦姫』と言う異名で呼ばれている。

同じくライダーとセイバーの活躍も凄まじく、今ではセイバーは『騎士王』、ライダーは『黒姫』とまで呼ばれている。

リリスはソラ達のサーポート的な位置ではあるが、『雷雲の聖槍』と呼ばれる程の活躍は見せている。

ライホースもまた『黒い雷槍』と言う異名が付くほどの活躍を見せている。

だが、彼らの活躍と反対に、攘夷志士達は劣勢だった。

幾ら侍達が強い魂と信念を持った猛者だと言っても、天人あまんとの技術力と数の多さには劣勢を強いられるしかなかった。

攘夷志士達は疲弊していった。

何年も天人あまんとと戦い続けたと言うのは、出来すぎと言っても過言ではない。

更には銀時達のような信じられない位の強さを持った若い世代が現

れた事により攘夷戦争は未だに続いているのである。

だが、それはソラや銀時達を苦しめる事にしかなかった。ただただ、死んで仲間を背に敵を斬り敵の命を奪っていく。

それは言葉では表現できないほど、辛く苦しい事だ。

それでも、最早歩みを止める事はできない。

そしてそんな苦しみの連鎖が続く戦争を歩む彼らの戦う理由は様々だ。

高杉は自分の恩師である松陽が殺された事による復讐を成し遂げるために。

桂は自分の恩師を殺した復讐と殺されていった仲間達の復讐、そして今なお戦う仲間達のために。

銀時とソラはただ自分の背負う者のため、自分の大切な者を守るために戦う。

アリスとアリアは自分の好きなソラを守り、同時に松陽の殺された復讐を成し遂げるために。

セイバーとライダーは自分の大切なマスターを守るために。

ライホースとリリスもまた、自分達の大切な者のために戦う。

それぞれが、それぞれの思うままに戦い、そして刀を振るう。

ソラは今迄の事を思い出していると、桂が声を掛けてきた。

桂「ソラ、握り飯だ。食っておけ」

桂は握り飯を食べながら、ソラにもう一つの握り飯を渡す。  
ソラは握り飯を受け取り、食べる。

桂「武士たるもの、腹が減っては戦はできんからな」

桂はそう言って、握り飯をムシヤムシヤ食べる。

ソラ「――まだ、続くんだな」

ソラの一言を聞いて、桂は握り飯を食べるのを止める。

ソラ「俺達はいつまでこんなバカげた戦争を続けなきゃいけないんだろうな」

ソラの言葉を聞いて桂は悲しそうななんとも言えない顔になる。

桂「さあな……だが、俺にもお前にも聞こえるだろう。殺されていった仲間達の怨嗟念、そして松陽先生を殺した幕府に対しての復讐心が」

自分達の恩師である松陽、更にはこの攘夷戦争で散っていった仲間達。

桂はその事を考えれば、腸が煮えくり返る程度ではすまないほどの怒りを感じる。

それはあの寺子屋で過ごした皆にも言えることだ。だからこうして攘夷戦争にも参加している。

そしてなにより松陽が殺された事に大して一番の怒りを憎しみを抱いているのは、銀時とソラであろう。

だからこそ、桂は復讐心を煽る言葉をソラに掛けた。

桂の言葉を聞いて、ソラは俯く。

ソラ「俺は……」

その時、一人の男が慌てた様子で道場の中に入ってくる。

男「た、大変だ！！ 天人あまんとの軍勢がこっちに向けて迫っているそう  
だ！！」

男のその言葉を聞いて、皆は慌てる。

休んでいた者や傷のまだ癒えていない者も傷ついた体に鞭を打って立ち上がり武器を取る。

治療を受けていた銀時もまた、体を起こして刀を取る。

桂「どうやら、食事の暇さへも与えてくれないらしいな、奴らは」

桂は刀を取り道場を出て行く。

ソラも新しい刀を取り、道場を出て行く。

桂「坂本！ 戦況はどうなっている！？」

焦った顔で道場から出てきた桂は途中で出会った、和服の上に鎧、頭の上には兜を被った男——坂本辰馬さかもとたつまに今の現状を聞いている。

辰馬は大富豪の家柄であるにも関わらず、攘夷戦争に参加し、大きな功績を今なお残している。

だが、辰馬はこの戦争行く末が見えていて、この戦争の後に自分は船を持ち、国の将来を考え宇宙に出るなど、目先のものに捉われない独自の先見性を持っている。

攘夷戦争中に銀時達と出会い親しくなった。ただ、出会った時にアリスを見て「その綺麗なお嬢さ〜ん！」と飛び掛ってアリスにぶっ飛ばされたと言う過去がある。

柔軟な思考は良いのだが、この辰馬と言う男はアリスに抱きつこうとする奇行に走るなど、なにぶんバカで天然な所がある。

余談だが、度々アリスに抱きつこうとしてぶっ飛ばされているとか……。

辰馬「おおッラ！！ 大変ぜよ！ 天人あまんとの軍勢がもうすぐそこまで来てるきに！！ 既に高杉は鬼兵隊を率いて出て行ったぜよ！」

桂「ッラじゃない桂だ！ そうか、分かった。俺もすぐに高杉達の加勢行く！」

辰馬「ならワシも行くぜよ！」

桂の後を追って辰馬は行こうとすると、ソラとその後ろから緑色の髪と水色の髪をした二人の美女がやってくる。

緑髪の美女はアリスで、こちらも立派に成長していた。

服は緑を基準にした衣で、動きやすいように鎧はあまり着けていない。

胸当ての鎧が無いので、アリスの豊満な胸の谷間が衣が顔を出し、なんともエロい。大きさはF G位ありそうなほどで、スタイルも相当だ。そこら辺のグラビアアイドルなんかは顔を真っ青にしそうなほどだ。

そしてわがままし放題の胸を揺らしながらやってくる。

水色髪女性はアリアで、こちらも立派に成長していた。

服は水色を基準にした衣で、動きやすいように鎧はあまり付けていない。

アリス同様に胸当ての鎧が無いので、アリスに並び立つほどの巨乳の谷間が顔を出している。

で、やはりこちらもスタイル抜群だ。

そしてアリスを見た辰馬は、

辰馬「アリスちゃん！！ ワシとデートボッ！！」

いきなり抱きつこうと飛び掛り、アリスにぶん殴られてそのまま壁に激突して気絶した。

桂「何をしているんだお前はアアアアアアアアアア！！！！！！」

ソラ・アリア

『『はあ』』

桂は辰馬のバカ行動にシャウトし、ソラとアリアはため息をついて呆れていた。

本当にこれから戦おうとする者達の行動なのだろうか？

## 第八訓：戦争は絶対するな（後書き）

黒龍「いやゝちようつと投稿遅くなっちゃいました」

銀時「つつか、最後アレ何？ 辰馬のバカ行動で終わりって何？  
つつか、俺ほとんど最初以外全然喋ってたくない？」

ソラ「あ、そう言えばそうだな」

黒龍「いやゝやつぱ攘夷戦争の様子を描くのは大変なので、短いし  
こんな感じになっちゃったんですよね」

ソラ「とりあえず、早く進めてリリカルなのはの世界に行くとこ書  
かないと読者が離れていくぞ」

黒龍「善処します。って言っても、この後2、3話でこの攘夷戦争  
編は終わりますけど」

銀時「とにかく俺の出番はちゃんと作れよ」

黒龍「頑張ります」

ソラ「じゃあ、次回、『例え戦争でも人の心は捨てるな』にテイク  
オフ」

第九訓：例え戦争でも人の心は忘れるな（前書き）

黒龍「今回はあの『TO LOVE -とらぶる-』のキャラが最後に登場します」

銀時「おい。既にネタバレじゃねえか」

ソラ「『リリカル銀魂ライダー』始まるぞ」

## 第九訓：例え戦争でも人の心は忘れるな

急いでいたので、アリスに抱きついて気絶している辰馬を放っておいて、桂とソラとアリスとアリアは屋敷の門前で繰り広げられているであろう、戦場に向かった。

そして、屋敷の前に着くと、既に戦いは始まっていた。

高杉「行けー！ これ以上奴らの好きにさせるなあー！」

高杉を筆頭に鬼兵隊の精鋭達が次々に天人達を切り倒していく。辺りに鮮血が飛び、爆撃の音が死に逝く者達の声を掻き消していく。まさしく乱戦だった。

ドカーン！ ザシュ！ ズダダダダ！

人か天人のどちらかは分からないが、斬られ切り傷から鮮血が噴出する音、爆撃の音、銃弾の音、あらゆる音、戦う者達の叫び声が戦場を埋めていった。

そんな戦場の中にソラやアリアやアリスも飛び込む。

桂「高杉！！ 戦況はどうなっている！！」

桂は天人の軍勢を切り倒しながら高杉に駆け寄り、現状を聞く。

高杉「今んとこ俺達が優勢だ！」

高杉は敵の刀と自分の刀をぶつけて、火花散らしそして流れるよう

に刀を動かし敵を切り裂きながら答える。

高杉と桂は巧みな剣捌きと神速を誇るほどの速さで刀を振るい、天人達を次々に切り倒していく。

その姿はまさしく鬼神と呼ぶべきほどであった。

そしてそんな桂と高杉に負けず劣らず活躍を見せているのが、アリスやアリアだった。

アリス「フッ」

アリスは華麗な動きで敵の攻撃をかわしていき、そのまま流れるように敵を切りつけていく。

その姿は美しく、まるで踊っているかのようなだった。

そして刀の刀身に風を纏わせる。

魔法の使うには『デバイス』が必要なのだが、アリスは脳スペックと戦いの経験により自然に身に付けた魔力運用により、デバイスなしで自分オリジナルの攻撃魔法が使えるようになった。

アリス「風牙一閃」

そう呟き、そのまま刀を横薙ぎに振るうと、三日月状の風の斬撃が天人達の胴体を真つ二つにしていく。  
そしてまた天人達を切り倒していく。

アリア「遅い」

ズザザザザザザザザ！

アリアは無表情のまま、素早く動き流れるように天人達を切り裂いていく。あまんと

天人「く、囲んで動きを封じろ！！」

あまんと 天人達は一斉にアリアを囲んで、動きを封じようとする。

アリアは表情も変えず、ただ突っ立って回りにいる天人達を見回した。あまんと

そして、小さく呟く。

アリア「……無駄」

アリアは地に刀を突き刺した。

あまんと 天人達はアリアが諦めたのかと一瞬思ったが、すぐに異変に気付いた。

あまんと 天人達の足元が凍り始めていたのである。いや、自分達の足元だけではない、地面全体が徐々に氷が広がるように凍っていつていた。

アリアの半径3メートルにいる天人達あまんとは悲鳴を上げる間のなく全て氷漬けになり、そのまま砕け散ってしまった。

アリア「続き……」

そして天人達あまんとの包囲網が解けたと同時にアリアは素早い動きと剣捌きで天人の軍勢を次々に切り殺していく。あまんと

また、別の場所では戦いに参加しているリリスも奮闘していた。

リリス「はああ！」

リリスの周りに幾つもの魔方陣が展開されると、幾つもの雷槍が現れる。

リリス「槍雷撃！」

ズザザザザザザザ！

あまんと  
天人

『ぎゃあああああああああああああああ！！！』

『

リリスはその雷槍をあまんと天人の軍勢に向けて放ち、あまんと天人達を次々に串刺しにしていく。

あまんと天人達は痛みあまり悲鳴を上げる。

そしてリリスは近づき斬ろうとしてくるあまんと天人に電撃を放ち、黒コゲにしていくなど、中々の活躍を見せている。

別の場所では、ライホースが活躍していた。

ライホース「はあああああ！！！」

ライホースは自分の角に雷を纏わせ、とんでもない速さで走りながら敵を蹴散らし、貫き、黒コゲにし、吹き飛ばしていく。

そしてまた別の場所。

辰馬「おんしらには恨みはないが、斬らせてもらっぜよ！」

いつの間にか気絶状態から回復して戦い参加している辰馬はもの凄い勢いで敵を切り倒していく。

その剣技は素早くその上に豪快で、動きにも無駄が無かった。

神速とも呼べるほどの速さで敵を次々に切り倒していき、力強い豪の剣で敵を何人も一撃で切り倒していく。

まさしくその姿は桂と高杉にも引きを取らない程だった。鬼神と呼ぶに相応しいほどに……。

桂、高杉、アリス、アリア、リリス、ライホース、辰馬と言う鬼神と呼ぶほどの豪傑達の活躍の中、その中でも一際凄まじい勢いで敵を倒していく侍——夜叉がいた。

坂田銀時と天道ソラである。

銀時は巨漢の天人あまんとが振り下ろす金棒を寸前で避け、そのまま巨漢の天人あまんとを切り倒し、次々と来る天人達あまんとを倒していく。

次々と薙刀、刀、クナイ、斧、剣などと言う武器を持つ天人達あまんとの猛攻にも一切退かず、次々と切り倒していく。

その姿はまさに夜叉。

ソラもまた、銀時と同様の活躍を見せていた。

一気に飛び掛ってくる刀を持った天人達あまんとの姿にも動じず、たった一振りで飛び掛って来た敵を全て斬り殺し、そのまま神速以上の素早い剣捌きで敵を切り裂いていく。

ソラが一閃するだけで、何人もの天人達あまんとは斬られ、更にはその強靱

な一振りの前には鎧などないに等しいと同じだった。

ソラが刀を振るたびに死体が出来ていき、敵を狩るその姿はまさしく夜叉。

これだけの戦闘力を見せられれば、銀時とソラが『白夜叉』と『黒夜叉』と呼ばれるのも頷ける。

銀時とソラは進むたびに目の前の敵を切り倒され、鮮血が飛ぶ。

一騎当千どころのレベルではない二人の夜叉と、さらにはそれに劣らない何人ももの猛者達。

天人達は自分達の仲間がそんな豪傑達に切り倒される姿を見て、怖気づき、恐怖していた。

まだ数分しか経っていないのに、天人達あまんとの数は既に半分にも満たない状態になっていた。

——な、なんて強さだ!?

そんな鬼神達の姿を見て天人達あまんとの士気が低下してくると同時に、

???「エクスカリバー!!」

巨大な金色の閃光が大量の天人達あまんとを蹴散らしていった。

天人達が慌てて金色の閃光が来た方を見ると、芸術品とも呼べる綺麗な黄金の光を発している黄金の剣——『約束された勝利の剣』エクスカリバーを構えた『セイバー』と、

???「あなた達の命を貰います」

鎖で繋がれた二本のダガーを持って、そのダガーを蛇のように動かして敵を串刺しにしたり、切り裂いたりする『ライダー』の姿があった。

天人「き、騎士王と黒姫だあああああ！！！！」

あまんと 天人の一人が叫び声を上げる。

あまんと その声を聞いた他の天人達に更に動揺が走る。

ただでさえ、白夜叉達だけでもかなり厄介なのにその上騎士王と黒姫まで現れては、最早<sup>あまんと</sup>天人達の心は死の恐怖に染まりきっていた。

あまんと ほとんどの天人達は勝利を諦め、一目散に逃げ出した。

「に、逃げろーーーー！！！」

「死にたくねえええええええ！！！」

「お母ちゃーーーー！！！！ん！！！！！」

「ママーーーー！！！！！」

「婆ちゃーーーー！！！！ん！！！！！」

情けない声を上げながら一目散に逃げる者、武器を捨て少しでも身を軽くして逃げようと必死になる者、転んで逃げて行く者達に無残に踏まれてボコボコになる者。

最早この戦いの勝敗は見えていた。

部隊長「に、逃げるなーーーー！！ 逃げずに戦えーーーー！！！！！」

部隊長は喉がはち切れんばかりに叫ぶが、この部隊のほとんどは傭兵で固められている。いくら腕の立つ庸兵達だと言っても金で雇われた身。自分の命を懸けてまで目的を達成するような忠誠心はない。白夜叉達の強さに恐怖して自分の命を守ることだけしか考えていない彼らには部隊長の声など耳に入っていないかった。

そして戦場には侍達と、あまんと天人の部隊の部隊長だけになった。そして味方が逃げた事に呆然としている部隊長にソラと銀時が近づく。

部隊長「ヒイイイイ！！！」

部隊長は情けない声を上げながら尻餅をつく。

部隊長「い、い命だけは……た、助けてくれ！！！」

必死に命声をする部隊長を鋭い目線でソラと銀時は見ていた。ソラは刀を持つ手を上げる。

部隊長「ヒイイイイ！！！！！」

部隊長は思わず目を瞑る。

ソラ「行け」

部隊長「へっ？」

ソラの声を聞いて、部隊長間抜けな声を出しながら恐る恐る目を開ける。

ソラ「行け。二度と俺の前にその面を見せるな」

部隊長「は、はいいいいいいいい！！！！！！」

ソラの鋭い眼光を見て、鼻水を垂れ流しながら必死に逃げて行った。  
ソラは刀を肩に担ぎながら後ろにいる自分の仲間の元まで戻る。  
銀時もその後が続く。

その時、高杉が近寄りソラの胸倉を掴む。

高杉「おい！ 今のはなんだ！！ 敵に情けでもかけたつもりか！！」

高杉は声を荒げながら怒りの形相でソラを睨む。

ソラは無表情で言葉を返す。

ソラ「あんな奴を斬っても俺の刀が汚れるだけだ」

高杉「ふざけんな！ 敵は残らず殺さなきゃ意味ねーだろ！」

高杉はソラの言葉を聞いて更に憤慨し、ソラを殴ろうとすると、その手を銀時が掴む。

銀時「よせ高杉」

高杉「銀時！ テメーもテメーだ！ なんてあのクソ天人あまんとを斬らなかつた！」

銀時「敵意もねえあんな情けねえ野郎を斬った所で目覚めが悪くなるだけだろ」

銀時の言葉を聞いて高杉が言葉を止め、銀時と高杉の間で少しの間睨みが続いた。

少しの沈黙が訪れた後、高杉が舌打ち混じりに銀時の手を振り払い屋敷に戻って行った。

その後、銀時とソラに桂やアリスやアリアやセイバーやライダーやリリスやライホースや辰馬が近づく。

アリス「ソラ、大丈夫か？」

アリスが心配そうな顔でソラに聞く。

ソラ「ああ」

ソラは無難に答える。

桂「ソラ、銀時。一つ言わせてもらうが、俺も敵意がない者を斬るのは事には多少抵抗は感じる。だが、その敵を殺さずに逃がす事が後々厄介な種を生むかもしれぬ。だから、その甘さは捨てた方がいい」

桂はそう言って、屋敷に戻って行った。

ソラと銀時は桂の背中を見つめていた。

そんな時、辰馬がソラと銀時に声を掛ける。

辰馬「ソラは硬いの。のお銀時、ソラ。ワシはさっきおんしらがああまんとの天人を見逃した事に対して悪い事とは思ってないきに。おんしらには人であり続けて欲しいと思うとる。ワシが言える事はこれだけじゃ」

辰馬はそう言つて、屋敷の方に戻つて行つた。

銀時とソラはメンドクサそうに頭を搔く。

銀時「たぐどいつもこいつも勝手な事言いやがって。テメー等の意見なんざはなから俺は聞く気はねえつての」

ソラ「俺もだ」

銀時はそう言つて屋敷に戻つて行く。その後をライダーとセイバーとリリスとライホースとアリスとアリアが追いかける。

その時のセイバー達の顔はどこか笑っているように見えた。

屋敷の中では多くの怪我を負つた者達が治療を受けていた。さっきの戦いがいくら圧勝と言つても、さすがに怪我人がゼロと言うわけではない。

これまでの戦いの事もあり、怪我人の数はかなりのものだった。

屋敷の部屋の一つでは急がそうに怪我の治療をしているリリスや『擬人化』したチェーンやシルバーや他にもたくさんの人達が怪我人の治療を行っていた。

ソラと銀時がさっきの戦いでチェーンとシルバーを使わなかったのも、怪我人の治療をさせるためにあえて使わなかったのである。チェーンとシルバーとリリスは治療魔法が使えるので、戦いのない時はこうして怪我人の治療をしているのである。

ちなみにリリスがさつき戦闘に参加したのは、たまたまである。

銀時とソラは壁に寄り掛かりながら治療の様子を見ていた。

チエーン「あの、ソラ。見ているなら治療を手伝ってもらえるとありがたいんですが……」

シルバー「すまないが、銀時も手伝ってはくれぬか？」

チエーンとシルバーは申し訳なさそうに言いながら治療を続ける。

ソラ「あ、ああ」

銀時「しゃあねえな」

ソラと銀時は怪我人の包帯を巻いたりなどして、治療を手伝い始めた。

リリス「すみません……ソラ様、銀さん……」

リリスは申し訳なさそうに言って、十歳くらいの子供と同じくらいの小さな体で水の入った桶を持ち運ぶ。

ソラ「気にするな」

銀時「どこもかしこも人手はたりねえからな」

そう、長い戦争のせいで戦闘に参加する者も、治療をする者も、物資さえも不足している。

さつきまで戦闘していた銀時とソラさえも治療に参加しなければな

らないほど人手不足なのだ。

ソラと銀時は出来る限りの治療をしながら、一体この戦争は何時まで続くかなきゃならねえんだ？、と思っていた。

そして時刻は夜になり、一つの部屋で高杉、桂、辰馬、ソラ、銀時、アリス、アリア、セイバー、ライダー、その他にも部隊の隊長を務める者達が集まって会議をしていた。

高杉「被害の方はどうなんだ？」

真剣な面持ちで高杉が桂に今の自分達の被害状況を聞く。

桂は苦虫を噛み殺したような表情になる。

桂「正直に言えば、酷いと言う有様だ。怪我人はすでに三桁を超え、残っている者は女子供ばかりだ。これ以上ここでの籠城は難しいとしか言いようがない」

高杉「そうか……」

高杉の顔も険しくなる。

天人達にもさつきこの屋敷を攻め込まれそうになったばかりだ。

大きな被害が出る前に追い返せたとは言え、城でもないここでは籠城戦は難しい。いつまで天人達の攻撃に対抗できるか分からない。

???「俺達の部隊も戦には勝ったとは言え、怪我人が多いと言うのが現状だ」

別の部隊の隊長——真咲刀魔しんせきとうまが目を細める。

刀魔の容姿は黒髪に前髪の一部に赤髪が混じったような感じで、瞳の色は緑色で、体つきは全体的に細い感じである。

服は全体的に赤と紫が混じった衣が主体で、黒いマントを着ている。鼻から下をすっぽり白い包帯で覆っている。

刀魔は魔術師で、子供の頃に松陽に拾われた。

寺子屋に来たのはセイバーとライダーが現れてから何ヶ月か経った後である。

魔術師と言う事で、親は幕府に殺され、そして松陽に拾われるまでずっと迫害を受けてきたので精神的にも肉体的にもボロボロで、死に掛けていた時に松陽に拾われた。

刀魔を魔術師の家系の子供だったと知っても普通に親しく接してくれる銀時やソラを含めた寺子屋の仲間達の事をとて大切に思っている。特に自分の命を救ってくれた松陽に対しては相当なまでに懐いていた。

だが、松陽を殺された事により高杉並の憎悪を抱いている。

ちなみに刀魔は『投影』を使う。しかも、刀魔自身の魔力と魔術師としての才能が半端なく、原作の士郎の使う投影よりも上である。

辰馬「なら、移動するしかないぜよ。ここから少し遠いが、全員が住めるほどの屋敷があるぜよ」

辰馬も何時ものヘラヘラした雰囲気はなく、真剣な顔で意見を言う。

辰馬の言つとおりすぐにでもここから立ち去るのが定石なのだが……

桂「だが、すぐに移動するのは無理だな。すぐに動ける怪我人もいるとは言え、それに対し重傷者も多い。移動するのは困難を極めるぞ」

と桂が辰馬の意見を否定する。

動けない重傷者を含めての移動となると、どうしても機動力が取られ遅くなってしまふ。

そうなれば天人達の良い餌だ。あまんと

ならどうすれば良いか全員が考えていると、ソラが言葉を発する。

ソラ「なら、少しずつ移動させるしかないな」

高杉「少しずつ?」

高杉が怪訝そうな顔をする。

ソラ「ああ。数十人で纏めたグループをいくつも作って一定時間を置いて辰馬言つた屋敷まで移動させる」

ソラの話聞いて桂が顎に手を当てながら関心する。

桂「なるほどな。団体で動くよりは安全だな。機動力もあまり落とさなくて済む」

辰馬「なら、最初移動させるのは重症人からにするぜよ」

他の者も納得して、移動は順に怪我の酷い者から移動させるなど決めていく。

だが、ここで高杉が否定的な意見を言う。

高杉「だが、その分時間はかなり食うな。そうなりゃああまんと天人共にまたここに攻め込む時間を与えちまうぜ」

高杉の言葉を聞いて銀時は目を細めながら意見を言う。

銀時「なら一つ聞くけどよお、他に良い方法思いつけんのか？」

高杉は銀時の言葉を聞いて目を細め後、舌打ちをして顔を背ける。  
そして桂が周りの皆を見回す。

桂「では、各々すぐに移動の準備をしてくれ。今夜にでも移動させるぞ」

高杉と銀時とソラ以外は頷きすぐに準備をするために部屋を出て行く。

そして、最後に桂と高杉と銀時が部屋から出て行く。

場所は屋敷の外。

そこではソラが夜空を見ながら散歩をしていた。

星空を見つめるソラの顔はなんとも言えない表情をしていた。

銀時「よお」

ソラが星空を見つめている時に銀時がやって来る。

銀時の声を聞いたソラは銀時に顔を向ける。

ソラ「銀時……」

銀時は歩きながらソラに近づく。

銀時「どうしたんだ、こんな夜中に」

ソラ「夜風に当たりに来た」

ソラはそう言っただけで星空を見る。

銀時もつられるように星空を見つめる。

ソラ「いつまで続くんだろうな」

銀時「ん？」

ソラの呟きを聞いて銀時がソラに顔を向ける。

ソラ「仲間は死んでいくばかりで、俺達は何を得たんだろうな」

銀時「なにも、得てねえだろ」

銀時の言葉を聞いてソラは目を瞑って俯く。

ただ仲間は死んでいき、自分達は多くの敵を殺していくだけ。  
得る物など何もない。ただ虚しさだけが積もっていく。それでも戦い続けていかなければならない。

ソラは顔を上げてそのまま屋敷に戻ろうとすると、

ソラ「ん？」

向こう方から一つの影が歩いて来るのが見えた。

しかも、その足取りはおぼつかない。そしてそのまま力なく倒れる。ソラと銀時はそれを見て、倒れた何者かに駆け寄る。

月明かりのお陰で姿が良く見えた。

ソラ「子供？」

銀時「しかも女だな」

その女の子は膝までときそうな程の長い金髪で、服は動きやすそうな黒いドレスのような服を着ていた。

だが、体も服もボロボロで、今にも死にそうな様子だった。

銀時「どうする？」

ソラ「とにかく屋敷に連れて帰って手当てしてやろう」

ソラは女の子を所謂お姫様抱っこで屋敷に連れて行った。

銀時はソラの後を追って行った。

ただ、ソラが助けた女の子は宇宙ではこう呼ばれている。『金色の闇』と……。

## 第九訓：例え戦争でも人の心は忘れるな（後書き）

黒龍「ついに『TO LOVE - とらぶる -』の『ヤミ』ちゃんの登場です」

ヤミ「やっと私の出番ですか」

黒龍「そして、ついに次回で攘夷戦争編は終わり、無印編に入ります！」

なのは「やっと私達の出番なの！」

フェイト「長かった……」

黒龍「では、次回の予告……」

ヤミ「次回、『仲間を守る時、人は更に強くなる』にテイクオフです」

黒龍「セリフ取られた!？」

第十訓：仲間を守る時、人は更に強くなる（前書き）

黒龍「今回で攘夷戦争編は終わりですね」

銀時「長かったよな、本編に入るまで」

ソラ「ある意味リリカル絡みの小説でここまでなのはやフェイト達を出さなかったのはこれが初めてじゃないか？」

黒龍「うっ！……ま、まあそこは否定しようがないですね……」

銀時「とにかく次回よろしく頼むぜ本編のほう」

黒龍「分かってます！」

ソラ「それじゃあ、『リリカル銀魂ライダー』始まるぞ」

## 第十訓：仲間を守る時、人は更に強くなる

ソラと銀時は金髪の女の子を屋敷に連れて行った後、チェーンに頼んで手当てをしてもらった。

そして、女の子を部屋に連れて行って布団に寝かせた後、ソラは女の子側に座って様子を見ていた。

自分が助けたのだから最後まで自分が面倒を見ると言う事だろう。

金髪の女の子は体の至る所に包帯を巻かれ、規則的な寝息を立てていた。

ソラ（俺も、案外お人良しかもな）

ソラは頬杖をつきながら金髪の女の子を見てそう思った。  
攘夷戦争で天人<sup>あまんと</sup>とは言え、大量の命を奪ってきた自分が人助け、なんとも可笑しな話だ、とソラは思った。

ソラ（しかし、あの格好にこの髪の色、異国の子供か？）

ソラは目の前で寝ている女の子の着ていた服装、髪の色から女の子が異国から来たのかと思ったが、ここで新たな疑問が浮かんた。

ソラ（なら、なんでこんな危ない戦場に？ しかもボロボロだった。やっぱ、ただの子供ってわけじゃないな）

ソラ「フッ」

ソラはまた厄介事を運び込んだかもしれないと思い自嘲気味に笑みをこぼす。

???「何を笑っているんですか？」

ソラ「!？」

ソラは声が聞こえて一瞬驚いた後、声のした方に視線を向ける。声の主はさっきまで眠っていた女の子だった。どうやら今日を覚まらしく、赤い瞳でジッとソラを見つめている。

ソラ「起きたのか」

女の子「ええ。ほんの十分前に」

ソラ「なら声を掛けてもいいだろ」

ソラの言葉を見捨てた女の子は体を起こす。

ソラ「おい、まだあんま動かない方がいいぞ」

女の子はソラの言葉を気にせず自分の体の至る所に巻かれている包帯を不思議そうに見る。

女の子「あなたがこれを？」

ソラ「いや、倒れていたお前を運んだのは俺だが、治療をしたのは俺の仲間だ」

女の子「そうですか」

女の子は少しの間俯いた後、再び顔を上げる。

女の子「どうして、私の助けたのですか？」

ソラは女の子の言葉を聞いてメンドクサそうに頭を掻く。

ソラ「別に助けるのに一々理由なんていらないだろ。俺が助けたかったから助けたそれだけだ」

女の子「やはり、私が聞いた印象とはかなり違うようですね」

女の子言葉を聞いてソラは怪訝そうな顔をする。

ソラ「聞いた？」

女の子「ええ。申し送れましたが、私は『金色の闇』と呼ばれる殺し屋です」

ソラ「！」

ソラは女の子言葉を聞いて目を見開いて驚く。

宇宙の事はあまり知らないが、ソラは前に風の噂で宇宙には『金色の闇』と言う宇宙でも指折りの殺し屋がいると言う事を聞いた事があるのである。

金色の闇「その様子だと、私の事を聞いた事があるようですね」

ソラ「まあ風の噂程度だけだな」

金色の闇「そうですか……」

金色の闇は目を瞑って俯く。

ソラ「一つ聞くが、なんで宇宙でも有名な殺し屋があんな瀕死の重傷を負っていた？ それに俺の事を聞いたとか言う言葉も——」

ソラは目を細めて金色の闇を見ながら次々に聞く。

金色の闇は目を開け、決心したような顔付きになる。

金色の闇「少し黙ってください。全て話すので……」

金色の闇の言葉を聞いてソラは言葉を止め、黙って話を聞く事にする。

金色の闇「始まりは私がある殺しの依頼を受けた事です——」

金色の闇は語り始める。今に至るまでに何があったのか。

戌威族いぬいぞくと言う天人あまんとに黑夜叉と言う侍の殺しの依頼が来た。

金色の闇は冷徹非道の極悪人しか殺さない主義なのを知っていた戌威族は言葉巧みに金色の闇に黑夜叉はただ人を殺す事に喜びを見出す極悪非道な奴だと思い込ませ、殺させようとした。

金色の闇は依頼を受けた後、黑夜叉の情報を集めるために地球に降り立ち、黑夜叉の情報を集めようと色々聞き込みをした。

そして聞き込みをしていくうちに、戌威族達いぬいぞくと聞いた話とは食い違う情報ばかりが集まり、本当に戌威族達いぬいぞくから聞いた黑夜叉の情報が本当かどうか疑い始た。

金色の闇は戌威族達いぬいぞくの情報が本当に正しいものなのか問いただしに戌威族達の船に行った。

情報の間違いを問いただしている時に突然戌威族達や他の天人達に攻撃を受け、そして重症を負いながらもなんとか地球まで逃げ延びた。

殺されそうになった時、戌威族達や他の天人達が冥土の土産に教えてくれた。

金色の闇を危険だと判断した戌威族やその同盟星の天人達は金色の闇を抹殺する計画を立てた。

真つ向から戦っても倒すのが困難な金色の闇を殺すためにまず、黑夜叉を殺す依頼をする。

鬼神の如き強さを持つ黑夜叉と、宇宙でも指折りの殺し屋である金色の闇をぶつければ恐らくどちらもただでは済まない。上手くいけば厄介な二人を同時に殺す事ができる。まさしく一石二鳥だと考えた戌威族達は早速作戦を決行した。

だが、予想外な事に金色の闇が戌威族達の嘘に気づいた。だから戌威族達は早急に他の同盟星の天人達を呼び、金色の闇を殺そうとしたわけである。

さすがの金色の闇も、いきなりの奇襲と初めに負わされた深手により地球に逃げ延びるのがやっとだったそうだ。

そして傷ついた体をなんとか引きずりながらソラ達に出会ったと言うわけである。

ソラ「なるほどな。でもよ、何でわざわざそれを俺に言う？ 説明しない方がお前にとっては得なはずだろ？」

ソラの言うとおり理由を教えるのはおかしい。殺す相手に言ったらところで逆に自分が殺されると言う可能性を作るだけだ。だったら

黙って匿ってもらった方が良い筈だ。

それに嘘を教えて、ターゲットである自分が油断した所を殺す。そうすれば依頼を達成した事になり、いぬいぞく戍威族達に言えばもしかしたら見逃してもらえるかもしれない。

わざわざ正直に自分の正体をバラしても何の得もないと言うのに正体をバラした金色の闇の真意が分からないソラは問い掛けたのだ。

ソラの質問を聞いた後、金色の闇は俯く。

金色の闇「私はあなたに命を助けられました。ターゲットであるとは言え、恩を仇で返すような事をする気はありません」

ソラ「殺し屋なのに律儀だな」

金色の闇「ですから、煮るなり焼くなりしても私は文句は言いません。あなたはどうしますか？」

金色の闇はそう言った後、ソラの顔を見る。

ソラはため息をついて頭を掻きながら答える。

ソラ「別にどうもしねえよ」

金色の闇「えっ？」

ソラの答えに金色の闇は一瞬目を見開いて驚く。

金色の闇「何故ですか？ あなたにとって、私をここに置いておく事はデメリットしかないんですよ？ なのに何故……？ それに私は……—」

ソラ「俺を殺す依頼を受けた殺し屋だろ」

金色の闇は頷く。

ソラ「別にお前が殺し屋だからってどうこうする気は俺にはねえよ」

金色の闇「ですが私はあなたを……」

金色の闇の言葉を遮ってソラが言葉を発する。

ソラ「お前が受けた依頼だってクソ<sup>あまんと</sup>天人の嘘の依頼だろ？ だった  
らお前を危険視する理由がねえだろ」

金色の闇「……良いんですか？」

金色の闇の言葉を聞いてソラが片眉を上げる。

ソラ「何がだ？」

金色の闇「私をこのままここに置いておいて……」

ソラは頭を掻きながら立ち上がる。

ソラ「厄介事の一つや二つ来ようが問題ねえよ。お前は助けられた  
んだから黙って助けられる。俺の労力を無駄にするな」

ソラはそう言った後、金色の闇の頭をポンポンと軽く叩く。

ソラ「まあ怪我が治った後はお前の好きにしろ。ま、俺を狙うって  
ならそれ相応対応はさせてもらっけどな」

ソラはそう言って部屋を出て行こうとする時、顔だけ向ける。

ソラ「ああ、それとお前名前あるか？」

金色の闇は首を横に振る。

ソラ「じゃあヤミって呼んで良いか？　一々金色の闇金色の闇言っ  
のはメンドーだからな」

ヤミ「えっ？……………え、ええ。良いですよ／＼／＼／」

ヤミは少し呆然とした後、顔を赤くさせる。

ソラは「ゆつくり休めよ」と言って戸を閉めて歩いて行った。

ヤミはソラが出て行った後、自分の胸に手をあてて顔を赤くさせながら俯く。

ヤミ（……………なんでしょう？　この暖かい感じは？　それに……………胸の  
奥が少し苦しいような……………）

ヤミは今まで感じた事のない感情に戸惑う。

それに自分に対してのソラの態度も今までに経験した事がなかった  
ので、それにも戸惑っていた。

今まで一人で宇宙を過ごしてきた。頼る人も信頼できる人もおらず、  
たった一人で殺し屋と言う仕事をこなしていき命のやり取りをいつ  
もしてきた。

殺し屋である自分がこの広い宇宙を生き残るためには心を閉ざし強  
く生きていかなければならなかった。

それに『金色の闇』と言う異名まで持っている自分には今の今まで優しく接してくれる人も親しくしてくる人もおらず、相手に恐怖されるか、命を狙われるかのどちらかだった。

だからソラが自分に対して取る態度は新鮮で、同時にどこか暖かいモノを感じた。

ヤミは今自分が感じている感情が何なのか分からなかったが、嫌なものではないと感じていた。

ヤミ（この暖かいモノはなんだか分かりませんが……悪い気はしませんがね）

ヤミはいつも無表情なのでパツと見は分らないが、普段は滅多に作る事ない笑みを浮かべていた。

ソラはヤミのいる部屋を出た後、縁側を歩いてみると、屋敷の外から話し声が聞こえてきた。

ソラ「なんだ？」

ソラは足を止め外の方を見つめる。  
声の大きさからして口論になっている事が分かったので、気になったソラは屋敷の外に出て行った。

銀時「だから金色の闇なんて奴いねえって言ってるんだろ！」

天人「隠して無駄だ！ここに金色の闇がいるのは分かっているんだ！正直に言えば貴様等猿共を見逃してやるって言ってるんだワ  
ン！！！」

銀時が天人あまんとの戌威族いぬいぞくの一人と口論をしていた。銀時の後ろには桂や高杉やアリスや他の侍達が戌威族達いぬいぞくを殺気の籠った目線で睨み付けながら立っている。  
口論している銀時以上に後ろの桂達は今にも戌威族達いぬいぞくに斬りかかりそうほどである。

戌威族一人の後ろにいる戌威族の部隊の者達も今にも斬りかかりそうなほど殺気立っている。

まさしく一触即発状態だった。

銀時「だーかーらー何度も言わせんじゃねえ！金色の闇だか常夜の闇とか言う奴はいねえって言ってるんだろ！！いい加減にしねえとぶった切るぞテメー！」

天人「やはり猿は猿だな！我々のような高尚な者達の言葉など分かるわけがなかったな！」

高杉「どけ銀時。もうそんな奴らの言葉なんか聞く必要はねえ。俺が残らずぶった切ってる」

天人あまんとの言葉に怒りを感じた高杉が刀の鞘に手を掛け刀を抜こうとし

ながら歩き出す。

刀に手を掛けた高杉を見て戌威族達の部隊も武器を構えた。  
その時桂が高杉の肩を掴んで止める。

桂「よせ高杉。俺達は昨日の戦ったばかりだぞ。これ以上被害を拡大させないために仕方なく奴らの話を聞いているんだろ」

桂の言葉を聞いて高杉は舌打ちをして下がる。

高杉が下がったのを見て戌威族達も武器を下げる。

ソラ「どうしたんだ一体？」

その時ソラが走って銀時の元にやって来た。

銀時「ソラ……」

ソラの登場に全員の視線が一斉にソラに注がれる。

銀時はソラに今の状況になった事情を説明した。

いきなりやって来た戌威族達に気づいた銀時達は武器を取って応戦しようとしたが、戌威族達が「ここに金色の闇がいるはずだ！おとなしく差し出せば命は助けてやる！！」、と銀時達にとっては分けの分らない事を言ってきた。

状況確認と昨日の戦いで疲労しているので、嫌々戌威族達の話聞く事にした。

だが、話を聞いても金色の闇を渡せの一点張りでまったく話し合いにならず、今のような口論（と言うか最初から）になってしまった。

ソラは銀時の話を聞き終えて右手で頭を抱える。

ソラは今の状況をすぐに理解した。

間違いなく目の前の戌威族は金色の闇であるヤミの事を探しに来てここに辿り着いた。

ただ自分以外誰もヤミが『金色の闇』である事など知らないの銀時達が知らないの一点張りなるのも頷ける。

だが向こうとて確かな情報でここを突き止めたのだから引き下がらなかったのだろう。

これなら口論になるのも仕方ない。

ソラは状況整理ができた所で、どうやってこの状況を切り抜けようか考えた。

もし今銀時達にヤミの事を話せば間違いなくヤミは向こうに引き渡されるのは目に見えている。

高杉達が天人であるヤミを庇う理由などほとんどないに等しいからだ。

とは言え、このまま銀時達にもヤミの事を話さないでしばらくだけでも業を煮やした天人達が攻撃してくるのは目に見えている。昨日戦って疲労が蓄積されている今の自分達では追い返しても更に被害が拡大するのは分かりきっている。

ソラ（さて、この状況をどう打破するか……）

ソラは思考をフル回転させて解決の糸口を探っていると、後ろにいる仲間達の異変に気づく。

ソラ「ん？」

後ろで戸惑いの声を漏らしている仲間達が気になり後ろを振り向くと、仲間達が動揺しながらどいていきできた道から誰かがやって来

るのが見えた。

ソラ「ヤミ……」

そう、包帯を至る所に巻き、和服姿のヤミが仲間達の開けた道を進みながらやって来たのである。

ヤミはソラに顔を向けた後、ソラの前に出て目の前の<sup>いぬいぞく</sup>戌威族の天人が声を上げる。

天人「き、貴様は……金色の闇!!」

その言葉を聞いて天人達<sup>あまんと</sup>だけでなく、銀時を含めた侍達にも動揺が走る。

銀時「マジかよ!? このガキが宇宙でも有名な殺し屋!？」

桂「信じられん!？」

銀時と桂は驚きのあまり声を上げ、高杉は声は上げていないものの内心では多少驚いている。

ソラ「お前どうして……?」

ソラは何故わざわざヤミが出てきたのか分からなかった。

明らかに目の前の<sup>いぬいぞく</sup>戌威族達を見れば自分を殺しに来たと言うはずに分かる。

これではまるでワザト自分から殺されに来たようなものだ。いや、実際そうなのだ。

ヤミはソラに顔を向ける。

ヤミ「受けた恩は返す主義なので」

ソラ「っ！」

ソラは今の言葉ですぐに理解した。

ヤミはワザト連中に捕まることで自分達を助けようとしているのだと。

元々<sup>いぬいぞく</sup>戌威族達がここに来た目的はヤミを見つけ出し殺す事。だから自分がここで大人しく<sup>いぬいぞく</sup>戌威族達に捕まれば収集がつくのだと判断したヤミがソラを助けるために身売りまがいのような真似をしたのである。

ヤミは無表情の顔を目の前の<sup>あまんと</sup>天人に向ける。

ヤミ「あなた達は私に用があるはずです」

<sup>あまんと</sup>天人は鋭い目で銀時達を睨む。

天人「なるほど、やはりお前達が金色の闇を匿っていたのだな」

ヤミ「彼らは関係ありません。私が誰かも分らず私の傷を治療しただけです」

ヤミの言葉を聞いて<sup>あまんと</sup>天人は目を細める。

天人「金色の闇ともあろう者が他人、しかも地球人を庇うとはどう言う風の吹き回しだ？」

<sup>あまんと</sup>天人は宇宙でも指折りの殺し屋である金色の闇が他人のためにここまで庇い通すのはおかしいと思いこれは何かの罠ではないか？、と

疑い始める。

だがヤミはすぐに天人あまんとの言葉を否定する。

ヤミ「恩がある相手を巻き込むは目覚めが悪いだけの話です」

ヤミの言葉を聞いて天人あまんとは「まあ貴様を捕らえられさえすれば猿共などどうでもいいがな」と吐き捨てるように言って、後ろにいる部下達に目配せで命令してヤミを連れて行かせようとする。

ソラの隣にいる銀時は聞く。

銀時「いいのか？ このままあいつを連れて行かせて」

銀時の質問を聞いてソラは「フッ」っと鼻で笑う。

ソラ「俺がどうするか位分かっているだろ？」

銀時「へっ、上等だ」

銀時も薄く笑みを浮かべる。

二人の天人あまんとがヤミに手を触れようとした時、その手を銀時とソラが掴む。

天人二人

『『！！！？？』』

天人あまんとの二人はいきなり腕を掴まれた事に驚く。

ソラ「おいおい、人を無視して」

銀時「勝手に話進めんなよ」

ソラと銀時はそう言つて天人あまんとの顔面を思いつきり殴る。  
二人の天人あまんとは呻き声を上げて吹っ飛ぶ。

天人「き、貴様等！！ 一体何のマネだ！！」

殴り飛ばされた部下二人を見た天人あまんとは怒声を上げる。

ヤミ「あなた達、どうして……！？」

ヤミもソラと銀時の行動に驚いている。

このまま自分が連れて行かれれば事なきを得て済むのに何故わざわざ相手と戦いを選ぶようなマネをしたのか分からなかった。

ソラ「ガキに助けてもらったんじゃ侍の名折れだ。それにそのクソ犬共は氣に入らない」

銀時「そもそも俺達クソ天人あまんと共の言う事を聞く気なんざサラサラねえからな」

ソラ「そつだろツラ？」

ソラは微笑を浮かべて後ろにいる桂に顔を向ける。

桂「ツラじゃない桂だ。まったくお前達は……」

これではさつき嫌々ながらも天人あまんと達の話を聞いた意味がないと思い、頭を抑える。

桂「だが、ソラの言うとおり子供に助けられたとあつては侍の名折れだな。仕方ない。事ここまで及んでしまったからな」

桂はそう言つて鞘から刀を抜く。

高杉「あまんと天人のガキ助けんのは氣に入らねえが、あまんと天人共の思い通りになんのはもっと氣に入らねえからな」

アリス「それに被害を出さないように瞬殺すればいいだけの話だしな」

高杉もアリスも鞘から刀を抜き構える。  
それ皮切りに後ろにいる侍達も刀を抜く。

天人「くっ！　やはり猿は猿か！！　行けー！！　奴らを皆殺しにしるー！！！！」

あまんと天人の叫び声を皮切りに後ろにいたあまんと天人達が武器を構えて突撃する。

桂「行くぞー！！！！」

桂の声を皮切りに他の侍達も突撃する。

ヤミはすぐさま動いたソラにより脇に抱えられ安全な場所まで運ばれた。

そしてヤミを抱えて安全な場所まで来たソラはすぐさまヤミを下ろし戦闘に参加しようと向かおうとするとヤミがソラに言葉を投げかける。

ヤミ「なんで私の為にそこまで……」

ヤミの言葉を聞いてソラは足を止めて、体をヤミに向ける。

ソラ「さっき言っただけだ。連中の思い通りになるのが気に入らないだけだ」

ヤミ「ですが、それだけの理由で……それに私はあなた達の敵である天人あまんとなのですよ？」

ヤミの言葉を聞いてソラはメンドくさそうに頭を掻く。

ソラ「別にお前が天人あまんとだからって助けんのは関係ねえよ。俺は天人あまんと殺すために戦ってるわけじゃねえからな」

ソラはそう言って戦闘に戻ろうとする。

ヤミ「……じゃあ、あなたは何のために戦っているんですか？」

ヤミの言葉を聞いてソラは足を止める。  
そして顔を少しだけヤミのいる後ろの方に向ける。

ソラ「背負うモンのためだ」

ソラはそう言って戦場に向かった。

ヤミ「背負うモノ……」

ヤミはソラの言った事を呟いて、ソラの背中を見つめていた。

戌威族達の戦いは思ったよりも被害を出せずに済んだ。  
ヤミは仲間として自分達行動を共にする事を決めたが、高杉や刀魔あたりはあまり納得してはいなかった。

そして今現在、辰馬が前に言った屋敷に移動を開始している。

時間は掛かるがそれなりに移動は上手くいっていた。

そして、屋敷の裏門には最後に移動するグループと共に桂、銀時、高杉、辰馬、ソラ、アリス、アリア、リリス、ライホース、セイバー、ライダー、ヤミ、刀魔が移動しようとしていた。

桂「よし、これで最後だな」

桂はグループのメンバーを見ながら誰も抜けていないを確認する。

ソラ「ヤミの時以外天人共が攻め込んでこなかったのは不幸中の幸いだな」

銀時「そうだな。とりあえず早く屋敷に行こうぜ」

桂「そうだな。よし！ 出発だ！」

桂の声を聞き他のメンバーも頷いて屋敷に向かおうとすると、一人侍が慌てた様子で桂達の下にやって来る。

侍「大変です桂さん！！ 天人の部隊がすぐそこまで来ています！！」

桂「なんだと!？」

桂は驚き、他の者達にも動揺が走っている。  
だが驚いたの一瞬だけ。天人達あまんとが攻め込んでくるのは前から予想している。

だからこそ屋敷の門前には2、3人の見張りを置いておいたである。

辰馬「まさかここで来るとはタイミングがよすぎはせんか!？」

桂「とにかくすぐに移動を始め……」

ドカーン!!

全員

『!?!?』

全員が突然の爆音に驚き後ろの屋敷を見ると、屋敷の中は土煙が上がりそこから何人も天人達あまんとが次から次々と現れ始め桂達囲み始めた。ソラや銀時達や他の侍達は刀を構えながら一箇所に固まる。  
ちなみに後ろの退路は塞がれないように配慮している。

桂は不思議に思った。天人達あまんとのこの無駄のない動きはあらかじめ自分達がここにいる事を分かっているかのような動きだった。

桂（まさか……!?!）

桂は一つの可能性を予想する。  
そしてその可能性に気づいたのは桂だけではない。ソラや銀時や高杉やアリスやライダーやセイバーやヤミやアリアやライホースも気づいていた。。

銀時「どうやら、俺達の作戦は連中にはバレちゃまっているみてえだな」

銀時は相棒である『シルバー』を構えてを回りの天人達を睨みつける。  
あまんと

ソラ「だろうな。今日まで全然攻め込んでこなおかしいと思ったが……連中、俺達の仲間がほとんどいなくなつて、一番厄介だと判断した俺達が孤立するのを待っていたんだろうな」

高杉「なるほどな。連中にとつちや、俺達は相当厄介だつて事だな」

こんな状況だと言うのに、高杉は自分達が天人にとって厄介な存在だと認識されたのが嬉しいのか愉快そうに笑みを浮かべる。

アリス「まあ天人に高く見られても嬉しくはないな」  
あまんと

アリスは嫌そうな顔で刀を構える。

ソラの後ろで刀を構えていた刀魔がソラに問い掛ける。

刀魔「どうする？」

ソラ「逃げるしかないだろ」

刀魔「何！？」

ソラの言葉に刀魔驚きの表情をし、ソラが更に言葉を続ける。

ソラ「退路は確保してあるだろ？ だからすぐに逃げろ」

ソラの言葉を聞いたワニのような天人あまんとが刀を抜きながら叫ぶ。

天人「させるかああああ！！！」

天人「残らず全員刈り取れええええええ！！！」

三人の天人あまんとが銀時達に向かって武器を構えながら突っ込んでくる。

それを見た銀時が『シルバー』をソラが『チェーン』で突っ込んできた天人あまんとを斬り殺す。

ただしソラの『チェーン』は二本のキープレードに変化しており、一本は光を表したかのような白いキープレード。もう一本は闇を表したかのような黒いキープレードになっていた。（イメージは『約束のお守り』と『過去りし思い出』である）

ソラ「退路は俺達を守る」

銀時「行け」

ソラと銀時は背中合わせに前を見ながらシルバーとチェーンを構える。

リリス「で、ですが！」

銀時とソラだけを残して先に逃げる事などできないと思ったリリスが二人に声を掛けようとするが、すぐにセイバーがリリス脇に抱える。

リリス「せ、セイバーさん！？ 離してください！！！」

セイバー「今は二人を信じましょう」

自分を脇に抱えて裏口から出て行くセイバーに講義するが、セイバーの言葉を聞いて押し黙る。

セイバーに桂達も次々に出口から出て行く。

桂を含め、アリスもアリアもライダーもセイバーもヤミも辰馬も高杉も刀魔達も二人を見捨てる考えも、二人を犠牲にしようなどと言う考えもない。まして二人が己の身を犠牲に自分達を逃してくれたのだとも思っていない。

ただ自分達が逃げる為の時間を稼ぎ、そして天人達を倒して追いついて来ると信じている。

二人の死ぬ事などと言う可能性は考えていない。だからこそ二人が天人達を足止めしている間に逃げると言う考えが桂達の頭にすぐ浮かんだのである。

そしてアリス、アリア、セイバー、ライダー、ヤミ、桂、辰馬、刀魔、高杉は二人が追いついて来ると信じながら走って行った。

天人「行けー！ー！！！！ あのだ二人の首を取れー！ー！！！！」

リーダーらしき天人の声を皮切りに周りの天人達は一斉ソラと銀時に攻撃してくる。

銀時とソラは凄まじい剣捌きで天人達を切り倒していく。

二人の神速のように早く、豪の如く凄まじい剣撃は次々と天人達を斬り殺していく。

ソラは自分の顔に向かってくる槍を持った天人あまんとの突きを寸前でかわし、天人あまんとを切り裂き、武器を持って攻撃してくる天人あまんとを斬っていく。銀時は敵の持っている薙刀を奪い『シルバー』と合わせて巧みに使い敵を倒していく。

背中の合わせに戦う銀時とソラにはまったくのスキはなく、次々に天人達あまんとがやられていく。

虫のような小柄な三人の天人あまんとが一斉飛び上がり敵を切り裂いているソラを攻撃しようとする、虫天人あまんとの一人の顔に飛び上がった銀時の蹴りが炸裂し、もう一人の後頭部には銀時の持っていた薙刀が刺さり、そして最後の一人は空中で銀時に切り裂かれる。

そして地上に降り立った銀時がソラと共に天人あまんとを斬り殺す。

二人は同時に後ろを振り向き、互いの後ろにいた天人あまんとを斬り裂く。

天人「ひ、怯むなー！！！！ 押せー！！！！ 畳み掛けるー！！！！」

天人あまんとの叫びも虚しくソラと銀時は天人あまんとを斬り殺していく。

まさしくその姿は強いと言う他なかった。これこそあの黑夜叉と白夜叉の力だと言えよう。

天人「ぬおー！！」

大柄な天人あまんとが金棒を振り上げソラを後ろから殴ろうとするが、後ろを振り向いたソラが神速速さで動き大柄な天人あまんとの両足を切り裂く。両足を切り裂かれ金棒を落としたが膝を突いて崩れ落ちる天人あまんとの目には刀を振り上げ自分を斬ろうとするソラの姿があった。

大柄な天人<sup>あまんと</sup>を斬り殺したソラが珍しく声を上げて銀時に声を掛ける。

ソラ「銀時！」

銀時「あん！？」

銀時は敵を斬りながら答える。

ソラは敵を斬りながら質問する。

ソラ「お前この戦争が終わったら何がしたい！ 前に決まっ たとか  
言っ てた だろ！」

銀時「いきなりなんだこんな時に！！」

ソラは敵の刀を黒いチェーンで防ぎながら聞く。

ソラ「唐突に思いついたんだ！」

ソラは敵の刀を押し のけそのまま白いチェーンで切り裂く。

銀時「たく……何でも屋だ！」

銀時は敵を切り裂いていきながら答える。

ソラ「なるほどな！ 色んな仕事できる何でも屋か！ お前らしい  
な！ なら、この戦争が終わったら俺にもやらせる！ 面白そうだ  
！」

ソラは薄く笑みを浮かべながら敵を斬る。

銀時「ならテメーは俺の部下だな！」

ソラ「斬りたいのかお前は！」

部隊長である天人が空中に飛び上がりながら銀時に短刀を投げている。  
く。

銀時は敵を斬っている時に飛んできた短刀を敵を盾にして防ぎ、走りながら飛んでくる短刀を避ける。

短刀の幾つかは銀時を斬ろうとする敵に当たる。

短刀を投げていた天人は地上に降りた後、両手に短刀を構えて銀時を斬ろうとするが、銀時は『シルバー』を巧みに操り攻撃を防ぐ。

キーン！ガキーン！！

キーブレードと短刀のぶつかる音が鳴り響く。

銀時は敵の両手を下から足で蹴り上げ、敵は両手に持っていた短刀を離してしまい短刀は宙を舞う。

天人「――なあ……」

部隊長の天人は口を開けて啞然とし、銀時はそのまま部隊長である天人を切り裂いた。部隊長である天人が倒れたと同時に短刀が地に落ちた。

動かずに武器を構えて戦いの様子を伺っている天人達は啞然とした。たった二人次々に仲間はやらていき、一番の実力を持つ部隊長でさえ倒されてしまい、天人達は二人の夜叉に気圧され汗を流す。だが、すぐに我に返り武器を構える。

ソラ「銀時！」

銀時「あん！」

二人は一旦攻撃を止め、背中合わせになりながら『シルバー』と『チエーン』を構えている。

さすがに相手が精鋭な上に数が多いので、少々二人の息遣いは荒く、方で息をしていた。

ソラ「何でも屋やる前に死ぬなよ。お前がいなきゃつまらそうだからな」

銀時「ソラア、テメーこそ、先に死ぬんじゃないぞ。お前がいねえと、つまらねえのは、こっちも同じだ」

そして二人は同時に言葉を発する。

ソラ・銀時

『ぜってえ生きろ』

そう言った後二人は裏口に向けて走り出し、ソラはベルト出し一瞬でクウガドラゴンフォーム（これからはクウガDFと記述）になる。クウガDFはクウガMFと違いプロテクターのような鎧が少なく、なり機動性に優れ、色が赤から青に変わっている。

クウガDFは銀時を脇に抱え、とんでもない跳躍力で高く飛び上がる。

そして計算されているかのように金色の鎧を纏ったクワガタのようなモノ、『ゴウラム』が飛んでくる。

クウガDFは飛んで来た『ゴウラム』の足に掴まる。

そしてゴウラムは天人達あまんとのいた所から離れるように飛んでいく。

天人「に、逃すなああああああ！！！！」

天人「追ええええええええええ！！！！」

あまんと天人達は必死に空を飛んで行く『ゴウラム』を追って行くが、距離はどんどん離されて行く。

銀時「用意周到だなテーマは。やがみライト夜神月か」

銀時はクウガDFの脇から開放され、今はゴウラムの足に掴まっている。

銀時の言葉に変身を解いて人間の姿になったソラはツッコム。

ソラ「誰がやがみライト夜神月だ。デスノートは面白いけどな」

ソラはそう言いながらゴウラムを見る。

ソラ「ご苦労だったなゴウラム」

ゴウラムは「いえいえ」と言うように目を光らせる。  
そして銀時に顔を向ける。

ソラ「連中引き付けながら遠回りして連中を巻くぞ」

ソラの算段はこのまま自分達にあまんと天人達の注意を向け、桂達が無事に屋敷に着くようにする事だった。

銀時「あいよ」

銀時は無難に返事をする。

ソラは青空を見上げながら銀時に声を掛ける。

ソラ「なあ」

銀時「なんだ？」

銀時の顔はソラに向いておらず、どこか遠くの方を見つめていた。

ソラ「何でも屋の名前とか考えてあるか？」

銀時「そうだな、ならこんなのはどうか——」

銀時はソラに顔を向けて笑みを浮かべる。

まだ彼らの戦いは続くが、一先ずはここで終わり。  
ただこれだけは言っておこう……。

攘夷戦争から時間が経ち、天人達あまんとが攘夷戦争で勝った。  
江戸が『侍の国』と呼ばれたのは今は昔の話になった。

かつて侍達が肩で風を切り歩いた町には今は異人がふんぞり歩いている。

侍達は弱体化の一途を辿った。

そしてそんな江戸の町の一つの定食屋。

そこには志村新八しむらしんぱちと言う青年が働いていた。

彼も剣術を習う侍の端くれなのだが、天人あまんとが台頭による今の江戸で

はそんなのは意味をなさなかった。

そして、新八は店長には剣術の練習ばかりしていてレジがまともに打てない事で殴られ、客である虎のような天人あまんとには足を引っ掛けられ転ばされる。

しかもそれは虎の天人あまんとが頼んだ牛乳を持って行こうとした新八を虎の天人あまんとが足を引っ掛けて転ばせた事なのに、何故か店長に怒られるのは新八だった。

ちなみに転んだ時に、別の席にいた銀髪の客と黒髪の客のパフェをこぼしてしまう。

最早誇りも何も侍は捨て去った。そんな侍と人間しかない国に・・

新八は店長を髪を引っ張り上げられ、無理やり謝られさせられる。

店長「オラツ！ おめーが謝んだよ！！」

頭の前髪がハゲていて、出っ歯の店長に髪を引っ張られ新八は苦悶の表情を浮かべる。

「？？」

「『おい』」

死んだ魚のような目で銀髪に白い衣を半分脱いでいる侍と、某ソルジャー1stのような空色の瞳をして黒髪にマトリックスのネロのような全身真っ黒の服とコートを着た侍が店長に近づいて声を掛けた。

店長「？」

店長は不思議そうな顔で二人の侍を見る。

ドカツ！！×2

店長「ガフツ！！」

二人の侍は同時に店長の顔を思いつきりぶん殴る。

新八はその光景に驚く。

店長は吹っ飛んで血を吐きながら虎の天人あまんとのいた席にぶつかる。

天人「わっ！？」

虎の天人あまんとは驚いて立ち上がり、声を荒げて叫ぶ。

天人「なっなんだあ！！！？」

天人「何事だア！！」

二人の侍は腰に挿してある木刀を引き抜く。

銀髪の侍の木刀の柄の部分には『洞爺湖』と彫られており、黒髪の侍の木刀は黒く柄に『空我』と彫られていた。

新八（木刀！？ 侍！？）

新八は二人の侍の木刀を見て驚いていた。  
それは天人あまんと達も同じだった。

天人「な、なんだ貴様等ア！！」

天人「廃刀令の御時世に木刀なんかぶら下げおって!!」

あまんと天人達の叫びも気にせず二人の侍は自分のペースで言う。

黒髪の侍「ギャーギャーギャーギャー」

銀髪の侍「うるさいんだよ。発情期ですかコノヤロー」

二人の侍は中身の零れたチョコレートパフェのグラスを見せ付けるよう持ちながら言う。

黒髪の侍「見るよコレ……前らが騒ぐもんだから」

銀髪の侍「俺らのチョコレートパフェが、お前コレ……」

銀髪の侍は一旦言葉を止めて目を瞑り、カッと見開いて声を上げながら、

銀髪の侍「丸々こぼれちゃったじゃねーかア!!!」

天人の頭を木刀でぶん殴る。

天人はそのまま白目を剥いて倒れる。

あまんと他の天人達はその光景に啞然とした後、声を荒げながら怒鳴る。

天人「……きつ……貴様等ア!!! 何をするかアアアアア!!!」

天人「我々を誰だと思って……」

怒鳴り声を上げる<sup>あまんと</sup>天人達の声を無視して黒髪の侍がとんでもない速

さで動き、木刀を振り下げていた頃には二人の天人あまんとの後ろにいた。  
そして二人の天人あまんとは力なく倒れてしまう。  
黒髪の侍は木刀を肩に担ぐ。

黒髪の侍「知らねえよお前ら誰かなんて。こっちは糖分とれなくて  
イライラしてんだ」

新八はその光景に啞然としてしまった。  
そして二人の侍を見てこう思った。

——そいつらは侍と言うにはあまりにも荒々しく……しかし、チン  
ピラと言うにはあまりに……

二人の侍は倒れている天人達あまんとを尻目に店を出て行こうとする。  
そしてのれんをどかしながら後ろ振り向いて新八に言う。

黒髪の侍「店長に言っておけ」

銀髪の侍「味は良かったぜ」

——真っ直ぐな目をした男達だった……。

かつて夜叉とまで呼ばれた二人の侍——『坂田銀時』と『天道ソラ』  
は自分の魂ルールに従って生きていると……。

第十訓：仲間を守る時、人は更に強くなる（後書き）

銀時「これでやっと終わりだな」

ソラ「長かったな」

黒龍「これでキャラ設定書いてやっと本編に行ける！」

銀時「あ、そう言えばそれもあつたな」

ソラ「まあキャラ設定の方それほど時間は取らないからいいんじゃないか？」

銀時「それもそうだな」

黒龍「でも、明日から中間テスト一週間前だから投稿遅くなる……」

銀時「テストの点数悪くてパソコン使わしてもらえないよりマシだろ」

黒龍「そうですね！ 頑張ります！」

ソラ「そんじゃ次回はキャラプロフィールだ。よろしくな」

銀時「なのはとフェイト出番は何時になるんだろうな」

黒龍「それ言わないで……！」

## キャラプロフィール（前書き）

今回は前回言ったとおりキャラプロフィールです。

## キャラプロフィール

天道ソラ

歳：大体23歳位

容姿：黒髪に某ソルジャー1stのような空色の瞳を持ち、ぶつちやけて言うならかなりイケメン。

イメージは『しゅごキャラ』の『月詠 幾斗<sup>つきよみ いくと</sup>』を→のようにした感じ。

服は『マトリックス』の『ネロ』のような黒い長ズボンに黒い半袖のシャツの上に黒いコートを着ていると言っ、黒一色だ。

普段から腰に黒い木刀で、柄に『空我』と彫られた木刀を挿している。

とにかく女性モテるフラグ体質で、性格は結構銀時に似てる節がある。

声は滅多な事では荒げず、銀時からはクールキャラの代名詞と言われるほどである。

表情はあまり変えず無愛想な所はあるが、たまに見せる笑顔は女性にとっては反則級。

酒はたぶん銀魂キャラと比べればかなり強い方である。

人の扱い方が上手い。

メンドくさがり屋な所があり、メンドー事にはあまり首をツツコマナイトイプである。

ジャンプと甘い物に関しては銀時並の愛情を注いでおり銀時と並び立つ『糖分王』と言われるほど。

時折旅に出てエリオ探している事があるが、この世界にはエリオはいないと薄々感じ始めている。

銀時と同じように自分の武士道<sup>ルル</sup>に従って生きている。

戦い方は銀時と同じように我流で、流れる雲のような掴みどころのない剣術を扱う。

キープレードである『チェーン』を所持している。

『仮面ライダークウガ』の力の源でもあるアダマムのベルトの適合者である。

研究所で大量の遺伝子と掛け合わされて作られて存在なので、親と呼べる存在はいないと言っても過言ではない。

今の所クウガの力は『タイタン』、『ペガサス』、『ドラゴン』と全種類使え、更にはリリスとユニゾンする事で『ライジング』にもなれる。

ユニゾンしなくても『ライジング』にはなれるが、30秒〜1分くらいしか耐えない。

ここだけの話、ソラの持っているクウガの力は本人次第では原作のクウガの力を軽く凌ぐほどである。

アリス

歳：大体20歳くらい

容姿：緑髪の長髪で、かなり美人。

イメージは『コードギアス』の『C.C.』を更に綺麗にした感じで、

胸はGとHでグラビアアイドルを嫉妬させるほど大きく、そしてかなり美貌の持ち主。

服装は『コードギアスR2』の『C・C』の上着の裾の部分に付いている絹を取り、黒い長ズボンを着ている感じだ。  
腰にいつも木刀挿している。

沖田同様ドSな所があり、頭が良く人を策に嵌めるのが上手い。  
だが相手が本気で嫌がる事はせず、相手をからかうレベルのやつが多い。

優しい一面もあり、笑顔は女性でも魅了するほどの反則技。

男勝りな言葉遣いを使うので銀時からは百合だと言われる事がある。  
だが、ソラを溺愛しており、ソラになら何をされてもいいとまで豪語するほど。（簡単に言えば、ソラ至上主義）

いや、むしろソラの貞操狙っているほど。

ただ、彼女が何を考えているかは誰にも予想できないほど計算高い  
と言うか、とんでも策士と言っている。

好きな食べ物ケーキやハンバーグやピザで、とにかく好物なのである。

研究所にいたせいもあり、敵は容赦なく殺すなど危ない一面もある。  
ソラの言う事ならなんでも聞く事もあり、とりあえず攘夷戦争が終  
わってから人は殺していない。

剣の腕は相当なもので、ソラや銀時に匹敵するほど。

魔力変換資質で『風』を操る。

SSSを軽く超えるほどの魔力量を保持している。

デバイスなしで魔法が使えるのはあらゆる遺伝子を結合されて作られた存在である事と、研究所で行われた実験のためである。

そして何より彼女自身の脳のスペックが信じられないほど大きいと言うのが一番の要因と言えよう。

アリア

歳：大体18くらい

容姿：水色の長髪の美女。

イメージは『迷い猫オーバラン』の『霧谷 希』のクオリティを更に上げた感じ。

違う所は胸の大きさと、アリスに並び立つほどでF〜Gくらいある。プロポーションのよさはアイドル泣かすほど。

服装は『流されて藍蘭島』の『すす』の服の上着に青色の長ズボンのような感じである。

腰にいつも木刀插している。

無口で無表情だが、たま〜に見せる笑顔は破壊力抜群。

アリス同様ソラ至上主義で、ソラの事となると性格変わって？って思えるほど。

普段から大人しく、あまり積極的に自分の意見を言わないが、相手に全て合わせるわけではない。

なんでもできる万能な所から銀時からは『万能猫耳女』と言われる事がある。

時たまマジで希<sup>のみ</sup>みたいになんか「にゃ〜」とか言ってしまったたり。

剣の腕はアリスの並で、相当な強さ。

魔力変換資質で『氷結』と『水』を使う。

デバイス無しで魔法が使える理由はアリスと同じ。

リリス

歳：不明

容姿：『魔法少女リリカルなのはStrikerS』の『リンフォース？』とほぼ同じ。違う所は髪が金髪と言う所。

服装は普段はリンフォース？のバリアジャケットを黄色で装飾した服装に変わる。

ときどき白いワンピースを着たりする。

30センチ位の小人並のサイズと十歳位の子供並のサイズになれる。

古代に滅びた『エグザス』で作られた融合騎で、『雷』の魔力変換資質を持つ。

『雷雲の聖槍・リリス』と言う肩書きを持つ。

普段はしっかりした性格なのだが、子供のような無邪気な所もある。ソラを溺愛している。

ソラとユニゾンする事ができる。

良く笑顔でいるところが多い。

神楽とよく近所の子供達と遊んでいる事が多い。

ライホース

歳：不明

容姿：黒いユニコーンと言う感じ。

人間の姿にもなれ、その時は無駄のない筋肉に肩まであるボサボサ黒髪のイケメンになる。

もう一つの姿は黒いバイクである。

幻獣種の中でもさらに珍しい『ナイトホース』と言う種族で一匹で、その中でも上位の存在らしい。

だが、仲間を逃がすために研究所の関係者に運悪く捕まり今まで過酷な実験をさせられてきた。

状況や気分で姿は変えているらしい。

硬い口調であるが、融通が利かないと言うわけではない。

結構面倒見が良く、子供に好かれる事も少々。

ソラに対しては厚い忠義の心を持っている。

ヤミ

『TO LOVEる』とらぶるの『のヤミちゃん』と言う認識で結構です。

セイバー

『Fate/stay night』のセイバーと言う認識で結構です。

ライダー

『Fate/stay night』のライダーと言つ認識で結構です。

チェーン

容姿：擬人化の姿は『祝福のカンパネラ』の『チエルシー・アールコット』で、胸は更に大きく、E〜Fくらいまである。

服装はチエルシーの騎士服と同じ。

ソラ主義で丁寧な口調。

キープレードの中でも更に特別なキープレードで凄まじい力を秘めている。

二本のキープレードの姿を変える事もでき、その時は『約束のお守り』と『過ぎ去りし思い出』になる。

普段は『キングダムチェーン』の姿である。

シルバー

容姿：擬人化の姿は『おまもりひまり』の『ひまり緋鞠』を銀髪にした感じです。

服装はひまりの着ていた和服です。

キープレードの姿の時は『キングダムチェーン』よりも刀身が長く平たくてきて、全体的に銀色で装飾されたキープレードである。

銀時の事を溺愛している。

銀時のキープレードである事を誇りに思っている。

黒龍「まあだいたいこんな感じですね。キャラプロフィールは」

銀時「なんか最後ら辺はすっごい適当な感じなんだけど！」

ソラ「あれでいいのか？」

黒龍「後は物語で色々付け足していくつもりです」

銀時「行き当たりばったりだな」

ソラ「ま、仕方ないだろ。こいつなんだし」

黒龍「そう言う言い方やめてくんない!!」

## 第十一訓：始まりは突然（前書き）

黒龍「ついに、ついに、今回から無印編スタートだアアアア！！」

銀時「やつとか」

ソラ「長かったな」

新八「ついに僕の出番だアアアア！！」

神楽「私の活躍がやっと見せられるネ！」

フェイト「ついに……」

なのは「私たちも……」

黒龍「あ、なのはとフェイトの登場は次回です」

なのは・フェイト

『『『そ、そんな~~~~』』』

桂「『リリカル銀魂ライダー』スタートだ！ 活目して見よ！！」

銀時「なんでテメーが締めてんだよ！」

## 第十一訓：始まりは突然

ここは江戸のかぶき長。

そしてそこには『万事屋銀ちゃん』と言う何でも屋があつた。

そして万事屋のリビングにあるソファで重要な書類（白紙）を真剣な顔で見ているのは、銀髪に天然パーマで死んだ魚のような目をした万事屋のオーナー坂田銀時である。

銀時はいつもの気の抜けた顔ではなく、真剣なまさしく社長と言えるような風格を漂わせていた。

銀時「神楽君。この書類の案件を早く片付けたまえ」

???「分かりました社長」

軍隊のような敬礼のポーズをしながら書類を受け取るのは、赤毛に頭の両方にポンポンを付けチャイナ服を着た宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』の一人で万事屋の従業員（居候）である神楽。

神楽は書類に目を通した後、どこかに行く。

銀時は新たな書類目を通しながらその書類（白紙）を別の人物に渡す。

銀時「アリス君。この案件は頼んだよ」

???「お任せください社長」

微笑を浮かべながら書類（白紙）を受け取るは緑色の長髪の美女――アリス。

服はノースリーブの黒服に、黒い長ズボンを履いている。

（イメージとしては、コードギアスR2のC・Cの服の上着を、裾に付いている黒い絹を無くし、黒い長ズボンを履かせたような格好だ）

彼女は書類に目を通した後、白紙の髪にどこぞの国の文字を書き始める。

銀時「アリア君、お茶を頼む」

銀時は額の汗を拭いながら近くにいる水色髪の美少女——アリアにお茶を頼む。

彼女の服は、青い和服で腰には白い帯を巻き、後ろはリボンように結んでいる。ズボンは白い長ズボンを履いている。

（イメージとしては、藍蘭島のすずの服の上着に長ズボンを会わせたような感じ）

アリア「にゃ〜……用意できてる」

アリアは銀時社長が言う前に既にお茶をお盆に乗せて銀時の前に出していた。

銀時「さすがは秘書のアリア君だ。気が利くね。それと、敬語使いなさい」

銀時は満足そうな顔でお茶を啜った後、書類（白紙）に目を通す。その時、金髪の美女と紫髪の美女が書類（ただの落書き）を持ってくる。

美女「社長。この書類の案件は片付きました」

金髪の美女——セイバーが銀時社長に書類を渡す。

美女「こちらの案件も片付きました」

紫色の長髪でメガネを掛けた美女——ライダーが銀時社長に書類を渡す。

銀時「うむ。さすがは私の部下だ。仕事が早い。では、次の書類も頼むよ」

銀時社長はまさしく社長と言えるような口調と雰囲気醸し出しながら労いの言葉を掛ける。

セイバー・ライダー

『はい』

二人は返事をした後、また落書きを始める。

その時、リビングの扉が開き、黒髪の男と金髪の少女が入ってくる。

少女「聞いてください社長！ ソラ先輩の手腕によりワンピース工業とドラゴンボール社とのコラボ企画に成功する事ができました！」

金色の長髪に、服は簡単に言うと、リーコンフォース？のバリアジヤケットの青いラインを黄色くした物。

少女——リリスは嬉しそうに興奮しながら銀時社長に仕事が上手くいった事を伝える。

銀時社長は慌てずリリスを落ち着かせるように右手の手の平を出して口元に微笑を浮かべながら言う。

銀時「落ち着きたまえリリース君。しかし、さすがは我が社の期待の星ソラ君だ。これからも期待しているよ」

銀時社長はそう言つて微笑を浮かべながらソラに向かってサムズアップする。

ライダー「さすがですね」

セイバー「さすがです」

アリス「さすがだ」

アリア「さすが……」

他の社員達も微笑を浮かべながらソラにサムズアップする。

ソラ「そんな事ありませんよ。これも皆さんのお陰です」

ソラも戸惑いながら後頭部を掻いて嬉しそうにする。

ソラ「これからも頑張りましょう」

ソラもサムズアップする。

そう、彼らこそすさんだ社会でも己の信念を曲げずに大企業と言う夢を追いかける社員達。

江戸のかぶき町で着々と力を蓄え多くの実績を積み上げている会社……その名も『万事屋銀ちゃん』。



やれやれと言う感じで言う銀時に新八は額に青筋浮かべながら怒鳴る。

ソラ「ま、やっぱ無理があるよな」

ソラは会社員風の雰囲気からいつも雰囲気に戻る。

他のメンバーもいつも自分のキャラに戻って各々いつもやっている事をする。

神楽は酢昆布を食べ、アリスはマンガを読み、アリアは新聞を読み、セイバーはまんじゅうを食べ、ライダーは本を読み始め、リリスはテレビを見る。

新八「つつか、本編始まって早々何やってるんですか？ 銀魂知らない読者やこの小説見る読者は思いつきり置いてけぼりくらってますよ……」

新八は呆れる。

銀時「たくよー、『攘夷戦争編』終わってついに『無印編』突入するんだからよ、こっちは万事屋の真の姿を見せようって時に何お前？ なんでツッコミ入れるの？ ツッコム要素なんて微塵もなかったじゃん。これこそ万事屋の真の姿じゃん」

銀時も社長風の雰囲気からいつもダラけた雰囲気に戻って、耳の穴を小指でほじる。

新八「どこが真の姿！？ 今の姿こそが万事屋の真の姿でしょうが……」

銀時「あのなー、こうどこかの企業ばく見せておけば、多くの読者

が「あ、万事屋って良いな。俺も将来の職業なら絶対万事屋だな」  
って感じになるじゃん。お前ホント分かってないな。俺の壮大な万  
事屋お披露目計画」

銀時はやる気がなくなったのかソファーに寝転ぶ。

新八「最早今の態度で計画なんて破綻してんでしょうが！！ つう  
か、原作銀魂見ている人にはとくに僕等の普段の正体なんてバレ  
てるでしょ！！」

新八がツッコミを炸裂させている時、リビングのドアが開き、たい  
焼きの袋を持った黒いドレスのような服を着た金髪の美少女——ヤ  
ミが現れる。

ヤミ「社長。たい焼き工場との契約が……」

新八「しつこいんじゃないやボケEEEEEEEEEEEE！！！！」

新八の最高のツッコミが炸裂した。  
今日も万事屋はグダグダな感じに平和だった。

そしてさっきの一流企業の子芝居を止めて銀時達は……とりあえず  
ダラけていた。

銀時とソラはソファに寝転んでジャンプを読み、アリアとセイバーとライダーは新聞を読み、アリスはマンガを寝転んで読み、神楽は酢昆布を食べ、ヤミは黙っていたい焼きを食べ、新八とリリスは掃除していた。

新八「ちよつと皆さん。グータラしないで掃除手伝ってくださいよ」

ダラけきっている万事屋メンバーを見て新八は眉間にシワを寄せながら文句を言う。

リリスは文句一つ言わず黙々と掃除していた。

銀時はジャンプから視線逸らさずにダルそうな声を出す。

銀時「つつてもよお、こう仕事も何もねえとよ、ダルくて何もする気に起きねえよ」

ソラ「だな」

銀時の言葉を肯定するようにソラも相槌を打つ。

確かに今の万事屋には仕事の依頼など一切ない。する事なければ何もする気になれないのも仕方ないが、だからと言って、こうグータラして良いと言う理由にはならないと思った新八はなおも講義する。

新八「そんな事言わないで暇なら掃除手伝ってくださいよ」

文句を言う新八の足にリリスが手をポンと当てて、諭すように言う。

リリス「まあまあ新八さん。私達も掃除以外する事がないんですから、こうやって掃除していた方が気が紛れるってモンですよ」

新八「ま、まあ……そう言われればそうなんだけどさ……」

確かに掃除と言う仕事があれば、自分もリリースもする事は一切ない。基本万事屋は依頼があつたらそれをすると言つものだ。

依頼のストックもないからこそこのグータラ空間ができている。

掃除せずにこのグータラ空間に片足突っ込んで自分達もダメ人間の仲間入りするよりも掃除と言うやりがいのある仕事をした方が社会人としても侍としてもよっぽど良い。

新八（でもな……）

でもやっぱり、人間自分がやる事やってんのにその隣でグータラなら姿見せられれば、なんかこう、イライラと言うか、腑に落ちないというか、納得できないものがあるのだ。

新八がやはりここは無駄だと分かつていても銀時達に講義しようか、それともこのまま銀時達を無視して掃除を再開しようか悩んでいると、

プルル！プルル！

電話が鳴った。

電話が鳴った事で、全員の視線が電話に注がれる。

そしてソラがダルそうに立ち上がって電話に近づいて受話器を取る。

ソラ「——はい、出来る事はやる。出来ない事徹底してやらない万事屋です。ご用件はなんですか？」

新八（いや、最初のそれじゃないでしょ……！）

新八は電話の話中とあつて声には出さず、心の中でツツコミを入れる。

ソラは今日とはことんダルいのか、いつもよりも声音の強さがハンオクターブ低かった。

ソラ「……ん？ ジーさんか。どうした？ ……なるほどな。ついに完成したのか。それで？ ……ああ分かった。じやあ銀時達も連れて来る」

ソラはそう言つて受話器を戻す。

新八（ジーさんって事は………電話の相手は源外さんかな？）

新八はソラの言葉を聴いて、顎に手を当てて考える。

新八が知っている限りではソラがジーさんと呼ぶ人物は江戸一番のカラクリ機会技師、ひらがけんがい平賀源外以外いないので電話の相手は源外だと予想する。

ソラは振り返る。

ソラ「お前ら、源外のジーさんから依頼だ」

かぶき町の大通り。

そこには万事屋のメンバーである、銀時、神楽、新八、ソラ、ヤミ、アリス、アリア、セイバー、ライダー、ライホースが歩いている。

ちなみにライホースの姿は黒いユニコーンのような姿ではなく、人間の姿である。

ソラは電話の内容で聞いた源外の依頼の内容を歩きながら銀時達に話してた。

銀時「次元跳躍装置？」

ソラから聞いた言葉を聞いて怪訝そうな顔をする。

他の皆も聞きなれない単語に首を傾げたり、不思議そうな顔をする。

ソラ「ああ。前から俺と源外が作っていた物でな、簡単に言えば、遠く離れた別の場所に簡単に行く事のできる物だ。例えるなら、『ターミナル』みたいなものだな」

神楽「うおおお！！ 凄いアル！！」

神楽はソラの話聞いて興奮する。確かにターミナルのようにどんな場所にも行けような物ならまだ子供である神楽が興奮するのも無理はない。

セイバー「それは凄いですね」

ライダー「やはり、江戸随一の機械技師カラクリと言うのは伊達ではないですね」

リリス「でも、その凄い物を作るのに携わっているソラ様も凄いです！」

セイバーとライダーは関心し、リリスは自分のマスターの能力の高

さをまるで自分の事のように喜ぶ。

ソラは趣味で機械弄り、もといカラクリ弄りをしている。もうほとんど趣味の領域を超えてそうな気がするが……。

アリス「つまり……私達はその次元跳躍装置の実験台が何かされるのが今回の依頼と言うわけだな？」

アリスは顎に手を当てながら自分の予想を口にする。

察しの良いアリスはソラの話聞いてる内に源外の依頼の内容が新しくできた発明品の実験を自分達でしようと言っかなりはた迷惑な依頼内容だと予想する。

あの源外ならそれくらいの依頼を頼んできてもおかしくないから言える事である。

ソラ「まあな」

ソラは既に電話で源外から依頼の内容を聞いているので知っている。ただ源外は電話で、『次元跳躍装置が完成したから実験に付き合ってくれ』としか言ってなかったのだが、あの源外からして実験台させられるのは目に見えているので、ソラはアリスの言葉を訂正せずに無難に肯定する。

銀時「“まあな”じゃねえだろ！！ ふざけんなよ！ 実験台される依頼なんて受けられるわけねえだろ！！ つうか、なんでお前それ先に言わねえんだよ！！」

銀時は現在進行形で何も言わずに冷静な態度で源外の工場に行こうとしているソラにツッコミ入れる。

新八「そうですよ！！ さすがに実験台にされる依頼なんて受けら

れませんよ!!」

新八もさすがに実験台にされる事には反対だった。

源外は江戸随一の機械カラクリ技師ではあるのだが、なにぶんその発明品の欠陥があったりする。今までの経験からして今回も禄な目に合わないだろうと思った新八は銀時と一緒にソラにツッコム。

銀時「やってらんねえ。俺は帰るぞ」

銀時はUターンして万事屋の戻ろうとする。新八や他のメンバー達も銀時の後に続いて戻ろうとする。

それを見たソラがため息を吐く。

ソラ「……“こないなら今までのツケ今日までに耳揃えて払え”だと」

ソラの言葉を聞いて全員足を止める。その顔には影が掛かっていた。結局の所、銀時達はこの依頼を断れないのである。

銀時「はあゝ。こんなことならツケ払つとくんだったぜ」

銀時はため息を尽きながら重い足取りで源外の工場に向かう。

それは新八達も同じだった。誰だって実験台になると聞いて愉快になる人間などいない。

そんなのは頭が年中お花畑の人だけである。

そしてそんな銀時達の前に二人の男女が声を掛ける。

「???」あら、銀時じゃない」

「???」どうしたのだ?　なんだか元気がないな」

一人は黒髪をツインテールに赤い服と黒いスカートを着た少女。  
ツインテールの少女の隣にいるのは男は白く短い髪、肌は褐色で背は高く、ガツシリとした体格に赤い外装を身に纏っている。

銀時「よお、凜にアーチャーじゃねえか」

銀時はダルそうに挨拶をする。

凜「なんか、いつにも増してダルそうね……（汗）」

アーチャー「今のお前達には幸せが早足で逃げていきそうだな」

戸惑いの表情を見せるツインテールの少女——遠坂凜。  
腕を組んで呆れた表情をしている男——アーチャー。

万事屋と凜とアーチャーの関係を簡単に説明すると、深い知り合いと言った感じだ。

前に凜が依頼で万事屋にやって来た時知り合いになった。  
今なお江戸では『魔術師迫害』が根強く残っている事もあり、たびたび成り行きとは言え凜に降りかかった事件を解決して助けた過去がある。

そして魔術師迫害で孤独を味わってきた凜の心を救った事もあり、今ではかなり親しい仲になった。  
ちなみに凜は銀時に好意を寄せている節がある。

アーチャーは凜のサーヴァントなので、成り行きで万事屋と知り合  
いになった。

当然と言えば当然だ。

アーチャーは、銀時とソラには一目置いている。  
前に二人の強さを目にしたからである。

新八「ま、まあ今回は依頼が依頼ですから……」

新八は言いにくそうに頬を掻きながら源外の依頼の内容と、これか  
ら起こるであろう実験について話した。

凜「ツケで逃げられないって……」

アーチャー「相変わらずだな」

二人は呆れた顔をしながら半眼になって銀時達を見ていた。

セイバー「そう言うリン達これからどこへ？」

セイバーは自分達の今の現状が悲しくなってきたのか、別の話題を  
振る。

凜「私達はこれから衛宮君の所に行くの。ちょっと彼に用があるか  
ら」

アーチャー「私は気が進まないがな」

凜の言葉を聞いてアーチャーは心底嫌そうな顔をする。

――衛宮士郎。

赤茶色の髪の少年で、正義の味方を目指している。そのため彼は正義の味方になるために『真撰組』に入っている。

正義感が強いせいなのか、銀時やソラと衝突する事もしばしばある。

アーチャーは彼の事を何故か毛嫌いしている節があり、仲もあまり良好とは言えない。

アリス「アーチャーは相変わらず士郎を毛嫌いしているんだな」

アーチャー「まあな」

面白そうに言うアリスにアーチャーは素っ気なく答える。

ソラ「じゃあ俺達は源外の所に行くな」

凜「そう。じゃ」

凜は笑みを浮かべて軽くてを振りながらアーチャーと共に士郎の家の方に行った。

銀時達も軽く手を振って源外の工場に行った。

源外の工場。

銀時達は工場に着いてすぐに源外が現れ、工場の中に入って話をし

ていた。

既に依頼の内容を知っている銀時は源外にすぐに発明品を見せるように言う。

銀時「依頼の内容はソラから聞いたからよ、次元跳躍装置って奴見せる」

源外「おお、話が早くて助かるわい。これがソラの字と俺で作った次元跳躍装置だ！」

ババーン！！、と効果音が出そうな感じに近くにあった布を取ると……そこには円盤状で真ん中にはガスコロンのあの鍋とか置く場所みたいな感じの鉄の部分がある、なんか良く分からない物があつた。新八達はそれを見て、驚いたり、啞然とした表情ではなく、正直微妙な表情をしていた。

ソラ以外の全員がそれを見て、何これ……？、と思った。

新八「あ、あの……源外さん。これが、その、次元跳躍装置、なんですか？」

新八は戸惑いながら源外に聞く。

源外「そうだ」

源外が当たり前だと言う感じに答える。

だが、源外の言葉を聞いてもやはりそんな遠く離れた場所に一瞬で行く事のできる装置だとは思えなかった。

はつきり言つて、シヨボイ。大して大きくもなければ、大きな印象与える物がついているわけでもない。

一見すればただの形の変わったガスコロンだと言つ見方もできる。

そんな銀時達の様子を見たソラが、頭を掻きながら源外に言葉を掛ける。

ソラ「ま、やっぱこう言う反応をするよな……………ジーさん、百聞は一見にしかずだ。装置を動かしてくれ」

源外「あいよ」

源外はソラに言われて、近くにある大きな操作盤のような物に近づき、ボタンを押して操作する。

その大きな操作盤は次元跳躍装置と何本ものコードで繋がっていた。源外がボタンを押していくと、次元跳躍装置の真ん中の部分に青色の電気が発生し、そしてその上空に大きな光球体が現れた。

全員（ソラ以外）

『『おお』』

ソラ以外の全員が目の中の光景に声を漏らした。

源外「どうだ」

源外は自慢げに腰に手を両手を当てながら笑みを見せる。

銀時「こいつは確かにすげーな。それでジーさん。この光の中に入ればいいのか？」

銀時は光の球体を指で指しながら聞く。

源外「そうだ。じゃ、早速入ってくれ」

銀時（どうやら、今回は大丈夫そうだな）

予想以上の装置の完成度を見て、今回はなんのトラブルもなさそう  
だと思った銀時は神楽達と共に光の球体の中に入ろうとする時、

ピーピー！！

突然操作盤から高い音が鳴る。

源外「あ、マズいなこりゃ」

全員

『『え？』』

源外の言葉に全員が反応すると同時に光の球体に異変が起きた。

なんといきなりブツラクホールの如くいろんな物を吸い込み始めた。  
そしてやっぱりこう言う役割なのか、新八がいの一番に光の球体に  
吸い込まれ始めた。

新八「うわあああああ！！！！」

新八は慌てて銀時の手を掴み、銀時はセイバーの手を掴み、セイバ  
ーはライダーの手を掴み、ライダーはアリアの手を掴み、アリアは  
アリスの手を掴み、アリスはリリスの手を掴み、リリスはライホー  
スの手を掴み、ライホースはヤミの手を掴み、ヤミはソラの手を掴  
み、ソラは神楽の手を掴むと言う、繋ぎつこ状態になった。

銀時「し、新八！！ テツメ、どう言うつもりだ！」

銀時は踏ん張りながら新八に文句を言う。

新八「嫌だー！！ 一人で吸い込まれるのは嫌だー！！」

アリス「そこは普通“僕に構わず行ってください”くらいの事は言う場面だろ」

アリア「だから逝って……………」

新八「逝けるかアアアアアー！！」

神楽「全員私に構わず逝って……………」

銀時「いや、お前も連れて行く！！」

先頭の神楽を始めてとしてなんとか吸い込まれないように踏ん張っているが、いつまで持つか分からない。

心なしか、吸引力が強くなっているようにも感じられた。

源外「お前ら！！ 装置が暴走しちまったみてーだ！！ いいか絶対球体に吸い込まれるんじゃないぞ！！ どこに飛ばされるかわからねえからな！！」

源外は離れた安全な場所で近くにある柱にしがみ付きながら今の現状を銀時達に教える。

銀時「ジジイイイ！！！！ 何テメーだけちやっかり安全な場所にエスケープしてんだよ！！」

銀時は一人だけ安全な場所に逃げている源外に青筋を浮かべる。

新八「わわわわわわわ！！ 銀さん！！ なんかさっきより吸引力が増してますよ！！」

新八の言うとおりさっきよりも吸引力が増していた。

このままではマズイと思ったソラはこの局面を打破できる物がないか周りを周りを見回していると、ある物を見つける。

ソラ（あれはゴウラム。よし）

黄金の鎧を纏ったカブトムシのようなモノ『ゴウラム』を見つけた。

何故ゴウラムが源外の工場にいるかというと、今の万事屋は人数的な事もあり、『スナックお登勢』でも万事屋でも大きなゴウラムを置けるスペースがなかった。

そこでゴウラムに機械カラクリ技師である源外がゴウラムに興味を持っていたので、源外にゴウラムの置いておく場所を提供してもらっていたのである。

ソラ「ゴウラム」

ソラがゴウラムの名を呼ぶと、ゴウラムの目が光、ゴウラムは羽を羽ばたかせて宙に浮く。

ソラ「神楽、ゴウラムの角に掴まれ」

神楽「分かったアル！」

ソラはゴウラムの角に神楽を掴まらせ、そのままゴウラムの怪力を

使って自分達を引っ張りあげようと言う作戦を考えた。

ゴウラムはソラ達が切羽詰っている事が分かったのか、急いで神楽の元まで飛んで行こうとする。

神楽はゴウラムの角を掴もうと手を伸ばす。

後少して神楽の手がゴウラムの角に届こうとした時、

桂「ハハハハハ！ 銀時！ ソラ！ 俺と共に国を変えようぞ！  
！」

くうきフレイカー  
KB 桂小太郎が登場した。

しかもワザトなのか天然なのか、桂が攘夷志士の勧誘をしながら飛び出した場所は神楽とゴウラムのちょうど境目だった。

そして勢い良く飛んでいたゴウラムは止まる事ができず桂の顔に激突してしまう。

桂「ゴフツ！？」

桂とゴウラムはぶつかった衝撃でバランスを崩し、そのまま光の球体に吸い込まれてしまった。

全員

『……………』

その光景を見た全員は呆然としてしまった。

そしていの一歩声を上げたのは、

銀時「な、何やってだあいつはアアアアアアアアアアアア！！！！

！」

狂乱のバカ貴公子の幼馴染の銀時だった。

銀時は桂のバカのバカ行動に青筋を浮かべた。

リリス「ただ私たちの邪魔しに來ただけじゃないですかアアアアアアアアアア！！！！！」

新八「折角の希望がアアアアアアアアアア！！！！！」

ライホース「ゴウラムウウウウウウウウウ！！！！！」

この状況を唯一の救いだったゴウラムが桂のせいで無くなってしまった事に三人は叫び、他の者は怒りを露にしていた。

神楽「も、もうダメアル！」

どんどん強くなる吸引力に対して踏ん張りが効かなくなった神楽は少しづつ後ろに後退してしまう。

神楽の手を掴んでいたソラ達も後ろに後退してしまう。

銀時「か、神楽！ 根性見せろ！！！」

神楽「ご、ゴメン銀ちゃん！ さすがに、もうダメネ……」

そして神楽の体を宙を浮き、後ろにいたソラ達も宙に浮いてしまう。もうダメだ…… そう思った時、奇跡が起きた。

ガシ！

神樂の手を誰かが掴んだ。

神樂「エリー！」

神樂の手を掴んだのは白い体に黄色い嘴くちばしが付いた、ペンギンお化けのような生き物であり桂のペットである『エリザベス』だった。  
これで助かった、そう思った時、不運はやってきた。

ガン！

全員

『『あ……………』』

エリザベスの後頭部にパンチが勢い良く当たった。

パンチが当たったせいで踏ん張りが効かなくなったエリザベスが浮き上がり、そのままソラ達と共に吸い込まれてしまう。

そしてソラ達が吸い込まれたと同時に光の球体は消えてしまった。

唯一吸い込まれなかった源外は荒れた工場の中を見ながら声を漏らした。

源外「マズイ事になったな……………」

ソラ「ん、ん」

ゆっくり瞼まぶたを開けてソラは目を覚ました。  
立ち上がり、周りを見る。周りにはさっき自分達にとんでもない迷惑を掛けた桂と、飼い主と打って変わって一度は自分達をピンチから救ってくれたエリザベスと、アリス、アリア、リリス、セイバーが気絶して眠っていた。  
他のメンバーの姿はない。

だが、ソラは桂に怒りをぶつける事より目の前に光景に呆然とした。

なにせ今ソラ達のいる場所は江戸でもなければ、ましてや地球ではない。

そこは言ってしまうと、どこぞのRPGの魔王の城のような建造物があり、そしてその建造物を支える地面以外は何もない———そう何もないのだ。

この建造物と城を支える地面がどこぞの異空間に浮いていると言う感じである。

太陽もなければ月もなく、空すらない空間だった。

その光景を見たソラは眩きを漏らす。

ソラ「マジかよ……………」

銀時「ん」

ゆっくり<sup>まぶた</sup>瞼を開けて銀時は目を覚ました。

銀時「ん？」

上半身を起こす。周りを見渡した。どこかのコンクリートでできた道で、周りはコンクリートでできた壁がある。そして空は暗く月が出ていた。周りには気絶している、新八、ライダー、以外他のメンバーの姿はない。

銀時「どこ、どこ？」

はてさてどうなってしまうのか？

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はい。今回は銀八先生コーナースタートします」



た。

銀八「あゝあ。返り討ちにされんの目に見えてるのにな」

ソラ「しょうがないだろ。ま、俺としてはエリオに危害加えなければどうでもいいがな」

銀八「じゃあ『黒神』さん、初めての感想ありがとうございます。マジぱつつあんに彼女できるようにしないとあいつが本当に暗黒面に堕ちてしまいかもしれないので気をつけてください」

ソラ「次だな。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、  
『リュウケンドー』あれデジャヴ感じるんだけど？」

カブト「と言うか…俺達が小さい頃に行った感じだろ…と言うか…起こるのかあれが？」

ロクサス「いや、ソラは分かるけど…何で変身した状態で出るんだよりク…」

カブト「なんとなく…」

マリオ「しかし…どうなるんだろうな…」

ルイージ「キングダムハーツの流れなのか…それとも銀魂通りの流れなのか…」

ネス「そんな訳質問『ライダーは銀時のどこに好かれたの?』」

リュカ「(いきなりだな…) 僕も質問なんですけど…『ライホース

さんは普段は人の姿になるんですか？』」

撃龍剣「ライホースは今作では人型になれるのだな……」

次回を楽しみにしてます♪

リュウケンドー「頑張れよ銀時にそっちの俺！」<sup>ソラ</sup>

撃龍剣「どうなるのやら……」『あ、そう言えば鳴神 ソラさんには追加質問あったみたいだ』

銀八「なら第一回目だし、サービスするか。じゃあソラ、もう一つの質問も読め」

ソラ「偉そうだな。まあ仕方ない。

『こちらが出した銀さんの変身するライダーについてどう思いますか？』だ、そうだ」

銀八「じゃあライダー、ライホース答えろ」

ライダー「は、恥ずかしいのですが、その…ギントキのどんな苦しみを経験しても憎しみに堕ちず、折れないその強い魂を見て惚れたというか……／＼／＼／＼」

ライダーはかなり恥ずかしいのか頬をトマトのように赤くさせながら小さい声で言う。

銀八「おいおい、たまにストーカー紛いの事してる奴が何言ってる……」

グサ

ライダーは銀八のおでこにダガーを投げる。

銀八「ぎゃアアアアアアアアアアアア！！！！」

ソラ「ライホース、お前は？」

ライホース「少しは心配してやったらどうだ…？ ま、まあそうだな。俺は普段人間の姿でいる時は家事や万事屋の仕事の手伝いや本を読んでいるな」

ソラ「それで、最後の銀時が変身するライダーだが、まあそうだな、良いんじゃないか？」

銀八「あいつがライダーになんのかよ！似合わねえな！（笑）」

銀八は可笑しいのか、口を押さえながら笑いを堪えている。

銀八「えっと、『鳴神 ソラ』さん、初めての質問ありがとうございました。次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』このシーンは幼児時のソラ（原作の方）とリクがいたところだ！」

フーカ「確かリクって子が闇を取り込んだってことだっけ？」

デスコ「当たらずとも遠からずデスネ」

真王「そして次はキープレードの登場か？」

フーカ「凄い武器と言えばそうね」

真王「さつきチラッと『鳴神 ソラ』さんが質問してたので俺も、『カイリのポジションは誰ですか?』」

フーカ「ヒロインのポジション?」ところでハートレスは無印から何処までなの?」

デスコ「ちなみに作者は2まで知ってるデスよ。『ところでアリスさん、上目遣いと涙目ってやってて恥ずかしくないんですか?』」

真王「あいつなら答えは『全然』っていいそうだがな。それではまた」『ええ、カイリ的なポジションつか、ヒロイン的ポジションならなのはやフェイトですね。ハートレスが何時でるかはネタバレになるんで、言えません。最後はアリス、答えなさい」

アリス「少し、な……」

アリスは頬を掻きながら視線を横にずらして言う。  
さすがに子供の時ならともかく大人なった今では多少は恥ずかしいらしい。

銀八「はい、『真王』さんは初めての感想ありがとうございました。次、ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』やっとフェイト達が登場するよ長かったそれと、銀八先生コーナーをもつやつたらどうですか?」

レナード「後、質問がある仮面ライダークウガが出て来るなら仮面ライダーアギトも出て来るか?もしアギトが出て来るならエリオが変身するようにしてくれ。後、作者からお届け物だ」

レナードは黒龍さんに黒騎士アークをあげた。

レナード「一応、前にあげたアークは作者が黒龍さんの家に忍び込んでこっそり改造したらしい身長が変えられるらしい15メートルまで変えられるらしい」

白騎士君「勝手に黒龍さんの家に忍び込んですみません。白騎士を本編を出す質問の答えを待っています」『……それで、どうなんだ黒龍？』

黒龍「えっと、エリオがどうなるかは今の所考え中ですが、案の一つとして受け取っておきます」

銀八「じゃあ、『白騎士君』さん、初めての質問ありがとうございました」

ソラ「今回はこれで終わりだな」

銀八「また次回もよろしく願いします」

## 第十一訓：始まりは突然（後書き）

銀時・新八

『投稿遅すぎじゃボケエエエエエエエ！！！』

黒龍「ぎゃあああああああああああああああああ！！！」

銀時と新八が黒龍をボコボコにする。

さすがに今回は間を空け過ぎたらしい。

銀時「遅すぎだろ！」

新八「読者に申し訳ないと思わないのか！！」

黒龍「す、すみません……テストやらなんやら色々あって忙しくて……」

銀時・新八

『それでも遅すぎじゃアアアアアア！！！』

黒龍「ぎゃあああああああああああああ！！！」

ソラ「まったく……次回、『魔法少女はマジでいる』にテイクオフだ」

## 第十二訓：魔法少女はマジでいる（前書き）

フェイト「やっと私の出番だ！」

なのは「ふえゝ私はまだなのゝ（涙）」

黒龍「あああああ！　ちよっ泣かないで！」

神楽「黒龍が泣かしたアル！　マジ女の敵アルな！」

新八「そうだね。本当に最低だね」

銀時「おいおい、それが男のする事か」

アリス「マジでダメなオトコ、略してマダオだな」

アリア「にゃゝ。最低…」

リリス「軽蔑しました！」

黒龍「いやあああああああああ！……！」

ソラ「どこか行っちゃったな」

セイバー「まあ仕方ないですよ」

ライダー「『リリカル銀魂ライダー』が始まります」

## 第十二訓：魔法少女はマジでいる

リリス「あの……これ、夢じゃないんですよね……？」

ソラ「ああ、間違いなく夢じゃないな。なんなら頬を抓ってみるか？」

リリスは汗を流しながらソラに聞く。  
ソラはリリスの質問に真顔で答える。

彼女がこう言う反応をするのも無理はない。

なにせリリス、ソラ、アリス、アリア、桂、エリザベス、セイバーがいる場所はどこぞのRPGの魔王の城のような建造物があり、そしてその建造物を支える地面以外は何もない———そう何もないのだ。

この建造物と城を支える地面がどこぞの異空間に浮いていると言う感じである。

太陽もなければ月もなく、空すらない空間。

そんな場所に今自分達が居るとなれば、不安になってくる。

だがこんな状況でも相変わらずバカな事をするバカがいた。

桂「おお、見るエリザベス！　ここはまるでクッパの城ではないか！！　こうなればやる事は一つだ！」

何故か興奮している桂はいつの間にか赤い帽子を被り、付け髭を付け、オーバーオールを着ていた。

要するに伝説の配管工『カツオ』の格好だった。

エリザベス『そうですね桂さん。いや、そうだねカツオ!』

と白いボードに文字を書いて答えるのはエリザベス。

ただ付け髭を付け、緑の帽子を被っている今の姿はまさしく伝説の配管工の弟の姿だった。

カツオ「よしエリザベス!　まずは階段を探し亀の甲羅を蹴りまくって無限増殖を――」

ソラ「お前はBダツシュで谷底めがかけて落ちろ」

ドカ!

カツオ「ゴツ!」

ソラは冷めた目でカツオの後頭部にキックを喰らわす。  
だが蹴られたのに関わらず、狂乱の配管工は何故か高笑いする。

カツオ「ふははは!　バカめ!　俺は谷底に落ちる前にこのタヌキの尻尾に似たマフラーを振り回して空を飛ぶ!」

カツオはどこから出したのかタヌキの尻尾に似たマフラーを出して自慢げに言う。

ソラ「そうか。なら、とっと落ちて天国にフライしろ」

ソラはカツオをそのまま道のない地面の切れ端のような、所謂崖から落とそうとする。

しかも落ちないように地面にぶら下がっているカツオの顔を何度もガシガシ蹴る。

カツオ「ちよっ！ イタ！ マジ止めて！！ 落ちる！ マジ落ちる！」

ソラ「誰のせいでこんな分けの分からない場所に来たと思っているんだ？」

冷めた目線で何度も蹴るソラをエリザベスが止めようとする。その光景を見たセイバー達は呆れてため息を尽いていた。

そんな呑気な事をしている彼らを少し離れた上空から見下ろしている影が二つあった。

一人は赤い瞳に金髪の綺麗な髪をツインテールにし、黒いマントを羽織って黒いレオタードと白いスカートのような服を着て、黒い斧のような杖を持った少女。

もう一人はオレンジ色の髪で頭に狼の耳と犬のような尻尾がある女性。

??? SIDE

???「アルフ。あの人達誰なんだろうね？」

私、『フェイト・テストロッサ』は私と私の使い魔である『アルフ』と一緒に『時の庭園』の入り口付近にいる人達を見ていた。

アルフ「さあ？ 管理局の魔導師……なのかな？ でも、強い魔力はあの三人から感じられるし、どこかの魔導師かな？」

アルフは分からないと言う風に首を傾げた。

私とアルフと母さんの家でもある時の庭園に何者かが進入して来たと母さんに言われて様子を見に来た。

管理局の魔導師って予想してたけど、なんだか違う感じた。

管理局員の制服も着てないし、それにバリアジャケットも杖もない。見た事もないおかしな格好をしている。

ただ水色の髪的女性と緑色の髪的女性と金髪の髪に鎧を着た女性から信じられない位の魔力を感じる。

正直それは私や大魔導師と呼ばれる母さん以上だ。

もしかしたら、彼らは次元犯罪者と言う可能性もある。

もしそうなら私に勝てるだろうか？ いや、勝つしかない！ 母さんを守るためにも！

アルフ「とりあえず、ここからじゃ見えないから近づいてみるかい？」

アルフの言う通り今の私達のいる場所は結構彼らから離れているので性別位しか分からなかった。

目を細めながら侵入者達を見ているアルフに私は賛成の言葉を掛け

る。

フェイト「うん。くれぐれも見つからないようにね?」

アルフ「分かっているって」

笑顔でアルフは頷き、私たちは空を飛んでゆっくり侵入者達に近づく。

アルフ「なんか、仲間の一人みたいな奴が虚数空間に落とされそうになってるけど……仲間じゃなのかね?」

アルフが戸惑った顔をする。

確かに私もそれには戸惑っている。なんか黒一色と言った格好をした人が赤い帽子を被って髭がある長髪の男の人を虚数空間に突き落とそうとしてるけど、仲間割れかな?

アルフ「それに、黒い服の奴を抑えているあの、白い化け物はなんだろうね?」

アルフは更に困惑の顔をする。

確かにアレはなんだろう? なんだか、アレを見ると、オバQって言葉が浮かべあがってくるけど、なんでだろ?

私がそんな事を考えると、黒服の男の人が赤い帽子の人を蹴るのを止めて汗を拭きながらこっちを向いた。

フェイト「ツ!!!!!!?????// // //」

黒服の男の人の顔を見た時、私に雷が落ちたような衝撃が走った!!

あのちょっと癖のあるけど綺麗な黒髪、端整の整った顔立ち、空色の綺麗な瞳、彼の全てに私は魅了されていた。

そしてドクンドクンと私の心臓が早鳴りを告げた。

それに顔も自分でも分かるくらい赤くなっているのが分かった。

ど、どうなってるんだろ私！？ 何だろうこの気持ち？ まるで胸が締め付けられているようなのに全然嫌じゃないこの気持ちは？

アルフ「どうしたんだいフェイト？ 顔が赤いようだけど、熱でもあるのかい？」

私の変化に気づいたのかアルフが心配そうな顔で私に質問してくる。

フェイト「だ、大丈夫だよアルフ！／／／／」

私は慌てて平静を装う。

内心心が乱れまくって全然大丈夫なんかじゃないＺＥ！、てくらい大丈夫じゃないけど、アルフを心配させないためにも私は必死で平静を装った。

アルフ「そ、そうかい？ ならいいんだけど……」

アルフ少し戸惑った様子を見せたけど、素直に頷いて納得してくれた。

こう言う素直な所は本当にアルフの良い所だと思う。

私はアルフに気づかれないように深呼吸しながら、改めて黒服の人を見る。

か、カッコいい／／／

なんて言うか、私の何かかが彼に惹きつけられているようなそんな感覚だ。

とにかく私は思考を切り替えて彼らどうしようか考える。

もし、悪い人じゃないなら、たくさんお話したいな。あ、O H A  
N A S I じゃないよ？

私は彼らを観察しながら心底からそう願っていた。

### 三人称視点

ソラ「とりあえずここがどこだか確認しないとな」

ソラは桂を散々蹴りまくった後、ここがどこなのか把握する方法を考えながら頭を掻いた。

アリス「とりあえず、あの城に入ってみたらどうだ？　もしかしたら中に誰かいるかもしれないぞ」

リリス「で、でも、もし魔王的な人がいたらどうするんですか？」

リリスはまだ魔王がいると思っていて恐いのか、目尻に涙を溜めている。

確かに目の前の建造物は魔王か何かが出そうな雰囲気醸し出していた。

カツオ「魔王などいるわけなかつ。いるのは我等が宿敵クツパ大王だ！」

いつの間にか話の輪に入つたカツオが真剣な顔でアホな事を言う。

ソラ「いるのはお前の頭の中だけだろ」

ソラは冷ややかにツツコミをする。

アリア「でも、ここにいても仕方ない……」

抑揚なく言うアリアの言うとおり、ここでこのまま話し合つていてもラチがあかない。

なら何らかの情報があつたような魔王の城のような建造物の中に入つて情報収集をした方がこの状況を好転できるような有力な情報が得られるかもしれない。

ソラ達もそう思い、魔王の城的な建造物に行く事を決めた。

ソラ「そうだな。ここでゾラのボケ聞いてるわけにもいかなしな」

桂「ゾラじゃない桂だ。俺もアリアの意見には賛成だ」

桂はいつの間にか元の格好に戻つて、アリアの意見に賛成しながら頷く。

アリス「そうだな。ここにいても何の変化もないしな」

リリス「あの、やっぱり行かないとダメですか？」

リリスはやはり怖いのか、まだ魔王の城的な建造物に入る事に対し

て若干否定的だった。

アリア「覚悟」

リリス「覚悟決めるって事ですか？……はうう」

セイバー「たとえ魔王だろうと、我が剣で倒すのみ」

アリアに言われ、リリスも仕方なく覚悟を決めて入る事にした。  
だがまだ怖いのかやっぱり涙目だった。

そしてセイバーは魔王が現れても対等に戦えそうなほどの気合を見せていた。

ソラ「ん？　そう言えば神楽はどうした？」

ソラは神楽がいない事に気づく。

この中でも一番多く喋りそうな神楽の声が聞こえない事に気づいた  
のである。

アリス「そう言えばそうだな」

アリア「にゃ……ヤミも」

リリス「いませんね？」

エリザベス『一体どこへ？』

他の面々も神楽がいない事に気づき、周りを見渡す。  
だがどこにも神楽の姿はなかった。

ソラ達が神楽がない事に気づき、周りを見渡している時、フェイトとアルフはこれからどうするか話し合っていた。

アルフ「どうするフェイト？ やっぱりあいつら捕まえちまうかい？」

フェイト「つ、捕まえる！ 捕まえた後どうするの！？ ハッ！ まさか捕まえた後になんかいけない拷問とかしちゃうの！？」

アルフ「い、いや、ご、拷問って…… あいつら次元犯罪者かも知れないし、とりあえず捕まえて拘束した後に話聞いた方がいいんじゃないかって言いたいんだけど……」

アルフはフェイトの突然のとんでも発言に戸惑いながら自分の言った言葉の意味を丁寧に教える。  
だが、フェイトは何かのスイッチが入ってしまったのか、どんどん自分の世界に入り込んでいた。

フェイト「えっと、もし拷問の方法が、あーんな事やこーんな事だったら…… わ、私、頑張れるかな……？ / / / /」

フェイトは自分の頬を押さえて顔を真っ赤にさせながらR指定入りそうな妄想をどんどん膨らませていた。  
しかも拷問する相手が全部ソラだった。フェイトがどんな妄想しているかは皆さんのご想像にお任せします。

フェイトがソラに衝撃的な一目惚れをしたせいで今彼女の思考がかなり残念な感じになっていると知らないアルフはフェイトの名前を必死に呼びながら肩を揺らす。

アルフ「ちょッ！ どうしたんだいフェイト！？ しっかりしてよ！！ どうしちゃったんだい！？ 今日のフェイトなんか変だよ！？」

フェイト「ハッ！？ ご、ゴメンアルフ。もう大丈夫だから」

フェイトは桃色の妄想世界から帰還して、アルフに誤る。

アルフ「な、ならいいんだけど……」

アルフはいまだに少々心配だったが、これ以上時間を掛けているとソラ達がどこかに行ってしまうと思ったので、フェイトの肩を離し思考をソラ達を捕まえる事に切り替える。

アルフ「で、どうするんだい？ あいつら」

フェイト「とりあえず、いきなり攻撃するのは止めよう。人数も多いし、それにもしかしたら悪い人達じゃないかもしれない。いや、きっと悪い人達じゃないはず！」

アルフ「う、うん。そうだね」

握り拳を固めて断言するフェイトに不安を感じながらもアルフは頷く。

フェイトの言うとおり彼らが悪人じゃないかもしれないし、悪人と言う根拠もない。

アルフとしても異常に魔力量の高い人間が三人もいる彼らと戦うよりも、ここはいきなり攻撃して捕まえるよりも穏便済ませる方がフェイトを守る上でもそっちの方が良いと思ったので、フェイトの意見に賛成した。

フェイトとアルフはソラ達から少し離れた場所に降り立つ。

フェイトとアルフに気づいたソラ達はいきなり現れたフェイト達にそれぞれ反応を見せていた。

ソラ「ん？　なんだ？」

桂「なんと！？　空から女の子が降ってくるとは……ハッ！　まさかこれが噂に聞く天使！」

エリザベス『マジで！』

ソラ「天使がコスプレしてるわけないだろ」

ソラが冷めた声でツツコミをする。

確かに目の前の少女の格好はどっからどう見てもコスプレにしか見えない。

もし目の前の少女本当に天使なら天使は全員コスプレしている事になる。それはそれでかなり残念な感じだ。

アリス「まあ普通の子供でない事は確かだな」

アリア「コスプレイヤー？」

セイバー「さすがにコスプレイヤーではないと思いますが」

リリス「それにしても、もしかしてあの子が持っている物って……」

アリスとアリアとセイバーとは違い、リリスはフェイトが持っているデバイス『バルディッシュ』を見てある事を考えていた。

そしてそれはまたソラとアリアとアリアも同じだった。

そう、実はフェイトの持っているバルディッシュはソラとアリアとアリスが元いた世界にあった魔法を使用する時になくはない代物デバイスなのである。

ソラ達は研究所で無理やりあらゆる知識を植えつけられたので、フェイトの持っているバルディッシュがすぐにデバイスだと気づいた。

もし目の前の女の子が持っている黒い杖が自分達の世界にあったデバイスなら、ここはもしかしたら自分達が生まれた世界なのではないか？、とソラ達は考えた。

ソラ達がそう考えている時、フェイトはソラ達に話し掛けた。

フェイト「すみません。あなた達は一体誰ですか？」

ソラ「人の名前を聞くと時はまず自分から名乗るモノだって母親に習わなかったか？」

アルフ「何を！」

ソラの言葉を聞いて少し食って掛かるが、フェイトがアルフを宥める。

フェイト「あ、アルフ、落ち着いて」

アルフ「わ、分かったよ」

アルフはフェイトに言われてとりあえず落ち着く。  
フェイトは改めてソラに質問する。

フェイト「あなた達は管理局の人間、もしくは次元犯罪者じゃないんですか？」

ソラ（管理局、次元犯罪者……やっぱりそうか）

ソラはフェイトの言葉に出てきた『管理局』や『次元犯罪者』という単語を聞いて、やはりここは自分が生まれた世界だと予想した。  
アリスとアリアもソラと同じ考えに至っていた。

ソラ「俺は管理局の人間でも次元犯罪者でもない」

フェイト「そ、そうなんですか」

フェイトは安心して胸を撫で下ろす。

桂（ん？　なんでソラは管理局と言うものを知っているんだ？）

桂は自分達の世界では聞いた事がない単語をソラが知っていた事を不思議に思い首を傾げた。

それはセイバーも同じだった。

アルフ「嘘は言っていないだろうね？」

アルフはまだ疑っているのか、疑いの眼差しをソラに向ける。

ソラ「分かった。俺達がここに来たわけを話す」

アルフの疑いの眼差しに気づいたソラはすぐに事情を話した。

フェイト「じゃあ貴方達は気がついたら此处にいたんですね？」

ソラ「ああ」

フェイト「なるほど。だから、次元転移による魔力は全く感じなかったのか」

ソラ達から事情を聞いたフェイトは真剣な眼差しで顎に手を当てて納得する。

アルフ「フェイト、コイツ等『次元漂流者』かもしれないね」

桂・エリザベス・セイバー

『『次元漂流者？』』

三人は聞き覚えない単語を聞いて首を傾げた。

ソラとアリスとアリアとリリスは次元漂流者がなんなのか知っているのとくに不思議な顔はしなかった。

フェイト「簡単に言えば迷子です。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人間の事です」

桂「なるほどな」

セイバー「まあ周りのこの景色を見れば一目瞭然ですが」

エリザベス『確かに』

桂はあまり驚きもせず、納得したように言い、セイバーとエリザベスは一言で異世界と分かる光景を見ている。

アルフ「それにしてもなんであなたは管理局や次元犯罪所の事を分かっていたんだい？」

アルフの意見は最もだとフェイトも思った。

ソラ達の世界はたぶん管理局が管理されていない世界、管理局の言う所の『管理外世界』だろう。

なら何故そこに住んでいるソラが管理局や次元犯罪者を知っている事はおかしい。

ソラはフェイトとアルフに何故自分が管理局や次元犯罪者と言う言葉を知っているかを説明した。

フェイトが子供である事と、自分の事を無闇に話さないソラは研究所の事はほとんど省いて事故で江戸に来てしまった話した。

ちなみにアリスとアリアとリリスも自分と同じ境遇である事と、リリスが融合騎、つまりユニゾンデバイスである事を説明した。

ただ、フェイトとアルフも融合騎やユニゾンデバイスの事は知らないように、首を傾げていた事にソラ達は苦笑していた。

アルフ「あんたも結構大変目にあっただんだねえ」

アルフはソラ達の話聞いて、同情の目線を向けていた。

フェイトも同じような目線を向けていた。

ソラ「別にそこまで不幸な事じゃない」

ソラはたいした事はないと言う風に言う。

フェイト「とりあえず母さんの所に来てくれませんか？」

ソラ「分かった。お前らも良いか？」

ソラは了承し、後ろを向いて他の面々がいいかどうか聞く。

アリス達も頷く。

ソラ「じゃあ案内を頼む。つと、その前に自己紹介しとくか。俺は天道ソラだ。元の世界じゃなんでもやる万事屋ってのをやっている」

アリス「私はアリスだ。万事屋の従業員の一人であり、ここにいるソラのフェアンセ「じゃないからな」……冷たいなあ」

ソラの肩に手を乗せて嘘（本人のマジ）を言うアリスの言葉を訂正する。

アリスの嘘（本人はマジ）を聞いたフェイトは少し不機嫌そうな顔をしていた。

アリア「私はアリア。万事屋の従業員。ソラの彼女「でもない」……ケチ」

アリアは少しイジケタ。言うでもないが、訂正したのはソラ。

リリス「私はリリスです。万事屋の従業員で、ソラ様のユニゾンデ

バイスです」

リリスは丁寧な頭を下げて自己紹介をした。

セイバー「私はソラのサーヴァントのセイバーです」

セイバーは凜とした顔で礼儀正しく自己紹介をした。

桂「俺は桂小太郎、革命家だ。好物は蕎麦だ」

エリザベス「エリザベスです」

何故か好物言う桂とボードで挨拶するエリザベス。

アルフとフェイトはエリザベスにまだ鳴れてなのか、苦笑していた。

フェイト「私はフェイト・テストロッサです」

アルフ「あたしはアルフ」

二人も自己紹介をした。

ソラ「じゃあお前の母親の所に案内してくれ」

フェイト「はい」

ソラ「それと、無理に敬語使わなくてもいいぞ」

ソラはフェイトの言葉遣いがきこえないと感じたので、気を使わなくて良いと言った。

フェイト「は……………う、うん／＼」

フェイトは少し頬を赤くして答えた。

その後、ソラ達はフェイトとアルフに案内されながらそれぞれの事を話していた。

例えばセイバーの言ったサーヴァントの説明や桂の言った革命家などの説明をしたり、フェイトやアルフに神楽や銀時やヤミやライダーやライホースを知っているか聞いたりしながらフェイトの母親の所にむかった。

一方その頃。

神楽「キャッホオオオ！！　　なんか魔王の城みたいネ！！」

気がついた神楽はゲームやアニメでしか見た事ないような物ばかりで溢れかえっている『時の庭園』を見て興奮してしまい、ソラ達を置いてずんずん探検していた。

今の神楽の心境はダンジョンを探検する冒険家や勇者のような状態だ。

神楽は目を年相応の子供のように目を輝かせながら廊下を歩いていた。

そしてある部屋の近くに来た時、

???「それは本当なんでしょうね？」

???「ああ本当だ」

話し声が聞こえた。声音からして一人が男で一人が女だと分かった。

神楽「何アルか？」

気になった神楽は少しドアを開いて中を覗いた。

女性「ジュエルシードがあればあの子は蘇るのね？」

男性「ああ、その通りだ。ジェルシードさえあればお前の望みは叶う」

一人は露出度の高い魔女のようなドレスを着て、杖を持った黒髪の女性。

もう一人は足まで届きそうなほどの長髪の銀髪の男で、手にはその男の身長よりも高そうな長刀が握られていた。

女性「あなたの言葉をとりあえずは信じてあげるは、セフィロス」

セフィロス「フツ、安心しろ。お前の望み通りになる」

少し疑いの目を向けながらもセフィロスの言葉を信用する事にした女性。

セフィロスは薄く笑みを浮かべながら言う。ただ、その笑みは何か得体の知れない何かが隠れているようにも見えた。

神楽（な、何アルかあいつ？　なんか凄くヤバイ雰囲気があるネ）

ドアの隙間からセフィロスと女性を見ていた神楽はセフィロスを見て、彼の独特の雰囲気に対し気圧されていた。

本能が“あいつはヤバイ！　関わるな！”と警告していた。

神楽が汗を掻きながらセフィロスを見ていた時、神楽の肩に誰かが手を乗せた。

『お知らせ』

黒龍「またアンケート取ろうと思ってます」

ソラ「つで、どんなアンケート取るつもりなんだ？」

黒龍「こんな感じです」

1・新たに転生者とか天界とか言うところでもない要素を加える。

これになると、ハーレムとか作ろうとするバカ（転生者）を銀時やソラが倒したりなどの色々な要素が増えます。

2・そう言うのはいいらない。

転生者とかそう言う要素がいらないと思う人はこっちを選んでください。

黒龍「とまあ、こんな感じです」

銀時「大体なんでこんなの思いついたんだよ」

黒龍「いや〜こうした方が面白いと思つて」

銀時「行き当たりばつたりにはどがあんだろ!!」

黒龍「つと言つ事で、アンケートの方お願いします」

ソラ「もし1になったらメンドーだな」

銀時「同感だ……」

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!』』

銀八「はい。第二回目の銀八先生コーナーを始めたいと思います」

フェイト「今回のアシスタントのフェイト・テストロッサです。よろしく願います」

フェイトは礼儀正しくペコリと頭を下げる。

銀八「はい、登場して早々キャラ崩壊しかけてるフェイトが今日のアシスタントです」

フェイト「そんな事ないです」

本人は否定してるが、読者は皆キャラ崩壊しているのは知っています。

銀八「じゃあ早速質問いきましょう。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『マリオ』『ソラと銀時を除いた万屋メンバーに質問』『こっちの作者が考えた銀時の仮面ライダーについてどう思う?』」

カブト「同じく万屋メンバーに質問『銀時とソラはどんなウルトラマンが似合うと思う?』」

ネス「銀八先生に質問『銀さんの女性にモテっぷりはどう思います?』頑張つて下さいm(\_\_\_\_\_)m」『めちゃくちゃ腹立つんじやボケEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE!!!!!!!!!!』」

フェイト「いきなり3答えた!?!」

フェイトはいきなり3番目の質問を答えた上に怒鳴り声を上げた銀八に驚く。

銀八「ちくしょう。なんであの天パがモテて俺がモテねえんだチクショー」

銀八は握り拳を作りながら悔しそうにする。

同じ容姿をしてながらこうまで差がある事には相当腹が立っている

ようだ。

フェイト「お、落ち着いてください」

銀八「くそ、いつまで気にしててもしやあねえか。1、2を答えろお前ら」

アリス「くくく、面白いな」それと、銀時はゼアスなんかが似合うんじゃないか？」

アリア「興味ない。似合うならティガ」

ヤミ「どっちも興味ありません」

ライホース「中々強さを秘めていると言った所だな。まあ私は良くは分からないが、ゼロなんかがいいんじゃないか？」

セイバー「強い力を感じますね。私はウルトラマンは良く分かりません」

ライダー「カッコいいと思います／＼／＼ゼロなんかがいいんじゃないでしょうか？」

リリス「カッコいいと思いますよ。私はティガだと思います」

銀八「はい、と言う事で、『鳴神 ソラ』さんはコラボ楽しみにしています。次、ペンネーム『白騎士君』さんから、『白騎士君』ついに・・・無印編が始まったぜ！」

レナード「では、早速質問だ。」

1 結局、白騎士は本編で使わないのか？

2 X？機関の質問の答えはまだですか？

以上だ」

白騎士君「土方さん達にアークナイトをあげます。これで犯罪者や桂を捕まえてください後、黒龍さんにお伝えしたい事が」

レナード「どうした？」

白騎士君「実は．．アークナイトを作ってる途中で事故しちゃって黒龍さんの所の本編に異世界の門が開いてしまいました。てへ」

レナード「てへ」じゃ！ないだろ！！何大変な事をしているんだ！」

白騎士君「大丈夫！こつちから入らなければ問題はない時々あつちからモンスター出てくるが問題は無いだろ」

レナード「大有りだ！（怒）黒龍さんそつちでなんとか頑張ってる下さい」

白騎士君「あつ、黒龍さん達の所にギガース一体向かってる」

果たしてどうなる！？」って、何かかなりメンドーな事になってんじゃないかねえか！！」

銀八はまさかここまで悪い事態が進行していた事に驚く。

フエイト「えっと、じゃあ黒龍答えて」

黒龍「うーん、一応考えてはいるんですが、中々本編に出す機会がないんですね。でも、個人的には出したいと思っています。それと、??機関の部下がアークナイトに変身させるかは今考え中です」

銀八「それよりギガースの方はどうすんだよ!!」

黒龍「セイバーお願いします」

セイバー「仕方ありません。エクスカリバー!!」

ギガース「ぐぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

セイバーの放った金色の閃光がギガースを粉碎した。

銀八「相変わらずすげーな」

黒龍「これで一安心」

銀八「じゃあ『白騎士君』はくれぐれもドジは控えてください」

フエイト「じゃあ次の質問いきます。ペンネーム『真王』さんから、

『真王』おおう、ついに無印のスタートか」

ビビ「ひゃっほーい!次回からなのはちゃん達に会えるう」

真王「ってなんだあんたがここに来るんだよ!」

ビビ「いいじゃない！あ、わたしは『魔法少女リリカルなのは』とある兄妹の転生物語」のゲストのビビ・スティンでっす」  
（＾□＾）／」

真王「やれやれ、先が思いやられそうだ。質問に入る『作者はなぜ神楽をソラ側に？』そして『アリスさんはそらの告白の仕方はどんなかんじで？』」

ビビ「なんかムカつく…。『女性組に質問だけど、同性愛に目覚めない？』この私がか・ら・だ・であなた達を虜にさせてあ・ゲ・ル？」

真王「止める、お前が加入したらストーリーが変わっちまう」

ビビ「チッ！」

真王「・・・おつとそれから記念に10個のドーナツと3着のプリニースーツをプレゼントします。なおプリニースーツを来た人物は投げられると爆発します（ちなみに死にません）」

ビビ「アリスちゃん、アリアちゃん、リリスちゃん、神楽ちゃん、この私のためにメロメロにさせて…」

真王「止めるって！！もうお開きだ！！」『…………えつと、これは…  
…（汗）」

フェイトはどう反応していいか分からず困惑する。

銀八「まああの百合バカの事は気にするな。まあお前は元から百合だしな」

フェイト「私同性愛に目覚めてなんかいません！」

フェイトはさすがに百合娘扱いされるのは心外なので講義する。

銀八「だって、お前よくなのはLOVEって噂じゃん。つうか、四コママンガとか同人誌だと実際そうだし」

フェイト「あんなの読者の勝手な想像です！それに、四コママンガは面白おかしくしただけで、本編とは一切関係ないし、同人誌だって、その書いてる人の勝手な妄想なんです！」

フェイトとしても、勝手に自分をなのはLOVEの百合っ子扱いされて本当に困っているので、強い口調で講義する。

フェイト自身百合扱いされるのは心外なのである。

銀八「分かった分かった。とりあえず質問の答えいくぞ。黒龍、どうして神楽をソラ側にしたんだ？」

黒龍「いや、そうした方がなんか斬新だな〜って思っ」

銀八「めちゃくちゃ安易だなおい。2つ目はアリス答える」

アリス「そうだな。キスした後に告白しようと考えているな」

今言ったアリスの告白が近い将来実行される事はまだ誰も知らない。

銀八「3は、まあうちの小説に百合の奴はいなんであしからず」

フェイト「最後のだけ素っ気ないですね」

銀八「しょうじき同性愛なんてどうでもいいしな。じゃあ『真王』さんはコラボ頑張ってください」

フェイト「次、ペンネーム『黄色いのなにか』さんから、

『やつと無印偏に始まりましたので今日は大盤振る舞いに万事屋と真撰組には、銀×衛とソラ×銀のBL本を皆さんに差し上げます。これを読んで妄想とかしてください（笑）

では質問です。

ソラと銀時に質問。ソラと銀時のアナログスティックは、童貞ですか？それとも非童貞ですか？もしもまだ童貞なら新八以上にやばいですよ？』……アナログスティック？」

フェイトはアナログスティックが何の意味か分らず首を傾げる。

銀八「フェイトは知らなくても良い事です。じゃあ童貞共答えろ」

銀時・ソラ

『『殺すぞ？』』

二人は額青筋浮かべて殺気出していた。かなり怒っているみたいだ。

銀八「はい、『黄色いのなにか』さんは二人をあまり刺激しないように気をつけてください。次、ペンネーム『黒神』さんから、

『黒神

「とりあえずほいと」

黒神は適当に桂の球型爆弾を、突然怒りを放って襲い掛かる新八に向けて投げると、

ドカーン！！

新八

「うぎゃあああああああああああ……いきなり退却ウウウウ!?」

相変わらずの扱いに新八は叫びだす。

黒神

「んじゃ、童貞しんはちの件は終了した事だし……質問するか」

その1 ライダーへ

こっちの銀時はメツチャモテまくっていますが、それを見てどう思いますか、（黒笑）

その2 セイバーへ

二年後の飛び級の美女として成長した神楽の姿を見てどう思いますか？

その3 アーチャーへ

僕も偽善な連中は好きじゃありません。

特に管理局なんかが…もし士郎が管理局の考えは正しいとぬかしたら、『突き刺す死翔の槍』<sup>グレイ・ボルグ</sup>を投影してあの偽善馬鹿の尻に浣腸してイボ痔にさせちゃってください。

黒神

「以上です♪（黒笑）」

銀時

「つつか2つの質問はマジ黒いなおい!!」『相変わらず黒いなおいつ…』

銀八は黒神さんの腹黒さに呆れる。

銀八「まあとりあえず、1の答え」

ライダー「……………」ゴゴゴゴゴゴゴ

銀八「こええええええええええええええええええ!!」何コレ！  
？ なんかめちゃくちゃ怖いんだけど!？」

銀八は顔を真っ青にさせ、フェイトは部屋の隅にうずくまってガタガタ震えていた。

無言の圧力とはこの事を言うのだろうか。無口無表情は時に笑顔の迫力や言葉の迫力を凌ぐと言う事を銀八とフェイトは思い知った。

銀八「え、えつと、2の答え……」



フェイト「それにしても怖かった……（涙）」

銀八「それは同感だ。じゃあ3番の答えを頼むぜアーチャー」

アーチャー「黒神の提案は中々に魅力的だが、私はそう言う事はしない主義なのでな。ま、私個人からしてみれば、君とは気が合いそうだ。機会があれば、今度お茶の席をもうけたいものだ。最後に一つ言っておくが、士郎の思想がいつか看破される時が来ると私思っている」

銀八「はい、意見ありがとうございます」

フェイト「噂通りの現実主義ですね」

銀八「まあな。とてもあの士郎と同一人物とは思えねえな。じゃあ、『黒神』さんはとりあえず、死なないように気をつけてください」

フェイト「今回はコレで終わりですね」

銀八「ああ。あ、そう言えば、読者から貰ったプレゼントの影響でとんでもない事が起こってるぜ」

フェイト「え？」

フェイトが目を向けた先には……

ソラ・銀時

『オボ□□□□□□□□□□』

BL小説を見てあまりの嫌悪感に嘔吐している銀時とソラ。

ギガス「ぐがああああああああああ！！！」

新八「うわー！　ギガスが復活した！！！」

黒龍「じゃあ新八、このプリニースーツを着てください」

黒龍は新八にプリニースーツを着せる。

新八「えッ？　ちよっ、まさか……」

黒龍「どりゃあああああああ！！！」

新八「ぎゃあああああああああ！！！」

黒龍はプリニー新八をギガスに向かってぶん投げた。

ドカーン！！

ギガス「ぐぎゃあああああああああ！！！」

ギガス撃破。

そんな光景を見ていたフェイトは……

フェイト「ソラ！　大丈夫！？」

フェイトは急いでソラの元に駆け寄った。

銀八「ああ、やっぱソラか。じゃあまた次回のよろしくお願いしま  
す」

## 第十二訓：魔法少女はマジでいる（後書き）

新八「黒龍うううううううううう！！！！！！」

新八は黒龍を殴るが、黒龍はヒョイツと避ける。

黒龍「そんな攻撃当たるわけないでしょ」

新八「ちくしょうーーーー！！！！！！」

フェイト「え、えっと、次回、『主人公は厄介ごとに巻き込まれるのがお決まり』にテイクオフ」

第十三訓：主人公は厄介ことに巻き込まれるのがお決まり（前書き）

黒龍「すみません！！期末テスト二週間前なので更新めちゃくちゃ遅くなってます！！申し訳ございません！！」↑土下座

銀時「それによお、次の投稿も二週間先になるんだろ？」

ソラ「まったく…」

黒龍「読者の方々にもう一度申し上げます。すみません！！」↑深い深い土下座

### 第十三訓：主人公は厄介ごとに巻き込まれるのがお決まり

ソラと桂とエリザベスとアリスと神楽とリリスとセイバーとアリアが『時の庭園』でフェイトに会っている頃、地球にある『海鳴市』の住宅街のコンクリートでできた壁と道がある道路。

そこには『次元跳躍装置』で此处、『海鳴市』に飛ばされた坂田銀時、志村新八、ライダーの三人は目を覚まし道に座っていた。

銀時「だアアア！！ チクショー！！ あのクソジジイのせいだなんか良く分からねえ場所に飛ばされちまったじゃねえか！！ あのクソジジイイイ！！ 帰ったらぜってえ瞬間移動させてやるからなー！！」

目が覚めた銀時は現在進行形で怒りを露にしながら怒鳴り散らしていた。

怒り心頭だと言う事が丸分かりだった。

新八「落ち着いてください銀さん！！ 確かにその事について僕も同意見ですけど、今は怒っていても何も始まらないでしょ！！」

新八はなんとか銀時宥めようとする。

新八とて、こんな見た事ない場所に飛ばされた事には怒りを覚えるが、今は怒っていても仕方ないので、銀時を落ち着かせようとしている。

ライダー「しかし、周りを見ても知らない建物ばかり……やはりここは江戸ではない事は明らかにですね」

ライダーは冷静に周りを見ながら此処が江戸ではない事を分析する。

銀時「ああ、ちくしょう！ イライラする！ あの綺麗な星空までイライラする！ あんなに綺麗なのにイ！！」

銀時は顔を上げて怒鳴る。

ライダー「まあ確かにこんな綺麗な星空はそうそう拝めませんね」

ライダーは微笑を浮かべながら星空を見る。

新八「呑気すぎでしょあんたは！！」

新八はあまりにも今の事態を呑気に構えているライダーにツツコム。

ライダー「ん？」

その時、ライダーはある気配に気づく。

ライダー（これは、魔力。しかし、この異様な感覚は……）

ライダーが感じたのは魔力である。だが、どうにもその魔力は妙な感じがした。

銀時「どうしたんだライダー？」

ライダーの変化に気づいた銀時は質問する。

ライダー「向こうの方に妙な魔力を感じます」

ライダーは魔力の発信源を指指しながら言う。距離からして自分達の位置からそれほど遠くはない。

新八「えっ！？　じゃあ魔術師がいるんですか！？」

銀時「そりゃあ良いじゃねえか。その魔術師にここがどこだか聞こうぜ」

新八はライダーの言葉から魔術師がいるのだと考えて驚き、銀時はまさに地獄に仏と言う感じに嬉しそうにする。  
だが、ライダーは違うと言う風に首を横に振る。

ライダー「いえ、これは魔術師の魔力とは違います」

新八「じゃあ一体……」

新八が「じゃあ一体魔力の正体は何なんですか？」と機構とした時、

ドカーン！！

三人

『！？』

ライダーの指した方向で爆発音にも似た何かが壊れる音がした。

銀時「っ！？　新八、ライダー、行くぞ！」

銀時は音を聞いて驚いた後、腰に挿してある柄に『洞爺湖』と書かれた銀時の木刀である『洞爺湖』を握り締めながら轟音がした方に

走って行った。

新八「あつ！ 待ってください銀さん！！」

新八は慌てて銀時の後を追ひ、ライダーは無言で銀時の後を追いかけた。

銀時達が聞いた轟音の発信源は動物病院。

そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテールに結んだ少女――

「高町なのは」がフェレット抱えていた。

そして驚く彼女の眼前には病院の壁に埋まってもがいている、なんと言つかマッククロクロスケみたいな感じの体全体が粘土みたいに感じの化け物がいた。

しかも体がブヨブヨと形を変えて少々気持ち悪ささへ覚えてしまう。

なのはは慌てて病院の門から外に出てフェレットを抱きかかえながら逃げる。

一つ言っておくが、彼女の日常はこんなとんでもない化け物と遭遇するような非常識な日常ではない。

小学三年生の極々平凡な美少女である。彼女は美少女なのである。

ここ大事なので二回言いました！

なのはは学校に帰りに酷い怪我をしたフェレットを拾い、動物病院で手当してもらった。

そしてその夜頭の中に謎の声が聞こえ、気になったなのはは動物病

院に来た。

そして今の状態になり、現在進行形で逃げていると言っわけである。

なのはSIDE

私、高町なのははフェレットさんを抱えてあの、変な怪物から逃げています。

あの怪物にも驚いたけど、フェレットさんが喋った事にも正直驚いています。

それに周りにも景色もおかしいし、正直頭の中はぐちゃぐちゃなの。

フェレット「あの、お礼は必ずします！ だから僕にあなたの力を

……！」

なのは「お礼とかそんな事言ってる場合じゃないでしょ」

フェレットさんがさっき私に力があるって言ったけど、正直私にそんな力があるかは分からない。

全然今の状況は把握できないけど、あの怪物をどうにかする力があるなら――。

怪物「ぐおおおおおおおー！」

私が逃げながらそう考えていると、怪物が雄たけびを上げて私に飛び掛ってきた。

なのは「っー！」

私はもうダメだと思い思わず目を瞑ってしまった。  
でも、いつまで経ってもくるはずの痛みがこない事を不思議に思っ  
た私はゆっくりと目を開けた。

銀髪の男「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

黒い服の上に白い和服を半分抜いた状態で着て、銀髪に木刀を持っ  
た男の人が立っていました。

### 三人称視点

なのはが怪物に襲われそうになった時、銀時が咄嗟になのはに前に  
立って怪物を木刀でぶっ飛ばしたのである。

怪物はコンクリート壁にぶつかり、壁は粉碎していた。そして土煙  
が上がり怪物の姿が見えなくなる。

銀時「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

銀時またメンドーな事に首を突っ込んでしまったと思い、メンドく  
さそうに頭を掻く。  
そして後ろにいるなのはに顔を向ける。

銀時「——っで、大丈夫かお前？」

なのは「えっ！ は、はい。ありがとうございます！」

なのははお礼を言っ て頭を下げてる。

フェレット「あの、ありがとうございます」

フェレットも頭を下げてお礼を言っ た。

銀時「イタチが喋っ た!？」

銀時はフェレットが喋っ た事に驚いた。

フェレット「あの、フェレットなんですけど……」

銀時「イタチもフェレットもあんな変わんないだろ」

フェレット「いや、変わりますっ て!」

ドカーン!!

怪物「ぐおおおおおおお!!」

銀時にぶっ 飛ばされた怪物は怒っ たような感じで出てくる。

銀時「改めて見ると気色悪いなコイツ……」

得体の知れない怪物相手にも銀時はいつもダラけた様子で平然と軽口を叩く。

エイリアンとかとんでもない化け物と戦っている銀時にとって目の前の怪物は大した事ない相手である。

銀時は横目で怪物を見ながらなのはに話し掛ける。

銀時「えつと、お前ら名前は？」

なのは「えっ？……え、えつと。私は、高町なのはです」

ユーノ「僕は、『ユーノ・スクライア』です」

なのはとユーノは戸惑いながら自己紹介をした。

銀時「じゃあ、なのはとユーノ。お前らはそこにいろよ」

銀時は軽く手を振ると、怪物の元に向かう。

ユーノ「えっ！？　ちよつと待ってください！　危ないですよ！！」

ユーノは必死叫んで銀時を止めようとする。

さつきは木刀で怪物を吹き飛ばしたのをユーノは見ていた。

だが、アレは『ジュエルシード』と言う『ロストロギア』の思念体。魔法も使えない銀時がどうにかできる相手ではない。

銀時にも自分を抱きかかえているなのは同様『リンカーコア』があり、しかもなのはよりも遥かに高い魔力量を有しているのが分かる。だが、なのは同様彼も魔法の力に目覚めていない事も分かっている。

つまり銀時は魔法のなしの肉弾戦で戦わなければならない。それは無謀としか言いようがない。

だが、ユーノの予想を大きく上回る出来事が目の前で起きた。

ズバババババババババババ！！

銀時が近づいた時に思念体が襲い掛かってきたが、銀時は凄まじいスピードで木刀を振り思念体を縦に横に斜めにとバラバラに切り裂いていった。

なのは「す……すごい！」

ユーノ「なんて強さだ……」

なのはとユーノは銀時達の強さに驚いていた。バラバラになった怪物の破片は周りに飛び散り、壁を壊したり電柱が折れたりなど所々をぶっ壊していく。

なのはは銀時の剣の強さに見惚れていた。自分の家族も剣の腕はかなりの物だが、銀時の剣技はそれ以上の物を感じた。

銀時「はい、終了」

銀時は思念体を倒したと思い、木刀を腰に挿しなのはとユーノの所に戻る。

だが、思念体の欠片はじょじょに集まっていき、さっきの丸いブヨブヨの怪物に戻る。

思念体「ぐおおおおおおお！！！」

思念体は雄たけびを上げて銀時に飛び掛る。

なのは「危ない！」

なのはが叫び声を上げ、銀時と後ろ振り向く。油断していた事もあ

り反応が遅れた銀時は木刀の刀身を使って防ごうとした時、

グサ！×2

思念体「！！？？？」

二本の鎖に繋がれたダガーが思念体の体を貫く。そして思念体を繋がれた鎖でグルグル巻きにして動きを封じる。

ライダー「ギントキ、油断しぎです」

空からライダーが降りて、銀時に注意する。

ただ、彼女の服装はさっきまで眼鏡に長袖のＴシャツにジーパンを履いた姿ではなく、紫色のマスクを付けて短いスカートで動きやすい黒のスーツを身に纏った状態になっている。

銀時「わりいなライダー」

銀時は頭を掻きながら礼を言う。

ライダー「マスターを助けるのはサーヴァントとして当然です／＼」

ライダーは少し顔を赤くさせながら嬉しそうに言う。内心銀時に礼を言われて嬉しいのである。

新八「ハア、ハア！ 待つてくださいよライダーさん！ 銀さん！」

息を切らしながら新八がやって来る。

銀時とライダーに追いつけず、遅れての登場だ。だらしない。



新八の目の前にいる人物はどっからどう見てもアニメに出てくるなのはそっくりと言うか本人だ。

ただ、リリカルなのははその題名と深夜枠に放送されているからして若干アニメオタクが見るアニメなのだ。

生粋のアイドルオタクである新八が何故そんなアニメオタクが見るようなアニメを知っているかは、それは後々話すしよう。

兎に角、リリカルなのはの存在のなのはが目の前にいる事に新八は絶賛混乱中なのである。

そしてそんな新八の様子を見ていたなのはは、

なのは「えっと、その……」

汗を掻きながら困惑の顔をしていた。

一方、ジュエルシードの思念体と戦っている銀時とライダー。

ライダー「しつこいですね」

銀時「たくよーしつこい奴は嫌われるぜ」

鋭い目で鎖でグルグル巻きにされた思念体を見ていた。

思念体は体を粘土のようにバラバラにさせて鎖から抜け出そうとしていた。

そして、鎖から抜け出し、また体一つにする。

銀時「チッ……こいつ不死身かよ」

ライダー（こうなれば、あまり使いたくありませんがアレを使ってこの怪物を石に……）

銀時はバラバラにしてもいくらでも再生する思念体を見て舌打ちした。

ライダーは自分の奥の手である、石化の力を持つ魔眼『キュベレイ』を使おうとマスクに手を掛ける。

なのは「どうすればいいの!？」

なのはは目の前で何度もバラバラにしても再生する思念体を見て不安そうな顔をしながら声を上げる。

ユーノ「いけない! あれをなんとかするには『封印』しなければいけないんだ!」

なのは「その封印って、どうすればできるの?」

なのはがユーノから封印の方法を聞こうとする。その間も銀時は怪物と戦っていた。

しかしいくらバラバラにしてもすぐに再生するので銀時は休み無く戦っていた。

ライダーはマスクを外そうか外さまいかと迷っていた。

ユーノ「さっき言った事は覚えてる?」

なのは「魔法のこと?」

ユーノ「そう、それ使うにはさっき渡した宝石が必要なんだ」

なのは「これの事?」

なのはは、さつきフェレットから貰った赤い綺麗な宝石を見せた。

ユーノ「それで、それを手に、目を閉じ……心を澄ませて……僕の言ったとおりに繰り返して……」

なのはは目を閉じユーノの言葉を繰り返す。

ユーノ「我……使命を受けし者なり……」

なのは「我……使命を受けし者なり……」

ユーノ「契約の元、その力を解き放て」

なのは「えと、契約の元その力を解き放て」

ユーノ「風は天に…星は空に……」

なのは「風は天に…星は空に……」

ユーノ「そして、不屈の心は……」

なのは「そして、不屈の心は……」

新八「えっちょッ、二人共何やってるの？」

新八はなのはとユーノが呪文を唱えている事に気づき、困惑の顔をしながら二人に質問するが、二人は最後の呪文の言葉を言う。

なのは・ユーノ

『『この胸に！』』

なのはとユーノの声が重なった。

なのは・ユーノ

『この手に魔法を……レイジングハート！ セーット、アープ  
！！』

するとなのはの体が光に包まれた。

レイジングハート<Stand by ready, set up  
！>

新八「何コレEEEEEEEEEE！！？ どうなってるの！？」

ライダー「この光は一体！？」

銀時「うわっ！ 眩し！？」

あまりの光に三人が目細める。

光が収まると白いバリアジャケットを着て、手にレイジングハート  
を持って浮かんでいるなのはの姿があった。 銀時と新八とライダー  
はなのはのその姿を見て啞然とした。

ユーノ「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方  
式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神  
エネルギーです！！そしてあれは……忌まわしい力の元に生み出さ  
れてしまった思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して  
元の姿に戻さないと行けないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

なのは「よく分かんないけど……どうすればいいの？」

ユーノ「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

なのは「呪文？」

ユーノ「心を澄まして……心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ  
そう言われてなのは目を閉る。そしてなのは目を開ける、その  
目は真剣そのものだった。

なのは「リリカル、マジカル」

ユーノ「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらユーノは叫ぶ。

なのは「ジュエルシード、封印！」

レイハ（レイジングハートの略）<Sealing Mode .  
Set up>

なのはの魔力系が敵を縛り上げ、怪物の額に『???』の文字が浮かび上がる。

レイハ<Stand by ready>

なのは「リリカル、マジカル……ジュエルシード、シリアル???、

封印！」

その時銀時が、

銀時「なに、あのセリフ！？ 恥ずくない！」

場の空気を壊すようなセリフを言った。ただ、やっぱり恥ずかしいのは本当だ。

レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

レイハ<sealing>

そして、なのはの魔力系が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

ユーノ「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近づけるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込んだ。それと同時に周りの景色が異空間のような不思議な景色から元の普通の景色に戻った。

そしてゆっくりと地面に降りる。

なのは「ふう……」

なのははバリアジャケットを解き、安心して息を吐く。そしてバタリとユーノが気を失って地面に倒れた。

なのは「フェレットさん大丈夫！？」

なのはは気絶したユーノを抱きかかえて心配そうな顔をする。  
さっきのユーノだって自己紹介したって言うに……。

銀時「な、なあ」

なのは「ふえっ!? な、なんですか?」

突然銀時に声を掛けられたなのはは驚いた顔で聞く。

銀時「いや、ここにいると不味くね?」

なのは「えっ?」

なのはは銀時に言われ、周りの景色を見る。道路や電柱は壊れたり  
没落したりなどかなり酷い状況だった。  
更に、

ピーポーポーピーポーポー!

パトカーのサイレンの音が向こう側から響いてきた。

新八「あ、あの、銀さん。どっからどう見たってこの状況は僕等が  
やったようにしか……」

新八が汗をダラダラ流しながら銀時の顔を見て言うと同時に、

銀時「に、逃げろオオオオオオオオオオ!!!」

なのは「い、ごめんなさー……い!」



何故独り言をブツブツ言うのかは分からないが、コレが彼のスタンダードな状態なのだろう。

男「にしても、やっぱ本来の歴史と違うってわけか。確認確認っ」と

男は手を前にかざすと目の前に闇が現れ、そして男はその闇の中に入って行った。そして闇は消えた。

銀時達は必死の体で走った後、公園の前に辿り着いていた。

銀時「ふ〜。ここまでくれば大丈夫だな」

いくら銀時でもさつき戦った上に全力疾走し続けたにも関わらず、さほど息は切らしていなかった。

なのは「ハア、ハア……は、い……ハア、ハア、ハア、ゲホ、ゴホ」

なのはあまりにも体力使ってしまったって咳き込むほどの状態になっていた。

仕方ない。彼女は運動方面はあまり得意とは言えないのだ。

ライダー「ええそうですね」

さすがはサーヴァントと言うべきか、ライダーは真顔で答えた。

新八「ゼエ、ゼエ、ゼエ、ゼエ！」

新八は体力ほとんど使ってしまったて、倒れている始末。

新八ははつきり言つて戦つてすらいなのに……。

そして銀時達は域を整えた後、公園のベンチでなのはとユーノから話してを聞いて現状確認と情報収集をする事にした。

そして銀時達が公園に入った時、公園に四人の影がいるのに気がついた。

新八「あ、アレってまさか……！？」

月明かりがあつた事もあつて、さほど近づくかなくとも人影が誰かすぐに分かつた。

新八は影の正体を見て驚愕の顔をしていた。

そう、それは新八、銀時、ライダーにとって良く知る人物だつた。

近藤「おっ！ まさか新八君！？ こんな所で会つなんて奇遇じゃないか！！」

真撰組局長でもあり、新八の姉である『志村妙』しむらたえをいつも執拗にストーキングするゴリラ顔のバカ、黒髪の男性——近藤勲。こんどういさお

その後ろにはタバコを吸っている瞳孔が開き気味で鋭い目線だが、それなりに顔の整つた二枚目。だが、ニコチン中毒者でマヨラーなのが残念。

そして真撰組の副長に鬼の副長と恐れられるな黒髪の男性——  
土方十四郎。ひじかたしゅうろう

その横には眠そうにしている栗色のサラサラヘアの二枚目。だが、腹黒のドS少年なのがかなり残念。

真撰組の一番隊隊長にしているいつも副長の座を虎視眈々と狙っている

おきたてつし

男——沖田総悟。

そして沖田の横には黒髪の新八並に特徴がない所が特徴の地味な男。真撰組の監察方（密偵）。

趣味はミントンにガバディーで、真撰組1の苦勞人——やまだきさがる山崎退。

まさかの真撰組四人登場！？

『お知らせ』

黒龍「ええ、前回アンケートの中間発表です」

1・新たに転生者とか天界とか言うところでもない要素を加える。

これになると、ハーレムとか作ろうとするバカ（転生者）を銀時やソラが倒したりなどの色々な要素が増えます。

四票

2・そう言うのはいらない。

転生者とかそう言う要素がいらないと思う人はこっちを選んでください。

二票

黒龍「まだアンケートは続行中なので、どしどし投票してください！」

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はい。じゃあ今回も銀八先生コーナーいきます」

なのは「今回アシスタントに呼ばれました高町なのはです。よろしくお願いします」

なのはペコリと頭を下げる。

銀八「ええ、絶賛魔砲少女になりつつある、なのはが今回のアシスタントです」

なのは「アレ…？　なんか、魔法少女の“魔法”のニュアンスがおかしかったような…？」

銀八「そんな事は気にせず、どんどん進めていきましょう。今回もたくさんの質問が来ています。ペンネーム、『鳴神 ソラ』さんか

ら、

『ネス』と言う訳で質問『仮面ライダーネオスについてどう思いますか？』」

リユカ「フェイトさんに質問『仮面ライダーティガはどう思いますか？』」

マリオ「ソラに質問『俺の弟子の2人はどう思う？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます♪』ええ、黒龍は三つとも知らないで答えられません」

なのは「え？ そうなんですか？」

銀八「ああ、黒龍は仮面ライダーネオス、ティガ、そしてマリオの弟子二人を見た事ねえそうだから、答えられないそうだ」

なのは「そ、そうなんですか……（汗）」

銀八「つと言う事なんで、答えられなくてすみません。廊下に立たなくて結構です。次、ペンネーム『なっぺ』さんから、  
『ソラへ

・ペガサスフォーム用の射貫くものは何か常備してるんですか？  
もし常備してたとしたら、何を常備してるんですか？

銀さんへ

・甘いもの食べても糖尿病にならない方法がありますよ。それは……秘密。

→知りたいですか?」ええ、じゃあ二人答える」

ソラ「ああ、俺は射抜くものじゃなくても変える事ができるんでな。木刀一つで事足りるぜ」

銀時「えっ!? マジで知ってんの!? なら教える! 秘密にしないでさっさと教える! でないともつと嫌がらせを吼太にするかな!」

なのは「えっと、銀さん……甘い物はほどにした方が良いと思うの。それと、なんでなっぺさんじゃないんだろ?」

銀八「弄りやすさの違いじゃね? まあ、俺としても二番の事は正直知りたいので、なっぺさん、良いお返事を待っています。それと、初めての感想ありがとうございます」

なのは「じゃあ次、ペンネーム『世紀末雑魚』さんから、

『さて、言いたい事も終わったし、質問してよろしいでしょうか?」

Q・フェイトさん、貴方もしかして Mですか?

以上です。』……Mって何だろ?」

銀八「それは銀時の野郎に教えてもらえ。じゃあフェイト、答える」

フェイト「えっと、Mって…何?」

銀八「ええ、子供である彼女達はまったく知らないと言う事ですね。『世紀末雑魚』さん初めての感想ありがとうございます。次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』「ただ面倒事が嫌いなんだ。まあいいや質問に入る。『桂さんって形から入るタイプですか？』『なぜセフィロス登場した！？』『皆さんはグレイ・ステイン（鬼神化）と戦って勝てますか？』の3本です。ちなみに鬼神グレイの強さは『魔法少女リリカルなのは』とある兄妹の転生物語』から『#63-G 起源覚醒（オニ、メザメル）』を見ると分かります」……まああんま聞きたかねえけど、ツラ、答えろ」

桂「ツラじゃない桂だ。うむ、形から入る事は大事だぞ」

銀八「じゃあ2」

黒龍「ええっと、俺はセフィロスが気に入りのキャラだったから出そうと思いました。それに、セフィロスは高杉並に敵キャラとしてクオリティが高いからです」

銀八「あんなチート野郎に銀時やソラが勝てんのか？」

黒龍「分かりません」

銀八「……………」

フェイト「わ、私はソラが勝つって信じています！」

フェイトは信じきった目で言う。よっぽどソラを信頼しているようだ。

なのは「って言うか、なんでフェイトちゃんが途中参加してるの？」

なのははいきなり現れたフェイトに首を傾げる。どうやら、フェイトも今からこの感想コーナーに参加するようだ。

銀八「相変わらずソラLOVEだな」

フェイト「……………／／／／／」

なのは「フェイトちゃん、顔真っ赤だね」

フェイトはさっきの発言が恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして俯く。

そんなフェイトの様子をなのはは笑顔で見守っている。

銀八「ええ、3番は黒龍が『魔法少女リリカルなのは』とある兄妹の転生物語』を見てないので2番の質問には答えられません。すみません」

フェイト「私からもお詫び申し上げます」

なのは「ごめんなさい」

銀八とフェイトとなのはは頭を下げる。

銀八「つと言う事で、真王さんは黒龍が何の小説を読んでも確かめてから質問してください」

フェイト「じゃあ次は私が見るね。ペンネーム『月光閃火』さんか



銀八は月光閃火さんのとんでもない質問に絶叫し、我等がアイドル  
フェイトちゃんは……

フェイト「やつぱり、ソラが責めだよな？／＼で、でも、私が責  
めるのも……それとも、やつぱりお互いを気遣って……ど、どうしよ  
う？／＼／＼わ、私頑張れるかな？／＼／＼そ、ソラの期待に答  
えられるかな？／＼／＼や、やつぱりソラをガツカリさせないため  
にも色々と勉強を……／＼／＼／」

妄想の世界にトリップしていた。

銀八「フェイトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？  
？？お前に何とんでもない妄想にドップリ浸ってんの！？」

なのは「フェイトちゃーん！！カムバツ！！！！！！ク！  
！！」

二人の叫びも虚しくフェイトは自分の世界に入って色々危ない発言  
をブツブツ言い始めてしまった。

銀八「しょうがねえ、フェイトは放って置くしかねえな。2は黒龍  
が答える」

黒龍「ええ、一応セフィロス以外は出ささないからはまだ考え  
中です」

銀八「はい、月光閃火さんとはりあえず、セクハラ質問に気をつけ  
てください。それと、初めての感想ありがとうございます」

なのは「次は、ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから、  
『亀鳥虎龍』です。」

楽しく読ませて頂いています。

質問。

1・万事屋メンバーに質問。僕の小説『万事屋奇譚幕』の万事屋メンバーと主人公達&ヒロイン達を見た感想は？

2・新八に質問。こっちでは、阿良々木にツツコミの座を奪われた自分を見てどう思いますか？

3・銀さんに質問。こっちでは、四人の主人公に主役の座を奪われた自分を見てどう思いますか？

4・黒龍先生に質問。好きな仮面ライダーとウルトラマンは誰ですか？因みに僕の好きな仮面ライダーは、一番がクウガで二番がカブト、三番がWで、ウルトラマンの方が、ティガとゾフィーです。』  
……にや〜どうしよう？」

なのはは困った表情をする。実の所、作者の黒龍は『万事屋奇譚幕』をまったく見ていないのである。

銀八「ええ、1・2・3の質問は答えられません。すみません。それと、質問は三つまでにしてください。三つとも答えられないので、今回は特別に4番を黒龍に答えてもらいます」

黒龍「俺が好きな仮面ライダーはクウガやディケイドやカブトですね。ウルトラマンなら、ダイナあたりですね」

銀八「ウルトラマンはチョイス古いな」

黒龍「いや、ダイナは古くないでしょ」

銀八「つと言っわけで、『亀鳥虎龍』さん初めての質問ありがとう  
ございました。次、ペンネーム『黒神さんから、

『セイバー・ライダー

』『黒神、覚悟オオオオオ!!』」

怒り任せに黒神を襲いだす2人。

そして黒神は黒笑いして、2つのある物体を出す。  
それは……

黒神

「食らえ、シャマパイじゃあああ!!」

ベチャ!!

セイバー・ライダー

『『うぎゃああああああああああああああ!!!!  
』』

シャマルの新作極悪料理ことシャマパイに、この世とは思えない不  
味さに思わず悲鳴をあげる2人は気絶して倒れる。  
その中身は何と、蛆虫が入っていた。

さらにシャマルの手作りだけあって、数百倍は不味くなっている。

黒神

「さて、質問しますか？」

マヨラーへ

前にも聞きましたが、僕の小説では貴方の出番は少ないのに対し、桂の出番は主役並みに多いです。

そんな桂を見てどう思いますか？（黒笑）

沖田へ

こっちのマヨラーははやてに惚れています、はやては桂に惚れています。

しかも接吻する中になっていて、もしマヨラーがそれを知ったらどれだけの絶望的な失恋をするか想像してみてください。」

アーチャーへ

僕と気が合いそうな貴方に対して質問します。

貴方にとって最強の武器とは何だと思いますか？

是非とも聞かせてください。『……黒神もエグイ事するな……』」

銀八は呆れ顔になる。

さすがに今回はライダーとセイバーが可哀想に見えた。

なのは「大丈夫かな？セイバーさんとライダーさん…」

なのはは心配そうな顔をする。

銀八「はつきり言つて、あの二人はシャマパイがかなりトラウマになったそうだぜ。今病院で意識不明の重体だそうだ」

なのは「それかなり危ない状態じゃないですか!？」

料理食べただけで、そんな状態になるのだから、どれだけシャマパイが危険な物なのか想像してなのはは顔を青くさせる。

銀八「まあ一応命は取り留めたらしんだけどよ、起きた後黒神の写真がついたわら人形の胸にずっと釘を打ち付けてるらしいぜ」

なのは「それもう呪い殺す域じゃないんですか!？」

銀八「そんでもって、打ちつけながら“黒神クロス”って連呼してるらしいぜ」

なのはそれを聞いてガタガタ震えていた。二人の怒りが話を聞くだけでもかなりのモノだと分かったからだ。

銀八「じゃあ質問の答えだ。つつか、ホント懲りないなアイツ……」

銀八は呆れ顔になりながら、質問にされた人達を見る。

土方「黒神————!!!!!!テメーは命が惜しくねえのかアアアアアアアアアア!!!!!!」

土方は自分の扱いが黒神さんの所だとどれだけ不遇な扱いなのか知り怒りを爆発させる。

土方「もう我慢ならねー！！アイツだけは叩き切ってやる！！」

銀八「おいおい、どうせまた返り討ちに合うのが落ちだぜ」

土方が黒神の所に報復の所に行った所で結果は見えてるので、銀八は土方に諦めると言う。

土方「そんなの関係あるかアアアアアアアアアアアア！！！！」

ピカーン！！

土方の怒気がMAXどころかリミッター振り切れ、土方を蒼いオーラが包み込む。

銀八「うおっ！？何だ！？」

なのは「何コレ！？」

二人は眩しさのあまり目を瞑り、そして光が収まったの感じて目を開けると……

伊達土方「伊達土方ここに推参！！」

そこには眼帯をし、青い鎧と六本の刀を腰に挿した、まさしく『戦国BASARA』の伊達政宗の格好をした土方がいた。

銀八・なのは



沖田と土方は巡回中のため、一緒に道を歩いていた。

沖田「土方さん、何でもあの桂とはやての奴はすでにくっ付いたそうでさア。しかも、今では接吻までする仲らしいですぜエ」

土方「たく…俺を騙すならマシな嘘付け総悟」

土方はいつも通り沖田が自分を絶望させるための嘘だと推理し、冷静にタバコを吸いながら流す。

沖田「じゃあアレ見てだせエ」

土方「ん？」

土方は沖田が指で指した方向を見る。

土方「んなアツ！！??」

土方は口をアングリと開けて驚いていた。

そう、彼の目には二人の男女が映っている。自分達が追いかけている攘夷志士の桂小太郎と自分が恋路を抱いている八神はやてである。ただ一緒に歩いているだけならそれで良い。だが、はやてが桂の腕に嬉しそうに抱きついていると言う、まさしくラブラブカップルとしか言いようがない姿を見せていた。

それを見た土方は額にタバコを押し付けながら、死人のような顔で屯所帰って行った。

沖田「俺の言ったあの通り本当でさア。あり？土方さん？土方さ」

ん？」

ドSの笑みを浮かべながら沖田は聞く。

だが、沖田の声もまったく届かず、土方はトボトボと覚束ない足取りで歩いて行った。

そして土方はそのまま一生女性を愛せなくなり、男性を愛すると言うBL男になってしまった。

めでたしめでたし

~~~~~

沖田「俺今、最高のハッピーエンドが見えたぜエ」（黒笑）」

沖田はマジで嬉しそうな顔で言う。本人的には今の想像が百点満点のハッピーエンドだったらしい。

銀八「どこがアアア！？俺今マジであのマヨラーに同情しちゃったんだけどー！！」

銀八は沖田の想像はさすがに惨いと思い、顔を真っ青にさせる。

それはなのも同じ、涙さへ流していた。もう土方が可哀想で仕方なかった。

銀八「とりあえず、ダラダラやってられねえし、最後のアーチャー頼むぜ」

アーチャー「仕方あるまい。最強の武器か。私が知る中では最強の

武器はキーブレードだと考えている」

銀八「えっ！？マジで！？」

アーチャーなら、『エクスカリバー約束された勝利の剣』とか『アヴァロン全て遠き理想郷』とか『乖離剣エア』とか言うと思ったのに、まさかキーブレードになるとは思わなかった。

アーチャー「私の用いる情報から導き出した答えだ」

どうやら、アーチャーはキーブレードについて何か重要な事を知っているようだが、それは言う気はないらしくさっさと帰ってしまっ

た。  
銀八「はい、黒神さんは土方怒らせたのは自業自得なので自分なんとかしてください」

なのは「じゃあ次、ペンネーム『メガネ白騎士君』さんから、  
『白騎士君』まさか新八を使ってギガースを倒すとは」

レナード「早速質問だ。銀時へもしバイオハザード5に出て来るチェインソーマジニとウロボロスが現れたら戦いますか？今回はこれだけだ」

白騎士君「あれ？なんで黒龍さんの所にチェインソーマジニが？」

チェインソーマジニ、黒龍さんの家の扉をチェインソーで壊して入る。『えええええええ！？』

まさか黒龍にとんでもない危機が迫っている事を死んで驚くのは。

銀八「まあ、黒龍はその危機をなんとか乗り切ったけどな。じゃあ、銀時答える」

銀時「あんな不気味なのと戦えるわけねえだろ!!」

銀時は顔を真っ青にさせて怒鳴る。いくら銀時でもあんな不気味な生物兵器と戦うなんてまっぴらごめんだった。

銀八「じゃあ、『白騎士君』さん、今度はそっちに強化版のチェーソーマジニが五体向かったのでなんとかしてください。ちなみに、やったのは黒龍です」

なのは「えええ!？」

銀八「黒龍もやればなしじゃないって事だな」

なのは「そう言うものなのかな…? (汗)」

銀八「じゃあ次いくぞ。ペンネーム、『黄色いのなにか』さんから、『アンケートは1番で理由は面白そうですから。敵で出すのならば3流野郎の小悪党な奴。銀時やソラ側の味方ならばバカで友人思いで涙もろいキャラがいいだと思えます。』

万事屋の皆さんに質問です。万事屋の皆さんの好きな飲み物を教えてください。

ちなみに今回の万事屋の皆さんのプレゼントは銀×ライダー&シルバー、ソラ×セイバー&アリスの濃厚な3Pのエロ同人誌を差し上げます。これを見て妄想とかしちゃってください(笑)『じゃあ答えろお前ら』

ソラ「そうだな。酒だな」

銀時「俺も」

アリス「ワインだな」

アリア「フアント」

リリス「メロンソーダです」

ライホース「私はお茶だな」

新八「僕はウーロン茶ですね」

神楽「私は酢昆布ネ」

セイバー「私はサイダーです」

ライダー「フアントですね」

銀八「おい、一人だけ食べ物言っただ奴いたぞ!!」

なのは「まあまあ（苦笑）」

銀八「たく…」

なのは「『黄色いのなにか』さん、廊下に立っててください」

銀八「まあ今回はとりあえずこれで終わりだな」

なのは「今回は質問いっぱいきましたね」

なのはは嬉しそうに言う。まさかこの小説にこんなにも感想が贈られると思っていなかったからだ。

銀八「ああ、それだけ多くの読者がいるって事だな。つうか、黒龍の奴が所かしこで宣伝しまくったただけだな」

なのは「にやははは（苦笑）」

銀八「じゃあ最後に決めるぞ」

なのは「はい」

銀八・なのは

『『次回もよろしく願いします』』

一方我等がフェイトちゃんは……

フェイト「ソラ~~~~~~~~~// // //」

鼻血出して悶えていた。

フェイトキャラ崩壊進軍中。

### 第十三訓：主人公は厄介ことに巻き込まれるのがお決まり（後書き）

黒龍「贈り物コーナー」

銀時「いきなりなんだよ、黒龍。つうか、贈り物コーナーって何？  
ソラ知ってるか？」

ソラ「さあな」

黒龍「今回は読者の方々から贈り物を貰ったので、ここでそれを使  
おうと言うコーナーです」

銀時「うわ、かなりはた迷惑なコーナーだな」

ソラ「嫌な予感マックスだな」

黒龍「今回貰った贈り物は、『なっぺさんのガジェットのローショ  
ンミサイル』、『黄色いのなにかさんの銀×ライダー&シルバー、  
ソラ×セイバー&アリスの濃厚な3Pのエロ同人誌』です」

銀時「おいおい、この同人誌スゲー内容じゃねえか」

銀時は同人誌読んで早速鼻血出していた。

シルバー「銀時、本で鼻血出すと言うなら、もう本番は大丈夫じゃ  
な」

ライダー「あつちにベッドがあるので行きましょう」

銀時「ちよつ！確かに俺鼻血出したよ！でも、本番は…」

シルバー「つべこべ言わずエデンにレッツゴウじゃ！」

ライダー「巡る巡る世界へ／＼／＼」

銀時「ちよつ、ま、あああああああ！…！」

銀時は部屋に連れて行かれた。後のご想像は皆様にお任せします。

黒龍「銀さんはログアウトした」

アリス「ソラ、私達もエデンに行かないか？」

ソラ「俺は遠慮しておく」

セイバー「わ、私はいつでも準備万端なんですが…／＼／＼」

黒龍「スキあり！ガジェットローションミサイル！」

セイバー「何の。フェイトガード！」

フェイト「ふえ！？」

フェイトにガジェットのミサイルが当たり、フェイトはローションまみれで、しかもバリアジャケットが溶けているかなりエロイ姿になった。

フェイト「ひゃアアアアアアアア！！！！／＼／＼／＼」

フェイトは腕体を隠すが、隠しきれなのが更にエロさを増した。

フェイト「そ、ソラ／＼／＼／＼（うるうる）」↑捨てられた子犬のよう

ソラ「はあ。しょうがない。ほら、タオルで拭いてやるから風呂場いくぞ」

フェイト「う、うん／＼ありがとう……／＼」

二人は風呂場に行った。

黒龍「アレに動じないとは…ソラ、恐ろしい……」

アリス「まあフェイトが子供だと言う点もあるんじゃないか？」

黒龍「やっぱり…？」

セイバー「次回、『バトルマンガで伏線は大事』にテイクオフ」

#### 第十四訓：バトルマンガで伏線は大事（前書き）

黒龍「アンケート集計の結果、転生者要素を加えることになりましたアアアアアアア！！！」

銀時「なあ……」

ソラ「なんだ……？」

銀時「この小説どうなるんだろうな？」

ソラ「さあな……」

もう一度報告します。アンケート結果で転生者要素を加える事になりました。

アンケートを送ってくれた皆さんには心より感謝します。

そこまで作品が変にならないように頑張ります。

## 第十四訓：バトルマンガで伏線は大事

前回のあらすじ。

『ジュエルシード』の思念体を倒し、そのまま警察からエスケープした銀時、なのは、ユーノ、新八、ライダーはひとまず公園来た。なんとそこで、真撰組の近藤、土方、沖田、土方と出会う。

新八「な、なんで近藤さん達がこんな所に！！？？」

新八は驚いた顔をする。

何故真撰組の四人の近藤と土方と沖田と山崎が江戸でもないこの場所にいるのか分からなかったからだ。

ちなみに新八はなのはを見たからと言って、この世界を『リリカルなのは』の世界だとは認識してない。

だが、近藤達の登場に驚く新八とは反対に、近藤は驚きもせず嬉しそうにデカイ声で言う。

近藤「おお！ 新八君に万事屋にライダー殿じゃないか！！ こんな所で会うとは奇遇だな！！」

新八「最早奇遇なんてレベルの話じゃないですよ！！ どうしてあなた達が江戸でもないこんな場所にいるんですか！？」

新八の意見も最もだ。自分達はたまたま『次元跳躍装置』の暴走が原因でこの場所に来てしまった。

だが、あの時巻き込まれたのは自分達万事屋メンバーと桂とエリザベスだけ。

近藤達真撰組の面々はいなかったはずだ。

新八の疑問は銀時とライダーも同じだった。

なのはは状況が今一つ理解できず、オロオロとする。

近藤「確かに偶然にしてはありえないな……………ハッ！ ま、まさか……………！？」

新八の言葉を聞いて、近藤は何かに気づき驚愕の表情になる。

近藤は驚きの声を上げる。

近藤「まさか新八君たちも俺達と同じように、『魔法少女リリカルなのは』のDVDを持っている事に気付かないで瞬間移動装置を使ってこの場所に来たなんてエエエエエエエエエエエエ！！！」

新八「違うんですけどオオオオオオオオオオ！！ 何あんたらザ・フライ的な別件に巻き込まれてんですか！！！」

新八は近藤とんでもな勘違いにシャウトし、思いつきリツツコム。

ライダー「ああ、アレですか。確かにアレは大変でしたね（何言ってますかこの人？）」

銀時「ああ、アレは大変だったな。（何言ってたんだこのゴリラ？）」

二人は分かりやすい位の知ったかぶりで、曖昧な返事をする。心の

中では首を傾げていた。

新八（何あんたら無理やり話し合わせてんですか！！ 僕等全然そんな理由でこの場所に来てないでしょ！？）

新八は心の中で二人にツツコミ入れる。

土方「はあゝ。とりあえず、互いの状況確認だ」

土方は呆れ半分疲れ半分と言う感じで、タイミング良く話の修正をする。

さすがはフォローの達人フォロ方と言えよう。

土方「なんかかなりいらぬ評価された！？」

銀時「つまり何？ お前等上司の命令で瞬間移動装置の実験台にされたワケ？」

銀時は近藤達から事情を聞いて手で口元を押さえて可笑しそうな顔をする。

上司の命令で瞬間移動する羽目になった近藤達を不憫に思う所もあるが、同時に面白くもあった。

近藤達の話をも簡単に説明すると、

近藤と土方と沖田と山崎が屯所にいる時自分達の上司である『松平片栗虎』が拳銃を構えて登場。

←

脅しがいな感じに無理やり近藤達を車に乗せて、幕府直属の研究機関に連れて行った。

←

そしてそこで松平は、「お前ら瞬間移動しろ。拒否したらおじさん撃っちゃうよ？」と脅迫がいな感じに強引に近藤達四人を実験に参加させる。

←

松平が上司な事と、ほぼ暴走した破壊神を止める方法は皆無なので、近藤達四人は仕方なく研究員達が作った瞬間移動装置に入る。

←

装置が作動した時、問題が起こった。なんと装置の中に『魔法少女リリカルなのは』のDVDがあるのが発覚。

←

しかもDVDのせいで装置が暴走して、そのままこの公園に飛ばされた。そして現在に至る。

彼等の話を聞いて口元を押さえて可笑しそうにする銀時に土方が青筋浮かべながら食って掛かる。

土方「おい、何笑ってやがんだ？ 斬るぞテメー。俺達だってな、好きでこんな場所に来たワケじゃねえんだよ」

近藤「トシ、アレくらいいつも事だ。気にするな」

沖田「そうでさア、マジでウザイのは土方さんの存在そのものでさア」

土方「オメーはその三割増ウザイけどな!!」

土方はいつも通り自分を罵倒する沖田にメンチ切る。

銀時「つつかさあ、さつきから気になってんだけど、『魔法少女リリカルなのは』って何？」

今時のアニメとかゲームとか疎い銀時は『魔法少女リリカルなのは』と言う単語がいまいち分からないでいた。

ただ、レトロゲームなら銀時は結構知ってるほうである。そこら辺は爺臭い。

銀時「誰だ！？ 人の事爺臭いって言ったのは!!」

ライダー「ギントキ、何を怒っているんですか？」

銀時「いや、何か誰かに罵倒された気がしてよオ」

銀時はおかしいな？、と言う風に頭を搔く。

その後、『リリカルなのは』を知らない銀時の為に新八が説明する。

新八「銀さん。『魔法少女リリカルなのは』って言うのは、所謂アニメですよ」

新八は簡単な説明をする。

さすがに『リリカルなのは』がアニメオタクとかロリコンが見るようなアニメのジャンルに入るとは言わなかった。

銀時「ふ〜ん。アニメねえ……っで、ちなみに新八。お前それどんな内容なんだ？」

新八「ぼ、僕も良くは知りません……」

新八は汗を流しながら目を逸らす。

確かに新八は『リリカルなのは』の本編は見てないが、大体どう言うアニメなのかはDVDのパッケージを見た事あるので知っている。そしてその主人公が自分の目の前にいる、フェレット抱えて話しているいけずオロオロしている女の子、高町なのはである事も。

銀時「ふ〜ん。そうか」

銀時の声は素っ気ない風に聞こえるが、目は半眼になっているので疑いの眼差しを向けているのが分かる。

新八は銀時に視線に気づいて皿に汗をダラダラと流す。

新八（マズイ、これは非常にマズイ！！）

新八は内心では非常に焦っていた。

新八がここまで焦るのには理由がある。

『リリカルなのは』のほとんどの主要な登場人物は女の子なのだ。少しエロい感じのシーンがあると云っても、朝8時にやる少女向けアニメとさほど変わりはない。

ただ問題なのが放送していた時間なのだ。

その時間帯は間違いなく小さいお友達が見れる時間ではない。

見るには夜更かしするか、もしくはネットの動画で見るか、録画予約して見るしかない。

夜更かしならまだしも、ネットの動画見たり録画予約できるのは小学生代の子供はほとんどはできないだろう。

しかも、そう言うアニメのコマーシャルはたいてい夜にしかやっていない。

つまり、『リリカルなのは』を見れるのは大きなお友達、つまり中学生とか高校生位のお年頃の人になる。

中学性位の歳ならまだ言い訳はできるが、新八は16歳。もう四捨五入すれば成人している歳である。

そんな歳で、女の子がたくさんでているアニメの事を良く知っていると云えば、言い方は悪いがロリコンとかアニメオタクと思われる事受けあいだ。

いや、ただ純粹にアニメとして楽しんで見ているのなら、多少恥ずかしくても“見ていますか何か？”と言う感じな対応が十分取れる。

そう、つまり新八は自分が『リリカルなのは』を知っていると言う

事をどうしても知られたくないワケがあるのだ。

新八に疑いの眼差しを向けていた銀時は新八に視線を向けるのを止めて、土方達に視線を向ける。

銀時「——っで、そのリリなんとかって奴が俺達の今の状況とどう関係あんだ？」

銀時は目を細めながら土方達に問いかける。

土方はタバコの煙をフウ〜と吐いた後に答える。

土方「つまりだ、俺達は『魔法少女リリカルなのは』の世界……つまり『アニメ』の世界に飛ばされたって事だ」

土方の言葉を聞いて、銀時、ライダー、新八の時間が止まる。  
そして、

銀時・新八

『はっ？………はアアアアアアアアアアアアアア………！！！！！！！！！！』

二人はとんでもない叫び声を上げ、ライダーは固まっていた。

銀時「お前何言っちゃってんの！？ 何お前！？ ここがアニメの世界！？ ありえねえにもほどがあんだろ！！ つういにマヨネーズとタバコの吸いすぎ頭おかしくなっちゃったの！！」

新八「そうですよ！！ いくらなんでもそんな事あるわけないですよ……！！」

ライダー「あなたそこまで……」

銀時と新八は声を上げて土方の意見を否定し、ライダーは頭を抑え呆れる。

ライダーの態度はまさしく頭がついにイってしまった人に向けるそれだった。

ライダーの態度を見た土方が青筋浮かべて言う。

土方「なんだその態度！！　まるで現実と二次元の区別のつかない残念な奴を見るその感じは！！」

ライダー「自覚がないとは悲しいですね」

土方「だからちげえって言うてんだろ！！　話聞け！　斬るぞデメー！！」

土方は刀の柄に手を掛けて、鞘を抜こうとする。

それを沖田が首を両手で握って止める——と言うより締める。

沖田「土方さん、気持ちが分かりますが落ち着いてくだせエ」

土方「あごっ、おごっ……！」

山崎「沖田隊長！！　止めてください！！　副長の顔マジで青くなってます！！」

近藤「総悟、悪ふざけはその辺にしておけ」

沖田「へえ〜い」

近藤に言われ渋々沖田は首を絞めるの止める。近藤は沖田の悪ふざけだと思っているが、沖田はマジで土方の首を絞めようとしていた事は知らない。

土方は沖田を斬ろうとしたが、山崎と近藤に止められ渋々銀時達の説明に戻る。

土方「いいか、もう一度言うぞ。ここは『ア・ニ・メ』の世界なんだよ。分かったな？」

銀時「えっ？ お前何？ まだアニメの世界来たと言い張るつもり？ いだだだだだだだ！ 痛いよオ。おかあさん。ここに頭の怪我した子がいるよ」

いくらなんでもありの銀魂の住人である銀時もアニメの世界に飛ばされたと言うような、オタクなら誰でも願うようなとんでも現象に遭遇したとは信じられなかった。  
そして、腕に手を回して土方に痛い人を見るような目を向ける。

土方「マジで斬るぞテメー！！」

土方の怒りも限界に達し刀を抜くが、近藤に再度止められなんとか堪える。

そして、口元を引くつかせながらも再度説明をする。

土方「いいか、もう一度言うぞ？ ここはアニメの——」

沖田・銀時

『『いだだだだだだだ！！』』

銀時に何故か沖田まで悪ノリする。二人は腕に手を回して土方を痛



ライダー「カオスですね……」

銀時達と真撰組が海鳴市の公園で騒いでいた頃、時の庭園では……

神楽が杖を持った女性とセフィロスの話を聞いていた時、神楽の肩に誰かがポンと手を置いた。

神楽「!?!」

神楽は驚き慌てて後ろを振る向く。

ヤミ「何を見ているんですか？」

地面までとどきそうなほどの金髪をし、黒い動きやすそうなドレスみたいな服を着た少女。昔は宇宙でも『金色の闇』とまで異名を持つほどの最強の殺し屋として名を馳せ、今は万事屋の従業員でありソラに恋路を抱く少女——ヤミが神楽の肩に手を乗せて不思議そうな顔をしていた。

神楽「なんだ、ヤミアルか。脅かさないで欲しいアル」

神楽はヤミだと知ってホッと胸を撫で下ろす。

ヤミ「すみません。しかし、あなたがそこまで驚くのは珍しいですね。何かあったんですか？」

普段の神楽であれば大抵の事には驚かない。ましてや誰かに後ろから肩を叩かれてもまず驚きはしない。

そんな神楽が肩に手を置かれて驚くのだから、よっぽどの緊張状態にあったと言う事がヤミには分かった。  
だからヤミは神楽に質問した。

神楽「（この部屋にめちゃくちやヤバイ雰囲気の奴がいるネ）」

神楽は部屋にいるセフィロスの事を思い出したので、小声でヤミに話し掛ける。

神楽に言われたヤミは神楽と同じようにドアの隙間から部屋を覗き込む。

しかし、その部屋にはセフィロスはおらず、杖を持った黒髪の女性が玉座に疲れた様子で座っていた。

ヤミは神楽に合わせて小声で話す。

ヤミ「（あの女性ですか？ 確かに危険な感じはしますが、あなたが言うほどヤバそうに見えませんが）」

神楽「（アイツじゃないネ。さっきまでいた銀髪で長髪で長い刀持ってた奴ネ）」

ヤミ「（しかし、そのような人物はどこにも見当たりません）」

ヤミの言うとおり、いくら部屋を見回してもセフィロスの姿はどこにもなかった。

神楽「（でも、実際あの女と話してたネ）」

ヤミ「（なら、話し終えてどこかに行ってしまったんじゃないでしょうか？）」「

神楽「（それは盲点だったアル！ さすがはヤミネ！）」

ヤミ「（普通に気づくと思いますが……）」

二人が部屋を覗きながら離しいると、

???「何をしているんですかあなたたち？」

後ろから誰かが警戒した声で二人に話しかけた。  
神楽とヤミは声がした後ろに咄嗟に振り向く。

アリス「ん？ 神楽に、それにヤミじゃないか」

リリス「神楽ちゃん。勝手に一人で行動しないでくださいよ！ 心配しましたよ！」

セイバー「どうやら、ヤミも時の庭園に飛ばされたみたいですね」

ソラ「後はライホースと銀時とライダーと新八だな」

桂「ははははは！！ 久しぶりだなリーダー！ ヤミ殿！」

エリザベス『ご無事で何より』

神楽とヤミに警戒しているフェイトとアルフの後ろには、再開を喜ぶ桂とエリザベスとリリスとセイバー。そして、真顔のアリスとソラとアリア。

神楽「おお！ ソラ、アリス、アリア、セイバー、ツラ、エリー！  
」

ヤミ「誰ですかその方達は？」

神楽はソラ達を見て嬉しそうにし、ヤミはフェイトを見て誰だか分からず首を傾げる。

桂「ツラじゃない桂だ。ソラ、フェイト殿とリーダーはまだ初対面だ。自己紹介させた方が良からう」

ソラ「おまえにしてはマトモな意見だな」

ソラは桂が珍しくボケなしの事を言ったのに少し意外に思った。そして、フェイトに顔を向ける。

ソラ「フェイト。こいつらはさっき話した神楽とヤミだ。敵じゃないよ」

フェイト「うん、分かった」

フェイトはソラに敵じゃないと教えられ、素直に『バルディッシュ』を下ろす。

それに続いてアルフも構えを解く。

そして神楽とヤミの前に出て自己紹介する。

フェイト「私はフェイト・テストロッサです。話はソラから聞いています」

神楽「私は神楽ネよろしくアル！」

ヤミ「私はヤミです」

神楽とヤミはフェイトがソラと親しく話しているを見て、とくに警戒すべき相手ではないと判断して自己紹介する。

フェイト「とりあえず、あなた達も母さんにソラ達と一緒に紹介しますけど良いですか？」

神楽「別に構わないネ」

ヤミ「問題ありません」

フェイトの質問には二人は即答する。

アリス「ん？　そう言えば……」

アリア「どうしたの？」

何かに気づき顎に手を当てたアリスの動作に気づき、アリアが首を傾げながら聞く。

アリス「いや、フェイトとヤミは似てるなと思ってな。最早キャラ被りの域なんじゃないか？」

アリスの言葉を聞いて全員の視線がフェイトとヤミに注ぐ。

全員（フェイト・ヤミ以外）

（（あ、確かに……））

フェイトとヤミ以外はすぐに二人は似ていると思った——って言うか完全なキャラ被りだ。

そしてまた、フェイトとヤミも互いをじっくり見る。

フェイト（た、確かに……）

ヤミ（似ていますね……）

そして似ていると指摘された本人達もまた、似ていると思った。

長くそして綺麗な金髪。綺麗な赤い瞳。そして同じくらいの身長。胸は少しヤミが大きが、容姿まで似ている。更には服（フェイトはバリアジャケットだが）まで似ている。互いに黒を基調とし、そして付けている箇所は違うが、ガーターベルトを巻いている。

そして、ソラに恋路抱いている所まで一緒だ。

よく見ていると至る所でキャラ被りしていたのだ。

違う作品のキャラにも関わらず、かなりキャラ被りしていたと言う事だ。

フェイト「と、とりあえず。私の母さんに皆を紹介します」

いつまでもボーっとしてられないので、我に返ったフェイトは話を逸らす。

ただ、このキャラ被りが後にとんでもない事態を引き起こす事は誰も知らない。

桂「そうだな。展開の遅さに読者に呆れられるかもしれん」

桂もメタ発言しながらフェイトに同意する。

ソラ「そうだな。じゃあフェイト、紹介頼む」

フェイト「うん」

フェイトは笑顔で頷く。

神楽「そう言えば、フェイトのマミーの名前は何て言うアルか？」

フェイト「マミー？」

フェイトは首を傾げる。

リリス「お母さんて意味です」

フェイトはリリスの言葉を聞いて、“なるほど”と頷く。

フェイト「私の母さんの名前は、プレシア・テストロッサです」

プレシアさSIDE

私、大魔導師プレシア・テストロッサはやつと自分の研究が実った事に喜びを感じていた。

数週間前に、私の前に『セフィロス』と言うあの男が現れた。

大魔導師の私でさへ恐怖を覚えてしまうほどのあの得体の知れない感覚。あの男から感じられる感覚は正直気持ち良いモノとは呼べない。

最初は警戒していた。だが、あの男から聞かされた提案は私にとっては長年追い求めたモノだった。

『あの日』以来ずっとずっと、私が探し続けた『モノ』へと辿り着くための方法。

話を聞いた当初は信じられなかった。見ず知らず相手だと言う事もあるが、何より私の本能があの男への関わる事を拒否していた。

だが、あの男の言う事は全てにおいて的を得ていた。内容だけなら信用に値する物だったと言えるよう。

そして今では協力関係を結んでいる。あの『人形』と使い魔、そして『アイツ』には秘密にして……

私があこの男と協力関係を築いたとは言え、私はまったくあの男を信用してはいない。

会話でも分かったけど、あの男は間違いなく何かを企んでいる。それも、私にとっては良くない事だろう。

あの男の動向には気をつけなければならない。

あの男と会話を終えて、少し疲労が出てきたために玉座に座っていた。

正直、あの独特雰囲気は気分良いモノではないから。

プレシア「はあゝ」

ここ最近増えるようになった、ため息を尽きながら私は目の前の扉を見る。

プレシア「まったく、何をしているのかしら？」

扉から越しても聞こえてくる話し声を聞いて、私はまたため息をつく。

扉越しな事と距離もあつて会話の内容までは分からないけど、盛り上がっている事は分かる。

あの人形の声以外にも複数の声が聞こえる事から、たぶん侵入者達だろう。

何しているのかしらあの人形は？

まったく、いくら害がないとは言え、侵入者を捕まえる所か、愉快に話をするなんて……また駄が必要かしら？

でも……あの人形の楽しそうな声。

プレシア「あの子のあんな楽しそうな声を聞くなんて、一体何時振りかしら……ハッ！」

私は今言った自分の言葉を否定するように首を横に振る。

何を考えているのかしら私は？ これじゃまるで、あの子が私の娘みたいじゃない！

あの人形はあの子とは似ても似つかない人形。それ以上でもそれ以下でもない。

目的さへ果たさせれば、用のない存在。

でも……つい思ってしまう事がある。あの子は、私の――。

プレシアSIDE終了。

プレシアが玉座に座りながら渴望している時、扉が開きフェイトを初めソラ達が部屋に入る。

フェイトは少し前まで歩いて止まった後、頭を下げに一礼する。

フェイト「母さん。侵入者を連れてきました。ですが、ソラ達は……」

プレシア「皆まで言わなくても分かっているわ。入り口での様子は見ていたから」

プレシアはサーチャーを通して入り口での様子を見ていた。

話の内容からソラ達は既に自分に害のない存在だと認識している。

フェイトはプレシアの言葉を聞いて、少し声を上ずらせる。

フェイト「そ、そうなんですか」

フェイトはこの時さすがは自分の母親だと関心した。

フェイト「あの、それで……ソラ達が元の世界に帰れるようになるまでここに住まわせる事を許して欲しいのですが……」

フェイトは声だけでなく、体も萎縮してしまって小さくなってしまっている。

だが、自分の言いたい事ははっきり伝えようと声をプレシアに届かせようと頑張っていた。

前からそうだが、自分に対してのプレシアの態度はどこか怖いモノを感じる。

それに最近ではたまに虐待と呼べるほどの折檻を受けた事もある。

フェイトは自分が折檻を受けるのは、自分がプレシアにそのような事をさせるほどダメな子なのだと思い込んでいる。

だからこそそんなダメな自分の頼みをプレシアが聞いてくれる自信がなかった。

だが、それでもソラ達、いや、ソラのために何かしてあげたい、そう思った。

フェイトが出会ったばかりのソラのためにここまでプレシアに頼みこむのも、一目惚れと言う事もあるが、それだけではない。

寂しいのだ。いつも自分の側にはアルフがいる。でも……それでも寂しさがこみ上げてくる。

ソラ達と話している間は本当に暖かった。別にアルフと話している時もそう感じていないわけではないが、アルフ一人と話す時の嬉しさがより増したような間隔だった。そして何より楽しく、暖かった。ソラ達ともっと一緒にいたいと思ったからこそ勇気を振り絞ってプレシアにこの申し出をしたのである。

フェイトは内心びくびくしながらプレシアの返事を待っていた。

プレシア（さて、どうしましょうか？）

プレシアは値踏みするようにソラ達を見る。エリザベスを見た時は見なかった事にしたが……。

プレシアはフェイトの提案を素直に承諾するかしないか悩んでいた。このままソラ達を『時空管理局』に受け渡してしまえば良い。普通

に考えればすぐにその選択を選ぶ。

プレシアにとって、江戸などと言う聞いた事もない世界から来た彼等をここに泊めておく理由はない。

プレシア（けど、使えそうね）

とは言え、メリットがないと言うわけではない。大魔導師である自分の魔力量さへも簡単に凌駕する魔力量を持った者が三人いる。それに、魔力がなくても腕には覚えがありそうだ。

ここでフェイトの提案を承諾すれば、フェイトを更に自分の言う事の聞く人形にする事ができる。

更に上手く利用すれば手駒が増える。

プレシア（まあ邪魔になるようなら消せばいいだけの話ね）

プレシアは考えを纏め、フェイトを見る。

その時、フェイトが一瞬ビクツと震えた。

プレシア「良いわ。あなたの好きにきなさい」

フェイト「あ、ありがとうございます!!」

フェイトはパーツと顔を明るくさせ、頭を下げる。

プレシア「後の事はアルフとあなたとナナシに任せるわ」

フェイト「はい！ 母さん！」

プレシアはフェイトの本当に嬉しそうな顔をチラリと見る。

プレシア（まったく、人形のくせに嬉しそうな顔をするわね）

頭の中ではそう思っているが、プレシアの顔はどこか、笑みを浮かべているようにも見えた。錯覚もしれないが……。

プレシア「用がないならいきなさい」

フェイトは頭を下げ、ソラ達と共に部屋を出て行くこととする。

セイバー「どうしましたかソラ？」

セイバーはソラが立ち止まっている事に気づき声をかける。ソラは横目でプレシアを見ていた。

ソラ「いや、なんでもない」

ソラはそう言った後、フェイト達の後を付いて行く。セイバーもし首を傾げた後、ソラの後を追う。

ソラ（なんでフェイト奴。母親の前であんなビクついていたんだろ  
うな？ それにあの目……）

ソラは歩きながら横目でまたプレシアの顔を見た。

ソラ（娘を見ている目じゃねえな）

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『銀八先生！』』

銀八「はい。じゃあ今回も銀八先生コーナーいきます」

アルフ「アシスタントのアルフだよ。よろしく」

銀八「はい。つと言う事で、『犬』のアルフが今回の担当です」

アルフ「何で犬の所を強調するんだい！！あたしは狼だって何べん言えば分かるんだい！！」

アルフはいつもいつも狼だと言っているのに犬呼ばわりされる事憤慨する。

正直嫌気さへさせていた。

銀八「はいはい。狼もどきの話は置いてといて、質問いきましょう」

アルフ「あんた…マジで殴るよ？」

アルフは握りこぶしを作りながら銀八を睨む。

銀八「じゃあペンネーム『ボッスン』さんから、  
『質問です。』

一つ目は、ヤミちゃん以外のTOLLOVEのキャラは出ますか？

もし出るならば、リトとレンと美柑ちゃんとモモちゃんをお願いします。理由は、リトは主人公で美柑ちゃんはヤミちゃんの親友だからです。レンとモモちゃんは好きなキャラだからです。無理ならいいです。

二つ目は、クウガ以外の平成ライダーを出しますか？  
もし出すならば、全員出してください。無理ならいいです。

三つ目は、黒龍さんは、ユーノとクロノはどちらが嫌いですか？両方嫌いでも、どちらも嫌いでは無いでもいいです。僕は両方嫌いじゃないけど、どちらかと言うと、クロノです。理由はKYだからです。

黒龍さん、お願いします。『……じゃあ黒龍、答える』

黒龍「そうですね。とりあえず、T O L O V E のリト以外のキャラは出すかもしれません。それと、クウガ以外の平成ライダーは出そうと思っています」

銀八「なんでリトは出さないんだ？」

黒龍「いや、嫌いじゃないですけど、さすがにリト君はちょっと無理あるかなって……」

さすがに作品上リト出演は難しいらしい。

銀八「ふ〜ん。なるほどな。つで、KYとユーノはどっちが嫌いなんだ？」

黒龍「俺はどっちも嫌いじゃないですね。俺もKYですし」

銀八「まあ黒神はクロノの事毛嫌いしてるけどな」

黒龍「はははは……ま、まあ感性は人それぞれですし……」

銀八「それじゃあ『ボッスン』さん、初めての質問ありがとございました次、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『明久』新八さんに質問『リリなの第4期についてどう思う?』」

ムツツリーニ「……銀時氏に質問『俺の師父についてどう思う?』」

冥王「それじゃあなのはちゃんに質問なの」『銀さんと出会った時はどう言う印象を持ったなの?』」

次回を楽しみにしてます♪……じゃあぱつつあん、頼むぜ」

新八「すみません。僕、第四期見てないので答えられません……」

銀八「まあどうせ見てもコイツなら、“ヴィヴィオちゃん萌えエエエエエエエエエエエエ……”とか言って発狂するだろうから大丈夫だろ」

新八「全然大丈夫じゃないんですけど!?!」

新八は読んでいないから分からないが、たぶんそうなるだろうとは誰もが予想できる。

銀八「じゃあ銀時、なのは頼むぜ」

銀時「チートだな……」

銀時の言つとおりあつちのマリオはどう考えたってチートで規格外だ。

なのは「かつこいいと思いました／＼／＼」

なのは顔を赤くさせながら言う。最早フラグは立ってしまったと言つていいだろう。

銀八「カーッペ！」

銀八はなのはの発言を聞いて床に唾を吐く。  
相当気に入らないらしい。

アルフ「あははは……じゃあ『鳴神 ソラ』さんは小説頑張りなよ。  
次、ペンネーム『月光閃火』さんからだ、  
『ども…月光閃火だ。』

とりあえず一言…土方さんまさかのバサラ化！？

輝刃「というか…声優ネタを放り込むとは…。という事は他のキャラも…（汗）。」

ハハハ…ちなみに、俺は新八の声優ネタを所望するぜ？主に某・勝利のアルファベットを冠するガンダムの主人公とか…と、質問…行くぜ？まずは俺からだ。

1・セフィロスに質問…もしかしてセフィロスも番外編か何かで銀さん達張りにキャラ崩壊とかするの？

輝刃「…確かに、あの冷酷非情なセフィロスがキャラ崩壊した所を見てみたい気が…。次は俺からだ。」

2・高杉に質問…自分と声が似ている…っつか、中の人がおんなじの『ガンダム』に出てくる『ギム・ギンガナム』をどう思う？  
あゝ…そういや、声やってる人がおんなじだもんな…。そこは気になる所だ…。』…えっと、質問されてる奴敵キャラなんだけど…  
…どうするんだい？」

アルフは困惑の顔で銀八を見る。

銀八「じゃあセフィロスと高杉に答えてもらうか」

アルフ「できるのかい!？」

アルフの驚きの声と同時に二つのスクリーンが現れる。ほぼ、黒神さんの所と同じ仕様だ。

そして、二つのスクリーンにはセフィロスと高杉が映っていた。

セフィロス《フッ……》

高杉《うるさい野郎だな》

そう言っつて、二つのスクリーンの映像は消える。

アルフ「……いや、なんなんだいアレ!?!?高杉はともかくセフィロスは“フッ……”しか言っつてないじゃないかい!?!」

まさかのコメントが一切ない事呆けていたアルフ、ツツコミをする。



2 銀時に質問。この中で戦える者は？

1 ゾンビ（バイオハザード）

2 マジニ（バイオハザード5）

3 処刑マジニ（バイオハザード5）

4 ウロボロス（バイオハザード5）

5 リーパー（バイオハザード5）

6 ギガース（白騎士物語）

7 アークナイト（白騎士物語）

3 お妙さんに質問。お妙さんの卵焼きを試食したいので一つ下さい」

白騎士君「今回はこれにて」

レナード「あれ？銀時はあそこで何やってるんだ？」

銀時は今、アークナイト（剣）に追われていた。『……って、コレ銀時の奴大丈夫なのかい！？』

まさか銀時がピンチに陥っていた事に焦るアルフ。

銀八「ああ、銀時ならブチ切れてアークナイト叩き切ったそうだし」

アルフ「そ、それはそれで凄いね……」

銀八「じゃあ質問された奴、答える」

フェイト「勝てるかどうか分かりませんが、精一杯戦おうと思います」

なのは「私も杭が残らないように全力全開で戦います」

銀時「ギガスとアークナイト以外は不気味なんでパス」

お妙「嬉しいわ」じゃあ、前に作ったのが百個ほどあるから贈るわね」

銀八「いや、多すぎだろ！つつか、一個でいいんだよ一個で！お前はレナード殺す気……」

ベチャ！！

銀八が言い切る前にお妙が笑顔で卵焼き（ダークマター）をスパークキングした。

銀八「ぎゃあああああああ！！！！顔が！！顔が焼けるウウウウウウウウ！！！！」

銀八あまりの暗黒物質ダークマターの殺傷力を喰らって転げまわった後に気絶する。

お妙「あらあら。美味しいからってそんなにはしゃぐなんてみっともないですよ」

銀八の苦しみをまるで理解しないお妙であつた。  
アルフはその様子を見て顔を青くしていた。

アルフ「と、とりあえず、銀八が気絶したからこれからアタシが一人でやるよ。これで最後だしね。ペンネーム『黒神』さん……って！コイツいつもドSな質問する奴じゃないか！！」

アルフは最後の最後でとんでもない人から質問が来た事に嫌な顔をするアルフだが、質問に答えないわけにもいかなないので質問を読む。

アルフ「しょ、しょうがないね。ええつと……

『桂へ

僕の小説では、貴方は重要人物として主に多く出番が多く、大活躍しています。

そしてデバイス手に入れて魔剣士と化しました。

そんな自分の大活躍を見てどう思いますか？

なのはへ

最初に銀時と出会った瞬間、どんな感じに思えましたか？  
返事を待ってます。

アーチャーへ

貴方はどれだけ士郎が嫌いですか。

興味深いので具体的に教えてください。』ふー。今回は比較的マトモだね」

アルフはいつもの質問と違ってマトモな質問が来たことに安心する。

アルフ「じゃあ質問された奴に答えて……」

セイバー「ちょっと待ってください」

アルフが早速質問された人物に答えを聞こうとした時、セイバーがそれを止める。

アルフ「どうしたんだセイバー？今回は別にアンタが怒るような質問はないだろ？」

今回の質問はセイバーが怒るようなモノはないので、セイバーが出てくるのに不思議に思いアルフは首を傾げた。

セイバー「質問ではありません。私は……前に黒神にシャマパイを食べさせられた事について怒っているんです！」

そう、前に黒神さんは質問でセイバーを怒らせるような質問をした。そしてその怒りを黒神さんの所にぶつけに行ったセイバーはシャマパイを喰らって無惨に撃退されたのである。

アルフ「いや、アンタホントにセイバーかい！？そんな前の事をネチツこく恨む性格じゃないだろ……！」

アルフの驚きもごもつともである。騎士道を進むセイバーが悪意があるとは言え、他人がやつと事に対してしつこく恨むのは彼女らし







ジャンヌはウットリした目でソラを見ていた。  
そして辛抱溜まらず抱きつく。

ソラ「なんだ…？」

ジャンヌ「ソラにはコスプレの才能があるよ／＼／」

ソラ「そんな才能はいらん」

ソラはとりあえず、抱きついてきたジャンヌを引き剥がしながら否定する。

別にコスプレの才能など、いらないのは本当なのだから。

つで、サチコとジャンヌは満足したので帰って行った。

黒龍「ソラ。なんで、渋々とは言え、コスプレに応じたのですか？」

ソラ「ん？そうしないと、あいつ等中々帰らないだろ」

黒龍「なるほど」

銀時「つつか、テメー！！俺だけにサチコの相手させやがって！！」

結局銀時は最後までサチコの相手を任された。  
おかげで疲労困憊なのである。

ソラ「たまたまだろ」

銀時「この野郎～～！！」

銀時は拳を握り締める。

黒龍「あははは（苦笑）」

#### 第十四訓：バトルマンガで伏線は大事（後書き）

黒龍「やっとテストが終わったので投稿できた！！」

銀時「また長く空けたな」

黒龍「読者の皆様！まことに申し上げございません！！」

ソラ「テストは良かったんだろ？」

黒龍「はい！それなりに手ごたえは感じました」

銀時「バカでもできるテストだしな」

黒龍「そう言う事言わないでください！！じゃあとりあえず、今回はこんな贈り物がきました」

『鳴神 ソラと銀時のコスプレ写真』、『黄色いのなにかさんから新八がかまつ娘倶楽部のオカマ達から一人ずつディープキッスされる同人誌』

黒龍「ありがとうございます。それで、ソララバーズと銀さんラバーズはと言うと」

フェイト「ソラ~~~~~ノノノノ」↑鼻血出す

アリス「中々いい写真だな」

アリア「ソラ、カッコいい……ノノノ」

リリース「さすがソラ様です！」

チェーン「ソラはなんでも様になりますね／＼／＼」

「...」

シルバー「中々じゃ」

ライダー「これは……／／／」

なのは「にゃははは／／／／」

黒龍「いい反応ですね」

新八「才□□□□□□□□□□！！！！」

銀時「めちやくちや吐いたな……」

ソラ「内容が内容だしな」

黒龍「次回、<sup>5</sup>辛い思いでは時に大切にテイクオフ」

第十五訓：辛い思い出は時に大切（前書き）

銀時・新八

『『遅すぎじゃアアアアアア！！！』』

ドカツ！！

黒龍「ゴフアツ！！！！」

テストが終わっても更新が遅い事に銀時と新八がダブルキックする。

ソラ「まったく…『リリカル銀魂ライダー』始まるぞ……」

## 第十五訓：辛い思い出は時に大切

ソラ達が時の庭園で住む事が決まっていた頃。

銀時達は公園で話していた。

沖田「旦那、これで分かってもらいましたか？」

銀時「おいおい、マジかよ」

沖田はある物を渡された銀時は正直驚いていた。それは『魔法少女リリカルなのは』DVDパッケージだった。

パッケージに写っている杖を持ち白い魔法使いのようなコスプレとも受け取れる服を着た女の子はまさしく自分の横でフェレット抱えてオロオロしている女の子と瓜二つだった。

なのはの存在とさっきの魔法を見た銀時は最早ここがアニメの世界だと信じるしかなかった。

ちなみに沖田の後ろでは抜き身の刀を持って鼻息を荒くし、血走った目をした土方が近藤と山崎に取り押さえられていた。銀時と沖田に弄られ過ぎたせいでブチ切れ状態なのだ。

沖田「俺等も最初は信じられなかったんですが、あのガキ見て信じるしかないと思ったんでさア」

沖田は話に今だに着いていけずにオロオロしているなのはを横目で見る。

沖田達がこの世界に来たのは今日の昼あたり。

情報を収集のために町を回っていく時、なのはが学校から帰って来るのを見た。

この世界に来る原因になったDVDパッケージに写っていた女の子



まま刀で銀時と沖田に切りかかろうとする。

銀時と沖田は土方のその姿を見てニヤリと黒い笑みを浮かべる。そしてそのまま向かって来た土方にラリアットを絶妙なタイミングとコンビネーションで喰らわせた。

土方「オボハッ！！！」

さすがの土方もこれにはたまらず仰向けに倒れ、苦しそうに喉を押さえながら苦しんでいた。

そして銀時と沖田は満足そうな笑みを浮かべてハイタッチした。

沖田「さすがは旦那ア」

銀時「オメーも中々のドS心じゃねえか」

そう、二人はさっきの会話で土方が怒るのは分かっていた。そしてそれを利用して土方を自分達の所に向かわせ、そのままカウンターを喰らわせたと言うわけである。

しかも、先に攻撃したのは土方なので正当防衛としても成り立つ。かなり悪質だ。

それを見た新八は……

新八（土方さん可哀想だなア……）

と土方にかなり同情していた。

土方「て、テメーら良くも……！！」

苦しみから回復した土方顔中に青筋を浮かべながら立ち上がる。もはや今の彼の怒りは限界突破寸前だった。

また土方が反撃してくると感じた銀時と沖田は構えを取る。  
睨み合う両者。まさしくその光景は一触即発の雰囲気だった。  
その時……

なのは「やめてください！」

となのはが声を上げる。声に反応し、全員の視線がなのはに集まる。

なのは「良く分かりませんけど……喧嘩しないでください！」

なのはは今の状況にも銀時達の話にもまったく付いて行けなかったが、銀時達が喧嘩しようとしている事は分かる。  
まだ会ったばかりとは言え、誰かが傷つくのを黙って見られないなのはは銀時達の戦いを止めようとしたのだ。

土方はなのはの揺ぎ無いまっすぐな瞳を見た。

土方「…仕方ねえな」

土方は怒りを沈めて刀を鞘に仕舞う。内心まだ怒りがあるが、ここ  
でなのはの言葉も聞かず切りかかるのも大人げないので我慢した。  
銀時と沖田も土方が攻撃してこないと感じたので、構えをといた。

その様子を見てなのはは胸を撫で下ろす。一時はどうなるかと思っ  
たが、どうにか事態を収拾できた事に安堵した。

土方（それにしても……）

土方はなのはを見る。

土方（刀持った俺にビビるどころか、喧嘩止めようとするんぞ中々肝が据わってるな）

土方は将来なのははとんでもない大物になるんじゃないかと思った。

沖田「あゝあ。シラけちまったなア」

沖田はこの後も土方を弄ろうと思ったのにそれができなくなったので、残念そうに頭を掻く。

さすがの沖田もさっきのなのはの言葉を見殺しできなかったようだ。

銀時「オメー良い根性してるじゃねえか。刀持った相手にあれだけ大口叩けるなんて中々できないぜ」

銀時はなのはの勇氣ある行動を見て、微笑を浮かべながらなのはの頭をポンポンと軽く叩きながら賞賛する。

刀を持った相手にあれだけ大きな声で止めるなど、大の大人ですら中々できない事である。

だから銀時は子供であるなのはが土方を止めた事を褒めたのだ。

なのは「い、いえ。そんな……／＼／＼／」

なのはは顔を赤らめながら嬉しそうにする。

近藤「がーはっはっはっはっ！！ 真撰組に欲しい位肝が据わっているじゃないか！！！」  
ウチ

山崎「そうですね」

近藤と山崎もなのはを褒める。

そんな中、ライダーが一步前に出る。

ライダー「盛り上がっている所すみませんが、自己紹介するのを忘れてませんか？ それと現状確認も」

ライダーの一言で全員の時が止まる。

全員

『『……あ』』

話が脱線しすぎて、一番最初にしなければならぬ事に今気づいた一同であつた。

銀時達とはとりあえず、なのはと自己紹介をする事になった。

ちなみにユーノが目覚まして喋つた時には真撰組の四人も驚いていた、

山崎にいたつては、「なんでイタチが喋ってるのオオオオオオオオオオオオオオ！？」とシャウトし、ユーノは「だからイタチじゃなくてフェレットですつてば！！」とツツコんだ。

とまあ、余計な段取りもあつたがなのはとユーノの自己紹介から始まつた。

なのは「私は高町なのはです」

ユーノ「僕はユーノ・スクライアです」

二人は頭を下げて自己紹介をした。  
次に真撰組の四人が挨拶をする。

近藤「俺は真撰組局長、近藤勲をだ！　よろしく頼む！」

近藤はいつも通りでかい声で挨拶する。

土方「……真撰組副長、土方十四郎だ」

土方はクールに挨拶をする。

沖田「真選組一番隊隊長、沖田総悟。もうすぐ副長になる予定でさ  
ア」

土方「テーマホントはいい加減にしろ総悟」

土方は横目で沖田を睨み付ける。

山崎「真撰組密偵、山崎退です。よろしく」

山崎は後頭部を掻きながら気恥ずかしそうに挨拶する。

真撰組の自己紹介が終わった後に万事屋の三人が挨拶をする。

新八「万事屋で働いている志村新八です。よろしくなのはちゃん」

新八はニコツとなのはに挨拶する。下心が見え見えだ。

新八「誰だアアア！？　人の挨拶台無しにしたのは！！」

新八は地の文にツツコミを入れる。

新八がツツコンでいる間にライダーが挨拶する。

ライダー「万事屋で働いているライダーです。よろしく願いします」

ライダーは礼儀正しく挨拶する。

銀時「そして俺がご存知万事屋のオーナーに坂田銀時だ」

新八「いや、万事屋を知らないのはちゃんにご存知って……」

最後の銀時の挨拶を聞いて新八はツツコミを入れる。

そもそものはは万事屋知らないのにご存知も何もない。

なのは（えっ？……坂田……銀時……？）

なのはは銀時の名前を聞いた時、驚いた顔をする。

そして新八と挨拶の事で言い合っている銀時をじつくりと見る。

会ってから今に至るまで色々な事がありすぎて気づかなかったが、落ち着いてじっくり銀時を見てみると見覚えがあった。いや……昔、正確に言えば四年前まで自分が片時も忘れなかったが人物の姿が目の前にある。

さすがに四年前だと言う事もあって、自分の知っている人物に瓜二つな人物と思っていたが、名前を聞いて確信した。

またもう一度会いたいと思っていた人が目の前にいる事に……。



土方「まさかそんな小さなガキに手を出すとはな」

沖田「いやア、旦那も隅におけませんねェ」

近藤「万事屋……さすがに俺もそれには引くぞ」

山崎、土方、近藤は軽蔑の眼差しを向け、沖田は面白そうにする。

新八「……………」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

新八は“こいつ、スタンド使いか!?”と思わせるような黒いオーラを出しながら銀時を嫉妬の目線で睨みつける。

ライダー「……………」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

ライダーも無言で黒いオーラを出す。まあその理由は新八とは真逆だが……。

銀時「何その目!?! まるで小さい幼女をたぶらかした奴を見るような目は!?!? つうか、新八とライダー何か怖!?!」

四面楚歌。まさしく今の銀時の状況はそれだった。なのはの以外の周りが全て敵なような状況にさすがの銀時も泣きたくなった。

新八・近藤・沖田・土方

『『……………ロリコン』』

銀時「違アアアアアアアアアアアアアアう!!!!!!!!!!」

銀時の叫びが夜空に響き渡った。

それは四年前。

なのはがまだ五歳の頃。場所は公園。

なのは「……………」

なのはは一人ブランコに乗って目の前で遊んでいる子供達を見ていた。

なのはの目の前で子供達の遊んでいるボールがポーンと飛ぶ。

キィ

なのははそんな楽しそうに遊ぶ子供達の光景を見て、ブランコを少し揺らす。そして鉄の擦れる音が出る。

だが、その僅かに響く音に子供達は気づく事はない。

自分達の遊びに夢中な彼等は楽しそうにボールを蹴る。

そして、少しの間を置いて不意に公園の外から声が聞こえてくる。若い女性の声だ。なのはにもわかった。その声は彼らの誰かを呼ぶ声だ。となると、その女性は彼らのうち誰かの母か。呼びかけているそれが、少年の名前なのだろう。

その声を聞いた少年が一人、ボールからぱっと目を離してその女性

の下へと走っていく。

女性はそれに笑って相槌を打ち、やがてその子の手を引いて公園から去っていった。

少年が一人いなくなると、今度は別の少年の母がやってくる。次にまた別の子の母が。その次は父が。彼らをそれぞれ迎えに来た。

そして、気がつけば、なのは一人になっていた。

キィ

ブランコを揺らす。そしてささやかに響く金属の擦れる音。

なのはにはブランコの音が自分の心の痛みに思えた。

そしてスツと顔を伏せる。

なのはは寂しかった。そして、悲しかった。

自分父親が重症を負ってしまい、今家の状態は大変な事になっている。

幼いなのはにも今の家族の状態がどれだけ切羽詰まったモノか容易に分かった。

母も仕事で忙しくなり、兄は近寄りがたくなり、姉はそんな母と兄に付いて行くのが精一杯だった。

とても自分に構っている余裕がない事は幼いなのはにもすぐに分かった。

だから彼女は自分は家族に迷惑を掛けないためにも良い子にしていなくちゃいけない。

そう自分に言い聞かせ、我が儘もいわず、作り笑顔を作りながら大人しく家で一人でいた。

別にそれが家族の誰かに強要されたモノではない。

そうしなくちゃいけないとなのはが自身が決めつけ、始めた事。

そしてなのはの家族もなのはが自分で自分を追い詰めている行為に気づかず、自分の事を精一杯にやっていた。

一見なのは自身が勝手にやっている事だから、自業自得と言う見方もできるが、そうではない。

家族だからこそ、なのはの寂しさに気づいてあげなければならないと言う事もある。

つまりどっちもどっちなのだ。

自分から良い子にならないと思い込み、独りになるなのは。最近まるでなのはに構っていない事を気づかない家族。

結局の所どちらが悪いと言う訳ではない。

運悪くそういう悪循環な構図になってしまったのだ。

なのはは誰もいなくなった公園を見る。  
遊んでいた子供達は全員帰ってしまい、公園には誰もいない。

なのは（寂しい……）

なのはは心はそれで埋め尽くされていった。

キィ

なのははまたブランコをささやかに揺らす。

その音はまるでなのはの心の痛みの音にも思えた。

なのは（寂しいよオ……）

誰かに構って欲しい。さっきまで遊んでいた子供達の誰かに声を掛けて欲しかった。自分に気がついて欲しかった。

それが勝手な我が侘である事はなのはにも分かっている。それでもなのはは誰かに構って欲しかった。

しかし、他人に迷惑を掛けたくない。だから他人から声を掛けてきて欲しかった。

それはなのはの小さな願いであり、他人との会話、触れ合いが心の底から欲しかった。

そしてなのははまたスツと顔を俯ける。

なのははギリギリの時間までは家に帰らないようにしている。

それは家族が忙しいからだ。

だから、邪魔にならないようにこつやって公園で時間を潰しているのだ。

だが、その行動がより一層自分の寂しさを膨らませているとはなのは自身気づいていなかった。

独りぼっちになった公園で、なのはは悲しそうな顔をより一層濃くさせながら地面を見つめる。

その時、なのはの目に誰かの足元が映った。

なのはは顔を上げる。

???「……えーっと、俺怪しい奴じゃないから」

なのはの目の前には死んだ魚のような目をし、時代劇でしか見た事ないような白い着物を半分脱いだ状態で着て、腰に木刀を挿し、天然パーマの銀髪の男が立っていた。

なのはは半ば呆然としていた。

いきなり自分の目の前に見た事ない格好をした男がいる事もそうだが、言っている事についても良く分からなかったからだ。

なのはの様子を気にせず、銀髪の男は言葉を続ける。

銀髪の男「そんで、ここは大事だから言っておくぜ。俺、ロリコンじゃねえから」

銀髪の男の言葉は余計になのはを混乱させた。

銀髪の男は「よっこらせ。アレ？俺、爺臭くね？」と独り言を言いながらなのはのとなりのブランコに座る。

なのはは呆然としてまま銀髪の男を見ていた。

そして少しの沈黙が訪れた後、銀髪の男が口を開く。

銀髪の男「お前さア、なんでこんな時間に公園なんかいんの？」

なのは「えっ……？」

なのははいきなり話し掛けられたので、戸惑い答えられなかった。

銀髪の男は淡々と言葉を述べる。

銀髪の男「あのなア、世の中には誘拐犯や、ロリコン変質者や、変態アニメオタクや、変態転生者や、変態ゴリラや、ニコチンマヨライヤ、ドS中毒者や、戦闘狂とかがいるんだぜ。そんな連中がいのにこんな場所でブランコしてたらめちやくちや危ないぜ。あ、俺はこのどれにも当てはまらないからな」

なのは「え、えっと……」

なのははどう答えたらいいのかわからなかった。誘拐犯から後の単語がなのはにとっては意味不明だったからだ。

つうか、五歳の少女にさっきの独特な単語を理解しろと言う方がむちゃくちゃだ。

どう答えようか必死に考えているなのはを尻目に銀髪の男は「とにかく」と言っ、膝に手を乗せる。

銀髪の男「家に帰って家族とテレビでも見たらどうだ？」

銀髪の男は不器用そうに言う。もっと言い方があるだろうが、銀髪

の男にとってはこれが妥当な言い方なのだろう。

なのは「……でき、ないの……」

なのはは悲しそうな声で搾り出すように声を出す。

銀髪の男「なんで？」

銀髪の男は頬杖を突きながら聞く。

なのは「……………」

なのはは俯いて答えようとしなかった。

銀髪の男「ま、言いたくないなら言わなくていいぜ」

銀髪の男も無理にしつこく聞こうとはせず、軽くフォローを入れると黙って公園の景色を眺めていた。

銀髪の男もさすがに自分の事情を簡単に他人に話すのではないなと思ったからしつこくしなかったのだろう。

そして十分経った。

なのは「あの……」

銀髪の男「ん？」

なのはは小さな声で男に声を掛けた。

銀髪の男は暇つぶしのために取り出したジャンプから視線を外してなのはを見る。

なのは「どうして……ここにいるの？」

なのは別に銀髪の男を邪険にしているわけではないが、自分が話さないと知ってなおここに留まる理由が分からなかったからだ。

銀髪の男「言つたろ？　こんな時間に一人でこんな場所いたら危ないだろ」

なのは「えっ……？　それって……」

つまり目の前の男は見ず知らずの自分を守っているとなのは思った。

銀髪の男「俺が」

ズコッ！

なのは予想外の言葉に思わずズコケてしまった。

銀髪の男「おいおい、何コケてるんだよ？」

なのは「いや、ズッコケさせたのはあなたなの！」

なのは立ち上がってツツコミ入れる。

銀髪の男「はいはい。すみません」

なのは「ちゃんと謝って欲しいの！」

“もぉー！”と言つ風になのはは頬を膨らまる。

銀髪の男「少しはマシな顔になったじゃねえか」

銀髪の男は微笑を浮かべる。

なのは「えっ……？」

なのはは銀髪の男の言った意味が分からず、呆けた顔になる。

銀髪の男「さっきまでお前、この世の終わりみたいな顔してたぜ」

なのは「そ、そうなの……？」

なのははそのような顔をしたと思わず、聞き返す。

銀髪の男「ああ、分かりやすかったぜ。正直気づくようになって方が無理な話だ」

なのは「……………」

なのはは顔を俯かせて黙った後、

なのは「ひっく……ふえーん」

涙を流した。そして、とめどなく流れる涙を手で拭く。

銀髪の男「ちょッ！？ お前何泣いてんの！？ 何！？ 俺が悪いの！？ 俺が悪いの！？ ゴメン！！ マジゴメン！！」

銀髪の男はなのはがいきなり泣き出した事に慌てて混乱しながら誤る。

さすがに小さい子供を泣かすのはかなり罪悪感を感じたようだ。

なのは「……違っの……嬉しいの……」

銀髪の男「えっ……？　どゆこと？」

なのはの言葉に銀髪の男は余計にワケが分からないと言う顔になる。

なのはは嬉しかったのだ。

今まで他の子供達にも家族でさえ自分の寂しい気持ちに気づいても  
えなかった。

だが、目の前の男はあっさりと自分の気持ちに気づいてくれた事が  
嬉しかったのだ。

だから、嬉し泣きをしてしまったのだ。

そしてなのはが落ち着いた後、なのはは銀髪の男に自分の家庭の事  
情をゆっくり話した。

なのはは銀髪の男になら話しても良いと思ったからだ。

銀髪の男「ふん、なるほどな」

銀髪の男はなのはの話を聞き終わった後、呆れたような顔をする。

銀髪の男「——バカかオメーは？」

なのは「えっ……？」

なのははまさか話してこんな切り替えしがくるとは思わず呆けた顔

になる。

銀髪の男「何が甘えたらダメだ。何が良い子にしてくなくちゃいけないだ。そんな事なんでお前がしなくちゃいけないんだよ」

なのは「それはお母さん達は大変だから……！」

銀髪の男「じゃあ聞くけどよ。オメーの家族は忙しいから迷惑掛けるとか、我が俤言うなとか言ったのか？」

自分が言い切る前に言われた言葉になのはは首を横に振る。

銀髪の男「だろ？ 良いか。オメーみたいなガキの仕事は親に甘える事だ。別に良いんだよ。我が俤言おうが、駄々こねようが。むしろ、子供に気を使われる方が親にとっては迷惑なんだよ」

なのは「で、でも……何もできない私がそんなことしたらお母さん達が余計大変に……」

なのはの言葉を聞いて銀髪の男は男は目を細める。  
そして少し強めの口調で言う。

銀髪の男「何勝手に決めつけてんだ。お前にしかできない事があるだろ」

なのは「そ、それって、なんなの！？」

なのはは銀髪の男の言葉を聞いて少し詰め寄りながら聞く。

自分にも家族の役に立てる事があるならそれを知りたかった。

銀髪の男は少し間を空けていう。

銀髪の男「甘える事だ」

なのは「えっ？　どう言う事なの？」

なのははワケが分からず、聞き返す。

銀髪の男は夕焼けで赤くなった空を見る。

銀髪の男「可笑しい事にな、親つつうのは子供に甘えられる事で安心するんだ。子供が元気だって証拠だからな。それで、そんな無邪気な子供の笑顔見る事が親にとっちゃ最高の安らぎって……聞いたような気がする」

なのはは銀髪の男の言葉を聞いてガクツと首を落とす。

最後に言葉を曖昧な感じにしてしまう銀髪の男の発言はなのはに自然に笑みを浮かばせた。

銀髪の男「ま、つまりだ。俺の言いてえ事は、気を遣うのも、甘えんのもほどほどにしとけて事だ」

銀髪の男はなのはの頭をポンポンと軽く叩く。

銀髪の男「っで、お前はとうする？　色々言っちゃいるが、決めんはお前だぜ」

なのは「——家に帰って、正直にお母さんに自分の気持ちを言うってみるの」

なのははまっすぐ銀髪の男の目を見る。

銀髪の男はなのはの瞳を見て「フツ、そうかい」と言う。

なのは「あの……／＼／」

なのはは少し頬を赤く染めて、気恥ずかしそうにモジモジする。

なのは「私と帰る時間まで遊んで欲しいの」

なのはの言葉を聞いて、銀髪の男は公園にある時計台を見る。夕方とは言え、まだ少し遊ぶくらいの時間はある。

銀髪の男は“はぁ”とため息を付いて、メンドくさそうに頭を掻く。

銀髪の男「しゃあねえな」

なのは「ありがとうなの！」

銀髪の男の言葉を聞いてなのはは嬉しそうな顔でお礼を言う。そしてそれなりに遊んだ後、なのはが家に帰る頃合になる。

なのは「じゃあ私帰るの」

銀髪の男「ああ。気をつけて帰れよ」

銀髪の男は手を振って公園を出ようとする。

なのは「待つて！」

なのはの声を聞いて足を止める。

なのは「まだお名前教えてもらってないの！ 私は高町なのはって

言うの！」

今更だが、二人はまだ自分達の名前を教えあっていなかった。少し互いの距離が離れてしまっているの、なのはは少し声を大きくしながら聞く。

銀時「——坂田銀時だ」

銀時はそう言って、公園を出て行った。

そして現在に戻り、なのはは目を覚ます。

カーテンの隙間から太陽の光が降り注ぎ、心地良い暖かさを感じた。

なのはは少し眠気が残っているか、眠そうに目を擦りながら時計を見る。

AM 7:00

少し寝すぎたかな？と苦笑する。

そしてさっきまで見ていた夢を思い出す。

なのは（懐かしかったなあ）

なのははつい笑みを零してしまった。

五歳の時公園で銀時に会ったお陰で、家族にすっかり自分の気持ち  
を伝えられた。

その時、母親である高町桃子は涙を流しながら“ごめんね”と言っ  
て、自分を優しく抱きしめた。

兄の高町恭也や姉の高町美由紀とも話し、打ち解けあった。

その後からなのはは適度に甘えるようになり、家族との溝もなくな  
っていった。

重症を負って生死の境をさま迷っていた高町士郎も無事に回復した。  
そして家族とまた笑い合える時間を手に入れた。

なのはは部屋を出て一階のリビングに行く。

リビングに近づくにつれ、複数の人の声が聞こえてくる。

その中には自分の家族以外の声も混ざっていた。

なのはは苦笑しながらドア開けてリビングに入る。

そしてなのはの目に最初に映った自分物は母の桃子だった。

なのは「お母さんおはようー」

桃子「あら、おはようなのは。ごはんできてるから顔洗って制服に  
着替えなさい」

互いに笑顔で挨拶する二人。

なのはは「うん」と笑顔で頷いて洗面所に行く。

ここまではなのはにとってはいつもの朝の光景なのだが、今朝は一  
味も二味も違う光景がなのはの目に映った。

なのはは窓の方に声が聞こえてきたので目を向けた。

近藤「フン！ フン！ フン！ フン！」

近藤が庭の方で木刀の素振りをしていた。

素振りをするために上半身を裸にし、腹にサラシを巻いている。

なのはもたまに父親の土郎が素振りをするために邪魔な上着を脱いでいる光景を何度か見た事がある。

特に気にする様子はなかった。だが、可笑しな点があるのだ。

実の所近藤は……… 上半身どころか下半身も裸だった。

完全にはば全裸である。

窓と庭には段差があるのでなのはの目には近藤の上半身しか見えないのである。

なのははそのまま洗面所に向かった。

そして庭の方では、

山崎「局長オオオオオオオオオ！！ 人の家なんですから止めく  
ださい！！」

銀時「テメーは何やってんだアアアアアアアア！！！」

ドカツ！！！！

近藤「ゴハアッ！！！」

山崎はとんでもない声でツツコミ、銀時は近藤の後頭部に飛び蹴りを食らわせる。近藤は林の中に頭をツツコンだ。

洗面所にいるなのは、

なのは「ん？ どうしたんだろ？」

少し彼等の叫び声を気にしながら顔を洗った。

なのはも顔を洗った後、制服に着替え席に着いた。

他の席にはなのはの家族の高町家の面々以外に万事屋の銀時、新八、ライダー、真撰組の近藤、土方、沖田、山崎の姿があった。

そして、この濃いキャラの面々がいるために高町家の朝食はいつもより一層賑やかになる。

銀時「てつめ！ 離しやがれ！ これは俺のウィンナーだ！ 俺はコイツを生まれる前から目をつけてたんだぞ！！」

恭也「ふざけるな！ お前こそ離せ！」

なのは「銀さん！ お兄ちゃん喧嘩しないで！」

銀時と恭也はウィンナーを箸で引つ張り合う。  
そして喧嘩する二人を宥めようとするなのは。

山崎「ちよっ！！ 副長！！ なんでサラダじゃなくて魚や目玉焼きにマヨネーズかけてるんですか！？」

近藤「止めてトシ！！ 桃子さんと土郎さんがドン引きしてるから！

！」

沖田「近藤さんの言うとおりでさア。土方さん。折角の朝飯をゴキブリの餌にしないでくだせエ。俺の朝食まで汚れてしまいまさア」

土方「止めるな山崎、近藤さん。マヨネーズは俺にとって常時摂取しなければいけないモンなんだ。それと総悟！！汚れてんのはテーマの心の中だろ！！」

自分の食べている料理全てにマヨネーズをかけて自分色に染めている土方に山崎と近藤がツツコム。

土方は自分の好物に暴言を吐く沖田にガン飛ばす。

新八「あの、すみません美由紀さん。なんか騒がしくなっちゃって……」

美由紀「あははは。大丈夫だよ。いつもより賑やかでたまにはこう言う朝も私は良いと思うよ」

他人の家のリズムを壊す自分の知人の姿を見て申し訳なさそうに誤る新八に笑顔で美由紀は対応する。

何故銀時達万事屋メンバーと真撰組の四人が高町家で和気藹々……じゃなくて……優雅……でもねエや……騒がしく朝食を食べているか理由を次回詳しく話すとして、簡単に説明すると……

行く所がない銀時達を優しい美少女なのは様が彼等に救い手を差し伸べたと言っわけである。

え？ それじゃ分かんない？ なら、次回をお楽しみに♪

わっ！！ 石投げないで！！ 何！？ 手榴弾だと！？

と、とにかく！彼等はなんやかんやで高町家に衣食住を提供してもらっているのである。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はゝい。じゃあ今回も銀八先生コーナーいきます」

新八「今回のアシスタントは僕が勤めます」

銀八「はい。今回は最近オタクメガネからロリコンメガネ猿に堕ちつつある新八が担当です」

新八「ちよつと待てコラアアアアアアアア！！何だロリコンメガネ猿つて！！??」

新八はとんでもない異名を付けられた事に食って掛かる。



新八「冥王さん……ブハッ!!」

胸の大きさと言う一部分以外なのはと瓜二つの冥王見て銀八は驚き、  
新八は鼻血出す。

銀八「ええ、全員は答えられないので、万事屋メンバーに答えてもらいましょう」

ソラ「冥王は戦闘狂だろ。つで、明久はライダーか。写真は、正直どうでもいい…」

銀時「なんでなのはと同じなのかすんげえ気になるんだけど!?!…  
明久はバカだろ?つで、フォックスウウウウウ!!!テメー  
はいい加減にしろオオオオオ!!!!!!」

アリス「面白い奴だな」明久は興味ないな。写真は素晴らしいぞ」

アリア「どっちも興味ない。写真は、最高…」

ヤミ「どちらも興味ありません。写真は…興味をそそられます…  
／／／」

神楽「うわッ!めっちゃ羨ましいネ!それで、やっぱりバカだと思う  
アル。写真は……ブアーハッハッハッ!!銀ちゃんとソラの  
スプレ写真はうけるネ!!」

ライホース「冥王と明久は日々努力しているな。写真は答えられん」

リリス「冥王さんのアレは羨ましいです。そして明久君はバカで良  
いんですよね?写真は最高です!!!／／／」

セイバー「冥王とアキヒサとは何時か戦いたいですね。写真は、素晴らしいです！／＼／＼」

ライダー「彼女はバトルマニアですね。アキヒサは、バカなんですよ。うか？写真は素晴らしいの一言に尽きます／＼／＼」

銀八「はい。こう言う反応でした。じゃあ『鳴神 ソラ』さんは廊下に立っていなさい」

新八「じゃあ次いきます。ペンネーム『月光閃火』さんから、

『1・高杉に質問…そっぴや、なのはのお兄さんがアンタに対してこう言つてたぞ？』高杉晋助…お前を…殺す。』ってな♪（黒笑）

輝刃「いや…声優ネタで何をしてるんだお前は！？全く…次は俺からだ。」

2・黒龍さんに質問…やはり大概の銀魂×リリカルなのは系の二次創作作品の銀時と同じ様にパワーアップイベントがあるのか？

ああ…確かに、他の作品を見てもそういったイベントは結構お約束っぽいもんな…。まあ…それが醍醐味と言えるんだがな…。『……じゃあ気が進まねえけど、高杉に答えてもらうか…』

銀八は渋々モニターを出す。そしてそこには高杉が映っていた。

高杉『くくく。おもしれエ。良いぜ。相手してやっても』

高杉はまた新しいおもちゃを見つけた子供のような笑みを浮かべる。そして画面が消える。

そしてその後……

恭也「ぎゃ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
ああああ ああああ !!!!!!!!!!!」

恭也の叫び声が響いた。どうやら高杉に殺<sup>や</sup>られたようだ。

新八「ちよつとオオオオオオオオ！！なんかとんでもない事態になつてんですけど！！？？」

新八は慌てた様子で銀八に詰め寄る。

銀八「まあ、あいつ一応強いはずだから生きてるだろ。じゃあ黒龍  
答えろ」

銀八はあまり気にした様子もなく淡々進める。

黒龍「そうです。やつぱりそう言う展開は考えていますよ。あ、もちろんコスプレさせようと……」

銀時「俺をコスプレイヤーにすんじゃねエエエエエエエ！」

ドカ！！

黒龍「ゴハツ！」

黒龍は言い切る前に銀時に後ろから飛び蹴りを喰らわされた。

銀八「ええ、『月光閃火』さんは銀時の野郎のコスプレを楽しみにしてください」

新八「いや、銀さんコスプレしたくないって言ってますよ……」

銀八「良いんだよ。それがファンの願いなんだから。じゃあ次いくぞ。ペンネーム『真王』さんから、

『真王』あんたらはまだだ。『フェイト達はチャイナソラ（女性化）はいいですか？』『ソラは世の中パフェに何を入れますか？（風花のところでドックフード入れたドックフードパフェがある）』『転生者に敵派と味方派がありますか？』の3本です。では』『ええ、ま  
ず転生者には敵派と中間派を黒龍は考えているようです』

新八「中間派って何ですか？」

銀八「敵か味方が分からない奴の事だ。つで、1と2は質問さらた奴答える」

フェイト・アリス・アリア・ヤミ・セイバー・シルバー・リリス  
『もちろん！』

ソラ「そうだな…その気分によってバリエーションは変えるな。例えば、果物やチョコレートやクッキーは当たり前だな。そこに抹茶や和菓子を加えたり、色々だな」

銀八「はい。『真王』さん。俺も日々新しい甘味を作り出しています」

新八「いや、何ですかそれ！？」

銀八「じゃあ次。ペンネーム『黒神』さん」

新八「あの、銀八先生」

銀八「何だよ？これから質問見ようとしてんのに」

銀八は質問を言うのを途中で遮る新八に怪訝な顔をする。

新八「いや、もうこの人の質問見るのやめませんか？僕としてはクソ神がどう言う質問しているか予想できるんですけど」

銀八「いや、お前黒神さんの事、さりげにクソ神って言ったな。失礼だなおい」

新八「とにかく止めましょうよ」

銀八「いやいや止めないよ。作者も俺も黒神さんの質問はいつも楽しみにしてんだからよ」

新八「あんたらただけドSなんですか！？」

銀八「とにかく質問言っぜ。「ちよっ！」ええつと・・・」  
オタクメカネ  
新八へ

なのは好きになってロリコンに落ちるのは構いませんが、結局は最終的になのは銀さんを選ぶので、失恋する前に諦めたほうが良いと思いますか？（黒笑）

セフィロスへ

以前、質問でツラを弟呼ばわりしたようですが……その詳しい理由

をお聞かせ願います。

アーチャーへ

新八の事を侍かオタク、そのように見ていますか？  
是非とも聞かせてください。』……………」

銀八は横目で新八を見る。

新八「……………」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

最早怒りで声も出ず、とてつもない鬼の形相と黒いオーラを出していた。

銀八「怖いんですけどオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？」

さすがの銀八もこればかりには青ざめずにはいらなかった。  
最早あなた誰？ってレベルだった今の新八は。

銀八「じゃ、じゃあ質問された奴答えて！！」

モニターが現れ、そこにはセフィロスが映っていた。

セフィロス「フツ……………」  
「そう言えば、まだ理由を話していなかったな。  
何故私が桂の事を弟と言ったか教えよう。アイツは私と同じ服装と  
同じ武器を使う。更には、ソルジャーでもないのにあの力。…………私  
の興味をそそられた。他にも奴は『狂乱の貴公子』と呼ばれている  
そうじゃないか。私も同じく狂った人間だからな。だから私の兄弟

と呼ぶに相応しいと思ったのだ。奴に母の細胞を分け与えたらどうなるのか楽しみだ……」

銀八「なんかツラの奴……とんでもない奴に興味持たれたな。じゃあアーチャー答えろ」

アーチャー「そうだな。彼は侍でありオタクであると私は認識している」

銀八「あ、やっぱりオタクだっと思ってんだ」

アーチャー「彼自身過去に自分がオタクだと認めているだろ？」

確かに新八は過去に自分をオタクだと認めている。

銀八「って言うか、こんな事新八が聞いたら……！！！！」

銀八は慌てて新八を見る。

新八「黒iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiん！！！！」

新八は無限ロケットランチャーやらサバイバルナイフやら手榴弾やら閃光弾やらマシンガンやら、“お前これからバイオハザードの世界に行くのか？”と言うような完全武装をしていた。

そして新八はそのまま黒神さんの所に向かった。

銀八「もうあいつ侍でもなんでもないですけどオオオオオオオオオ！！！！？？？ただの武装兵じゃねエか！！」

アーチャー「たぶん彼は閃光弾で黒神の目を潰してから攻撃するつ

もりなのだろう」

銀八「オメーは良く冷静に分析できるな!!」

アーチャー「私はこれで失礼する」

銀八「はあくたく。じゃあ『黒神』さんは、完全武装新八に気を付けるように。じゃあ次いくぞ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんから、

『沖田に質問。あともう少しで土方を亡き者に出来た時はありましたか?』……サド、どうなんだ?」

沖田「何回もありましたが、土方さんの生命力はゴキブリ並なんで全然死なないでさア」

沖田は神速残念そうに言う。

銀八「オメーはホント腹の中真っ黒だな!!じゃあ『黄色いのなにか』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』どういう腹してるんだよお前は……  
では質問。』

1、『白騎士リリカルなのは』の第十話でレナードの味覚をどう思いましたか?一人ずつ答えてね

2、もしソラが銀さんが白騎士になればみんなどう重いましか?

3、なのはとフェイトとセイバーとヤミに質問。なりたいシンナイトは?

4 黒龍さんもしStrikerS編でフォワード部隊を鍛えたいなら異世界の門をおススメします。そこなら強いモンスター居ますからレベルが上がるかもしれませんよ？

『以上です』……えー、最初に一つ言っておきますが、質問は三つなので覚えておいてください。それと、皆はさすがに時間がなので1と2は神楽とアルフとライダーとフェイトに答えてもらいます」

神楽「マジでか！？それと、銀ちゃんには白騎士は似合うけど、ソラには似合わないネ」

アルフ「どう言う味覚してんだいアイツ！？それと、白騎士はやっぱり銀時じゃないかい？」

なのは「凄いの！！それと、白騎士はやっぱり銀さんかな？」

ライダー「彼の味覚は狂っているんでしょうか？それと、やはり白騎士は銀時が似合うと思います」

銀八「やっぱそう言う反応だよな。3、4答えろ」

なのは「私はやっぱり白騎士かな？」

フェイト「私は黒騎士がいいな」

セイバー「私は白騎士です」

ヤミ「私は興味ありません」

黒龍「いや、さすがにそれはやり過ぎでしょ！」

銀八「はい、『白騎士君』さんは次回から気をつけてください。ふうーやつと終わったな」

ソラ「大変だった」

ソラが現れた。

銀八「よお。主人公なのに最近出番が少ないソラじゃねエか」

ソラ「まア別に気にしないが、真王のそこからシャルが来るとか聞いたがどうしたんだ？」

銀八「あり？　そう言えばこないな？」

シャルはと言うと……

シャル「あれ？　ここどこ？」

見た事ない世界に來ていた。

変態「お嬢さアアアアアアア！　！！僕と肌を温め合おうー！！！！！！」

パンツを頭に被り、トランクス一丁の変態が現れた。

シャル「気持ち悪い……」

シャルは相手のあまりの気持ち悪さに逃げた。

シャルはどうやら間違っ て変態だらけの世界に来てしまったようだ。

銀八「とりあえず、こないならこれで終わりだな」

ソラ「次回のアシスタントは？」

銀八「次回はマヨ方にやってもらいます」

## 第十五訓：辛い思い出は時に大切（後書き）

黒龍「じゃあ贈り物コーナーです」

今回贈られた物

『黄色いのなにかさんからはソラバースと銀時ラバースはソラ、  
銀時を自分の物にしようと考えて互いに殺し合いをしている同人誌』  
、『鳴神 ソラさんからはソラと銀時のコスプレ写真』

黒龍「贈り物ありがとうございます」

銀時「つつか、こんな怖い同人誌いるかアアアア！！！」

銀時は同人誌をゴミ箱に叩きつける。

ソラ「相変わらずだな」

ソラはコスプレ写真を呆れた目で見ていた。

フェイト「次回、『人優しさは身に染みる』にテイクオフ。ソラく  
~~~~~ / / / /」

フェイトは写真を見て鼻血を垂れ流していた。

## 第十六訓：人優しさは身に染みる（前書き）

黒龍「今回は台詞の前に名前を付けないほうが良いと言うコメントを貰ったので、名前表記なしでいこうと思います。それで、名前が在った方がいけない方が良いかコメントをくれるとありがたいです」

銀時「そんじゃ、『リリカル銀魂ライダー』始まるぜ」

## 第十六訓：人優しさは身に染みる

何故銀時達が高町家で騒がしく朝食をご馳走になっている理由を知るためにまた時間を遡らなければならない。

なのはが何故か銀時に泣きながら嬉しそうに抱きつき、銀時が四面楚歌と言う状況になった。

そしてなのはが落ちて着いた後、なのはから抱きついた理由を聞いた。なんでも五歳の時に銀時に出会い、その出会いがきっかけで家族と自分の溝を埋めた事。そして自分の心を救ってくれた事。

その時からなのはにとって自分を苦しみから救ってくれたヒーローのような憧れの存在になった。

「だから私はまた銀さんに会えて嬉しかったです／＼／＼」

なのは嬉しそうに言う。たださっきの銀時に泣きながら抱きついたのが恥ずかしかったのか、顔が若干赤かった。

なのはにとってこの四年間また銀時に会いたいと常日頃から思っていた。

だから銀時に会えた事で嬉しいと言う感情が火山のように爆発して思わず抱きついてしまったのだ。

そしてなのはの説明を聞いた真撰組と万事屋メンバーは驚いた顔をしていた。

そして何より一番驚いているは話題の中心的存在の銀時だった。

なにせ銀時自身は五歳の時のなのはに遭った覚えも何か助言めいた事も言った覚えは一切ないのでポカーンとしていた。

そして我に返った銀時は上擦った声でなのはに聞く。

「な、なのはちゃん。その話……マジ？」

「えっ？　銀さん覚えてないんですか……？」

なのはは悲しそうな声で言う。なのははあの時の事は銀時にとっては覚えるような事ではなかったと思ったからだ。  
だが、なのはの思った事とはまったく違う事を言う。

「いや、覚えてるも何も……俺、この世界やこの町に来たのも初めてなんだけど……」

「えっ……？」

銀時の言葉を聞いてなのはは呆けてた声を出す。

だが、間違いなく四年前に遭ったのは目の前の男、坂田銀時で間違いない。

それは自信を持ってそうだと言える。

天然パーマの入った銀髪に赤い瞳に服装、そして口調や雰囲気全てが四年前に遭った人物とまったく同じなのだ。

だが、その本人に会った事ないと言われるのではなく、この町に来た事するなと言う発言にはなのはも予想外だった。

何故なら一度もこの町に来てないなら自分と銀時が遭う事はあるえ

ないからだ。

そして他にも気になる点があるのでなのは銀時に聞いた。

「あの……この世界って、どう言うことですか？」

「いや、そのな……」

銀時は言いすらそうに口ごもらせる。

さすがにこの世界はアニメの世界だとは言えない。そう言っても頭のおかしい奴だと思われるし、何よりまず信じる事はないだろう。だから、どう言おうか考えていた。

しかも色々な事があつたせいで他の面々も何をどう言おうか迷つてしまい、上手く言葉が出せずにいた。

そしてそんな沈黙を打ち破る人……いや、フェレットがいた。

「あの、とりあえず一から順に話を纏めませんか？　やはり、今の状況じゃ何か言っても混乱するだけですし」

ユーノが状況を纏めるためのフォローを入れた。

そして、このような状況でもはっきりと自分の意見を言ったユーノに新八は……

（すごいなあ、この人。いや、フェレットか……）

関心していた。



いないだろう。

言い方が悪いが自分の世界は創作の作られた偽りのような世界と言  
う事になるからだ。

「ん？ どうしたんでさアイタチもどき。神妙に考えて」

沖田はユーノが右前足を顎に当てて考えているのに気づき、質問す  
る。それと動物が前足を顎に当てて考える光景はかなりシニールだ  
と思った。

「いや、イタチもどきってなんですか！？ 完全に悪意あるでしょ  
！！」

ユーノは沖田言葉にツツコム。しかもそのツツコミは新八に並び立  
つほどの切れの良さだった。  
そしてコホン、と咳払いをして言葉を述べる。

「あの、僕は彼女の世界がアニメの世界ではないと思うんです」

ユーノの言葉を聞いて銀時が怪訝な顔で質問する。

「つまりどう言う事だよ？」

「これは僕の仮説なんですけど、彼女の世界……つまりこの世界と  
あなたたちの世界の関係はいわゆるパラレルワールドのような関係  
だと僕は思っています」

「パラレルワールド？」

新八の言葉を聞いてユーノは「はい」と頷きながら説明を続ける。

「とある学説によると、平行世界と言う物があるんです。あ、平行世界と言うのは可能性の世界で……例えばもし僕が彼女に会う可能性と会わない可能性がありますよね？　そう言うもしもの世界が枝別れた、似ているようでどこか違う世界……それを平行世界、所謂パラレルワールドと言います。つまり、あなた達の世界ではこの世界はアニメですけど、だからこの世界がアニメの世界ではないと言う事です。そもそもその考えだと、三次元の存在であるあなた達が二次元であるアニメの世界に行く事は不可能なはずですし………あの、どうしましたか……？」

ユーノは説明を一通りした後、銀時達を見た時、銀魂メンバーのほとんどはポカーンとしていた事に困惑の顔で質問した。

それは仕方ない。なにせ彼等はババロア並の脳みそなのだから。え？　意味が分からない？　つまり頭の理解力が残念と言う事である。一応話しに何とかついていけたのは常識人であり銀魂の住人の中で唯一のツツコミ使い新八と、リリカルなのはの住人であり、小学生にした異様に優秀なのはである。他の奴等は全然付いていけない。

あ、ライダーは一回で全て理解しましたよ。

そしてそんなババロアブレインズはとにかく与えられた情報を必死に処理していた。

ちなみに沖田はもう話などまったく聞かないで、アイマスク付けて寝ていた。

少しの沈黙が続いた後、近藤がしゃがみながら真剣な顔でユーノに言う。

「イタチ君。すまないが、もう一度説明してくれないか？」

「あの……だからフレットです。後、僕の名前はユーノです。それで、どこを説明すれば良いですか？」

ユーノはやっぱり自分の名前を教えながら近藤の要求に素直に答える。

「全部」

「ぜ、全部ですか？ 分かりました」

ユーノはまさか大人である近藤から全部と言っ言葉が来るとは思わ  
ず、若干戸惑うが懇切丁寧に説明した。  
そして説明を聞き終わった近藤は……。

「もう一度全部頼む」

「えっ！？ わ、分かりました……」

ユーノは若干驚きながらまた説明した。

「もう一度全部頼む」

「は、はあ……」

そしてユーノは若干疲労を感じながらまた説明した。

「もう一度お願い！」

「えっ！？ いや、あの、その……分かりました……」



「だってだって！ 何回聞いても分かんないだもん！！ 何コレ！  
？ なんかクラスで一人だけ問題解けない感じなんだけど！！」

近藤は涙目で訴える。正直おっさんの涙目は見ててあまり良いもの  
じゃない。

「いや、さすがに僕も三回目の説明の時には完全にユーノ君の説明  
を理解しましたよ！！ なんで僕より歳食ってるあんたがなんでそ  
んなに理解力ないんですか！？ 爺ですかあんたは！！」

新八はバンバンツッコミ嵐を近藤に浴びせる。

近藤は痛い所疲れて完全に涙目だ。大の大人がこれ大丈夫だろうか？

「ま、俺は二回目の説明の時には完全把握したけどな」

銀時は得意げな笑みを浮かべる。ちなみに銀時が理解できたのは三  
回目。

「フツ……随分立派な脳みそだな。まあ俺は一回で是非まで語れる  
位理解できたけどな」

土方はほくそ笑みながら銀時に言葉に食って掛かる。ちなみに彼が  
四回目でやっと理解できた。

そして土方の言葉を聞いた銀時はほくそ笑む。

「あ、俺理解だけなら一回で充分だったな」

「ああん？ 俺はもう最初の言葉聞いただけで充分だったな」

「あん？ 俺は最初の“と”の部分だけで何言つか予想までできたぜ」

「何だと？ 俺なんかア……」

銀時は土方は睨み合いながら不毛な争いをする。

「ちよつとオオオオオオ！！ 銀さんも土方さんも恥ずかしいから止めて下さい！！ 口論発展して完全に嘘がモロバレしてますから！！」

『『嘘じゃねええ！！！！』』

ドカツ！！

「ゴハッ！！」

ツツコミを入れた新八は銀時と土方から理不尽にダブルパンチを喰らった。

そして立ち上がりながら額に青筋浮かべて怒鳴る。

「何すんじゃおのれらアアアアアア！！！！」

そのまま新八と銀時と土方の三つ巴の大喧嘩になった。

その途中で沖田がさりげなく土方に足カックンしたり、目潰ししたりしていた。

三人の喧嘩を静めるのにまた時間が掛かった。

ちなみに止めたのはライダーと近藤と山崎。あ、山崎いたんだんだ……。

「それどう言う意味!!??」

喧嘩を止めて落ち着いた後、次にユーノの事やジュエルシードや魔法の説明をユーノがした。

今度は近藤にも分かるように詳細に説明した。

「僕はこの世界の住人ではありません。あ、と言っても平行世界の住人ではありませんよ」

なのはの住んでいるこの世界の他にも世界は幾つもあると言う事。

そう言う世界を次元世界と呼ぶ。

その数多に存在する次元世界を管理・維持しているが『時空管理局』と言う警察のような組織である事。

そしてさっきなのはや銀時達を襲ってきた怪物は『ジェルシード』と言うロストロギアの思念体。

ジェルシードは全部で21個あり、一つ一つが強大な魔力の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望（自覚の有る無しにかかわらず）を叶える特性を持っている。ユーノが発掘し、その後の事故で海鳴市周辺に落ちた事を説明した。

だからユーノは責任を感じてジュエルシードを回収するためにこの海鳴市に来たのだが、力及ばずスクライア族秘伝の魔法でフェレット姿になった事を話した。

ちなみに変身した理由は魔力を温存するため。

ユーノの説明を一通り聞き終えた銀時達はそれぞれの反応見せていた。

銀時はまたメンドーな事件に巻き込まれそうだなと疲れた表情をし、新八となのはと山崎はユーノの責任感の強さに関心した。土方とライダーは呆れたような表情をしていた。

ちなみに沖田はどうでもいいと言う風にアイマスクを付けながら寝ていた。

そして、近藤はと言うと……

「ユーノ君!!」

「は、はい!!」

とユーノの両肩に手を置きながらでかい声で言う。ただ、近藤の手がでかいので置いていと言うより体を掴んでいると言う感じになっている。

そして体を掴まれたユーノはビックリしながら返事する。

「あ、あの……どうしたんですか？」

ユーノは戸惑いながら質問する。

どうしたいいきなり体を掴まれたのか分からないからだ。表情を読み取るうにも近藤が顔を俯かせているので、それもできない。

そして近藤は顔をバツと上げて、目尻に涙を浮かべながらでかい声を出す。

「ユーノ君！ 君はなんて立派なんだ！！ 俺は感動した！！」

「えっ……！！？」

ユーノは啞然とした。まさか、さっきの話でここまで感動されるとは思わなかったからだ。

そんな近藤の姿を見て土方は“またか……”と言う感じに右手で頭を抱えた。

近藤は見た目どおり結構単純な性格なので、こう言う話にはつい感動してしまうのである。

そして近藤はユーノから手を離して土方達真撰組メンバーに体を向けて声を上げながら言う。

「よし！ 俺達真撰組もユーノ君の十円シール探しに協力しよう！！」

「あの、ジュエルシードです……」

「ええええええ！！？」

（やっばこう言う事になっちまったか……）

ユーノはやっぱり近藤の言葉を訂正し、山崎は驚きの声を上げ、土方は疲れのような顔でため息ついた。

「いや、局長！！ 元の世界に帰る方法を探すのはどうするんですか！！؟؟ 確かに俺もユーノ君に協力したいと思いますけど、まず元の世界に帰る方法を見つけるのが最優先じゃないんですか！？」

山崎は近藤の提案に食って掛かる。

山崎としては他人の問題にとにかく口出しするのはどうなのだろうか……？、と思ったからこの発言をしたのだ。

そして山崎の意見に土方も同調する。

「山崎の言うとおりだ近藤さん。そのフェレットの問題に俺達が首突っ込むのは無粋だ。それよりもまずは俺達の問題を解決させるのが先だろ」

土方はタバコを吸いながらクールに言う。

だが、土方と山崎の言葉を聞いても近藤は引き下がらなかった。

「警察……いや、侍である俺達がユーノ君の手伝いをするのは当然だ！！ 例えどんな奴にでも手を差し伸べる。それが俺の心情だ！！」

「はあ………」

土方は諦めたようにため息付いた。

そしてそんな土方の肩に沖田が手を置く。

「まあまあ、土方さん。こうなつた近藤さんはもう止められませんか、諦めてジュエルシード探しは土方さん一人で頑張りましょう」

「なんで俺だけ探す事になつてんだ！！」

沖田の憎たらしい言葉に土方は青筋浮かべながらツツコム。

「ユーノ君！ 私もそのジュエルシード探しを手伝うの！」

そして近藤に便乗したようになのはもジュエルシード探しの手伝いを申し出た。

なのはユーノの話を聞いた時には既にジュエルシード探しを手伝おうと決めていたので、近藤に続いて言ったのだ。

「えっ……？ いや、その……」

戸惑うユーノをよそに、近藤がなのはの両手を握りながら感動したように言う。

「そうかなのはちゃん！ 君は優しいな！！ 立派な魂を持った子供が居て俺は嬉しいぞー！！」

「にやははは……そんな事ないですよ」

なのははつい照れてしまい笑顔になる。

そんな二人の光景を見てユーノは汗をかきながら困惑の表情をしていた。

（どうしよう……？ ただ、魔力が戻るまで彼女の家には少しの間泊めて貰おうと思ったのに……いつの間にか手伝ってもらう雰囲気になっちゃった……）

ユーノとしては他人に迷惑を掛けたくないから、少しの間寝泊りする所を提供してもらったらまた一人でジュエルシード集めをしようと考えていたが、いつの間にか話がどんどん予想外の方角に進んでしまっている。

ユーノはとりあえず、言い難いが、後で一人でジュエルシード集めをする事を話そうと思った。

その一方で、万事屋メンバーはこれからどうするか話し合っていた。

「あの、銀さん。僕達はどうしますか？ 近藤さん達はユーノ君の手伝いをするみたいですけど」

新八は銀時に質問する。

「あつちはあつちの好きにさせれば良いだろ。俺達は俺達で今夜の寢床探そうぜ」

「あの、だったら、私の家に来ませんか？」

銀時がそう言った時、近藤と熱い会話をし終えたなのはが銀時に近づきながら自分の家に泊める提案を出す。

「ん？ 良いのかよ？ 見ず知らずの俺達を家に泊めて？ お前の父ちゃんや母ちゃんが何か言うんじゃないかねえか？」

銀時の言葉になのはは笑顔で心配ないと言う風に言う。

「大丈夫です。私を助けてくれた人達だって説明すれば、お母さん達は銀さん達を泊めるのを許してくれると思います。それに、私は五歳の時お礼がしたいですし…… / / /」

なのはは最後の言葉だけは顔を赤くさせて言った。

なのはとしては五歳の時に自分を救ってくれた銀時とずっと一緒に居たり話したりしたいと思ったし、恩返しもしたいと思った。だからこの提案をしたのだ。

「さっきも説明したけどよ、俺は五歳のお前に会った覚えはねえ。

だから、てめえに恩を着せてもねえ俺に礼をしても何の意味もねえだろ」

五歳の時に助けた人物と自分を同一人物だと勘違いしているであろうなのはを利用すれば寢床を確保できる。

だが、銀時ははっきりと自分はなのはに感謝されるような事は何もしていないと言う。

それはこんな子供に頼れないし、身に覚えのない恩を返させるような事はさせないと思ったからだ。

普段はダメでも決める時は決める。それが坂田銀時と言う男である。

だがなのはは銀時の言葉を聞いた後、首を横に振る。

「そんな事ありません。五歳の時に私を救ってくれたのは私の目の前に居る銀さんです。それにさっきだって私を助けてくれたじゃないですか」

笑みを浮かべて言うなのはの言葉を聞いて、銀時は「あ、そう言えばそうだな」とジュエルシードの思念体からなのはを助けた事を思い出した。

なのはの言葉を聞いて、銀時は頭を掻きながら諦めたように言う。

「じゃあねえ。じゃあお前の言葉に甘えさせてもらうか」

「はい。あ、それと銀さん。私の事はお前とかじゃなくて、『なのは』って名前で呼んでください」

「はいはい、分かりました。『なのは』」

「はい」

銀時はなのはと話した後、後ろでなのはと自分の会話を聞いていた新八とライダーに顔を向ける。

「そう言う事だけだよ、お前らもそれで良いか？」

「僕は構いませんよ。これ以上なのはちゃんの提案を断るのは逆に失礼ですし」

「私も構いません」

新八は苦笑しながら言い、ライダーは真顔で言う。

「つと言っわけだ。俺達が元の世界に戻るまでの間よろしく頼むぜ」

「はい」

なのはは頬をほんのり赤くさせながら笑顔で答える。  
その時、銀時は「それとよオ」と言っ言葉が続ける。

「お前のジュエルミート探しも手伝っぜ」

「銀さん、ジュエルシードです」

新八は訂正する。

「えっ？ 良いんですか？」

なのはは驚いた顔で聞く。

「ああ。何日も衣食住提供してもらうのに、さっき助けたくらいじや割りに合わないだろ？俺はよオ、元の世界じゃ出すもんさへ出せば何でもやる万事屋ってのやってんだ。だから、晩飯代や宿代のためにしっかり働かせてもらうつて事だ」

銀時は微笑を浮かべる。

「あの……ありがとうございます！」

なのはは頭を下げた。一瞬銀時の提案を断ろうと思ったが、銀時の一瞬だけ輝いたまっすぐな瞳を見てその考え止めて素直に手伝ってもらうつ事を決めた。

そしてその後、話し合った結果、ジュエルシード集めを手伝う真撰組四人もなのはの家でお世話になる事になった。

銀時達はなのはの家である高町家の門の前でなのはが親と話を付けてくるまで待っていた。

「それにしても、なのはちゃん遅いですね」

「まあこんな大人数泊まるんだしな。ま、野宿の方も一応覚悟しとけよ」

少し時間が掛かっているので、待ちくたびれた新八が腕を伸ばしな

がら背伸びする。

銀時は欠伸をしながら、やんわりなのはの提案が親にダメだしされる可能性がある事も考えろと言う。

ポロ

「ん？」

新八が背伸びした時、懷から何かが落ちた事に銀時が気づく。  
新八は落ちた物に気づき、ヤバッ！！、と言う表情をする。

「何だコレ？」

「ちょッ！ まッ……！！」

気になった銀時は新八の静止も聞かずに落ちた物を拾う。  
それは『魔法少女リリカルなのは』のDVDパッケージだった。

「……………」

それを見た銀時は冷めた目つきで、まるで汚物を見るような視線を新八に向ける。

そして新八がリリカルなのはのDVDを持っていた事気づいた他の面々も……

「眼鏡……お前……」

「あらら、ついにロリコンオタク堕ちちまったのか」

「シンパチ……あなたついに……」



ウンコオオ!!」

ステージに立つのはアイドルの寺門通。最悪の語尾でお礼を言う。

『『とうきびウンコオオオオオオオオオ!!』』

観客がお通の声に応える。最早色々終わっている集団だ。

「それじゃあ最後の一曲『お前の母ちゃん。人だ?』!!」

最後の一曲をお通が熱唱し、ドームの中の熱気は最高潮に達した。

ライブが終わり、ドームの中から沢山の人が出てくる。

「いやゝ今日も盛り上がったなあ!」

と口を開いたのは寺門通親衛隊のタカチン。

「そつだなあ。お通ちゃんのライブは最高だよ!」

「なあ軍曹……アレ? 軍曹?」

タカチンは周りをキョロキョロ見て人混みの中、軍曹を探す。

「軍曹ならそこで携帯いじってますよ」

一人の隊員が指差す。

そこには携帯の画面を見ながらニヤついている軍曹がいた。

「何やってんだ軍曹のやつ？　まさか、また女とメールしてやがんのか！？」

タカチンが額に血管を浮かべる。

「いえ違います。なんか最近、リリなんとかってアニメにハマったらしくて、暇さえあればそのアニメの待ち受け画像を見てるんですよ」

「アニメだとオ！？　軍曹のくせに何やってんだ！？」

タカチンが軍曹に掴みかかろうとした時。

「ぎゃあああああ！！！」

軍曹が悲鳴を上げた。

見ると一人の男が軍曹の鼻の穴に指を突っ込んで体を持ち上げていた。

『「た……隊長オオオオ！！！」』

隊員達が恐怖に駆られた声を上げた。

軍曹を持ち上げている眼鏡男は寺門通親衛隊隊長・志村新八。普段は地味なツツコミ眼鏡だが、寺門通の事になるとス。ウターがぶっ壊れるくらいの戦闘力を発揮する。

「軍曹オオオオオオ！ 寺門通親衛隊隊規十二条を言ってみるオオ！！」

新八はどこぞの拳王のような形相で軍曹を睨みつける。普段の新八にはない重い威圧感を放っている。

「いだだだっ！」「たっ、隊員はアニメ等の二次元の作品を観ることなかれ」であります！」

痛みと恐怖に怯えながらも軍曹は答えた。

「その通りだ！ 軍曹オ！ 貴様は幹部でありながらこれを破った！ よって——！」

新八の目がカッと見開かれる。

「滅びの鼻フックデストロイヤーバーストストリームの刑に処す！！！」

叫びながら新八は軍曹の頭を地面で擦り、そのまま一本の太い木に向かって投げた。

「ぶぎゃー！！」

軍曹は木にぶつかり、ズルズルと地面に落ちた。

「軍曹オ！ 貴様の持つてるそのアニメのDVDやグッズは全て没収だア！ 全部俺が売ってやる！！」

約一時間後。

軍曹は泣く泣く全てのアニメのDVDとグッズを新八に渡した。渡した後、軍曹は泣きながら帰っていった。

新八はDVDのパッケージを見た。そこには一人の少女が写っていた。

アニメ『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのは。新八はパッケージに写ってる、なのはを見て顔を赤くした。

（あ……アニメなんて……アニメなんて……！！！）

DVDを持つ新八の手が震える。

（くっ……！ めっちゃありがとうございましたアアアアアアアアアアアアアア！！）

新八は頭を下げ、心の中で礼を言った。一体誰に言っているのだろうかこのバカは？

そこで軍曹から没収した『リリカルなのは』のDVDとグッズを売らずに家に持って帰った。

~~~~~

と言っわけである。

やっぱ新八はロリコンと言う事ですね。

「違うわボケEEEEEEEEEEEEEEEEEE!!!」

新八は地の文にツツコミを入れた。

◻ おまけ ◻

銀八「教えて」

生徒全員

銀八先生！

銀八「はい。前回言ったとおりアニメオタクマヨ方にアシスタントやってもらいます」

マヨ方「つつか何だマヨ方って!!?? ふざけた異名をつけんじやねエエ!! つつか変えんなアアアアアアアアアア!!!!」

ドカッ！！

黒龍「ゴハッ!!」

マヨ方……じゃなかった。土方は黒龍を思いつきり殴った。

銀八「じゃあマヨ方は放っておいて、斬るぞテメー!!!!」早速質問いきましよう。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『ルイージ「質問」冥王の技はどう思いますか?』」

ムツツリーニ「……………質問」<sup>マリオ</sup>師父についてどう思う? なお、ちゃんと答えないと…こちらのピーチ姫の××料理が飛ぶから注意せし…威力は作者が書いてるもう1つのを見れば分かる」

スネーク「質問だ『ムツツリーニについてどう思う?』」

次回を楽しみにしてます♪」…………いや、冥王の技はかなり凄いうぜ」

土方「下手したらチートに入るな」

銀八「2は……マジかよ!? こりゃあちゃんと答えないとな」

土方「俺としては、まア規格外としか言いようがないな」

銀八「俺は変なおっさんだと思っぜ」

土方「それちゃんと答えてないだろ!？」

銀八がちゃんと質問に答えなかったせいで、ピーチ姫の料理が飛んできた。

銀八「あめえな!! マヨ方ガード!!」

ベチャツ!

土方「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」

銀八は素早い動きで土方を盾にしてピーチ姫の極悪料理を防いだ。

銀八「じゃあ最後の答えるが、ムッツリーニは本名はムッツリーニだと認めた方がいいな。じゃあ『鳴神 ソラ』さんはいつも一番早く感謝くれてありがとうございます。次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『ども…月光閃火だ。』

しかし…恭也よ…ご愁傷様だ。（合掌）

輝刃「ってほぼ閃火の差し金だな…（汗）。あ…質問…行くぞ？  
まずは俺からだ。」

1・新八に質問…眼鏡、カッコイイやつにしてみたらどうだ？案外イケるかもしれないぞ？

あゝ…確かに、新八の眼鏡ってほぼ丸眼鏡が主流だもんな。いつペんカッコイイ眼鏡にした方がいいかもしれないな…。次は俺からだ。

2・銀魂メンバーに質問…もし自分にリンカーコアがあってデバイスが持てるとしたらどんな系統のが欲しいんだ？

輝刃「確かに、いずれは銀時達も魔力を持つている事が判るかもしれない…。俺の憶測だと、一番伸び白が大きいのは新八の方ではないかと思うんだが…どう思う？」……………1は別にあんま変わらないと思うけどな。後、新八の魔力はF位じゃね！！」

新八「いや、Fって何ですか！？原作でも聞いた事ないですよそんな単位！！」





黒龍「は、はい。俺はメソギア派（牛乳派）ですね」

銀八「じゃあ『黄色いのなにかさん』は廊下に立ってて……次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』さあな。質問です『ギルシアの幼女愛っぷりはどう思いますか？』」

ビビ「次は私。『みんなあ私のことどう思ってるのかな？』」

ユウカ「無闇に？入れるものかしら？『ところでみんなはこれを耐えられる自信はある？』

『八百万の雷（容赦なく雷が降り注ぎます）』  
ヤオヨロズノカミナリ  
マグマドール

『溶岩人形（溶岩の人形で鬼ごっこします）』  
ゴレム  
むげんせつば

『無限切刃（斬撃攻撃が無限に向かってくる）』  
ゴースト・ラビリンス

『幽霊迷路（脱出するまで幽霊と対面（ソラと銀時のみ））』  
くさしかばねごっこ

『臭屍地獄（ゾンビ、虫系モンスター、触手達とどっこいまつこい（おしくらまんじゅうともいう）しあう（というかゾンビ達が一方的に））』

さあ一体どれがいいかしら？？」

真王「黒っ！！？この人腹の中黒っ！！」

ユウカ「さて、私もあそこに向かいますか」

真王「……さり気なく不安なんですけども…一体何をするつもりで？」

ユウカ「もちろんあそこの銀時を私の椅子にしたりゴリラをペットにしたりマヨさんを餌係（自分が餌）にしたりソラを軟体盛りにしたり……」

真王「碌な事がねえー！ー！！特に最後がつっ！ー！！」

ユウカ「そうかしら？どうせならソラとあっちの銀時に女性スクール水着でも着せようかしら？」

真王「止める、死んじまうよ（周りが・・・）」………なんかまたとんでもない奴が来たんですけどオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

超ドS腹黒女のユウカが来る事に銀八は顔を青くさせる。

銀八「と、とりあえず質問答えるか。ええ、ギリシアはまず人として色々終わっていると思います。じゃあ二番の質問は女性陣に答えてもらうか」

リリス「ちょっと……ビビちゃんには引きました」

フェイト「さすがに私も……」

なのは「私もかな……」

アリス「変な百合娘」

アリア「興味ない……」

ヤミ「変態ですか……？」

アルフ「変な奴だと思っよ」

ライダー「百合ですね」

セイバー「上手く言葉にできません」

銀八「っと言う事で、ビビ。お前の考えとか性癖とか俺が色々教えたんで、皆こっ言う評価だ。っで、三番めだが、耐える耐えられないの前に皆受けたくないそうだ」

土方「そりゃそうだ。『真王』さんは廊下に立ってる。次、ペンネーム『白騎士君』さんからだ、

白騎士君「銀さんの方が人気ありますね」

レナード「だな、早速質問だ。」

1 銀時に質問。白騎士になって、なのはのスターライトブレイカを何発耐えられるんだ？

2 みんなに質問。白騎士の何所がカッコいいんだ？

3 セイバーに質問。白騎士を倒せるか？

『以上だ』

白騎士「今回はこれにて」

その頃、異世界の門でアークナイト（剣）と（槍）×30が誰かを

リンチしていった。それは．．．．．土方と沖田だった。』  
…総悟のヤロー…!!」

土方は怒りを露にして質問の手紙を握り締めていた。

なにせ彼は沖田にアークナイト達のリンチでずっと盾にされていたからだ。

銀八「アイツドSだしな。じゃあ質問でまず2だけど、別に誰も前に白騎士カッコいいとか言っていないと思うぜ?じゃあ1と2は質問された奴答える」

銀時「さあな。俺は白騎士の耐久力なんて知らないし」

セイバー「勝てるかどうか分かりませんが、騎士として全力で戦います!」

銀八「それじゃあ『白騎士君』さんは廊下に立ってなさい」

土方「次いくぞ。ペンネーム『黒神』さんって……あの腹黒読者じゃねえか!!」

最後の最後でまたとんでもない質問がきた事に土方は汗を流す。

土方「仕方ねえ。それで何々…

『ソラへ

幕府の將軍はかなり変態キャラのように扱われています。  
それを見てどう思いますか?

黒龍さんへ

クラウドも出ますか？

アーチャヘ

僕の小説に出てくるキーパーソン、七星神刀しちせいしんとうを投影して見る気はありますか？

黒神

「以上です」……「どうやら今回は比較的マトモな質問みたいだな」

今回はSな質問がなかった事に安堵する土方。

銀八「じゃあ1番のソラ、答えろ」

ソラ「いや、さすがに俺も將軍の事は変態だと一瞬思ったな」

銀八「oooooooooooo!!何んでもねえ事言つてんだ!!お前打ち首にされるぞ!!」

銀八は恐れを知らないソラの発言に顔を青くさせた。

銀八「じゃあ2番の黒龍答えろ」

黒龍「ああ、クラウドは出す予定はなかったんですが、もし出して

欲しいならリクエストしてください」

銀八「じゃあ最後のアーチャー答えろ」

アーチャー「ああ。私としても七星神刀しちせいしんとうは投影して使うに十分過ぎるほどの武器だと思っている」

アーチャーとしても七星神刀しちせいしんとうは投影して使うのは打ってつけの物だと考えている。

銀八「じゃあ今回はこれで終わりだな」

セイバー「いえ…」

ライダー「まだ終わりではありません」

銀八が今回の質問コーナーを終わらせようとした時、セイバーとライダーが現れる。

銀八「ああ…色々聞きたい事があるんだけどよ。一つだけ聞かせてもらっわ。なんで新八とマヨ方を大砲に詰めてんだ？」

ライダーとセイバーの後ろにある二つの黒い大砲にはロープでグルグル巻きにされて砲身に詰められた土方と新八がいた。二人は抜け出そうと暴れている。

セイバー「今度こそコレで黒神に天誅を下します！！」

銀八「黒神さんの前にそいつらに天誅を下しなくね？」

ライダー「とにかく発射!!」

ドカーン!!

ライダーは二つの大砲の導火線に火を付けて二人を黒神さんの所にぶっ飛ばした。

セイバー「これならば例え極悪料理をぶつけられても威力が衰える事はありません」

銀八「その前に普通の弾を使え。人間の命使<sup>タマ</sup>ってどうすんだよ……」

ライダー「では、私たちはこれで」

ライダーとセイバーは頭を下げて帰っていった。

銀八「はい。つと言うわけで、今回の銀八先生コーナーは終わりです。今回はアリスがアシスタントです」

ソラ「そう言えば、真王からユウカって奴がこないがどうしたんだ？」

銀八「ああ、ユウカが来ないように転生者用特別バリアを黒龍が張つていたからこれないんだよ」

ソラ「メンドーな奴がこなく良かったな」

銀八「まったくだな」

## 第十六訓：人優しさは身に染みる（後書き）

黒龍「今回の贈り物はこれです」

『黄色いのなにかさんからはソラと銀時の生首人形』、『なつぺさんからは勘違いされそうな立ち位置で銀さんとなのはが一緒に写っている写真』

黒龍「贈ってくださった皆さんありがとうございます」

アリス「ふむ。やはりお前はロリコンだったんだな」

銀時「違っつて言っただろうが！！これはなつぺの嫌がらせだ！！」

黒龍「あ、ちなみに次元世界にバラまくのは何とか阻止しました」

銀時「マジでダメかと思ったぞ…」

フェイト「はうう。この人形良い抱きごちだな〜／／／／」

フェイトはソラの生首人形をギュウっと抱きしめながら嬉しそうな顔をする。

なのは「私の部屋に飾っておくの」

なのはは銀時の生首人形を持ち上げながら言う。

銀時「それじゃあ俺がさらし首されてるみてえじゃねえか！！」

黒龍「ソラは何か言わないんですか？」

ソラ「本人が気に入っているからそれで良いだろ。つつか、言う気も失せた……」

黒龍「さいですか」

アリス「次回、『料理をできる男はモテる』にテイクオフだ」

第十七訓：料理のできる男はモテる（前書き）

黒龍「今回はソラの料理の腕が明らかになります」

銀時「つで？俺の出番は？」

黒龍「今回は銀さんでないのであしからず」

銀時「まあ最近ソラ出てねえし、仕方ねえか」

黒龍「お、銀さんにしては珍しい」

新八「『リリカル銀魂ライダー』が始まります。…僕はもう少し出番欲しいなあ…」

## 第十七訓：料理のできる男はモテる

銀時達がなのはの家で住む事が決まった＆新八がアニメオタクとして銀時達に認識されている一方で、時の庭園では……。

フェイト「それで、此处が寝室だよ。たくさんあるから自由に使ってね」

フェイトが時の庭園の中をソラ達に案内していた。そして最後にソラ達がこれから住むであろう寝室を紹介して一通りの案内は終了した。

ソラ「それにしても、やけに寝床が多くないか？」

ソラはホテルのように両側の壁に部屋の扉がいくつもある通路を見る。

リリス「確かに多いですね……」

リリスも若干唖然としながら寝室の多さに驚く。

この時の庭園には四人しか住んでいないのに、二十はあろう部屋の数には疑問が出てきてもおかしくない。

これじゃあちよつとしたホテルである。

リリスとソラの言葉を聞いてフェイトが苦笑しながら頬を掻く。

フェイト「あはは……やっぱそう思うよね？ 実は、この時の庭園は元々大人数の人間が住む建物なんだ。つで、前に母さんが買い取

って中の構造を変えないまま使っているんだ」

ソラ「なるほどな」

リリス（プレシアさんって、どれだけお金持ちなんですか！？）

ソラは足の裾まである丈の長い黒いコートのポケットに手を入れて周りを見回しながら納得する。

リリスはこんなデカイ時の庭園を買い取るほどの金を持っているプレシアに心の中で驚いていた。

その時、通路の奥から男がやって来て、近くまでくると丁寧に胸の前に腕を出してお辞儀しながら言う。

???「フェイトお嬢様。そろそろ夕食の時間なので食堂の方に」

男の顔は西洋人よりで薄い金髪の髪をオールバックにし、執事が着るような服を着て、目をサングラスで隠している。

そして体格はしっかりとっていて筋肉があるのが服越しからでも分かる。だからと言って、ガチガチのマッチョと言っわけではなく、無駄のない細い筋肉だと言えよう。

（ちなみに容姿はバイオハザード5のウェスカーさん）

そして執事の格好をした男にフェイトは笑顔で答える。

フェイト「あ、もうそんな時間なんだ。ありがとうナナシ」

ナナシ「いえ。フェイトお嬢様の世話が私の役目なので。では、お客様と一緒に食堂までお越しを。準備をして待っています」

ナナシと呼ばれた男は礼儀正しい喋った後、そのままそくさとキッチンの方に向かった。

この執事の格好をした男がフェイトとプレシアとアルフと一緒にこの時の庭園で暮らす四人目の住居者である。それと既にソラ達との挨拶は済ませている。

彼の事を簡単に説明すると、この時の庭園でフェイト達テストロッサ一家の使用人と言った所だろう。

なんでも、昔プレシアに拾われたらしく、その時からプレシアの使用人として働いているらしい。

家事はなんでもこなせる器用な人物である。

神楽「キヨツホー！！ やつとご飯アル！！ もうお腹ペコペコネ！！」

食事と聞いている一番に神楽が興奮する。飯と言っ言葉を聞いてから、神楽の腹はグーグー鳴っていた。

夜兎である神楽は信じられないくらいの大食らいで、とにかく食べる。まあ『夜兎族』は大食漢なのでその血を引いている神楽がたくさん食べるのも仕方ない。

どれくらい食べるかというと、ドラゴンールのサイヤ人位食べると思ってください。

セイバー「ソラ。一つ提案なのですが、今夜の夕食はソラが作るのはどうでしょう？」

ソラ「ん？ 俺が？」

ソラは自分を指で指しながら聞く。

セイバーは頷く。

セイバー「ええ。私達はこれからフェイト達の世話になるわけですし、少しでもどんな形であれお礼をした方良いと思ひまして……」

アリス「っと、言うよりもソラの料理が食べただけじゃないのか？」

アリスがニヤ付きながら言う。

セイバー「もちろんそれもあります」

セイバーは凜とした顔ではっきり自分の願望を述べる。

アリス「やれやれ。少しは面白い反応をして欲しいものだ」

アリスはセイバーの反応を見て首を少し左右に振りながら残念そうにする。

そしてソラはアリスとセイバーが話している間、顎に手を当てながら考えていた。

確かにこれからフェイト達の世話になる身である自分達が何もしないと言うのは大人としてどうだろうか？

家事くらいしないと色々と申し訳ないだろう。

それに自分はそれなりに料理には自信がある。なら、ここは料理で役に立っておいだ方が良さだろう。

ソラは考えを纏めると、フェイトに顔を向ける。フェイトもソラの視線に気づき、顔をソラに向ける。



フェイトは若干信じられないような顔で聞く。

神楽「マジアル！ ソラの作った料理は絶品ネ！！ あの時の卵かけご飯の味は忘れないアル！！」

前にソラの作った卵かけご飯を食べた時、卵かけご飯の新天地が見えたほどののだ。

つまり、味付けを工夫しただけなのだが、卵かけご飯が大好きな神楽にとっては相当な感動だった。

あれ？ さっきから卵料理しか作ってなくない？ と思うかもしれないが、ソラはちゃんと他の料理も作っているのでご安心を。

フェイト「卵かけ、ご飯？」

フェイトは聞いた事ない料理名に首を傾げる。

セイバー「そうですね。ソラの料理は一流の料理人の料理よりも遙かに上です」

神楽「そうアル！！」

フェイトの疑問も気にせず、セイバーも加わってソラの料理の凄さを熱く語る。

セイバーは人一倍食を大切にしている。語らせれば、何時間でも食の大切さを語っていられるほどだ。

その情熱は彼女の騎士道やソラの愛情に匹敵するほど。そして神楽並に食う。つまり大食漢なのだ。

セイバー「だからソラに任せても大丈夫です！ いや、任せるべき

です！」

神楽「そうアルフェイト！」

セイバーと神楽はフェイトを説得する。それはもう迫る勢いで。

フェイト「う、うん……分かった……」

フェイトはセイバーと神楽の迫力について頷いてしまった。

そして二人のソラの料理談義を聞いたアルフは目をキラキラさせながらソラに聞く。

アルフ「ソラ！ あんたそんなに料理が上手なのかい！？」

アルフはソラに近寄りながら尻尾をブンブン振る。

アルフも食事に関するさいので、ソラが料理がプロ以上だと聞いて興奮しているのだ。

ソラ「まあ、あいつらが凄いと言ってるなら、凄いんだろうな」

ソラは曖昧な感じに答える。

それは仕方ない。料理の美味い下手は自分では判断できない。他人に『美味しい』と言われて初めてその人の料理の腕は凄いと言えるのだ。

そこら辺を理解しているソラは自分の料理の腕は凄いとは自慢しないのである。

興奮したアルフはソラの手を取る。

アルフ「じゃあナナシが作る前にキッチンに行くよ！！」

ソラ「おい、あんま引つ張るな……」

アルフはもの凄いスピードでソラをキッチンに連れて行った。

フェイト「……………」

フェイトは呆然とその光景を見ていた。

アリス「じゃあ私達も向かうか」

アリア「うん……」

アリスやアリアの言葉を皮切りに他の面々も食堂に向かった。

リリス「行きましょうフェイトちゃん」

フェイト「う、うん」

笑顔のリリスに手を握られ、フェイトも返事をしながら食堂に向かった。

此処はキッチン。

そこには色々な料理器具があり、全て手入れがちゃんと行き届いているようなので、銀の鍋なんかは綺麗な光沢を出していた。

そしてキッチンにあるコロンやオープンなどが銀の装飾をされている。まさしく高級レストランのようなキッチンだった。

ナナシ「さて、今日は何を作りましょうか？　やはり、彼等のリクエストを聞いた方が……いや、それよりも一つに統一した方が……」  
青いエプロンを着たナナシはキッチンで今日のメニューを考えていた。

その時、アルフが声を上げながら出て来る。

ナナシ「おや、アルフ様。どうしましたか？　何かリクエストですか？　それと、何で頭にタンコブが？」

ナナシは現れたアルフに驚かず、真顔で質問する。  
何故か頭にタンコブがあるアルフは首を横に振る。

アルフ「違うよ。リクエストじゃなくてね、今回はあんだじゃなくて、ここにいるソラに料理作ってもらうんだよ！」

アルフはナナシの質問は無視して少し興奮しながら後ろにいる、これまた何故か少し服がボロボロになっているソラを見る。

ちなみにアルフにタンコブが出来てソラの服が若干ボロボロになっている理由は、ソラは物凄いスピードでアルフに引っ張られていたので、途中途中で壁やら柱に体をぶつけた。それで、怒ったソラがアルフの頭に拳骨を喰らわせたと言うわけである。

無視された事に特に怒った様子もなくアルフの話聞いたナナシはアルフのタンコブやソラのボロボロ服の事は後で聞く事にした。そして興味深そうに言う。

ナナシ「ほう。つまり、ソラさんは料理の腕に覚えがあると言う事ですか？」

ソラ「まあそれなりにな」

アルフ「ソラの料理はかなり凄いつて話だよ!!」

興奮するアルフの話聞いたナナシは少し考えた後、真顔で言う。

ナナシ「そうですか。とは言え、さすがに今日会ったばかりの方に調理場を預けるのはできません。申し訳ありませんが」

アルフ「ええゝ。良いじゃないかゝ。そんな堅い事言わずにさ」

アルフは不服そうにナナシの意見に食って掛かる。

ナナシ「例えアルフ様の頼みでもやはり……」

ナナシは少し申し訳なさそうな顔でアルフの頼みを断ろうとした時、  
“そうだ”とある事を思いつく。そして微笑を浮かべる。

ナナシ「なら、何か簡単な物でいいので作ってもらえませんか？  
それで調理場を任せて良いか判断します」

ナナシの言葉を聞いて、アルフは顔の前に両手を合わせながらソラに頼み込む。

アルフ「頼むよソラ！ 神楽達の話聞いたアタシもあんたの料理が食べてみたくなっちゃったんだよ!!」

ソラ「しょうがねえな」

ソラはため息をつきながら厨房の前に立つ。  
そして横からナナシが微笑を浮かべる。

ナナシ「さっきも言いましたが、別に凝った物じゃなくて結構です。  
どんな料理でもその方の料理腕が分かりますから」

ソラは“分かった”と返事をして、かなり大きな冷蔵庫の前に立つ。  
そして扉を開いて中身を確認した。

ソラ（とりあえず、時間もねえからな。アレにするか）

ソラは冷蔵庫から卵を取り出す。

そしてすぐにフライパンを出して調理を始めた。

ジュウと言う音が卵焼いているフライパンから鳴る。ソラは慣れた  
手つきで卵を動かす。

そして近くに置いた調味料を黄色に焼けて形を変える卵に掛けてい  
く。

ナナシ（ほう、なるほど）

ナナシは調理過程を見て、既にソラが作るうとしている料理が何な  
のか理解した。

ナナシ（どうやら彼は『オムレツ』を作ろうとしているみたいで  
すね）

そう、ソラはオムレツを作ろうとしているのだ。

短い時間で作れる物考えた結果がオムレツなのだ。

味付けや火加減一つで美味さが変わるオムレツは料理の腕を見せ付けるのにも打って付けた。

まあソラはただ単に卵見てオムレツ思いついただけであるが……。

そしてナナシはソラの調理を見て関心していた。

味付けの仕方や火加減や卵の形の整え方が絶妙だった。途中経過から見てもソラに調理場を譲って良いと思うほどだった。

フライパンから上がる煙には卵の良い匂いが彼の鼻腔をくすぐった。

そしてソラの調理を観察しているナナシの横ではアルフが涎を垂らしていた。

彼女は犬……ではなく狼の『使い魔』なのだ。

『使い魔』とは『魔導師』が使役する人造生物である。

既にアルフがフェイトの使い魔である事は『時の庭園』を案内している時にフェイトとアルフが説明している。

その時、アルフがソラ達に犬の使い魔扱いされて「狼だ!!」とアルフが怒ったりした事もあった。

そしてそのアルフはソラの調理を観察しているナナシの横で涎をダラダラ流していた。

もうできあがりつつあるオムレツの匂いに鼻を刺激されたのだろう。

ソラ「ほれ、出来た」

ソラは最後にフライパンからガラスの白い皿にオムレツを乗せて、ナナシの前に出す。

そのオムレツは綺麗な金色に少し白い色が装飾されている所が余計に美しさを増していた。

それはまさしく一目で美味しそう、と思わせるほどだった。

ナナシ「それでは頂きましょうか」

ナナシはスプーンを取り出し、オムレツを一口食べる。

そんなナナシの姿をアルフが口に指を当てながら羨ましそうに見ていた。ちなみに更に涎垂らしている。

ナナシは数回口を動かしオムレツを飲み込み、胃まで持つて行く。そしてスプーンをゆっくりと皿に乗せて、微笑を浮かべる。

ナナシ「これはさすがに美味しいとしか言いようがないですね」

アルフ「じゃあ……！」

アルフは嬉しそうな顔になる。

アルフの言葉を聴いてナナシは軽く頷く。

ナナシ「ええ。ソラさんに調理場を任せて良いですよ」

アルフ「やったー!!」

アルフは喜んで飛び上がる。

ナナシは料理の腕は一流と呼ぶほどののだ。そんなナナシに凄い言わせるほどだ。

これは余計に期待できると思い、アルフはつい喜びを体で表現してしまったのだ。

ソラ「しゃあねえな」

ソラは腕を回しながらメンドくさそうに料理をし始める。

アルフ「素直じゃないねえ」

アルフはニヤニヤする。

ソラ「お前は飯抜きだ」

アルフ「ええー!!」

ソラとアルフの様子を見てナナシは微笑を浮かべていた。

フェイト「うわゝ凄いねソラ！」

フェイトはテーブルの上にズラリと並べられた料理の数々を見て感嘆の声を漏らした。

ソラ「そんな事ねえよ」

リリス「いや、一時間でこれだけの数の美味しそうな料理を作れるのはソラ様くらいですよ……」

リリスの言うとおりテーブルには中国最高峰の料理『満漢全席』まんかんぜんせき並の数の料理が並べられていたのだ。

しかも、所狭しと並べられた料理一つ一つが食欲をそそるほどの匂いや見た目を醸し出している。

決してどれも手抜きが一切ない事が分かる。

これを見れば、ソラがどれだけ常識離れの料理の腕を有しているかが分かる。

神楽「じゃあ早速食べるネ!!」

桂「待てリーダー!!」

目の前の料理に食いつかんばかりに食べようとする神楽を桂が止める。

神楽は不機嫌そうな顔で桂に文句を言う。

神楽「何アルカヅラ。私の食事の邪魔すんじゃないヨ」

桂「ヅラじゃない桂だ。食事前には必ずコレするのが基本だぞリーダー」

桂は目を瞑って自分の胸の前で両手を合わせる。

桂の行動を見て気がついた神楽も桂と同じように両手を合わせる。

フェイトとアルフ以外の面々も次々と手を合わせていく。

フェイト「えつと……」

アルフ「……?」

フェイトとアルフはソラ達の行動にどうすれば良いか分からず戸惑ってしまっただが、フェイトとアルフの近くにいたりリスとソラが二

人に自分達これからする、食事を食べる時にしなければならぬ挨拶を教えた。

そして、全員が同じポーズを取ったところで桂が声を発する。

桂「では――」

全員

『『頂きます』』

全員がそう言った後に全員が料理を食べ始める。

神楽とアルフとセイバーはもの凄いスピードでバカ食いし、アリスとアリアとヤミは無言で自分達の食べる分を巧みに箸を動かしながら確保し、桂は蕎麦を探し、エリザベスは皿ごと口に入れて食べていた。

フェイト「凄くおいしいよソラ！」

ソラ「そりゃどうも」

そしてフェイトは笑顔でソラの料理を食べていた。

普段は少食な彼女でもソラの料理は次々に口に入ってしまう。あまりのおいしさについて顔が緩んでしまった。

そんなフェイトの様子を、お盆にソラの料理の一部を乗せて物陰から見ているナナシ。彼の口元には少し笑みが浮かんでいた。そのままプレシアのいる部屋に向かった。

そこはプレシアの研究室の一室。

床には研究資料と思しき紙が散乱し、至る所には積み重なった本が置かれていた。

そんな清潔感をあまり感じさせない部屋でプレシアは机に座って、パソコンのような機械を操作していた。

コンコン

???「プレシア様。お食事をお持ちしました」

その時、扉を叩く音がした。扉を叩いた人物は声からしてナナシである事がすぐに分かった。

プレシア「入って良いわよ」

プレシアは後ろのドアを一瞥した後また画面に視線を戻す。

そしてプレシアの許しを得たナナシはドアを開けて一例した後、テーブルの上に料理の乗ったトレイを置く。

ナナシ「あまり積み込みすぎると体に障りますよ。『目的』を達成する前に倒れられてはあなたも困るでは？」

プレシア「私の体の事は私が良く分かっているわ。あなたは余計な事は言わずに自分の仕事をしないさい」

プレシアはナナシに顔を向けず、忙しそうにキーボードを叩く。  
そんなプレシアの言葉には鬱陶しさと苛立ちが感じられた。

ナナシ「それでは失礼します」

ナナシはお辞儀をした後、ドアを閉めて部屋を出て行く。  
ナナシが出て行った後、プレシアは置かれた料理を見る。

プレシア「……………」

まだ湯気が立ち上り、おいしそうな料理を見たプレシアは作業を止めてフォークを取る。

そして料理の一つ『ハンバーグ』をフォークで切って食べる。

プレシア「……あら、いつもより美味しいわね……」

その後プレシアは料理を全部食べた。

プレシアの部屋を出たナナシは少し歩いた後、後ろにあるプレシアの部屋に顔を向ける。

そして口元に笑みを作る。

ナナシ「ま、あなたは精々頑張ってください。私は私の目的を達成させてもらいますから」

ナナシはそう呟いた後、食堂に戻って行った。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『銀八先生！』

銀八「はい。今回のアシスタントはドS女のアリスが担当します」

アリス「やれやれ。相変わらずの紹介の仕方だな」

アリスは若干呆れたように首を横に振る。

銀八「良いんだよ。これが俺のスタイルなの。じゃあ早速質問コーナーいくぜ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、  
『スネーク』そうだな…皆に質問『フォックスについてどう思う？  
なお、ちゃんと答えないと前回のムツリーニが言った通り、ピーチ姫の××料理が飛ぶからな、ガードしたり、跳ね返したりしてもすぐ別のが飛んで来るから、なお、以降の質問の時も同じ様に来るからな』」

ムツツリーニ「……………質問『行きたい世界はあるか？』」

明久「質問！『最近出て来た先生の大先輩でる銀次さんについてどう思いますか？』」

次回を楽しみにしてます♪」……じゃあねえな。じゃあちゃんと答えるか。そうだなフォックスはまあやっぱ常識外れの写真家だな」

アリス「そうだな。フォックスの撮ってくる写真はいつも素晴らし  
いものばかりだ♪」

銀八「そのせいでいつも撮られてる奴らはコスプレイヤーにされて  
るけどな」

アリス「それで2の答えは、特にないな。私はソラのいる世界で満  
足だ」

銀八「俺は甘味の世界が良い！」

アリス「そんな世界あるのか？」

アリスがジト目で銀八を見る。

銀八「いいんだよ。夢でつかくだ」

アリス「それは意味が違うだろ」

銀八「それで3番目だけだよ……やっぱチートじゃね？」

アリス「いや、転生者ではない者達にとってはチートとは呼びがた  
いんじゃないか？」

銀八「まあそうだな。じゃあ『鳴神 ソラ』さんはコラボよろしく  
お願いします」

アリス「次だ。ペンネーム『なっぺ』からだ、  
『ベス』今回はケフィアをそちらの女性メンバーに贈り（ぶっかけ  
ます」

吼太「……何か嫌な言葉が含まれていたような？」

なっぺ「ついでに男性メンバーに質問。ケフィアを贈ら（ぶっかけ  
ら）れた女性メンバーを見てどう思った？ ではではこの辺で！」

銀八「あり？ と言えばお前体にケフィア付いてないけどどうした  
んだよ？」

確かにアリスの体にはケフィアがまったく付いていない。

銀八はその事に首を傾げた。

アリス「ああ。質問コーナーの前に体を洗ったからな。まあケフィ  
アをかけられた私達の様子は贈り物コーナーで分かるぞ」

銀八「ちゃっかりしてんな。じゃあ質問された男性陣は答えろ」

銀時「俺にそう言う趣味ねえから！ 変態のテーマと一緒にすんな！」

ソラ「言う事はない」

新八「ブハッ！！」↑ケフィアぶっかけられたのはを見て鼻血出  
した。

土方「なっぺはただの変態だと分かった……」

近藤「俺はお妙さん以外の女性には欲情しない！」

沖田「なっぺは甘いでさア。ぶっかけるなら唐辛子を混ぜたトロロにするべきでさア」

ユーノ「……………／＼／＼／」ケファイアぶっかけられた女性陣を見て顔を赤くさせている。

ライホース「……………」↑呆れている。

銀八「おいしいiiiiiiii！！読者に向かって変態は失礼だろ！一部のDS少年はとんでもない事言ってるし！！」

容赦なしの発言に銀八はツツコム。

アリス「良いんじゃないか？変態はなっぺにとって褒め言葉らしいからな」

銀八「…たく。じゃあ『なっぺ』さんは変態行動もほどにしなさい。次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『ども…月光閃火だ。』

ありやりや「…んじゃ、とりあえず俺がそこそこカッコイイ眼鏡を贈るときまずぜ…。（そういつて、新八の下にスポーティー系の眼鏡テレボスを転送する）

輝刃「…相変わらず、用意は周到なんだな…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・近藤殿に質問…もし貴殿の事を好きだという女性から告白されたら、どう答えるつもりだ？ただし、『他に好きな女性が居る』と

いう答えは無しだぞ？

たはは…（汗）。逃げ場を失ったな…。これで妙さんを理由に断れないぞ？ つつーか、妙さんに嫌われてる事をいい加減理解しなきゃな…次は俺からだ。

2・黒龍さんに質問…他の作品からキャラを登場させる予定って、あったりする？もしそうなら、俺は『スクライド』を希望するよ。

輝刃「いや…さすがにキツいだろ、今じゃ。確かに、FF7のクラウドが出ていたとあつたが…。」…じゃあゴリラ答える」

近藤「ゴリラじゃないから！！せめて（近藤）くらいは入れて！！」

最早ゴリラ扱いにされている事に近藤は涙目になりながら講義する。

銀八「とにかく答えないとバカゴリラって言うぞ」

近藤「わ、分かった！だからバカゴリラは止める！」

近藤は慌てて銀八の指示に従った。さすがにバカゴリラ呼ばわりはきつかった。

そして“オッホン”と咳き込んで言う。

近藤「…そうだな。俺としてはちゃんとお互いの事を知り合った上でお付き合いしたいな」

近藤の答えを聞いて、銀八は手を横に振りながら言う。

銀八「止めとけよ。そんな事したらすぐに別れちまうぜ」

近藤「それどう言う意味!？」

銀八「お前の事知って好きになる女性はいないって事」

銀八の言葉を聞いて近藤は涙流した。

銀八「じゃあ2番の黒龍答えろ」

黒龍「まあネタバレになつて言えないんですが、ヒントは三国志のキャラが全員女になっている作品とだけ言っておきます」

銀八「それ言ってる時点でネタバレじゃねえか！」

銀八の言うとおり、ヒントが簡単すぎて大半の読者には分かってしまっただろう。

黒龍「良いの!あ、それとクラウドは今の所考え中です。もし他にリクエストがあつたら言ってください」

銀八「はい。つと言うことで、『月光閃火』さんは廊下に立ってなさい」

アリス「じゃあ次いくぞ。ペンネーム『真王』からだ。

『ユウカ「あのクソ龍め、今度はどの教育を受けさせようかしら」  
(入れなかったせいでDSオーラが濃くなっている)」

真王「だつたらこうすればいいんじゃないか?・・・ヒソヒソ」

ユウカ「あら?それなら入れそうね。またね」

ユウカは超ドSな顔をして黒龍のそこへ行った。

真王「さて、新八がそのようなことをするのは目に見えていたが、近藤はそこまでアホだったなんて、Fクラス決定だな」

ナリア「バカテス！？」

真王「では質問タイム『ユウカはどう思いますか？』」

ジャンヌ「私も！『来てみたいコスプレがあつたらどんなのがいい？』」

プリニー「最後は俺ツス。『ジャンヌさんに称号付けるならどんな感じツスか？』」

真王「それではまた。・・・ユウカはなにやるんだろうな・・・」

その頃

ユウカ「そのうつとおしいバリアを開けなさい！さもないとフェイト達にソラの女装写真（合成写真）を見せてぶっ殺されるか、リリカルお登勢（リリカルなのはの姿のお登勢さん）を投入されたいかどっちか選べなさい」

果たして黒龍の運命の選択は！？』……………ほゝそれは面白そうだな」

ユウカが来る事に少し楽しみ覚えるアリスだった。

銀八「どこが！？あんなドS女来ても嫌なだけだ！！」

アリス「私とは話が合いそうなのだがな」

銀八「めちゃくちや避けたいなそれ！！」

アリス「まあ1の答えは今ので良いな。それで2だが、私は特にないな」

銀八「俺もコスプレには興味ねえから。それと、ジャンヌに称号つけるならこんな感じだな」

『エロ女』、『サキユバス』、『眼鏡の女神』

銀八「こんな感じだな」

アリス「明らかに悪意があるな」

アリスは変な称号を付けた事に若干呆れる。

銀八「はい。じゃあ『真王』さんは廊下に立ってなさい。次、ペン

ネーム『黄色いのなにか』さんから、

『あぶねーあぶねー！あのマヨ方の放ったバズーカは何とかダイガードのロボットの力で防ぎました。え？なぜダイガードがここにあるかって？実はある異世界から盗ん・・・もとい借りて来ました。後マヨ方の処刑は沖田さんにお任せします。拷問道具と処刑道具はそちらに送つとききました。

新八に質問。リリカルなのはのDVDを軍曹から没収して更に自分の物にするなんて泥棒と同じです。真撰組の皆さん新八を処刑もしくは逮捕してください。

今回の贈り物はちょっと過激の物ですから気をつけてください。銀時ラバーズとソララバーズの皆さんには、銀時&ソラの裸体写真集を差し上げます。これを見てたつぷりと欲情しちゃってください。』

……じゃあロリコンに落ちたメガネ答える」

新八「せめて名前を出せコラアアアアアアアアアア！！つうか、アレは泥棒じゃねえんだよ！！親衛隊隊規を犯した罰だから一切問題はない！！むしろやって当然の事だ！！」

きつぱりと支離滅裂な事言う新八に銀八とアリスは呆れる。

新八だつて隊規を犯したのに自分が悪くないと言うなど、盗人猛々しいとはこの事だ。

銀八「はい。じゃあこのロリコンメガネザルを逮捕しちゃってください……」

沖田「分かりましたア……オラッ、とつととこつちに来い。ブタ箱にぶちこんでやりませア」





## 第十七訓：料理のできる男はモテる（後書き）

黒龍「今回も贈り物コーナーです。贈って頂いた物はコレです」

『鳴神 ソラさんからはソラと銀時のコスプレ写真』、『なっぺさんからはケフィアを女性メンバーに贈り（ぶっかけ）』、『月光閃火さんからは新八にスポーティー系の眼鏡』、『銀時ラバーズとソラバーズに銀時＆ソラの裸体写真集』、『天破さんからは近藤のストーリー証拠集とこっちのなのはの印が押された婚姻状（偽造）』

黒龍「贈っていただきありがとうございます」

フェイト「うう…／＼／＼」↑ケフィアがついてベタベタの体を抱きしめて恥ずかしそうにする。

なのは「気持ち悪いの〜」

アリス「どうだソラ？興奮するか？」↑ニヤ付きながらソラに近づく。

アリア「……………」↑特に変わった反応はなし

リリス「気持ち悪いです〜…」

アルフ「コレ結構イケるね」↑自分についてケフィアを舐める。

ヤミ「ヌルヌルは苦手です…」↑目を渦巻状にグルグルさせる。

セイバー「？」↑何の意味があるのか分からず首を傾げる。

ライダー「後でお風呂に入りますか」↑とりあえず他の女性人同様  
エロい

神楽「あ、コレ結構おいしいネ」↑アルフと同じ。

ソラ「……………」

銀時「……………」

黒龍「あつ！自分達の裸体写真燃やしてる！！」

その燃えた写真が運悪く今までフォックスが贈った写真全部に引火して灰になった。

フェイト「私のコレクションがアアアアアアア！！！！！！」

フェイトは涙流した。

他の女性メンバーも落ち込んでいる者が大半だった。

新八「どうですか！？このメガネならカッコいいでしょ！！」

新八は早速贈られたメガネを掛けて銀時に見せる。

銀時「んゝやっぱ地味だな」

新八「なんでじゃアアアアアアアアア！！」

まったくもって地味が改善されない事に涙を流す新八。

土方「たく……後始末する俺の身にもなれ」

土方は近藤のストーカーの証拠集を処分した。

恭也「俺の誰だアアアアアアアア！！？うちのなのはをそそのかしたのはアアアアアアアア！！！！」

士郎「天誅だアアアアアアアア！！！！」

シスコン＆バカ親はなのはの偽の婚姻届を見ていもしない婚約相手を殺しに行った。

黒龍「じゃあ贈り物コーナーも終わった事だし次回予告です」

『次回予告』

リリカルなのはにはなかったイレギュラー『転生者』がその姿を現す。

「ハーレムを作り上げるオリ主の俺の邪魔をする奴は排除しないといけないんでなア」

自分の目的のために人を殺し…

原作メンバーを自分のハーレムと呼ぶ…

そんな転生者がなのはのいる私立聖祥大附属小学校に通う。

アリス「次回、『転生者と言っても所詮は人間』にテイクオフだ」

## 第十八訓：転生者と言っても所詮は人間（前書き）

黒龍「今回は予告通り転生者が登場します。そして、転生者だり主要キャラも出ます」

銀時「なあ、俺の出番は？」

黒龍「なのははあるんですけど、今回銀さんの出番はありません」

銀時「マジかよ…」

新八「じゃあ今回は僕がメインに…」

黒龍「それはもつとありません」

新八「なんでじゃアアアアアアア！！！！（涙）」

黒龍「（ボソ）……まア次回は出しますけど…」

ソラ「『リリカル銀魂ライダー』始まりだ」

## 第十八訓：転生者と言っても所詮は人間

銀時達がなのはで公園で会っている時、その光景を物陰から怒りの形相で見ている影があつた。

???「くそオオオオオオオ!! 何なんだあいつ等は!? 俺のなのはに話しかけやがつてえええええ!!!」

姿からして歳は『小学生』くらいだろう。

だが、彼の精神年齢は既に三十くらいまである。

彼は所謂『転生者』と言う存在だ。

転生者とは簡単に言うとは一度死んだ人間が『神と言う』存在に会って能力を貰い新たな生を得て別の異世界や平行世界に飛ぶ人達の事である。

人間には皆等しく前世があるのだから人間は皆転生者じゃね?、と言う疑問があるが、転生者には普通の人とは違う所がある。

それは前世の記憶を持っていると言うことである。いや、厳密に言えば魂が前世のままだと言う方が正しい。

つまり大雑把だが、前世の記憶を持っている人間は『転生者』と呼ばれる存在なのだ。

転生者と呼ばれるだけで別に普通の人とは大差ない。ただ人よりも知識が豊富だと言うだけだ。

だがそこでもう一つ違う点はさつきも言ったように『神と言う』存在から故意か間違えで殺され能力を貰ったりする類が多いのだ。まあ普通に死んで能力貰っている人もいる。

つまり転生して異能と言う特殊な能力持ちになっているだ。  
ただ、何の能力も持たないで転生する人もいる。

とは言え、これは転生する時の特典みたいな物で、こう言う体験を  
転生者全員がするわけではないのであしからず。

つと、転生者についての大体の説明が終わった所で、さっきから怒  
りの形相で銀時達と言うより銀時を睨んでいる少年は近くの壁を何  
回も蹴りつけている。

少年「くそ！ くそ！ 一体何なんだあいつ等は！？ 何で銀魂の  
ダメ人間銀時やオタクメガネの新八やストーカーゴリラの近藤や二  
コチンマヨラーの土方やドS沖田やFate/stay night  
のライダーがいるんだよ！？ どうなつてやがる！！」

少年は神と言う存在によって変えてもらった容姿ははつきり言つて  
イケメンだ。昔は地味な顔付きらしい。

だが今はその綺麗な顔を怒りで歪めている。

しかも彼は銀魂を呼んではいたが、はつきり言つて銀魂に出てくる  
連中はどのマンガのキャラの中でも一番弱く、そしてバカな連中だ  
と見下していた。

なのにそんな見下していた連中になのはを先に助けられたので彼の  
怒りは更に増大した。

『リリカルなのは』原作を知っている少年はなのはがジュエルシー  
ドの思念体に襲われるのを知っていた。

そしてなのはが危険になった所で自分が駆けつけカッコいい所を見  
せ付けて自分の惚れさせると言うかなり安易な作戦を立てていた。

だが、銀時が少年よりも先に駆けつけたので、彼の頭の悪い作戦は  
簡単に破綻した。

そのまま自分の出番も逃し、ただ状況を見ていたのだ。  
途中で自分も戦闘に参加すると言う手も有ったのだが、後からしゃしゃり出て来た自分などただの脇役程度のキャラでしかないと判断したので結局静観をする羽目になったのだ。

そして自分がこの世界に転生してから心の内に溜めていた作戦を水の泡にされた事が余計に腹立たしくなり、怒声を上げる。

少年「チクショー！！！！ 俺の『原作キャラ助けて美少女ハーレムウハウ八作戦』を台無しにしゃがってえええ！！」

ドン！

少年はネーミングセンスの欠片もない作戦を口に出しながら怒りのあまり壁を蹴り壊した。

体は小学生くらいだが、身体能力は『神と言う』存在に上げてもらったのだ。壁を蹴破ると言う行為ができてもおかしくない。

ちなみにこの時銀時達はなのはが銀時に抱きついていた事に騒いでいたので少年が壁を蹴破った事に気づかなかった。

壁を蹴破って息を荒くしている少年はまた銀時達の方を見る。

少年「なッ！！？？」

少年はなのはが銀時に抱きついた所を見て驚愕の表情になる。

少年「あのロリコン野郎オオオオオオ！！！！ 俺のなのはに気安く触りやがってええええええええ！！！！」

思いつきり自分勝手な考えで怒りをMAXにさせる。

少年「こうなりやあなのはがない時に銀時だけじゃねえ！！ 邪魔な男共は全員オリ主の俺が殺してやる！！ そうなりやあなのは俺のもんだ！！ 俺のハーレムだ！！ なのはに手を出す奴は成敗してやる！！」

少年は怒りのあまり自分の欲望駄々漏らしにしている。

そして言いたい事言って落ち着いた後、涎を垂らしながらなのはとライダーを嘗め回すように見る。

少年「その後はなのはとついでにライダーを俺の嫁にしよう。うん。オリ主の俺ならそんな事朝飯前だな…… グヘヘヘ」

気色の悪い笑い声を漏らしながら涎を拭き取り、これからどうやって邪魔な男共を殺そうか算段を立てる。

その時……

グサ

少年「へっ……？」

と少年の腹から刃が出ていた。それはどうやら刀の刃らしく、銀色に輝く刀身には少年の血がベツトリ付いていた。

少年は何が起こったのか分からず、呆けた声を出す。

そして自分の後ろから耳元に声が聞こえた。



ような笑みを浮かべる。

白髪の少年「ハーレムを作り上げるオリ主の俺の邪魔をする奴は排除しないといけないんでなァ」

最後に少年が見たものは自分に小刀を振り下ろす白髪の少年だった。

白髪の少年「……じゃあな」

これは余談だが、今白髪の少年が殺した少年の他にも二人転生者がいたのだが、その二人も白髪の少年に殺されている。

そして時は経ち、なのはは銀時達と朝食を済ませて自分が通っている私立聖祥大附属小学校に来ていた。

そして自分の教室で親友である『アリサ・バニングス』と『月村すずか』と所謂ガールズトークと言うのをしていた。

アリサ「しかし、あのフェレット無事でホント良かった」

金髪の少女・アリサが安心したように言う。

すずか「ホントだね。心配になったのはちゃんが病院に行った時、病院に車が突っ込んで来て、その時なのはちゃんとフェレットさんを助ける人がそこに偶然いたんなんで、そんな不思議な事もあるんだね」

アリスの言葉に相槌を打つのは紫髪の少女――すずか。

なのは「う、うん」

なのは汗を流しながら頷く。

実は既に昨日病院で起こった事はなのはの親友である二人は知っていた。と言っても車が動物病院に突っ込んだと言う間違った情報だけが。

そしてなのはと一緒にフェレット……ユーノを助けて動物病院に連れて行った二人もユーノを心配したので、自分達の知っている情報をなのはにも話した。

そして今現在ユーノを自分の家に居候させているなのはは魔法を知られるわけにはいかないので、話をぼかしながら二人の昨晩あった事を話した。ちゃんと銀時達が居候する事になった事も加えて。

なのは（嘘はついてない、嘘はついてない。ちょ、ちよつと、ちよつこと真実ををぼかしているだけ……）

苦笑しているなのはを不思議そうにアリスとすずかは見ていた。嘘が苦手と言うか、好きではないなのはがそれなりに誤魔化しの効いた説明をできたのは上出来だと言えよう。（いや、実際はかなりギリギリな感じだ）

アリサ「それにしても……」

アリサは眉間に皺を寄せながらなのはに話し掛ける。

アリサ「助けたくれたお礼とは言え、知り合いでもない他人を家に泊めて大丈夫なの？」

話を聞いたアリサはなのはの事が心配だった。

見ず知らずの人達……しかも大半が大人の男である。今時は物騒な事が多い世の中。さすがにそんな事を聞いて心配すると言うのが無理だろう。

親友のアリサは切実になのはを身を案じていたのである。

なのは「うん。そこは大丈夫だよ。皆ちよつと変わってるけど、良い人達だし」

なのはは笑顔で答える。なのははそこには自信があった。自画自賛しているわけではないが、人を見る目はあると思っている。

アリサ「まあアンタが大丈夫って言うなら、コレ以上は何も言わないけど……」

アリサは若干納得がいかなそうな顔をしながらも、引き下がる。そしてその後、「ただし！」と言ってなのはに顔を近づける。

アリサ「何かあったら私に言いなさい。ちゃんと相談に乗ってあげるから」

ウィンクをして微笑を浮かべながら言うアリサに対してなのはは笑顔で答える。

なのは「……ありがとう、アリサちゃん」

???「何話してんだ？」

その時、なのは達に一人の少年がやってくる。

白髪で瞳が血のように赤く、そして目元に少し隈ができていた少年だった。

まさしく、昨夜転生者を三人殺した少年である。

白髪の少年を見たアリサはため息をつきながら疲れたように言う。

アリサ「……何しに来たの？ 無縁」

アリサの言葉を聞いて白髪の少年『ぜんあくむえん善悪無縁』はさも当然のように言う。

無縁「もちろん！ 俺のハーレム達と話しに来たに決まってるじゃないか！」

ハーレムと何の躊躇もなく無縁にアリサはまたため息をつく。

無縁は自分達とは一年生から知り合いだ。会って早々自分達の事を『俺のハーレムメンバー』だと言っているかなり可笑しな奴なのだ。

こう言う非常識な事するので、教師や他の生徒からも結構敬遠されている。

アリサ「だから、何度言わせば分かるの？ 私達はあなたのハーレムに入った覚えもないし、入る予定もないから」

何度目か分からないセリフを言うアリサ。  
アリサの明らかに拒否しているセリフにもまったくめげずに無縁は笑う。

無縁「ハハハ。そう照れなくても良いじゃないか。俺はアリサの気持ちはとつくに分かってるつもりだぜ。まったく、アリサはツンデレだな」

やれやれと言う感じに言う無縁にアリサは更に濃いため息を吐く。

アリサ「はあゝ。もうツツコム気にもなれないわ…」

無縁「つで、さっきから何の話をしてたんだ？」

アリサの言葉をまったく気にしないで、無縁は近くの席に座って会話に入る。

他のクラスメイトは“相変わらず図々しい奴だな…” と思った。

なのは「えつとね…」

なのはは何の戸惑いもなくアリサ達になのはリメイクバージョンで昨日の事故の話をした。

無縁に嫌な顔一つもせず話すなのは心が広いと言えよう。

無縁「へゝそんな事があったのか」

無縁は少し驚いた諷に言う。

昨日の事は無縁は一部始終見ていたので知っているが、あえて知らない振りをする。

その時、先生が教室に来たので無縁も含めて自分の席に戻って行く。

そして昼休みになり、なのはとアリサとずずかと無縁は屋上でお昼を食べている。

なのはとアリサとずずかの弁当はどれも美味しそうなおかずが綺麗に入っていた。

それを三人は笑顔で話しながら美味しそうに食べていた。

だが、無縁はただは何故か弁当を食べていなかった。っと言うよりは弁当を持ってきてないのである。

なのは達も無縁と最初に弁当を食べる時は何故持つて来てないか聞いた。その時無縁は「俺はハーレムメンバーの顔を見ていればお腹いっぱいだ」とか、まったくもって理由になつてない理由で説明した。

女子三人は弁当を食べ、唯一の男子である無縁は弁当を食べないで昼休みを過ごすと言う構図になったのだ。

無縁「我がハーレムメンバーの食事は楽しいな」

ニヤニヤしながら無縁なのは達の食事の光景を眺めている。

アリサ「まったく…」

アリサは呆れ、なのはとすずかは苦笑していた。  
その時、アリサが思い出したように言う。

アリサ「そう言えば、うちのクラスの高岡が転校しちゃったけど、随分急な話よね」

すずか「うん。それに、となり黒川君と遠藤君も転校しちゃったんだよね」

なのは「同じ日に三人も転校するなんて不思議な事もあるんだね」

三人は不思議そうな顔で転校したクラスメイトと別のクラスの男子二人が転校した事を話していた。

実は高岡と黒川と遠藤は三人共転生者なのだ。

虎視眈々とハーレム作ろうとしていた。そしてなのはが魔法に目覚める、原作で言う所の第一話目を狙ってなのはを自分に惚れさせようとしていたのだが、それは叶わず無縁に殺されてしまったのである。

無縁「まあ転校した奴の事は忘れなくて」

ちなみに三人を転校と言う形にしたのは無縁の計らいだ。

アリサ「まあ確かに私達にとっては知人でもなんでもないから良いけど…あんた結構冷たい事言うのね。仮にもクラスメイトでしょ」

アリサは少し呆れたように言う。

無縁「良いの良いの。そんなどうでも良い話はいいから食事の続き  
続き」

アリサ「あんたは食べないでしょ」

アリサのツツコミを聞いたなのはとすずかは少し笑みを零した。

そんな傍目から見れば和気藹々とした食事の風景を怒りの形相で物陰から見ている影があった。

「くそー！　なんであんなハーレムハーレム言ってる奴が俺のなのはやアリサやすずかと楽しそうに食事してやがんだ！！」

彼の名前は影山真吾<sup>かげやま しんご</sup>。転生者だ。ちなみなのは達と同じクラス。彼は言ってしまえばイケメンだ。

黒髪で四角いメガネを掛けてはいるが、それがまた顔にぴったりに合ってイケメンになっているのだ。

影山「本当ならあの場所は俺の指定席になっていたはずなのにイイイイ！！　なんであんな最低野郎がアアアアアア！！！」

影山が握力を強めたせいで、掴んでいた壁に輝が入る。

まあ影山が悔しがるのも無理はない。

なにせ無縁は色々と転生者達や学校それなりに噂があるのだ。

転生者達の間で無縁は、『いつも頭の中ではハーレムやエロい事ばかり考えている変態』、『自己中で、自分のハーレム計画のために次々と転生者<sup>じゅまもの</sup>を消している最低野郎』、『その上ロリコン』などと言っように悪い噂が絶えない。

学校でも無縁は、『問題児』、『ハーレム野郎』、『スケベ小僧』、『バカ』などと言う噂があるのだ。

これらを称号すれば、無縁がただのエロスケベ最低ハーレム野郎などと言われても無理はないと言いか、普段の態度を見てればそう思わざるおえない。

しかも、前に無断で無縁の鞆の中を覗いた事がある。

その中にはエロ本やエロ同人誌があった。ちなみにジャンルは色々あるが、ロリ系が多かった。

その上、授業中になのは達を見てニヤニヤしている時がある。

アレは一目でなのは達をおかずにエロい事考えたと思山は思った。まあ自分する時はあったが……

これはもう完全に無縁は最低の悪党だと考えた。

だが、そんな奴がなのは達と楽しそうに話している。

自分がいくらしようとしてもできなかった事の上に、無縁のせいで思うようになるのは達に声を掛けられなかった。

それが更に影山の怒りを増大させた。

影山「こうなれば……!!」

影山は意を決した。

————無縁を倒す！

とは言え、噂によれば無縁は多くの転生者達をあの世に葬っていると聞く。

だが、それはない。

なにせ無縁はいつも喧嘩で負けていると聞く。  
しかも噂では自分より弱い奴や小さい子供くらいにしか暴力を振らないらしい。  
つまり小悪党だ。

そんな雑魚キャラの定番みたいな奴に神にチートにしてもらった自分が負けるはずがない。

影山（勝って俺のハーレムを手に入れる！）

影山はそう決めると、無縁が一人になるまで待つ事にした。

学校は終わり、無縁は一人で下校していた。  
無縁ならハーレムメンバーであるのは達と一緒に帰ってもおかしくないのだが、なぜか無縁はいつも一人で下校するのだ。  
そして無縁が歩いていると…

影山「おい！」

影山が物陰から出て無縁の前に現れた。

無縁「何お前？」

無縁は別段表情を変えずに首を傾げる。  
影山は無縁の言葉に怒りを露にする。

影山「お前と同じクラスメイトの影山真吾だ！ 覚えてないのか！？」

影山の言葉を聞いて無縁は顎に手を当てながら答える。

無縁「俺女子にしか興味ないし」

影山「くっ……噂通りのクソ野郎だな……」

影山は齒軋りしながら無縁を睨みつける。

影山の殺気の籠った視線を浴びながらも無縁は真顔で聞く。

無縁「っで？ その影山が俺に何の用？ 俺は忙しいんだけど」

影山「忙しいって……どうせエロ本買いに行くだけだろ！」

何故影山が無縁のこれからの行動を予想できたかと言うと、噂で無縁はよく登下校にエロ本を買っていると聞いたからだ。

無縁「おお、良く分かったな」

影山「マジかよ！？」

関心したように言う無縁に影山は驚く。ただの噂なので本当かどうかは怪しかったのだが、本当に合っていた事に言った本人が驚いてしまった。

無縁「じゃあそう言う事で」

影山「あ、じゃあな……………っで、待て待て！ 行くな！！」

自分を引き止める影山に少し疲れた感じに聞く。

無縁「何？」

影山「俺の話を最後まで聞け！」

しつこい影山にやれやれと言う感じになりながらも用件を聞く。

無縁「っで、わざわざ俺になんのように？」

影山「お前を殺しに来たんだよ！！ 俺のなのは達を独占しているお前をな！」

影山は怒鳴り散らしながら言う。

それを聞いた無縁は少し目を細くする。

無縁「なるほどな」

影山「だが、一つ聞かせろ！ お前のような奴がなんでなのは達の仲良くなれる！ 何か裏があるはずだ！ 教える！！」

今から殺す相手に良くそんな事聞けるものだ。

殺すと言われた以上、すぐに逃げるにしろ先手打つにしろ、それくらい事は今すぐにできる。

だって、こんな悠長に自分がモテる理由を聞いているからだ。

殺すと言っているが明らかに戦闘も何も素人だと分かった。

さっきだって、折角隠れているのだから奇襲ぐらいすればいいのにそれをしないのだから、頭の周りも遅いと言える。

まあ無縁に対しての憎しみで我を忘れていると言う理由もあるが、それでも間の抜けた奴だと無縁は思った。

だが、無縁は何もせずに影山の話に付き合い、問いに答えた。

無縁「ふん。まあ理由は簡単だ。俺には『魅了』って能力があつてな、コイツは文字通り対象にした異性に自分への好意を持たせる事ができる。言わば、モテる能力って事だ」

影山「な、なにイイイイイイイ！！！？？？　なんだその反則的な能力は！？」

影山は驚愕する。まさかそんな能力があつたとは予想外だった。そしてすぐに自分のドジに気づき頭を抱えた。

影山「なんで俺も能力貰う時にそれを思いつかなかつたんだアアアアアアアア！！！」

悶えている影山に勝ち誇った顔で無縁は言う。

無縁「ま、俺こそハーレム主&オリ主に相応しいって事だな」

無縁の言葉を聞いた影山はついにブチ切れる。

影山「ふざけんなアアアアアアア！！　ハーレム作るオリ主はこの俺だアアアアアア！！！」

影山は神から貰った杖型のデバイスを出し、SSSランクに達するであろう緑色の砲撃を放つ。



それはドライバーだった。ちなみにプラスである。  
そのドライバーは自分の肩、太もも、腹などの箇所深く刺さっていた。

「おいおい。随分危ない事するな」

影山（ば、バカな……！！？？ この距離だぞ！！）

信じられなかった。確かに直撃したはずだ。手応えも感じた。  
しかも、自分と無縁の間にはあまり距離はなかった。

そして影山の目の前にある爆煙は少しづつ消えていく。

影山（な、なんで……！？）

煙が風で消えると、そこには無傷の無縁が立っていた。  
そして指の間にはドライバーを挟んで笑みを浮かべている。

無縁はドライバーが影山に刺さっているのを確認すると、ドライバーを捨てて小太刀を出す。

ただ、懐から出したのではなく、パツと手から小太刀を出したのだ。

そして言葉を発しながら影山に近づく。

無縁「いやゝ。ちょっとふざけ半分で鞆にドライバー入れてたんだけどよ、まさかこんな形で役に立つとは思わなかったぜ」

影山「く、来るな……！」

最早勝ち目はないと思った影山はすぐに逃げようとするが、ドライ

バーが急所に刺さっているのか、痛みで体が思うように動かない。目の前に迫ってくる『死』と言う恐怖に怯え、冷や汗をダラダラと流す。

無縁「それにしてもダメだよなア、簡単に相手を倒したと思っちゃ。それとよ、人避けの結界も張ったところぜ？俺がさっき張ってなかったらとつくに野次馬が押しかけてたぜ？」

無縁の言うとおり影山は頭に血が上っていて、人避けの結界などは張っていなかった。

だが、今は無縁の張ったであろう半径百メートルくらいのドーム状の結界が張られていた。

無縁は影山の前まで来て止まる。

影山「…あ…ああ…」

影山は顔面蒼白になり、涙目になる。

無縁「俺のハーレムライフの邪魔すんじゃないやねえよ。……じゃあな」

無縁はそのまま影山を切り裂いた。

転生者達の間ではある一人の転生者の噂が立っていた。

――なあ、知ってるか？

――何を？

無縁は街中を歩いていて。そして本屋の前で止まる。

――最近噂になってる転生者キラーって奴。

――ああ、何百って転生者をまたあの世に葬ってるって奴だろ。

無縁は本屋でエロ本を何冊も取る。ちなみに無縁は大人の姿になっている。無縁はどんな歳の姿にも自分を変える事ができるのだ。

――そいつってさ…正義の味方気取りの良い奴なのか？

――なんでそうなるんだ？

店員は無縁は持ってきたエロ本の数を見て驚く。  
そして、エロ本を買っている無縁を隠れて見ている二人の少年がいた。

――だって、そいつが殺している奴って、大抵がハーレムだとか自分はオリ主だとか言ってる奴なんだろ？　だったら、そいつから転生者を守っているんじゃないのか？

――いや違うな。奴はそんな高尚な理由で転生者を殺してなんかいない。

無縁が笑顔で鼻歌を歌ってエロ本がぎっしり入った袋をぶら下げな

がら歩いていると、さっきまで無縁を隠れて見ていた二人の少年は物陰から現れ、杖型のデバイスを出して後ろから無縁にSSSランク以上の特大の砲撃を放つ。

ちなみに既に結界は張っているが、二人の少年が張ったものではない。

――じゃあなんで転生者を殺しているんだ？

――なんでもその転生者キラーは自分のハーレムと言う欲望を叶えるために殺してるんだと。

二人の少年は目的を達成しと思い笑みを浮かべていた。だが、煙が晴れるとそれはすぐに驚愕の顔に変わる。

そこには無傷の無縁が立っていた。

そして笑みを浮かべるとそのまま両手から二本の小太刀を出して二人の少年に向かってダッシュする。

――やっぱ何百人も殺してんだし、卑怯なチート能力とか持っているんだろ？

――さあな。噂じゃ卑怯な手を使っていると言っが、実際俺も会った事ないし、どんな能力を持っているかは謎だ。

二人の少年は切り裂かれ血を傷口から噴出させ、返り血をあびた無縁を笑みを浮かべていた。

そして笑みを浮かべながら叫ぶように言葉を発する。

無縁の言葉から、二人の少年はどうやら転生者のようだ。

――いるんだな。世の中にはそう言う最低な野郎が…

――そう言うことだ。

無縁は返り血を拭き取ると、そのまま二人の少年を担ぎ上げて家に帰って行った。

転生者を殺す転生者・『善悪無縁』。またの名を『キラ』と言い、転生者の間では『転生者キラ』と呼ばれている。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『銀八先生！』

銀八「はい。じゃあ銀八先生コーナー始めます」

近藤「そして今回担当の近藤勲だ！よろしく頼む！」

銀八「はい。でかい声での自己紹介お疲れさん。じゃあ早速質問コーナーいくぞ」

近藤「よし、最初はこの人だ。ペンエーム『鳴神 ソラ』さんだ」

銀八「おお。いつもトップバッターを維持しているあの人ですか」

近藤「ではいくぞ、

『マリオ』質問『仮面ライダーディブレイカーについてどう思う?』

」

ムツツリーニ「……………銀時とソラ以外に質問『なりたいライダーはあるか?』」

ルイージ「黒龍さんに質問『転生者の能力は主にどんな漫画のを出すんですか?』」

次回を待ってます!』うむ。まず一つ目だが、仮面ライダーディブレイカーは純粹に凄いと思うぞ」

早速名前を間違えてしまう近藤に銀八がツツコム。

銀八「ディブレイカーな。確かにありやあチートの領域入るかもな。じゃあ二つ目は万事屋メンバーに聞きましょう」

アリス「私はカブトだな」

アリア「…ファム」

ヤミ「…特にありません」

神楽「私はパンチホッパーネ!」

新八「僕はサソードですね」

ライホース「そうだな。私はアギトを選ぼう」

リリス「私はファミです」

セイバー「私はオーガです」

ライダー「キバ…でしょうか？」

銀八「はい。じゃあ三つ目」

黒龍「そうですね。俺はジャンプ読者なので、ジャンプ系の能力が多いかもしれませんね。まあジャンプ系以外やオリジナルも出しますが」

銀八「はい。じゃあ『鳴神 ソラ』さんは怒り狂うマリオにご注意を。次、ペンネーム『白黒』さんから、

『初めまして黒龍さん。』

白黒と申します。

あのナナシって人物、もしかして転生者ですか？

怪しすぎです。

次回も楽しみにしてます！』……ええ、言っちゃうとネタバレになっ  
てしまうので言えません」

近藤「いや、そう言う発言で既にネタバレの気がするんだが…（汗）」

「

銀八「良いんだよ。はい、『白黒』さんは廊下に立ってなさい」

近藤「次いくぞ、ペンネーム『真王』さんからだ、  
レオン「ほっとけ、ユウカを怒らせた黒龍が悪い。『ところで今現在の強さの比率はどう変わった？』」

真王「ではこっちも『もここちでソラ達がレギュラーとして活躍出来るとしたらどう思いますか?』」

レーティア「最後は私よ『みんなは新八君のことをどう思うのかな?』」……それで、強さの比率はどうなるんだ?」

銀八「ええ。万事屋では基本的な強さの比率はこんな感じです」

銀時「ソラ」アリス「アリア」セイバー「ヤミ」ライダー「神楽」ライホース「リリス」新八

近藤「いや、新八君が一番下なんだな…（涙）」

近藤は新八の実力を見て涙を流す。

銀八「しょうがねえよ。新八もそれなりに強いけど、あいつ等が化け物級に強いんだから。それとこれは基本的な図で、銀時の野郎が白夜叉化したりなど、そう言ういきなり強くなるなどがあるがこのグラフ簡単に変わるから」

近藤「つまり、新八が万事屋を超える事も…?」

銀八「それはない」

近藤「そうなんだ…（涙）」

近藤は何故か悲しくなっていました。

銀八「っで、二つ目の答えだが、俺はどうでも良いけど、黒龍はそ

うなるとめっちゃ喜びます」

近藤「三つ目だが、新八君は立派な義弟だと思うぞ」

銀八「俺はやっぱあの眼鏡はロリコンアニメオタクだと思う」

近藤「まあ俺としても新八君にはアニメオタクを卒業して欲しい」

銀八にも近藤にもアニメオタク＆ロリコン眼鏡として扱われる新八なのであった。

まあ新八の懷から『リリカルなのは』のDVDが出た時点で仕方ないだろう。

銀八「じゃあ『真王』さんは廊下に立っていなさい。次、ペンネーム『なっぺ』さんから、

『なっぺ』変だから変態なんだよ。じゃあ今回は練乳かけバナナを女性陣にプレゼント。男性陣は感想聞かせなさい」……また変態行為かよ……」

銀八はなっぺさんの変態的な行動に呆れてしまった。

銀八「じゃあ男性陣答えなさい」

新八「ゴハッ！……！」

新八はなのはが練乳バナナをペロペロなめているシーンを見て吐血した。

銀時「いや、俺そう言う趣味とかねえから」

ソラ「バナナは練乳よりチョコレートだな」

土方「やっぱ変態だな…」

沖田「俺なら無理やり口に突っ込みませう」

ライホース「特に言える事はない」

桂「練乳バナナなどよりも、蕎麦の方が断然美味いぞ！」

ユーノ「練乳バナナって、美味しいのかな？」

銀八「はい。こんな感じですね。まあユーノは子供ですし、変態ではないので純粋な返答ですね」

近藤「ぬオオオオオオオオ！！！！お妙さんが俺のバナナをツツツ！！！！」

近藤は自分の股間を押させて悶絶する。

銀八「いやなんでだよ！？お妙いねえのになんでテメーはそんな反応がでkindだよ！！！？」

近藤の凄まじい妄想力にツツコム。

銀八「たく……じゃあ『なっぺ』さんは小説頑張ってください。次、ペンネーム『支配者』さんから、  
『質問行きます」

沖田に質問

この小説では誰と組んでニコラーの命を狙いたいですか？

銀時に質問

ハーレムキャラを作るのが目的で動いている人間って如何思いますか？

新八に質問

どうせ叶うはずのない恋になると思いますけどなのはに告白したいですか？無駄ですけど（黒笑）『……じゃあ質問された奴答える』

沖田「ならアリスと組んで土方を亡き者にしたでさア。あの女となら土方抹殺計画をより堅固なものにできまさら（黒笑）」

近藤「ハッハッハッ！！総悟！そう言う冗談はあまり言うものではないぞ！」

黒い笑みを浮かべて言う沖田に近藤は笑いながら冗談と思い込む。

銀八「いや、アイツならガチでマヨ方の命取りに行くから」

銀八はツツコミ、二番目の銀時が現れて答える。

銀時「特に何も思わねえよ。そいつの好きにさせてやりゃあ良い。ま、俺の大事なモンに手を出すってんならそれ相応の対応させてもらうけどな」

銀時としてはハーレムは大抵の男が夢見る事だし、それにハーレムを作るにしてもそれなりの理由があるかもしれない。

なら、とやかく言わず好きにすれば良いと言ったのだ。結局の所自分には関係ないから言う事はないと言うワケである。

そして三番目の新八が怒りの形相で叫ぶ。

新八「勝手に決め付けるなアアアアアアアアアアア！！！」

新八は怒りのあまり『支配者』さんの所にバズーカぶっ放した。

銀八「おいおい……じゃあ『支配者』さんはバズーカに気を付く下さい。それと、初めての質問ありがとうございます」

銀八はバズーカをぶっ放した新八に呆れる。

近藤「新八君も大変だな。じゃあ次はペンネーム『黒神』さんから、『神楽へ

新八は真正正銘の変態ロリコンオタクです。  
です。で今度あったら、ロリコンに落ちたあの腑抜けた根性を叩き直す為に思いつきり喝入れてやってください。

黒龍さんへ

新八の変態ロリコンオタク化は正直な言って欲しくありませんが…他人の者を奪った行為だけは侍の恥ですので、もっと新八の扱いを酷くしてやっても良いです。

それに懲りて新八も自分が変態ロリコンオタクであったことを自覚し恥を知り、侍としての道をようやく始めて進められますので。』

……こ、ここまで新八君に対して厳しい事を言うとは……」

近藤は黒神さんの新八への扱いがかなり厳しい事に汗を流す。

銀八「それだけ新八のロリコンオタク化に対して憤慨してるって事だろ。じゃあ質問された神楽と黒龍はお答えを」

神楽「ぱつつあん！！お前そこまで堕ちたアルか！！歯ア食いしばれコラー！！！」

ドカン！！

新八「ブゴハッ！！！！！」

神楽は新八を力の限り殴る。

さすがは夜兎とだけあって神楽のパンチは凄まじく新八は綺麗な曲線を描きながらグルグル横に回転して地面に激突する。

そして二つ目の質問に黒龍が答える。

黒龍「そうですか…分かりました。では、更に新八を酷い目にあわせませす」

新八「ふざけんなアアアアアア！！！！！」

ドカ！

黒龍「ゴハッ！！」

新八は黒龍の顔を思いっきり殴った。さっき神楽に殴られたばかりなのに殴れるとは、意外に新八はタフのようだ。

黒龍「何するんですか!？」

黒龍は殴った新八に文句を言う。

新八「何するんですかじゃないでしょ!!今だって充分扱い悪いのに、なんでコレ以上酷い目にあわされなきゃいけないんですか!!」

黒龍「いや、だって黒神さんの許可も取れたから…」

新八「あんなクソ読者の言う事聞くなアアアアアアアアアアアア!!」

ドカバキドコバコ!!

黒龍「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」

黒龍は新八にボコボコにされた。

近藤「新八君……(涙)」

近藤は新八に対しての最近な理不尽な扱いに涙を流す。

銀八「まアさすがにこれ以上扱い酷くされたらそりゃキレるな」

銀八が納得していると、何故かまだ本編未登場のお妙が現れる。

お妙「あのクソ読者アアアアアアアア!!」



まあ…後書き限定になるだろうが…。

輝刃「微妙に中途半端な呪式だな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・新八に質問…もしリンカーコアを持っている事が判つて鎧装タ  
イプのデバイスを貰えるとしたら、次の内どれがいい？

1・『スーパードット大戦OGシリーズ』の『ダイゼンガー』

2・同上の『Gコンパチブルカイザー』

3・『スクライド』の『シエルブリット（最強形態ver.）』

ハハハ…（汗）。ちなみに、どれもセツトアップすると声がそれぞれ  
の使い手の声になるぜ？次は俺からだ。

2・近藤さんに質問…というかオススメだが、新たな恋を見つける  
なら今後出てくるであろう『シャマル』をオススメするぜ？料理は  
少々『アレ』だが、それ以外はかなり家庭的でその上可愛いぜ？

輝刃「…ッ（笑堪）！？確かに、彼女なら近藤の旦那にお似合いだ  
ろうな…（笑堪）。」…（笑堪）」

銀八は2の質問を見て笑うの堪えている。

近藤「いや、ちょっと何笑ってんですか！？そんなにシャマル殿は  
俺に似合いませんか！？」

銀八「…似合わない…つつか、シャマルがお前を好きになる自体  
がありえない」

近藤「酷！？」

近藤は銀八の言い分に涙を流す。

銀八「じゃあ2は答えたんで、1の質問に新八、答えろ」

新八「僕はどれが良いから分からないんですけど、とりあえず1で」

新八は申し訳なさそうに答える。

銀八「つつか…お前誰？」

銀八は目の前の新八？を見て首を傾げる。隣にいる近藤も首を傾げていた。

新八？「お前誰って……僕ですよ！！万事屋の従業員の志村新八ですよ！！」

新八？は必死に自分の事を新八だと言う。

そして銀八はある事に気づく。

銀八「あ、分かった！お前月光閃火さんにイケメンにしてもらったから原型が消えて誰だか分かんなくなっただんだ！」

近藤「あ、そうか！前の面影がなくなっているからすっかり分からなかったぞ新八君！！」

二人は納得する。

イケメン新八「ちょッ！！なんでイケメンになったら僕の原型なくなっちゃうんですか！！??」

イケメン新八は二人の意見はあんまりだと言う諷に講義する。

銀八「いやいや、だって元がイケメンじゃなくて地味で普通な顔なんだからイケメンになつたら誰だか分からないって」

イケメン新八「そ…そんなアアアアアアアア！…！！」

イケメン新八は頭を抱える。自分はそこまでイケメンとは程遠い存在だと思わなかったからだ。

銀八「じゃあ『月光閃火』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『天破』さんから、

『春斗』そしてホントに密告しに行きやがった！？　くうっ…なあ、銀時、土方よ…。『お前らの命、どっちかしか救えないとしたらどちらの命を救って欲しい？』…銀時は物理的に、土方は社会的に抹殺されるぞ、このままじゃ…あ、もしどっちを救うかで争いがおきた場合は俺も助けられないからなw」……ええ、銀時と土方はあんな感じになっています」

銀時「上司の責任は部下の責任だろ！！お前はとつとブタ箱にぶち込まれる！！」

ド力！！

土方「ゴハッ！！…ぶざけんな！！テメーこそ少女たぶらかせた罪で成敗される！！」

ド力！！

銀時「ブハッ!!」

春斗の忠告を忘れて、どっちが助かるかで喧嘩していた。

近藤「まったく…トシもしようがない奴だ」

近藤は呆れたように言う。

銀八「いや、お前のせいだから」

銀八が冷やかにツッコム。

銀八「はい。結局どっちも助かりたいけど、結局春斗じゃ無理って事です。『天破』さんは初めての質問ありがとうございました」

近藤「じゃあ次いくぞ。ペンネーム『白騎士君』さんは、

『白騎士君』では質問します。』

1 ‘銀さんに質問。ゴジラと戦えますか？

2 ‘なのはと土方とフェイトと銀さんとソラに質問。レナードに試験をさせました。

白騎士君「ではこの問題を回答して下さい」

？ ‘坂田銀時へこの漢字にふりがなを書いて下さい」

？ ‘なのはと銀時の異名を答えなさい。

？ ‘フェイトの得意な物を答えなさい。

制限時間は10分

【解答】

? 『天然パーマ甘党』

? 『なのは、白き冥王。白いデストロイガンダム銀時、砂糖王。ド  
S天パ』

? 『料理』

さて、どうツツコム?』

以上です」

レナード「今度は俺からの質問だ。」

セイバーに質問。こつちの世界のフェイトの美味いが、食べるか?』  
以上だ」』……じゃあ1つ目の質問の万事屋頼むぞ」

銀時「いや無理だろ!でかさ的に!」

銀八「じゃあ2つ目、質問された奴答えろ」

銀時「ドSと甘党と砂糖王とデストロイガンダムは良いが、天パと  
はどう言う事だコラ!」

なのは「酷いの……(涙目)」

土方「まんまだな」

フェイト「へえ、あつちの私は料理が上手なんだ」

銀八「誰一人としてツツコミ入れてねえじゃねえか！あつちのフェイトは料理上手くねえし！！」

質問された人間が誰一人ツツコミに回ってないので、変わりに銀八がツツコンだ。

近藤「どれだけ万事屋は天パを認められないのだろうな……」

銀八「じゃあ『白騎士君』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『ボッスン』さんから、  
『質問です。』

皆さんはガンダムシリーズで一番好きな機体は何ですか？ガンダムシリーズに詳しくなかったら、答えなくてもいいです。

ソラさんLOVEと銀さんLOVEの人達に質問です。もし、白いインキュベーターに僕と契約して魔法少女になったら、好きな人を振り向かせる事が出来るよと言われましたらどうしますか？白いインキュベーターを知らないなら答えなくてもいいです。

後、贈り物を贈ります。ソラさんには劇場版魔法少女リリカルなのはのフェイトちゃんのバリアジャケットを着たヤミさんの写真集とソラさんLOVEと銀さんLOVEの人達にはガンダムシリーズの主人公達の服装を着たソラさんと銀さんの写真集を贈ります。

ケンジ「それじゃ、僕と美柑ちゃんですその写真集を持って来ます。」

美柑「今、そちらに行くね。別の世界のヤミさん。」……すみませんが、作者はガンダムシリーズも詳しくなく、インキュベーターも知らないので答えられません」

近藤「すまないなボッスンさん」

銀八「じゃあ『ボッスン』さんは廊下に立たなくていいです。次、ペンネーム『黄色いのなにか』さんから、

『あああああああ！！せっかく銀時&ソラバースの為に作った銀時&ソラ裸体写真集を何で燃やすのですか！銀さん、ソラ！せっかくフェイトやなのは達の欲情する変態顔が見れると思ったのに！こっとなったら今回は更に過激な物を送っちゃいますよ。ライダーとフェイトには銀時となのはのキス写真とソラとアリスのキス（どちらも捏造）写真を差し上げますこれを見て嫉妬に狂ってください（黒笑）。

ちなみに銀時となのはのキス写真は高町家に大量にばら撒きましたから。怒り狂った恭也&士郎に気をつけてください。

アリス&ライダーに質問。万事屋で銀時やソラを夜這いやお風呂に鉢合わせとかありましたか？』……っで、実際の所どうなんだ？」

銀八はアリスとライダーに聞く。

アリス「ああ、もちろん夜這いもしたし、風呂は鉢合わせどころか私から入りに行った事もあるぞ」

銀八「良くお前は笑顔で答えられるな！！やっぱすげえなお前！！」

ライダー「……………／／／／」

ライダーは顔を真っ赤にして黙っている。  
やっぱり恥ずかしいようだ。実の所ライダーは夜這いもしているし、  
お風呂で鉢合わせもしている。

銀八「じゃあライダーは痴女と言う…」

グサツ！

銀八「ぎゃあああああああああああ！！！」

デリカシーのない事を言う銀八の額にダガーを投げる。

ライダー「口は災いの元ですよ？（ニコ）」

ニコリと言うライダーに近藤は顔を青くさせる。

近藤「じゃ、じゃあ『黄色いのなにか』さんは廊下に立っていてくれ」

銀八「じゃあ次、ペンネーム『きつと木の精だ』さんから、  
『木の精だ』ども！きつと木の精です」

恭平「ソラ君の手料理が、俺も食ってみたいねえ」

こなた「ふと疑問に思ったから質問いくね？」

恭平「ソラ君に質問、お妙さんに料理を教えなかったんですか？」

こなた「何か短くてごめん、今回はこれで失礼するよ」……じゃ

あソラ答える」

ソラ「いや、新八に頼まれて教えたには教えたんだが、まったく向上するどころか、下手にさえなっていたな。さすがにアレは謎だった」

近藤「さすがはお妙さんだ……」

銀八「あいつの料理の腕はソラでさへどうにかできないと言っ事だな」

近藤「『きつと木の精だ』さん、初めての質問ありがとう」

銀八「じゃあ今回はここまでです」

近藤「次回のアシスタントは誰なんだ？」

銀八「今回はソラがアシスタントです」

天破さんのから天破さんは前に貰った婚姻届の著名と実印（偽造）が銀さんのものだとか恭也と土郎に告げ口しに来た。

そしてデイルは土方がやった近藤のストーカー行動のモミ消しをしていた事を將軍に伝えるに行った。

だが…

恭也「ほう貴様が……」

士郎「なのはをたぶらかした奴が…」

天破「えっ！？ちよっ！？…なんで殺氣ぶつけてくるの！？」

何故か天破さんが恭也と士郎に殺氣ぶつけられていた。

その理由は…

銀時「ほらほら。アイツがあんたらの大事ななのはをたぶらかした張本人だぜ」

憎たらしい笑みを浮かべながら二人に話しかける銀時がいた。

天破（ま、まさか…！？既に手を打たれて…！！）

恭也・士郎

『『覚悟オオオオオオオオオ！！！！』』

天破「ぎゃああああああああああああ！！！！」

天破さんは二人にボコボコにされた。

そしてディールは…

ガチャ

牢屋に入れられていた。

ディール「なんで！！？？」

將軍「ほう、この者が幕府に嘘の情報を流した犯罪者か…」

土方「はい。しかし、嘘の情報を流すとはとんだ不屈き者もいたものですね」

將軍とその隣には笑みを浮かべる土方がいた。

ディール（ま、まさか…！？）

土方（くくく…：テーマのやる事なんざお見通しなんだよ）

ディール（は、嵌められた！！）

ディールは牢屋の中で歯噛みした。

二人は返り討ちにあつた。

そして、ボッスンさんの所からは写真を持って来たケンジと美柑。

美柑「はい。ヤミさん」

ヤミ「あ、ありがとうございます…／＼／＼」

笑顔で写真集を渡す美柑から顔を赤くして受け取るヤミ。

黒龍「わざわざすみません」

ケンジ「いえいえ」

美柑「私、こつちの世界のヤミさんとも友達になりたいんだ。ダメかな？」

ヤミ「私でよければ…」

美柑「ホント！？よろしくヤミさん！」

ヤミ「こちらこそ」

美柑は笑顔で握手をし、ヤミは少しだけ笑みを浮かべて握手する。

ソラ「ま、コイツはこの通り社交性が欠けてるから仲良くしてくれ」

美柑「はい」

ヤミ「一言余計です」

ヤミの頭を撫でながら言うソラに美柑は笑顔で返す。ヤミは少し納得のいかない顔をしているが、どこことなく笑顔だった。

この後、お茶など雑談をして美柑とケンジは帰って行った。

## 第十八訓：転生者と言っても所詮は人間（後書き）

黒龍「じゃあ今回も贈り物コーナーします」

『鳴神 ソラさんからは銀時LOVEズに魔法使いな銀時の写真を、ソラLOVEズには冒険者なソラの写真』、『なっぺさんからは練乳かけバナナ』、『ボッスンさんからは劇場版魔法少女リリカルなのはのフェイトのバリアジャケットを着たヤミの写真集とソラLOVEと銀時LOVEの人達にはガンダムシリーズの主人公達の服装を着たソラと銀時の写真集』、『黄色いのなにかさんからは銀時となのはのキス写真とソラとアリスのキス（どちらも捏造）写真』

黒龍「贈っていただいた皆様ありがとうございました」

ヤミ・アリア・なのは・フェイト・リリス

『（ペロペロ）』

五人は舌でペロペロ練乳バナナを舐める。

アリス・セイバー・ライダー・アルフ・神楽

『（もぐもぐ）』

三人は普通に食べている。

なのは「銀さんと私が……にゃ／＼／／／」

なのはは自分と銀時のキスシーンの写真を見てボワツ！と頭を爆発させる。



そして裏で暗躍するセフィロスと戦う事に…

セフィロス「さア、お前達に絶望を贈ろう」

近藤「今回は『身近なところにとんでもない秘密がある』にテイクオフ」

第十九訓：身近なところにもない秘密がある（前書き）

黒龍「今回は皆さんお待ちかねのセフィロス様が登場します」

銀時「いや、なんだよセフィロス様って！？　つつか、あいつを待ちかねている読者とか居んのか！？」

ソラ「さあな」

セフィロス「フ…『リリカル銀魂ライダー』、始まるぞ」

## 第十九訓：身近なところにもない秘密がある

なのはは授業中にユーノと念話をしていた。

ユーノは魔力が回復したらこのまま自分一人でジュエルシード探しすると言ったが、なのはも手伝うと言った。

ユーノは渋ったのだが、なのはは魔法が自分のやりたい事かもしれないと言いながら、ユーノを説得する。

その上で銀時達ものりくらりとユーノを説得し、最終的にはユーノは折れた。

そしてこれからはなのはと万事屋の銀時と新八とライダーと真撰組の近藤と土方と沖田と山崎がジュエルシード探しを手伝うことになった。

なのはは放課後に町の神社に来ていた。ユーノも一緒である。

ジュエルシードの反応があったからだ。

そしてそこにはジュエルシードを取り込み、子犬から巨大な犬に変わった怪物がいた。

たまたま飼い主と散歩をしていた犬が落ちていたジュエルシードを取り込んでしまったのだ。

体は鎧のような黒く堅そうな皮膚で覆われ、目は四つになり、鋭そうなたをむき出していた。

ユーノ「気をつけてなのは！ 現住生物を取り込んでいる！」

なのは「どうなるの？」

ユーノ「実態がある分、強い」

ユーノ目を細くしながら化け物になった犬を見ている。  
これからは化け犬と呼ぼう。

ユーノ「なのは！ レイジングハートの起動を！」

なのは「起動ってどうやるんだっけ！？」

ユーノ「えっ……！？」

なのはの言葉を聞いてユーノは呆けた声を出してしまう。  
なのはが起動の仕方を忘れてしまったとは思っていなかったからだ。  
ユーノはなのはの肩に乗って言う。

ユーノ「ほら、“我使命受けし者”からの起動パスワードだよ！」

なのは「あんな長い覚えてないよ！」

なのはとユーノがもたついていると、化け犬が唸り声を上げてなのはに向かって駆け出す。

ユーノ「じゃあもっかい言うから僕の言う言葉を繰り返して！」

なのは「わ、分かったの！」

ユーノとなのははレイジングハートの起動に注意がいていたので

気が付かなかったが、化け犬は二人のすぐ前まで来ていた。  
ユーノは化け犬が近づいて来ている事に気づき声を上げる。

ユーノ「危ない!!」

なのは「えっ!?!」

ユーノはなのはに声を掛けてなのはが反応する時には既に間に合わず、化け犬はなのはに襲い掛かる直前だった。  
なのははダメだと思い目を瞑った時……

ドカ!!

化け犬「グワアッ!!」

と何かがぶつかる鈍い音と、化け犬の悲鳴が聞こえた。

なのははゆっくりと目を開けてみると、化け犬は自分の目の前から離れた場所で呻きながら倒れ、自分の目の前には木刀を構えた銀時の背中があつた。

なのは「銀さん……」

なのははつい銀時の名前を呟いてしまった。  
銀時はなのはの言葉を聞いて振り返る。

銀時「おいおい。随分メンドーな事になってんじゃねえか」

銀時は愚痴を零しながら化け犬を横目で見る。

化け犬は銀時の一撃が思った以上に重いらしく、まだ立ち上がれずふら付いていた。

ユーノ「あの、どうして此处に……？」

ユーノは慌てていたので銀時達を呼ばずに来たのだ。

だから銀時が此处にいる事を疑問に思ったのだ。

銀時「ジャンプ探してたらたまにお前達が神社に行くのが見えたんでな」

ユーノ「ジャン、プ？」

ユーノは聞きなれない単語に首を傾げた。

ジャンプ愛読者である銀時はこの世界に来てから時間があればジャンプを探していたが中々見つからなかった。

それで探していた途中でなのはとユーノが神社に行くのを見たので気になった銀時は二人の後を追いかけて今の場面に遭遇したと言うわけである。

銀時が二人にそう説明した。

説明し終わると……

化け犬「グルルルル……！」

と化け犬が怒りの形相で銀時を睨みつけていた。

どうやら銀時に木刀でぶつ飛ばされたのが相当頭にきたようである。

銀時「おいおい。それにしても何だよアレ？ あの変なブヨブヨの化け物といい、コイツと良い、ジユエルシードってのはモンスター製造機ですかコノヤロー」

銀時はダルそうに化け犬を見ながら愚痴を零す。

ユーノ「気をつけてください！ 昨日と思念体と違って現住生物を取り込んでいるから強くなっているはずです！」

ユーノがさっきなのはにした忠告を銀時にするが、銀時は「はいはい」と軽い返事をした後、木刀を肩に掛けながら化け犬に近づく。それを見たユーノは慌てて銀時に声を掛ける。

ユーノ「ちよっ！ だから危ないんですってば……！」

ユーノも昨晚の戦いで銀時が思念体を圧倒していたのは知っていたが、今回の相手は現住生物を取り込み昨晚の思念体よりも強い。魔法を使えない銀時が肉弾戦だけで上手く戦えるとは思わなかったからだ。

だが、ユーノ考えはすぐに覆された。

近づいて来た銀時を化け犬がここぞとばかりに爪で引き裂こうとするが、銀時はそれを簡単に木刀でいなしていく。

上からこようが、下からこようが、斜めからこようが全ての攻撃を完璧に防御していた。

ユーノ（す、凄い……！！）

ユーノは目を見開いて驚いていた。

肉弾戦だけではどうやったって限界があると思っていたが、自分の考えがまったく意味をなさない事を銀時の戦いを見て思い知った。確かに今の戦いの様子は銀時が押されているように見えるが、それはまったくの逆。

銀時が最小限の動きで化け犬の攻撃を防いでいたのだ。

そして攻撃した手が木刀で弾かれた事でスキができた。すかさず銀時が反撃の態勢に入った。

銀時「おいたいも大概にイ——！」

銀時は木刀を振り上げ飛び上がる。

銀時「しやがれエエエエエエ——！！！」

ズドン——！！

重い一撃が化け犬の脳天にクリーンヒットした。

ドサッ！

化け犬は声も上げずに白目を剥いてゆっくり倒れた。

銀時「はい終了」

銀時は腰に木刀を挿す。

なのは「や、やったアアア!！」

なのはは銀時の勝利を見て喜び飛び上がった。

銀時が勝った事をつい自分のように喜ぶところは子供らしいと言えるだろう。

ユーノ（僕は……彼らの事を侮っていたのかもしれない……）

ユーノはユーノで、思い返していた。

魔法の才能があるなのはにはこれから手伝ってもらおうと思っていたが、やはり銀時達には極力手伝ってもらえないようにしようと思っていた。

それはユーノが純粋に銀時達の事を気遣っていたからだ。

いくら腕に覚えがあっても魔法がなければ何もできない。さっきまでそう思っていた。

だが……銀時の戦いを見てその考えを改めた。

そして帰ったら改めて銀時達にジュエルシード集めを手伝ってもらおうと思った。

銀時「おーい。倒したは良いんだけどよ、この後どうすんの?」

銀時は二人に歩いて近寄りながら聞く。

なのはとユーノも“あっ”と思い出し、ユーノがなのはに言う。

ユーノ「なのは。さっきも言ったとおり、僕に続いて起動パスワードを言つて」

なのは「うん」

なのははユーノ言葉に頷き、レイジングハートを握り締める。

なのは（銀さんがあれだけ頑張ったんだから、私も……！）

——銀さんの役に立ちたい。

そんななのはの思いに反応したのか、レイジングハートが強く光を發した。

レイハ<Stand by lady・Setup>

なのは「えっ……？ レイジング、ハート？」

ユーノ「これは……！」

レイジングハートから女性の声が聞こえ、なのはとユーノは驚いていた。

そして光が収まると杖の姿になったレイジングハート持ったなのはの姿があつた。

なのは「これって……」

なのははレイジングハートを見て呆然としてしまった。

ユーノ「まさか起動パスワードなしで起動させたなんて……」

銀時「なんだ？ 何かおかしい事でもあんのか？」

ユーノは今更ながらなのは才能に驚いていた。

やはりなのは自分よりも遥かに魔法の才能があると実感した。

銀時は二人の様子から何か問題があるのかと思い首を傾げる。

ユーノ「なのは。次に防護服を」

なのは「うん。レイジングハート、お願い」

レイハ<Barrier jacket>

そしてまた桃色の光になのはが包まれる。

そして光が収まると、白いバリアジャケットを身に着けたなのはがいた。

銀時（あ、あの服のデザインってさっきの服だったんだな）

銀時はなのはのバリアジャケットがなのはの聖祥小学校の制服に似ていると気づく。

結構どうでも良い事に気づいた銀時なのであった。

そしてその後、昨晚の思念体同様、桃色の紐で気絶している化け犬を縛り封印する。

なのはがジュエルシードを封印する横で、銀時とユーノは話をしていた。

銀時「なあ。なのはって、前にお前が言ったとおりやっぱ魔法の才能とか言う奴があるのか？」

銀時は前にユーノに魔法の事を教えてもらった過程で、なのはの魔法の才能は凄いとし説明したのだ。

ユーノ「はい。僕なんかよりもずっと凄い才能をなのはは持っています。魔導師でも、なのは並の才能を持った人は中々いないと思います」

銀時「……結構身近にいるもんだな、本当の天才って……」

銀時はジュエルシードを封印し終わりそうなのはを見ながら呟いた。

ユーノ「あ、魔法の才能までは分かりませんが、銀さんものは同様リンカーコアを持っていますよ。しかも、なのはよりも更に高い魔力を有しています」

銀時「……………ユーノくん。今さらつとんでもない発言しなかった？」

銀時はユーノの言葉を聞いて少しの間時が止まった後、ついユーノの言った言葉が信じられず、聞き返してしまった。

ユーノ「僕の魔力感知に問題がなければ、銀さんにリンカーコアが存在します」

銀時「……マジで？」

ユーノ「マジです」

銀時はユーノの目を見て嘘ではないと感じ、呆然としてしまった。

なのは「どうしたの？」

ジュエルシードを封印したなのはが制服に戻って杖を持ちながらやって来る。

ユーノ「銀さんにもリンカーコアがある事を話してたんだよ」

なのは「えええ！？ それ本当なのユーノ君！？」

なのはも銀時同様驚いてしまった。

ユーノ「うん。それになのは以上の魔力量を持っているから尚更驚きなんだ」

もしなのはよりも先に銀時が自分を助けていたのなら、たぶん銀時にレイジングハートを渡していただろう、とユーノは思った。

なのは「じゃあ銀さんもこれから私と一緒に魔法が使えるの！」

なのははつい嬉しくなってしまった。

大好きである銀時が自分と同じ魔法を使えると思うとつい嬉しくなってしまった。

なんだか二人だけの共通点と言う感じがしてなのはつい“にやはは／＼／＼”と緩みきった顔をしてしまった。

ユーノ「まあ、レイジングハートのような高性能なデバイスが今は

ないし、当分は銀さんが魔法を使うのは無理だと思うんだ……って、聞いているのは？」

なのは（銀さんと一緒。銀さんと一緒。銀さんと一緒。銀さんと一緒。銀さんと一緒。銀さんと一緒。銀さんと一緒。銀さんと一緒……）

にやははは♪／＼／

はい。まったく持ってユーノ君の話を聞かずに自分の世界に浸るなのはちゃんなのであった。

一方銀時は銀時で……。

銀時（俺が魔法を……）

§§§§

銀時「魔法侍！リリカル銀時推参！」

そこにはなのはのような魔法少女さながらの服を着て杖を構える自分の姿を想像してしまった。

~~~~~

銀時「ぎゃあああああああああああああ……!!!!」

つい想像してしまった。たとは言え、あまりにもおぞましい想像に銀時は顔を真っ青にして叫び声を上げてしまった。

銀時の叫び声を聞いてなのはとユーノはギョツとしてしまう。

なのは「ぎ、銀さん!？」

ユーノ「ど、どうしたんですか!？」

銀時「嫌だアア!!　なんで俺が魔法少女のコスプレなんかしないといけないんだよ!!」

銀時は頭を抱えてブンブンと左右に振る。さっさとさっきの妄想を消したくてしかたなかった。

ユーノ「いや、あなた一体どんな想像したんですか!!??　バリアジャケットは本人の自由に変える事ができるんですから心配ありませんよ!」

なのは「銀さん落ち着くの!!」

二人は必死で銀時を落ち着かせようとした。

こんなんだから先大丈夫かこいつ等?　by 作者

場所は変わって時の庭園。

フェイトはプレシアのいる玉座に呼ばれていた。  
フェイトはプレシアが自分の目の前にいるので、ついでが強張って

しまっている。

フェイト「あの、母さん。頼みたい事ってなんですか？」

プレシア「実はね。ある管理外世界にジュエルシードと言うロストロギアが落ちたの」

フェイト「つまり、そのジュエルシードを集めてくれば良いんですか？」

フェイトはすぐにプレシアが言おうとしている事を察した。  
今までも何回か自分にロストロギア収集を頼んだ事がある。だから  
今回もそれと同じ頼みだと予想したのだ。  
そしてフェイトの予想は的中した。

プレシア「ええ。さすがは私の娘ね。察しが早くて助かるわ」

プレシアはそう言つと、しゃがみこみフェイトの頬を触る。  
フェイトは一瞬強張ってしまうが、すぐに硬直を解く。  
プレシアはフェイトの頬を撫でながら言う。

プレシア「それは私にとって、とても必要な物なの。だからフェイト。『母さんのために』それを持って来てくれないかしら？」

フェイト「はい！」

フェイトは笑顔になって返事をした。  
母親であるプレシアに必要とされている。それだけでフェイトは嬉しくなってしまったのだ。

プレシア「拠点とお金は用意しておくわ。明日には出発しなさい」

フェイト「はい」

プレシアはフェイトにこれから行く次元世界を地球だと教えた後、「それと」と言っ言葉を付け足す。

プレシア「彼等も連れて行きなさい。役には立つでしょうから」

フェイト「え、えっと……ソラ達は……」

フェイトとはつい口箆ってしまう。

彼等とはソラ達である事はすぐにフェイトも分かった。

だが、フェイトとしてはソラ達を連れて行きたくなかった。

ロストログアの収集となれば、危険が伴う事もある。

フェイトはソラ達を危険な目に合わせたくないのである。

対するプレシアはソラ達を使える駒としてこの時の庭園において置いた。

フェイトはこのプレシアの考えを知らないが、プレシアとしては今回のジェルシードは自分の目的のためにどうしても必要な物なので、できるだけジュエルシード確保の確立を上げておきたかった。

たぶんこれは予想だが、ジュエルシードを集めようとする輩は自分の他にもいると思ったからである。

プレシアはため息をつく。

プレシア「……まあそこはあなたの好きにしなさい。でも、母さんのためにもジュエルシードは手に入れてきなさい」

フェイト「……分かりました」

フェイトは少し元気のない返事をした後、悩んでいる事が分かるような顔で玉座を出て行った。

そんなフェイトとプレシアの話を物陰から見ている影があった。

ソラ「妙な事になったな……」

それはソラであった。

フェイトがプレシアに呼ばれていると聞いたソラは気になって、玉座の前に来た。

その時、二人の話し声が聞こえてきたのでつい聞いてしまった。

ソラは険しい顔をしながらアリス達の所に戻って行った。

時刻は夜。

皆が寝静まった後、時の庭園の廊下には一人の男が腕を組んで立っていた。

桂「うむ。迷ってしまった」

真顔で迷子宣言する桂である。

実は小便をするために廊下のトイレを探して見つけたのは良いが、出て来た時にはどこだか分からず迷ってしまったのである。

部屋にもトイレがあったのだが、寝ぼけてある事を忘れていた。

桂「まあ歩けば部屋に辿り着けるだろう」

桂はそのままあてもなく歩く事にした。

桂が迷ってしまうのも無理はないだろう。

この時の庭園はやたる広く、今は明かりがない夜だ。

そして十分後。

桂「うむ。どこであれどこでどこがあれであれがどこでそれがどこでアレがここで此処がアレでなにがあれであれがなにでそれがなんなのか分からなくなってしまった」

お前が言ってる事も分けわからねえよ、と今銀時がいればツツコンでいただろう。

桂「ん？ アレは……」

桂は廊下の先の明かりに気づく。どうやら部屋の明かりがまだ付いているようだ。

桂「ありがたい。どうやら誰かまだ起きているみたいだな」

桂は明かりが付いている部屋まで早足で向かった。

どうやらそこは玉座の間のようだ。

そして近づくにつれ話し声が桂の耳に聞こえてきた。

「???」あなたの言うとおり地球にジュエルシードが落ちてたわ」

「???」ああ。後はお前の人形に任せるとしよう」

桂（どうやら一人はプレシア殿のようだが……もう一人は一体……？）

桂は聞きなれない声に疑問を覚え、ゆっくりと部屋に近づき扉の隙間から中の様子見た。

プレシア「あなたはあの人形を見張って頂戴。何かあれば随時私に報告して」

セフィロス「……まあ良いだろう。私としてもあの人形がどう動くのか興味があつた所だ」

部屋にいたのはプレシアと長刀を持った銀髪の上に長髪の男——セフィロスだった。

セフィロスは顎に手を当てて考える仕草をした後にプレシアの言葉を聞き入れる。

桂「っ!？」

桂はセフィロスを見た時、戦慄を覚えた。

さすがの桂もセフィロスを見て冷や汗を流してしまった。

桂（あの男は一体……!? それに人形とは……）

桂が汗を流しながら部屋を見ると、プレシアとセフィロスは一通り話を終えたのか、プレシアは部屋にある隠し扉を開けその奥に入り、セフィロスは少しの間玉座の間に立っていた。

桂（あそこにあのような隠し扉があつたとは……よし）

桂は考えを纏めると、すぐにソラのいる部屋に向かった。

そしてセフィロスは瞳を扉の方に向けていた。

ソラの部屋。

そこでソラは静かな寝息を立てて寝ていた。

バンバン！！ バンバン！！

桂「起きろソラ！！すぐに俺と共に来てくれ！！」

ソラ「……ん？ なんだ……？」

ソラは扉の叩く音と桂の声で目を覚ます。

桂「ここを開ける！ お前に話したい事がある！！」

ソラ「たく……なんだこんな夜遅くに……」

ソラは目を擦り、頭を掻きながら少し重そうな足取りでドアに向かう。

しかも睡眠邪魔されて不機嫌そうである。  
そしてドアを開ける。

ソラ「お前、今何時だと――」

桂「ソラ！とにかく木刀を持ってきてくれ！もしかしたら俺達の知らない間に大変な事態が起こっているかもしれないんだ！！」

ソラ「ッ！」

自分の二の腕を掴みながら言う桂の必死な形相を見て、ソラも完全に目が覚める。

ここまで慌てた桂をあまり見た事がないソラは事の重大さを察し、すぐに木刀とコートを取る。

そして桂とソラは目配せした後、走り出す。

ソラ「それで、何があつたんだ？」

ソラは走りながら桂に聞く。

桂「実はさっきプレシア殿がいつもいる玉座の間に来た時、気になる男がいたのだ」

ソラ「それで？ その男が何だつて言うんだ？」

ソラは桂の言う気になる男が桂をここまで慌てさせる原因だと予想する。

桂「その男はな……」

桂は一旦言葉を区切り、そして声を上げる。

桂「プレシア殿愛人かもしれないんだ！！！」

ズドン！！

桂「ゴフアッ！！！」

ソラは無言で桂の後頭部に飛び蹴りを喰らわせた。

桂は走っていた事も相まってズザザザザ！！と、とんでもない勢いで顔から床を滑っていき壁に激突する。

そして桂に飛び蹴り喰らわせたソラは着地して、拳の骨をゴキゴキ鳴らす。

ソラ「お前なに？ プレシアの愛人だア？ そんな下らない事のために俺の睡眠を邪魔したのか？」

ソラは目元に影を作りながら不機嫌MAXと言う感じで桂に近づく。桂は頭を抑えながら講義する。

桂「何を言うか！ プレシア殿に愛人がいると言う事は俺のライバルになるかもしれないのだぞ！！！」

ソラ「テメー大概にしるよ？ お前の人妻好きに付きやってやるほど俺は暇じゃねえんだよ」

桂は人妻好きなので、影ながらプレシアを好意を寄せていた。

だが、そんな時夜な夜なプレシアに会いに来る男がいるとなればプレシアを影ながら狙っていた桂も慌てた。

ソラにとっては至極どうでもいい事だ。

今此処でこの桂をシバキたかつた。

ソラ「たく……俺は部屋に戻るぞ」

ソラは青筋を額に浮かべながら部屋に戻ろうとした。

桂「待てソラ！」

桂の呼び止めにソラは不機嫌そうにしながら聞く。

ソラ「なんだ？ これ以上下らない事なら今度はマジで蹴り入れるぞ？」

桂「いや、俺もこれはさして重要な事ではないと思ったのだが、玉座の間に隠し部屋があった。そこにプレシア殿が入っていたのである。もしかしたらプレシア殿はそこに重要な何かを隠しているのだと思うのだが……すまん、これはやはり今思い返しても重要な事ではなかった。男とプレシア殿との関係は俺で調べる。お前は寝ていてくれ」

ソラは桂の話聞いた後、呆れたような声を出す。

ソラ「……………そっちの方が遥かに重要だろ」

っと言う事で、ソラと桂は隠し部屋を調べる事にした。

桂が隠し扉の場所を覚えていたので、難なく隠し部屋に入る事ができた。

そして玉座の間にはセフィロスはなくなっていた。

部屋には薄く明かりがついていたので、中の様子を見る事ができた。そして二人は隠し部屋の中を見て険しい顔をしていた。

ソラ「見るからに怪しいなこの部屋……」

桂「しかしこの水槽のような物は一体……」

二人は左右の棚のような場所に幾つもあるガラスで出来たカプセルともポットも見取れる物を見ながら歩いていた。

そしてそのカプセルには何か植物のツタの様な物が根を張るように広がってくっ付いていた。

そこは一目で怪しいと感じられる。

そして目の前にあるカプセルを見て桂は驚愕の声を上げた。

桂「なッ！？ これを見るソラ!!」

桂の声に反応してソラも目の前のカプセルを見ると、目を見開いて驚いていた。

ソラ「ッ!？」

桂「これは一体……!？」

ソラと桂は信じられないと言う表情で目の前にカプセルの中に入っている『モノ』を見ていた。  
そこには……。

ソラ「フェイト……」

フェイトと瓜二つの金髪の少女がカプセルの中にある水の中でうずくまりながら浮いていた。  
この光景に二人は少しの間開いた口が閉じられなかった。  
そして我に返ったソラが桂に聞く。

ソラ「ツラ……これはどう言う事だ……?」

桂「俺にも分からん!　だがこの少女フェイト殿と瓜二つだ!　しかも何故こんな水槽に……!」

???「なら、私が教えよう」

ソラ・桂

『『ツ!』!』』

二人が言い合っていると、声と共に二人は自分に向かってくる殺気を感じ桂は腰の刀を抜き、ソラは木刀を抜いて防御の体制を作る。  
それと同時に二人の衝撃が襲い掛かり、そのまま玉座の間まで吹き飛ばされる。

桂「くッ!」

ソラ「ッ！」

二人は空中ですぐに体制を立て直して地面に着地する。立ち上がり隠し部屋を見つめっていると、コツコツコツ、と言つ足音と共に一人の男が出てくる。

しかも同時に玉座の間のライトが付き、二人はつい目を瞑ってしまふがすぐに光になれ少しづつ目を開ける。

桂「お前はプレシア殿と一緒に居た……！」

ソラ「じゃあコイツがお前の言つてた愛人とか言つ奴か？」

ソラの言葉を聞いて桂は無言で頷く。

まあソラ自身目の前の男がプレシアの愛人ではないのは分かっている。

明らかにその尋常ではない威圧的な雰囲気。そして『そのない穴』を見たような不気味と言うか、間違いなく普通の人間では出せないようなオーラがソラの警戒心を強くした。

そしてあの薄く笑う狂気を含んだ笑みが似ていたのだ。

——『高杉晋介』に……。

いや、正確に言えば雰囲気似ていたと言うのが正しいだろう。とにかく直感的にヤバイと感じたのだ。

桂は刀を構えながらセフィロスに問いかける。

桂「貴様何者だ？ 何故我らを攻撃した？」

セフィロス「私はセフィロスだ。なに……さすがにあの場所で戦ってもらっては困るからな」

セフィロスは落ち着いた雰囲気醸し出す。

ソラ「さっきの『アレ』はなんだ？ あの水槽に入ってたガキはなんでフェイトに似ている？」

ソラもまた桂同様セフィロスを睨みながら木刀を構えて聞く。

セフィロス「フツ……あの人形に似ている、か……」

セフィロスは少し俯いて口元に笑みを浮かべてそう呟くが、ソラと桂に聞こえていない。

二人はセフィロスの様子を見て怪訝な顔をする。

セフィロスはいつもの表情に戻り顔を上げる。

セフィロス「教えてやっても良いが……なら、教えてやる代わりに私の余興に付き合ってくれないか？」

桂「余興？」

桂の問いに答えるようにセフィロスは長刀を両手で持ち、自分の顔の横に持っていきながら逆撫に変えて剣先をソラ達に向ける構えを取る。

これはセフィロスが良くする構えだ。

セフィロス「私を楽しませられたら教えよう」

桂「そう言う事が……」

ソラ「しょうがねえな。なら来いよ、バトルジャンキー戦闘狂……」

セフィロスの態度と言葉を聞いて桂とソラはセフィロスが言いたい事が分かり、自分の獲物を持つ手に力を入れて構えを取る。

セフィロス「さあ、お前達に絶望を贈ろう」

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!』』

銀八「はゝい。今回のアシスタントはソラです」

ソラ「天道ソラだ」

銀八「はい。相変わらずクールな人です。じゃあ早速質問コーナーいきます」

ソラ「ペンネーム『支配者』さんからだ、

『支配者』あゝ!まだイライラするゝ!!ダメガネの癖にゝ!!こ

うなったらこんな質問をしてやるっうう！！

なのはに質問

新八が裏で隠れて未来の貴方の事を『豚町魔王は』といっています。どうしますか？

セイバーに質問

新八が隠れて貴方の事『貧乳暴食ぐうたらダメダメ騎士王』と言っていました。如何してやりたいですか？

沖田とアリスに質問

新八が僕の小説では鉄八と言う変態になりました。そして新八が如何かその事で自分を弄ばないでくれと泣きながら頼んできました。如何しますか？

では……。『……明らかに新八に対しての嫌がらせだな……』

ソラは質問を見て呆れる。

銀八「それで質問された人たちの反応はあんな感じです」

なのは「新八君酷いのオオオオオオオオオオオ！！！！」

なのはは涙を流しながら新八にデイベインバスターをぶっ放した。

新八「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

セイバー「よくも言ったなエクスカリバー……………!!!」

金色の閃光が新八を飲み込む。

新八「うぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!!」

アリス「ほゝ。まさかお前がそこまでの変態に落ちていたとはな（黒笑）」

沖田「まさしく変態ロリコン眼鏡オタクザルでさア（黒笑）」

新八「いやアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

新八は精神的にかなりのダメージを喰らった。

新八「……………」

新八は身も心も完全にボロボロの屍のような状態になった。

ソラ「死んだか？」

銀八「たぶん生きてるだろ。じゃあ『支配者』さんは新八虐めもほどほどに。次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『ども…月光閃火だ。』

さてさて…次回はいいいよセフィロスが動くか…。というか…セフ

イロスって、原作のゲームを見てると何か『マザコン（ゲテモノ限定）』の気があるのか？…って思うのは、俺だけか？

輝刃「オイオイ…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・無縁に質問…というか忠告だ。お前はハーレムを目指しているようだが、この小説には“ソラ”と“銀時”という『最強フラグメイカーコンビ』が居るからハーレムは諦める。

だね…。例え惚れさせてもせいぜい1〜2人が限界だろうし。次は俺からだ。

2・近藤さんに質問…というか感想だ。黒龍に『シャルが好きになる訳がない』とぶつたぎられたが、俺は悪くねえと思ってるぜ？だって妙嬢ちゃんとシャルって似てるし…。

輝刃「確かに、『美人』だという所と『料理が壊滅的』だという所はそっくりだからな…。ま…シャルは妙嬢ちゃんと違って、ボコられる事が少ない分道は拓けてそうだがな…。……………ようし。じゃあ無縁とゴリラは答えろ」

無縁「じゃあ殺しておくか」

近藤「だからゴリラは止めてって言うてるでしょうがアア！！」

近藤は涙目になりながら講義する。

銀八「時間ねえからとつとと答えろ」

銀八の意見も一理あるので、近藤は“オホン”と咳き込んで言う。

近藤「すまないが俺はお妙さん一筋なのでな。だが、月光閃火さんの気持ちは快く受け取らせてもらっ

銀八「つつかそもそもシヤマルがお前に惚れる事がありえないからそんなに深く考えるな」

近藤「酷い!!」

銀八「じゃあ『月光閃火』さんは廊下に立っていないさい。次、ペンネーム『白黒』さんから、

『さて、質問です！

女性陣に質問・・ソラと銀時に着せたい物はこの内のどれですか？

？・戦国BASARAの伊達政宗の服装！

？・NARUTO疾風伝のうちはサスケの服装！

？・キングダムハーツ？のソラの服装！

では、次回頑張ってください！』……じゃああんま聞きたくねえけど、女性人答えろ」

フェイト・アリス・リリス・チェーン・セイバー

『『ソラには？（だな）（です）』』

ヤミ「ソラに？が似合います」

アリア「ソラに？……」

なのは・ライダー・シルバー

『銀さん（ギントキ）（銀時）は？が似合います（うぞ）』

アルフ「うん。ソラと銀時は？が似合うと思うよ」

銀八「はい。じゃあ『白黒』さんは廊下に立っていないさい。次、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『クッパ』質問なのだ『スカルに変身したマリオについてどう思う？』」

ルイージ「質問『仮面ライダーハーツについてどう思う？』」

ワリオ「質問『エリアの明久へのアプローチはどう思う？』」

次回を待ってます！……そうだな、スカルに変身したマリオはまさしく新たなスカルですね」

ソラ「そうだな。転生者を倒す所なんかはまさしくそうだな」

銀八「つで、仮面ライダーハーツはなんて言うか、ダブルのキングダムハーツバージャンって感じだな」

ソラ「変身している二人がキンハのキャラだしな」

銀八「最後はとりあえず腹立つから却下」

ソラ「相変わらずだな…」

ソラはモテている明久を見て嫉妬して質問に答えない銀八に呆れる。

銀八「じゃあ『鳴神 ソラ』さんは廊下に立ってなさい」

ソラ「次いくぞ。ペンネーム『真王』さんから、

『レオン』では質問を行くぞ。『作者は銀時達にどんな必殺技を出すかと?』」

真王「FF系かキン八系の技か…だな?」

ガレーナ「余も質問じゃ『扱ってみたい武器があったら申して見よ』」

「

真王「最後は俺『次のうちこのモンスターは嫌だ!ってのはどれですか?」

屍族・ゾンビキング(ゾンビ)

死骨族・スカルキング(骸骨男)

妖霊族・ファントム(ゴースト)

毒虫族・ベノムワーム(デカイ毛虫)

邪龍族・バハムート(ドラゴン)

魔道巨人族・マスターゴーレム(ゴーレム)

夜魔族・リリス(サキュバス)

猫娘族・バステト(ネコマタ)

死告族・デス(死神)

殺人機族・キラーマシンΩ(キラーマシン)

鳥女族・ハーピクイーン(ハーピィ)

魔蛇族・ラミアクイーン(ラミア)

人魚族・リヴァイアサン（マーメイド）  
龍人族・ドラゴンキング（リザードマン）  
邪鬼族・ギガス（オーガ）』それでは」

ガレーナ「さて、余もそちらに向かうか」

真王「なにしに行くの？」

ガレーナ「ユウカにお世話になったみたいだから余がお詫びをさせようと思ってな」

真王「その山のような樽を持つてか？」

ガレーナの後ろにはこれでもかといふ樽がある。

中身は何と酒。

真王「止めとけて、あいつらの胃袋はあんなの様に某幻想郷の鬼たちみたいに強くないから」

ガレーナ「酒だけじゃだめか？・・・そう言えばユウカが『このブルマ体操服をソラに着せて』といったたな。持っていくか」

真王「ソラがブルマって…見てはならないお稲荷さんがはみ出るからやめろ」

真王はそう言って行こうとするガレーナの酒樽積みの手押し車に体操服ズボンをこっそり入れる。

ガレーナはそうと知らず飲み比べに行くのだ。『……………屍族・ゾンビキング（ゾンビ）、死骨族・スカルキング（骸骨男）、妖霊族・ファントム（ゴースト）だ」

銀八「いきなり三番目答えちゃったよ！？」

ソラ「俺だけじゃ味気ないだろ。銀時も答えろ」

銀八「しかも何故かアシスタントのお前が仕切ってるし！！」

銀八は勝手に進めるソラにツツコミを入れる。

銀時「ソラと同じ」

銀八「これ以上はお前の好きにはさせないからな！1は黒龍、2はソラと銀時が答えろ！」

これ以上ソラの自由にさせたら自分の出番を取られると危惧した銀八は強引に話を進める。

黒龍「そうですね。ジャンプ系で、ブリーチの技とかですね」

ソラ「特にないな」

銀時「思いつかねえな」

銀八「はい。じゃあ『真王』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『ボッスン』さんから、  
『質問です。』

無縁は魔法少女リリカルなのはシリーズ以外の好きなアニメはありますか？もしありませんのなら答えなくてもいいです。

バナージ「今回は桂さんがあの秘密の部屋を見つけるんだな」

ニンフ「どうなるのかな？」

次回も楽しみにします。『……アイツに対しての質問か。じゃあ無縁答える』

無縁「そうだな。銀魂と戦国BASARAだな」

ソラ「ん？意外だな。てつきり美少女が多く出るヤツとか選ぶと思っただがな」

ソラは予想外の無縁の答えに不思議そうな顔をする。

銀八「まあそれには理由があるけど、ネタバレになるから言えません。じゃあ『ボッスン』さんは廊下に立ってなさい」

ソラ「ペンネーム『なっぺ』さんからだ、  
『なっぺ』じゃあ今回は最高級アワビと最高級マツタケをプレゼント」

吼太「へえ。案外マトモだな。変態のくせに」

ベス「（十分変態チックですけどね）」

なっぺ「いつも通り感想聞かせてね。でははこの辺で！」……  
コレ質問になるのか？」

銀八「良いんじゃないの。いつも通りって言うてんだし。じゃあ男性陣お願いします」

銀時「うまそうだな」

新八「やったアアアア！！最高級の料理だな」

ソラ「調理のし甲斐があるな」

近藤「じっくり食べたいぞ」

土方「たまには気の利いた事するな」

沖田「なっぺはただの変態じゃないみたいですなエ」

ユーノ「ありがとうございます」

銀八「はい。じゃあ『なっぺ』さん、美味しく頂かせてもらいます。次、ペンネーム『黒神』さんから、

『お妙

「この糞読者！！チ●コをもぎ取ってやるあああ！！」

黒神

「女がそんな事を軽々しく言つなボケエエエ！！」

ドカア！！

お妙

「ぐふあ！！」

とゴリラにバットで打ち返すように吹き飛ばす黒神。

だがお妙も強引に立ち上がって黒神を殺す気で向かう。

黒神

「ほーれ、シャマパイだ！！」

と黒神が思いつきり、怒り任せに現れたお妙に投げつける。

ベチャ！！

お妙

「おぎゃあああああああああああ！！」

あまりの不味さに断末魔の叫びを上げて、気絶して倒れるお妙。

黒神

「よし、何はともあれ一安し……」

と突如、お妙が光だして体に変化する。

光が収まると、何と本当に着物を着たゴリラに鳴ってしまった。

黒神

「……嘘オン？」

ゴリラ妙

「うほオオオオオオオ！！」

と興奮状態のゴリラ化お妙は、そのまま黒龍の所に戻った。

どうやら黒龍を黒神と見間違えたようだ。

黒神

「……とりあえず、サンクチュアリースト！！」

と、黒神はケンさんからもらった『サンクチュアリシステム』から  
白銀のレーザー砲を放ち、ゴリラ薫に直撃する。

ゴリラ妙

「ウホオオオオオオオオオオオオ！！！！」

と、レーザー光線を浴びて気絶したゴリラ妙は黒こげと鳴って倒れ  
ると、一瞬光に包まれて元の姿に戻った。

黒神

「やれやれ、危うく黒龍さんが危険な眼に合う所だった……てかなんでゴリラ化するの!？」

と黒神は、理由はともあれお妙にシャマパイを食べさせてはならないと確信する。

黒神

「では質問するか」

質問

凜へ

アーチャーは新八の事を侍失格を言いますが、凜もどう思いますか？

オタクメガネへ

なのはは銀時に特別な感情を抱いてますので、もう諦めたらどうですか？

以上です。』……こりやまたとんでもない質問だな……」

銀八は質問を見て呆れたような顔をする。

ソラ「とりあえず、質問された奴に答えさせろ」

銀八「それで、凧はどう思うんだ？」

凧「どう思っても何も、新八君が侍失格って、どう言う事？」

凧は新八がロリコンアニメオタクになった事を知らないので、首を傾げてしまう。

銀八「ああ、そっか。そう言えばお前知らなかったな。じゃあこれ見てみる」

銀八は前に黒神さんに贈られた手紙を凧に見せる。

その手紙には新八が一体どのような変態ロリコンオタク野郎に堕ちたかが事細かに書かれていた。

それを見た凧は顔を青くさせていく。

凧「人の物奪ってロリコンに堕ちるって……それも侍どころか人間として失格じゃない！」

完全にロリコンアニメオタクに堕ちた新八に引いていた。

更には人物奪ってロリコンに堕ちた新八に憤慨していた。

いつも不遇な扱いを受けても頑張ってきた姿を見て凧は新八に対して一目置いていたのだが、最早今の新八には関心する所が微塵もないと思った。

ソラ「完全に新八の評価が奈落の底だな」

これもう収集じゃつかないんじゃないかとソラは思った。  
そして2で質問された新八は…

新八「お前に心はあるのかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ア！！！！！！（血涙）」

散々ドSな質問を黒神さんにされた新八は血涙流しながらお妙の暗<sup>ダ</sup>  
黒物質<sup>クマター</sup>を黒神さんに投げる。  
更には…

お妙「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

感想でめちゃくちゃ酷い目に遭わされたお妙は腕に力を籠めて正拳  
突きをした。

すると、とんでもない衝撃波が黒神さんに向かって行つた。

銀八「志村兄妹の逆襲だアアアアアアアアアアアア！！！！」

銀八はその光景を見て顔を真っ青にさせる。

銀八「つつかお妙の何！？アイツなんで戦国BASARAの家康み  
たいな事ができんだよ！！！！」

確かに戦国BASARAの家康みたいに拳に気を溜めて衝撃波を出  
すと言う事ができるお妙は本当に人間なのかと疑いたくなってくる。

ソラ「まあアレにはさすがに怒るよな」

ソラはお妙が感想で黒神さんにシヤマパイぶつけられてゴリラにさ

れた事を思い出して納得する。

銀八「じゃ、じゃあ『黒神』さんは廊下に立つ前に、天国の入り口に立たないよう気をつけてください」

ソラ「次だ。ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』ふうー。では質問します。』

1 なのはに質問。貴方は怒るとデストロイモードになりますか？

2 セイバーに質問。貴方は暴食騎士王と呼ばれていますが、なんでそんなに太ってないんですか？外は太ってなくても中は太ってるんですか？

『以上です。』……………それで、どうなんだ？二人とも」

なのは「なりません！」

セイバー「体重までは言えませんが、前に体重を量った時には別段太っていませんでしたよ」

銀八「マジかよ！？」

セイバーはいくら食べても太らない体質らしい。

多くの女性に恨まれそうな体質だ。

銀八はもしこの事をなのは達が聞いたらセイバーにどれだけ嫉妬するか分らず、顔を青くさせる。

ソラ「じゃあ『白騎士君』さんは廊下に立て。次、ペンネーム『黄色いのなにか』さんから、

『今回の贈り物はライダーとフェイトには前回の贈り物に対して憂さ晴らしになのは&アリス1/1人形を差し上げます。これを使って相手を憎しみの思うままにしちゃっても良いですよ（黒笑）』

銀時に質問。前回の捏造写真の贈り物で怒り狂ったライダーを見てその後どうなりましたか？……また腹黒い奴がいたな……」

ソラはため息をつく。

銀八「それで、どうなったんだ？」

銀八はニヤ付きながら銀時に聞く。

銀時「いや、なんか怖いオーラ出して尋問してきた……」

銀時はあの時の事を思い出して顔を青くさせる。

物理的攻撃はしてこなかったのだが、黒いオーラ出しながら尋問してくるのは銀時の精神をガリガリ削ったので、ある意味攻撃してくるより辛かった。

銀八「はい、ライダーの威圧感はん端ないと言う事です。『黄色いのにか』さんは廊下に立ってなさい」

ソラ「今回はこれで終わりだな」

銀八「そうだな。次回はライホースがアシスタントです」

『真王』さんの所のキャラであるガレーナが大量の酒が入った樽を

持ってくる。

ガレーナ「おーい。お詫びに酒を持ってきたぞ」

銀時「お、じゃあ飲むか」

銀時が飲もうとするが、ガレーナが待ったを掛ける。

ガレーナ「その前にソラにこのブルマを履かせねばいらないのだが、ソラは居るか？」

ガレーナはブルマを出しながら聞く。

銀時「いや、なんでブルマ！？何上ソラにブルマ履かせなきゃいけないんだよ！？」

銀時がツツコミ入れる途中で黒龍が現れる。

黒龍「ソラなら居ませんよ。なんか用事があるみたいです」

ガレーナ「そうか、なら仕方ないな」

ガレーナはあっさりソラにブルマを履かせるのを諦めた。

銀時「そんじゃさっさとブルマの事は忘れて飲もうぜ」

ガレーナ「そうだな」

銀時にそう言われ、ガレーナは頷く。  
そして二人はジョッキを持って乾杯する。

その後、ガレーナは帰り、酒を飲みすぎた銀時は吐いていた。

ソラ「帰ったか？」

黒龍「はい。帰りましたよ」

ソラ「そうか」

ソラはメンドーな事が回避できた事に安堵する。

## 第十九訓：身近なとこにとんでもない秘密がある（後書き）

黒龍「今回も贈り物コーナーをします」

『鳴神 ソラさんからは銀時LOVEズに高校生な銀時の写真とソラLOVEズにサイボーグ009での009のコスチュームを着たソラの写真』、『なっぺさんからは最高級アワビと最高級マツタケ』、『黄色いのなにかさんからはライダーとフェイトにらしなのは&アリス1/1人形』

黒龍「贈っていただけありがとうございました」

なのは「このマツタケのお吸い物おいしいね」

フェイト「うん」

セイバー「このアワビもいけますね」

アリス「焼いてもマツタケはいけるな」

アリア「…美味しい」

リリス「ソラ様が料理したんだから当然です」

ヤミ「そうですね」

ライダー「材料も良いですから」

フェイト達に頼まれてソラが料理したアワビとマツタケを食べてい



## 第二十訓：FF7のセフィロスって最強じゃね？（前書き）

### 映画予告

――時は戦国時代。

――それは戦乱の世。

――その戦乱は多くの悲しみと虚しさを生んだ。

――天下を後一步の所まで治めかけた天下人『八神はやて』。

――だが、一歩手前で奥州筆頭『フェイト・テストロッサ』に敗れた。

――それはまた新たな戦乱を生んだ。

――奥州に闇あり。

ピンク色の髪にポニーテイルで、戦国BASARAの石田三成の格好をした女性が奥州に来ていた。

それはある目的を果たすため。

それを迎え撃つは……。

フェイト「一人でrevengeとは良い度胸だね、八神の残党」

『奥州筆頭フェイト・テストロッサ』。

戦国BASARAの伊達政宗の格好をしたフェイトが微笑を浮かべ

ながら馬に乗って崖の上から八神軍の残党、『凶王シグナム』を見る。

シグナム「貴様かア……」

シグナムは刀の柄を握りながら呟く。

シグナム「我が主よ。あなた様の仇たるこの女を斬滅する許可を！  
！」

シグナムは飛び上がってフェイトに居合いを喰らわせる。

――川中島に光あり

スバル「絆の力でこの日の本を統一すべく、この心を固めた次第」  
バリアジャケットの格好のスバル・ナカジマが拳を握り締める。

ヴィヴィオ「スバル・ナカジマ……！」

それを驚いてみるのは大人バージョンで聖王の鎧の格好をしたヴィヴィオ。

――関ヶ原に陰謀あり

新八「ヒヒヒ……全ては義のため少女のため」

セフィロス「フツ……まもなく全ての用意が整う」

座布団に乗って怪しく笑う『ロリコン志村新八』と微笑を浮かべる



スバル「天下とは思うより遥かに大きく、重いものだから」

腕を組んで言うスバル。

『君子凶殉シグナム』

シグナム「私は貴様を犯した罪を許さない！！ フェイト・テスト  
ロツサアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

空に向かって怒りの言葉を叫ぶシグナム。

劇場版リリカルB A S A R A I T h e L a s t P a r t y -

フェイニヤン「皆、見に来てね／＼／＼フェイニヤンも待ってるニ  
ヤン／＼／＼」

ネコ耳とネコの尻尾を付け、ネコの手の着ぐるみを着け、スクール  
水着を着た大人フェイトが恥ずかしそうに宣伝する。

セフィロス「フェイニヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
！！！！」

大ヒット公開中

銀時・新八

『『つて、なんじゃこりやアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！』』



銀時「恥ずかしいなら止めるよお前！」

第二十訓：FF7のセフィロスって最強じゃね？

セフィロス「さア、お前達に絶望を贈ろう」

セフィロスは両手に長刀を持つ構えから片手に持つ構えに変えてソラと桂に向かう。

二人は攻撃に備えて自分の得物を構えている。

シュツ！

ソラ・桂

『『ツ！』』

二人は目の前でセフィロスが消えた事に一瞬だけ驚く。

そしてセフィロスはいつの間にか二人の後ろにいた。しかも、長刀を一閃したかのようなポーズになっている。

それと同時に……

ズザザザザザザザザザザザザザザザン！！

と二人にいくつもの斬撃が襲い掛かる。

しかもそれは数とスピードが尋常ではなく、常人ならば簡単に無数

の切り傷が出来ていただろう。

しかしソラと桂は持ち前の反射神経と戦いの経験は伊達ではないので、二人は高速で木刀と刀を振って全てガードした。

セフィロス「ほう。アレ防ぐとは……中々やるな」

セフィロスは驚くよりも関心したように言う。しかも面白いのか笑みすら浮かべていた。

ソラ「まあな……！」

ソラは後ろに振り向いてすぐに物凄いスピードで距離を詰め、上から木刀で斬ろうとするが、セフィロスはその攻撃を長刀でいなしてそのまま反撃する。

ソラ「くッ……！」

セフィロス「フッ……」

セフィロスは神速とも呼べるようなとんでもない速さで右に左に上に斜めにと長刀を振るう。

時たま体を回転させて振ったりもしている。

人一人ほどあるあの長い刀をここまで縦横無尽に扱えるとは、感嘆の一言に尽きるだろう。

しかも、長いから攻撃範囲が広く、しかも一撃一撃がかなり重い。

セフィロスの連撃があまりにも速く、鋭いのでソラは若干押され気味になっている。

桂「はアアア……！」

だがそこで桂が横からセフィロスに刀で切りつけようとする。

セフィロスはソラの攻撃を止めて、長刀で桂の攻撃を防ぐ。

ソラはセフィロスの攻撃が止んだので、一旦後ろに距離を取る。

セフィロスは長刀を振って桂を後ろに下がらせる。

セフィロス「もう少し楽しませてくれると思ったのだがな……」

セフィロスは自分が思っていたより二人が弱いと感じたのか、残念そうに言う。

ソラ「悪いな。夜中に起こされてまだ本調子じゃなくてな」

ソラは微笑を浮かべながら軽口を叩く。

桂「これで我らの力を把握したと思わない事だな」

桂も刀を構えながら睨みつける。

セフィロス「そうか。ならすぐにでもお前達の本気が見たいものだ」

セフィロスはそう言って、ソラと桂を右から横薙ぎに斬り付ける。

ソラ「くッ！」

桂「ぬう！」

二人は木刀と刀でガードするが、少し体が宙に浮いてしまった。そこにすかさずセフィロスが飛び上がり、桂に幾つもの斬撃を繰り返す。

出す。

桂は空中でバランスを取りながらセフィロスの攻撃を防ぐが、顔は険しくなっていく。

そこにソラが横からセフィロスを木刀で斬り付け、セフィロスは長刀で防いで少し後ろに飛ばされる。

桂「すまぬソラ！」

ソラ「礼言う暇があったらアイツに集中しろ」

桂は礼を言い、ソラは視線を逸らさずにセフィロスを睨み付けながら木刀を構えていた。

セフィロス（少し試してみるか……）

セフィロスは構えを解く。

ソラ・桂

『？』

ソラと桂は怪訝な顔をする。

そんな二人を尻目にセフィロスは何かを呟くと、セフィロスの足元に魔方阵が現れる。

そしてセフィロスの周りに四つの巨大なクリスタルが現れる。

それは赤、青、緑、黄色とそれぞれ色の違うクリスタルが宙を浮いていた。

桂「アレは……！？」

ソラ「……」

桂は若干驚き、ソラは眼を細める。  
さすがの桂も見た事のない力を見せられたのだから、驚くのも無理はないだろう。

これはセフィロスの『召喚魔法』である。

セフィロスはこの魔法で四つのクリスタルを呼び出したのだ。

セフィロスは腕を長刀を持っていない手を振り上げる。

セフィロス「行け」

セフィロスがその言葉と同時に手を振り下げると、四つのクリスタルはソラと桂に向かって行く。

ソラに赤と黄色のクリスタルが、桂に緑と青のクリスタルが飛んで行く。

ソラと桂はそれぞれ応戦する。

赤のクリスタルは体から炎を出してソラを襲う。

ソラは咄嗟に避けると、狙っていたかのように黄色のクリスタルが電撃を放つ。

ソラ「ッ！」

ソラはこれもしゃがんでギリギリの所で避ける。

ソラ（色によって攻撃が違うのか……）

ソラはクリスタルの攻撃を避けながら分析する。  
どうやらクリスタルは色によって攻撃の仕方が違うようだ。

とすると、桂の方はどうだろう。

桂の方には青と緑のクリスタルが行った筈だ。

青は攻撃が大体予想できるが、緑の予想ができない。

ソラ（ツラの方はどうなって――）

着になったソラは桂の方に視線を向ける。

桂「はアア！！」

桂は青のクリスタルから飛んで来た氷柱のように尖った氷を木刀で砕く。

桂「くッ！」

そして緑のクリスタルから放たれた緑色の光線と言うか、ビームを避ける。

ソラ（ビームか……）

ソラは緑のクリスタルが何を出すのか分かったので、自分の戦っているクリスタルに視線を戻す。

その時、炎と雷が同時に来たが素早く避けた。

桂とソラは避けているだけで何もしなかった。

それを見ていたセフィロスは方眉を上げて不思議そうな顔をする。

セフィロス（何故攻撃をしない？）

セフィロスがそう考えている間にソラと桂は互いに背中合わせで立つ形になっていた。

桂「ソラ……お前そろそろ体が温まった頃じゃないか？」

ソラ「お前もだろ」

二人そう言い合った後、口元に笑みを浮かべる。

その後にソラは開いた片方の手に『キープレード』である『チェイン』を出す。

ソラ「フッ！」

桂「ハッ！！」

バリン！ バリン！ バリン！ バリン！

ソラは木刀で赤を、チェーンで黄色を破壊した。

桂は刀を素早く振って青と緑を破壊した。

クリスタル達は二人の剣を振るスピードがあまりにも速かったので、避ける暇がなくあっという間に壊されてしまった。

その光景にセフィロスは少しだけだが驚きの色を見せていた。

それは別にクリスタル壊された事ではなく、ソラのチェーンを見て驚いていたのだ。

セフィロス「キープレード……」

ソラ「なんだ、知ってるのか？」

セフィロスの呟きを聞いたソラが興味深げに聞く。

セフィロス「フツ……それなりにな」

名前までは言えないが、自分の知り合いにキープレードの事を聞かされた。

キープレードの事を聞いた時はとても興味が沸き上がり、一度いいから実物を見て見たいと思った。

まさかこんな場所できいきなりキープレードが見れるとは思わず、つい驚いてしまった。

セフィロス（今日の私は幸運らしいな……）

セフィロスは喜びを隠し切れずについ微笑を浮かべてしまう。

ソラ「なんだ？ いきなり笑って？ 気持ち悪いな」

ソラはセフィロスの様子に少し引いてしまった。

セフィロス「フツ……見たいと思っていたものが見れたのだからな」

ソラ（そんなにキープレードが見たかったのか…？）

ソラは怪訝な顔でセフィロスを見ていた。

ソラは特にセフィロスがキープレードを知っている事については驚いてはいない。

ここは異世界なのだから、キープレードを知っている奴がいてもおかしくないからである。

だが、見てつい薄ら笑みを浮かべるほどキープレードは価値有る物なのか？とソラは思ってしまった。

ソラ自身はキープレードがどれだけ価値があり、どれかけ凄い物なのかに対して少々無頓着なので仕方ないだろう。

セフィロス「それにしても……」

セフィロスは笑みを止めて言葉を区切った後、関心したように言う。

セフィロス「本当に本調子ではなかったようだな」

セフィロスは自分の召喚したクリスタルが壊された事で確信した。ソラがさっき言ったように二人は本調子ではなかったのだ。

クリスタルの攻撃を避け続けていたのはクリスタルの動きを分析するためもあるだろう。

だがもう一つ理由があり、それが本調子ではない理由と言う事だ。

ソラ「仕方ないだろ。こっちはこんな夜中にさっき起こされたからな」

桂「だが、今は体が十分に温まった。これからが本当の勝負だ！」

二人はさっき起きたばかりで、しかも夜中と言う本来人間が起きない時間になった。

そんな状態では戦いになっても中々本来の実力を出せるようになるには時間が掛かるだろう。

セフィロス「フッ……楽しめそうだ」

セフィロスは自分が良くするいつもの構えを取る。

ソラと桂も構えを取る。

ソラと桂は不調。セフィロスは遊び。  
だがそれがなくなった。まアセフィロスはまだ遊び半分かもしれないが……。

とは言えここからが……本気の戦いの始まりなのだ。

バツ!!

互いは同時に相手に突っ込んだ。

ガキイイイイイン!!

両者の得物がぶつかり合い、甲高い音と火花が散る。  
互いに自分の武器をぶつけ合っていると言う押し合い状態になり、  
刀と長刀とキープレードが擦れる度に火花が出る。

そして両者は一旦離れ、そして今度は斬撃の応酬となる。  
剣と木刀がとんでもない速さでぶつかる。

二人が本調子に戻ったとはいえ、セフィロスの剣速は神速の如く速く、二人のスピードよりも若干速い。

だが、ソラと桂は二人でその差を埋めているので、押されてはいない形になっていない。

ガキン！ ガキン！ ガキン！ ガキン！

互いの剣がいくつにも増えていると錯覚させるような残像を生むほど素早く剣を振る両者。

こんな凄まじい戦いはそうそう見れないだろう。

そして互いに距離を置く。

桂はフーッと息を吐く。

桂（二人がかりで互角……いや、こちらが若干押されているな）

桂は汗を流す。

正直言つて目の前のセフィロスと言う男は自分の想像以上の実力者だと改めて実感する。

そして横目でソラを見る。

桂（それにしても……ソラの二刀流を見るのは久しぶりだな）

ソラは普段木刀一本で戦っている。

だがソラの本来のスタイルは二刀流なのだ。

ただし二刀流になるのはそうそうない。ソラ自身が強いので、中々二刀流を使う機会がないとも言えるが、ソラは本気の時や相手がかなり強敵でない限り二刀流を使わないのだ。

つまり今二刀流で戦っているソラは本気だマジと言う事だ。

そこからもセフィロスがかなりの強敵なのだだと実感させられる。

桂（俺も死ぬ気で行かなければ、すぐにあの世いきだな）

桂は改めて気を引き締めて刀を持つ手に力を入れる。

セフィロス「フッ……面白くなってきたな。なら、これはどうだ？」

セフィロスはソラに足に力を入れて飛ぶようにソラに向かっていく。

そのままセフィロスは上空に飛ばすように長刀をソラに振るう。  
ソラは木刀で防ぎ、身体は宙を浮く。

セフィロス「八刀一閃！」

セフィロスはそう言うと、ソラにスピードと重さと鋭さの三つが全て最高峰に達したような斬撃を空中で浴びせる。

その数は全部で八回。

ソラはなんとか木刀とチェーンで防ぐが、防ぎきれずにいくつか身体に切り傷を作ってしまう。

そして最後の一撃で地面に叩きつけられる。

ズドン！！

ソラが地面に叩きつけられると同時に地面が砕け没落し、土煙が上がる。

桂「ソラアアア！！」

その光景を見て桂が叫ぶように声を上げて、ソラの落ちた地点に走る。

ソラの安否を確認したいが、煙が邪魔でソラの姿が見えない。

桂「無事かソラ！？」

ソラ「そんなに大きな声を出すな……大丈夫だ」

桂が声を上げてソラに呼びかけると、煙の中から頭から血を流しているソラが出て来る。

服もボロボロになっているが、さほど大きなダメージを受けている

様子はなかった。

ソラ「おい、後ろ」

桂はソラに言われ後ろを振り向くと、セフィロスが上段から長刀を降り下げてきた。

桂「くッ！」

ガキン！

桂は刀で防いだ。

そして刀を振ってセフィロスを力づくで後ろに下がらせる。

桂「ソラ！ もう少し必死に言ってくれないか！？ 今のは危なかったぞ！」

危機的状況にも関わらず、声を上げないソラに桂を講義する。

ソラは何も言わずにセフィロスを見ている。

桂（とは言え……まあ仕方ないか……）

桂は諦めたようにため息をついてこれ以上何も言おうとはしない。

こう言う場面は昔から良くあるからである。

ソラは昔からよほどの事がない限り声を荒げたり、大きな声を出さないタイプなのだ。

幼馴染の桂もそれが分かっているので、深くは文句を言わないのだ。

セフィロス「驚いたな。それなりに本気は出したつもりなのだが」

ソラ「ならもう少し驚いた顔くらいしたらどうだ？」

さほどダメージを受けてないソラを見て残念そうに言うセフィロスにソラは目を細める。

セフィロスは“フツ”と笑みを零す。

セフィロス（しかし、八刀一閃を受けても平然と立っていていられるとは、予想以上に楽しませてくれる）

自分の実力を過信しているワケではないが、自分の実力はかなり高いと自覚している。

いつも戦う敵をほとんど一撃で倒し、秒殺し、圧倒してきた。

それは自分に虚しさを与えていった。

昔自分と互角の勝負が出来るほどの相手がいた。だが、その者とはもう会えないだろう。

だが、今自分の目の前には自分と渡り合える相手がいる。それだけで自分の中の細胞が、心が、魂が、歓喜しざわめいている。

それはこの上なく嬉しかった。

こうやって加減しないで戦えるのは楽しいと改めて実感した。

セフィロス（『奴』の言ったとおり、中々の実力だな。『狂乱の貴公子』や『黑夜叉』と呼ばれるだけはあるな）

とある人物にソラと桂の事は聞いていた。

こんな場所で会えるとは思ってもよらなかったが、それはそれで良い。今は目の前の敵に集中すれば良いのだから。

セフィロス（さて、どこまで楽しませてくれるだろうな？）

今はまだまだ本気を出していない。

例え楽しくても無闇に全力を出して自分の力を見せるのは愚行だ。全力を出しても良いのだが、これからの目的のためにもあまり自分の実力を他人に晒すのは良くないだろうと考えたからだ。

セフィロス（とはいえ、もう少し遊んでも良いだろう）

セフィロスは背中から黒い翼を出す。しかもそれは二翼一对ではなく――片翼だった。

ソラと桂はセフィロスが翼を出した事に一瞬驚くが、すぐに警戒して自分の得物を構える。

セフィロスは翼をはたかせて空中に浮く。

セフィロス「――黒羽」

と呟くと翼をはたかせ、マシンガンのように羽をソラと桂に向かって飛ばす。

羽なのにまっすぐかなりのスピードで二人に飛んでいく。

ソラと桂は素早く刀と木刀とチェーンを振って羽を防ぐ。

ガキキキキキキキキン！！

羽と刀とチェーンがぶつかり合い、鉄がぶつかるような甲高い音が幾つも鳴る。

桂は羽を防ぎながら内心では驚いていた。

桂（なんだこの羽は！？ まるで鉄のように硬い！ それにこのスピードは！）

羽とは思えないくらい硬い。しかも自分達に当たらない物は地面に刺さっているのだ。それはまるで鋭利な刃物のようだった。

セフィロスの使った技である『黒羽』は自分の羽一枚一枚に魔力を付加させて強度と鋭さを強化して羽を相手に向かって撃つ技なのだ。しかもそれだけではない。

ソラ「おいおい。羽に意思でもあんのかよ……」

ソラと桂の周りを防がれなかった羽が囲むように浮かんでいるのだ。その理由はセフィロスの魔力が付加されているので、誘導弾のように自由に操れる。

ソラと桂は剣を構えながら背中合わせに立っている。

そしてセフィロスが手を振ると一斉に羽が二人に向かって行った。

ズダダダダダダダダダ！！

あまりの威力に土煙が上がる。

そして全ての羽を撃ち終わるとセフィロスは地面に降り立ち羽を消す。

その時……

桂「はアアア！！」

と煙の中から桂が出て来て刀を振るって突っ込んでくる。

セフィロスはそれを長刀で防ぐ。  
セフィロスを後ろからソラがチェーンを横薙ぎに振って斬ろうとする。

それをセフィロスは長刀を持つ手を片手に変え、手を出した後にバリアのようなシールドを出して防ぐ。

セフィロス「ほう……」

ソラ「ちッ」

セフィロスは関心したような声を出し、ソラは舌打ちをする。  
まさかバリアを使ってくるのは予想外だったので、つい舌打ちをしてしまったのだ。

そしてセフィロスは瞬時に自分の後ろに回りこんだソラに関心の声を漏らす。

セフィロス「フッ……中々のスピードだな」

ソラ「……………」

ソラは無言で距離を取り、桂も距離を取る。

セフィロスは魔力でシールドを作る事ができるので、例えば長刀が使えなくても相手の攻撃を防ぐ事ができるのだ。

それにセフィロスとしても一人が気を引いてもう一人が隙をついて攻撃してくると言う戦法はしてくるだろうとあらかじめ予想していたので、簡単に対処できたのだ。

セフィロス「次はこちらの番だ」

セフィロスはそう言い刀を振るうと、三日月型の六つの斬撃が縦一列にもの凄い速さでやって来る。

ソラ・桂

『『ツ！』』

二人は咄嗟にその斬撃を体を捻って避けようとするが服に当たってしまい服に切れ端ができる。

そして斬撃はそのまま壁を切り裂いて貫通してしまった。

さっきの攻撃は例え達人の目にも一回だけ剣を振ったようにしか見えないだろう。

だが実際は剣を六回振っている。

つまり恐ろしいほどセフィロスの剣を振るスピードは速いと言う事だ。

だが、ソラと桂は達人を超えるほどの実力者。

かなりぎりぎりだが、セフィロスが刀を六回振る所は見えた。

とは言え、二人の目には振った手が残像のようにしか見えなかった。

ソラ（刀を振るにしても速すぎだな）

ソラは内心セフィロスの剣のスピードには関心していた。

まさしく神速を超えるスピードだ。

これはセフィロスの剣の腕は達人を超えるモノだと認識せざるおえない。

そしてセフィロスは自分の斬撃によりでっかい切り傷ができた壁を見ていた。

セフィロス（さすがにやり過ぎたか。後でプレシアに何を言われるか分からんな）

セフィロスとしてはまだ本気を出していないのだが、これ以上を力を出してしまえば時の庭園が壊れかねない。

そうなれば自分の目的も果たせなくなってしまう。

もう少し力を抑えて戦おうとセフィロスは考えた。

桂「よそ見とは余裕だな！」

セフィロスが考え事をしている時に桂が斬りかかる。

セフィロスは長刀で防ぎながら“フッ……”と笑みを零す。

セフィロス「なアに。私にも色々と事情があるのでな」

桂「そうか！」

と桂は言って、そのままセフィロスに絶え間ないほどの連撃を浴びせる。

桂「はアアアア！」

凄まじい速さで刀を振るい、上に右に左に斜めに斬り付ける。

セフィロスはそれを全て防ぐが、桂の攻撃があまりにも激しく反撃する暇がなかった。

そんな状況にもセフィロスは微笑を浮かべ、楽しんでいるようだった。

セフィロス（凄まじいな。だが、長くは続かないだろう）

さすがにここまで猛攻。  
いくらなんでも体力が持たないはずだ。防ぎきっていればさすがにスタミナの限界が来る。

セフィロスは桂のスタミナが切れるのを待っている時……。

桂「今だ!!」

セフィロス「？」

桂は声を上げセフィロスから距離を取る。

その後すぐに炎と雷を纏った×字の斬撃がセフィロスを襲った。

セフィロス「！」

ドカアアアアアア!!

斬撃がセフィロスに直撃し、爆発が起きる。

桂「良くやったなソラ」

桂は、頭にクワガタのような大きな金色の角が二本生え、赤い瞳に金色の装飾がされた赤いプロテクターを身に着けた異形『クウガラ イジングマイティフォーム（これからはクウガRMと記述）』に変身したソラに近寄る。

クウガの手にはキープレードである『チェーン』と金色の装飾がされた赤い刀『ライジングマイティブレイド』を持っていた。

これはクウガRMが木刀を変化させて作った刀だ。

さつきセフィロスに浴びせた攻撃はクウガが更なる力である金色の力を纏った時にできる必殺技のような攻撃なのだ。

原作のクウガではこの攻撃をしないのだが、侍であり二刀流の使いであるソラだからこそできた技なのだ。

この技は二本の剣に雷と炎の力を溜めて×字に放つ技で、その威力はまさしく必殺技と呼べるほどの代物だ。

まあ名前はないのだが、その威力やSS以上はいくのだろう。

クウガRM「まあお前が時間稼ぎしてくれたしな」

クウガはそう言って、『ライジングマイティ』の姿から『クウガマイティフォーム（これからはクウガMと記述）』に戻る。

リリースとユニゾンすればいくらでもライジングになれるのだが、今はリリースがないので30秒〜1分くらいかなれない。

だから桂が絶え間ない連撃でセフィロスの注意を引いている間にソラが変身して、さっきの斬撃を放つと言う作戦を取ったのだ。そしてそれは見事に成功した。

桂「やったと思うか？」

桂はセフィロスがいるであろう煙が上がる場所を睨み付けながら聞く。

クウガM「さあな」

クウガMとしてもさっきの攻撃で終わってくればありがたいのだが、相手は信じられないくらいに強さを持ったセフィロスである。さっきので終わったとは考えられなかった。

そしてその考えは正しかった。

セフィロス「まさかそんな隠し玉があるとはな……」

セフィロスがコツコツと靴音が立てながら煙から出て来た。  
しかもそれだけではない。

桂「無傷だと!？」

クウガM「少しは喰らってくれても良いだろ……」

そう、セフィロスはほぼ無傷だった。服に多少は汚れがあるくらいで、ほとんど無傷に等しい状態だ。

今の攻撃を喰らっても平然としているセフィロスに桂は驚愕し、クウガMは少し落胆したように言う。

セフィロス「キーブレードを使うだけではなく、そのような姿になれるとは、ますます面白いな」

セフィロスは微笑を浮かべながら長刀を振って周りの煙を払う。

クウガM「俺は全然面白くないな」

クウガMはそう言いながらチェーンと刀を構え、桂も構える。

セフィロス「……」

クウガM「……」

桂「……」

そして少しの沈黙が流れ、セフィロスが長刀を消す。  
ちなみにしまったのではなく、手から消したのである。

クウガM・桂

「『?』」

二人はセフィロスの行動に訝しげな顔をする。  
そしてセフィロスが自分の行動の理由を話す。

セフィロス「充分に楽しませてもらった。それに、これ以上やって  
はこの場所がもたないだろうからな」

今のセフィロスには敵意も殺気も感じられなかったのでクウガMは  
変身を解き、桂も刀を納刀する。

確かにセフィロスの言うとおり今の玉座の間はさっきの戦いのせいで  
所々ボロボロである。

最後にソラがやった一撃もあり、これ以上戦闘は続行できないだろ  
う。

だからこそソラと桂は構えを解いたのである。

そしてソラがセフィロスに最初——戦う前にした約束の事を聞く。

ソラ「さっき言ったとおり、フェイトとそっくりなガキの事について  
教える」

ソラの言葉を聞いてセフィロスは少し可笑しそうにする。

セフィロス「フツ……あの人形にそっくりか……それは言葉としては正しくないな」

セフィロスの言葉を聞いてソラは訝しげな顔をする。

ソラ「どう言う意味だ？」

セフィロス「あの娘があの人形に似ているのではない。『あの人形があの子に似ているのだ』」

ソラ「ッ！……なるほどな」

ソラはセフィロスの言葉を聞いて一瞬驚いた後、何かに気づく。  
セフィロスが何故フェイトの事を人形と呼んでいたのかも、フェイトがプレシアを怯えていたのかも、プレシアが何故実の娘に対してあのような『忌々しい物』を見るような目で見ていたのかも全て納得した。

ソラ（あのフェイトそっくりのガキを見て薄々感づいていたが……まさか当たるとはな……）

桂「ソラ？ 一体何が分かったのだ？」

桂はソラが何に気づいたのか分からず質問する。

ソラは一度息を吐いて、桂にも分かるようにセフィロスに声を掛ける。

ソラ「フェイトは……あのガキのクローンなんだろう？」

セフィロス「フツ……頭の回転が早いな」

桂「なッ!!」

セフィロスは微笑を浮かべ、桂は驚愕の顔をする。  
そして詰め寄るようにソラに聞く。

桂「それは本当なのかソラ!? フェイト殿があの娘のクローンだ  
と言うのは……!!」

ソラ「ああ。俺の予想が正しければな」

ソラは冷静に返す。

桂「いやだが、あの娘がフェイト殿の双子の妹か姉と言う可能性も  
否定できんぞ!!」

桂の言葉をソラは首を横に振りながら否定する。

ソラ「確かにフェイトの姉か妹って可能性もあるが、プレシアのフ  
ェイトを見る目はどう見たって娘を見る目じゃない。それはお前も  
気づいていただろ?」

桂「あ、ああ」

桂もプレシアがフェイトに対して剥ける眼差しが娘ではなく忌々し  
い物を見るような目だと言う事は薄々気づいていた。

ソラ「それにフェイトからは一度も姉妹がいるなんて事は聞いた事  
がない。それに、アイツのさっきの言葉がフェイトがクローンだっ  
て事を教えているしな」

桂「……………」

桂はもう否定する言葉がなく、顔を俯かせて認めた。フェイトがクローンであると。

家族が死んで言いづらかったと言う可能性もあるが、あのフェイトそっくりの子供とフェイトと一緒に写っている写真が一つもなかった。

そこから考えても『あの子』はプレシアとフェイトの写真ではなく、プレシアと本当のプレシアの娘の写真と言う事になる。

そしてソラと桂の疑問に答えたセフィロスは自分の足元に魔方陣を展開させる。

それに気づいた桂とソラがセフィロスに視線を向ける。

セフィロス「お前達の疑問には答えた。私は帰らせてもらおう」

今セフィロスが使っているのは転移魔法である。

此処から去ろうとしているセフィロスに桂が声を上げて呼び止める。

桂「待て！ お前にはまだ聞きたい事が山ほどある！！」

セフィロス「悪いが、私にも私の事情があるのでな」

つとセフィロスが言うと同時にセフィロスは消えた。

桂「くッ！ 逃がしたか……！」

桂はセフィロスを取り逃がし苦虫を噛んだような顔をする。  
もうセフィロスを追う事は無理だと判断した桂は一息ついて、ソラ

に顔を向ける。

桂「……まさか、フェイト殿がお前やアリスやアリアのような境遇だっとはな……」

桂は浮かない顔をする。

ソラとアリスとアリアもフェイト同様に作られて生まれた存在なのは桂も昔ソラから自分の出生の話を聞かされているので知っているのだ。

そんな桂の言葉にソラはフェイトの元になったであろう子供が居る部屋を眺めながら……。

ソラ「ああ、そうだな」

どこか気の抜けた静かな返事をするのだった。

余談だが、

プレシア「これはどう言うことなのオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

と半壊状態のボロボロになった玉座の間を見て朝プレシアがとんでもなくでかい声を上げて、みんなが跳ね起きたとか……。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はい。今回のアシスタントは前回言ったとおり最近まったく出番がなく、読者に忘れかけられているライホースです」

ライホース「なんだその紹介の仕方は！？何故そこまで悪意ある紹介ができるのだ！？私だってその事については少しに気にしてるのだぞ！」

質問コーナーとは言え、久々の登場なのに思いつきりにしてる事を言われて銀八にツツコミを入れるライホース。

銀八「良いだろ。本当の事だし。じゃあ質問コーナーいくぞ。ペンネーム『白黒』さんから、  
『それでは質問です。』

セイバーと神楽に質問です。

この大食らいで勝てる相手はいますか？

？ドラゴンボールZの孫悟空

？星のカービィのカービィ

？NARUTOの日向ヒナタ（実は、隠れ大食らい）

？ポケットモンスターのカビゴン

？ワンピースのルフィ

セフィロスに質問つうかお願いします。

もしよろしければ、マイクの前に立ち思いっきり叫んで下さい。』  
……いや、セフィロスが大声だすのか？」

銀八はあのどこまでいってもクールなイメージしかないセフィロスが大声を出す姿が想像できなかった。

ライホース「とりあえずまず1の回答だ」

神楽「んー私はお腹一杯食べれば良いネ。まあ勝負するとしても  
どいつとも負けるつもりはさらさらないネ」

セイバー「私は自分が満たされるまで食べただけです。それに食  
事とは決して勝負するものではないので」

神楽もセイバーも食事は自分の空腹を満たし楽しむものなので、誰  
に勝つとかそう言う勝負感覚は持ち合わせていないらしい。

銀八「つうか、あのダブル大喰らいのせいで今の万事屋は火の車だ  
けどな」

ライホース「まったくだ…」

ライホースは今の万事屋の家計の苦しさを思い出したため息をつく。



しかも…

ビリリリリリリ…ガシャン…!!

あまりの声のでかさにモニターが壊れてしまった。

そしてセフィロスボイスをなんとか耐え抜いた二人は耳を抑えながら言う。

銀八「……………い、いててて！なんつう大声出すんだよアイツ!？」

ライホース「……………さ、さすがに予想外だった…」

二人は頭を抑えながらなんとか質問コーナーを再開する。

銀八「…じゃあ『白黒』さん、今のがセフィロスの叫び声です。次、ペンネーム『真王』さんから、

『アリア』早速質問よ。『こっちのリリカル銀魂の主人公は銀時？それともネプテューヌ？どっちだと思う?』」

ザック「次はおれからだ。『お前らって夢ってあるのか?』」

ムツリ「……………『好きな人がばったりと着替え室で出くわしたらどうする?』(鼻血でてる)」『……………それはもちろんネプテューヌです!』」

ライホース「いや、ここは二人が主人公と言うべきじゃないか?」

至極当然の事言うライホースの言葉を否定する。

銀八「ふざけんな!あんなハーレム野郎を誰が主人公と認めるか!」

ライホース「まったく…」

あつちの銀時に嫉妬する銀八にライホースは呆れる。  
次に2に答える。

ライホース「私の夢は主達の平穏な暮らしだ」

銀八「俺の夢は全ての甘味を食す事だ」

アリス「ソラと結婚する事だ」

二人の後ろで何故かアリスが自分の夢を言う。

ライホース「……ん？今、誰か自分の夢と言うか欲望を言わなかったか？」

ライホースは後ろを振り向くが誰もいなかった。

銀八「気のせいだろ。っで、3だけとお前のようにならないから」

ライホース「たぶん驚くな」

銀八「じゃあ『真王』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『なっぺ』さんから、

『なっぺ』喜んでたから別にいいや。今回はマール様をプレゼント。女の人がマール様を擦り続けると【最高級】という言葉がくだらなく感じるほど美味しい牛乳が飛び出るから、頑張ってね」

ベス「かなりアウアウですね」

なっぺ「マーラ様はマーラ様だし、牛乳だから問題ない。男性陣はいつもどおり感想聞かせてね。ではではこの辺で!」『……………な、なんだこの卑猥な生き物は!?!』

ライホースはマーラ様見て気分を悪くする。

なにせ見た目が緑色の口がついたまんまチンコみたいな生き物なのだ。正直気色悪いの一言だ。

どんな姿か分らない人は『マーラ様』とグーグルで検索すると出てくる。作者的には見ない事をお勧めします。これを見た男性陣の反応は予想通りだった。

ソラ「気色悪いな」

銀時「ぎゃアアアア!?!なんつうもん贈りつけてんだ!?!」

新八「悪趣味にもほどがあるでしょ!?!」

近藤「なんだこの化け物は!?!」

土方「卑猥にもほどがあんだろ!?!」

沖田「うわ、気持ち悪」

ユーノ「ちよっ!?!なんですかコレ!?!」

銀八「まあ見たら気持ち悪いよな」

ライホース「そうだな」

銀八「じゃあ『なつぺ』さん、この卑猥を絵に描いたマーラ様は贈り物コーナーの後に自動的に贈り帰すんで、そっちの女性人にでもなんとかしてもらいなさい」

ライホース「お前もお前で充分悪どい事してるぞ!!」

ライホースのツツコミを無視して銀八は続ける。

銀八「次、ペンネーム『支配者』さんから、『フェイトに質問』

新八が隠れて他のリリカル銀魂小説の大人のあなたの事を『嫉妬まみれのアバズレ』と言っていました。如何しますか？

土方へ質問

新八が貴方の事を『エロ方ニコ四朗』、『変態トツシーマン』と言っていました。どうか斬ってやって下さい。(笑)

カマツ子倶楽部の皆さんへ質問

新八が貴方達と結婚を前提に付き合いたいと言ってきました。如何しますか?」ハハハハハ!!」……何コレ!? 黒神さん並にドSな質問じゃねえか!!」

銀八はドSな質問と言つか最早虐めのリクエストみたいな質問に汗を流す。

ライホース「さすがにこの質問はなしにするしか新八が生き残る術はないぞ!!」

ライホースとしてもこの質問の先はもうどうなるか予想できたらしく、顔を青くしながら質問なしを提案する。

銀八「いや、もう遅いみたいだ」

ライホース「なに？」

銀八に言葉にある事を予感したライホースは恐る恐る銀八が見ている方向を見る。

そこには…

フェイト「なんでそんな事いうのオオオオオ！！」

新八「ちがつぬわアアアアア！！！！」

バリアジャケット姿のフェイトにバルデッシュで頭を力チ割られる新八。

土方「喧嘩売ってんのかメガネEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE！！！！」

ドカーン！！

新八「誤解あんぎゃアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

土方に斬られるどころかバズーカぶつ放されて真っ黒焦げになる新八。

オカマ達



にがなんだか分からず唖然としていた。

新八は鼻息を“フン！！”と出すと席に戻った。

銀八は引きつった顔で進める。

銀八「じゃ、じゃあ『支配者』さんは新八のチームに気を付けてください」

ライホース「つ、次だ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからだ。

『クッパ』質問なのだ『エターナルになったマリオについてどう思う？』」

銀次「質問『ブロントさんについてどう思う？』」

ネス「質問『セフィロスについてどう思う？』」

次回を待ってます！……やっとなマトモな質問だな」

銀八はマトモな質問に安堵する。

銀八「じゃあ答えるぜ。まずマリオがエターナルになるのは驚きでした」

ライホース「まああのマリオならなれてもおかしくないがな」

銀八「ちなみに作者はまだエターナルを見た事ありません」

作者は仮面ライダーダブルの映画は見ていない。

ライホース「それでブロントと言う男だが、口調が一定ではない」

銀八「だよな一々口調変わるし」

二人は互いの意見にうんうん頷く。

銀八「それでセフィロスははっきり言えば怖いです！」

ライホース「ホントにはっきり言っ たな…」

セフィロスにビビル銀八にライホースは呆れる。

銀八「だってあいつチートっと言われてもおかしくないくらい強いんだから仕方ないだろー！」

ライホースは無駄にはつきりセフィロスが怖い理由を言う銀八にため息をつく。

ライホース「はあゝ。では、『鳴神 ソラ』さんは廊下に立っていてくれ」

銀八「じゃあ次な。ペンネーム『ケン』さんから、  
『新八へ

貴方の大事なお通グズをメチャクチャにされゴミのように燃やされたら最高の気分ですか？（黒笑）

屁怒紹様へ

新八があなた様に対し「テメエのような奴は死んだ方がいいんだよ

「！すぐ殺してやるから待っつけ」と言っていました。どう料理しますか？」……マトモな質問から一転してまたとんでもない質問が来たアアアアアアア！……」

また新ハイジメの質問が来た事に銀八は驚く。

ライホース「今回は新八に対して悪意ある質問が多いな。やはり、ロリコンになってしまった事が原因ではないか？」

まあ十中八九そのとおりだろう。つと言うか新八は読者から弄られキアラとして定着している。

銀八「じゃ、じゃあ……」

銀八が新八に聞こうと新八に目をやると……

新八「マジすんませんでしたアアアアアアアアアアア！……！！！！あれはケンさんの嘘なんですウウウウウウウウ！！！！！」

新八は地面に何度も頭打ち付けて屁怒組に土下座しながらさっきの質問の自分の言葉ではないと弁解していた。地面が割れるくらい土下座しているので新八は額から血を垂れ流している。

屁怒組「あ、そうだったんですか。いやゝもしさっきの発言が新八さんだったら僕、どうしていたか分かりませんでしたね」

最凶ボイスの屁怒組様の声に新八は涙目になりガタガタ震えて冷や汗流す。

新八（や、殺<sup>ヤ</sup>られたアアアアアアア！……！誤解を解かなかったら

間違はなく殺されていた！！！！）

改めて命の大切さを知った新八であった。ついでに屁怒組の怖さも。そして屁怒組は顎に手を当てて考え込んだ。

屁怒組「それにしても、なんでケンさんは嘘なんて付いたんでしょうね？ちよつと僕、その辺の事についてケンさんとお話してきます」

銀八には屁怒組の『お話』が『O H A N A S I』に聞こえて顔を真つ青にする。

ちなみにそれはただの幻聴。

そしてそれを聞いた新八は黒い笑みを浮かべながらとんでもない事を言い出す。

新八「あ、屁怒組さん。もう一つ言っておきたいんですが、なんでもケンさんは花や動物を虐めるのが好きみたいですよ」

屁怒組「な、なんですって！？ならその事についてもお話ししなければ！！」

花や動物を大切にする心や優しい屁怒組は新八の嘘の情報を信じてしまい、すぐさまケンさんに花や動物を大切にするように説得しに行った。

銀八「いや、お前なにとんでもない嘘屁怒組さんに吹き込んだじゃつてんのオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！？？？？」

それを啞然として見ていた銀八は声を上げてツツコム。

新八はそれに声を上げて反論する。

新八「うるさいんじやボケエエエエエエ！！！あつちだつて噓つ  
いたんだからお互い様じやアアアアアアアア！！！！」

銀八「えええええええ！？お前新八か！？なんでそんなブチギレて  
んの！？」

相手に報復すると言いつつもの新八らしくない行動に驚愕する銀八。

新八「それはなア……お通ちゃんのグッズをめちゃくちやにする事  
は最高の気分とかケンの野郎がほざいたからじやアアアアアアア  
アアアアア！！！！」

銀八（やっぱそれかアアアアア！もう怒り心頭だよ！！だつて読  
者をあの新八がさん付けしてないんだから！！）

なんかもうこのコーナーは質問に答えるコーナーじゃなくて新八対  
読者みたいな感じになっていると思った銀八だった。

ライホース「まあ新八の怒りも分からないではないが……『ケン  
さんは屁怒組殿に気を付けてくれ』

銀八「じゃ、じゃあ次ぎ行くぞ。ペンネーム『ボッスン』さんから、  
『質問です。』

新八君。皆からロリコンって言われているけど、あなたは本当にロ  
リコンじゃないって否定出来ますか？

ヤミちゃんとなのはちゃん。新八君が皆からロリコンって言われて  
いるいますが、君達も新八君の事をロリコンって思っていますか？

バナージ「おい！新八さんに失礼じゃないか！！」

確かに失礼な質問だけど、僕は確かめただけさ。

ニンフ「新八さんに殺されるよ！！」

大丈夫です。返り討ちにしますから。

贈り物です。

銀さんには銀さんの服を着たなのはちゃんの写真集をソラさんにはソラさんの服を着たフェイトちゃんの写真集を新八君にはその両方を贈ります。

僕は仮面ライダーデイケイドになってそれを持ってきます。

バナージ「大丈夫か？作者」

大丈夫です。もし誰かが僕に襲いかかってきたらカブトにカメンライドしてクロックアップで倒しますから。

ニンフ「そう」

次回も楽しみにします。『……もう質問コーナーじゃなくて新八虐めコーナーになってんじゃねえか！！』

ここまで新八に罵詈雑言が多い質問がある事にさすがの銀八もなんだが悲しくなってきた。

ライホース「そしてこっちはこっちで予想通りの反応だぞ」

ライホースの言葉を聞いて銀八が顔を青くしながら新八を見ると……

新八「死ね~~~~。ボッスン死ね~~~~」

白装束着て頭に二本のロウソクを付けながら腹人形に釘を打ち付けていた。

ボッスン（スケダン）「ぐわアアアアアアア！！胸が急にイイイイイ！！！」

銀八「おいしいiiiiiiii！！！！なんかスケツトダンスのボッスンが呪い受けてんだ！？」

銀八はこの小説にまつたく出る予定のないスケツトダンスのボッスンが呪い受けている事に驚く。

ライホース「それで、ヤミとなのはの反応はこれだ」

ヤミ「ロリコンで間違いないですね」

なのは「ロリコンってなんですか？」

ヤミは新八をはっきりとロリコンと言い、なのはは首を傾げる。

新八（良かった！！なのはちゃんがロリコン知らなくて良かった！！）

新八は涙を流しながら安堵する。もしなのはにまでロリコンなんて言われたらもう立ち直れなかっただろう。

銀八「では『ボッスン』さん、これ以上新八を怒らせると更に面白い事になるのでご期待を」

ライホース「いや、なんて事を言うんだ！？やっぱり新八が虐められる事を楽しんでいるだろ！？」

ライホースは銀八のいきなりのSな発言にツツコム。

銀八はライホースのツツコミを気にせず進める。

銀八「そろそろ終わんねえかな？正直飽きてきたし。えっと、次は『白騎士君』さんか……はい終了」

ライホース「いや、なに終わらせようとしているんだ！？ちゃんとやらないか！！」

銀八「俺ももうメンドくさいしさ」

嫌々言う銀八にライホースは頭抱える。さつきから自分はツツコミ  
どうして疲れるし、司会の銀八はこんなんだ。

もう出番なんて良いからこのコーナーに出なければ良いと思った。

ライホースは銀八から質問の手紙を奪い取る。

ライホース「ええい貸せ！銀八殿にはもう任せてられん！読むぞ、  
『レナード』では質問をするぞ。」

無縁に質問。実は前日、黒龍さんの所の転生者にいきなり襲われた  
んだ。振り返ちしたけど、なんで襲って来たのか知っているか？

『俺からの質問はこれで終わりだ』

白騎士君「次は僕からの質問。」

なのはに質問。もし転生者達が銀さんを殺しに来たらどうしますか？

転生者達に質問。『第十五訓：辛い思い出は時に大切』を見てどう  
思いましたか？

『以上です』……では無縁、答えてくれ」

無縁「知らん」

無縁もなんでレナードの所に転生者が行ったかは知らないらしい。

無縁「それで、次のなのはどうなんだ？」

なのは「私が銀さんを守ってみせるの！！」

なのはは例え転生者が相手だろうと大好きな銀時を守ってみせる言  
う。

瞳には強い思いが伺えた。

銀八「カーッペ！」

銀八はモテる銀時に嫉妬して床に唾を吐く。

ライホース「それで、転生者達の反応はこんな感じだ」

ライホースはモニターを出して転生者達の様子を見せる。

転生者達

『『クソ天パマジぶつ殺す!!!!!!!!!!!!!!』』

転生者達はバカテスのFFF団のような黒装束を着て銀時にかなり嫉妬している。

ちなみにその面々は全員ハーレム狙いの奴だ。

銀八「それには俺も同感です」

ライホース「あんな者達に同感するな！」

ライホースはどこまでも銀時がモテる事に嫉妬する銀八にツツコム。

ライホース「じゃあ『白騎士君』さんは廊下に立っていてくれ。次、ペンネーム『黄色いのなにか』さんからだ、

『あーはっはっはっは！フェイトの奴アリス人形を無言のままて真つ二つにするなんてよっぽど憎かったんですね（笑）

なのはに質問。銀時達と一緒に暮らしていますけど銀時と一緒に布団に寝たいですか？』……新八を虐めてないだけましかな」

ライホースは知らないが、黄色いのなにかさんは新八に対してとてもでもない贈り物をしている。

それは贈り物コーナーで。

そして質問されたなのは答える。

なのは「寝たいです!!!!!!／／／／／」

顔を真っ赤にしながらもはつきり言うなのは。そして今の自分の発言が恥ずかしかったのか更に顔を赤くさせてもじもじする。

銀八「カーカーッペ!!」

更に不快感覚えた銀八は今度は床に痰を吐く。

ライホース「汚いぞ!っと言つかどこまで嫉妬すれば気が済むんだ!」

ライホースはこんな人物がそのままこの質問コーナーの司会で“大丈夫か?”と思った。

ライホース「じゃあ『黄色いのなにか』さんは廊下に立っていてくれ」

銀八「よし。やっと終わったな」

銀八はやっと質問コーナーが終わった事で背伸びする。

ライホース「後半はサボっていたがな!」

ライホースはツツコムが銀八は知らん顔する。

銀八「それで、次回のアシスタントは…」

新八「僕がやります!!」

銀八「おわっ!?!なんだよお前いきなり現れて!?!」

銀八はいきなり現れた新八に驚く。  
新八は理由を声を荒げながら言う。

新八「今回の事でよーく分かりました！こうなれば僕は次回、読者と徹底抗戦します！」

どうやら今回自分に対してSな質問ばっか来た事に相当腹が立ったらしい。

もう読者を返り討ちにする気満々である。

銀八「あゝあ。こりゃ完全ブチギレだな」

銀八は次回はどうなるんだろう？と心配した。

そして、ディケイドに変身して写真を渡しに来たボッスンさんは…

ディケイド「えっ？」

ドカーン！！！！

なんと黒いビームが飛んで来て爆発した。

ちなみにそのせいで変身が解けてボッスンさんは元の姿に戻って黒コゲになって気絶していた。

ちなみに写真も灰になった。

新八「誰がロリコンじゃアアアアアアアアア！！！！！！」

どうやらビームを放ったの新八らしい。

さすがに不意打ちだったのでボッスンさんもカブトにカメンライドする暇がなかったようだ。

黒龍「と、とりあえずボツスンさんは返しておこう。それと、写真は…仕方ないか…」

黒龍はボツスンさんを元の場所に転移させた。

## 第二十訓：FF7のセフィロスって最強じゃね？（後書き）

黒龍「アンケートの中間結果を発表します」

1：11票

2：3票

黒龍「まだアンケートは受け付けていますので、どんどん贈ってください」

黒龍「今回も贈り物コーナーします。贈って来た物は今回はコレです」

『真王さんからはアリスとアリア（そっちの）のパンツの写真とソラと銀時の執事服の写真』、『なつぺさんからはマール様』、『鳴神 ソラさんからは銀時LOVEズに海賊戦隊ゴーカイジャーのマーベラスの服を着た銀時の写真を、ソラLOVEズにはゴーカイジャーのジョー・ギブケンの服を着たソラの写真』、『ボッスンさんからは銀さんには銀さんの服を着たなのはちゃんの写真集をソラさんにはソラさんの服を着たフェイトちゃんの写真集を新八君にはそれの両方』、『黄色いのなにかさんから新八に異性にもてる不思議な腕輪を差し上げます。（本当は異性に嫌われて罵詈雑言を浴びせられ更にガチムチなオカマに好かれる呪いの腕輪）』

ムツリ「ぎゃああああああああああああああああああああ  
!!!!!!!!!!!!」

ムツリは無言のアリスに滅多切りにされた。

銀時「まあ当然だな。それにしても、なんでムツリが此処に居んの？」

黒龍「ですね。それはアリスに脅されてムツリをここに転移させたからです」

二人はムツリを散々処刑した後、満足そうな顔をする。

ちなみにアリアはそれほど怒ってないのか、ムツリ処刑に参加していない。

どうやらそこら辺の女性として感性はズレているらしい。

アリス「ふー。あ、それとソラの執事服の写真はちゃんと貰っておくぞ」

アリスはソラの執事服の写真を指に挟んで見せながら帰って行った。ちなみに瀕死のムツリは黒龍が転移させた。

黒龍「じゃあフェイト。バリアジャケット姿でマーラ様を擦ってください」

フェイト「えっ？別に良いけど…」

バリアジャケット姿のフェイトはマーラ様に近づいて両手でスリスリと擦る。

マーラ様「むオオオオオオ！」

マーラ様はなんか嬉しそうな感じになる。

銀時「（おいしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！なにやってんだテメーは！？いくらフェイトがチンコ見た事ないからってやって良い事と悪い事があんだろ！！）」

銀時が小声で黒龍に講義する。

確かにチンコとまったく同じ容姿のマーラ様を擦る役目をフェイトにさせるのはあんまりと言えばあんまりだ。

黒龍はワケを話す。

黒龍「（だってしょうがないでしょうが！！なんか知らないけど、アレ女性に擦られないとなっぺさんの所に行かないんですよ！！）」

黒龍と銀時が言い争っている中、事態は色んな意味で悪い方向に進んでいた。

マーラ様「む、むオオオオオ！！！！」

フェイト「へっ？ひゃっ！！」

なんと興奮したマーラ様はなんとフェイトの体に自分の体を押し付け、自分からフェイトの体にスリスリします。

フェイト「ひゃっ、あう、くすぐりたいよ／＼／＼」

銀時「いや、これも色々ダメだろオオオオオオ！！！！」

黒龍「こうなればヤケクソですよー！！フェイトオオオオオオ！！そのまま抱きしめて体全体使ってそれ擦ってください！！そのま

まミルク出たらソラが喜びます!!」

フェイト「っ!!ソラが!?!分かった!!」

フェイトの恋心に火がつき、フェイトはマール様の体を手で抱きしめそのまま手や体を使ってスリスリする。  
絵的にはもう色々な意味でやばかった。

マール様「む、む、むオオオオオオオ!!!!」

ドビュウウウウウウウ!!!!

マール様は満足してこの世で一番美味しいであろうミルクを噴射した。

そしてそのままフェイトといつの間にかいたアリスに掛かり、残りは黒龍が地面に突く前に回収した。

フェイト「ベトベトだよ」

白い液体まみれになったバリアジャケット姿のフェイトはもう完全にエロかった。

アリス「私とした事がミスったな。それよりもどうだソラ？」

アリスはどうやらワザと掛かったらしく、ソラに白い液体が掛かった姿を見せる。

特にグラマラスなボディーアリスに白い液体が掛かった姿を見た新八は鼻血を噴射させて気絶した。

なにせ特に胸に白い液体が流れる光景は……もう色んな意味で危ない。

ソラ「風呂連れてってやるから洗いにいくぞ」

ソラはなんのリアクションもなしにアリスとフェイトを風呂場に連れて行った。

アリスはどこか不満そうだった。

無縁「なんだこの写真？つうか前にも来たな」

何故かまた無縁の所にフォックスの写真が来た。無縁は今度は燃やした。

新八「よっしゃアアアアア！！！！これで僕も彼女が居ない生活とおさらばじゃアアアアア！！！！」

新八は異性にモテる指輪を付けて喜んだ。

そして効力を試すためになのはの所に向かったが…

新八「なのはちゃああああん！！」

なのは「いやアアアアア！！！！こないで新八さん！！」

ドカーン！！

新八「うぎゃアアアアアアア！！！！！！」

新八はなのはのデバインバスターで迎撃された。

なのは「新八さんなんてだいつきらいなの！！！！」

なのははそのまま去って行った。

新八「ガーン!!!!!!!!!!!!!!」

新八は凄まじいショックを受け、そのままorzの状態で涙を滝のように流していた。

新八（な、なにがどうっているんだ!? モテるところか逆に嫌われるなんてええええええええええ!!!!!!）

「あらゝどうした僕」

「かわいそうに落ち込んで」

「私達が慰めて上げるわ」

新八（こ、この声は!? そうか、やっぱりこの指輪はモテる指輪なんだ!!）

新八は自分を癒してくれるであろう女性達? の声に反応し顔を上げると…

ガチムチオカマ

『ハ口~~~~♪』

ガチムチの気色悪い化け物がいた。

新八「いやアアアアアアアアアア!!!!!!」

新八は血涙流して逃げた。

ガチムチオカマ

『待って~~~~~♪ 良い事しましよ~~~~~♪』

新八「いやじゃアアアアアアアアアア!!!!!!」

感想から贈り物コーナーまで酷い目に遭う新八なのであった。

『次回予告』

ライホース「『仕事は真面目にやらないと怒られる』にテイクオフだ」

第二十一訓・仕事は真面目にやらないと怒られる（前書き）

黒龍「今回はもしかしたら新八に対して不快感を覚えるかもしれないシーンがあるのでご注意を」

銀時「いや、なにがあんの!？」

ライダー「『リリカル銀魂ライダー』が始まります」

## 第二十一訓・仕事は真面目にやらないと怒られる

セフィロスとの激戦を終えてソラと桂は部屋に戻りながら話していた。

桂「それでソラ。これからどうする？」

ソラ「何をだ？」

ソラは桂に顔を向けず、淡々と歩く。

桂は少し苛立ちを見せながら声のトーンを上げて言う。

桂「フェイト殿の事だ。恐らくフェイト殿を生み出したのはプレシア殿だ。なのにプレシア殿はフェイト殿をまるで人形を見るような目で見ています。お前はその事について何かプレシア殿に言おうとは思わないのか？」

フェイトを生み出したであろうプレシアがフェイトの事を自分の言う事を聞く人形としか見ていない。

これは桂としては我慢ならない事だった。

例えば作られた命であろうと、フェイトは立派な人間だと桂は思っている。

なのに生みの親のプレシアはまったくその事を思っていないとあの目と態度を見れば分かった。

桂としてはプレシアに文句の一つも言っただけでやらないと気が済まなかった。

そんな桂の言葉を聞いて、ソラは冷静に言う。

ソラ「他人の事に部外者の俺達が口出しするのは筋違いだろ」

ガン！

桂はソラの胸倉を掴んで壁に叩きつける。

桂「見損なったぞソラ！！ 貴様、フェイト殿がプレシア殿に人形として扱われる事に怒りを感じないのか！？ お前だってフェイト殿とは同じ境遇のはずだ！！ なら尚更……！！」

声を荒げながら捲くし立てる桂にソラは“他人ならな”と言って、桂の言葉を中断させる。

ソラ「もうアイツは他人じゃねえからな。俺も、フェイトのためにもプレシアに言いたい事はある」

桂はソラの言葉を聞いて手を離す。

桂「ソラ、お前……」

ソラは服の身なりを整えた後に言う。

ソラ「一応知り合っちゃった仲だしな」

ソラは微笑を浮かべる。

そしてソラの言葉を聞いた桂も笑みを浮かべる。

桂「それでこそ侍だ。俺達でプレシア殿目を覚まさせてやろうぞ」

ソラ「ああ。だが、今はまだ夜中だから止める。言うならフェイトがジュエルシードとか言う物を探しに行く前だな」

頷きながら言うソラの言葉に桂が首を傾げる。

桂「ジュエルシード？」

ソラ「俺も良くは分からないんだが、プレシアが必要な物らしい。まあロストロギアだから危ないのは確かだな。それでそれをフェイトに取りに行かせるそうだ」

ソラとしてもジュエルシードがロストロギアでプレシアが欲しがっている物くらいだとしか分かっておらず、その効力や力はまったく把握していない。

ソラの説明を聞いた桂はため息をつく。

桂「まだ年端もいかぬ娘にそのような危ない物取りに行かせるとは……」

桂はますますプレシアにはフェイトが一人の人間だと言う事を教えなければならいと思った。

ソラ「今日行くそうだ。俺達は睡眠と飯を摂った後に言いに行った方が良いだろ」

桂「そうだな。じゃあ部屋に戻るぞ」

二人はこれからする事を決めて自分の部屋に戻って行った。

その後にプレシアの叫び声が聞こえて飛び起きたとか……。

時刻は朝になり、ソラと桂はフェイト達が待っているであろう食堂の方に行った。

ただ二人は昨晚セフィロスと戦ったので、桂は服が少しボロボロで至る所にできた斬り傷に包帯を巻き、ソラも桂同様服が少しボロボロな上に頭には包帯を巻き切り傷のある腕や足などにも包帯を巻いている。

ちなみに治療は事情を知っているチェーンがやった。

そしてそんな二人を見たフェイト達はやはり驚くワケで、二人に尋問の嵐を浴びせるのだ。

ちなみに今はチェーンも擬人化して会話の輪に入っている。

フェイト「ソラ!? どうしたのその怪我!?!」

アルフ「一体何が遭ったんだい!?!」

ソラ「階段から落ちた」

桂「長髪の手入れミスってな」

フェイトとアルフは心配した顔で二人に声を上げながら怪我の理由を聞く。

ソラと桂はかなり不自然な誤魔化し方をする。

リリス「いや、お二人がそんな事で包帯巻くほど怪我するわけないですよ！って言うか桂さんのはどんな長髪の手入れしたらそうなるんですか！？」

この濃いメンバーの中で数少ないツツコミ役であるリリスがツツコム。

リリス「何勝手に人をツツコミ役にしてるんですか！？」

すみません……。

アルフ「作者弱！？」

アルフは弱腰の作者に驚く。

神楽「ツラ。お前髪の手入れが刃物にでもなっているアルか？」

桂「ツラじゃない桂だ。うむ。髪の手入れを欠かさずすれば岩をも切れる髪へと変貌を果たすのだぞリーダー」

神楽「マジでか！？」

桂の嘘を鵜呑みにして驚く神楽にリリスがツツコミ入れる。

リリス「なんで信じてるんですか神楽さん！？ そんなスパスパの

実みたいな能力を桂さんが持っているワケないじゃないですか！！」

アリス「まあッラはともかく「ッラじゃない桂だ」……話の腰を折るな」

ドカ！

桂「ゴフッ！」

自分の話を遮られたアリスが桂の鳩尾に正拳を放つ。

桂はあまりの痛みに転げ回る。話の邪魔する桂も桂で自業自得だが、怪我人にも正拳放つアリスもアリスで容赦ないとアルフは思って顔を少し青くさせた。

そして桂にド突いてアリスはすっかりした顔をした後、今度は心配そうな顔でソラに話し掛けた。

アリス「ソラ……大丈夫か？ 階段から落ちたんだからな」

リリス「だーかーらー！！ アリスさんもソラ様の嘘を真に受けないでくださいよ！！ 私だってソラ様の話は本当だと思っちゃいましたけど、どう考えても階段落ちたくらいじゃソラ様はそんな怪我しないんですから！！」

神楽「いや、リリスもちやつかり信じそうになってるアル」

神楽はやっぱりリリスのドジ？にツツコミを入れる。

アルフは一体ソラはどれだけ体が頑丈なのだろう？と疑問に思ってしまった。

まあソラが体が頑丈なのは、研究所で実験を受けて身体能力が異常に高いからである。

それはアリスとアリアも同じなので。

ソラ「分かった分かった」

桂「仕方ない。真実を話そう」

結局ソラと桂あっさり嘘をバラし、昨晚セフィロスと戦った事を話した。

ただし、セフィロスがプレシアと組んでいる事とフェイトの元になった女の子の事は話さなかった。

さすがにこれはフェイトに大きなショックを与える事だと考えたソラと桂が話さない事にした。

普段クールボケかましてバカな所ばっか見せる桂でもそれくらい気配りはできる。

アリス「なるほどな……」

アリア「にやゝ……」

話を聞いたアリスとアリアはそんな得体の知れない敵が現れた事に険しい顔をする。

さすがの二人もソラと桂がここまでの怪我をするほどの相手だと言う事で事の重大さを察したようだ。

セイバー「まさかそこまでソラが苦戦する相手とは……」

神楽「めっちゃ強いみたいアルな……」

リリス「厄介な人が現れましたね……」

セイバーとリリスと神楽はソラと桂がこれだけの怪我をさせるくらい強い相手だと言う事に驚き険しい顔をしていた。正直、ソラと桂の実力を良く知っている三人にとっては二人を遊び半分で追い詰めるようなセフィロスと言う相手の底が見えなく、険しい顔になってしまったのだ。

フェイト「まさか時の庭園にバレずに侵入できる人がいるなんて……」

アルフ「一体どんな奴なんだい？」

フェイトとアルフは時の庭園に侵入した人が居た事に驚愕していた。ソラ達と言う例外はあるが、故意にこの時の庭園に侵入する事はない。

此処は次元の海に浮かぶ島のような場所で、ここの座標は自分とアルフとプレシアくらいしか知らないのだ。

その上転移も感知されずに入ってしまったのだから、二人は余計に驚愕してしまったのだ。

今はプレシアと協力関係を結んでいるからセフィロスがこの時の庭園に出入りできるのだが、プレシアに会いに時の庭園に来た時はプレシアの感知されずに侵入したと言っておこう。

この話からもセフィロスが非常識な力の持ち主だと分かるだろう。

ナナシ（彼にも困ったものですね。暇つぶしとは言えわざわざ自分から現れるなんて……）

ナナシは顔には出してないが、内心ではセフィロスの行動に呆れて

いた。

実の所ナナシもプレシア同様セフィロスと協力関係を結んでいるので、セフィロスの行動に呆れてしまったのだ。

ナナシ（まあ、彼の考えは理解できないところが多いですし）

ナナシは仕方ないと言う事でこれ以上頭の中でセフィロスの行動に呆れるのを止めた。

そして説明を終えたソラは腕を組みながら険しい顔をする。

ソラ「ま、アイツが何か企んでいるのは確かだ。また俺達の前に現れるだろうな」

桂「リーダー達もその時は充分に気を付けるのだぞ」

桂の言葉を聞いてフェイト達は頷く。

とりあえずこれで疑問も片付きセフィロスの事も話し終わったので、ソラは朝食の準備を進める事にした。

ソラが調理に取り掛かるうとした時、厨房にフェイトがやって来た。

フェイト「ねえソラ。怪我もしているし、朝食は私が作っても良い」

ソラ「お前が？」

聞き返すソラにフェイトが肯定のために頷く。

フェイト「私もソラの役に立ちたいから／＼／＼」

フェイトは少し頬を染めて気恥ずかしそうに言う。

フェイトの言葉は嘘偽りない。好きであり恋路を抱くソラの役に立ちたい。今ソラは怪我をしているから料理を作るのはとてもがじゃないが苦勞するだろう。

だから、代わりに自分が朝食を作ろうと言ったのだ。

ソラはフェイトの言葉を聞いて無難に断る。

ソラ「このくらいの怪我なら朝飯くらいは作れるから大丈夫だ」

フェイト「そう……なんだ……」

フェイトはソラの言葉を聞いて残念そうにする。ソラの役に立ちたいと言う気持ちの他に、自分の手料理をソラに食べて欲しいと言う願望があつたのだが、それが叶わなかつたので少し残念な気持ちになつてしまつたのだ。

悲しそうなフェイトの顔を見てソラは頭を掻きながらフォローする。

ソラ「……まあ、簡単な朝飯はできても、手間の掛かる『昼飯』には苦勞するな」

ソラの言葉を聞いてフェイトの顔がパーっと明るくなる。そして少し声を上げながら聞く。

フェイト「じゃあお昼は私が作るけど良い!？」

ソラ「ああ。じゃあ頼む」

フェイト「うん!」

フェイトは笑顔で返事をした。

ソラ（たく…… 良い笑顔するな）

そんなソラは今のフェイトはクローンでもなんでもない本当に無邪気な女の子だと思った。

その時、ソラはある事に気づく。

ソラ「そう言えばフェイト、お前料理できるのか？」

ソラは十歳も満たないフェイトが料理できるとは思えなかった。だから気になり聞いてみると、フェイトは少し恥ずかしそうに言う。

フェイト「まだ料理はした事ないんだけど、料理の本を見て勉強したんだ…… / / /」

やはり料理できないと言うのは女の子として恥ずかしいと思っているのか、恥ずかしそうに指と指を合わせて俯きながら言う。

実の所ソラが来るまでフェイトは料理にはさほど興味がなかったのだが、ソラと会って一目惚れしてから女に目覚めたのか、はたまたソラの料理が出来る事に感化されたのかは定かではないが、料理に興味を持ち始めたのだ。

そして書斎から料理の本を持ち出して時間がある時に本を真剣に読んでいた。

それが発火剤になって料理をしてみたいと思うようになったのだ。

ソラはフェイトの話聞いて考えた。

フェイトは料理の本を読んでいるが、料理はまだ作った事のない素人。

たぶん最初の料理は焦げ目のついた料理とか味付けが失敗したモノになるか、はたまたいきなり美味しい料理を作るかもしれない。

とにかく作らせておいても特に問題はないだろう。

何かあれば途中で自分が手助けすれば良い。

ソラ（まあこれもフェイトの良い経験になるだろ）

ソラ「まあ頑張れ」

フェイト「うん！ ソラほど美味しい料理は出来ないかもしれないけど、頑張って作るね！」

フェイトは真剣強い眼差しで笑みを浮かべながら自分を鼓舞させる。

ソラ「ま、期待してるぜ」

ソラは手を振って調理を再開した。

だが、ソラはこの後、正確に言えば昼食の時間にこの選択を激しく後悔する事になった。

一方場所変わって此処は海鳴市。

この海鳴市には『喫茶翠屋』と言う喫茶店がある。

その甘味は評判が良く、連日お客さんが来るのだ。

そして今日もまた開店してすぐにお客さんが来た。

女性A「ここが美味しいて噂の翠屋よ」

女性B「へ〜どんな味が楽しみだね」

女性C「ケーキが美味しいんですよ？」

女性Aが女性Bと女性Cに翠屋のスイーツが美味しいと評判であると教える。

ちなみに三人共学生である。今日は日曜日だからだ。

三人は期待感を胸に翠屋の店の扉を開ける。

すると二人の目には予想外の光景が映った。

沖田「ようこそ——」

土方「喫茶翠屋へ」

そこには何故かホストのような黒いスーツを着た土方と沖田まるで出迎えるようにバラを持って横に立ち並び、その後ろには右にこれまたホストの格好をした銀時と何故か女性なのにホストの格好したライダーが縦一列に並び、左にはホストの格好をした山崎と新八が縦に立ち並んで客を出迎えていた。

土方は黒いスーツをネクタイとボタンを外してラフに着こなし、沖田と新八と山崎は黒いスーツをきっちり綺麗に着こなししている。

そしてライダーは銀時と合わせた白いスーツを綺麗に着こなし髪をストレート伸ばしている美男子に見立てている。ただ胸がでかいせいで女性だとバレバレだ。

そして銀時は土方どうよう白いスーツをラフに着こなししている。

そして喫茶店だと思つて翠屋に入った女性客の反応は明らかに驚い

ている。

女性客

（（なんかホストクラブみたいになってるウウウウウウ！！！！  
????））

女性客は目の前に光景に啞然とした。

そりゃそうだ。喫茶店に入ってこんなホストみたいな奴らが出迎え  
たら誰だってこんな反応をするだろう。

そんな戸惑いを隠せない女性客に気にせず二人はバラを持ってキメ  
顔で言う。

沖田「これから最高の時間を贈るぜ子猫ちゃん達」

土方「HOTでCOOLなパ<sup>ホット</sup>ーリ<sup>クール</sup>イの始まりだ」

そして土方はブリーフー丁素っ裸でどこぞの奥州筆頭の馬みたいに  
頭の両側にハンドルを付けて四つん這いになった近藤にまたがつて  
叫ぶ。

土方「ヒアウイゴオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

銀時・新八

『オツケエエエエエエエエイ！！！！！！』

土方「レッツパ<sup>リ</sup>ーイイイイイイイイ！！！！！！……じゃ  
ねーだろオオオオオオオオ！！！！！！」

ドオオオオン！！！！

完全にどこぞの筆頭とその部下達の真似をした後、土方が後ろの銀時達にバズーカぶっ放す。  
驚いた女性客は逃げ出す。

土方「なんで俺達がレッツパーティーしなきゃならねーんだ！！　なんで近藤さんがハーレーゴリットソンになってんだアアアア！！」

銀時「しょうがねえだろ。お前達がこのまま衣食住提供してもらうのは悪いとか言って店で働く事になっちまったんだからよ」

バズーカ喰らっても何故かピンピンしている銀時はメンドくさそうに頭を掻く。

なのはのジュエルシード集めを手伝うと言う事で銀時達は高町家に衣食住を提供してもらっているのだが、魔法を知らない高町家の人達にとってなのはを危険から救った恩人でしかない。

さすがにソラ達を見つけ元の世界に帰る方法が見つかるまでの間は此処でお世話になるのだが、たぶん全部の目的を済ますまでにはかなりの時間を有するだろう。

なのはを助けただけでは割りに会わないと言う事で新八と近藤は翠屋で働いて食事代くらいは返したと言った。

士郎や桃子は気にしなくても良いと言ったが、新八と近藤が頑なに譲らなかつたのと、ライダーや山崎や土方も二人ほどではないが手伝うと言ったので店の手伝いをしてもらう事にしたのだ。

その時銀時や沖田はメンドくさそうな顔をしていた。

土方「だからってなんでエセホストみたいな事してんだよ!？」

まあ土方の意見も最もだろう。

こんなホストみたいな接客した拳句客を逃がしてしまうのだからむしろ営業妨害していると言われても仕方ない。

その理由について銀時の変わりに何故か近藤が腕を組んで答える。  
しかも現在進行形でブリーフ一丁で後は素っ裸だ。

近藤「いいかトシ。喫茶店と言えば女性客が多い。なら、女性をもてなすのに一番適したホストになって接客をしようと考えたんだ」

土方「頭からハンドル生やす接客なんて聞いた事ねーよ!！」

近藤「局長命令だ。この世界にいいだけで良い。レツツパーリイしろ」

土方「アンタは元の世界でも年中レツツパーリイしんだろ!！」

近藤にガンガンツッコミを浴びせる土方に沖田が声を掛ける。

そして土方が沖田を見ると啞然とする。

なぜなら、どこから持って来たのかホストクラブで見るような豪華そうなソファで更には目の前の四角いテーブルの上には色んな酒やフルーツの盛り合わせがあり、沖田は両脇に自分に甘えてくる女性客と一緒に座って酒を飲んでいる。

沖田「まアまア落ち着いてお前も飲めよトシ」

土方「誰がトシだ!！　　つかお前何早くも客とってんの!？　ここはホストクラブじゃねえって言ってるだろ!！　どこから

持って来たそれ！？　なんでその二人はなんの疑問も持たないの！？」

ホスト名呼ばわりする沖田に土方が頼に血管浮かべながらツツコム最早沖田のいる場所は完全なホストクラブに成り代わっている。

沖田は笑顔を浮かべる。

沖田「なんかよく分かりませんがコツは掴みましたよ。要はアホな客だまくらかして金巻き上げれば良いですよね？」

女性客「もオゝS O U G O ったらイジワルウ！！」

沖田の言葉を聞いた女性客の一人が拗ねたように言う。  
態度が完全にホストクラブの客みたいになっている。

沖田「あ、ゴメンね。君達の事じゃない。君達だけは……特別だから」

ちなみにそんな事はこの腹黒少年は一切思っていない。

土方「なんかすんごい才能開花させてんだけど！！！？　天才だよ！！」  
ホストクラブなら真っ黒に輝けるよアイツ！！」

山崎「ちよっ！　ダメですよ沖田隊長！！　本当にホストクラブだと勘違いされちゃいますよ！！」

土方はまさかここまで沖田にホストが合っていたと言う事実には驚く。下手したらマジ？！になりそうほどだ。

そして土方がツツコンでいる横で山崎は「すみませんすみません」と何回も謝罪の言葉を述べながらホストクラブだと間違えて沖田と

飲んでいた二人の女性客に帰ってもらった。

そんな力オスとも呼べるような状況を店の奥で休日と言う事で手伝いをしていたなのは兄の『高町恭也』と同じく恭也の弟でなのは姉である『高町美由紀』は呆然としながら見ていた。

美由紀「……お兄ちゃん」

恭也「……なんだ、美由紀」

美由紀「もしかしたら翠屋潰れるかも」

恭也「このまま行ったらもしかしくなくても潰れてるぞ」

ここはすかさず銀時達のはちゃめちゃんな接客を止めさせて一から教える所なのだが、彼らの行動が衝撃的過ぎで注意するどころかツッコム気もなくなっているのだ。

さすがにボケや力オスに耐性のない一般人の二人では銀時達のキラの濃さに付いていけなかったようだ。

二人が呆然としている中、事態はどんどん進行している。

土方「つつか眼鏡！　なんでさっきからテメーはツッコまないんだよ！　ツッコミはテメーの仕事だろうが！！」

確かに言われてみればそうだ。こんなにボケかましてんだから一回くらい新八がツッコミいれても可笑しくない。

なのにさっきから新八のツッコミを聞かないどころか、ボケまでかましている始末である。

新八「良いでしょ僕だつてたまにはボケたつて!!」

新八は何が悪いと言わんばかりに講義する。  
そして銀時ある事に気づく。

銀時「あ、もしかして新八。お前最近読者の風当たり悪いからボケ出したのか？」

新八「うッ……!」

新八はあからさまに視線を逸らす。

どうやら新八は最近感想版でも質問コーナーでも大半の読者が罵詈雑言浴びせるわ、ドSな質問をしてくると言う事で普段はしないボケをして読者の心を掴もうとしたようだ。

新八の考えに気づいた銀時は呆れたように言う。

銀時「おいおい新八。お前はツツコミキャラだろ？　なのに何今更ボケ出してんの？　そんな中途半端な事したら中途半端なキャラになつて中途半端な人気しか取れなくなるぞ」

新八「中途半端中途半端うるさいわ!!　今までと違う僕を見せれば僕に対しての読者の評価も良くなるかもしれないでしょ!!」

ついに自分でボケをワザとかましたとバラす始末。これでは読者様からの高評価貰えるどころか前にも増して悪い評価受けてしまう可能性がある。

そもそもツツコミキャラとして定着している奴がボケ出しても読者は違和感やら戸惑いを覚えるだけでさほど高い評価得られないし、むしろウザイとか思われてしまう可能性がある。

まさしく浅はかといき言いようがないだろう。

土方「ロリコンになったテメーにはもう無理だ」

土方はタバコ吹かしながら呆れたように言う。

実際になのはに一目惚れしている時点でロリコンアニメオタクに堕ちてしまっているだから土方の言い分も分かる。

新八「なっ！？ 僕はロリコンじゃありません！！ そう言う土方さんこそロリコンじゃないですか！！」

新八は土方の言葉を聞いて少しショックを受けた後講義する。

土方「なっ！ ふざけんじゃねえ！！ アレはトツシーのせいだつてなんべん言えば分かんだよ！！」

何故土方が新八にロリコン呼ばわりされるかと言うと、実は真撰組の四人がこのリリカルなのはの世界に来た理由が土方がリリカルなのはのDVDを持っていたからだ。

実の所真撰組の四人が瞬間移動装置に入れられた時『魔法少女リリカルなのは』のDVDが落ちていたせいでこの世界に飛ばされた。

（詳しくは『第十四訓：バトルマンガで伏線は大事』で）

そのDVDは土方の懐から落ちた物だったのだ。

どうやらトツシーに体の主導権奪われた時に懐に入れていたようなのだ。

これが真撰組四人がこの世界に来た理由だ。

その理由を前に沖田はニヤニヤしながら銀時達万事屋組みに話したら銀時が大笑いし、新八とライダーはかなり呆れていた。

その時土方が銀時とまた喧嘩して新八と山崎が止めたのは言うまで

もない。

新八「それでもアレは土方さんの一部でしょ！」

土方「ぐっ！……確かにそれはそうだが、アイツは俺にとっては膿以外の何者でもねえんだよ！」

新八と土方のロリコンの押し付け合いと言う名の口論を見ている美由紀と恭也は呆れた顔をしながら話す。

美由紀「お兄ちゃん。なんか、客ほっぽって喧嘩始めちゃったんだけど……」

恭也「はあ……仕方ない。ちょっと注意してくる」

これ以上銀時達に接客を任せていられないと思った恭也はため息を付きながら銀時達の下に向かおうとする恭也の目に『あるモノ』が映った。

恭也「なっ！？」

それを見た恭也の目は見開いき、口を開けて驚いていた。  
なにせ恭也の目に映ったモノは……

なのは「銀さん、カッコいいの／＼／＼」

と目をハートマークにして更には頬を赤くしながら熱い視線を銀時に贈るなのはの姿だった。

どう考えてもその姿は銀時に惚れてる女の子としか言いようがなかった。



美由紀の叫び声を尻目に恭也は木刀を振り上げながら銀時に襲い掛かった。

恭也「おりやアアアアアアア！！！！」

銀時「おわアアアアアア！！？？」

バシッ！！

恭也の殺気に気づいた銀時は咄嗟に自分の頭に向かって振り下ろされた木刀を真剣白刃取り、もとい木刀白刃取りする。  
さすがに恭也の怒声と銀時の叫び声がなかったので、全員の視線が銀時と恭也に向く。

ライダー「ギントキ！！」

なのは「銀さん！！」

恭也に今にも木刀で殴られそうな銀時を見てライダーとなのはが声を上げる。

他の面々も何故銀時が恭也に木刀で殴られそうになっているのか分からず、目を白黒させている。

恭也「ちい！」

恭也は仕留め損なってかなり分かりやすい舌打ちする。

銀時「ちょっ！？ 何いきなりなにすんのお兄さん！！」

恭也「お前にお兄さんなどと呼ばれたくはないわアアアアアアアアアア」

銀時「いや、なんの話!？」

更に怒りを増大させる恭也に銀時はワケが分からないと言う風に声を上げる。

銀時自身恭也の事をお兄さんと言ったのは、恭也の名前を覚えておらずなのは兄と言う事でお兄さんと呼んだだけなのだ。特に他意はない。

恭也「なのはをたぶらかしたお前を生かしておけん!!」

銀時「いや、何をどうしたらそんな考えに行き着くんだ!？ おかしい! アンタ絶対おかしい!!」

銀時自身なのはをたぶらかした覚えはないし、たぶらかすつもりは微塵もない。

まったくもってワケの分からない状況に銀時は戸惑いを隠せなかった。

新八「なにいいいいいい!!?? なのはちゃんをたぶらかしたとはどう言う事だ天パアア!!」

そして恭也の言葉を聞いた新八も銀時を怒りの籠った視線で睨みつけて詰め寄って来る。

銀時「ええええええ!!?? なんでお前まで怒ってんだよ!？ それじゃマジでお前ロリコンだぞ!？ 普通ここは俺を助け「誰がロリコンだアアアア!!」ゴハッ!!??」

銀時が言い切る前に新八が銀時にアッパーカット喰らわせる。恭也の木刀を白刃取りしていた事もあり動けない銀時はマトモに新八の鉄拳を喰らってしまう。しかもあまりに威力が強いのか宙を舞う。そして銀時は綺麗な円を描いて宙を舞いながら思った。

銀時（新八……お前どうしっちゃったんだろうな？）

今まで新八をロリコン扱いしていたが、それはただからかっていただけでマジ新八がロリコンに落ちたとは思っていなかったのだが、どうにも自分が思っていたよりも新八はロリコンの道に入りかけていると思ってしまった。

ズドン！！

銀時はそのまま重力の法則に従って地面に後頭部ぶつけて落ちた。そして新八はビシッと人差し指を銀時に指しながら言う。

新八「むしろロリコンはあなたです！！」

迷惑なほどのウザイ新八の言い分を聞いた銀時は薄れ行く意識の中呟いた。

銀時「……なんで……そう……なんの……？（ガク）」

銀時は白目剥いて気絶した。

なのは「銀さアアアアアアアん！！！」

なのはは叫びながら銀時に駆け寄った。“銀さん！ 銀さん！”と

心配そうな顔で銀時の名前を呼びながら体を揺する。

恭也「ナイスだ新八君！」

新八「恭也さんこそ！」

どこに気が合う要素があるのか分らないが、恭也と新八はガシッ！と互いに手を握る。  
ロリコンと思いつきり勘違いしている銀時を成敗した事に微笑を浮かべていた。

ライダー「なにをやっているんですかあなた達は！！！」

グサツ！！×2

ライダーはシスコンバカ&ロリコンバカの脳天にダガーをぶっ刺す。  
二人は頭を血を出しながら倒れる。

そしてその光景を見ていた山崎は引きつった笑みを浮かべながら近藤に話し掛ける。

山崎「……局長。新八君ってあんな感じでしたっけ……？」

山崎の問いに近藤は汗を流しながら答える。

近藤「……いや、なんか若干キャラ崩壊しているような気がする」

近藤も今目の前で血を出しながらボケまくっている新八が自分達の元の世界にいた新八に見えなくなってきた。なんて言うか元の新八が霞んできたような気がするのだ。

まあそれはたぶん彼らの気のせいだろう。新八はだいたいあんな感じである。

そしてそんな力オスにも終わりが来た。

???「何やつているのかしらあなた達？」

全員の後ろから聞こえた声は聞いた感じでは優しそうな声に聞こえるのだが、奥底に凄まじい怒気が含まれていると感じられ恐怖さへ感じた。

その声を聞いた全員（沖田と気絶した銀時を除く）が顔を青くさせて冷や汗を流しながら首をブリキの人形のようにギギギギと言う音が出そうな感じに声の主を見る。

???「大概の事なら許すけど、さすがに度が過ぎるのは良くないわよね？」

高町家最強の『高町桃子』である。

今の今まで彼女は夫の『高町士郎』と共に買出しに行っていて今帰ってきたのである。

隣にいる士郎なんか顔を青くしてガタガタ震えている。

そしてニコニコした笑顔なのに背後から出ているゴゴゴゴゴゴゴゴ！とか言う擬音が出そうなほどの黒いオーラを出している桃子。普段は滅多の事じゃ怒らないのだ。だが今の桃子は確実に怒っている。

普段怒らない人間が怒った時はマジで怖いと言うが、本当のようだ。

そんな桃子は恐る恐る美由紀は声を掛ける。

美由紀「お、お母さん」

桃子「何かしら？」

顔を向けた桃子につい恐れてしまった美由紀は涙目になって“ヒッ！”と声を出してしまったが勇気を出して質問した。

美由紀「い、いつから帰ってたの？」

桃子「銀さん達がホストの真似して接客していた時からよ」

美由紀「それ、最初からだよね……？」

さすがに怖くて強くツツコメない美由紀は更に顔を青くさせて聞く。

美由紀「ど、どうしてすぐに出てこなかったの？」

桃子「銀さん達がどんな仕事をするか見てみたかったからよ」

美由紀「そ、そうなんだ……」

どうやら桃子は銀時達がどんな感じに接客をするのか気になり、帰ってもすぐには翠屋には入らずこっそり土郎と銀時達の仕事ぶりをみていたようだ。

美由紀「あ、あんなホストごっこしてたんじゃないや怒るよね？」

美由紀はもうダメだと思った。

いくらなんでもあんなホストまがいな事して怒らないわけがない。今の今まで出て来こなかったのが不思議なくらいだ。

だが、桃子は今の美由紀の言葉を聞いて黒いオーラを消した後、頬に手を当てながら予想外の言葉を口にする。

桃子「ん」。まあ色々改善する点はあったけど結構斬新で面白かったから何も言わずに隠れて見ていたんだけど、さすがにお客さんを放って置いて勝手な事始めたから」

美由紀「えええええ！！？ 良かったの！？ あのホストの真似した接客が面白かったの！？」

さすがにこんな切り返しが来るとは思わず美由紀は声を上げて驚いてしまう。

そして驚く美由紀に気にせず桃子はまた黒いオーラを出す。

桃子「でも、あんまり勝手な事していると私、怒るわよ？」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

近藤・山崎・土方・新八・ライダー・士郎・美由紀・なのは・士郎・客達

『『マジすんませんでした！！！！』』

何故か別に怒られるような事していない士郎や美由紀やなのはや更にはお客も一緒に桃子に土下座する。ちなみに沖田は桃子が来た時には逃げ、銀時は気絶している。

結局銀時達はお世話になる高町家のために翠屋の手伝いをする事になった。

こんな調子で大丈夫だろうか？

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はい。今回のアシスタントは無理やりアシスタントに志願した新八です」

新八「よろしくお願いします！」

銀八「おお、気合が入ってますね。読者を返り討ちにする気満々です」

新八「前回あんだけ酷い質問が来たんだから当然ですよ！！」

前回の質問コーナーで酷い質問ばかり来た事に新八はかなり腹を立てているのだ。

だから今回自ら強引にアシスタントになったのだ。

銀八「まあ頑張れや。俺に被害ないしな。じゃあ早速いくぞ、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『ネス』皆に質問！『マリオさんに変身して欲しいライダーはありますか？』」

リュカ「ライホースに質問『今の心境はどうですか…』」

フォックス「ルイージに変わって新八に質問『最近の自分の扱いに

どう思う？』…ルイージは応援してるから頑張れよ」

次回を待ってます！』……へーこんな奴もいるんだな」

銀八は新八を気遣っているルイージに若干驚いている。

新八「うう…ルイージさん…（涙）」

新八は数少ない自分の理解者であるルイージに涙を流す。

銀八「じゃあ早速答えるか。まず1だが、俺は別にマリオになって欲しいライダーとかないから」

新八「僕はデイクイドに変身してもらいたいです。そして僕を弄る読者達に裁きを！！」

銀八「どれだけ自分にドSな事する読者が憎いんだ！？」

銀八は新八の凄まじい怒りにツツコンでしまった。

銀八「つで、2で質問されたライホースの今の心境は？」

ライホース「早く出番を！！」

無印編になってからまったく出番がないので出番が欲しいと切実に願うライホースだった。

銀八「それで新八……」

銀八は新八の今の心境を聞こうと新八に顔を向けると…

新八「……………」ゴゴゴゴゴゴ

鬼の形相で黒いオーラを出している新八がいた。

銀八（めちゃくちゃ怒っているんですけどオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！……？……？……）

さすがの銀八も今の新八を見て顔を青くしてしまった。  
しかも後ろの黒いオーラから般若が見えるほどのだ。

銀八は少し声を震わしながら進める。

銀八「…な、『鳴神 ソラ』さん……新八の怒りは凄まじいです。  
つ、次いくな。ペンネーム『白黒』さんから、

『新八に質問です。』

新八「、お前はどんどんどうしようもないキャラになるなあ、そんなお前はイメージアップの為どんな事をしているんだ？

無縁に質問です。

なのはと銀魂の原作キャラでコイツは死んでほしいというキャラはいますか？

ソラに質問です。

ソラは巨乳派ですか？貧乳派ですか？どっちですか？『……ああ、確かに最近の新八はどうしようもないキャラになってるな』

確かに最近はロリコン堕ちしたりしてどうしようもないキャラに成り下がっているなと銀八は思った。

新八「コラアアアアア！誰がどうしようもないキャラだ！  
！原作人気投票8位の実力を舐めるな！！！」

どうやら自分はどうしようもないキャラだとは思っていないらしく、  
イメーリアップとかは考えていないらしい。  
そんな新八を見て銀八は呆れる。

銀八「うわア…………まあお前が今の現状が満足なら良いけど。それ  
で無縁は誰に死んで欲しいんだ？」

無縁「殺す価値もない」

銀八「こつちもこつちで無駄に傲慢だな。それで最後の質問のソラ  
はどつち派だ？」

ソラ「どつちでも良い」

ソラの言葉を聞いたリリスとフェイトとセイバーはガッツポーズし  
た。

ヤミが何故ガッツポーズしないかと言うと、『トランス』で巨乳に  
も貧乳にもなれるからである。

とりあえず気分によって変えようと思った。

銀八「かなり分かりやすいガッツポーズしてるな…………じゃあ『白黒』  
さんはどつち派ですか？」

新八「いや、なんですかその締め方！？」

何故か巨乳派か貧乳派か『白黒』さんに聞く銀八に新八がツツコム。

銀八はツツコミを無視して進める。

銀八「次、ペンネーム『ボッスン』さんから、質問です。」

なのはちゃんとフェイトちゃんやミちゃん！新八が君達の下着を盗んでいました！！どうO H A N A S H I しますか？

プレシアさん！新八がプレシアさんの娘をバカにしていました！！  
同じくどうO H A N A S H Iしますか？

アラド「oooooooooooo!!!新八に謝れえええええええ  
!!!!!!」

新八が悪いんだ…新八があんな事をするからー！！！！

バナージ「好い加減にしろ!!! 作者!!!」

後、贈り物を贈ります。さっきの写真集をプレゼントをします。僕は仮面ライダーディケイド激情態になって写真集を持って来ます。

ニンフ「あ、行っちゃった」

アラド「まあ、新八に警戒したから、ディケイド激情態になって行くっすか」

仮面ライダーオーズ プトティラコンボ（変身した火野映司）「なあ、作者さんは？」

バーナージ「映司さん。何でオースに？」

オーズ プトティラ「ああ、あの眼鏡…俺のパンツを盗みやがって…しかもパンツをバカにしゃがって…生きて帰れると思うなよ!!」

バナージ「え？」

仮面ライダーW サイクロンジョーカーゴールドエクストリーム（変身した左翔太郎とフィリップ）「同感だ。あの眼鏡はおやっさんをバカにしゃがって…あいつは生きて帰るか!!」

仮面ライダーディケイド 最強コンプリートフォーム（変身した門矢士）「ああ、俺の事をシスコンモヤシって言っていたからな…!!」

オーズ プトティラ「後、俺と翔太郎さんとフィリップさんと士さんとオールライダーがあのお眼鏡をぶっ倒すからな!!」

WCJGX「因みにオールライダーの一部は強化形態と最強形態になっているが」

ディケイド 最強CF「さて、行くか」

ニンフ「大丈夫かな？新八さん…」

バナージ「そうだな…って俺のポケットに紙が…」

アラド「何々、質問の追加です。バナージ君とニンフさんとアラド君が新八の事を駄目眼鏡ロリコンオタクって言っていました。どう思いますか？」



新八「ゴフォツ!!」

新八の真上から垂直に鉄拳を喰らわせる。

グシャッ!と言う音がし、新八が拳に潰された地点は没落し周りはひび割れていた。

銀八「し、新ハイイイイイイイ!!」

さすがにやり過ぎと言っても過言ではない攻撃を受けた新八を見て銀八は顔を真つ青にさせながら新八の名を叫ぶ。

ヤミの作った拳がどくと、眼鏡がひび割れ真つ黒焦げのボロボロの姿になった新八が仰向けで倒れていた。

さっきで死んでも可笑しくないだろう新八に対して天は無常にも追い討ちをかけた。

ズドオオオオオオオオオオ!!!!

なんと紫色の巨大な雷が新八に向かって落ちた。もちろん動けない新八はモロに喰らう。

そして新八のいる地点は爆発し、爆煙が上がる。しかもあまりのダメージなのか新八は悲鳴すら上げていなかった。

銀八は雷がどこから北の物なのかすぐに気づく。

銀八（プレシアが次元跳躍して特大の雷を放ってきやがったアアアアアアア!!）

どうやら娘をバカにされたのがかなり頭にきたらしく、わざわざ次元跳躍して雷を落としたようだ。

新八が虫の息だと知らないプレシアは容赦なく雷を放ってしまった。

銀八「……新八、やすらかに眠れ」

最早今ので新八は死んでしまっただろう。3番の質問に答える暇はないと思った銀八は悲しみを乗り越え質問コーナーを進めようとすると……

新八「……………」ゴゴゴゴゴゴゴ

凄まじい黒いオーラを出しながら幽鬼のようにゆらりと立ち上がった。

銀八「し、新八！？お、お前生きてたんだな」

銀八は今の新八を見て顔を真っ青にしながら話しかけるが、新八は黒いオーラ出しながら俯いているだけでまったくの反応がない。

不思議に思ったが、今の新八があまりにも恐ろしかったので話し掛ける事ができない。  
すると…

新八「この恨みイイイイイイイイイイ！！！！全ての怒りをこの眼鏡にイイイイイイイイイ！！！！」

なんと黒いオーラが新八の眼鏡に集まっていき、眼鏡に凄まじい負の力が溜まって行く。

銀八「ぬわっ！？こ、これは！？」

銀八はあまりにも大きい負の力で出来た突風で今にも吹き飛ばされ

そうになるが、足に力を入れてなんとか耐える。

銀八「ま、まさか！あまりにも読者から虐めにブチギレて、怒りの感情が具現化したとも言うのか！！」

なんかどこぞのバトルマンガのような解説をする銀八だが実のところその通りで、今の新八は怒りにより奇跡を起こしたのだ。

新八「晴らしてくれるわコンチクショーーーーー！！！！！！！！！！」

新八は巨大で真っ黒の極光をボッスンさんの所のバナージ、ニンフ、アラドに向かって放った。

どうやら自分をバカにした三人が許せなかったらしい。

バタッ

そして力を使い果たした新八は白目を剥いて倒れる。

その光景を呆然と見ていた銀八は我に返り、コーナーを再開させる。

銀八「……え、え……と……まあ色々ありましたが最後に新八が放った極光に『ボッスン』さんの所のバナージ、ニンフ、アラドは気を付けて下さい」

今は新八がさっきの事で気絶してしまったので、アシスタントの新八が起きるまで銀八は一人で進める事にした。

銀八「じゃあ気を取り直して次いきます。ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』では質問します。』

1 レナードを襲った転生者達に質問。何でレナードを襲ったんですか？

2 銀さんに質問。エイリアンやプレデターを倒せますか？

3 近藤さんに質問。異世界の門に何か居ましたか？

『以上です。後、なのはとフェイトに贈り物です』

なのはには白騎士のアーク、フェイトは黒騎士のアークです。シンナイトになってもデバイスの魔法が使えます。威力は十倍になります。

レナード「今回はこれにて」……「そう言えばなんで転生者達レナードを襲ったんだろうな？」

銀八もなんで転生者達がレナードを襲ったのか分からず首を傾げる。その時ウィーンと天井からモニターが出てくる。なんか意外にハイテクだ。

そしてモニターには転生者達が映っていた。しかも全員怒りの表情をしている。

転生者達《それはレナードがフェイトにフラグ立てたからだ！！

》

銀八「すんげー下らない理由だなおい！」

転生者達《あんなハーレム野郎は殺す殺す殺すウウウウウウウ

！！！！！！》

無縁《《その前に俺に殺されるけどな》》

転生者達《《ぎゃアアアアアアアアア！！！》》

プッン！

転生者達がレナード殺すコールをしていると、無縁が転生者達の後ろに現れ転生者達の悲鳴を上げた後には何も映らなくなった。

銀八「……………じゃあ2の銀時、答えろ」

とりあえずさっきのバカ共の事は忘れる事にしてコーナーを進めていく事にする銀八。

銀時「そうだな、まあいけんじゃねえの？俺その二匹より凄いエイリアンと戦った事あるし」

まあ確かにデツカイミミズみたいなエイリアンと戦った事ある銀時ならプレデターと本場のエイリアンともそれなりに戦えるだろうと思った。

銀八「いや、プレデターとエイリアン舐めんなよ！プレデターは姿消せるし、エイリアンはなんでも溶かす血を出すんだぞ！」

銀八は二匹の宇宙最強とも呼べる生物を甘く見ている銀時に銀八が声を上げてツツコム。

銀八「それで3の近藤だけだよ、お前一体何か見たのか？」

銀八はジト目で近藤に聞く。

近藤「そうだな、でっかいゴリラがいたな」

銀八「ゴリラ！？でっかいゴリラがいたのか！？」

銀八は白騎士物語にでっかいゴリラなんて出ないのに出たと言う  
近藤に驚きの声を上げる。

近藤「ああそれに、オメガモンとかもいたぞ」

銀八「それデジモンじゃねえか！！」

ドカ！！

近藤「ゴハッ！！」

銀八は何故かデジモン見たと言っ近藤に飛び蹴り喰らわせる。

銀八「なんで異世界の門じゃなくてデジタルワールド行ってんだよ  
テメーは！！」

銀八は近藤にツッコミ浴びせるが、生憎近藤は気絶しているので聞  
いてない。

銀八「たく……じゃあ『白騎士君』さんは廊下に立ってなさい」

新八「う、うん……」

ここで新八が目を覚ます。

銀八「お、やっと起きたか」

新八「あ、銀八先生。あの…一体僕に何があつたんですか？なんかさっきまで記憶がないんですけど…」

どうやら新八はショックのあまりさっきの事を覚えていないようだ。

銀八「あ、いいいい！そんな大した事じゃないから思い出さなくていい！！」

銀八はさっきの事をすぐに忘れさせようとする。さすがにさっきの事を思い出させるのはかわいそ過ぎるし、なによりまた新八の怒りを目覚めさせたくない。

新八「んんん何か負に落ちませんけど…まあ良いかな」

新八が思い出そうとしない事に銀八は安堵し、コーナーを進めて行く。

銀八「じゃあ次の人いくぞ。ペンネーム『ケン』さんから、  
『ケン』任務完了。質問をするか」

松平のつつあんへ

新八がアンタの娘である栗子さんに手を出し傷物にしようと企んでいます。蜂の巣にしますか？それとも若本系の必殺技を使って処刑しますか？

將軍様へ

新八がプールにて変態ブリーフ將軍と言っていました。打ち首しますか？

女性陣へ

新八が貴方達の下着を盗み鼻でクンカクンカしニヤニヤしながら喜んでました。どうしますか？

はやて「ほな・・・殺しに行くで・・・」

雪蓮「ええ・・・」

メアリ「調子に乗り過ぎてるわよね・・・あんのクソ眼鏡・・・」

はやてと雪蓮、ここでは初登場のメアリが怒りを露わにしそれぞれ杖、長剣、二刀を手に使っていた。

尚はやては背中から5対10翼の純白の翼が生え髪の毛の長さが膝裏まで伸び、白く輝いている銀髪に銀色の瞳に変化した姿の天使化、雪蓮は髪の毛が白く輝いた銀髪、瞳の色が翡翠色、頭の上から白い毛並みの虎の耳、腰から白い毛並みの虎の尻尾を生やした姿の白虎化、メアリは髪の毛の色が銀髪、瞳の色が金色になり、頭に猫の耳に似た銀色の毛並みの獣耳、お尻から銀色の尻尾が生えてくる形態の白獅子化に変化していた。

尚メアリの解放形態は本編で明らかになり、もう一つの解放形態も出てきます。

統夜「お前らどうかしたか？」

殺気と怒りのオーラを纏っている三人に恐る恐る聞いてみた。

はやて「あのクソ眼鏡猿が統夜の事を馬鹿にしてたんや・・・二度と馬鹿に出来んようにしたる」

雪蓮「あんの眼鏡坊やは・・・私の事を・・・『飲んだくれニートがお似合いですね』って言って来たのよ・・・許せる筈が無いでしょ・・・」

メアリ「私は・・・ぐへへ・・・閣下・・・その大きな胸に飛びこんでもいいですか？」とか言って来たのよ!!」

三人の言葉を聞いた統夜は青ざめた。

何故なら三人の逆鱗に完全に触れているからである。

統夜本人にとつて大したことは無いが・・・時と場合によっては違うが・・・

はやて「だから・・・止めたらあかんよ？」

雪蓮「さあ・・・どんな悲鳴を上げてくれるのかしら」

メアリ「轟焰と轟雷で痛めつけてあげるわ」

三人は行ってしまった。

統夜「黒龍さん・・・メアリの持つ轟焰は特異魔力変換資質の一種で焰の十数倍の力を持ち、轟雷は特異魔力変換資質の一種で雷の十数倍の力を持つから・・・」

華琳「止め無くていいの？」

統夜「あいつらを止める気力が湧かない・・・」  
「……おいしいおいしい！！！！さっきのボッスンさんといい、このケンさんといい、新八に何か恨みでもあんのか！？」

またとんでもない質問と言つか嫌がらせを新八一点に絞つてしてくる読者達に銀八は顔を真つ青にさせる。そしてここまで読者に嫌われている新八にちよつと同情してしまった。

そして被害者である新八に恐る恐る目を向けると……

松平「テメーこのメガネ……！！うちのかわいい娘を傷物にしようと  
は、死ぬ覚悟はできてるんだらうなア！？」

新八「ちよつ！それごか……」

松平「ぶらアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ズドーン！！

新八「うぎゃアアアアアアアア！！！！」

拳銃から特大の火球を新八に向かって放つ松平。一体あなたはどこの第六天魔王ですか!?

そして將軍様は……

將軍「……」

銀八「涙目だよ！我慢しているけどすっかり目じりに涙作っちゃってるよ！！」

と涙を我慢している將軍に銀八は驚く。將軍様はお心が広いような



銀八「ぎやアアアアアアアアアア！！！ゾンビだアアアアア  
！！！！」

モザイク新八「誰がゾンビじゃアアアアアアアアアア！！！生きと  
るわ！！」

ギャグ仕様なので生きているのだが、未だにモザイクは取れない姿  
だが。

新八はモザイク姿は嫌なので体中に包帯を巻く。  
そして座布団に乗り、何故か宙を浮く。

大谷新八「ヒヒヒ……僕をバカにする全ての読者に等しく復讐を」

銀八「おいしいiiiiiiii！！！！なんでお前戦国BASARAの大  
谷吉継みたいになってんだよ！？どうやって飛んでんだその座布団  
！！」

もう今の新八は『戦国BASARA3』に出て来る『大谷吉継』モ  
ドキにしか見えなかった。

そして大谷新八は両手を前に出して黒いオーラを出しながら叫ぶ。

大谷新八「我が恨みを受けよオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！  
！！！！！！」

すると……

ガチムチオカマ達

『『アハ〜ン♪待っててねケン様〜♪』』

なんとかガチムチオカマ達がケンさんの所に向かって行った。

銀八「いや、なにがどうなってんのオオオオオオオ！？」

銀八はあまりにもおぞましい光景に顔を真っ青する事しかできなかった。

大谷新八「ヒーヒッヒッヒッ！これが我が恨みよ」

大谷新八は不気味な笑いをする。

銀八「もう完全に新八じゃなくてただの大谷になってんだけど！？」

銀八はもう今の新八の姿に啞然とするしかなかった。

銀八「もういいや。じゃあ『ケン』さんはオカマ達に気をつけてください。次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』まあいいや、『皆さんはハートレスの中で気になる奴はいますか？』」

アリア「次は私。『みんなに聞くけど自分を東方のキャラでたえるならどんな人だと思う？』ちなみに私は一綿月 依姫（わたつき の よりひめ）ってことよ」

真王「銀さんなら博麗霊夢で決定だけどな。最後の質問。『ぶつちやけ魔物キャラ出してあげません？』」……すみませんが、作者である黒龍はあんまり東方の知識がないので答えられません」

銀八は黒龍が東方の知識がない事を謝罪する。

銀八「じゃあまず1を万事屋メンバーに答えてもらいます」

万事屋

『特にいない（いません）（いないです）』』

銀八「はい、どうやらハートレスに興味はあまりないようですね。それで最後の3は作者に答えてもらいましょう」

黒龍「なるほど、魔物キャラですか。中々斬新ですね。面白そうですし、とりあえず話が進んで機会が有ったら出しましょう。あまり間を置かずにオリキャラ多く出すと読者がついてこれなくなる可能性がありますから」

銀八「はい、『真王』さん、黒龍はあなたのリクエストには賛成のようですけど……俺は更に銀時とソラの野郎がハーレム作るのには全面的に反対です」

大谷新八「ヒヒヒ……まったくその通り。惚れるなら我よに惚れよ」

銀八「エセ大谷は黙ってる。次、ペンネーム『支配者』さんから、『支配者』いや〜お花を見てると気分が晴れやかになるな〜ん？」

支配者が花屋でお花を見ていると

ドカアアアン！！

支配者「ギアアアアア！！??？」

黒龍さんの所の新八が放ったビームを受けた支配者が黒焦げになった。ついでに周りにあったお花の鉢植えなどがメチャクチャになってしまった。

???「如何したんですか!？」

すると爆発音に驚いた最凶ボイスを放つ花屋の店主が出てきた。そのこの人物は

屁怒組「うわアア!お花達が!何があったんですか!?!??」

そう、最凶のキャラ屁怒組様の花屋であった。

支配者「黒龍さんの所の新八が放ったビームのせいでお花達がめちゃくちゃになってしまったんです……」

支配者が屁怒組様に訳を説明した。

屁怒組「そうですか……。では向こうの新八さんと『OHANA SI』してきます……。」

屁怒組様は声を低くして黒龍さんの所にいる新八の元へと向かった。

支配者「では今回の質問です。

新八に質問

どうやって屁怒組様の恐怖から生き残りますか?（黒笑）

女性陣に質問

新八があなた達の事を罵倒していました。どうしますか?

シャナ「アイツ調子に乗りすぎてるわね……。」

シャナは愛刀”贄殿ノ遮那”を構えた。

ヤミ「今度こそあのロリコンに引導を渡してあげましょう」

ヤミも腕を武器に変えた。

セイバー「我が”エクスカリバー”で跡形もなく消し去ってくれる……。」

セイバーも剣を構えた。

綾子「消してやる」

イヴ「僕をバカにしたらどうなるか思い知らせてやる……。」  
セト「同感だな……。」

ソルヴア「ぶつ殺してやるぞ！あのロリコン眼鏡があー！」

薫「私にまであんな事を言うなんていい度胸してるわね……。」

美琴「消し炭にしてやるわ……。」

黒子「お姉さまに近づく害虫は排除しますの……。」

ナナ「肉食動物達の餌にしてやる……。」

ナギ「いや、私の”デジモン”軍団の餌にすべきだ……。」

ヴィルヘルミナ「お嬢様を侮辱する物排除するのであります……。」

マリア「ちよつと新八君は調子に乗りすぎですね……。」

アルカ「跡形もなく消してやる……。」

そはら「新八さん……。」

アストレア「殺す」

ニンフ「脳みそ爆発させてやるわ」

他の女性陣もかなり黒いオーラを放っていた。

剣心「あの〜お主等何をそんなに怒っているんでござるか？」

剣心が恐る恐る聞いてみた。

シヤナ「あのボケ眼鏡…。私の事貧乳糖尿女って言いやがったのよ

……」

ヤミ「私はえっちいの大好き変態鬼畜者と言われました……」

セイバー「私は永遠の貧乳騎士王と……」

綾子「私は”ロリコン女”って言われたわ……。護をバカにしてるみたいで許せない……」

イヴ「僕は頭の悪さがアニメの女性キャラナンバーワンといわれた

……」

セト「僕は貪欲デブデブ女だ……」

ソルヴァ「私の事を三流独裁者と抜かしやがった！殺す！！」

美琴「私の事をアイツのツンデレストーカービリンって言いやがったのよ……」

ナナ「私にはモモと違って残念体系の他人チビって言いやがった……」

……」

ナギ「私の恋は絶対に実らない何故なら”貧乳ドチビお嬢様”だからだと！いい度胸だな！！」

薫「私の事剣心の”ゴリラブストーカー”って抜かしやがったのよ

……」

マリア「誰が若作りして年齢をごまかしている四十代メイドですか

……。之はかなりきついお仕置が必要ですね……」

アルカ「私の事を”ブラコンバカ”おまけにクルスの事を”貧弱弱虫小僧”だと！許せん！！」

そはら「私を変態大好き”究極変態女”って言ったんですよ！」

アストレア「誰がバカを超越したバカジェロイドですって！？絶対殺す！！」

ニンフ「あたしを永遠の貧乳ドちびって言ったのよ。メチャクチャにしてやる……」

彼女達はそれぞれの怒りを言った。

銀時「それ、誰が言ってたんだ？」

女性陣『作者が言ってた』

彼女達は口をそろえてそう言った。

銀時「おい！お前デタラメ言ってるじゃねえよ！」

支配者「証拠がありますよ」

支配者はそう言ってDVDを再生した。

するとそこにはマイクを持った支配者と『黒龍』と書かれたプラカードを首から下げた新八の姿があった。

プラカードを下げた新八はさっき彼女達が言っていた悪口を支配者に向けて言っていた。

支配者「之が証拠です」

黒い笑みを浮かべてそう言う支配者に男性陣はもう何も言えなかった。

女性陣『じゃあアイツ殺してくるから』

女性陣はそう言って黒龍さんの所の新八の元へと向かった。

男性陣『さようなら』黒龍（殿）『の所の新八（殿）』

男性陣の皆は手を合わせてそう言った。

支配者「じゃあね新八君」ハハハハハハハツ

支配者は思いつきり黒い笑みを見せながらそう言った」……おい  
iiiiiiiiiii！！またとんでもない事態になってんぞ！！？？」

銀八はまた新八虐めが来た事に顔を青くさせる。

銀八「おい！あの屁怒紹様相手にお前大丈夫か！？」

銀八は焦りながら聞く。

大谷新八「ヒヒヒ……終わりだアアアアアアアアアアアア！！  
！！！！」

大谷新八はあの屁怒紹相手に生き残る方法が思いつかず、顔を青くしながら頭抱える。

銀八「あのゝ新八君。お悩みの所悪いんだけど、後ろ」

大谷新八「…ん？」

大谷新八が後ろを振り向くと…

アリス「ほゝまだ懲りていないようだな」

アリア「にやゝ成敗」

なのは「少し…頭冷やそうか」

フェイト「許せない…！」

リリス「もう呆れてモノも言えません！」

アルフ「カブツていくどころの話じゃないよ」

ヤミ「刻みます」

神楽「覚悟はできてるアルな駄目ガネ」

セイバー「我が剣の錆にしてくれる」

ライダー「どうやら反省が足りないようですね？」

女性陣が凄まじい殺気を出しながら新八を今にも殺そうとしている。どうやらさっきの新八が言ったと言う嘘の罵倒のせいも相まって相当憤慨しているらしい。

銀八はそんな彼女達を見て顔を真っ青どころか顔面蒼白になりガタガタ震えている。

だが、そんな彼女達を見ても大谷新八は慌てずにいる。

大谷新八「ヒヒヒ………やってみよ。返り討ちにして我が愛人にしてくれる！」

勇気があると言うか、無謀と言うか、バカと言うか、大谷新八は怒れる女性達に突っ込んで行った。



なっぺ「あ、道具や能力は一切禁止ね。その身一つ、筋力や経験などでなんとかすること。ついでに、周りに塵一つの影響も与えないこと」

ベス「無茶振りですね」

なっぺ「まあ、これくらいどうこう出来ないと、ねえ。転生した意味なんてないよねえ？」

ベス「なっぺさんが黒くなったようです」

なっぺ「確かめやすいように実際に投げてもらおう」

吼太「めんどいな……ほらよ」

ブンッ

なっぺ「そちらの解答者の人数分投げたから、ちゃんと何とかしてね。でないと大惨事、だゾ」……いや、何やらかしてんのあの人才オオオオオオオオオオオオ！！！！……」

銀八は銀河を投げてきたなっぺさんに驚きシャウトしてしまう。

これも人外とかそう言う領域の話だ。

モザイク新八「ちょっ！？これ絶対ヤバイですって！早く転生者達の様子を確認しないと！！つかいつまで僕はモザイクなんだよ！！！」

モザイク新八は自分がいつまで経ってもモザイクなのにツッコミ、

モニターを付ける。  
すると…

転生者A《ぎゃあああああああああ！！！！！んじやこりゃあああああああああ！！！！》

転生者B《なんかとてつもない物が降って来たアアアアアアアアアアアア！！！！！！》

転生者C《死ぬウウウウウウウウウ！！！！！！》

転生者D《まだハーレムの夢がアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！》

まるでこの世の終わりのような光景が広がっていた。

新八「あの、コレどうすれば…」

銀八「しゅ、終了オオオ！！」

新八が冷や汗を流す隣で銀八は途中でモニターを切ってしまう。

新八「ちよっ！？あんた何やってんですか！？」

銀八「もうあいつ等の事忘れて次進みましょう！」

新八「いや、良いんですか！？それで良いんですか！？」

銀八「うっさいだよ眼鏡！！もうこうなりや知らん振りだ知らん振り！！！！」

銀八は鬱陶しそうに新八に言葉を返す。

新八「なんて無責任な人だ！」

銀八「じゃあ『なつぺ』さん、大半の転生者は銀河なんて無視して逃げましたので、投げた本人である吼太に壊れた場所を直させなさい。でないと吼太ラバーズに吼太を襲わせます」

新八「生きてるんかい！！しかも吼太に羨ましい嫌がらせしてるし！！！」

銀八「黙れエロガキ！！はいじゃあ次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『輝刃』…凄まじいモノを放ったな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・セフィロスに質問…他にどんな叫び声が出せる？中の人関連で…。

ハハハ…そこいくか…（汗）。次は俺からだ。

2・セフィロスに質問…もしこんな人に絡まれたらどうする？

『フフフ…久しぶりだね…タカヤ兄さん？さあ…俺と殺<sup>や</sup>り合おうよ！！』（テッカマンエビルの姿の転生者）

輝刃「…お前もどっこいどっこいだと思うぞ…（汗）。」「……じやあセフィロスに答えてもらうか」

モニターが現れ、そこにはセフィロスが映っていた。

セフィロス《では、出させてもら…》

銀八「終了!」

プツン!!

銀八は強制的にモニターを切った。さすがにあんな鼓膜が破れるような大声二度も聞きたくなかった。

新八はその辺は同意らしく何も言わないが、汗を流しながらさつきセフィロスに映っていたモノを思い出す。

新八「あの、先生。さつきセフィロスさんの後ろになんか血まみれの…なんて言うかテツカマンエビルみたいな人がいたんですど…」

銀八「気にすんな。セフィロスがテツカマンエビル姿の転生者を瞬殺したとしても気にするな」

新八「は、はあ…」

これ以上追求しても怖いだけなので新八は何も言おうとしなかった。

銀八「次が最後だな。ペンネーム『黄色いのなにか』さんから、

『新八に質問。前回の贈り物でガチムチのオカマに追いかけられてその後どうになりましたか?』……どうなったんだ?」

新八「とても親切な人が助けてくれました」

銀八「いるんだな、物好きな奴も」

新八「それどう言う意味ですか!？」

銀八「じゃあ『黄色いのなにか』さんは廊下に立ってなさい」

新八「今回はこれで終わりですね」

銀八「ああ。今回は沖田がアシスタントです」

新八「そしてゴラァー!!! 僕に酷い質問した読者共! 次もうそんな質問すんじゃないぞコラ!!!」

銀八「読者に喧嘩売んじゃないねー!!!」

ドカツ!!

新八「ゴハッ!!!」

新八は銀八に殴られた。

新八「ど、どどどどどとうすれば良いんだ!？」

そうついに来てしまったのだ。質問コーナーが終わった後にこちらにやって来る他作品小説のキャラが入ればその話をするこの時が…

何故新八がここまで体をブルブル震わせ涙目になり頭抱えて顔面蒼白になっているかと言うと、何故なら今回三つの作品から来訪者が



何故か仮面ライダーWのキメ台詞を言いながらやって来る支配者さんの所のシャナとヤミとセイバーと綾子とイヴとセトとソルヴァと美琴とナナとナギと薫とマリアとアルカとそはらとアストレアとニンフがやって来る。

新八「多過ぎでしょコレEEEEEEEEEEEE!!!!!!」

何故自分一人にこれだけの過剰戦力が来るのか分からない新八はとりあえずダッシュで逃げた。

新八「逃げ切つてみせる————!!!!!!」

だがいくら新八が一般人よりも身体能力が上でも相手が悪過ぎた。

ディケイド最強CF「逃がすわけないだろ」

オーズプトティラ「うおオオオオオオ!!!!!!」

ダブルCJGX「さあ、お前の罪を数えろ」

簡単に回り込まれた。

新八「マズイ!ならこつち!!」

新八は後ろに逃げようとするがそつちも囲まれ、そして右も左も囲まれていた。

新八（完全に四方八方囲まれたアアアア!!!!!!）

ナギ「年貢の納め時だな」

美琴「覚悟しなさい」

イヴ「さア覚悟しろロリコン！」

アルカ「塵も残さず溶かされる覚悟はできているな？」

新八「そんな覚悟ありません！！！！！」

全員

『『問答無用！！！！』』

新八「うわああああああああああああああああああああああ！！！！！」

もうダメだと思い新八はうずくまった。

新八「……………アレ？」

いつまで経っても来る筈の痛みがこないの、気になった新八は恐る恐る顔を上げてみると……

ディケイド最強CF「なにすんだこのやろ！！」

アストレヤ「だからわざとじゃないって言ってるでしょ！！」

ニンフ「ちょっと危ない！！」

はやて「当てるためにやってるんやから当然や！！」

雪蓮「くらいなさい!!」

オースプトティラ「うわっ!!」

イヴ「誰がバカじゃコラアアアア!!」

WCJGX「誰もそんな事言っていないだろ!!」

ズドドドドド!!ドカン!!ガキン!!バコン!!ドビュン!!  
ズバーン!!

皆喧嘩しているのだ。

新八「……えっ?どうなってるの?」

実はアストレアが剣を長くして攻撃しようとした時、ドジって転んでオールライダーに攻撃してしまったのだ。

怒ったオールライダー達がアストレアに攻撃したら近くにいた支配者さんのキャラ達に被弾。

そして怒った支配者さんのキャラ達はオールライダーに攻撃したら今度はケンさんのキャラ達に被弾してこのような一大戦争の光景が完成してしまったのだ。

あまりにも数が多すぎた上に連携も何も取れないので、誰かに被弾してしまうのは当然だろう。

新八（なんだか分からないけど今の内に!!）

新八は皆が喧嘩している隙に逃げた。

新八「ハア、ハア、ハア、ハア!ここまで来ればもう安心だ!」



実のところさっきので終わるはずだったのだが、これにはまだ続きがある。

ミイラ新八「…ひ、酷い目にあった…」

包帯グルグル巻きのミイラ状態になった新八はおぼつかない足取りで歩いていった。

その時、倒れている雪蓮を見つけた。そして周りを見渡す。

ミイラ新八「こ、こっちもこっちで酷い有様だ…」

色々なところにクレーターできたり黒い煙を上げる激戦地には力尽きて倒れているゲスト達がいた。

新八がその光景を呆然と見ていると一人の人物……いや、怪人がやって来る。

カザリ「おや、もう終わっていたようだね」

ミイラ新八「あ、あなたは『仮面ライダーオーズ』に出て来る『グリード』の一人のカザリさん!？」

カザリ「解説ご苦労様」

ミイラ新八「なんであなた此処に…!？」

カザリ「いや、黒龍がさすがに君が一人じゃかわいそうだからって、

特別ゲストとして僕を寄越したんだ」

ミイラ新八「黒龍ウウウウウ！……あんなんだかんだ言っても作者だよ！！マジ感謝だよ！！」

カザリ「じゃあ君の欲望、解放しな」

ミイラ新八「へっ……？」

呆けた声を出す新八にカザリは新八のおでこに出来たメダルを入れるような挿入口にセルメダルを入れる。  
するとメダル怪人『ヤミー』が現れる。

ヤミー「恨みいいいい！！！」

するとヤミーは動けない声を上げながら動けないライダー達の顔に油性マジックで落書きしたり、体にペンキぶっかけたりする。

ミイラ新八「やる事しよば！？」

カザリ「あ、今度は女性達に何かしてるよ」

ヤミー「恨みいいいい！！！」

雪蓮「あぶ、いや、あう……！！／／／／」

ヤミーは雪蓮の胸を揉みまくったり、尻触ったりしてセクハラしていた。

ミイラ新八「ちよつとオオオオオオオ！！！！！！あれなにやつ

てんですかアアアアア／／／！！？？」

ミイラ新八は顔を真っ赤にしながらカザリに叫ぶように話しかける。

カザリ「僕は知らないよ。アレは君の欲望だから」

ミイラ新八「あんなのが僕の欲望なんですか！？」

カザリは無言で頷く。

ヤミー「むオオオオオオオオオ！！！！！」

ヤミーは成長して姿が変わり、眼鏡を掛けたサルみたいな怪人・『サルメガネヤミー』になる。

ミイラ新八「いや、なんじゃありやアアアアアアア！！！！！！？  
??」

ミイラ新八の叫びを尻目にサルメガネヤミーは成長したので素早い動きでライダー達にシヨボイくてウザイいたずらし、女性陣にはおもしろいきりセクハラする。

さすがにこの後どうなるか分らないと思った新八はすぐに逃げた。ちなみにサルメガネヤミーも一緒に逃げた。

カザリ「さて、僕も帰るとするかな」

カザリも帰った。

黒龍「……気絶しているし、帰すしかないか」

黒龍は氣絶してあられもない姿になったゲスト達を元の場所に帰した。

ちなみにディケイド激情態になって写真持って来た『ボッスン』さんはと言つと…

ボッスン「いやゝ酷い目に遭いました」

黒龍「ご苦労様です」

ゲスト達の大乱戦に巻き込まれたがなんとか生き延びて写真集を渡す事ができた。

## 第二十一訓・仕事は真面目にやらないと怒られる（後書き）

黒龍「はい、現在のアンケートの中間発表です」

1：11票

2：3票

黒龍「次回ついにアンケートの結果が決まります。まだアンケートを出していない方は出してください」

黒龍「じゃあ贈り物コーナーです。今回贈ってくれた物はこちら」

『鳴神 ソラさんからは銀時LOVEズにバイク乗りな銀時の写真を、ソラLOVEズにはマリオの服を着たソラの写真』、『ボツスンさんからは前回燃えてしまった写真集』、『なっぺさんから塗った場所を好きな異性に揉んでもらうと、たゆんたゆんかつ綺麗で形も良くなるかもしれない薬と好きな異性どうしで粘膜と粘膜を接触させると互いが欲しくて欲しくてたまらなくなるかもしれない薬』、『天破さんからは銀時に豪華パフェセット3年分、ソラと桂にエリクサー×100、沖田にジャポニカ弱点帳 銀魂ver』、『黄色いのなにかさんからはなのはに銀時のデフォルト姿をした三種類の音が鳴る目覚まし時計』

黒龍「贈っていただいた皆様、ありがとうございます」

ソラ「マリオの服はさすがにないな」

銀時「俺がバイク乗りね」

二人はフォックスから送られて来た写真を見ていた。

アリス「よし、薬は塗った。まあ私はスタイルには自信があるが、良くなって悪い事はない上にソラと触れ合えるからな」

フェイト「抜け駆けしないでアリス！」

リリス「私だってスタイル良くなりたいです！」

アリア「にや」ソラが逃げた」

シルバー「銀時も逃げたぞ！」

ヤミ「凄いダツシュですね」

ライダー「待ってくださいギントキ！」

セイバー「少し触ってくれるだけで良いんです！」

なのは「待つてなの銀さん！」

チェーン「なら、キスだけでも！」

銀時「誰が待つかアアアアアアア！！！！」

ソラ「お前ら目がヤバイからな」

追いかけてこが始まった。

桂「ソラよ、このエリクサーは凄いぞ！」

ソラ「そうだな」

銀時「おっしや！食いまくってやる！」

沖田「コレで土方を亡き者にできませア（黒笑）」

つで、最後の目覚まし時計。

ピピピ！ピピピ！

なのは「うゝん。まだ眠いの」

銀時目覚まし『起きてくれないとキスするぞ』

なのは「ふえっ！？も、もうちょっと寝ているの！／／／／」

銀時目覚まし時計『なのは、お前の事が大好きだ！』

なのは「私もなの！！／／／／」

銀時『俺と一緒に寝て嬉しいか？』

なのは「ふみやアアアア！！！！／／／／（ボフィン！）」

なのははまた物凄く幸せそうに眠りに付いた。

## 次回予告

モザイク新八「次回、『女子が料理できるのは男の勝手な妄想』に  
テイクオフ！って言うかなんでまたモザイクなんだアアアアアア  
アア！！！！」

## 第二十二訓：女子が料理できると思うのは男の勝手な妄想（前書き）

黒龍「本編を始める前に読者の皆様にお詫びしたい事があります。実は感想の受付が『制限なし』ではなく、『ユーザーのみ』になっていました。これついて深くお詫びします。そしてすぐに『制限なし』に変えたので、ユーザーじゃない方もこれから感想を書いてくれるとありがたいです」

銀時「お前いままで気づかなかったのか？」

黒龍「いや、ホントになんで制限なしになっていなかったのか不思議なんですよ。なんか他の作者さんみたいにユーザーじゃない方から感想こないから変だな〜って思ってた小説情報を見てみたら感想受付が『ユーザーのみ』になっていたんですよ」

銀時「ドジな事するな」

黒龍「面目ありません」

銀時「そう言えば、今回はアンケートの結果も発表するんだよね？」

黒龍「はい。ですが、ユーザーありきにしまったんで、次回発表にします。つと言う事で、まだアンケートを出してない方はどうし出してください」

銀時「じゃあ今回は久々の俺だ『リリカル銀魂ライダー』始まるぜ」

## 第二十二訓：女子が料理できると思ふのは男の勝手な妄想

此処は時の庭園。

ピピピ！ピピピ！

ソラ「……ん？ 十一時か……」

ソラは目覚ましを押してアラームを止める。

今の時間は午前十一時である。

何故朝食べてこの時間帯にソラが寝てるかと言うと、昨晚はセフィロスと戦ったせいで寝不足なのでフェイトが昼食を作るであろう十一時まで眠る事にしたのだ。

さすがに普段の生活とは違う時間に睡眠を摂るので、遅れないように目覚ましはセットしておいた。

ソラは顔を洗って掛けてあつた黒いコートを取る。

ソラ「……さて、行くか」

ソラはフェイトが料理をしているであろう厨房に向かった。

ソラは食堂の扉を開ける。  
すると……

アルフ「ソラアアアア！！ あんた一体フェイトに何吹き込んだんだい！！??」

ソラ「!？」

と鬼気迫る顔でアルフがソラの二の腕を掴んで迫ってきた。さすがのソラもこれにはギョツとした。

アルフ「フェイトが今とんでもない物作ってんだよ！！」

ソラ「……いや、言ってる意味が分からない」

アルフ「とりあえずこっちに！！」

アルフは無言を言わずソラの腕を引っ張って食堂に集まっている桂達の所に連れて行った。

ソラはこの時から何か嫌な予感がした。

そしてアルフに連れられてソラはすぐに桂達の異変に気づいた。アリスとアリアはいつもボーカーフェイスだが、それ以外は顔を青くさせて冷や汗をダラダラ流している。

ソラはその光景から事の重大さを察知した。

なにせいつも大抵の事にボケをしてまるで動揺と言う動揺を見せた事のない桂まで顔を青くさせて冷や汗ながしているのだから。

顔を青くしているが真顔であるのはある意味中々見れない光景だ。

そしてソラは全員の視線が一つのモノに集中しているのに気づく。

そして恐る恐る自分も皆の視線の方に目を向けた。

そこには……

フェイト「ふんふん」

とかわいらいしフリルのついた青いエプロン付けて鼻歌歌いながら鍋の中の物をかき混ぜているとても愛らしいフェイトがいた。

その姿たるやまるで愛くるしい小動物を思わせるのだが、問題はそこではなかった。  
なにせ……。

フェイト「ふん」

鍋から出ている湯気が紫だった。

間違いなく紫だった。普通は白い雲のような湯気なのに紫だった。

ソラ（……まだ寝ぼけているのか……？）

ソラはさすがにいないと思い目を擦ってもう一度見た。

フェイト「ふん」

そこには緑色の湯気が立っていた。

ソラ（……色が変わったな）

ソラはアルフに顔を向ける。

ソラ「おい。なんだアレは？」

アルフ「さ、さあ？ 確かフェイトはシチュー作るとか言ってたよ」

ソラは再びフェイトの方に目を向けるとまた今度は青色の湯気が立

っていた。

ソラ「そうかゝシチューかゝそれは凄いな。……マジか？」

アルフ「……うん」

自分のキャラ忘れて納得するような言葉を出した後、アルフに確認を取る。

アルフは少し間を開けて返事した。さすがのアルフ自身も緑色の煙出すものをシチューとは認めたくないらしい。

そしてソラはアルフの胸倉掴む。

ソラ「あれのどこがシチューだ？　なんでシチューがカラフルな湯気出すんだよ？　むしろお前らがフェイトに何吹き込んだ？」

ソラの問いにアルフは涙目で答える。

アルフ「し、知らないよ。アタシだってフェイトが“ソラのために頑張つて作る！”って朝十時から意気込んで作っていたとこ見ていて、飽きて寝ていたらいつの間にかあんな湯気出すもんが出来ちまったんだよ」

アルフとしてもフェイトが始めて料理を作るところを最初から見守っていたのだが、途中で飽きて居眠りしてしまい、起きた時にはあのような湯気出すシチューが出来てしまい、フェイトが料理を作る元凶であるソラが来るのが少し後なのだ。

そしてソラは他の皆に顔を向ける。

ソラ「他にフェイトがアレを作る工程を見た奴は？」

全員無言で首を横に振る。さすがにフェイトのシチュー？を見たシヨックがでかいのか、まだ声がマトモに出せずにいた。どうやら全員フェイトが料理を作るところを見ていないらしい。運が悪い事に全員自分の事をしていたみたいなのだ。

ソラは頭を抑える。頭痛までしてきた。

ソラ「とりあえず、集合だ」

ソラの言う事に従い全員が一箇所に集まる。そして小声でこの状況をどうするか話し合う。

ソラ「（おい。誰かあの鍋の中みてこい）」

ソラの言葉に神楽が講義する。

神楽「（なっ！ なら言い出しっぺのソラが見てこいヨ！ 私は見たくないアル！！）」

神楽の言うとおり紫やら緑やら青い湯気出す鍋の中身など誰が見たいだろう。

なんか見た時には記憶に残るようなトラウマが出来かねない。

アリス「（だが、このままだと得体の知れないモノを私達は食べさせられるぞ。一応どんなモノかは把握するべきだ）」

アリスの言うとおりあらかじめ食べる物を見ておけばいくらかはシヨックも和らぐ。

知っていると知らないじゃ心構えも違ってくるのだ。

桂「（それにもしかしたらまだ修正が可能かもしれぬ。この中でそれができるのはソラ、お前だけだ）」

桂はソラに視線を向ける。

確かに料理が異常に上手いソラならあのフェイトの湯気の色が変わる料理をマトモな物に変えられるかも知れない。

リリス「（それにフェイトちゃんが何を鍋に入れるか聞きだせるのもソラ様だけです）」

まあリリスの意見も最もだ。ソラにベタ惚れしているフェイトなら簡単に鍋に入れた材料をバラしてくれるだろう。そこでソラが待ったを掛ける。

ソラ「（おい。それ、誘導的に俺に行けって事だろ？）」

ソラの言葉を聞いて桂とリリスがあからさまに目を逸らす。どうやら図星のようだ。

ソラはため息をつき腹を括る。

ソラ「（……仕方ない。フェイトに料理作るのが許したのは俺だしな）」

ソラは決心してフェイトの所に向かった。その後姿はまさしく戦地に赴く百戦錬磨の戦士さながらだった。

それを見ていた神楽とアリスとアリアとリリスと桂とエリザベスとヤミとセイバーは心の中でソラを応援した。

ソラ「フェイト、何作ってんだ？」

まあソラはもうフェイトが何を作っているか知っているが、話題としてこの言葉を切り出しに使ったのだ。

フェイト「ん？……あ、ソラ。今シチューを作ってるんだ」

ソラの声に反応したフェイトは振り向き、ソラを見て笑顔で教える。

ソラ（って言うかなんでシチューなんだ？ 素人なら普通はカレーとかもつと簡単なを選ぶだろ）

まあフェイトが決めた事なので何も言えないが。

ソラは横目で鍋の中を見た。

そこにはブクブクと泡を出す紫色のなんかドロドロした何かが煮込まれていた。

ソラは反射的にサッと目を背けた。

ソラ（アレ？ なんか見てはならない物を見た気がするな）

だがはつきり見ちまった。シチューではない何かを見ちまったのだ。

ソラは気を取り直して鍋の中を再び見た。

今度は虹色の何かになっていた。

サッとソラは反射的に目を背けた。

ソラ（アレだな。たぶん俺は幻覚を見ているんだな。どんなに料理

を煮込んだって虹色になるわけないしな)

さすがに何時間煮込もうが何詰め込もうが虹色なんて色を出す筈がない。

さすがにこれは錯覚だと思い目を擦ってもう一度見た。

今度はカオスと言う言葉がピッタリのただのドロドロの廃棄物が何か分からない物体Xが出来ていた。

ソラ「……………」

サッ！と今まで一番速いスピードで目を背けた。

そこからソラはもう見るのを止めた。

つと言いかもう見ているだけで目がおかしくなりそうだった。

フェイト「さて、もう少し材料と調味料を入れようかな」

フェイトは一旦鍋を混ぜるのを止める。

ソラ(これ以上足す必要ないだろ。もう色んな意味で終わってるだろ)

ソラの心ツツコミむがもちろんフェイトにそれが届く事はない。

そしてフェイトは金色の三角物を出した。

待機状態の『バルディッシュ』である。

フェイト「バルディッシュ」

待機状態のバルディッシュは光り輝き黒い斧のような杖の姿に変わ

る。

ソラはフェイトのしたい事が分らず首を傾げる。

フェイトはバルディッシュを起動させた後、デッキカイまな板の上にマグロやら海老やら鮭など魚介類や大きな野菜を乗せる。

そして次に驚くべき事をした。

フェイト「それ！」

ザシュザシュザシュ！

サイズフォームにしたバルディッシュで野菜や魚達をみじん切りにしていく。

フェイトが金色の死神のような鎌を上から振り下ろすたびに魚や野菜が無残な姿に早変わり。

ソラ（ホントにコイツは料理の仕方勉強したのか？）

さすがにこの光景見たら疑いなくなってくる。

バルディッシュにしてもまさか自分がこんな用途に使われると思っていなかっただろう。

そしてフェイトはあらかじめ材料を無残な姿に鍋にポトポト入れていく。

もう完全に調理の仕方めっちゃよかった。

そしてフェイトは何かを取り出す。

フェイト「コレと……それにコレと……コレかな」

何故か試験管を取り出し、試験管の中にある赤や緑や青の液体を鍋の中に投入する。

ソラ（コイツは何作ろうとしてんだ？ もう料理とかそう言うレベルの物じゃないだろ）

さすがに試験管に入った液体を入れるところは見えていられなくなったソラはフェイトに問いかける。

ソラ「なあフェイト、なんで試験管に入った液体なんて入れてんだ？」

フェイト「ん？……ああ、コレ？」

フェイトはソラに空になった試験管を見せる。

ソラは“ああ”と頷く。

フェイトはその理由を説明する。

フェイト「これはナナシが前に作ったナナシ特性の調味料なんだ」

ソラ「何？ ちょっとそれ貸してくれ？」

フェイト「うん良いよ」

フェイトは素直に試験管を一本ソラに渡す。

ソラは試験管の口付いた緑の液体を指に付けて舐める。

それは特に体に悪そうではなく、むしろ良い味を出していた。

その後ソラは“悪いな”と言ってフェイトに空の試験管を渡す。

そしてある事が分かった。

フェイトは『マトモな材料』でカオス色のアレを作ったのだと……。

ソラ「……………」

ソラは顔を青くさせながら手で目を覆って桂達の所に戻った。

リリス「ど、どうでした?」

リリスが不安げに聞く。

ソラは手で目を覆ったまま答える。

ソラ「……無理だ。もうアレはさすがに修正不可能だ。アレはただの物体Xだ」

リリス「いや、物体Xってなんですか!?　なにが鍋の中に有ったんですか!?!」

リリスはどれだけショッキングな物が出来たか分らず更に不安を増徴させる。

ソラがフェイトの料理を物体Xとか呼ぶのも仕方ない。  
なにせ一体どんな物質だか判別できないようなモノが出来てしまったのだから。

そもそもマトモな材料でボイズンクッキング毒料理ようなモノを作ったのだ。  
どうやればあれがマトモな料理に変わるかは誰にも分からないだろう。

フェイト「みんなー!!!　シチューできたよー!!!」

リリス・セイバー・神楽・エリザベス・アルフ

（（き、来たアアアアアアアアアアア!!!））

リリスとセイバーと神楽とエリザベスは死刑宣告の合図を聞き顔を更に青くさせる。

アリス「あ、私はちよつと用事があつた」

アリア「にゃ〜……これからピアノの稽古」

アリスとアリアはあつという間に戦線離脱した。

リリス（に、逃げたアアアアアアアアアアアア！！！ しかもあからさまな嘘で！！）

アルフ（つつか逃げ足速！？）

逃げたアリスとアリアに残ったメンバーは怒りを覚えた。

フェイト「皆、お待たせ」

ソラ（待つてねえよ）

鍋掴みで鍋を笑顔で持ってきたフェイトにソラは心の中でツッコミ入れる。

フェイトはそのまま鍋敷きの上に鍋を置く。

ソラ達は恐る恐る鍋の中を見る。

そこにはブクブク泡を出すドロドロのカオス色の思いつきり体に悪そうな物があつた。

リリス（いや、無理でしょこれエエエエエエエエエエエエ！！！！ こん

なのどうやって食べるって言うんですかアアアアアアアア！  
！！？？？（）

アルフ（フエイトオオオオオオオオオオ！！　あんた一体どんな魔法使ったらこんなグロテクスなものができるんだよオオオオオオオオオオオオ！！！！！！）

リリスとアルフは予想以上にとんでもない物が出て来た事に内心シヤウトする。

ソラは口元を引くつかせながら聞く。

ソラ「……フェイト、お前……ちゃんと料理の本を読んだんだよね？」

フェイト「うん。その上で私なりにアレンジしてみたんだ」

リリース（なんで素人がアレンジとかしてるんですか！？）  
普通は料理の本に沿って作るのが基本ですよ！！）

リリースは心の中でフェイトにツッコミ入れる。

フェイト「それに母さんが言うには料理も科学も同じで、方程式を立てて作れば美味しい物ができるんだって」

リリース（いや、方程式なんて最初っから崩れてますよね！？ 足し算に無理やりアルファベット入れちゃってますよね！！？？）

もう新八に匹敵するくらいのツツコミを心の中ではばんばんフェイトに浴びせる。

まあ心の声なのでフェイトが気づく事はないが……。

フェイト「じゃあ食べて」

リリス（いや、無理ですよオオオオオオ！！！）

笑顔で言うフェイトに対し、椅子に座って自分の目の前にあるシチュ―と言う名の物体Xに涙を流す。

結局アリスとアリアは捕まってソラ達と一緒に物体Xを食う事になったのだが、どう考えたって食うのは無理である。

ちなみにナナシは今現在おらず、そしてチェーンは擬人化して半ば無理やり食べさせられる事になった。

全員顔を青くして固まっているだけで、食べようとしない。ちなみにアリスとアリアは何故か真顔。

だが、彼らはコレを食べなければいけないのだ。  
なにせ……

フェイト「あの…初めてで上手にできた分らないけど……一生懸命作ったんだ……／／／／／」

と恥ずかしそうに少し顔を俯かせて期待したキラキラした瞳で言うフェイト。

その姿は脅しまがいの黒い笑顔で食べさせる雌ゴリラのモノでもなく、無理やり口に暗黒物質ダークマターを突っ込む凶暴女のモノでもない。

それはまさしく、自分が誠心誠意籠めて作った手料理を食べてもら

って喜んで欲しいと言う、花のように儂げで、小動物のように可愛らしく、そして無垢な美少女の姿なのだ。

ソラ（ヤベーな。コレ絶対食えないと言えねえ）

もし今此処で“こんな見るからにクソ不味い料理は食えない”なんてはつきり言ってしまったら、暴力振って頑なに認めないような事はしないだろうが……絶対落ち込む、絶対涙目になって体育座りして悲しんでしまうだろう。

純粹無垢な少女であるフェイトをそんな風に悲しませるのは良心がある者にとっては刀で滅多切りにさせるより辛いのだ。

つまり、良心がある彼らは『食す』と言う選択肢しか残ってないのだ。

チェーン（なんで私を巻き込むんですかアアアアアアア！！？？  
久々の登場がコレって嫌がらせですよね！！！？）

折角、『祝福のカンパネラ』の『チエルシー・アールコット』似でしかも胸がE〜Fくらいまでのデカメロンを持った美人に擬人化して久々に登場出来たのにこの仕打ちはないだろう。

ちなみにチェーンやキーブレードの説明は既にフェイトとアルフにしている。

まあさすがにチェーンが人間の姿になった時は二人は驚いた。フェイトに至ってはチェーンの胸を見て落ち込んだ。

チェーンはソラに訴えるかけるような目で講義する。

ソラ（俺達は苦しい時も辛い時も一緒に乗り越えて来ただろ？……

相棒)

ソラは微笑を浮かべながらチェーンにサムズアップする。

チェーン(何感じの良い事言つて誤魔化そうとしてんですか!!  
それただ単に私を道連れにしているだけですよね!?)

今更だが何故彼らが『念話』とかを使わずに声を出さないで会話できるかはこのさいなしでお願いします。

ちなみに『念話』とは魔導師が頭に思つた事を相手伝える事ができる一種のテレパシーみたいなモノである。

フェイト「あれ? 皆食べないの?」

フェイトは皆が一向に物体Xに手を付けない事に首を傾げる。

しかもどこか不安そうな顔をしていた。どうやら皆が不味いから食べないんじゃないかと思ひ始めているようだ。

まあ完全に合っているが……。

リス(マズイですソラ様!! フェイトちゃん私達が食べない事に疑問に思っています!! 心なしか不安そうな顔しています!!)

このままではいずれフェイトにバレてしまう。

そこでソラはある事を思い付く。

ソラ「悪いがフェイト、コシヨー持ってきてくれ。俺はコシヨーでシチューを食べる派なんだな」

フェイト「コシヨー? うん、分かった」



チェーンに分からなかった。  
どう考えたって食べればさっきみたいな予想通り、っというより予想以上の肉体的被害を受けるのは明らかな筈だ。  
なのに何故？

チェーンの疑問に微笑を浮かべて息も絶え絶えになりながらソラが答える。

ソラ「フツ……なに……どんな味が気になった……ただだ……（ガク）」

ソラはそう言っただけで力なく目を瞑る。口からは血が垂れる。

どうやらちよつとした冒険心がソラにあんな行動をさせてしまったらしい。だが誰が彼の行動を愚行と言えよう。

彼はフェイトにこれから起こるであろう自分の反応を見せないためにコショウを持っていかせると言うフォローをいれ、尚且つ臆せず物体Xを食した。

その姿から死に様までまさしく勇者。彼をバカにするものはまず物体Xを食ってからバカにしろ。

そして死体……ではなく気絶体になったソラをセイバーが抱え涙を流しながら天に向かって叫ぶ。

セイバー「ソラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!」

アリス「ソラ……お前の行動は忘れないぞ」

アリア「……グス」

ヤミ「あなたは立派でした……」

リリス「安らかに眠ってください」

チエーン「あなたは最高の主です……」  
マスター

ソラに恋路を抱く面々はソラの行動に涙を流しながらソラの行動に感動していた。

他の者もソラの行動に黙って感動していた。

彼の勇士は彼らの心に深く残ったであろう……。

リリス「つで、どうしますか？　これから……」

全員（リリスとソラ以外）

『『……………』』

リリスも含めてソラ以外全員自分の席に戻ったメンバーは自分の前にある物体Xをジーツと眺めて無言を通していた。

もう戦線復帰できないソラはソファアで休ませている。

ソラのおかげで皿一つ分は物体Xを処理できたが、まだまだ物体Xは残っている。

まだフェイトはコシヨを探しているようで戻っていないが、このまま食べなければフェイトに感づかれた拳句悲しませてソラの行動も無駄になってしまう。

とは言えこれに手を付けるかと言えば別だ。

ソラを瀕死の重症に追い込むほどの威力。相当な勇気がなければできないだろう。

アリス「よしヅラ。後はお前が全部食べ。侍としての意地を見せろ」

肩に手を乗せて自分に全てを任せようとするアリスに桂が講義する。

桂「ヅラじゃない桂だ！　いくらなんでもそれはないだろうアリス！！　俺は成し遂げたい事が山ほどあるのだ！　こんな所では死ねん！！」

アリス「お前の死に場所はここだと知れヅラ」

桂「ヅラじゃない桂だ！！　何故お前に死に場所を決められねばならぬのだ！！　そう言うお前が食ったらどうなんだ！？」

アリス「私はアレだ。お前が食って死に、血まみれになるのを読者が期待していると思ったからだ」

桂「それはないだろう！！　その言い方はないだろう！！」

アリスと桂が口論していると、フェイトがコシヨーを持ってやって来る。

フェイト「ソラ、遅くなってゴメン。コシヨー持って来たよ。……アレ？　ソラは？」

フェイトは自分にコシヨーを持ってくるように頼んだソラが席に居ない事に首を傾げる。

リリス「そ、ソラ様は待ちきれなくて食べた後、眠くなってしまったようなのでソファで休んでいます」

フェイト「そうなんだ。悪い事しちゃったな……」

フェイトは早くコシヨーを持ってこれなかった事に罪悪感を感じてしまった。

そこにリリスがフォローする。

リリス「えっと、別にコシヨーがなくても食べられたそうです」

フェイト「そうなんだ、良かった」

フェイトは安堵してホツと胸を撫で下ろす。

その時、アリスがフェイトに話しかける。

アリス「そうだフェイト。次はタバスコ持って来てくれ。私は辛い方が良いからな」

フェイト「タバスコ？ うん、良いよ」

フェイトはアリスの頼みを快く引き受けそのままタバスコを探しに行った。

リリスはこの展開はさっきソラが物体Xを食べた時と同じ展開だと言う事に気づく。

リリス（まさか、アリスさん……）

さっきはなんだかんだ言ってもソラと同じ勇士を見せるのだと思っ  
たりリス。



神樂が声を上げて桂に駆け寄る。エリザベスはボードで叫んで駆け寄る。

桂は血まみれの顔で息も絶え絶えに最後の言葉を言う。

桂「……リーダー……エリザベス……後の事を…頼…む…」

そこでは桂は目を瞑って眠りに付いた。

神樂「ツラアアア！！ お前の死は無駄にしないネ！！」

リリス「いや、桂さん死んでません！！ 気絶しただけです！！」

勝手に桂殺した神樂にリリスがツツコム。まああの出血の量なら死んでも可笑しくはないが……。

アリス「しかし、また一人犠牲者を作ってしまったな」

全員また席に戻った後、アリスが腕を組みながら普段は見せない険しい顔で言う。

ちなみにアリスのドS行為の被害者である桂もソラ同様ソファーで休ませている。

リリス「その犠牲者作ったのはアリスさんですけどね」

リリスはジト目でアリスを見ながらツツコム。まあ基本ソラ以外の事はどうでもいいと考えていて、しかもドSのアリスの行為は仕方ないと言う事で文句言うだけでそれ以上のお咎めはしなかった。

今はそんな事よりも目の前の物体Xの処理が大事だからだ。

とは言え、またアリスに物体Xを顔面にぶつけられてはたまったも

のではないのでリリスはアリスにもう一度さっきのように顔面に物体Xをぶつけないと言う確認を取る。

リリス「いいですかアリスさん。もうさっきみたいな事はしないでくださいよ。私達の目的は悪魔でこのシチューをなんとかする事なんですから」

チェーン「そうですよ。私達で潰し合っている場合じゃないんです」

リリスの言葉にチェーンも同意する。

アリス「安心しろ。さすがにさっきはふざけ過ぎた。今度は残った者達が生き残る策を考える」

アリスは問題ないと腕を組んでクールに言う。  
その時またフェイトが戻って来る。

フェイト「ごめんアリス。まだタバスコが見つからないんだ。もう少し待ってもらっても良い？」

アリス「ああ良いぞ。むしろ永遠に探していても私は構わない」

微笑を浮かべながら言うアリス。まあアリスの言うとおりフェイトがこのままタバスコを探すのに時間を掛けていればかなり物体Xをどうするか考える時間が得られる。

フェイト「そっか、じゃあもう少し待っててね」

フェイトは苦笑を浮かべながらまたタバスコを探しに行った。  
そしてフェイトがいなくなると……



リリス「甘いんですよ！！ あなたと何年の付き合いだと思っているんですか！！ あなたがソラ様以外の事で素直じゃない事は分かっているんですよ！！ こっちだって反撃する時はするんですよ！！」

さすがにドSでしかもソラ以外の事はどうでも良いと考えているアリスなら演技して反省していると油断を誘った隙にまた攻撃してくるのは何年もの付き合いのリリスは予想していた。

それはアリアとヤミも同じらしく、あらかじめ予想していたので簡単にヒョイツと避けたのだ。

それなら何故アリスとそれなりに付き合いが長い神楽とチェーンとセイバーが避けられなかったと言うと、これからどうやって物体Xを処理しようか必死に考えていたので避ける暇がなかった。

アリア「にゃゝ……神楽とチェーンとはぶっちり」

ヤミ「それを言うならエリザベスとアルフにセイバーもです」

アリアとヤミはさっきの被害状況を確認かめるために周りを見回していた。だが、意識はちゃんとアリスに向いている。

アリス「厄介なのが残ったな」

アリスは生き残ったメンバーを見ながら少し残念そうに言う。

リリスはともかくアリアとヤミはほぼ隙がない。ヤミは見てのとおりでだが、なんかボーっとしてそうなアリアも実際まったくと言って良いほど隙がないのでそう簡単には物体Xを当てられないのだ。

アリス「しかし、ドジなお前がここまで生き残るとは驚きだな」

リリス「ドジは余計です！ 人間死に直面すると予想外の力をはつきするモノです！」

アリア「リリスはユニゾンデバイス」

ヤミ「それに実際は死にませんが」

ここまで死にたくないと言う一心で生き残ってきたと言うリリスにアリアとヤミが静かにツツコム。

アリス「フツ、なるほどな」

そう言いながら性懲りもなくアリスがまた物体Xの盛られた皿を五つリリスに向かって投げる。

リリス「無駄です！！」

リリスとヤミとアリアはもはやフェイント掛けてアリスが物体X投げてくる事は予想しているので、三人は簡単に避けてしまう。

ベチャツ  
× 5

標的を失った物体Xは綺麗に円を描いてまるで狙っているかのように神楽、チエーン、アルフの顔面に運悪く落ちてしまう。



その時、桂が目を覚ます。

桂「……ん……さすがに酷い目に遭ったな……」

頭を抑えながらさっきの事を思い出す桂。

そして標的を失った物体Xがたっぷり入った鍋はそのまま桂に向かって落ちて行く。

それに気づいたリリスは声を上げる。

リリス「桂さん逃げてください！！！」

桂「……えっ？」

ドボツ！

アリス・アリア・ヤミ

『『あ………』』

桂は頭から物体Xがたっぷり入った鍋を被ってしまふ。

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

鍋からまるでバケツひっくり返したようなおびただしい鮮血が出る。いや、実際は桂が口か鼻か目か耳のどれかで血を噴射させているのだろうが、鍋被っているせいでそう言う光景になってしまったのだ。そして桂はそのままドサツと倒れてしまふ。

リリス「……………」

リリスはその光景に顔を真っ青にしてしまい、アリスとアリアとヤミは真顔で突っ立っていた。

だが、ここで物体Xの騒ぎは収まらなかったのだ。

???「おゝのゝれゝ……………!!」

まるで地の底から聞こえてくるような誰かの声が聞こえてきたのだ。それはリリスにとっても良く聞き覚えある声だった。

リリスは更に顔を青くさえて冷や汗をダラダラ流しながら声がした方を見る。

???「貴様か……………！ 我にマズイ料理を食わせたのは……………！」

そこにはアホ毛がなくなり、鎧が赤い血管が浮き出たような模様のある黒い鎧に変わり、そして凄まじい覇気を出しながら黒いオーラを出すセイバーがいた。

リリス（し、しまったアアアアアアアアア!!!!!!）

リリスは涙を流しながら目の前の恐怖にブルブル震えていた。

セイバーはマズイものを食べさせられると全てを破壊する最凶最悪の存在『黒セイバー』になってしまったのだ。

その姿はまさしく『破壊神』。

自分の怒りが収まるまで、自分にマズイ物を食わせたと思った相手を例外を一人除いてみさかないなく滅してしまう。

一度暴れだしたら手が付けられないのだ。

前にお妙の暗黒物質ダークマターを食べた時なんかは、お妙とサイヤ人のような

戦いを繰り広げながらお妙と周りの物を全てぶっ壊したと言う過去があるのだ。まあその事については今度語るとしよう。

リリス（そ、ソラ様になんとかしてもらわないのと――！）

だが、そんな破壊神を止める術はある。

それがソラだ。セイバーがソラに恋路を抱いているのが影響しているのか、手の付けられない黒セイバーもソラだけには襲ってこない上に言う事まで聞いてしまうのだ。まあ自分の怒りを抑えるために強引にソラに何か要求してしまう所は黒セイバーだから仕方ないが……。

リリスはソラに黒セイバーを止めてもらおうとソラの方を見るといつの間にかソラの元に黒セイバーがいた。そして黒セイバーはソラを見て驚愕の表情をしたいた。

黒セイバー「なっ！？ 主！？ 貴様アアアア！！！ 我のみならず主にまで危害を加えるとは――！！」

リリス（勘違いされたアアアアアアアアアア！！！？??）

自分がソラをこんな目に遭わせたとは勘違いしている黒セイバーにリリスは心の中でシャウトした。

ソラ以外の言う事はまったく聞かない黒セイバーに弁解は無駄。問

答無用で滅してくる。

最早選択肢は逃げるしかない。

そう考えたリリスはアリス達に顔を向ける。

リリス「皆さん早く逃げ――」

だがもうそこにはアリス達の姿はなかった。

そしてリリスは自分のドジに気づいてしまう。

セイバーの顔面に物体Xが当たって自分のするべき事はアリスを返り討ちにすることでもなく、アリスの攻撃を避ける事でもない。

とつとこの場から逃げる事。

生き残っている自分達が黒セイバーの怒りの対象になるのは分かりきっている。

ならすぐにこの場から逃げれば良かった。

なのにアリスに物体Xをぶつける事に躍起になっていた事で逃げると言っ選択肢をすっかり忘れてしまったのだ。

抜け目ないアリス達なら自分をギリギリまで黒セイバーが目覚めるのを待つて最後に自分を囷にする。

完全に嵌められた。

その事に気づいたリリスは滝のように汗を流しながら、『ダークエグ暗黒の勝利の剣』に今に爆発しそうなほどの魔力を溜めている黒セイバーに話しかける。

リリス「あ、あの……私の話を聞いて……」

黒セイバー「問答無用だアアアアアアアアアアアア！……！！」

黒セイバーの放った漆黒の閃光がリリスを飲み込む。

リリス「ふぎやアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！  
！！！！！！」



銀八「はい、腹黒少年の沖田君が今回のアシスタントです。じゃあ早速質問いきましょう」

沖田「ええつと、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、  
『フォックス』質問『新八の扱いは元に戻るのか?』」

スネーク「質問『コーカサスに変身したマリオについてどう思う?』」  
「

冥王「質問なの『ゼロ距離で撃たれたい人はいる?』」

スネーク&フォックス「物騒な質問だなおい!」

次回を待ってます!』……おお。じゃあ土方の奴をゼロ距離で撃つ  
てくだせエ（黒笑）」

銀八「いや、俺は別に良いけど、撃たれる前に逃げるだろ普通」

3の質問を見て黒い笑み浮かべて土方抹殺を頼む沖田に銀八がツツ  
コム。

銀八「それで新八の扱いは原作でもこんな感じだそうです。まあ作  
者的にはちゃんと活躍シーンも書くそうです」

沖田「俺としちゃ土方の野郎がぶざまに負けるシーンを望みます  
ア」

銀八「お前はホントに土方が嫌いだな。つで、コーカサスに変身し  
たマリオは強いですね。」

沖田「にしても、クロックアップ使えるなァ…（黒笑）」

顎に手を当てて黒い笑みを作りながらクロックアップで相手を簡単にいたぶれるとドSな事考える沖田だった。  
さすがにコレには銀八も顔を青くした。

銀八「え、えつと。『鳴神 ソラ』さん……このドS少年だけにはライダーの力は使わせない方が良いでしょう」

沖田「旦那ァ。それは誤解でさァ」

銀八「オメーの顔が嘘だって物語ってたんだよ！次、ペンネーム『白黒』さんから、

『ゴリラ（近藤）に質問です。

雌ゴリラ（妙）がいませんよね。どうやって雌ゴリラ（妙）分を補給しますか？

土方に質問です。

マヨネーズ代はどうやって払ってるんですか？ま、まさか翠屋から借りてるんですか？どうなんですか？

沖田に質問です。

もし変態から「苛めてください！！」と言われたらどうしますか？苛めますか？……どうなんだ？」

銀八は沖田に視線を向けながら3の質問を聞く。

沖田「俺はそう言うドMな奴じゃなくて嫌がる奴を苛めるのが好きなんでさア」

銀八「最悪だ！ コイツ警察のくせして最悪の性格なんだけど！？」

沖田「それで、ゴリ…近藤さんはあの雌後ゴリラ分をどうやって補給してんですかい？」

近藤「今ゴリラって言い掛けたよね！？ 絶対ゴリラって言おうとしたよね！？」

沖田「気のせいでさア近藤さん」

涙目で聞いてくる近藤に沖田はボーカーフェイスで答える。

近藤は気を取り直して“オホン！”と咳をして言う。

近藤「早くお妙さんに会いたいです！！ 切実に！！（涙）」

銀八「いや、結局涙流してんじゃねえか！！ 気を取り直す必要ねえだろ！！」

沖田「それで、土方さんは惨めったらしく金借りて犬の餌を食べんですよね？」

沖田はニヤ付きながら土方に嫌味な質問する。

土方「んなわけねえだろ！ 翠屋でバイトして金が貰えるまでの間は自前のマヨネーズをやり繰りして我慢してんだよ！！ つうかそんな言い方すんじゃねえー！！」

銀八「お前マヨネーズいつも持ち歩いてんの!？」

いつでもどこでもマヨネーズを放さない土方に銀八が呆れたように驚きの声を上げる。

土方「当たり前だろうが!! マヨネーズは人間にとって必要な栄養源なんだよ!!」

銀八「いや、何人類をマヨネーズ人にしてんだよ!! 普通はいらねえんだよ!!」

とんでもないバカな思い込みを言う土方に銀八がツツコム。  
そしてため息をつきながら進める。

銀八「……はい、『白黒』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『支配者』さんから、

『支配者』皆良く集まったね」

支配者がその場にいる全員に言った  
するとその場には前回新八に復讐しに行った女性キャラたちと神楽がいた。

イヴ「なんの用だよ? 作者」

ナギ「私達はこの前あのダメガネをぶつとばせなかったからイライラしてるんだぞ!」

セト「用件は手短に言え」

支配者「まあまあ、とりあえずこの映像を見てくださいよ」

支配者はそう言ってDVDを再生した。

するとそこには支配者と『黒龍』と書かれたプラカードをぶら下げている新八と銀八と土方がいた。彼らは支配者に向かって彼女達の事を言いたい放題バカにし、そして今回の彼女達と別キャラ達との戦いの映像を見て大笑いしていた。

それを見た彼女達は

女性陣『『黒龍』の所の天パとダメガネとトツシーを殺してくる』

もの凄い黒いオーラを出しながら出て行った。

支配者「クククク…うまく言ったさあ次だ」

支配者はもの凄い黒い笑いを浮かべた。

すると今度は大きな足音を出しながらある人物がやってきた。

その人物とは

支配者「おお、よく来たね『ゾーグ』」

リリカル剣魂スペシャルのラスボス『魔人王・ゾーグ』であった。

ゾーグ「一体なんのようだ作者？」

支配者「ああ、実はですね『黒龍』さんの所の新八と銀八先生と土方さんが貴方の事を負け犬ヘタレ王って罵ってましたよ」

ゾーグ「何だとー！！（怒）」

ゾーグはその言葉を聞いて怒りに震えた。

ゾーグ「ワシにそんな口を叩くとはあの身の程知らず共が…殺す」

ゾーグはそう言って『黒龍』さんの所の銀八と新八と土方の元へと向かった。

支配者「では今回の質問です。

新八と銀八先生と土方に質問

どうやって彼らの脅威から逃れますか？（黒笑）

ギャーハハハハハハ！！！！！」

支配者は大笑いした。『……おいおいおいおい！！！！！！な  
んで俺まで巻き込まれてんだアアアアアアア！！！！？？？明らか  
にとばっちりなんですけど！？」

何も関与していない自分まで女性達の怒りを買う事になってしまっ  
た銀八は顔を真っ青にする。

沖田「銀八の旦那ア、安らかに眠ってくださいエ。あ、土方さんは即  
効地獄に落ちてください」（黒笑）」

土方「ふざけんな！！なんで俺まで巻き込まれてんだよ！！あの眼  
鏡のせいだろうが！！」

黒笑みを浮かべながら嬉しそうに言う沖田に土方は怒鳴りつける。

新八「そうじゃないでしょ！！そもそも全員は全部あの支配者のせいです！！」

銀八・土方・新八

『『こうなれば…』』

そこで言葉を止めた後、三人は目をギリリと光らせてフェイトの物体Xを両手に乗せる。

銀八・土方・新八

『『支配者も道連れだアアアアアアアアアア！！！！』』

三人は『支配者』さんに向かってフェイトの物体Xを大量に投げる。どうやらやられっぱなしではいらなかったようだ。

沖田「じゃあ『支配者』さんありとうございやした」

銀八「お礼言うんじゃないー！！！」

銀八は笑顔でお礼言う沖田にツッコム。  
そして怒りを露にしながらも進める。

銀八「次いくぞ！ペンネーム『ケン』さんから、  
お通へ

新八が心の底から『お前の歌は下品過ぎるからこの世から消えろ！！』と言っていました。どうしますか？

高杉へ

統夜の持つ全てを絶望へ誘う蒼炎の力に興味がありますか？またスカウトしたいですか？

セイバーと神楽、なのは、フェイト、ヤミヘ

新八がセイバーと神楽が大事にとっておいたお菓子を食い散らかし、なのはのパンツを全部盗み仮面のように被って逃走しました。どうしますか？

優子「ちよつと待てコラアアアア！！！！幾らなんでも酷過ぎるでしょー！！」

ケン「何が？」

優子「新八君の事よ！！」

ケン「ああ・・・それか・・・あいつだけは最後だ」

数時間後・・・

はやて「何や・・・呼び出して・・・」

雪蓮「何か用？」

メアリ「私達・・・あのクソ眼鏡を殺せない事でムシヤクシヤしてんの・・・」

ケン「まあまあ・・・これを見てくれ・・・」

映像には新八と土方が統夜を侮辱したり、雪蓮とメアリの悪口を言いたい放題した後、そして今回の彼女達と別キャラ達との戦いの映像とセクハラされている所を見ていやらしい目をし大笑いしていた。これを見た三人は・・・

はやて「ほな・・・殺しに行つて来る・・・懲りずに統夜を侮蔑するなんてな・・・無印には出てへんけど・・・ええよな・・・ええに決まつとる・・・」

雪蓮「土方つて奴をどうなぶり殺すか楽しみね」

メアリ「二人を燃やして帰つて来るわ」

以前より物凄い殺気と黒いオーラを纏った三人は新八と土方の所へ向つた。『……おいおいおいおい！！！！前より状況が悪化してんだけど！！??』

銀八は前よりも強い殺気を出してやつて来る三人に顔を真っ青にさせる。

沖田「俺としちゃ土方を抹殺するなら大歓迎でさア」(黒笑)

銀八「こんなとんでもない状況でも良くドS発揮できるな！！尊敬するよマジで！！」

嬉しそうに言う沖田にツツコム銀八。

一方その横では…

お通「酷いよ新八君！！！！」

バシッ！！

新八「オブッ！！」

お通が新八の頬をかなり強い力でビンタする。  
そしてかなり憤慨しながら新八に怒鳴る。

お通「もう新八君の事なんて大嫌イルカ！！！」

お通はそのまま不機嫌MAXと言う感じに帰って行った。

新八「ちよつと待ってお通ちゃん！！お通ちゃアアアアアアアアアアアアアアん！！！」

新八はなんとか誤解を解こうとお通を呼び止めるが、お通はまったく足を止めることなく帰って行った。

それを見た新八はうずくまってこの世の終わりのように大号泣したが、不幸はこれで終わらなかった。

神楽「ふざけんなこの駄目ガネエエエエエエエ！！！！！」

ドカツッ！！

新八「オブッ！！！」

大事なお菓子を取られたと思った神楽は新八に顎の骨が砕けるくらいのアッパーカットを喰らわせ、新八の体は宙を浮く。

なのは「ディバインバスターフルパワー！！！！！」

セイバー「エクスカリバー……！！！」

ズドオオオオオオオオオン！！！！

新八「うぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

なのはとセイバーが空中に浮いた新八に桃色と金色の極光を浴びせる。

新八は断末魔を上げ、ボロボロのもう原型がなんだか分からないくらいに真っ黒焦げになって地面に落ちた。

銀八「いくらなんでもやり過ぎじゃね！！！！？」

フェイト「でも、それくらい人を傷つける行為をしました」

ヤミ「最低な彼にはぴったりです」

沖田「ま、自業自得でさア」

新八が変態行動をした信じているフェイトとヤミが辛口をし、沖田が黒い笑みを浮かべながら同意する。

銀八は「哀れ新八……安らかに眠れ」と言って黙祷した。

銀八「最後に高杉に答えてもらうか」

銀八がそう言うともモニターが現れ、そこには高杉が映っていた。

高杉《くくく……統夜って野郎は随分面白力を持ってるじゃねえか。鬼兵隊うちに入れてみてえな》

薄ら笑みを浮かべながら高杉がそう言った後にモニターが消える。

銀八「はい。『ケン』さん、高杉はどうやら統夜の能力に興味を持っているようです」

銀八がそう言うと、いつの間にか戦車に乗った新八が現れる。それを銀八は啞然として見ていた。

新八「発射ーーーーー!!!!!!」

新八は大砲を何十発もケンさんに向かって放った。

銀八「お前はどこの軍人だ!!」

銀八がツツコム横で沖田が占める。

沖田「じゃあ『ケン』さんは廊下に立っていてくださいエ」

銀八「次行くぞ。ペンネーム『真王』さんから、

『真王』・・・彼らはそのまま死んでしまった…。質問に入ろうか」

邪王「へへッ、『新八よう、苛められ防止のために『メインキャラ撲殺バット（見た目はエスカリボルグ）』をあげるが、それでソラとか銀時とかなのはとかぶっ殺せよ」

ジャンヌ「そっちの新八君に質問：というよりリクエストかな？『新八君を守る彼女を作って！』もしなかったら私が黒龍をOHA NA SHIするから！」

真王「最後に新八をいじめる銀時に言つてやろう。『・・・もしこれ以上新八に容赦なくやる気なら、魂いのちはないと思え（ドスのきいた声で脅す）』」……じゃあ真王さん。そのまま銀時殺しちゃってください」

銀八は1と2をぶつ飛ばして3を嬉しそうに答える。

沖田「銀八の旦那も旦那にはSですかい？」

銀八「そうだ！あんなハーレム野郎は一遍死ぬべきだ！」

どんだけ嫉妬しているんだと思う沖田だったがこのままの方が面白そうなので何も言わなかったが、銀時がすぐさま現れて言う。

銀時「何勝手俺を殺すの許してんだよ！！ふざけんな！！つうか最近の俺新八苛めてないどころか、アイツにやられてんだけど！真王さんはちゃんとこの小説見てんのか！？」

真王さんがこのリリカル銀魂ライダーを見ているか不安になる銀時だった。

銀八「それで新八、お前すんごいもん貰ったけどどうすんだ？」

新八「とりあえず護身用に持つておきます。でも、なのはちゃんだけは殴りません！」

今の所自分に危害を加えていないソラと銀時を殴る気はないが、これからのために『メインキャラ撲殺バット』は所持しておく事にした。ちなみに惚れているなのはを殴る気は毛頭ないらしい。そして2の質問に答える。

新八「僕だって真王さんの所の僕みたいに彼女欲しいですけど、全然彼女できないんだコンチクショーーーー!!!!」

新八は自分がモテない事に対して滝のように涙を流した。

銀八「はい、じゃあ『真王』さん。まずロリコンである今の新八に彼女はできません」

沖田「旦那ア、真王さんに殺されますぜ」

銀八「大丈夫大丈夫。次行くぞ。ペンネーム『ボッスン』さんから、『バナージ』質問だ」

アラド「サルメガネヤミーはどうなったっすか？」

ニンフ「誰かが新八さんが受けた虐めを受ける事で新八さんみたいになりますか？」

ヴィヴィオ「新八さんはなのはママの容姿は少女時代と青年時代とどちらが好きですか？」

ニンフ「贈り物を贈るね」

バナージ「ソラさんには青年時代のフェイトのバリアジャケットを着た少女時代のフェイトの写真集と銀さんLOVEとソラさんLOVEの人達には銀さんとソラさんが歴代ライダーの主人公が着た写真集を贈ります」

ヴィヴィオ「その写真集を私が持って行きます」

なのは、フェイト、はやて、美柑、文乃、心「……………」

「バナージ「どうしたんだ？」

なのは「新八さん。最低です」

フェイト「新八さんは皆さんに虐められていましたが、あんな欲望から生まれたヤミーが女の子達にセクハラするなんて…最低です」

はやて「新八さんにはお話するしかないや」

美柑「新八さんとヤミーとカザリにはお仕置きするしかないよね」

仮面ライダーファイズ プラスターフォーム（変身した心）「先輩。分かってますね」

仮面ライダーオーガ（変身した文乃）「ええ」

仮面ライダーオーズ プトティラコンボ（変身した映司）「あれしかないな」

仮面ライダーW サイクロンジョーカーゴールドエクストリーム（変身した翔太郎とフィリップ）「新八には痛い目に合わせる必要があるな」

仮面ライダーディケイド 最強コンプリートフォーム（変身した士）「ああ、あいつの根性を叩き直さないとな」

アंक完全体「後、カザリにも痛い目に合わせるか」

ウヴァ完全体「カザリが生み出したヤミーだからな」

メズール完全体「そうね」

ガメル完全体「カザリ」。おしおき」

真木 恐竜グリード形態「新八君とカザリ君とサルメガネヤミー君に良き終わりを」

オールライダー（一部は強化形態と最強形態）「新八とカザリとサルメガネヤミーに鉄槌を！！」

仮面ライダーディエンド コンプリートフォーム（変身した海東大樹）「因みにこのなのはとフェイトとはやてとヴィヴィオと美柑は12歳で美柑はなのはと同じ魔法が使える。それとなのはとフェイトとはやては青年時代のバリアジャケットを着ていて青年時代で使ったデバイスと魔法を使う。後、美柑のデバイスの名前はオレンジハートだ」

ディケイド 最強CF「行くぞ。海東」

ディエンドCF「ああ」

ニンフ「新八さん……」（汗）

バナージ「死ぬかもな」（汗）『……新八死んだな……』

銀八はもう新八にこう言う質問やら感想が来る事には慣れたみたい

で、もう驚く気も失せているようだ。

沖田「俺としては土方さんが死ぬ事には大いに賛成でさア」(黒笑)

「

相変わらず黒い笑みで嬉しそうに言う沖田を気にせず銀八は質問の1に答える。

銀八「ええ、サルメガネヤミーは新八に付いて行ってます。それで2の答えですが、たぶん新八が受けた苛めを受けて新八みたいになる人はいないと思います」

さすがに大谷モドキになったりとか、眼鏡からビームだすと言う常識離れな事にはならないと銀八は思った。

そして3の質問に新八が顔を赤くして鼻息荒くしながら興奮して答える。

新八「全部好きです／＼／＼！！！」

銀八「……………」

銀八はやっぱコイツは読者から苛め受けても良いんじゃないかと思っただ。

銀八「はい…『ボッスン』さんはとりあえず新八に来る裁きを楽しみにしてください」

沖田「次でさア。ペンネーム『白騎士君』さんから、  
『白騎士君』では質問します。」

1 ‘なのはに質問。白騎士になれたら如何しますか？

2 ‘セイバーに質問。あまり太らない体質なら胸も大きくならない事ですよ。

3 皆に質問。シンナイト事をどう思いますか？

『 以上です』……じゃあなのは答える」

なのは「大切な人を守ります！！」

なのははその時銀時の顔を思い浮かべた。銀八は少し不機嫌そうだし、そして2で質問されたセイバーの方を見ると……

セイバー「エクスカリバー……………！！！！！！」

白騎士君さんに向かって金色の閃光を放った。

銀八（怒ってエクスカリバーをぶっ放したアアアアアアア！！！！！！）

銀八はあまりのセイバーの怒りに顔を青くさせた。

銀八「……じゃ、じゃあ3は万事屋メンバーは答えてください」

銀時「でっかい鎧」

ソラ「まあ凄い力つてところだろ」

アリス「興味ないな」

アリア「にゃく興味ない」

リリス「大きいですね」

ライホース「危険な力であり、誰かを守る力でもある」

新八「僕も一度で良いからなつて銀さん達に僕の凄さを改めさせたいです！」

神楽「でつかい鎧アルな」

ヤミ「興味ありません」

セイバー「騎士の私としては興味あります」

ライダー「強大な力とだけ言っておきます」

銀八「はい、『白騎士君』さんは廊下に立っててください」

沖田「次でさア、ペンネーム『黒神』さん。おお、俺と気が合うあの読者か」(黒笑)

沖田は黒神さんだと知って黒笑みを浮かべながら読む。

沖田「じゃあ読むぜエ、

『質問 その1

松平のつつあんへ

新八は、親衛隊の軍曹からリリカルなのはDVDを取り上げました。鉄の掟で捨てるとか言いましたが、実は保存しておりますので、これは十分な泥棒と一緒にです。

しかも彼はまったくそれを悪く思っていないので、いつその事、銃である変態ロリコンオタクのキンタマ、撃っちゃってください。

沖田へ

新八の変態ぶりは以上ですので、いつそう彼を一ヶ月ぐらい牢に閉じ込めたほうが良いのでは？  
そうすればそれに懲りて元に戻ると思いますし。

アーチャーへ

新八がまた銀八先生コーナーで暴走するようになったら、いつそう矢を放つてあの馬鹿を押さえ込んでください。』……そうかア……じゃあ仕方ありませんねエ（黒笑）」

ガチャ

黒い笑みを浮かべた沖田は新八に手錠を掛ける。

沖田「さア、牢屋に行くでさア。このロリコン」

新八「ふざけるな！！無実の罪で捕まってたまるかアアアアアア  
！！！！」

さすがにこんな事で牢屋に入れたくはない新八は眼鏡から黒い光線を放とうとするが…

グサ！

新八「うぎゃアアアアアアアアアア!!!!」

ケツに矢が刺さつてしまい光線を放つ事が出来なかつた。新八はあまりの痛みに氣絶する。

その放った人物とは、新八の後ろで弓を構えているアーチャーだった。

銀八はすかさずアーチャーに近づく。

銀八「oooooooooooo!!! いくらでもアレは新八が可哀想だろオオオオオ!!!」

アーチャー「いや、彼が暴れるようなら抑えてくれと黒神に頼まれてしまったからな」

銀八「もうちょっとデリケートなやり方はなかったのかよ!？」

冷静に答えるアーチャーに銀八がツツコム間に松平が現れる。

そのまま沖田が新八を牢屋に連れ込もうとするが、途中で松平が現れる。

沖田「あ、とつつあん」

松平「よ、沖田。そいつを牢にぶち込む必要はねえ」



ないほどの断末魔を上げ、そのまま泡を吹いて気絶する。

松平「じゃあな」

沖田「ご苦労さまでしたア」

松平が帰って行く横で、銀八はその光景を顔面蒼白にして冷や汗ダラダラ流しながら見ていた。

新八「黒iiiiiiiiiiiiiiiiん!!!!!!!!!!」

ギャグパートなので股間が一応無事だった新八は怒りまかせに黒神さんに向かってフェイトの作った物体Xを大量に投げた。

銀八「うぎゃアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

黒龍「あんぎゃアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

何故か巻き添えで二人の顔面に物体Xがぶつかり、二人は信じられないほどの不味さに二人は断末魔を上げる。

そして新八はかなり不機嫌な状態で自分の席に戻った。

沖田「あゝあ。二人共やられちゃったかア。じゃあ復活するまで俺が続けまさら。そんじゃ、『黒神』さんは今度は土方を抹殺する質

問をお願いしまさア（黒笑）」

沖田は黒い笑みを作りながらコーナーを進める。

沖田「次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『輝刃』あゝあ…一番怒らせてはいけない男を怒らせちまったよ…（汗）。ありや屁怒組でも太刀打ちは難しいな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・作者に質問…いいところだったのに、何故セフィロスの叫びを止める？聞きたかったのによ…。（漆黑&amp;人狼化（汗））

ハハッ…輝刃も輝刃で、存外恐ろしいがな…（汗）。次は俺からだ。

2・無縁に質問…正直言つて、『銀魂』の『沖田総吾』と気が合いそう？（ドSな意味で（汗））

輝刃「…無縁から報復食らっても知らんぞ（汗）？」「……そういやア、お前つてドSなのか？」

質問を読んだ沖田は横目で無縁に聞く。

無縁「いや、俺はドSじゃねエよ。それと、俺と気が合う奴は誰もいないだろうな」

沖田「ふゝん」

意味深に言う無縁の言葉に興味ない沖田は進める。

沖田「じゃあ作者に聞くとところなんだが…答えられるか？」

黒龍「な、なんとか…」

さっきの物体Xのダメージから復活した黒龍がフラフラと立ち上がりながら答える。

黒龍「ええっと…セフィロスの叫びを止めたの銀八先生です」

沖田「そう言う事でさア。じゃあ『月光閃火』さん…作者の野郎もセフィロスの叫びは二度とごめんだそうでさア」

黒龍「ちよっ！？余計な事言わないでください！！」

その時、銀八が復活した。

銀八「あゝ酷い目にあつた」

沖田「銀八の旦那アが復活したみたいでさア」

銀八「まだフラフラするけど、今度は俺が進めるぜ…」

顔色が悪そうな銀八はなんとか気を保って質問が書かれた紙を読む。

銀八「ペンネーム『なっぺ』さんから、

『なっぺ』当然、無反応。さて、今回は新八に質問。【以下の内、どれか2つを選ばなければいけません。どれを選ぶ？

・銀河を投げ付けられる

・銀河を投げられる筋力を持つ腕で殴られる

・ガチムチにアッーされる

・なのはに「すっごくキモチワルイんで、もう二度と近寄らないで下さいね」と永遠に言われつつける

・吼太ラバーズに「吼太君は僕が頂く！ 吼太君は僕の嫁だあっ！」と真っ向から宣言する

・トウードの目の前で、詩音に性的危害を加える

・女装して、沖田の前に行く

・銀さん×新八×ソラのBL本を女性陣にバラまかれる

・妄想が全て他人から見えるようになる

・全力全開、手加減無しな吼太と模擬戦をする

」

ベス「先程とは一転して酷い内容ですね」

なっぺ「上げておいて一気に落とすのが超クールらしいから。あ、00・1秒以内に、どれを選ぶかまでしっかり答えないと、全部やつてもらふことになるから。ついでに転生者たちにも」……ああ、もうツツコム気力もねえし……新八はとつと殺られなさい」

新八「なんでだアアアアアアア！！？？なんでもう殺される事になっただけですか！？」





恭也「覚悟オオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

美由紀「さすがに私も頭にきた！！女の敵め！！」

桃子「フッフ……さすがにやり過ぎね」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

凄まじい怒気と殺気を出しながら高町家の四人は土方を処刑しよう  
と向かう。

土方「騙されてんじゃねええええええええええ！！！！！！」

必死で逃げる土方を高町家の四人は追った。  
だが、恭也が土方を追いかけようとした時…

なのは「酷いのお兄ちゃん！！！！」

恭也「へっ？…うぎやああああああああああああああああああ  
ああああああ！！！！！！！！！！」

憤慨したなのはが恭也にデインバスターを放ち、それは見事に  
恭也に直撃して恭也は真っ黒焦げのアフロヘアになった。

なのは「まったく！お兄ちゃんは！！」

プンプンと怒りながらなのはは頬を膨らませてブイツとそっぽ向く。  
その後「銀さんに抱きついて銀さん分を補充してくるの！！」と言  
ってどこかに言ってしまった。

その光景を見た銀八は嫉妬とかそんなのなしに高町家の殺気やらな  
のはの砲撃を見て顔を真っ青にしていた。

銀八「……じゃ、じゃあ。『黄色いのか』さんは廊下に立って  
いてください」

沖田「いや、あのまま土方コノヤローが処刑されると俺としてはめ  
っちゃ嬉しいんですけどねエ♪（黒笑）」

銀八「お前はホントアンチ土方だな。じゃあ次いくか。ペンネーム「きつと木の精だ」さんから、

『木の精だ！何やってんだかな……、次に質問！ありきたりですが銀さん、そしてソラ君に好意寄せてる皆さんに質問。朝銀さん（又はソラ君）を起こしに行くと思慣れない女が彼の布団の中に！どうしますか？因みにこの回答のときのみS t sの魔法使用許可します。…やるのは女？銀さん、又はソラ君？もしくはこんな質問した俺？はたまた全員？？返答待ってます』……え、えつとコレは怖いから止めにしよう……」

沖田「っで？どっするんでしょ？」

銀八「oooooooooooo!!」なに勝手に聞いてんだよ!？」

ニヤニヤしながら銀時ラバースとソララバースに聞く沖田に銀八は顔を青くしながらツツコム。

アリス「その女と『話し』をしよう（黒笑）」ゴゴゴゴゴゴゴ

「……アリア」

リリース「そうですね…」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

チェーン「ちゃんと理由を聞かないと…」ゴゴゴゴゴゴ

ヤミ「会話は大事ですね…」ゴゴゴゴゴゴ

セイバー「対話ですね…」ゴゴゴゴゴゴ

フェイト「フッフ…」ゴゴゴゴゴゴ

なのは「にやははは」ゴゴゴゴゴゴ

シルバー「そうじゃな」ゴゴゴゴゴゴ

ライダー「寝ている方と話をしますね…」ゴゴゴゴゴゴ

とんでもない黒いオーラを出しながらハイライトの消えた目で言う  
ラバーズ達を見て銀八は顔を真っ青にさせる。

銀八（怖いんですけどオオオオオオオオオオ！！！！これもう相手の  
女性が終わっているよ！！色々な意味で！！）

銀八は冷や汗を流してガタガタ震えるしかなかった。

沖田「それじゃ、『きつと木の精だ』さんは廊下に立ってくださいエ」

銀八「やっと終わったな…」

沖田「たくさん質問来ましたからねエ」

銀八「じゃあ次回はリリースがアシスタントです」

沖田「次回も楽しみにてしていくだせエ」

新八「なんで今回も集団リンチ受けなきゃならないんだアアアアアアアアアアアア！！！！」

天に向かって頭を抱えながら涙を流して叫ぶ新八。  
今回もまた別の作者さん達のゲストキャラ達が新八を殺しにやって来るのだ。

だが今回は新八だけではなかった。

銀八「泣きたいのはこっちだ！！俺は何故かお前の虐めに巻き込まれたせいで支配者さんのキャラ達に殺されそうになってんだぞ！！」

土方「おめえなんかまだマシな方だ。俺はケンと支配者の二作品のキャラから殺されそうになってんだからな」

カザリ「僕はボッスンさんの所だね」

新八「あんたらまだマシですよ！！僕はその三つの作者のキャラ達に殺されそうになってんだこんチクショーーーー！！！！！！」

そうやって彼らが言い合っていると…

支配者さんの女性キャラ達

『『天パとダメガネとトツシーを殺す！！！！』』

もの凄い殺気を出しながら前回やって来た『支配者』さんの所のキ  
ヤラのシヤナとヤミとセイバーと綾子とイヴとセトとソルヴァと美  
琴とナナとナギと薫とマリアとアルカとそはらとアストレアとニン  
フ。

更には…

ボッスンさんのキャラ達

『『覚悟しろクソロリコンメガネとカザリ！！！！！！！！』』

『ボッスン』さんの所からは前回来た仮面ライダーオーズ プトテ  
イラコンボ（変身した火野映司）と仮面ライダーW サイクロンジ  
ョーカーゴールドエクストリーム（変身した左翔太郎とフィリップ）  
と仮面ライダーディケイド 最強コンプリートフォーム（変身した  
門矢士）と一部は強化形態と最強形態になっているオールライダー  
と更にはアंक完全体とウヴァ完全体とメスール完全体とガメル完  
全体となのはとフェイトとはやてと仮面ライダーファイズ ブラス  
ターフォーム（変身した心）と真木 恐竜グリード形態と仮面ライ  
ダーディエンド コンプリートフォーム（変身した海東大樹）と美  
柑が殺気全開にしてやって来る。

そして更には…

はやて（ケン）「ロリコン眼鏡…もう許さへん！！」

雪蓮「覚悟しなさい土方！！」

メアリ「エロガキとニコチンマヨラーに天誅よ!!」

『ケン』さんの所からはやてと雪蓮とメアリが殺気を出してやって来る。

銀八「前回より多いんですけどオオオオオオオオオオ!!?!?」

前回よりも数が多くなっている事に驚く銀八。

土方「ちょっと待て!!アレは誤解だ!!」

はやて(ケン)「誰が信じるか!!」

雪蓮「これはケンから実際に聞いた話よ!!」

メリア「あなたの言う事なんて信じるわけないでしょ!!!!」

支配者キャラ達

『『問答無用!!!!』』

土方が支配者さんのキャラとケンさんのキャラ達に弁解するがまったく聞く耳を持たない。

そしてそのまま土方をボコボコにする。

ズドガガガガン!!!!!!バコン!!!!ガキ!!!!ボキ!!!!ドカーン!!!!!!

土方「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

爆心地で土方の叫び声が響いた。

その光景を新八は顔を真っ青にしながらかたがた震えて見ていた。

新八「ヤバイです！！早く僕らは逃げないと！！土方さんの二の舞に……って、あれ！？」

新八はとつと逃げるように銀八とカザリに声を掛けようと二人がいた場所に顔を向けると新八は呆けた声を出す。なにせそこには誰もいなかったからだ。

新八（に、逃げやがったアアアアアアアアアアアア！！！！！！）

自分を置いていつの間にか逃げた二人に怒りを覚える新八。  
今すぐ追いかけて二人をしばきたい所だが…

はやて（ケン）「さア、次はアンタの番や！」

ナギ「覚悟しろ」

真木 恐竜グリード形態「カザリ君は逃がしましたが、あなたには良き終わりを贈りましょう」

ウヴァ完全体「まあ、カザリの奴も後で見つけるけどな」

アンコ完全「そうだな。って言うか俺はアंकだ！！」

イヴ「さあ、判決を言い渡してやる」

メアリ「一遍の細胞も残さずに燃やしてあげるわ」

なのは（ボッスン）「新八さん…少し、頭冷やそうか」

フェイト（ボッスン）「さすがに私も頭にキタから」

アリマ（支配者）「新八君には少しきついお仕置きが必要ですね」

神楽（支配者）「歯ア食いしばれよばつつあん!!」

アストレヤ「今回は失敗しないんだから!!」

ニンフ「ぐちゃぐちゃになる覚悟はできた？」

新八「なんで僕だけこんな四面楚歌!!?? 銀八先生は逃げたんですよ!!」

支配者キャラ

『『本命はお前だからだ（です）!!!!』』

新八「くっ!こうなれば出てきてサルメガネヤミー軍団!!」

サルメガネヤミー達

『『うきゃ————!!!!』』

新八がその声を上げるとサルメガネヤミーの大群が現れる。その数全部200。

アंकク完全体「こいつは…」

美柑「気持ち悪い!!」



ウヴァ完全体「ふん！この程度でいい気になるとは生意気だな！」

メズール完全体「坊やにはどうやらきついお仕置きが必要のようね」

ガメル完全体「メガネおしおき！」

はやて（ボッスン）「うちらをあんま舐めてると痛み見るで！」

セイバー（支配者）「騎士の誇りに掛けて必ず勝ちます！」

ヤミ（支配者）「こうなれば、徹底抗戦ですね」

はやて（ケン）「統夜、うちに力を！」

メリア「こんなアホな連中に負けてわけにはいかないの……！」

ゲストキャラ達も新八 & amp; サルメガネヤミー軍団に突っ込む。  
両者ぶつかろうとしたその時……

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！

サルメガネヤミー軍団が全部爆発した。

新八「なんじゃこりやアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

土方「俺巻き添えなんだけどオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

ゲストキャラ達

『『うわアアアアアアアアアアアアアア！！！！！』』

さすがにあれだけの数が爆発しただけあってかなり大爆発に発展し、新八とゲストキャラとばつちりで土方がその爆発に巻き込まれた。そしてキノコ雲が出来上がる。

そしてそれを遠くから見ていた特別ゲストのカザリは…

カザリ「フフフ……新八君には悪いけど、ヤミー全部に爆弾を埋め込んだのは正解だったみたいだね」

クスクス笑いながら自分の策が上手くいった事に笑みを浮かべていた。

銀八（こいつドSだな…）

銀八はそんなカザリを見て呆れていた。まあ助かったから何も言わないが。

カザリ「あ、どうやらヤミーが一匹生き残っていたみたいだね」

銀八「マジで！？」

カザリの言葉を聞いた銀八が爆心地の所を見ると…

サルメガネヤミー「ウキヤキヤキヤキヤキヤ！」

変身が解けたライダー達に向かってウ○コぶん投げていた。しかも何故か翔太郎だけは服を脱がしてパンツ一丁にした後、体中

にウ○コの落書きした後に顔に赤いペンキぶっつけた。そのせいで翔太郎の姿は顔が血まみれでパンツ一丁の体中にウ○コの落書きされたあられもない姿になった。

次にサルメガネヤミーは映二の服を脱がした後にパンツ一丁にし、その後持つている服をパンダの着ぐるみと取り替えた。何の意味が？

そして最後は…

はやて(ケン)「いや…あふ…ぬあ…／／／／」

メリア「ひう…あう…ひゃ…／／／／」

アルカ「ぬあ…ひう…く…／／／／／」

胸揉んだり尻触ったりなどのセクハラしていた。ちなみに今度は女性陣全員の額に油性マジックで『肉』と書いた。それを見ていた銀八は顔を真っ青にしてカザリに声を掛ける。

銀八「お、おiiiiiiiiiiii！！大丈夫なのか！？あんな事しつつやって大丈夫なのか！？」

カザリ「さあ？まあ彼の欲望だから」

カザリは両手を出してやれやれと言うポーズをしながら知らないと言う。

そして微笑を浮かべながら言う。

カザリ「ま、これでお互い様って事で良いんじゃない？」

銀八「まあ新八が一方的にやれてんじゃ可哀想だしな。つつか散々

質問コーナーで酷い目にあってるし」

銀八はもう仕方ないと言う風に諦めて感じて言う。もうなるようになれである。

そして、そんな彼らの後ろから凄まじい覇気を宿した声が聞こえてきた。

「ほお、お前らがワシを馬鹿にした奴らか……」

銀八・カザリ

『『へっ?』』

気づいた二人が呆けた声を出して後ろを振り向くと……

「さあ覚悟はできているな?」

二人の後ろには拳の骨をゴキゴキと鳴らしている『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』のラスボス『魔人王・ゾーグ』が立っていた。

そして二人が何か言おうとする前にゾーグが二人に凄まじいパンチを食らわせた。

銀八・カザリ

『『ぐはっ!』』

二人はぶっ飛び壁に激突するが、あまりにも吹っ飛んだ衝撃が強く二人は壁を砕いて壁の向こう側に入ってしまった。

ゾーグ「ん?余計なのがいた気がしたがまあ良い。残る二人を「なら、私の相手をしてくれないか?」むっ?」

土方と新八を探そうとするゾーグの前にセフィロスが現れた。  
現れたセフィロスにゾーグは怪訝そうな顔で聞く。

ゾーグ「なんだ貴様は？」

セフィロス「フツ…名乗るほどの者ではない」

ゾーグ「そうか…なら死ね！！」

ゾーグは魔砲をセフィロスに向かって放つ。そしてセフィロスの居た地点は大爆発する。

ゾーグ「はーはッはッはッ！！！！ワシに齒向かおうとするからだ！！」

あっさりセフィロスを倒したと思ったゾーグは高笑いする。  
だが…

セフィロス「…こんなモノか」

ゾーグ「ぐわアアアアアアアアアアアア！！！！」

いつの間にかゾーグの後ろには長刀を一閃したような姿で居るセフィロスがあり、そしてゾーグに幾つもの斬撃が襲い掛かり、ゾーグに無数の切り傷が出来る。

そしてダメージでふらつくゾーグの両肩にいつの間にか現れた無縁が乗っかる。

無縁「おらよ」

グギー！！

ゾーグ「ぬおっ！！」

無縁はゾーグの頭を両手で掴んで無理やり曲がらないよう方向に首を曲げる。

首から不吉な音が鳴り、ゾーグはそのまま力なく倒れる。

無縁は倒れるゾーグからジャンプして離れる。

セフィロス「大した事はなかったな」

無縁「つつか、新八に倒せって言われたのはこんな奴でだったか？」

残念そうに言うセフィロスとおかしいな？と言う風に頭を掻く無縁。二人はそのまま帰って行った。

モザイク新八「ま、また……酷い目に遭った……」

ボロボロの状態で杖を付きながら歩くモザイク新八。そしてその進行方向には……

黒龍「ありがとうヴィヴィオちゃん」

ヴィヴィオ（ボッスン）「どういたしまして」

写真を貰ってお礼を言う黒龍にニコツと笑顔で返すボッスンさんの所のヴィヴィオ。

その二人を見た新八が手を振りながら近づく。

新八「あつ！黒龍にボッスンさんの所のヴィヴィオちゃんだ！おい！」

急いで二人に近づこうとする新八。

だが急いだせいで足をもつれさせてしまう。

新八「うおっ！？」

ヴィヴィオ「きゃっ！！」

新八はヴィヴィオに近づいた時に転んでしまい、そのままヴィヴィオを押し倒す形で倒れてしまう。

さすがにヴィヴィオも不意打ち気味に新八が倒れ掛かってしまったのでヴィヴィオも一緒に倒れてしまう。

新八「いたたた……ん？」

倒れた事に痛がる新八。そして自分の右手に何か柔らかい感触がある事に気づく。

そして何か嫌な予感がした新八はすぐに自分の下にいるモノに目を向ける。

ヴィヴィオ「ふえッ／＼／＼！？」

そこには胸を触れて顔を真っ赤にしたヴィヴィオがいた。それを見た新八はこの世の終わりのような顔をする。

そして自分の状況に気づいたヴィヴィオは…

ヴィヴィオ「ふえええええん！！！」

と泣きながら新八をどかして帰って行った。

新八「ちょッ…！！」

すぐに立ち上がって弁解しようとする新八だが、ヴィヴィオはもういなかった。

そして呆然としている新八の肩に黒龍が同情したような顔でポンと手を置いた。

ちなみにゲストキャラ達は黒龍が元の場所に転移させました。

## 第二十二訓：女子が料理できると思うのは男の勝手な妄想（後書き）

黒龍「じゃあ質問コーナーいきます」

『鳴神 ソラさんからは銀時LOVEズに教官な銀時の写真を、ソラLOVEズにホストなソラの写真』、『真王さんからメインキャラ撲殺バット（見た目はエスカリボルグ）』、『ボツスンさんからはソラには青年時代のフェイトのバリアジャケットを着た少女時代のフェイトの写真集と銀時LOVEとソラLOVEの人達には銀さんとソラが歴代ライダーの主人公が着た写真集』、『なっぺさんからは異性ならキスせずにはいられない唇に見えるかもしれないフェロモンリップクリームと口内粘膜を接触させた際に、相手を野獣の様に欲情させる効果をもつ成分を含んだその、一步先に……キャンディを女性陣と新八』、『黄色いのなにかさんからは等身大の銀時の抱き枕を差し上げます。（抱き枕の中身は新八本人が入っています）』

黒龍「贈っていただきありがとうございます」

フェイト「ソラの写真……ブハッ／／／！！（鼻血）」

なのは「ぎ、銀さん……格好いい……／／／」

写真を見て鼻血出すフェイトと顔を真っ赤にするなのは。

銀時「つてやらせるかアアアア！！！」

銀時は女性陣に贈られたリップクリームとキャンディーを遠くにぶん投げた。さすがに貞操の危機には黙っていられなかったのだらう。

ちなみに銀時と一緒にソラもぶん投げた。

新八「さアなのはちゃん！僕の事どう思う！？」

リップクリームを唇に塗って、キャンディーを舐めた新八がなのはに近寄る。

なのは「えっ？どう思っつて、どう言う事ですか？」

なのはは戸惑うだけでなんの変化もなかった。

新八「なんでじゃアアアアアアアア！……！」

新八は涙を流して頭を抱えた。ちなみに新八に贈られた奴は黒龍がただのリップクリームとキャンディーに摺り返られたそうだ。

なのは「にやはははは……銀さ〜ん／＼／＼」

なのはが銀時の抱き枕にギュ〜と抱きつく。  
すると……

なのは「にゃアアアア！……？枕が赤くなつたの！？」

なのはは真っ赤に染まった抱き枕に驚いて離れた。

ちなみに枕から鉄臭い匂いが漂い、ハア、ハア、と言う息遣いが聞こえた。

予告

沖田「次回、『沖田のドS開拓史。土方荒野に死す』にテイクオフ

でさア」

土方「嘘つくんじゃないー!!何どこぞの国民的アニメパクってんの!?何俺殺してんの!?!」

黒龍「あははは……本当は『同じ人間はこの世に一人』です」

## 第二十三訓：同じ人間はこの世に一人（前書き）

黒龍「はい、今回アンケートの結果を発表します！」

銀八「集計はこんな感じで〜す」

恋姫無双と戦国BASARAのキャラを出すかどうか。

1の賛成：11票

2の反対：3票

黒龍「つと言う事で、恋姫のキャラBASARAキャラを出す事に決定しました。アンケートに協力してくださった皆様ありがとうございます！」

銀八「決まったは良いけどよ、確か別の平行世界から来たって設定は止めるんだろ？」

黒龍「はい。そうになると、銀さん達と会合した時なんか色々時間が掛かってしまうので、そう言う設定はなしにして、最初っから戦国BASARAのキャラと恋姫無双のキャラが銀魂の世界に居ると言う設定にします」

銀八「そっちの方が考えやすいしな」

黒龍「うつ……まあ本音言つとそうなんですけどね……」

銀八「そんじゃ、『リリカル銀魂ライダー』始まるぜ」

## 第二十三訓：同じ人間はこの世に一人

プレシア「それで、何の用かしら？」

プレシアは玉座に座りながら自分の目の前にいるソラと桂を見据えていた。

二人は阿鼻叫喚の悪夢の昼食のダメージから回復し、プレシアの居る玉座の間まで来たのである。

その目的はもちろんプレシアに言いたい事があるからだ。

ソラは扉も何もない壁の方を指差しながら言う。

ソラ「そこにいるガキの事についてだ」

プレシア「ッ!？」

プレシアは驚愕の表情をする。

プレシアにすぐに分かった。ソラの指の方向と言葉からソラが何を言いたいのか。

プレシア「何故アリシアの事を知っているの？」

そう、自分の娘であるアリシアの事を指しているのだ。

何故アリシアを目の前のこいつ等が知っているかは分からない。

プレシアはさっきよりも鋭い目線でソラと桂を睨み付けながら質問する。

ソラはプレシアの目線も気にせず自分のペースで話を進める。

ソラ「やっぱりあのガキはあんたの娘か」

ソラは自分の仮説が正しかったと確認するように言う。

プレシア「私の質問に答えなさい」

プレシアは少し苛立ちを覚えながら声音を強くする。

ソラの変わりに桂がプレシアの問いに答えた。

桂「セフィロスと言う者が教えてくれたのだ」

プレシア「ッ！……アイツ！！」

プレシアは自分と協力関係を提案してきた男の顔を思い出し怒りの表情で玉座を叩く。

まさかあの男がこう簡単に自分の秘密を他人にバラすような奴だと思わなかった。

ソラ（どうやら勘違いしているな、アレは）

ソラはプレシアが勘違いしている事に気づく。それは桂も同じのようだ。

実のところセフィロスはアリシアの事もフェイトの事もあつちからわざわざ自分達に教えたわけではない。

桂が偶然玉座の間にあった隠し部屋を見つけ、気になった二人が隠し部屋に入って偶然アリシアを見つけたただけなのだ。

別に最初にセフィロスが全て話したわけではないのだ。

まあその後にセフィロスがフェイトの事をクローンだと二人に教えているが…

でも別に二人がセフィロスの誤解を解く義理などこれっぽっちもないので、勘違いさせたままにしておく事にした。

プレシアはいくらか落ち着きを取り戻した後、二人に質問した。

プレシア「それで、アリシアの事を知ったのは仕方ないとして、私に何が言いたの？」

桂「フェイト殿の事についてだ」

プレシア「あの『人形』の事？」

どうやらアリシアの事やフェイトの事がバレしまったので隠す気がないのか、プレシアははっきりとフェイトの事を『人形』と言った。プレシアの言葉に桂は内心怒りを覚えるが、なんとか抑えた。

ソラとしてもプレシアの言い方は癪に触るがここは我慢して話を進めた。

ソラ「ああ。なんでフェイトの事を娘として見ていなかった事だ」

プレシア「あの人形を娘としてエ？……アハハハ！……バカじゃないの！？」

プレシアはソラの言葉を聞いて怪訝そうな顔をした後、嘲笑うかのような笑い声を出す。

プレシアは立ち上がってそのまま捲くし立てるように言う。

プレシア「あんなのはアリシアの出来損ない。私の言う事を聞くだのお人形よ。なのになんであの人形を娘として見ないといけないワケ!？」

プレシアの言葉を聞いてさすがの桂も我慢の限界に達しプレシアに怒声を浴びせようとする。

桂「貴様——!!」

プレシア「もう良いわ。死になさい……!」

ソラ・桂

『『!』』

桂が言い切る前にプレシアが杖をソラと桂に向けて雷を放つ。  
二人は咄嗟に横に飛んで雷を避ける。

プレシア「秘密を知られた以上あなた達生かしておけないわ」

プレシアは連続で雷を放ち、ソラと桂を殺そうとする。

二人は素早く動き、雷を避けていく。

プレシア（速い!）

ソラと桂の素早さにプレシアは少し驚いた。

プレシア（魔力による肉体強化？ 違うわ。あの二人からは全く魔力を感じない）

プレシアは杖をソラに向けて再び雷を放つ。

ソラは体を捻って上手く避ける。

プレシア「いつまで逃げ続けていられるかしら!？」

ソラ「なら、止めるか」

ソラはプレシアの雷を避けてそう言つと、木刀の柄に手を掛けてそのままプレシアにダッシュする。

プレシアは雷を放つてソラを近づけさせないようにするが、ソラは右に左にとかわしながら前に進んでいく。

プレシア「このっ!」

プレシアも避けられる続ける事に苛立ちソラに雷を浴びせ続ける。そのせいでソラに注意がいつてしまい気づいていなかった。

桂「はアア!」

プレシア「ッ!？」

桂が自分のすぐ近くに来て刀を逆撫でに持ち替えて峰打ちを喰らわせようとしている事に。

プレシア「甘いわ!」

ガキン!

桂「くっ！」

だが、大魔導師と呼ばれるだけあって桂の攻撃に反応したプレシアはすぐさま障壁を展開して桂の攻撃を防いだ。

刀と障壁のぶつかる衝撃で桂は少し後ろに後退する。

そのまま桂に杖を向けて雷を放とうとするが……桂の後にすぐさまソラが木刀でプレシアを斬ろうとしていた。

プレシア「無駄よ！」

その攻撃も障壁で防ぎ、ガキン！と言う音がしてソラの木刀は弾き返される。

プレシア「これで終わりよ！」

プレシアはそのまま攻撃が防がれ隙ができたソラの顔に雷を放つが、ソラは体を捻ってぎりぎりでかわす。

プレシア（この距離で……！）

まさかこの至近距離で自分の攻撃をかわしたソラにさすがのプレシアも驚いてしまった。

完全に捉えたつもりだったのだが避けられてしまったのだ。

驚くプレシアに今度は居合いの構えをしてソラはプレシアに攻撃しよとする。

プレシア「だから無駄だと……！」

プレシアは障壁を張ってソラの攻撃を防ごうとする。

だがソラは構わずプレシアの張った障壁に居合いを喰らわせる。

プレシア（何故攻撃を止めない？）

障壁を張ったにもかかわらず攻撃を止めないソラに対して疑問を抱いたが、それはすぐに分かった。

バリッ！！

プレシア「なっ！！！？？」

なんとプレシアの張った障壁が砕かれてしまったのだ。

さすがのプレシアもこれには驚愕した。

今の自分は『ある理由』で本調子ではないとは言え、さっき張った障壁はA A Aランク程度の攻撃なら防げるほどの障壁なのだ。

それにも関わらず目の前の男はそれを破った。

しかも魔力による肉体強化もしていない。

それはつまり魔法なしの身体能力だよりの打撃で障壁を破った事になる。

これにはプレシアも驚かずにはいられなかった。

身体能力だけでA A Aランク以上の攻撃ができるの事に。

そしてプレシアの障壁を破ったソラはそのまま木刀を振り上げる。それを見たプレシアはすぐに我に返って杖をソラに向ける。

プレシア「まだよ！」

だがその時、プレシアに異変が起こった。

プレシア「カハッ!!」

ソラ「!?!」

突然プレシアは口から血を吐いたのだ。

これにはソラも驚き、木刀を振るのを止めた。桂もプレシアの異変を見て驚いていた。

プレシア「……ゴホッ!　ゴホッ!」

プレシアはその場に膝を突き、手で口を押さえて咳き込んでいる。咳を出す度にプレシアの口から血が飛び出す。

桂「おい!　どうしたんだ!?!」

桂は慌ててプレシアに駆け寄る。

ソラは最初は驚いていたものの、落ち着いてプレシアの様子を見てある事に気づく。

ソラ「……あんだ、まさか病に……」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

プレシア「……ふふ。大魔導師でも……不治の病は治せないのよ……」

プレシアはソラの言っている事が当たっていると言う風に皮肉な笑みを浮かべた。

これがプレシアが本調子ではない『ある理由』の正体である。

プレシアはずっと前から不治の病に蝕まれていたのだ。

プレシア「……私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前のソラを睨みつける。

ソラ「……んな事するかよ。あんたを殺すのが目的じゃない。それに……」

ソラは一旦、言葉を切った。

ソラ「フェイトのヤツが悲しむしな」

桂「ああ。俺もフェイト殿の悲しむ姿は見たくない」

桂もソラの言葉に同意する。

だからさっきもプレシアを殺さないように刀を逆撫でに持ってプレシアに峰打ちを喰らわせようとしたのだ。

プレシア「……じゃあなんでさっき私の頭を木刀で叩こうとしたの？」

プレシアの疑問も最もだ。

さっきはプレシアが吐血したのでソラは攻撃を中止したが、それがなかったらそのままプレシアの頭を木刀で叩いていただろう。

AAAランク級の打撃を木刀でする事ができるのだ。人、しかも女性の頭を力チ割るなど造作もないだろう。

ソラは頭を掻く。

ソラ「俺が狙ったのは頭じゃなくてあんたの杖だ」

ソラはプレシアが握っている杖を指差す。

ソラ「あんなにバンバン雷打たれたんじゃ堪ったもんじゃないからな」

ソラも桂同様、プレシアをあまり傷つけないように杖を狙っていたのである。

さすがに杖がなければ雷も打てないだろうと予想したからだ。

プレシア「強い割には甘いよね」

ソラ「まあな」

プレシアの言葉にソラは無難に返す。

それでソラはさっき聞こうとして事をもう一度聞く。

ソラ「それで、教えてくれないか？ フェイトの作った理由をな」

目を細めて真剣な顔で聞くソラに対し、プレシアは諦めたように言う。

プレシア「……良いわ。あなた達なら、話してもよさそうね」

プレシアとしても目の前のソラと桂は悪人ではないと思ったので、フェイトの作った理由やアリシアの事を話そうと思った。

それにこの二人はあのセフィロスよりも充分信用できると思ったからだ。

そしてプレシアは語り始めた。

当時自分は管理局の指令によりある研究所で実験をしていた。

しかも上層部の命令によりまだ安全面が確保されていないにも関わらず実験の最終段階に進んでしまった。

結果実験は失敗し、失敗により起きた魔力爆発の余波により自分の家で留守番をしていたアリシアは死んでしまった。

この時プレシアはアリシアと一分一秒でも一緒にいるために家を研究所の近くにしたのを激しく後悔した。

そしてプレシアの苦しみ終わらなかった。

管理局は実験の失敗を全部自分に押し付け、犯罪者にされた挙句人目を避けるように姿を消した。

そしてこの時の庭園を手に入れた。

自分が愛情を注いだ最も大切な一人娘を取り戻すためにプレシアは色々な事を試した。

アリシアを蘇させるために自分が完成させた技術『プロジェクトF』、またの名を『プロジェクトF・A・T・E』を使ってアリシアの記憶と姿を受け継いだ子供を生み出した。

だが、生み出してすぐに気づいたのだ。生み出した子供はアリシアではない事に。

アリシアにはない魔力資質を持ち利き手が逆でそして性格も違ったのだ。

例えば記憶を受け継いでも、姿形が同じでも違うのだ。そして気づいた。この娘はアリシアとは似ても似つかない偽者だと。

そして生み出した子供にプロジェクトの名残から『フェイト』と言う名前を付けた。

プロジェクトFがダメだと分かったプレシアは次の方法を必死に探した。

そして見つけたのだ。失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』を。

アルハザードには死んだ人間を蘇らせ、失った時間を取り戻す魔法が眠っていると言われる伝説の地。

そしてそこに行く為にはジュエルシードが必要だと言う事も分かった。

だが、その時点で自分の体は病に蝕まれていた。

まだ研究しなければいけない物があると言うに、この弱りつつある体ではジュエルシードを回収しに行けない。

そう思ったプレシアはフェイトに目を付けたのだ。

フェイトを一流の魔導師として育て上げ、自分の代わりに回収できないロストロギアを集めさせる事にしたのだ。

だがやはり、どんなに自分が欲しいと思ったロストロギアを回収してきても娘とは見れず寧ろアリシアのまがい物と言う忌まわしい憎しみの対象としか見れなかった。

プレシア「これが、アリシアを失ってから私の大まかな人生よ」

一通り話し終えたプレシアは顔を俯かせ悲しみにがり混じったような表情をしていた。

アリシアを失った事を思い出したからであろう。

桂「くっ！ 管理局と言うのはまるで幕府と同じではないか！」

話を聞いた桂は怒りの表情で声を上げる。

これではまさしく自分達の世界の幕府と同じだと思った。

プレシアがここまで追い詰められたのも元はと言えば全て管理局のせいだ。

正義の組織が無実どころか被害者を犯罪者に仕立て上げるなどと言う行為にはさすがの桂も怒りで拳を震わせていた。

ソラ「……………」

ソラは呆れたような表情をしていた。

管理局のやり方に怒りを覚えないわけでもないし、プレシアに同情しないわけでもない。

だが、そんな事よりもまずプレシアに言うておかねばならない事があるのだ。

ソラ「なあプレシア」

ソラの声聞いてプレシアは顔を上げる。

ソラ「アンタは娘のために、娘を生き返らせようとしてんじゃねえ」

プレシア「…………何ですって？」

ソラの言葉にプレシアは目を鋭くする。

ソラ「フェイトを生み出したのも、アルハザードに行って娘を生き返らせようとしてんのも全部、自分のためだ」

プレシア「!？」



ソラ「……気は済んだか？」

プレシア「く……！　うるさい！　その減らず口を黙らせ……」

プレシアは声を荒げてソラの言葉を止めようとする。

プレシア「う……ごほっ！」

また血を吐いてしまい、膝を突いてしまう。

ソラ「たく……病人のくせに無理するからだ」

桂「殴らせたお前のせいであろう」

プレシアの背中を擦るソラに今まで黙って事の成り行きを見ていた桂がこれはソラの否であると言う。

咳が収まったプレシアは悲しさや虚しさが混じったような顔でソラに聞く。

プレシア「……ソラ。私は間違っていたの……？」

俯いたままプレシアはソラに聞いた。

だがソラはその問いには答えない。

プレシア「もし……間違っているなら……私は……私はどうすればいいの？」

プレシアはその場に座り込んでしまう。

ソラ「……さあな」

ソラにだってプレシアが間違っているかは分からない。いや、ソラにしてみればプレシアのやり方は間違っている。

だが、自分がやっている事が間違っているかどうか決めるのは本人だ。

だからソラはそこには答えなかった。

そしてソラは呟く。

ソラ「ただな」

プレシア「！」

プレシアは振り返ってソラの顔を見た。

ソラ「フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中であんただけだ」

プレシア「！！」

ソラの言葉にプレシアは目を見開いた。

そしてソラ立ち上がった後また口を開く。

ソラ「それに……」

ソラはそこで一旦言葉を区切った後に言う。

ソラ「妹を母親が苛めてるってアリシアが知ったら悲しむんじゃないか？」

プレシア「ッ！！」

プレシアはソラの言葉を聞いて思い出す。

アリシアと草原でピクニックに行きお弁当を食べに行った時の事を……。

~~~~~

プレシア「アリシア。誕生日のプレゼントは何が良い？」

今のはまるで違う温和な表情、それこそ優しい母親と雰囲気のアリシアに誕生日のプレゼントを聞く。

プレシアの問いにアリシアは顎に指を当てながら考える。

アリシア「う〜〜んとね……」

そこでパツと閃いたような顔をする。少し興奮もしている。

アリシア「…私、妹が欲しい！」

プレシア「ええッ！？ ちょっと、さすがにそれは……！／／／／」

できない事もないがそれだと色々と大変なのでプレシアは顔を赤く染めて困った顔をしてしまう。

どう答えて良いか分からず狼狽してしまった。

~~~~~

あの時とのアリシアの会話を思い出し、プレシアの頬に一筋の涙が流れ落ちた。

プレシア「……私は、気づくのが遅すぎね……いつも、そう……」

——もっと早く気づくべきだった。もっと早く『あの子』を人形としてではなく、娘として愛してあげれば良かった。  
どうしていつも自分は間違いを犯してしまうのか？

どう言い表していいか分からない感情がプレシアの心に溢れ出した。自分の間違いに気づいたプレシアは口を抑えながら涙を流して悲しみにくれた。

そんなプレシアの様子を見たソラと桂は一言呟く。

ソラ「行くぞ……」

桂「ああ……」

二人はそう言つて玉座の間を出て行つた。  
今は落ち着くまで一人にしてやった方が良かったからだ。

ソラと桂は扉をから廊下に出た後、ソラは足を止めて言う。

ソラ「それで、いつから見ていたんだ？」

誰に喋っているのか疑問に思うだろう。  
だがその正体はすぐに分かった。

アリス「いつから分かってたんだ？」

柱の陰からアリスとアリアとリリスと神楽とヤミとセイバーとエリザベスが出て来る。

どうやら今までのプレシアとのやり取りを扉越しから見ていたようだ。

ソラ「プレシアが俺を攻撃した辺りだ。妙な殺気を感じたからな」

リリス「ほらアア！！ アリスさんとアリアさんが露骨に殺気出からバレたじゃないですか！！」

アリス「いや、お前も出していたぞ」

セイバー「まったく。もう少し平常心を保つ訓練をあなたたちはするべきです」

ヤミ「そう言うあなたも出していました」

リリス「そう言うヤミさんですけど！！」

アリア「にゃ〜……皆な出してた」

どうやらソラに恋路抱いていた五人はソラがプレシアに攻撃されて

殺気を出してしまつたらしい。

まあ好きな相手を殺されようとしたのだから仕方ない。

神楽とエリザベスはアリス達の様子を見てやれやれと言う感じた。

桂「しかし、リーダー達にバレていたとはな……」

桂とソラはフェイトとアルフやそれにアリス達にも感づかれないように玉座の間に來たのだ。

てつきり表情には出していなかったのでバレない自信はあったのだが、まさか自分達が何か隠していると悟られてしまうとは思わなかったからだ。

神楽「セフィロスとか言う奴の他にも何か隠しているのはバレバレだったネ。だから氣になつた私達は後をつけたアル」

リリス「いや、神楽ちゃんの手柄みたいになつてますけど、気づいたアリスさんとアリアさんですよ」

当然だと言わんばかりに喋る神楽にリリスがやんわりツツコミ入れる。

アリス「私相手にそう簡単に秘密を隠して通せると思わない事だな」

アリスは胸を張って自慢げに言う。ただそのせいでアリスの我がままし放題のスイカのようにでかい胸が揺れた。  
それをヤミはジト目で見ていた。

ソラ（アリス相手に隠し事は難しいか……）

ソラはため息つく。

心理戦とか頭を使うようなモノでは非常に強く、更には異常なほどの観察力や洞察力があるアリスにとってはソラと桂の普段とは違う様子を見抜く事は簡単だった。

アリアもアリスほどでないが、かなり高い観察力がある。

もう隠すのは無理だと判断したソラは最初の質問に戻った。

ソラ「それで、いつから見えた？」

神楽「プレシアの言った、“それで、何の用かしら？”のどこからアル」

ソラ「それ最初からだな」

ソラは神楽の言葉に冷めたツツコミをした。

まあ話の内容からして自分達の後について来たのだから最初から聞いていてもおかしくないなとソラは納得した。

その後アリスはソラに質問した。

アリス「それで、どうするんだ？」

ソラ「フェイトの事か？」

アリスの言いたい事が分かったソラは問い返す。

アリスはどうやら、このままフェイトに自分がクローンである真実を言うかどうか聞きたいようだ。

アリスは無言で頷く。

ソラ「さすがに昨日今日会ったような俺達が言うのはマズイだろ。そこはプレシア次第だな」

ソラは頭を掻きながらメンドくさそうに言う。

さすがに家族でもない部外者に近い自分達がフェイトに“お前はクローンだ”と言う事実を突き付けるのは最善の選択とは言えない。下手したらフェイトの精神を壊しかねない。

こう言うかなりデリケートな事は母親であるプレシアに委ねるしかないのだ。

桂はプレシアのいる玉座の間を見る。

桂「プレシア殿が本当に娘を思う母親になったのなら、悪い結果にはならないだろう。俺達にできる事はあの家族の行く末を見守ることだけだ」

アリス「しかし……」

アリスはそこで顔を険しい表情をする。

アリス「管理局は幕府並に腐った組織とはな。私も今回は頭にきたな……」

神楽「まったくネ！ プレシアの人生狂わせて、管理局マジムカつくネ！」

リリス「さすがにここまで腹立たしいのは久しぶりです！」

セイバー「騎士道どころか人の道として間違っている……！」

アリア「……………」

ヤミ「殺し屋をしていた私が言うのもアレですが、気分が悪いですね」

エリザベス「管理局許すマジー!!」

管理局がプレシアにした所業を思い出して各々は怒りや嫌悪感を露にしていた。

プレシアの話を聞いていた神楽やセイバーなんかは我を忘れて壁に八つ当たりしそうなほどであった。

だが、プレシアが本当の母親に戻った時は神楽やリリスは感動していた。

ソラは怒りを露にする皆を落ち着ける。

ソラ「落ち着けお前ら。ここで怒っても仕方ないだろ」

ソラの意見も最মনাので全員は怒りを納める。

桂「ソラ。プレシア殿が落ち着いたらまた行くのか?」

ソラ「ああ。一応かなり深い部分まで関わっちまったしな。それに、まだ気になる奴もいるしな」

ソラとしてはプレシアがこれからフェイトをどうするか聞きたいので、時間を見て玉座の間に戻るつもりである。

そしてもう一人気がかりなのがセフィロスの存在だ。

今のプレシアならセフィロスと手を切るだろうが、その後セフィロスがどう言う反応を示すか心配だからだ。

それは話を聞いた全員が思った事だ。

ソラ（まだ厄介ことは終わらないか……）

ソラは結局メンドーごとに首突っ込む事になった事に対し、ため息をついた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『銀八先生！』

銀八「はい。今回のアシスタントはこの人で〜す」

リリス「リリスです。よろしくお願いします」

銀八「はい、最近苦勞の絶えないリリスです」

リリス「本当に苦勞してます…（涙）」

リリスは散々な目に遭ったフェイトの物体X騒動を思い出して涙を流す。

銀八「苦勞してんな……じゃあ早速いくか。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『フォックス』銀時LOVEズにコックな銀時の写真を、ソラLOVEズにアイドルプロデューサーなソラの写真をプレゼント…質問  
『××料理を食べるマリオについてどう思う？』

スネーク「同じく質問『仮面ライダー牙王に変身したマリオについてどう思う?』」

ルイージ「黒龍さんへ質問『新八君の扱いが回復するのは何時になりますか?』……』……いや、もうマリオの胃袋は非常識の一言ですね」

リリス「うう…あの時マリオさんが居れば…」

リリスは『第二十二訓：女子が料理できると思つのは男の勝手な妄想』でマリオが居れば自分は助かっていただろうと思い、涙を流してしまう。

銀八「それでガオウに変身したマリオは、まあ強いんじゃないの?」

リリス「なんで疑問系なんですか!?!」

銀八「いや、なんとなく」

リリス「なんか答え方が曖昧ですね…」

銀八「つで、3の答えだけど…新八の扱いが回復するのはまだ先になりそうです」

リリス「いや、それじゃあ新八さんが可哀想ですよ!?!」

銀八「しょうがねえだろうが!! アイツがまだロリコンなんだから!?!」

リリス「いや、まあ…それは、そうなんですけど…」

銀八の言うとおり今のところ新八はロリコンに堕ち掛けているので、強く言い返す事ができなかった。

銀八「はい、じゃあ『鳴神 ソラ』さんはルイージの精神をなんとか持ち堪えさせてください……まあ手遅れかもしれないけどな……」

リリス「いや、最後の不吉なんですけど!？」

銀八「次、ペンネーム『なっぺ』さんから、

『なっぺ』新八に質問ㄱ。【吼太と詩音が新八を巡って喧嘩をしている。どうやら二人とも新八にぞっこんのようだ。どうする?】

あ、返答次第では吼太ラバーズと詩音ラバーズ、或いはトワードがそっちに行くから気をつけてねー」

ベス「具体的には？」

なっぺ「両方断ればトワードが激昂状態で参加確定。片方を選べば、そのラバーズとトワードが参加。両方選べば両方のラバーズが激昂しながら参加。先延ばしだと吼太と詩音が怒る」

ベス「つまり、どうやっても新八さんがリンチされると」

なっぺ「新八に逃げ場無し! ではではこの辺で!」『……おゝし

新八、大人しく殺されなさい」

新八「殺される事確定ですか!？」

答える前に死亡宣告されてしまう事に新八は驚く。

銀八「いや、どう答えても逃げ場ねえじゃん。もう諦めろよ」

新八「た、確かにそうですけど、僕にも答える権利はあります!!」

銀八「じゃあ遺言として聞いてやるから言ってみろ」

新八は息を吸い込み、目を見開いて叫ぶ。

新八「僕にはなのはちゃんがいるので二人の気持ちはありがたいですが、付き合えません!!すみません!!」

銀八「はい、死亡けつてい」

リリス「新八さん…いくらんでも激昂状態のトウードさんはヤバイですよ…」

トウードの恐ろしさを知っているリリスは顔を真っ青にしながら呆れた目で新八を見る。

新八「大丈夫です!僕には秘密兵器がありますから!!」

銀八(たぶん死ぬな)

何を考えているか分からないが、あのトウードには何をしても無意味なので新八の作戦も簡単に看破させられると思った銀八は呆れた顔で新八を見ていた。

銀八「じゃあなっぺさんは廊下に立っててください」

リリース「次です。ペンネーム『白黒』さんから、  
『ズラ』に質問です。

この人物とは気が合いそうって人はいいますか？

フェイトに質問です。

ソラの下着は何枚ほしいですか？

駄メガネに質問です。

お前さ、二次創作だとトコトンダメだな。

だからちよつとセフィロスや無縁にボコボコにされる。

というわけで黒龍さん、どうか駄メガネを苛めてやってください。

・・・これ質問じゃなえな。

俺の要望だな。

まいっか。』私だってソラ様の下着が欲しいです！！（鼻血）」

質問されてないのにリリースは鼻血出しながら変態チックな回答を言う。

銀八「お前は変態か！」

フェイト「沢山欲しいです（鼻血）」

フェイトも鼻血ダラダラ流しながら2の質問に答える。

銀八「こつちも変態だ！！」

銀八はキャラ崩壊して変態になりかけているフェイトにビククリする。

そして1の質問に桂が席から立って答える。

桂「ツラじゃない桂だ。 そうだな。 たぶんこれから出てくるであろうはやて殿と気が合うかもしれないな」

銀八「まあアイツくらいだろうな。 ツラのボケに付いていけるのは」

黒神さんの所のはやての事を思い出し、桂と気が合いそうなのはやっぱりはやてだと思った銀八。

銀八「じゃあ3の黒龍の答えは？」

黒龍「オツケー！ー！じゃあロリコン眼鏡は無縁かセフィロスどちらかにボコボコに…」

新八「させるなアアアアアアア！ー！」

ドカツ！！

黒龍「グハッ！！」

ノリノリで答える黒龍に新八がアップパーカットする。

黒龍の体は宙を舞った。

銀八「じゃあ『白黒』さん……新八にぶつとばされないように気をつけてください」

リス「さすがにあんまり怒らせるとキレちゃいますからね…（汗）」

銀八「じゃあ次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』さて質問。『デスシチュー食った人たちよ。どんな味がしたんだ？（激黒）』」

ネプギア「（い、今黒い感じが…）『フェイトさんに質問です。そのシチューを試食してみてくださいよ！』」

ユニ「今さり気無く被害を出そうとしているような…」

真王「最後の質問『いい加減新八をいい人にさせる。これ以上新八をいじめるなら私が最強仲間達が四分の三殺しにしてやる』」

ユニ「ほとんど死んでるじゃないの！！」『……こ、黒龍ウウウウウウウウ！！これ以上新八の扱い悪くしたら真王さんが怒りMAXでやって来るぞ！！』」

銀八はとんでもない怒りを纏った真王さんを見て顔を真っ青にしながら黒龍に新八の扱いを良くするように言う。

黒龍「大丈夫ですよ。まあ確かに今の新八はロリコンですけど、基本的には原作通りの常識人だし、活躍シーンも一応考えています」

銀八「すんげえ不安なんだけど！！？？」

リリス「って言うか、なんでそんなに余裕なんですか！？真王さんが怖くないんですか！？」

黒龍「いや、新八の扱いはこれから良くしていく『つもり』なので大丈夫です」

リリス「その言い方が怖いんですよ!!」

リリスは黒龍の曖昧な言い方に涙を流しながらツツコム。  
とりあえずこれからの新八の扱いはこのドS作者に任せるしかない  
と思い銀八は進める。

銀八「じゃ、じゃあ1の物体Xを食わされた奴ら答える」

桂・ソラ・神楽・チエーン・アルフ・セイバー

『死ぬかと思った(アル)(思いました)(ね)』

銀八「よっぽど凄い威力なんだな…」

銀八は物体Xの凄さに内心恐怖し、リリスはあの時食べていたら生死の境をさ迷っていたらうと思いい顔を青くさせる。  
そして3で質問されたフェイトが自分の作ったウネウネ動く紫色の  
スパゲッティを持ってやって来る。

フェイト「分かりました。じゃあ食べます」

銀八(つうかまたとんでもない物作ってんですけどオオオオオオオオオオオ!!???)

リリス(フェイトちゃーん!!!まず見た目でヤバイと気づいてください!!!)

フェイトの物体Xを見た銀八とリリスは顔を真っ青にしている。  
そんな二人の横でフェイトはパクツと物体Xを食べた。

フェイト「ふぎやアアアアアアアアアア!!!!」

フェイトは叫び声を上げて卒倒してしまった。

リリス「フェイトちゃーん！！！！ん！！！！」

銀八「大丈夫かアアアアアアアア！！！！？？？」

二人は泡吹いて気絶したフェイトを必死に介抱した。

とりあえずフェイトはなんとか一命を取り留めたが、物体Xを食べた時の記憶がスッポリ抜け落ちていたようだ。

銀八「はあ……フェイトの料理がマトモになるのはまだ先だな……」

リリス「そうですね……」

疲れた顔をしてため息をつく二人。

その時……

黒セイバー「真王オ……！！」ゴゴゴゴゴゴゴ

凄まじい黒いオーラを纏った黒セイバーが現れる。

それを見た銀八とリリスは部屋の隅っこに集まって小声で話す。

リリス「（ちょっとオオオオオ！！！！なんでセイバーさんが黒セイ



セフィロスへ

兄である貴方へ、『狂乱編』の弟の桂の活躍を見てどう思いますか？』……それじゃ黒龍さん答えてください」

黒龍「あ、ネタバレになってしまいましたが、ロクサスは出す予定です。ですが、さすがに名前をそのままダイレクトに出すとまた削除されかねなので名前を変えて出すつもりです。それと、オリジナル設定の方お願いします。メールで送ってください。どう言う設定なのか見させてもらいます」

黒龍は快く黒神さんの提案を受け入れる。

銀八「じゃあセフィロスに答えてもらうか」

銀八がそう言うともモニターが現れ、そこにはセフィロスが映っていた。

セフィロス「フツ……さすがは私の弟だな。まだ私の戦い方には届かないが、これから私のように戦えるようになると期待している。それと言いたい事が一つある」

これからセフィロスが何を言うのか分からず、銀八とリリスは互いの顔を見て首を傾げる。

セフィロス「あのはやてとか言う娘が私の弟に相應しいと認める事

ができない。そこで、私はあの娘が私の弟に相応しいかどうか確かめるために、絶望を贈りに行くっ》

セフィロスがそう言った後、モニターの画面が消える。

どうやら黒神さんのはやての所に絶望を贈りに行ったようだ。それを呆然と眺めていた。

銀八「……………あっちの狸死んだな」

リリス「……………そうですね」

とりあえず今のは忘れて二人は先を進める事にした。

銀八「…じゃあ『黒神』さんはあっちのはやてにご冥福を祈ります。次、ペンネーム『ボッスン』さんから、  
『質問です。』

物体Xとダークマターはどちらが強いですか？

物体Xを食べた皆さん。物体Xとダークマター、どちらの方がマシですか？

サルメガネヤミーは何故翔太郎さんにはかなり酷い事を映司さんにはあんまり？酷くない事をしたのですか？

アラド「そういえば、ヴィヴィオ…大丈夫ですか？」

バナージ「新八さんに胸を触られたからな…」

ボッスン（作者）「新八とサルメガネヤミーとカザリお仕置き隊、

集合」

ボッスン（作者）と新八とサルメガネヤミーとカザリお仕置き隊が  
円陣を組む。

ニンフ「作者？」

ボッスン「また行くのか？」

翔太郎「ああ、当然だ」

アंक「クソロリコンメガネとサルメガネヤミーとカザリを殺すま  
では」

なのは「私達にあんな事をされましたから」

フェイト「許しません。新八さんとサルメガネヤミーとカザリさん  
は！！」

美柑「あんな事をしなかったら死ぬ事は無かったのに……」

映司「作者さん……手伝ってくれますか？」

ボッスン「いいよ」

映司「ドライバーを貸します。俺はグリードになるから」

後藤「火野？」

映司グリード「パンダの着ぐるみを着たぐらいはいいけど……流石に

女性メンバー達にあんな事をしたらなあ!!」

後藤「オーズは火野しか変身出来ないじゃあ...!」

アंक完全体「心配するな。作者は全ての仮面ライダーに変身出来るんだ。作者に変身不可能なライダーはいない」

後藤「そうなのか...」(汗)

ウヴァ完全体「作者。俺達以外にメガネとサルメガネヤミーとカザリを殺すメンバーは居るんだろうな?」

映司グリード「居ますよ。後藤さん、お願いします」

翔太郎「照井、力を貸せ」

後藤「何言っているんだ!?!火野!?!」

照井「このメンバーだったらあのメンバーを...!」

映司グリード(黒いオーラ)「行きましようよ、あのバカメンバーを殺しに」

翔太郎(黒いオーラ)「いいから力を貸せ」

後藤、照井「わ、分かった」(汗)

アルティメットリュウケンドー(変身した高町ケンジ)「作者さん」  
(かなりの黒いオーラを出している)

ボッスン「ケンジ君か」

アルティメットリユウケンドー（黒いオーラ）「なのはちゃんを恥ずかしい事をしたのは誰だ？」

士「志村新八と言うクソロリコンメガネとサルメガネヤミーとカザリだ」

アルティメットリユウケンドー（黒いオーラ）「そうですか…あいつら…よくもなのはちゃんを恥ずかしい事をさせたな…ぶっ殺してやる…！」

仮面ライダーオーズ プトティラコンボ（変身したボッスン（作者）「皆さん、準備はいいですか？」

仮面ライダーW C J G X（変身した翔太郎とフィリップ）「ああ、出来ているさ」

仮面ライダーアクセルブースター（変身した照井竜）「行くしかないか…後藤…」（汗）

仮面ライダーバース・デイ（変身した後藤慎太郎）「行くしかないませんね…照井さん…」（汗）

仮面ライダーディケイド 最強CF（変身した士）「さて、あいつらはどう抵抗するか」

仮面ライダーディエンド CF（変身した海東大樹）「どんなに抵抗しても無駄だけどね」

グリード全員「同じグリードだろうと容赦はしない!!」

オールライダー（一部強化形態と最強形態）「クソロリコンメガネとサルメガネヤミーとカザリ…絶対に殺す!!」

なのは「行くよ…フェイトちゃん、はやてちゃん、美柑ちゃん、ヤミさん」

フェイト「分かっているよ…なのは」

はやて「あのバカメンバーには殺さないと気が済まないんや」

美柑「よくも私達を恥ずかしい事をさせたね…許さない!!」

ヤミ「友人の敵は私の敵です」

仮面ライダーファイズ プラスターフォーム（変身した十和野心）

「先輩！あのメンバーを殺しましょう!!」

仮面ライダーオーガ（変身した芹沢文乃）「分かっているわ。あのメンバーは許さないから…」

映司グリード「作者さん。もしあのメンバーがまだ抵抗したらガタキリバに変えて分身を作ってその分身にオーズの全てのコンボに変えてください」

オーズプトティラ「分かりました」

仮面ライダーW サイクロンアクセルエクストリーム（ディエンドCFが召喚したライダー）「一つ言う。ヤミは青年時代のフェイト

のバリアジャケットを着ていて、青年時代のフェイトが使っているデバイスを使っている」

WCJGX『行くよ、もう一人のW』

WAX「分かった」

ニンフ「行っちゃった…」

バナージ「大丈夫だろうか…」

ヴィヴィオ（聖王モード）「……………」

アラド「ヴィヴィオ？何で聖王モードに…？」

ヴィヴィオ「新八さんはHな人です…私の胸を触ったから…！許しません！」

ニンフ「あれは事故で…」

ヴィヴィオ「どんなに言い訳しても駄目です！！新八さんは許しません！！新八さん！サルメガネヤミーさん！カザリさん！無縁さんとセフィロスさんを買収しても無駄です！！私達を買収しました！！無縁さんとセフィロスさんにはとても美味しいシュークリームとチーズケーキとたい焼きで買収しました！！シュークリームとチーズケーキとたい焼きは私となのはママとフェイトママとはやてさんと美柑さんとヤミさんで作りました！！」

バナージ「まあ、ここのフェイトの料理の腕はそっちのフェイトよりはマシだからな」

アラド「そのシュークリームとチーズケーキとたい焼きは美味しいか？」

ヴィヴィオ「はい。シュークリームとチーズケーキとたい焼きです」

バナージ「美味しいな……」（チーズケーキを食べている）

ニンフ「これだったら、無縁とセフィロスも買収されるね」（たい焼きを食べている）

アラド「とても美味しいすー!」（シュークリームを食べている）

ヴィヴィオ「では、行てきます」……はい。物体Xとダークマターの威力はたぶん同じです」

リリス「って言うかそんなの比べたくありません!」

不味い料理の不味さ比べなどしても恐ろしいだけなので、リリスは涙流す。

そして物体Xを食べた人達が答える。

ソラ「どっちも嫌だ」

桂・神楽・アルフ・チェーン・セイバー

『どっちも嫌だ!（アル!）（です!）』

銀八「そりゃそうだ。っで、何故サルメガネヤミーが翔太郎には酷い事して、映二にはあんまり?酷い事しなかったと言うと、気分だそです」

リリス「気分で翔太郎さんは酷い目にあっただんですか!？」

銀八「そう言う事だ。じゃあ『ボッスン』さんは廊下に立ってなさい」

リリス「次です。ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』では質問します。』

1・フェイトに襲われた転生者に質問。怒ったフェイト、怖かったですか？

2・万事屋メンバーとリリカルメンバーに質問。怒ったフェイトをどう思いますか？

3・黒龍さんに質問。レナードが物体Xを食べたいと言ってます。

『以上です』

レナード「今回はこれにて」『……ちよつとオオオオオ!!!レナードさん命知らずにもほどがありますよ!!!』

リリスはレナードの常識外れの胃袋に驚愕する。

銀八「とりあえず、黒龍が命知らずのレナード君のために物体Xを贈ったそうなので…」

銀八は顔を青くさせながら3の質問に答える。

リリス「それで、白騎士君さんの所のフェイトちゃんに襲われた転

生者さん達の反応は…」

リリスがそう言うともニターが現れ、そこにはフェイトに襲われた転生者達が映っていた。

転生者達《怖いわアアアアアアアアア！！！》

顔を真っ青にして叫んだ。

リリス「…なんか、ハーレムとか止めそうですね…」

銀時「そうだな。っで2は一気に答えてもらいます」

銀八がそう言うと言問された人達が答える。

ソラ「あっちもキャラ崩壊してるな」

銀時「誰だアレ！？」

アリス「まだまだだな」

アリア「にゃ」

リリス「アレフェイトちゃん！？」

ライホース「人間怒ると怖いものだな…」

新八「アレ誰エエエエエエ！！！！？？？」

神楽「フェイトの後ろに、鬼が見えるアル…（真っ青）」

フェイト「あれ私だよね!？」

なのは「フェイトちゃんが…怖いの…」（涙目& a m p・ガタガタ震え）」

アルフ「どうしちゃったんだいフェイト!？」

ユーノ「あの…怖いんですけど…」

銀八「いや、アリスとアリアとソラはリアクション薄!？つうかアリアの何!？」

リリス「たぶん、怖くないんだと思います」

リリスの言うとおりさっきのアリアは無表情だった。

銀八「凄いなアイツ!…:…じゃあ『白騎士君』さんは廊下に立っていないさい」

リリス「次、ペンネーム『支配者』さんから、  
『支配者』やあ、皆よく来たね」

するとそこにはリリカル剣魂スペシャルの女性陣が集まっていた。

アルカ「作者なんのようだ？」

マリア「今から、私達は前回の復讐に行くんですよ?。」

セト「あんな目に合わされたんだから当然だ」

ニンフ「まさか邪魔する気？」

支配者「そんな訳ないでしょう。ただこの映像を見て欲しいだけです」

支配者はそう言うとうDVDを再生した。そこには黒龍と書かれたプラカードを下げたセフィロスと無縁がいた。セフィロスと無縁は前回の質問コーナーの後の映像を見て大笑いした上に鼻血まで流していた。それを見た彼女達は

全『あいつらと一緒にあのロン毛と腐れ転生者も殺してくる』

そう言うって彼女達は黒龍さんの所に向かった。

支配者「そうれっ」と

しかも支配者は後ろから先ほどゾーグに浴びせたのと同じビームを彼女達にも浴びせた。

支配者「頑張ってね」。じゃあ質問しますか

1、 松平のつつあんへ

銀八とゴリラとセフィロスと無縁が貴方の娘の事をマヨ方にべた惚れた変態だと罵っていました。実際に栗子ちゃんはマヨ方に惚れさせられています。如何しますか？（黒笑）

2、 セフィロスと無縁に質問

どうやって彼らに対抗しますか？

因みに貴方達のチート能力は全て彼らには通用しません。

では、生きてたらまた。ケケケケ………いや、支配者さんとはど  
んだけDSなんですかアアアアアアアアアアアア………！」

リリスは支配者さんの容赦ない追い込みに涙を流して叫ぶ。  
そして1の質問を聞いた松平はと言うと……

松平「よくも家の娘をバカにしたなテメー等ア………！」

完全に支配者さんに騙されて松平は拳を震わせて、銀八と近藤に拳  
銃を向ける。

近藤「ちよつと待つてエエエエエエ………誤解なんだとつつあん！  
………」

銀八「つつか無縁とセフィロスはどうした！？………」

松平「あいつらはいくら探しても見つからねえからその分テメー等  
に償わせてやらア………」

銀八「ちよつ！？それいくらなんでも横暴………！！………」

バキユン！！バキユン！！バキユン！！

銀八が言い終わる前に松平は拳銃をぶつ放す。

銀八と近藤は悲鳴を上げてなんと避ける。

松平「避けんじゃねえ………！！………」

銀八「普通避けるわアアアア！！！」

近藤「逃げるオオオオオオ！！！！」

銀八と近藤は逃げて、松平は拳銃連射しながら追いかけた。  
その光景を呆然と見ていたリリスは我に返る。

リリス「……え、えっと……とりあえずセフィロスさんに繋がります」

リリスがそう言うともニターが現れ、そこにはセフィロスと無縁が映っていた。

セフィロス《フッ……面白い》

無縁《ま、なんとかするか》

笑みを浮かべて言うセフィロスとメンドくさそうに無縁。  
そしてモニターが消えて銀八が息を乱して帰ってくる。

銀八「な、なんとか巻いて来た！！」

リリス「お、お疲れ様です」

銀八は息を整えて言う。

銀八「じゃあ『支配者』さん、じゃあ支配者！！いい加減俺を虐める質問は止める！！」

リリス「自分だけなんですか！？」

自分の事しか言わない銀八にリリースがツツコム。

銀八「じゃあ次、ペンネーム『ケン』さんから、  
『ケン』まだまだ甘い・・・質問するか・・・」

女性陣へ

土方がトツシーになって貴方方女性陣に対しドスのある挑発したり卑猥な言葉を使ってはあはあしながら発情していました。どう処刑しますか？（黒笑）

屁怒紹ファミリーへ

アニメ銀魂の220話である『銭湯では身も心も丸裸』にて銀さんと新八、近藤、土方、沖田の五人が銭湯で屁怒紹様達ファミリーに滅茶苦茶なやり方である嘘の銭湯の入り方をしてました。これをどう思いますか？

尚ローションを掛けた銀さんと父親に変装し騙した近藤、嘘をついた土方が中心ですので・・・新八と沖田は関係ありませんから・・・特にやらかした三人を可愛がってください（黒笑）

優子「ひどっ！？よくまあ・・・酷い質問が書けるわね・・・」

ケン「ちよつと工夫してみました。何気に色々なキャラを弄ってやるのも一種のゲームだ・・・」

優子「マヨラーが来ても知らないわよ」

統夜「三人ともお風呂に入ったのはいいけど・・・フェイトの物体Xって・・・」

フェイト「わ、私はああいう変なものは作った事も無いよ!!」

統夜「昔は『食える程度』だったのはいいが・・・もしあれだったら・・・寝泊まりが恐怖になったよ」

はやて「ふう・・・さっぱりした」

雪蓮「気持ちよかったわ」

メアリ「スッキリしたわ・・・」

統夜「程々にしておけよ・・・マヨラーは兎も角・・・新八はデリケートなんだ・・・慎重にな・・・それにしても・・・鬼兵隊・・・機会があつたら入ってみようかな・・・」

三人に新八を痛めつける事に対して止めるように言い、マヨラーに対しては冷たく対応し、高杉がいる鬼兵隊に入ろうと考え始めた。

統夜「まあ・・・時間があるし・・・考えとくわ・・・」

はやて「今入るのは止めときい・・・あの人の気持ちは分かるけど・・・」

統夜「分かるからこそだ・・・幕府という存在が狂わせた・・・その報いを破壊だけでなく・・・絶望も与えてこそ・・・だ・・・この蒼炎でな・・・」

右手の掌から蒼い炎・・・蒼炎を出した。

はやて「はぁ・・・」

統夜「そっいゃ・・・何か・・・お前ら三人宛のBDが来てたけど・・・」

メアリ「向こうで見るわ」

三人は違う場所へ移動した。

フェイト「何だろうね・・・」

統夜「さあ？」

しばらくするとはやてと雪蓮、メアリが出て来た。  
何故か三人は物凄い怒りを露わにしていた。

フェイト「ど、どうしたの？」

はやて「あのマヨラーがあ・・・絶対殺したる・・・」

雪蓮「アレ一人なら完全に殺しても構わないわよね？」

メアリ「完全に消し炭にしてあげるわ・・・」

三人はBDに女性陣がセクハラされている所を涎を垂らしながらニヤニヤしながら笑っているトッシーこと土方の事を話した。  
これを聞いた統夜は土方に呆れて何も言えなかった。

統夜「（止めたら何を言われるやら・・・）」

しばらくした後三人は殺気を纏い土方の方へ向った。

統夜「まあ・・・真撰組副長なら何とかなるだろ・・・」

フェイト「災難だね・・・土方さん・・・」

華琳「全く・・・無謀にも程があるわよね・・・変態マヨラーも」

華琳が現れた後、蓮華とシア、ネリネ、菜月、明久、雄二、翔子の七人が来た。

七人は何故かはやて達同様に怒りを露わにしていた。

フェイト「あの・・・どうかした？」

フェイトは恐る恐る聞いてみた。

蓮華「あのマヨラー・・・遊輔を愚弄して・・・絶対に許さん!!」

シア「稟君だけじゃなく私達の家族を馬鹿にした土方とセクハラしたサルメガネヤミーは許せないっす!!」

ネリネ「稟様だけじゃなく・・・私を・・・『料理下手なドジっ娘』と侮蔑した土方という方と私の胸を揉んだサルメガネヤミーに鉄槌を!!」

菜月「土方って人は・・・私を・・・『料理下手カーボンマスター』と言ってたの・・・」

明久「瑞希や美波、小蓮ちゃん、早苗ちゃんを侮蔑した土方と僕の大切な人にセクハラしたサルメガネヤミーに死の鉄槌を！！」

雄二「あの野郎・・・何が・・・『赤髪ゴリラ』だ！！あのサルメガネヤミー・・・あいつも許さねえ！！」

翔子「・・・雄二を馬鹿にした土方・・・許さない・・・」

蓮華と明久はデバイスを起動させ、シアはパイプ椅子、ネリネは魔力を放出し、菜月は巨大しゃもじを装備し、雄二は拳を鳴らし、翔子は右手にスタンガン、左手にルナチタニウム製のバットを装備し二人の所へ向った。

統夜「てか・・・シアとネリネの親にバレたら・・・土方は社会的に抹殺される・・・」

華琳「二世界の王の姫を侮蔑したからね・・・てか・・・ヤミーの主が駄眼鏡がバレたら・・・土方と同様に終わるわね」

フェイト「まあ・・・新八君なら・・・許されるんじゃないかな・・・あつ・・・駄目だね・・・彼の欲望で動いてるんだし・・・彼も社会的抹殺が・・・窃盗罪もあるから・・・」

統夜「ヤミーを生んだ代償って怖いね・・・ん・・・何か紙が・・・」

華琳「何々・・・第三の質問です。統夜と華琳、フェイトが土方の事を変態ロリマヨラー副長と言っていました。どうしますか？（黒笑）」

統夜、華琳、フェイト「作者アアアアアアアア！！！！！！」  
……ああ、そうなの。まあマヨラーなら別にやらえても良いか」

あつさり土方を見捨てる銀八は、1の質問で無実の罪を着せられた  
土方を見る。

土方「……………」

そこにはあつという間に女性陣に想像絶する仕打ちを受けてモザイクになった土方がいた。

それを見た銀八は青ざめ、すっきりした顔でリリスが戻って来た。

リリス「いや、犯罪者の成敗と言うのも中々気持ち良いものですね  
っ」

銀八「そ、そうだね…」

素晴らしい笑顔で言うリリスに銀八はガタガタ震えながら答える。

リリス「それで、2の質問なんですが…」

リリスはさつきとは打って変わって青ざめた顔をする。

さすがにこんな質問をあの悪魔の一家に聞かせたらどうなるか分かったもんじやないからだ。

そしてモニターが現れ、そこには屁怒組一家が映っていた。

屁怒組父「何を言うんじや。アレは江戸の粋な銭湯の入り方だと教わったんじや。あの人達の目を見れば嘘ではないと言う事が分かる」

屁怒組「そうですよ。親切な万事屋さん達や真撰組の方達の銭湯の

入り方を嘘だなんて言わないでくださいよ》

屁怒紹父《そうじゃ。何ならケンさんにもあの粋な銭湯の入り方を体験してもらおう》

屁怒紹《それは良いですね。では、我々家族で最高の持て成しをしましょう》

まったく銀時達がついた嘘を嘘だと信じない屁怒紹一家はケンさんにもあのとんでもない銭湯の入り方を実践形式で教える事にした。そしてモニターから…

ケン《うぎゃアアアアアアアアアアアア！！！止めてエエエエエエエエエエエエ！！！！》

統夜《なんで俺までエエエエエエエエエエ！！？？》

二人の悲鳴が聞こえた後に映像はプツン…と消える。

銀八・リリス

『……………』

それを見た二人は青ざめた顔をしてあの二人は死んだなと思った。そして気を取り直して質問に答える。

銀八「そ、それで…3の答えですが…」

土方「ふざけんなアアアアアアアア！！！」

復活した土方は怒り任せにケンさんの所のフェイトと統夜と華琳に

バズーカを連射してぶっ放した。

ちなみにそのバズーカにはフェイトの物体Xが内包されており、破壊しようもんなら物体Xが回りに散布されるようになっていた性質の悪い弾だ。

銀八「こつちもこつちで完全に勘違いしてるな…」

リリス「そうですね…」

二人は呆れた顔をする。

銀八「じゃあ『ケン』さんは生きていたらまた会いましょう」

リリス「なんて不吉な言い方するんですか!!」

銀八「次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『輝刃』…あゝあ…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・リリなの勢に質問…というかアドバイスだ。これ以上、新八を貶すような事はしない事を薦める。…トラウマに苛まれたくなかったらな…。

クフフ…♪新八の本質も見ずに貶す者に、虚無の鉄槌を…クカカカ♪（漆黒嘲笑）次は俺からだ。

2・新八に質問…というかアドバイスだ。アニメやゲーム等のサブカル物を好きになるのは構わない…。でも、それと同じくらいに…剣の鍛錬も怠らないようにな？剣の神様は…惜しみ無い努力を続ける者に力を与えるって言うしな…。

輝刃「だな…。それに、アニメやゲームの技から新たな技が生まれる事もある。そこに着目するのもまた一興だろう…。」……まあ最近の新八の扱いが悪いから同情するのも分かるけどな」

リリス「まあ、確かにそうですね」

銀八「まあ新八が自分達に対して不快感与えるような行動を取らないなら何もしないそうです」

リリス「なんか、また新八さんが襲われる可能性が高いんですけど…」

銀八「そこんところはもう仕方ないと言えねえよ」

そして2の質問に新八が答える。

新八「それになり剣の稽古は付けてるつもりです。それと、僕はそれほどアニメやマンガには嵌っていません…!」

銀八「嘘付くんじゃねえよ。どうせお前のことだから美少女物のアニメやゲームに嵌ってんだろ?」

新八「ちよつとオオオオオ!!アンタ僕をどう言っ目で見てんですか!!」

銀八「ロリコンでエロい思春期まっさかりの眼鏡」

新八「テメー……!!!!そこまで言うか!!!!」

思いっきり罵倒された新八は銀八を殴ろうとするが、銀八はヒョイ

ツと新八の拳を避ける。  
そして木刀を取り出す。

銀八「逆ギレも大概にしろ!!」

バコーン!!

新八「ゴフツ!!」

木刀をバットのように振って新八をぶっ飛ばした。

リリス「…容赦ないですね…」

リリスは呆れる。

銀八「俺だって黙ってやられないつつうの。じゃあ『月光閃火』さんは廊下に立っていてください」

リリス「今回はこれで終わりですね」

銀八「ああ。それじゃ読者の皆様、次回も楽しみにしててください。次回のアシスタントはなのはです」

なんか恒例の展開になってしまっているが、別の小説のキャラ達がまた自分に危害を加えた、またはバカにした事に対して報復する時間がやって来た。

支配者さんのキャラ達

『ロン毛と腐れ転生者とロリコン眼鏡とマヨラーと天パを殺す！』

支配者さんのキャラ達である、キャラのシャナとヤミとセイバーと綾子とイヴとセトとソルヴァと美琴とナナとナギと薫とマリアとアルカとそはらとアストレアとニンフが前回よりも強い殺気を出してやって来る。

ちなみに強さも支配者さんの影響で千倍強くなっている。

もの凄い勢いでやって来る彼女達を見て無縁は真顔で言う。

無縁「おい、それ以上近づかない方が良いぞ」

ナギ「ふん！お前の言う事など誰が聞くか！！」

シャナ「覚悟しなさい！！」

イヴ「判決の時間だ！！」

アストレア「覚悟しなさい！！」

まったく無縁の忠告を聞かない彼女達はそのまま進む。

そして無縁に近づく後二十メートルと言う所で彼女達の足元が崩れる。所謂落とし穴と言う奴だ。

支配者さんのキャラ達

『えっ！？』

そのまま彼女達は重力の法則に従って落ちていく。  
そして落とし穴の底には、フェイトの物体 $X$ <sup>シチューバージョン</sup>が隙間なくたつぷり入っていた。

ドボン！

支配者さんのキャラ達

『『おあがぁgはおhわががのぁgはおえうえrwががががばあがアアアアアアアア！！！！』』

この世の物とは思えないような不味さに苦しみ、まったく言葉にならない断末魔を上げて物体 $X$ に埋もれる彼女達であった。

無縁「だから近づくなって言ったのに」

無縁は呆れたように言う。  
すると…

ゾーグ「とぉー！！」

ゾーグが走り幅跳びのようにジャンプして落とし穴を飛び越えて無縁の前に落ちる。

ゾーグ「はーはっはっはっ！！！！ワシにそのような姑息な手が通じんぞー！！」

無縁「あつそ」

無縁は高笑いするゾーグの顔に手に隠していた針を投げる。

ゾーグ「そんなもの効くか!!」

ゾーグは手でガードして針を防ぐ。  
この程度の攻撃では今千倍強くなっているゾーグには蚊がさした程度にも感じないだろう。

ゾーグ「さあ、一撃で決めてくれるわ!!」

ゾーグは一気に決めるために『冥府魔砲』ハデス・ブレイカーを撃とうとするが…

ゾーグ「ぬおっ!?!」

いきなり体から異常を感じる。息が乱れ、体は何倍にも重く感じ、視界がグラつく。  
自分の体が普通ではないとすぐに分かったゾーグは無縁を睨み付けながら怒鳴って聞く。

ゾーグ「き、貴様!! 一体ワシに何をした!?!」

無縁「ああ、さっきの針の先端に毒を仕込んでおいた。あ、アンタでも効きそうな超強力な奴」

ゾーグ「な、に!?!」

ゾーグは驚愕の表情をする。

無縁「まああんたならたぶん死にはしないだろうが、当分は動けないだろうな」

ゾーグ「ば、バカ! ワシは支配者から貴様の能力が効かないように

…」

無縁「いや、毒は俺の能力じゃねエよ。つつか、自分の力が強くなったからって油断し過ぎだろ」

無縁の言うように、支配者さんに自分の力を千倍されたはいいが、そのお陰でまたもや慢心して無縁を甘く見ていたのだ。学習力がないとはこの事だ。

ゾーグ「わ、ワシの……ば、か…」

ゾーグはそのまま力なく倒れる。

無縁「じゃあ後は黒龍に送り返してもらおうか」

無縁は帰って行った。

そして支配者さんのキャラ達は黒龍に送り返された。

ボッスンさんの所から、仮面ライダーオーズ プトティラコンボ（変身した火野映司）と仮面ライダーW サイクロンジョーカーゴード エクストリーム（変身した左翔太郎とフィリップ）と仮面ライダーディケイド 最強コンプリートフォーム（変身した門矢士）と一部は強化形態と最強形態になっているオールライダーと更にはアノク完全体とウヴァ完全体とメスール完全体とガメル完全体となのはとフェイトとはやてと仮面ライダーファイズ プラスターフォーム（変身した心）と真木 恐竜グリード形態と仮面ライダーディエンド コンプリートフォーム（変身した海東大樹）と美柑と聖王モードのヴィヴィオと仮面ライダーオーズ プトティラコンボに変身したボッスンさんとアルティメットリュウケンドー（変身した高町ケンジ）と仮面ライダーアクセルブースター（変身した照井竜）と仮

面ライダーバース・デイ（変身した後藤慎太郎）と仮面ライダーフアイズ ブラスターフォーム（変身した十和野心）と仮面ライダーオーガ（変身した芹沢文乃）とが殺気全開にしてやって来る。あ、照井竜と後藤さんは渋々なので。

ちなみに攻撃対象は新八とカザリとサルメガネヤミー。

アニコ完全体「さあ、愚か過ぎる欲望の始末をつけないとな。つうか俺はアंकだ！ー！なんべん間違える気だ！ー！」

黒龍「百回！ー！」

アंक完全体「死ね黒龍！ー！」

黒龍「ぎゃあああああああああああああ！ー！」

黒龍はアंकに真つ黒焦げにされた。

完全体ウヴァ「ふん。前回のようにはいかないぞ」

完全体メズール「そうね。今回はサルメガネヤミーも増殖されなようだし」

完全体ガメル「やっつける」

黒龍「まったくですね、最後は思いつきり不憫な消え方したウヴァさん」

完全体ウヴァ「まずはお前からだ！ー！」





まあ何せなつぺさんの作品である『魔法少女リリカルなのは』The Fantastic Story』では理不尽なチート持ちの最強キャラであるトウードではドラグーンバーサーカーなど足元にも及ばないのだから。

トウード「では新八様。あのような返答したのですから、覚悟はできていますね？」ゴゴゴゴゴゴ

真顔でとんでもないオーラを出すトウードに新八は顔を真っ青にさせてガタガタ震えて涙目になる。

実の所トウードが何故ここまで激怒しているかと言うと、今回の質問での新八の回答がトウード激怒させるものになったからだ。

トウードのオーラ受けて新八は失禁しそうなほどだったが、なんとか耐えてある物を取り出す。

新八「なら！この真王さんから貰った『呪怨霊の日記』を喰らえ！！」

新八は日記を投げるが…

ブン！

トウードが腕を振ると日記は消滅する。

新八「嘘オオオオオオオ！！??」

トウード「これで終わりですか？」

新八「ならば！月光閃火さんから貰ったこのツツコミ力を戦闘力に変える眼鏡で！！」



メアリ「これいくらなんでも手抜き過ぎんでしょ!!」

雄二「俺達と土方とサルメガネヤミー軍団との死闘はどうしたんじやボケエエエエエエ!!」

明久「って言うか僕はなんで最初の紹介がバカ!!??おかしい!!絶対おかしい!!」

うるせえな。テメーらみたいなのにもう尺さいている時間なんてないんだよ!!

どんだけの文字数だと思ってんだ!!考えるバカ共が!!

雄二「んだとオオオオオ!!上等だ!!こうなりやマヨラーついでにテメーもぶつ殺してやらアアアアアア!!」

バカ「こうなれば黒龍と徹底抗戦だアアアアアア!!って言うかバカと表記するなアアアアアア!!」

翔子「やる」

はやて(ケン)「いくら他作品の作者だからと言ってもやって良い事と悪い事はあるんや!!」

閣下「燃やしてあげるわ!!って私は閣下じゃないって言ってんでしょうが!!」

じゃあこれで。

バ閣下「……って誰がバ閣下じゃコラアアアアアア!!」

雄二「もう我慢ならねえー！！皆行くぞー！！！！」

ケンさんのキャラ達

『『おおー！！！！』』

そしてこの後の黒龍とケンさんのキャラ達の戦いは、後に『ゲスト戦記』と呼ばれ、ドS作者黒龍との死闘で死んでいった彼等は永遠の英雄として語り継がれる事になった。

バルムンク「フェザリオン」そして後に彼等は我と共にB・Sとして活躍するのであった」

雄二「んなわけないだろオオオオオオオオオ！！！！」

はやて「生きとるわボケEEEEEEEEEEEE！！！！」

メアリ「……………なんか、もう精神的に疲労困憊なんだけど……」

バルムンク「ヘルズファキナウェイ！！」

明久「ぎゃああああああああ！！！！ウンコ投げて来たアアアアアアア！！！！」

雄二「逃げるオオオオオオオオ！！！！」

はい、ちゃんとケンさん達も帰っていきました。

## 第二十三訓：同じ人間はこの世に一人（後書き）

黒龍「はい。今回も贈り物コーナーしまゝす」

『鳴神 ソラさんから銀時LOVEズにコックな銀時の写真を、ソラLOVEズにアイドルプロデューサーなソラの写真』、『なっぺさんから、『新八の因果律のバジルソース和え』と、『多元宇宙迷宮体験マシン』を、それからアリスと沖田に『人や風景を撮ると、きなくさい交渉材料になるような写真が撮れるカメラ』を、銀時には『エクストリーム砂糖を使ったパフェ10kg』を、ラバースには『子供がまずできないやり方と子供が絶対に出来るやり方』恋人未満篇』という本』、『真王さんからドラグーンバーサーカーと呪怨霊の日記』、『HARUさんから新八の部屋に有ったリナのグッズを売った高級クッキーとマカロンの詰め合わせと高級茶葉& amp; 絞り立てモーモールミルクをセット』、『月光閃火さんから新八のツツコミ力を戦闘力に変換する眼鏡』、『今回被害にあつた方々にAED一式と解毒剤と料理の本と痴漢& amp; 不審者撃退スプレーと』

黒龍「贈っていたいた皆様ありがとうございました」

銀時「いや、さすがにいくらなんでも三粒で糖尿病末期になるような砂糖食わねえよ」

新八「つつか僕の因果律のバジルソース和えて何！？食べ物なの！？良く分からないんだけど！？」

黒龍「あ、迷宮は全員が体験しましたが、全員無事に帰ってきましたよ。まあ新八はかなりギリギリでしたけど」

アリス「よし。本は読んだ。ソラ、早速私とヤ…」

黒龍「ソラは本読んでいる間にどっか行きましたよ」

アリス「やれやれ…奥手だなアイツは」

新八「って言うか、何僕の物勝手に売っとなじゃアアアアアアア  
！！！！」

新八は涙を流してHARUさんから貰ったお菓子などを投げ飛ばした。

フェイト「料理の本を見てパスタを作ってみたよ」

フェイトの持った皿の上にはウネウネ動くミミズみたいな紫色のパスタがあった。

リリス「いやアアアアアアアアアア！！！！（涙）」

神楽「そしてロリコンを撃退ネ！」

神楽は新八の顔にスプレーを浴びせる。

新八「（バタ）」

黒龍「声も上げずに倒れたアアアアアアア！！！！」

銀時「フェイトの物体X入りだからなのか！？」

黒龍「そしてフェイトの物体Xを食べた皆さんは解毒剤でなんとか一命を取り留めたのであった」

予告

リリス「次回、『間違いは誰にだってある』にテイクオフです」

## 第二十四訓：間違いは誰にだってある（前書き）

黒龍「今回は銀さんがなのはへのフラグを更に強化します」

銀時「いや、なんだそりゃ!？」

黒龍「皆さんお楽しみに」

銀時「いや、人の話聞けエエエエエエエエ!?!」

近藤「『リリカル銀魂ライダー』始まるぞ!?!」

## 第二十四訓：間違いは誰にだってある

ソラと桂の他の面々がフェイトとアリシアの秘密について知った頃。

場所海鳴市。

時刻は午後三時あたりだろう。

そして今銀時達が住んでいる海鳴市では今とんでもない事態が怒っていた。

新八「銀さアアアアアアアアアアアアん！！！！ 一体なんなんです  
か『コレ』はアアアアアアアア！！！！？？？」

銀時「俺が知るかアアアアアア！！！！ 考えず走る事だけに集中  
しろオオオオオオ！！！！ でないと死ぬぞオオオオオオ！！！！  
！！」

新八と銀時は叫びながら『あるモノ』から逃げていた。

その姿たるやマラソンランナーもびつくりなくらいのダッシュである。

何故そこまでスーパージョーランニングができるかというと、今彼らは死に直面しているからだ。

そして叫ぶ銀時と新八の横には二人と同じくらいの凄まじいスピードで走る真撰組の近藤と土方と沖田がいる。

近藤「ギャアアアアア！！！！ 追いつかれるウウウウウウ  
！！！！」

土方「チクショー！！ なんで俺がこんな目に！！」

近藤は涙目になりながら走り、土方はなんでこう不幸な場面に遭遇しなきゃならないと言う風に怒りを露にしていた。

これを読んでいる皆様もなんで彼らがオリンピック選手顔負けの走りをしているか気になるだろう。

何故なら彼らは自分達の後ろから迫っている『あるモノ』から必死に逃げているからだ。

文句言いながら走る土方に沖田は何故か真顔で人差し指で後ろを指す。

沖田「土方さん。喋っている暇あったら走った方が懸命ですぜエ。でないと『アレ』に捕まりまさア」

土方「つつかなんで……！」

土方はそう言つて後ろを振り向きながら叫ぶ。

土方「『でかい気の根っこ』に追いかけれなきゃならねえんだアアアアアアアアアア！！！！」

そう、彼らを後ろから追いかけていた『アレ』とはめちやくちゃでかい気の根っこなのだ。

巨大な気の根っここの大群が物凄い速さで成長しているので、まるで追いかけて襲ってくるように見えるほどだ。

もしアレ追いつかれたら冗談抜きで大怪我じゃ済まないだろう。だから銀時達は必死に逃げているのだ。

それにしても何故彼らがこんな街中で巨大な木の根っこ追いかけてるのか木になる……じゃなくて気になるだろう。

実の所銀時達はなのはの父親である士郎が監督を務める翠屋JFC

のサッカーの試合を成り行きで見ていた。まあ銀時と土方と沖田はつまらなそうにしていたが。

ちなみにその時、山崎とライダーは翠屋の手伝いでいない。

そして試合が終わり銀時達は街中をブラブラしていた。

その時、ピカーッと何かが光ったと思うと突然高層ビルくらいのかい巨大な木が現れた。

さすがにその光景には銀時達も驚愕していたが、驚いていたのもつかの間、今度はなんと巨木から伸びている木の根っこが急成長して町を蹂躪し始めた。

驚いた銀時達はダッシュで逃げて今のような状況になったと言う訳である。

そして現在進行形で銀時達は逃げている。

新八「ぎ、銀さん……！！　ば、僕もう限界です……！！」

さすがに長時間のダッシュは辛くなってきたのか、呼吸がかなり荒く少しづつだが足のスピードも遅くなっている。

銀時「新ハ……！！　　気合でなんとかしろ……！！」

新八「む、無理です……！！　もう体力が……！！」

あまりの疲れに新八は足をもつれさせてしまう。

新八「しまっ——！！」

そして新八は顔面から転んでしまい「ブフォッ……！！」と言う声を上げる。

銀時「新八イイイイ！！！」

新八が転んだ事に気づいた銀時は急停止し、新八の名前を叫ぶ。  
その間にも巨大な木の根っこは新八に迫っていた。

新八「うわアアアアアアア！！！！！」

もうダメだと思った新八は目を瞑る。

新八「……………アレ？」

来るはずの衝撃がこない事を不思議に思った新八は恐る恐る目を開ける。

新八の目には鼻の先で成長が止まった巨大な木の根っこがあった。  
新八はそれを見てゾツとしてしまう。もし後一步でも成長していたら自分の命はなかっただろう。

そして新八は慌てて立ち上がり銀時達の所に涙や鼻水を垂れ流して顔を涙や鼻水でグチョグチョにしながら駆け寄る。

銀時「う、運が良かったなお前……」

銀時は涙と鼻水を垂れ流している新八に少し引く。

新八「いや、ホントですよ！！ 走馬灯が見えました！！」

新八は涙や鼻水を拭き取りながら本当に命があった事に喜ぶ。

沖田「にしても、なんで急に止まったんでしょうね？」

土方「さアな」

沖田の問いに分からないと言う風に答えて懷からタバコを出して火をつけて吸う。

その時近藤があるモノに気づいた。

近藤「ん？ アレはなのはちゃんじゃないか？」

近藤がビルの屋上を指し、全員の視線がそこに向く。

そこにはバリアジャケット姿で巨木に向かってレイジングハート構えていた。

銀時「あ、確かになのはだな。つつか何やってんだアイツ？」

沖田「あのバリアなんとかってのを着てんですし、ジュエルシードの封印とかじゃないですかイ？」

土方「つつ事はあの木はジュエルシードが原因で事か」

沖田の言葉を聞いた土方が冷静に分析する。  
確かにそれならなのはがレイジングハートを巨木に向けている説明も付く。

新八「行ってみましょう！」

銀時「おい、待てよ新八！」

なのはの所に向かった新八を銀時達は慌てて追いかけた。

そして銀時達は屋上まで行くとそこにはなのはとユーノがいた。  
ちなみに銀時達が屋上に来る頃にはジュエルシードは封印されて巨木は消えていた。

ちなみに銀時達が屋上に来た頃ライダーもやって来た。どうやら魔力を感じて気になって来たらしい。

銀時（ん？ どうしたんだアイツ？）

銀時なのはの姿を見て怪訝そうな顔をする。

何故ならなのはは見るからに元気がなく、そんななのはをユーノが励ましていると言う感じなのだ。

そしてユーノが銀時達に気づき駆け寄ってくる。

ユーノ「皆さん！」

銀時「よっ」

駆け寄ってきたユーノに銀時が無難に返事する。

ユーノ「それにしても、なんで皆さんは此処に？」

魔法を使えない銀時達が魔力を感知してこの場所まで来たとは思えない。

ユーノの問いに銀時が後頭部を掻きながら答える。

銀時「此処になのはがいるのが見えたんでな」

ユーノ「そうなんですか」

ユーノは納得する。

すると銀時が「それにしてもよ」と言ってユーノに質問した。

銀時「なのはの奴どうしたんだ？　なんかすんげえ落ちこんでんだけど」

ユーノ「実は……」

ユーノは少し元気がない声でワケを説明した。

なんでもなのははジュエルシードの気配に気づいたらしいのだが、それを勘違いだと思ってしまったようなのだ。

そしてこの大惨事は自分のせいだと言う風に自分を責め続けて落ち込んでいるらしいとの事だ。

それを聞いた新八は複雑な顔をしていた。

別になのはが悪い訳ではないのは新八も分かっている。

だが、どう声を掛けて良いのか分からないのだ。

近藤達真撰組とライダーは何も言わずに黙ってなのはを見ていた。

ユーノの話を聞いた銀時はなのはを見る。

銀時（なるほどね）。ガキのくせして責任感の強いこつたな）

銀時「柄じゃねえがしゃあねえな」

銀時はそう呟いてダルそうになのはの所に向かった。

ユーノ「銀さん？」

ユーノはなのはの所にゆっくり向かう銀時を見ていた。

銀時「よぉ～なのは」

銀時はいつものダルそうな声でなのはに声を掛けた。

なのは「……銀さん」

なのはは、泣きそうな顔で俯いていた。

とんでもない失敗をして、銀時の顔をまともに見れないでいた。

銀時「ユーノから聞いたぜ。別におまえが気に病む必要はねえよ。だからそうやって自分を責める必要はねえよ」

なのは「銀さん……でも、これは全部私のせいで……」

なのはは、まだ俯いて辛そうにしていた。  
場の空気がさらに重くなった感じがした。

銀時「はあー……」

銀時は溜息をつきながら頭を掻いた。  
なのはは、こんな事になったのは自分のせいだと言う考えが頭の中を巡っていた。

新八もここで一発なのはに声を掛けて励ましたかったが、いかんせんなのはに掛ける言葉が見つからなかった。  
長い沈黙が続く。

銀時「いい加減にしろやアアアアアアア！！！」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。

鬼の形相になった銀時は、なのはの頭に拳骨を食らわせた。

なのは「ッ！！！」

なのはは両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

ユーノ「ちょッ！？ 銀さん、何やってるんですか！！！」

ユーノは何も悪くないなのはを銀時が怒って拳骨喰らわせた所を見て声を荒げた。

新八「ごら天パ！ あんたいったい何やってんだ！！！」

新八もなのはが殴られた事に腹を立てた。

銀時「フェレットもどきとダメガネは黙ってる！！」

銀時の凄みのある声にユーノは押し黙ったが、新八はまだ何か言いたそうで銀時の所に行こうとした。

それを土方とライダーが新八の肩を掴んで止めた。

近藤と沖田は黙ってその光景を見ていた。

新八「なんで止めるんですか！！　あの人は、なのはちゃんがあんなにも頑張ったのに、それを褒めもしないで怒ったあげく殴ったんですよ！！」

自分を止める二人に納得のいかない新八は怒鳴りながら抗議した。

ライダー「あなたはどうかやら頭に血が上がりすぎて何も分ってないようです。ギントキが怒ったのはなのはの失敗の事じゃありません」

土方「ああ。そう言う事だ」

新八「えッ！？」

新八は二人の言葉を聞き、新八はまだ納得がいかないものの黙って銀時となのはの会話を聞く事にした。

銀時「なのは、俺が怒ってんのは別にお前が失敗したからじゃねえ」

銀時は首を横に振る。

なのは「ふえッ！？」

なのは涙目になって頭を抑えながら銀時の顔を見る。

銀時「そうやってお前がいつまでも後ろばっか向いているからだ」

なのは「ッ！」

なのは何かを気づいたような顔をする。

銀時の言う通り今の自分は自分を責めているだけで前を向こうとしていない。

銀時は坦々と語り続ける。

銀時「確かに過去にあった事は消せやしねえ！。だからと言って、過去の過ちを振り返るなとも言わねえ！」

銀時は空を見ながら何かを思い返す様に言う。

その顔がどこか寂しさを漂わせていた。

再び銀時はなのはに顔を向ける。

銀時「だからそう言うもんを全部背負って前に進むんだ。なのは、おまえはどうしたい？」

なのはは、銀時の問いを受けて顔を俯かせる。

そして再び顔を上げる。

なのは「私、ただ誰かに傷ついてほしくなくて、ユーノ君のお手伝いでジュエルシード集めをしようって決めました。けど、今は違います！　こんな失敗を起こさないためにも、皆を守るためにも、自分の意思でジュエルシード集めを続けます！」

なのはの顔には強い意思が籠っていた。

銀時「そうか」

なのはの答えに満足だったのか銀時は微笑を浮かべながらなのはの頭を撫でる。

銀時「けどな、なのは。お前はまだガキなんだからよ、もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはユーノだけじゃねえー、他にもお前を心配してくれる奴が、支えてくれる奴がいるんじゃないか？」

銀時はなのはを頭をゆっくりと撫でながら何かを諭すように言う。

銀時「ま、お前がまた立ち止まった時には、いつでも俺達がお前の背中を押してやるよ」

そう言って銀時はなのはの頭から手を離れた。

なのは「銀さん……」

なのはは銀時に顔を向けた。

新八「僕達はなのはちゃんの味方だよ！」

ライダー「困った時は助けます」

近藤「うむ。君が困った時にはいつでも手を差し伸べるぞ！」

土方「ま、テメーは少し誰かに甘えろ」

沖田「気に入らない奴がいたら言いな。俺が纏めて抹殺してやらア」

土方「オメーの言い方は物騒なんだよ!!」

新八達も次々になのはに励ましの言葉を掛ける。

銀時「もう一人で悩むんじゃねーぞ。いいな？」

なのは「はい！」

なのは嬉しそうに頷く。

なのは「銀さん、皆。本当にありがとう」

なのははその時、目を奪われそうなほど良い笑顔でお礼を言った。

新八「ぐはアッ!!」

新八はなのはの満面の笑顔を見て胸に衝撃(?)を受けて胸を抑えながら片膝を地面についた。

ユーノもなのはの笑顔を見て少し顔を赤くしていた。

まあフェレットだから誰にもそんな変化なんて分らないけど。

なのは(にやははは。なんだかますます銀さんに惚れちゃいそうだなゝ／＼／＼／＼)

なのはは顔を赤くしながら銀時を見て笑みを零していた。

一方、銀時、土方、沖田、近藤、ライダーは顔を真っ赤にして膝を付いて、息を“ハア、ハア”させている新八に呆れていた。

新八（やべ！ 今の笑顔はまじでやばかった！ 危うく呼吸困難になる所だった！）

新八もなのはへの恋心（？）を日に日に強くしていた。これ行く所まで行ったらマジでヤバイな。

そして時間は夜になる。

とあるビルの上にはそこに二人の人間と一匹の獣がいた。

一人は黒いマントなびかせ黒い斧のような杖を持った金髪の少女。

もう一人は黒い独特の戦闘服を着て黒いサングラスを付けた男性が佇んでいた。

金髪の少女「ロストロギア……形状は青い宝石、一般名称はジュエルシード」

男性「それを回収するのが今回の仕事です」

金髪の少女「早く手に入れないと……母さんのためにも」

狼「ワオオオオオオオン！！！！」

そしてその声に答えるかのように二人の近くに控えていたオオカミが夜の街に遠吠えを響かせた。

そして数瞬、その場にいたはずの二人と一匹の姿が消える。  
少女――『フェイト・テスロッサ』は自分の大切な人のために目的の物を集める。

そしてまた時間は経ち翌日。

新八と銀時はなのはとなのはの兄の恭也そしてなのはの友達であるアリサと一緒に月村すずかの家に遊びに来ていた。  
近藤と土方は翠屋の手伝いと言うかバイトでいない。

沖田はどうにも翠屋の仕事が合わなかったのか、別の仕事を探すためにブラブラしているらしい。

完全にサボりだ。土方はそんな沖田に憤慨していたのは言うまでもない。

ちなみに銀時と新八は今回仕事がオフだったのでなのはの誘いで月村低に来たのだ。

まあ恭也が嫌そうな顔しているし、銀時自身もメンドくさくて行きたくなかったのだがなのはが「銀さんも一緒にいかないの?（涙目＋上目ずかい）」で誘ってきたので渋々来ていたのである。

新八はそんなのはを見て顔を真っ赤にして銀時達に軽蔑の眼差しで見られていた。

これは余談だが、恭也がバスに乗っている間ずっと銀時を睨んでおり銀時はすんごく精神的に疲れた。

月村低に来た銀時と新八の第一声が……

銀時・新八

『『でか！？』』

だった。

まあお金持ちの中のお金持ちである月村家の家はめちゃくちゃでかい。

さすがに一般庶民である銀時と新八にとっては驚かずにはいられなかった。

ちなみに今の新八の格好はいつもの着物ではなく白いワイシャツに黒いズボンを着ている。木刀は袋に入れて手に持っている。

銀時の方はいつもの格好だが木刀は新八と同じように袋に入れている。

そして月村邸を見て呆然としている二人に恭也が声を掛ける。

恭也「おい、何しているんだ。置いて行くぞ」

銀時（たく、なんで一々睨みつけてくんだよあのシスコン……）

今声を掛けた時もそうだが、最近では恭也は銀時に会う度会う度棘のある言葉を言ってくるわ、睨みつけてくるわで銀時はそんな敵意剥き出しの恭也にウンザリしていた。

しかも言ってくる言葉が「なのははお前には渡さん！」だとか、「なのはに近づくな天パ！」とかもうかなりウザイ。

もうそこから銀時は恭也はシスコンだと理解した。

最初は銀時も売り言葉に買い言葉で相手していたのだが、さすがにあまりのしつこさに参ってしまい相手をする気も起きなくなった。

まあ話は逸れたが今銀時達は月村低にある庭に来ていた。

ちなみに銀時と新八はサッカーの試合の時にアリサとすずかと自己

紹介を済ませている。サッカーの試合を見に来ていた近藤と土方と  
沖田もしっかり。

アリサと自己紹介した時、アリサの声音が神楽と似ている事に気づいた。まあ実の所神楽とアリサの声優さんは同じ人なので……。

銀時は庭にある椅子に座った後、恭也が美女と一緒にどこに行くのが見えた。

銀時「ん？　アイツと一緒にいるねーちゃん誰？」

なのは「あつ、あの人はすずちゃんのお姉さんの月村忍さんです」

アリス「ちなみにあの二人付き合っているのよね」

新八「えッ！？」

銀時「マジか……？」

なのはが紹介しアリサが付け足す。

アリサの言葉を聞いた新八と銀時は驚愕の表情をする。

新八（う、う、う、う、羨ましいぞこんチクショーーーーー！！！！！！）

新八は内心ではシャウトし、影ながら涙を流していた。

まあ恭也はシスコンではあるがはつきり言えばイケメンなので彼女が出来てもおかしくないが、やはりこう身近な人物が彼女、しかも美人の彼女がいると聞く<sup>さが</sup>と羨ましいしかなり憎らしくなってしまうのが彼女のいない男の性と言う物だろう。

新八と同じように彼女がいらない銀時も怒る場面なのだが、それ以上に銀時には言いたい事があった。

銀時（なんでアイツシスコンなのに彼女いんだアアアアアア！！！！！！）

これだった。

まああそこまでシスコン見せ付けて彼女いるんだからかなりビックリだ。

銀時は怒りと言うよりビックリした。

とりあえず恭也の話はここまでにしてなのは達は紅茶を飲んだりお菓子を食べながら楽しそうに話していた。

ちなみに銀時と新八はあまり会話に加わっていない。

銀時はこう言うのにはあまり参加しないと、新八は内気なシャイボーイなので仕方ない。

とりあえず銀時はお菓子食べながらなのは達の話の話を耳を傾ける程度に聞き、新八は紅茶を飲んでるのは達の話の話を聞いている。

銀時（なんか詰まんねえな）

銀時がそう思った時……

ユーノ「キューキューー！！」

とさつきからネコに追われてたユーノが鳴き声を上げながら銀時の肩まで上った。

銀時「うおッ！？」

突然ユーノが自分の肩に登って来た事に驚いた銀時は少しバランスを崩すがすぐに持ち直す。

そして自分の右肩に乗っているユーノを見ると、さっきから追いかけて来たネコを見下ろしながら少し怯えていた。

銀時（なんつうか、コイツも苦労してんだな）

ちょっとユーノに同情した銀時であった。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

なのは【ユーノ君！】

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

ユーノ【うん。近くにジュエルシードがあるね】

どうやら二人はジュエルシードの気配を感じ取ったようだ。

ユーノは、銀時の肩から降りて森の中に走っていった。

アリサ達を巻き込まないためだ。

なのは「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言って、なのはは席を立つ。

アリサ「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」

なのは「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」

手を振りながらなのはが言う。

なのは達の様子に新八と銀時は気付いた。もしかして二人がジュエルシードの反応を捉らえたと思ったのである。

新八「じゃあ僕達と一緒に探すよ」

銀時「じゃあねえな」

新八が席を立ち、銀時も頭を掻きながらメンドくさそうに立つ。二人もなのはの後を追い掛けた。

なのは、ユーノ、新八、銀時は森の中でジュエルシードを探していた。

なのははバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持つてる。

新八「なのはちゃん。こちら辺にあるのかい？」

なのは「そのハズなんですけど……」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

新八「な……何だこの音!？」

新八達は辺りを見回す。

ユーノ「アレ！」

ユーノが何かを見つけて前足で見つけたモノを指す。

新八・銀時・ユーノ・なのは

『『！！！！』』

ユーノが指したモノを見て皆驚いた。

巨大猫「にゃ〜」

皆の目の前に大きな大きな猫がいたのだ。

どれくらいでかいかと言うと体長八メートルはありそうなほどだ。

新八「デカッ！！」

新八はメガネに手をかけた。

なのは「えっと……これは……」

ユーノ「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

新八「いやデカ過ぎでしょ！！ どんだけいい加減な願いの叶え方してんですか！？」

大きな猫を見上げながら新八がツツコんだ。

銀時（ああ、ジュエルシードってそんな感じか）

銀時は巨大化した猫を見ながらジュエルシードの力を認識した。  
例えて言うならいい加減なドラゴボールだと思った。

ユーノ「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』と言う辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

なのは「そ……そうだね。流石にあのままだ、すずかちゃん困っちゃうだろうし……」

そう言うてなのはレイジングハートを構えた。

新八「つとと言うか、ゴジラかなんかとして捕獲されちゃでしょ!!」

確かに新八の言う通りこのまま人の目にこの巨大猫が止まれば間違はなく自衛隊とか出動しているだろう。

そして新八の横にいる銀時は頭を掻きながらやる事を決める。

銀時「よし……帰るか」

新八「待たんかい!!」

アリサ達の居た所に帰ろうとする銀時の肩を新八が掴んで止める。  
そしてすぐさま文句言う。

新八「アンタ何帰ろうとしてんですか！？ 封印するんでしょうが封印！！」

銀時「あん？ あんなでかい奴はウルト○マンに任せとけば良いんだよ」

新八「なんでウル○ラマン！？ アレは怪獣じゃねえんだよ！！  
つかアンタみたいに他人頼りな人をウルト○マンは助けません！  
！」

新八と銀時がそうやって揉めていると、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

巨大猫「にゃゝゝゝ！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

なのは「だ、誰！？」

全員が光が発射された方へ振り返った。  
そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女——フェイトが空中にたたずんでいた。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はーい。今回も質問コーナー始めまーす」

なのは「そして今回のアシスタント勤める高町なのはです」

銀八「はい、未来の魔王様がアシスタントです」

なのは「私、魔王じゃありません！」

なのはは知らないが、未来じゃなのはは白い魔王と呼ばれます。不名誉な事言われて怒るのはを気にせずに銀八は進める。

銀八「じゃあ早速質問いくぞ。ペンネーム『白黒』さんから、『ライダー』に質問です。

ライダーの勝負服はなんですか？

プレシアに質問です。

アリシアは料理上手でしたか？

なのはに質問です。

銀時にいつも甘い物を食べさしたりしているのですか？』……ええ、まず2を答えますが、プレシアはフェイトと違って料理は上手です」

なのは「えっ！？じゃあなんでフェイトちゃんの料理は、その……あんな感じなんですか……？」

驚いた後に理由を聞こうとしたが、心優しいなのはフェイトの料理を極悪料理とは言えず、曖昧な感じに聞く。

銀八「それは俺にも分かりません」

なのは「そうなんですか…」

なのはは苦笑してしまう。

銀八「それじゃああんま聞きたかないけど、1の質問の答えはどうなんだ？」

銀八はライダーに視線を向けながら聞く。

ライダー「その…ギントキと何時でも、その…性行為の時に着る下着を…／／／／」

銀八「いや、誰が勝負下着の事言えって言ったよ！！つつか良くそんな恥ずかしい事お前が言えたな！？俺はそこがビックリだ！！」

まさか勝負服ではなく、勝負下着の事を言ってしまうライダーにツッコム銀八。

どうやら勝負服と聞いて銀時の事を意識し過ぎて回答が飛躍してしまったようだ。

なのは「……………」ゴゴゴゴゴゴ

黒いオーラを出すなのはを見て銀八は顔を青くさせた後、慌てて3の質問に入る。

さすがにこのままハイライトな目で凄まじいオーラを出せれるのに

は耐えられなかった。

銀八「じゃ、じゃあ3の質問に答えてくれなのは!!」

質問されたのはは黒いオーラを消して、恥ずかしそうに答える。

なのは「え、えっと、銀さんの要望は大抵聞くんですけど、やっぱり銀さんの体調の事は考えて、食べさせない事もあります／＼／＼」

なのははそう言った後、「なんだか私銀さんの奥さんみたいなの／＼／＼」と言って頬を両手で抑えながら体をくねらせていた。

銀八「怖くはなくなっただけなんかム力つく!!」「白黒」、バケツ持って廊下立ってる!!」

なのは「なんで怒っているんですか!？」

自分の世界から帰還したなのはは何故銀八が怒っているのか分からず驚いてしまう。

銀八「じゃあ次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』そんなわけで新八、ちゃんと使い方理解しとけよ。じゃないとまたひどい目に会うから。質問『何でロリコン変態な新八が嫌いなんですか？私からすればそれが新八らしくていいのに…』『こっちの新八が彼女出来てうらやましいですか？』『そっちの新八にジャンヌがあなたに告白しようとしています（こっちの新八は承諾済み）。受け入れますか？』の3本です」『……いや、アンタ新八を心配したいの？それとも見下したいの？』

銀八は真王さんの考えが理解できなかった。

銀八「つで、1は黒龍が答えます」

黒龍「いや、新八を酷い扱いしている俺が言うのもなんですが、口リコンで変態って所は新八らしくないですよ!!」

確かに新八はアイドルオタクだし、若干スケベでダメな所はあるがそれでも口リコンで変態ではなかったと思う黒龍だった。

黒龍「あと、俺はそんな新八が嫌いじゃないんですけど、原作で廃人になった新八を見てショック受けてこんな扱いしているだけです。ちゃんと後々から扱いは良くしていくつもりです」

銀八「作者も一応新八の事については考えてるつもりだ。まあ扱いの悪さはあんまり変わらないと思うけど」

このドS作者じゃ新八の扱いは中々直らないだろうと思う銀八だった。

銀八「つで、2と3の質問だけど、どうなんだ新八？」

新八「同じ僕なのに羨ましいぞコンチクショーーーーー!!!」

同じ自分なのにこうも差がある事に涙を流して悔しがる新八。銀八もなんであっちの新八に彼女ができるのか今だに分からなかった。

そして新八は泣きまくった後、3の質問を答える。

新八「ジャンヌさんは魅力的で、僕としてはとても受けない！でも、僕にはなのはちゃんが……！ぼ、僕はもうしたら良いんだ！？僕はなんて罪深い男なんだ……！」

たぶん傍から見たらかなり笑える悩みを抱えて悶えていた。つつか、思い込みもここまで来ると若干ウザイ。

そんな新八の姿を見て銀八はかなり呆れ、なのはは苦笑していた。

銀八「はい、アホは放って置きましょう。『真王』さんは廊下に立っていなさい」

なのは「次なの。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『ネス』質問『マリオさんが変身したG4はどう思いますか？』」

リュカ「新八さんに質問『お見舞いに言った方が良いでしょうか？』」

ルイーザ「質問『新八君、今の自分の扱いを変えるのを考えてますか？』……マジで頑張って新八君！」

次回を待ってます……新八さん、結構応援されてますね」

銀八「そうだな。つで、1の答えなんですが、作者はマリオがG4に変身したシーンありました？つて首を捻っていました」

どうやら作者である黒龍はマリオがG4に変身した所を見ていないらしい。

そして新八は2、3の質問に答える。

新八「あの、お願いします。できれば助けて欲しいです。それと、

活躍して読者に対しても僕の見方を変えようと思っています!!」

切実な願いと決意を新八は言った。

銀八「それは何時になるんだろうな?じゃあ『鳴神 ソラ』さんは廊下に立ってなさい」

なのは「次なの。ペンネーム『ボツスン』さんから、  
『質問です。』

プレシアさん、フェイトちゃんと同じく料理は下手ですか?

プレシアさん、もしアリシアちゃんが生きていて、アリシアちゃんが誰かが好きって言いましたら、高町家の恭也さんと土郎さんみたいにになりますか?」……え〜っと、これは……」

なのはは質問を見てどう答えて良いのか分からず困惑する。

銀八「ええ、じゃあプレシアに聞いてみましょう」

銀八がそう言うともニター現れて、そこにはプレシアが映っていた。

プレシア《たぶん下手ではないと思うわ。アリシアも私の料理美味しそうに食べてくれたし。それと、アリシアが好きになったのなら私自身とやかく言うつもりはないわ。相手がちゃんとした人物ならだけ》

一人の母親らしい答えを言った後、モニターの映像は消える。

銀八「あのシスコンや親バカとは大違いです」

なのは「にやははは……お父さんやお兄ちゃんもほどほどにして欲しいの」

なのはは苦笑しながら暴走する父と兄を思い浮かべた。

銀八「はい。じゃあ『ボツスン』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『なっぺ』さんから、  
『質問

銀さんへ

木刀がなのはの【ピーー】な部分と繋がった！ 握るとなのはが【アハアン】なことになっちゃうぞ！

さあ、この状況で地球破壊爆弾が降ってきた！ どうする？

A：せめてもの思い出作りに、なのはとやる

B：なのはがあまりの快感にショック死するのも構わず、地球破壊爆弾を木刀で打ち返す

C：何もしない

D：思い出作りにソラを無理矢理やる

E：新八に任せる

なっぺ「さあ、どれを選ぶ!？」『…いや、なんつうセクハラ質問

「！！？？」

なのは「……………にやアアア！！（ボフィン！）／／／／」

なのははなっぺさんの質問を聞いて顔をトマトのように真っ赤にさせた煙を出した後、いきなり爆発して倒れる。しかも目はグルグルと言つ渦巻き模様になっている。

銀八「なのはが爆発したアアアアア！！？？何コレ！？そんなに恥ずかしかったのか！？」

銀八は恥ずかしさのあまり羞恥心が限界突破したなのはに驚く。だが、なのはを起こしたらまたメンドーな事になるのでこのまま質問を続ける事にした。

銀八「じゃあ銀時、答えろ」

銀時「ええ、Eで。それとなっぺは警察に捕まれ！」

現れた銀時は思いつきり新八任せにして最後に暴言吐いて帰って行った。

銀八「はい。さすがになのはも地球も守らなければならないので、最後の希望をあのダメガネに任せるようです。それとなっぺさん、あなたの変態行為が露見したらしく、警察が向かっているのでご注意を」

なのは「う、うゝん…」

そこでなのはが目を覚ます。

銀八「大丈夫か？」

「え、えっと……何があったんですけ？」

どうやら頭爆発したせいで気絶前後の記憶を失っているらしい。

銀八「まあ、あんま気にするな。大した事じゃないから」

また爆発されたかなわないので、忘れたままにさせる銀八。そして次の質問に移る。

銀八「じゃあ次。ペンネーム『月光閃火』さんから、

『1・セフィロスに質問…他作品の桂こと『カツウロス』を弟とするなら、やっぱり蕎麦もよく食べるのか？』

…というか…セフィロス自身、蕎麦でアレルギーになるのかな？次は俺からだ。

[illegible]

銀八はセフィロスに対しての質問が結構多い事に半眼になる。

銀八「じゃあセフィロスに答えてもらうか」

モニターが現れ、そこにはセフィロスが映っていた。

セフィロス《フツ……中々上手いな》

そこには蕎麦をすすっているセフィロスが映っていた。

銀八「ちゃっかり蕎麦食べてるんですけどオオオオオオオオオオ……！！  
???」

まさかの光景に銀八は驚愕した。

なのは「でも、なんか似合ってますね」

なのはは苦笑する。

そしてモニターは消える。

銀八「なんか……かなり珍しい光景を見たな………そんじゃ次の新八だが、随分良い物貰ったな」

銀八は新八を半眼で見ながら言う。

新八「はい！これでどんな虐めが来ても安心です！！」

新八は嬉しそうに月光閃火さんから貰ったチート眼鏡を持っていた。

銀八「そうかい。じゃあ『月光閃火』さんは廊下に立ってなさい」

なのは「次なの。ペンネーム『ケン』さんから、

黒龍さんへ

新八のロリコンオタクや酷い扱いを治す方法としてまずは形からという事で反省の印として・・・彼の頭をバリカンでツルツル坊主にしちゃってください。

彼も反省し立派な侍として成長できると俺は信じていますから……

ソラとソラバースへ

僕の作品であるHERO'S EPIISODEに出てくる管理局を腐敗させ歪ませたセントクルセイダーズを統夜達が力を合わせて壊滅させました。これをどう思いますか？

第三の質問です。お妙と近藤へ・・・お妙は傲慢雌ゴリラなんだから近藤と結婚し・・・故郷であるゴリラの星に帰ったらどうですか？（黒笑）と統夜と華琳、はやての三人が言っていました。どうしますか？（黒笑）『……えつと……なんだか最後の質問から凄い黒いオラが……』

なのは3の質問を見て汗を流していた。

そして1の質問で黒龍はバリカンを持って現れる。

黒龍「じゃあ早速坊主に……」

新八「するなアアアアアアアアアア！！！」

ドカ!!!

黒龍「うぎゃあああああああああ……！！！」

キラッ！

月光閃火さんから貰った眼鏡でチートになった新八は黒龍をぶつとばし、黒龍は星になった。

そしていきなりお妙が現れる。

お妙「んだとコラアアアアアアアアアア！！！！！」

ドカ！！

[illegible]

3の質問を聞いていたお妙は何故か銀八の顎に協力的なアッパーカットをお見舞いし、そのまま黒いオーラを出してケンさんの所にいる統夜と華琳とはやての三人を処刑しに行った。

そして宙を浮いていた銀八はドカツと白目を剥いて床に落下した。ちなみになのは部屋の隅に蹲ってガタガタ震えていた。

銀八「あゝ酷い目に遭った……」

銀八は顎を擦る。

なのは「にやははは……大丈夫ですか？」

なのはは苦笑する。

銀八「まあな……」

銀八はため息を吐いて、先を進める。

銀八「……じゃあ2で質問された奴等の答え」

ソラ「ま、良かったんじゃないか」

アリス「フツ……中々だな」

アリア「にゃ……頑張った」

リリス「凄いです！」

セイバー「統夜達も騎士と呼べるほどの人物達のようにですね」

ヤミ「私が言うのもなんですが、そのような外道を倒せたあなた達に敬意を表します」

フェイト「これで、管理局も正義の組織に戻るのかな？」

フェイトとソラ以外は満足そうな顔をしていた。ちなみにソラは素っ気無いだけである。

なのは「管理局って、そんなに悪い組織なんですか？」

なのははユーノから聞いた限りでは管理局は正義の組織だと思っているので、あまり実感が沸かなかった。

銀八「いずれ分かる。それと、俺も偽善者集団である管理局を滅ぼした統夜達に賞賛の言葉を贈りましょう。つつわけで、『ケン』さんはこれからも小説頑張ってください」

なのは「次なの。ペンネーム『白騎士君』さんから、『白騎士君』……では質問します。」

1・フェイトとなのはに質問。どれか一つこの中で乗りたい機体はどれですか？

1・真ゲッターロボ

2・マジンカイザー

3・ジェネシックガオガイガー

2・銀さんに質問。そっちにエイリアンとプレデターが向かっています。頑張つて倒して下さい。

『以上です』……銀さんを虐めないで！……！』

質問を読んだのははいきなりバリアジャケット姿になり、そのままエイリアンとプレデターにレイジングハートを構える。そしてレイジングハートの先端に凄まじい魔力が溜まっていく。

なのは「デイベインバスターー！！！」

なのはは桃色の砲撃を二人の最強宇宙生物に放った。

プレデター&エイリアン

『『うぎゃあああああああああああ！！！！！！』』

二体の叫び声が響き、そして煙が晴れると真っ黒焦げの宇宙人がいた。

銀八「しゅ、瞬殺したアアアアアアア！！？？」

あのエイリアンとプレデターをあっさり倒したなのはに驚愕する銀八。

そしてなのはは私服に戻っていた。

なのは「じゃあフェイトちゃん。答えて欲しいの」

驚く銀八をよそになのはは笑顔でコーナーを進める。

フェイト「うーん……3かな」

フェイトは唇に指を当てて考えた後に答える。

なのは「じゃあ、『白騎士君』さんは銀さんを虐める質問はあんまりしないでください」「ゴゴゴゴゴゴ」

なのはは笑顔で凄まじい黒いオーラを出す。  
それを見た銀八は顔を真っ青にして引き攣った笑みを作っていた。

銀八「じゃ、じゃあ次いきます。ペンネーム『黄色いのかなに』さんから、

『新八に質問。第二十二訓の贈り物で『等身大の銀時の抱き枕』の中にはいつてなのはに抱きつかれた時はどんな感じでしたか？

松平のとつつぁんに質問。第二十二訓の質問コーナーで土方が高町家の娘の部屋に侵入してなのはパンツを盗んでいました。証拠写真もあります。真撰組の癌である土方を抹殺した方がいいですよ。』

……」

銀八は恐る恐るなのはを見る。

なのは「新八の酷いのオオオオオオ！！！！」

新八「うぎゃああああああああああああ！！！！」

新八は眼鏡を掛ける前になのはのデイベインバスターを受けてしまい真っ黒焦げになった。

銀八は顔を青くしてその光景を見ていた。

銀八「……それで、マヨラーの処分はと言うと……」

銀八は土方を見る。

松平「土方。テメーは真撰組の恥だ。俺直々に引導を渡してやるからここで死ね」

松平は拳銃の銃口を土方の眉間に向けながら言う。

土方「待ってくれとつつぁん！！アレは悪意ある読者のいん……」

バキュン！

土方「うおわアアアア！！！」

土方が弁解する前に松平の拳銃が火を噴き、土方は咄嗟に避ける。そして土方は慌てて逃げて、松平は銃を連射しながら追い掛けた。

銀八「まああんな感じですよ。じゃあ『黄色いのか』さんは廊下に立ってなさい」

なのは「まったく、新八さんは」

なのはは不機嫌になりながら戻って来た。

銀八「ロリコンの成敗ご苦労様。じゃあ次、ペンネーム『勇者王真オーズ』さんから、

『一つ質問なんです、沖田さんは副長になったら何をしたいんですか？

それからもう一つ、これは質問というより警告なんです、僕は新八さんが心の底から嫌いなんです。ついでに土方も。なので、これから二人に制裁を加えたいと思います。

1・ゴルディオンクラッシャー（太陽クラスの敵を軽々と光にする）を食らう。

2・ゲッターエンペラー（太陽系よりデカイ）のゲッタービームを食らう。

3・超天元突破グレンラガン（宇宙よりもデカイ）のギガドリルブレイクを食らう。

これを今から新八におこないます。ついでに土方も。

あ、あとこれはオールカンセラーの効果であらゆるものの妨害を受け付けませんので抵抗しても無駄です。

長々とすいませんでした。なにせ、二人が恐怖に染まる顔を見るのが楽しみなんですから（黒笑）」……ええ、まず勇者王 真オーズさんの攻撃を受けた二人はこうなっています」

銀八が新八と土方に目を向ける。

新八「なんの！月光閃火さんから貰った眼鏡！！」

ドカアアアアアアアアアアア  
ン!!!!!!!!

新八「うぎゃ ああああああああああああああ！  
！???」

土方「なんで俺もだアアアアアアアアアア！！？？」

新八は月光閃火さんから貰った眼鏡で防ごうとしたが、オールキヤンセラーにより防ぐ事は叶わず真つ黒こげになった。あ、ついでに土方も。

銀八は気にせず、1で質問された沖田に顔を向ける。

銀八「それで、沖田はマヨラー抹殺したらどうすんだ？」

沖田「俺は副長になれば満足でさア」

沖田は笑顔で言う。どうやら沖田にとっては副長の座を取る事事態が目的のようだ。

銀八「はい、そう言う事なので、『勇者王 真オーズ』さんは初めての質問ありがとうございます」

なのは「次なの。ペンネーム『黒神』さんから、

『黒龍さんへ

オリキャラを贈りましたがその感想をお願いします。

沖田へ

マヨラー以外で最も痛めつけがある人物は誰だと思いますか？  
同士として聞かせてもらいたいです（黒笑）『……じゃあ黒龍さん  
答えてなの」

黒龍「アイデアくれてめちゃくちゃ嬉しいです！！それに自分には  
ない発想で、しかも俺の考えた想像よりも良かったので採用です！  
本当にありがとうございます！！また何かアイデアがありましたら  
言って下さい！！」

銀八「どうやら黒龍の奴は黒神さんからアイデアが来た事がかなり  
嬉しいようです」

なのは「にやははは。黒龍さんも黒神さんとはもつと関わりたいつ  
て思っていましたからね」

銀八「つで、沖田の答え」

沖田「そうだなア……俺としちゃア土方この野郎が一番だと思うが、他の奴で言うならあの金髪チビガキでさア」

沖田が言っているのはリリスの事である。リリスはその容姿からなのか、子供みたいで沖田にとっては土方ほどではないが弄り易いのだ。

銀八「リリス、可哀想に……そんなじゃあ『黒神』さんは廊下に立ってなさい」

なのは「いや、同情する時間短くありませんか!？」

銀八「こう言う淡泊なのが俺の売りなの」

銀八は良く分からない理由を言う。

なのははため息を吐いてしまう。

なのは「はあ……じゃあ次いきますね。ペンネーム『支配者』さんから、

『質問です。』

皆さん私のゾーグを如何思いますか?」……私は、とっても強いと思います」

なのはとしてもSSSランクのゾーグは純粹に強いと思った。

銀八「まあボスキャラだしな。とりあえず全員だと多いんで、こいつ等に答えてもらいます」

銀八がそう言うと、新八と神楽と銀時とソラとアリスとアリアが立ち上がる。

新八「あれ間違いなく化け物ですよ!!」

神楽「私も戦ってみたいネ!!」

銀時「傲慢なボスキャラ」

ソラ「傲慢だな」

アリス「興味ないな」

アリア「にゃゝ…興味ない」

銀八「はい。支配者さん。前回やった無縁とゾーグの戦いの続きはこのコーナーの後にあるようなので、見てください」

なのは「今回はこれで終わりですね」

銀八「今回も結構な量があったな」

なのは「次回のアシスタントは誰ですか？」

銀八「次回はフェイトがアシスタントです。それじゃあ次回もよろしく願いします」

無縁「さアて、帰るか」

毒でゾーグを倒したと思った無縁は頭を掻きながら帰ろうとする。  
すると…

ゾーグ「これでワシを倒したと思ったかアアアアアアア！…！」

ゾーグが雄叫びを上げながら立ち上がる。

どうやら無縁の用意した毒では倒しきれなかったらしい。さすがに戦闘力1000倍は伊達じゃないようだ。

無縁（さすがにやべエーな、こりゃア…）

頭の中ではそう思っているが、顔は無表情で焦り一つ見えなかった。

ゾーグ「死ねエエエエエエエ！…！」

ゾーグは叫びながら『冥府魔砲』ハデス・ブレイカーをぶつ放した。

とんでもない大きさの極光が無縁を包み込み、無縁の居た地点は大爆発が起きた。

ゾーグ「わーはッはッはッはッ！…！ワシに逆らうからそうなるのだ！…！」

無縁を倒して満足したゾーグはセフィロスを倒すのも忘れて上機嫌で帰って行った。

そして『冥府魔砲』ハデス・ブレイカーの当たった場所の爆煙が晴れると、そこはとん

でもないクレーターができて、血まみれの無縁が倒れていたがいた。誰が見ても死んでいるとしか言いようがない状態だったが、無縁はむくりと起き上がった。

無縁「……………」

ゾーグが行ったのを確かめた後、片足を引きずりながら覚束無い足取りで帰って行った。



なのは「ふえ〜ん！！なんでバットエンドは新八さんと結婚なの  
〜！！」（涙）」

『次回予告』

ついにフェイトと銀時達が接触。

だが、そこにナナシが現れ新八と激突する。

一体どうなる！？

なのは「次回、『スピードが速い奴はかなり厄介』にテイクオフで  
す」

第二十五訓：スピードが速い奴はかなり厄介（前書き）

黒龍「今回は新八とナナシの対決です」

銀時「つつかさあ、新八勝てんのか？」

黒龍「それは見てのお楽しみに」

銀時「そうかい」

フェイト「『リリカル銀魂ライダー』が始まります」

## 第二十五訓：スピードが速い奴はかなり厄介

フェイト（私と同じ魔導師…）

白いバリアジャケットを着た女の子を見ながらフェイトは思った。

フェイト（でも……母さんのためにも、ジュエルシードは譲れない）

フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

ユーノ「あれは……まさか僕と同じ世界から来た魔導師！？」

フェイトを見てユーノが驚く。

新八「ってことは狙いはジュエルシード！？」

新八は袋から木刀を取り出した。

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュは鎌のような姿の『サイズフォーム』になる。

フェイト「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

ユーノ「なのは！」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。

ガキン！！

フェイト「！！」

だがバルディッシュの刃がなのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は一本の木刀によって止められた。攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。

なのは「銀さん！！」

なのははフェイトの攻撃を止めた人物の名前を叫ぶ。

銀時はそのまま木刀を横薙ぎ振る。

フェイト「くっ！」

フェイトは銀時の力に押され後退し、体勢を整えて少し地面に近い辺りで体を浮かせる。

フェイトを後退させた後、銀時は肩に木刀を掛けながらフェイトに言葉を掛ける。

銀時「おいおい、ガキが随分物騒なモン振り回してんじゃねえか」

軽口叩く銀時をフェイトは睨みながら質問する。

フェイト「……何者ですか？」

銀時「俺か？ 俺は坂田銀時です。趣味は当分摂取。キャプテン志望してまゝす」

フェイト「えッ!？」

ふざけ半分で自己紹介する銀時の言葉を聞いてフェイトは驚いた顔をする。

フェイト（さかた…ぎんとき……もしかしてこの人……）

フェイトは銀時の名前を聞いて動揺していた。

何故なら自分の目の前で木刀を構えている男の名前はソラから探していると教えられた家族のような存在の一人の名前と一緒だからだ。そしてフェイトは銀時をじっくりと見てソラに言われた特徴を確かめていく。

フェイト（銀髪に木刀を持って死んだ魚のような目をした男……間違いない！ この人はソラが探している人だ！）

目の前の男がソラに教えられた特徴と全部一致しているのでフェイトは確信した。

目の前の男はソラが探している人物の一人だと。以前ソラに“銀時達を見つけたら俺の事を教えといってくれ”と言われたので、フェイトは銀時に声を掛けようとする。

フェイト「あの……！」

だがその時、

新八「うおおおおお！！！」

と新八が雄叫びを上げながらフェイトに木刀で切りかかった。

フェイト「っ！」

新八がいきなり斬りかかってきたためにフェイトは喋るのを中断して咄嗟にシールドを展開して新八の攻撃を防ぐ。

ガキン！

シールドと木刀がぶつかる鈍い音がする。

新八はフェイトの展開したシールドに木刀を押し付けながら声を上げる。

新八「なのはちゃんは僕が守る！！！」

若干キメ顔を作って言う新八。

ちなみに新八の言葉を聞いたなのはに特に変化はない。まあ自分を守ると言ってくれた新八に感謝しているくらいだろう。

フェイト「くっ！」

さすがに新八が攻撃してきて喋る暇がないフェイトはスフィアを二

つ展開し新八に放つ。

新八「あぶっ！！」

新八は慌ててスフィアを避け、フェイトは距離を取るために木の枝に飛び乗る。

その時、

???「フェイトー！！」

とアルフが声を上げながらやって来た。

フェイト「アルフ！」

アルフがやって来た事に気づくフェイト。

他のジュエルシードの探索をしていたアルフだったが、フェイトの様子が気になりやって来たのだ。

今のアルフは人間の姿ではなくオレンジ色の犬「狼だ！！！」……狼の姿になっている。

アルフは心配そうにフェイトに話し掛ける。

アルフ「大丈夫かい！？」

フェイト「うん」

フェイトはそう言った後地上にいる銀時と新八を見る。フェイトに釣られてアルフも見る。

アルフ「他の魔導師かい？」

フェイト「うん。それに……」

フェイトは少し躊躇ってから言った。

フェイト「ソラ達の家族も一緒にいる」

アルフ「ソラ達の！？ 本当かい！？」

アルフはまさかこんな場所でソラから聞いた家族のような存在である人物に合うとは思わず驚いてしまう。

フェイト「うん」

フェイトは頷く。

そしてフェイトはまた銀時を見る。アルフも釣られるように銀時を見た。

アルフ（あの銀髪がソラ達の家族……）

アルフは銀時の事を確認した後少し考える仕草を見せて、ある事を決める。

アルフ「よし！ あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジュエルシードを回収して！」

フェイト「でもアルフ……」

アルフ「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？ 心配いらな  
って」

アルフはフェイトを安心させるように言った。

アルフ「それにソラ達の家族は傷つけないように足止めするからさ」

フェイト「……うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。

ユーノ「マズイ！ ジュエルシードを封印するつもりだ！ 止めないと――！」

ユーノが叫んだ後、フェイトを追いかけようとする。

アルフ「そうはさせないよ――！」

だがその時空からアルフがユーノに迫る。

なのは「ユーノ君！」

なのはがユーノに向かって走る。

ユーノ「大丈夫だよ、なのは！」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。それを見て安心したなのはは足を止めて安堵する。

アルフ「ちっ！」

舌打ちした後アルフは一旦、ユーノから離れる。

ユーノ「なのは！ ジュエルシードを！」

なのは「う…うん！」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

アルフ「させないって言っただろ！」

アルフは素早く動いてなのはの背後に回り襲い掛かる。

ユーノ「なのは…！」

ユーノが叫んで、後ろを振り向いてアルフの攻撃に気づいたなのはは咄嗟に目を瞑ってしまふ。

その時。

ガキン！

アルフ「お前…！」

アルフは声を上げ、目の前で自分の爪での攻撃を木刀の刀身で防いでいる銀時を睨みつける。

なのは「銀さん…！」

銀時に助けられたなのはは嬉しそうな顔で銀時の名前を叫ぶ。

銀時「わりいが、そう簡単に傷つけさせねえぜ」

ニヤリと微笑を浮かべてアルフの攻撃を防いでいる銀時。

新八「うおおおおお！！！」

そして銀時に攻撃が防がれているアルフを横から新八が木刀で叩こうとする。

アルフ（マズイ！！）

銀時に注意が向いていて新八が近づいている事に気づいていなかったアルフは焦る。

このままで新八の攻撃をマトモに受けてしまう。  
だが、

ドカッ！

新八「ゴハッ！」

突然新八の前に黒服の男が現れ新八の腹に回し蹴りをお見舞いした。  
新八は蹴りの威力があまりに強く森の奥に吹っ飛んでしまう。

銀時「新八！？」

アルフ（えっ！？ あ的地味な眼鏡がソラの言っていた家族の一人の新八かい！？）

銀時の言葉を聞いてアルフは驚き動揺してしまう。

まさか二人目もいたとは思わなかったアルフはつい驚いてしまったのだ。

だがアルフはすぐに我に返る。

アルフ（でも今は……！）

アルフは右前足に力を入れる。

そして新八が吹っ飛ばされた事で銀時の注意が新八の方に向いた隙にアルフは爪を振って銀時を後退させる。

そして後ろに飛んで銀時から距離を取ったアルフは自分の助けた人物の名前を呼ぶ。

アルフ「ナナシ！」

そう、フェイトとアルフの我が家でもある時の庭園で使用人のような存在のナナシだったのだ。

ちなみに今のナナシの格好は真っ黒のまるで警察の特殊部隊が着るような戦闘服のような物を着ている。

簡単に言うとバイオハザード5のウェスカーの服装と同じだ。

ナナシ「お怪我はありませんか？ アルフ様」

ナナシは無表情のままアルフの容態を聞く。

そんなナナシにアルフは少し驚きを見せながら質問する。

アルフ「アンタ別の場所でジュエルシードを探してたんじゃない……！」

ナナシ「アルフ様が急いでどこかに飛んでいくのを見えたので付いて来ました」

ナナシは静かに自分がここに来た理由を教えた。

アルフ（飛んでいるアタシに付いて行くななんて……やっぱ凄いよナ

ナシは)

実の所ナナシは魔導師ではないので空を飛べない。  
だが、ナナシはフェイトやアルフからしても信じられないような、  
まさしく人間離れた身体能力の持ち主なので空を飛んでいる自分  
に付いて来てもおかしくないと考えた。

ナナシは横目で木刀を構えながら自分達を睨みつけている銀時を見  
ながらアルフに声を掛ける。

ナナシ「アルフ様。私はさっきの眼鏡の方の相手をします。アルフ  
様には彼の相手をお願いしたいのですが」

アルフ「ああ良いよ。アンタも気を付けな」

ナナシを提案をすぐ受け入れたアルフは頷き、ナナシは少し頭下げ  
た後に新八の方に向かった。

銀時（ちっ、まだ仲間がいやがったか）

銀時はアルフの他にも敵の魔導師の仲間が居た事に舌打ちする。  
そして銀時は自分の後ろでアルフに向けて杖を構えているなのはに  
横目を向けながら声を掛ける。

銀時「なのは。お前はあのでか猫の所に行け。このままだと連中に  
ジュエルシード取られちまうからな」

なのは「でも……！」

アルフの前に銀時をこのまま置いていけないと思ったなのはは銀時

の言葉に異議を唱えようとする。銀時の事が心配だったからだ。

銀時「大丈夫だ。問題ねえよ。お前はお前の仕事をきっちりこなせ」

いつもの軽い口調の銀時の言葉を聞いてなのは俯いて考える素振りをした後、顔を上げて決心した表情で言う。

なのは「分かりました！ 必ずジュエルシードを取ってきます！！」

なのはの言葉を聞いて銀時は微笑を浮かべながら「まあしっかりやんな」と言った。

その後にユーノが銀時に提案する。

ユーノ「あの、だったら僕は新八さんの援護に行きます！」

ユーノの提案を聞いて銀時は少し考える素振りを見せた後、ユーノに顔を向けて言う。

銀時「……わりいな」

ユーノは銀時の言葉を聞いて頷く。

いつもの銀時なら“新八の野郎なら大丈夫だ。アイツも一端の侍だ。それよりもお前はなのはを手伝え”と言うだろう。

だが、新八の所に向かったあのナナシと言う男が気掛かりだったからユーノの提案を素直に受け取ったのだ。

銀時「行け」

顎で促す銀時になのはとユーノは頷き巨大猫の所まで走って行く。

アルフは自分の横を通って行くのはとユーノに何もせずに素通りさせた。

銀時「素通りとは、随分気前が良いじゃねえか」

アルフ「邪魔しようとしてもアンタがさせないだろ？ それに……」

そこまで言うとなルフはニヤリと笑みを作って言う。

アルフ「あの子じゃフェイトの相手にはならないよ」

銀時（確かに、さっきの金髪のカギはなのはより強いだろうな）

アルフの言葉を聞いて銀時は少しだけ目を細める。

銀時から見てもフェイトはなのはよりも戦闘経験も魔法の経験も多く積んでいるのが分かる。

たぶん今のなのはじゃ歯が立たないの是一目瞭然だ。

銀時（ま、命とか取る様な感じはしなかったから大丈夫だろ）

だが、雰囲気からしてもあのフェイトとか言う金髪の少女が自分の目的のために他人の命を取る様な冷酷な少女でない事も分かった。なのはの命が危険に晒される事はないだろう。

そして、たぶん今回はジュエルシードを取られてしまう可能性が高い。でも、あっちもジュエルシードを集めているならまたぶつかる可能性はある。その時にでも取り返せば良いだろうと銀時は考えた。

銀時（問題はあの金髪のカギよりも……）

銀時は新八が吹っ飛ばされた方向を見た。

なのはよりも寧ろ危険なのは新八かもしれないのだ。  
直感的に感じた事だが、あのナナシとか言う男はどこか人間のような感じがしなかった。

銀時はあのフェイトとか言う少女りもサングラスを掛けて話している間もずっと無表情のナナシと言う奴の方が危険だと思ったのだ。  
だからこそユーノの提案を素直に受けたのだ。

銀時「わりいがテメーにはさっさと退いてもらうぜ」

銀時は鋭い目で木刀を居合いのように構える。  
最初から本気でアルフを叩き潰し、そのまま新八の所に向かうようだ。

アルフ「そう簡単にはやられないよ！」

アルフも体を低くして威嚇するようなポーズを取る。  
一人と一匹の戦いが始まるうとしていた。

一方ナナシに蹴り飛ばされた新八。  
座りながら新八はお腹を押さえていた。

新八「いたたたたた……」

新八はさつき蹴られた腹を擦りながら苦痛の表情を見せていた。

新八「一体誰なんだ？ 僕を蹴ったあの人は？」

新八は服についた土や葉っぱを叩き落としながらさつき自分を蹴り飛ばしたナナシについて考えた。

新八「それにしてもこんなとこまで飛ばされるなんて……」

新八はさつき自分がいた場所の方を見ながら内心驚いていた。

なにせさつきまで自分がいる地点からここまで約二十メートルくらいの距離はあるだろう。

新八「一体なんなんだ？ あのサングラスの人は……」

一人、しかも新八のような青年をここまで蹴り飛ばすだけの脚力。どう考えたって一般人の脚力を遥かに凌いでいる。

正直自分を蹴り飛ばしたあのグラサンの外国人みたいな男が神楽と同じ夜兎なんじゃないかと思ったほどだ。

新八「とにかく、今はなのはちゃんの所に急がないと……」

痛みが緩んできた新八は立ち上がりなのはの所に向かおうとする。

新八「さつきはかつこ悪い所を見られちゃったけど、今度は良い所を見せなければ……」

前になのはがジュエルシードの怪物からまた銀時に助けられた事はユーノやなのはの話で知っている。

その事を話している時のなのははとても嬉しそうだった。その時つ

い銀時に嫉妬してしまったのは仕方ないだろう。

なら今度は自分がなのはを助けてカッコいい所を見せようと考えていたのだ。

新八「それでもし、なのはちゃんを僕が助けたらなのはちゃん……僕を好きになってくれるかもな／＼／＼」

つい都合の良い事を考えてしまった新八は“えへへへ”と緩みきった笑みを浮かべていた。

なんて言うか、心なしが鼻の下も伸びている感じになっている。その時、

???「こんな所にいましたか」

新八「っ!？」

突然後ろから誰かの声が聞こえてきた事でハッ!とした新八はすぐに真剣な表情に戻って落ちていた木刀を取り、声がした方に構えた。

新八「お前は……!」

新八は声の主を見て驚く。

なにせその人物はさつき自分の蹴り飛ばした黒い戦闘服のような格好をしたナナシだったからだ。

ナナシだと分かった新八は怒りの表情を浮かべる。

新八「さつきはよくも……!!」

睨みつける新八に対し、ナナシは考える仕草をした後に言う。

ナナシ「もしかしてあなた……ロリコンですか？」

新八「なっ!？」

会ったばかり、しかも敵にロリコン呼ばわりされた事によりかなり動揺する新八。

そして更に怒りの表情になり怒鳴る。

新八「誰がロリコンだ!! 勝手に決めるな!!」

ナナシ「ですが、あなたさっき“なのはちゃんが僕を好きになってくるれるかもな”って言うてましたよね? 確かなのはとはあの白い魔導師の少女ですよ? つで、たぶんあなたは歳からして15、6と言ったところでしょう。それに比べてあの白い魔導師は十歳にも満たない少女。そんな彼女に好きになって欲しいとなると、ロリコンと思われるって仕方ないと思いますが？」

ナナシの懇切丁寧な説明を聞いて新八は顔を真っ赤にさせて更に動揺する。

新八「さ、さっきの聞いてたんですかノノ!!??」

無言で頷くナナシ。

それを見た新八は頭抱える。

新八「なんでこんな人に僕の恋路がバレなければいけないんだアアアア!!!!」

ナナシ（ロリコンの否定はなしですか。どうやら、『彼女が好き』『ロリコン』だとは考えていないようですね）

どうにも目の前の眼鏡の青年は小学生を好きになった事に対しなんら問題はないと思い込んでいるようだとなナシは思った。  
これはさすがに重症じゃないかと思ったほどである。

だが、別にこの眼鏡の青年の思い込みを直させる義理もないし目的でもないで、これ以上ナナシは何も言うつもりはなかった。  
さっきのだって、ちょっと気になって聞いただけの事だし。

頭抱えていた新八は動揺しまくりながら木刀を構える。

新八「と、とにかく！！　僕はなのはちゃんを助けに行く！！」

木刀を構える新八に対し、ナナシはまるで動きを確かめるように右手の指を動かした後、拳を作りながら言う。

ナナシ「すみませんが、フェイトお嬢様の邪魔をさせる訳にはいきません」

新八「こっちだってなのはちゃんの邪魔はさせない！！」

新八はそう言うのだッシュしてナナシを木刀で叩こうとするが、

スカ！

新八「あれっ！？」

新八は何もない空を切り裂いてしまう。

ナナシ「どうしました」

新八「うわっ!？」

いつの間にナナシが自分の後ろにいた事に驚いて咄嗟に距離を取る新八。

そして驚いた表情をして汗を流しながらナナシを見ていた。

なにせ攻撃する時、まるでナナシが瞬間移動したかのように消えたのだ。

新八（な、なんなんだ一体!？ あの人超能力者!？）

新八はナナシの警戒を更に深めた後、木刀を構えながら様子を伺う。汗を掻く新八に対し、ナナシは手の平を握っては広げ握っては広げを繰り返している。

そして少しの沈黙が続いた後新八は目を鋭くし…

新八「うおおおおお!?!?!」

意を決してナナシを木刀で斬ろうと駆け出す。

ナナシは構えも何も取らず突っ立っている。そんなナナシに近づいた新八は連撃を浴びせる。

新八「はっ!! やっ!! おりゃっ!!」

新八が木刀を振り上げて縦に斬ろうとすればナナシは最小限の動きで体を逸らして避け、そのまま新八が横薙ぎに木刀を振って斬ろうとすれば体をえびぞりに曲げて避け、斜め下から斬ろうとすれば少し後ろに下がってギリギリの所で避ける。

新八「とりゃー!!」

全ての攻撃を完璧に避けられた新八は渾身の力を籠めてナナシの顔に突きを喰らわせようとする。

ガシ！

新八「なっ！？」

首を少し横に傾けて新八の突きを避けたナナシはそのまま木刀を右手で掴み取り、新八はその光景に驚きの表情をする。

そして有無を言わず木刀を離すと同時にナナシは新八の腹を蹴る。

新八「ゴハッ！！！」

蹴りのあまりの威力に新八の体は宙を浮き、そのまま木にぶつかる。だが新八も侍の端くれ。軟な鍛え方はしていない。腹や背中に痛みは走るが動けないほどの我慢できない痛みではない。すぐに立ち上がり息を乱しながらも木刀を構える。

ナナシ（意外に頑丈ですね）

まだ戦えるであろう新八を見てナナシは内心少し関心していた。さっきの蹴りで気絶、もしくは動けないだろうと思っていた。

だが、剣の腕には覚えがある上に鍛えているようだ。

変わったロリコン少年だと思ったが、それになりの実力は持ち合わせているらしい。

ナナシ（まあ常人の範囲ですが）

ナナシははっきり言って本気はまだまだ見せていない。

それにナナシにしてみれば新八は、言うてはアレだが弱かった。正

直普通に戦っても勝てるだろう。

ならなんですぐに新八を倒してフェイトの所に行かないかと言うと、ナナシの考えではフェイトの救援に行く必要もないし、それにアルフもそう簡単にはやられないだろう。

急ぐ必要もないし、目の前の青年を殺すつもりなのでこうして手加減して新八の相手をしている。フェイトにも“あまり人は傷つけないで”と念を押されている。

巨大猫がいた地点を見ると、そこに金色の光が輝いているのが見えた。

ナナシ（そろそろフェイトお嬢様の所に向かった方が良いでしょう）

ナナシは頃合を見てそろそろフェイトがジュエルシードを回収しているだろうと予想し、新八を沈める事を決める。

ナナシ「そろそろ終わりにしましょう」

新八（来る！）

新八は自分に向かって歩き出したのを見て木刀を握る力を強くする。新八としてもさっきの戦いでナナシの力は思い知ったので、一瞬も目を離さないようにしている。

新八「なっ！！??」

ナナシを見ていた新八は驚愕の表情をする。

なんとナナシがまるで瞬間移動したかのように一瞬で別の地点に何度移動しているのだ。

新八は思い出す。それは最初の自分の攻撃を避けたのと同じ光景だった。

本当に目の前の男は超能力者だと新八は思ったがそうではなかった。

新八（は、速い！！）

そう瞬間移動ではなくアレは人間では出せないような速さによって成し得た技だったのだ。

消えているように見えるのは目で追えないくらいのスピードで別の地点に動いているからなのだ。

そしてナナシは一瞬にして新八の前に現れ、そのまま新八にパンチを喰らわせようとする。

新八「うわー！！！！」

新八は咄嗟に転がって避ける。ナナシのパンチは新八の後ろにあった木に直撃する。

そしてすぐさま立ち上がって自分の後ろにあった木をみると、ナナシの拳が木を砕いてめり込んでいる光景があった。

新八（あ、危なかった！！）

あんなパンチをマトモに受けたら鼻の骨が折れていてもおかしくな  
いと思った。

新八（この人ホントに人間なんですか！！？？）

木にめり込んだ拳を抜きながら自分の方を向くナナシを見て、目の  
前の男は本当に夜兎か何かじゃないかと疑いたくなってきた新八。

とにかく地べたに座っているワケにもいかないので新八はすぐに立ち上がる。

だがすかさずナナシが瞬間移動のよう高速移動で新八に近づいく。慌てて新八は木刀で斬ろうとするが、ナナシはまた高速移動して新八に後ろに移動し背中に蹴りを喰らわせる。

新八「ぐわっ!!」

新八は前に倒れようとするが、ナナシが前に移動していてそのまま新八の腹に膝蹴りをお見舞いする。

新八「ぐおっ!!」

あまりの衝撃に新八は口から胃液を少し出してしまう。

そしてそのまま新八は力なく倒れ、激痛に顔を歪めながら腹を押さえて蹲っていた。

ナナシ「……………」

ナナシは蹲っている新八を少しの間見下ろしていた後、そのままフエイトの所に向かった。

その時、

???「チエーンバインド!!」

ナナシ「!」

何本もの緑色の鎖のようなバインドがナナシを捕まえようとした。だが、ナナシは高速で体を動かして全てのバインドを避ける。そして声がした方を見ると、魔法陣を展開しているユーノがいた。

ナナシ「白い魔導師の使い魔ですか」

ユーノ「僕は使い魔じゃない!!」

ユーノはナナシの言葉を否定する。ナナシはユーノの言葉を無視して高速移動して消えた。

ユーノ「っ!? 一体どこに!?!」

ユーノは周りを見回してナナシを探すが、もうナナシの姿はどこにもなかった。

ナナシの高速移動を見て啞然としていユーノだが、すぐに蹲っている新八に気づく。

ユーノ「新八さん!!」

ユーノは新八に近づき、すぐに回復魔法を新八に掛けた。その間にユーノはさっきのナナシの事を思い浮かべた。

ユーノ（あの男は一体……）

魔力はまったく感じられなかった。たぶん魔導師の類ではないだろう。

なのにあの異常なスピード。

ユーノ（一体なんなんだ……?）

ユーノは新八に回復魔法を掛けている間、ナナシの事を考えていた。

◀ おまけ ▶

銀八「教えて」

生徒全員

銀八先生！

銀八「はい。今回も質問コーナー始めます」

フェイト「そしてソラの『妻』であり、アシスタントのフェイト・T・天道です！／／／／」

頬を少し上気させて言うフエイト。

銀八「oooooooooooo!! 何登場早々嘘言つてんだよ!? キ  
ヤラ崩壊にもほどがあんだろ!」

「フェイト、良いじゃないですか！　いつか本当の事になります！」

銀八「ガキのテーマがソラと結ばれる可能性なんて一ミリもねえんだよ!!」

フェイト「何か言いましたか……？」  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

フェイトはバルディッシュを持ちながら笑顔になる。ただ、目が笑っていないかった。

銀八「あいさー！！ なんでもありません！！」

銀八は顔を真っ青にして軍隊顔負けの敬礼をする。

フェイト「じゃあ質問コーナーを始めましょう？」

銀八「そ、そそそそですね！　じゃ、じゃあ始めましょうか」

いつもの優しい感じのフェイトに戻ったが、銀八はさっきのフェイトの威圧感がまだ体から離れずに震えていた。

フェイト「えっと、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからの質問。

『ムツツリーニ』……………質問『モンスターを見た後の明久についてどう思う？』」

ルイージ「質問『作者が他に龍騎とアイマスの小説を書いてますけどこの組み合わせについてどう思いますか？』…新八君マジガンバ！！」

銀次「質問『マー君が変身した幽汽についてどう思う？』」

次回を待ってます！！」

銀八「ええ、まず1ですが、モンスターを見た後の明久と言うのを作者が見た事ないので答えられません。それと、2は作者に答えてもらいます」

黒龍「そうですね。まあ良いと思いますよ。まあ俺はアイマス全然知らないのでも言えませんが、鳴神 ソラさんの好きなように書けば良いと思います」

銀八「最後の質問だが……マリオはとりあえずマリオの変身は多彩ですね」

フェイト「ソラはクウガだけですもんね」

銀八「つつても多く変身できれば良いってもんじゃないけどな。じやあ『鳴神 ソラ』さんは廊下に立ってなさい」

フェイト「次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』では質問タイム『個人的にリリ銀パーティーでどのチームが勝つと思いますか？』『新八は主人公になりたいですか？（ただし銀時！テメエは新八役だ！）』『誰もいない森の中にひっそりとある井戸。その井戸に女性の手があり今にも落ちそうです。助けますか？助けませんか？（助けなければ7日後に死ぬ）』の3本です」  
……私はソラのいるチームに勝って欲しいなあ……」

フェイトは純粹にソラのいる『リリカルライダーチーム』に勝って欲しいと願っている。

それにソラが酷い目に遭って欲しくないとも……恋する乙女らしい純粹な願いだった。

銀八「俺は女神チームだと思うぜ」

フェイト「どうしてですか？」

フェイトは首を傾げる。

銀八「だってよ確かに非常識な奴は多いけどよ、双六ってのは運で左右されるのが多いからな。そこで言うならネプテューヌのいるチ

ームだと思ったんだよな。アイツ運強そうだし」

フェイト「なるほど…」

フェイトは銀八の意見に関心する。

確かに今真王さんの所でやってるコラボ長編でやっている大会の内容はマリオパーティーを真似た双六形式の奴だ。

ドラゴンボールみたいな真つ向勝負の武道大会ならいくらネプテューヌでもあの非常識なメンバーに勝つのはかなり難しい。

だが、運に左右されてくる双六ならネプテューヌにも充分勝機はあると銀八は考えたのである。

銀八「つで、2の答えは…」

つと言ったところで銀八は新八を横目で見る。

新八「もちろんです！僕だって一度で良いから主人公になってみたいですよ！！」

新八としても主人公になればこれからの自分の扱いが良くなると考えて懇願する。

銀八「主人公の中には不遇な扱い受けてる奴もいるのに、甘い考えするな」

フェイト「あはは……（苦笑）」

最も銀八の言葉にフェイトは苦笑する。

銀八「つで、3だけど…もちろん助けるだろ！！呪われるなんてま

っぴらゴメンだ！」

フェイト「もちろん助けます。人命救助は当然です」

呪われたくないから助ける銀八と、人の命を大切にする心優しいフェイト。

大きな違いだ。

銀八「それじゃあ『真王』さん…まずあなた呪われてください」

フェイト「いやなんで!？」

とんでもない事言う銀八にツツコムフェイト。

銀八「次、ペンネーム『なっぺ』さんから、

『なっぺ』さて、男性陣に質問。女装した感想は？ 女性陣に質問。女装した男性陣、感想は？」

ベス「女装してませんよ？」

なっぺ「既にさせた。吼太相手にコスプレさせ続けた結果、どんな相手でも気づかれずに着替えさせることが可能になったのさ！」

吼太「ぶん殴つぞお前」

なっぺ「ちなみにメイクはトウード担当。トウードにかかれば……」

ベス「かかれば？」

なっぺ「こうなる」

ベス？「は？」↑美少女の生首化

吼太「怖えよ！！？」

トウード「肉体の用意が間に合わなかったのが悔やまれます。あと  
0・0000001秒でもあれば……」

なっぺ「いや、さすがにオレ間に合わないから」

ベス？「完全に特殊メイクですよねコレ。神たる私になんて仕打ち  
ですか」

吼太「ああ、そっぴゃお前神だったっけな」

なっぺ「でははこの辺で！」……っで、女装された奴等の反応  
はこんな感じだ」

銀八はニヤ付きながらいつの間にか女装された男性陣を見る。

ソラ・土方

『『なっぺ殺す』』

近藤「まさか俺がこのような格好を……」

銀時「なんか、化粧して女の格好をしたゴリラにしか見えないんだ  
けど。つつか気持ち悪！？」

新八「って言うか、あの人は何がしたいんですか！？」

沖田「さあ？」

ユーノ「なんで僕がこんな格好を…」

ライホース「落ち込むなユーノ。気をしっかり保てば大丈夫だ」

ちなみに新八と近藤以外は元が良くてなっぺさんとトウードの技術が凄いのか、結構な美女と美少女に成り代わっていた。

フェイト・リリス・ヤミ・セイバー・チェーン

『ぶはっ！』

五人は鼻血&吐血する。

アリス「フッ…中々だな」

アリア「にゃ…」

アリスは浸り顔で鼻血を垂れ流し、アリアは真顔で鼻血を垂れ流していた。

ちなみに上記の人達は全員ソラの女装を見ての反応。

なのは・ライダー・シルバー

『ぶはっ！』

三人は銀時の女装を見て鼻血を出す。

神楽「ぱっつぁんキモいアル」

神楽は新八の女装姿を見て少し引いていた。

銀八「なんか、ムカつくんだけど。そしてゴリラは気持ち悪いんだけど」

銀八はここまで女性に好意を持たれるソラと銀時に嫉妬し、近藤の女装姿に不快感を覚える。

フェイト「…えっと、『なっぺ』さんありがとうございます!」

銀八「鼻血出しながらお礼言っちゃったよ!?!どんだけお前ソラの事好きなの!?!」

銀八はフェイトに少し引いてしまった。

銀八「……じゃあ次。ペンネーム『勇者王 真オーズ』さんから、『質問です。まずはなのはに聞きます。次の機体の中で、ガチバトルしたいのはどれですか?」

1 グレートゼオライマー（冥王計画ゼオライマー） スーパーロボット大戦Jオリジナル

2 ノイヴオルフ（スーパーロボット大戦 ジ・インスペクター）

3 ゲールティラン（第2次スーパーロボット大戦Z 破界編）

4 /A I 1（スーパーロボット大戦MX）

5 アストラナガン（スーパーロボット大戦OG デイバイン・ウオーズ）

ちなみに選ばなかった場合、全ユニットが最大出力で必殺技を放ちます。

次の質問です。この前、新八と土方がなのはのパンツを二枚ずつ持っていて、一つを頭に被りもう一つを直に穿いて激しく腰を振っていました。（そのときの映像があるので送ります）

皆さんはこれに対してどう思いますか？

P・S 物体Xを一つ送って下さい。成分を調査したいので。『…

…いや、とんでもないお願いするなおい!!」

銀八はあの謎の物体Xを調べようとする勇者王 真オーズに驚く。

銀八「それと、作者はスーパーロボット大戦の知識がないので上手く答えられません。すみません」

フェイト「すみません」

二人は作者の知識がない事に謝罪する。

銀八「それで2の質問だけだよ……新八どこからあのマヨラーも堕ちたもんだな…」

銀八は二人の行動に激しく呆れていた。

フェイト「二人共最低です!!」

フェイトは二人の変態行為の映像を見て怒りを露にしてドン引きしていた。女性として二人の行動は許せなかった。

銀八「じゃあ『勇者王 真オーズ』さんにはフェイトの物体Xを贈ります。扱いを間違わないように気をつけて下さい」

フェイト「……いや、私の料理は物体Xじゃないですよ？」

フェイトは自分の料理が何故物体Xと呼ばれているのか分からなかった。

銀八「自覚がないってのも考え物だな……次、ペンネーム『ボツスン』さんから、  
『質問です。』

銀さんLOVEの皆さん。銀八先生がもし、君達の下着を盗んでいたら、同じ銀さんの顔をしていても許しますか？

あちらのなのはちゃん。この中で銀さん以外に恋愛の意味で好きになってもいい人はいますか？

1 志村新八

2 銀八先生

3 天道ソラ

4 善悪無縁

5 ユーノ・スクライア

6 高町ケンジ

7 ルビー・ランペルージ

新八君と無縁。ケンジ君はこちらのなのはちゃんとこちらのヤミちゃんと一緒に風呂に入ったり、寝ています。羨ましいですか？」  
……」

フェイトは軽蔑の眼差しを銀八に向ける。

銀八「いや、何その目！？俺やってないからね！？『もしも』の話だからね！？」

慌てて弁解する銀八。

シルバー「許さんな」

ライダー「許しません」

なのは「銀さんと銀八先生は別人だから許さないの（笑顔）」ゴゴゴゴゴゴゴ

なのはだけはとんでもないオーラを出していた。

銀八はそれは見て顔を真っ青にしてガタガタ震えていた。

そしてオーラを消した後になのはは答える。

なのは「んゝ銀さん以外の人は考えられないなあ」

銀時を溺愛している今のなのはには別の誰かを好きになるとかは考えられないようだ。

新八「羨ましいぞコンチクショーーーー！！！！」

新八は血涙流しながら大量のチェインソーをケンジに向かってぶん投げる。嫉妬の力が新八に力を与えたようだ。

無縁「哀れだなア。男としてすら見られてねエンだからなア」

そう言う無縁の雰囲気はいつもとは様子が違っていた。

ニヤリと口元に笑みを浮かべるところなんかは、どこぞの一方通行のようだ。

銀八「…なんか、無縁のキャラ変じゃね？」

フェイト「私もそう思います…」

二人は無縁の違和感に疑問を感じた。

銀八「まあいいや。じゃあ『ボッスン』さんはチェインソーにお気をつけを」

フェイト「次、ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』『エイリアン』とブレデターを瞬殺………  
後、なのはの後ろに魔王が居たような……では質問します。』

1・転生者達に質問。怒ったレナードをどう思いますか？

2・銀魂メンバーとリリカルメンバーに質問。怒ったレナードをどう思いますか？

3・皆に質問。白き魔王と白き皇帝、どっちが怖い？

『以上です』……私は怒ったレナードは怖いと思ったなあ……」

フェイトはレナードの怒った姿を思い出して少し震えた。

銀八「さすがに凄いなよな。ちなみに転生者達は怒ったレナードを見て雑魚辺りはビビッてました」

フェイト「じゃあ強い人達は？」

銀八「驚いてはいたな」

フェイト「そうなんですか……」

銀八「つで、2の答えだけど、多いんでこいつ等に答えてもらいます」

ソラ・銀時・桂・ライホース

『『怒りが伝わった』』

アリス「まだまだだな」

アリア「にゃ」……」

リリス「結構怖いですね……」

なのは「……（涙目）」

ヤミ「あれ位の殺気を出す人物ならいくらでも遭って来ました」

銀八「まあレナードの怒る理由も分かるには分かるよな」

銀八はフェイトが転生者に傷つけられて怒ったレナードを思い浮かべ、レナードの思いやりの強さを実感していた。

銀八「じゃあ3だけど……どっちもこえよ!!」

フェイト「私もそう思います……」

フェイトもおおずおおずと答える。

銀八「それじゃあ『白騎士君』さん……廊下立たなくていいからレナードの怒りを抑えてください」

フェイト「…無理なんじゃないかな？」

フェイトは苦笑する。

銀八「次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『輝刃』普段通りでえげつない事するな…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・黒龍に質問…後々にある新八のパワーアップイベントだが、デバイス的にはどのような感じにするのだ？

あゝ…確かに、その所は気になるな…うん。次は俺からだ。

2・新八に質問…もし難しそうだったら、新八のカップリング相手…俺が考えてやろうか？

輝刃「…ついに奥の手を引っ提げたか…（汗）。」「…じゃあ黒

龍答える」

黒龍「いや、新八のパワーアップはデバイスと言うより精神面で強くしていくつもりです」

銀八「あ、そうなの。それで、それは何時になるんだ？」

黒龍「たぶん、ストライカーズ辺りになりそうです」

銀八「結構先だな、おい。じゃあ2の質問は…なしで」

フェイト「いや、良いんですか!？」

質問をなしにした銀八にフェイトは驚いて聞く。

銀八「なんで俺じゃなくあの眼鏡のカップリングを聞かなきゃいけないんだよ!?! つうかムカつくからこの質問はなしだ!」

フェイト「それただ単に新八に彼女が出来る事に嫉妬してるだけだよね!？」

折角の質問をなしにした銀八にフェイトは呆れていた。

完全に新八に彼女が出来る事を防ぎたいようだ。

フェイト「でも、新八なら望むじゃないかな？」

銀八「まあたぶんあの“彼女いない暦”の眼鏡ならすぐに“はい”ってOKするだろうけど、俺がなしにしたからもう気にすんな」

とんでもない傍若無人ぶりにフェイトはまた呆れてため息をついた。

銀八「じゃあ『月光閃火』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『ケン』さんから、

『屁怒紹様へ

近藤と土方、衛宮士郎の三人が正義の為だと貴方が留守中に大事にしていた花や植物を滅茶苦茶にし火を放ちました。

因みに彼らがやったという証拠写真と証拠映像もありますので・・・どうお話しますか？（黒笑）

松平のつつあんへ

近藤と土方の二人が貴方の娘である栗子さんの下着を全て盗み、マニアの人に売ったりクンカクンカしていました。

証拠写真もありますんで二人を若本系の必殺技で裁いちゃってください（黒笑）『……なんか最近のケンさんはドS度が増えてないか？』

フェイト「私もそう思います…」

二人はケンさんのドS質問の頻度が多くなっている事に少し呆れていた。

そして嘘情報を聞いた松平は早速二人を処刑しようとしていた。

松平「かめはめ波アアアアアアアアアア！！！！！！」

近藤「とつつあん誤解だアアアアアアアアア！！！！」

土方「つつか声優ネタ使ってんじゃないー！！」



（黒笑）「黒！？何コレ！？黒神さん並に黒い質問なんだけど！？」

銀八はケンさんの新八虐めにも等しい質問にツツコム。

新八「ふざけんなアアアアアアアアアア！！！！！」

ドカツ！！

銀八「なんで俺!？」

怒つた新八は銀八を殴り飛ばす。

新八「こうなりや徹底抗戦じゃアアアアアアアアアア！！！」

怒った新八はフェイトの物体Xを大量に遊輔に向かって投げる。そんでやる事終えた新八は不機嫌になりながら帰って行つた。

銀八「……『ケン』さん……あなたは鬼ですか？」

起き上がった銀八は額に青筋浮かべる。

フェイトはそれを見て苦笑していた。

フェイト「……………そ、それじゃあ次いきます。ペンネーム『黄色い  
のなにか』さんから、

「新八に質問。二十四訓の贈り物でなのは新八EDに入つた時に泣くほど物凄く嫌がつてました。これは明らかになのは、新八の事を嫌っていますからなのはに恋する事は諦めちゃえば?（黒笑）」

新八に質問。二十四訓でもしも巨大な木の根っこに新八が潰されて

も眼鏡が無事ならば大丈夫なんじゃないんでしょうか？眼鏡が新八の本体なんですか。』……酷い！？これも新八に対してかなり酷い質問なんだけど！？」

フェイトはもう新八が哀れ過ぎて涙が出て来るほどだった。

新八「一体僕が何したって言うんだコンチクショーーーーー！！！！」

あまりの読者の責め苦に耐えかねた新八は涙を流しながらどこかにダッシュして行つた。

銀八「……何時かアイツの精神壊れるんじゃない？」

「フェイト……うん」

二人は同情の視線を新八の背中に向けていた。

銀八「…じゃあ『黄色いのなにか』さんは廊下に立ってなさい」

フェイト「次、ペンネーム『黒神』さんから、

銀時へ

声も雰囲気も似ているラグナ・ザ・ブラッドエッジとは仲良くなれそうですか？

ソラへ

新八がロリコンを卒業する可能性はありますか？

新八へ

僕の小説では君はまったく彼女は出来てないどころが出番が無く、神楽は出番があつてエリオといい関係になってきています。

恋愛が無いロリコンオタクである貴方から見れば認められませんか？（黒笑）『……これは……』

フェイトは黒神の黒い質問にもうどう答えて良いか分からなかった。

銀八「じゃあ銀時とソラ、答えろ」

銀時「まあ類は友を呼ぶって言うし、仲良くなれんじゃね？どんなっかはわかんねえけど」

ソラ「俺としてもロリコンから卒業して欲しいが、どうなるかは分からない」

銀八「まあ銀時の野郎の答えはともかく、ソラの方は新八次第だな」

フェイト「そうですね」

二人が言い合っているその時…

新八「うオオオオオオオオ！！！！神楽ちゃんの裏切り者オオオオオオオオオオ！！！！」

神楽「うっせエんだよダメガネが！！！！」

新八「ゴハッ！！！」

質問を聞いて神楽に嫉妬した新八が神楽を殴ろうとしたが、逆に返り討ちにあつた。

銀八「まあ当然の結果だな」

フェイト「ははは…（苦笑）」

銀八「にしても、あのエリオが神楽をねエ…」

まさかあの神楽が異性に、しかもあの誠実なエリオに好意持たれる事にはさすがの銀八にとっても意外だったらしく、感慨深そうに顎を手で触る。

フェイト「私は可笑しくないとします。二年後の神楽は今よりもっと綺麗だし、それに……胸をも大きいし」

銀八「ん？なんか言つた？」

フェイトの最後の言葉が聞こえなかった銀八はフェイトに聞く。

フェイト「…いえ、なんでもありません…」

フェイトは沈んだ表情で自分の発展途上の胸を触っていた。  
フェイトは知らないが、ストライカーズ未来のフェイトは二年後神楽よりも更に大きいバストを手に入れる事をまだ知らない。

銀八「なんか良くわかんねエけど、『黒神』さん……黒龍はそっち

でやっているコラボ長編でのセフィロス登場を楽しみにしています」

フェイト「今回はこれで終わりですね」

銀八「そうだな。次回のアシスタントは近藤コシノになります」

フェイト「次回もよろしくお願いします（ニコ）」

ルビー「うわアアアアアアアアアア！！！！」

ボッスンさんのキャラであるルビーが黒龍達の所に写真と一緒に飛んでいた。

何故飛んでいるかと言うと、ボッスンさんに大砲で飛ばされたからである。

詳しく知りたい人は感想版をチェック。

ドカン！！

ルビーはそのまま地面に衝突する。

ルビー「いたた……！！……あれ？……あんまり痛く、ない？」

あんなだけのスピードで地面に落下したのにも関わらず、さほど痛みがない事に不思議に思うルビー。

ムニユ

「んっ／＼／＼」

ルビー「へっ？」

しかも自分の右手に柔らかい感触が伝わってきた。それはかなり触りごちが良かった。

更には少女の艶かしい声が聞こえた。しかもその声は自分が良く知っている人と同じ声音だった。

そこでルビーの頭はフル回転して自分の状況にいち早く気づくと同時に冷や汗をダラダラと流す。

そして恐る恐る自分の下を見てみると…

「何をしているんですか？／＼／＼／」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

ルビー「……………」

自分の下には顔を赤くし、凄まじいオーラを出したヤミがいた。

ちなみにルビーとヤミの状態はルビーがヤミを押し倒す形で右手で胸を鷲掴んでいる形だ。

ヤミ「えっちいのは嫌いです…！！」

ドカ…！！

ルビー「ゴハッ…！！」

ヤミは髪を拳に変えてルビーの顔を思いっきりぶん殴る。

ルビーは綺麗な半円を描いて吹っ飛ぶ。

そしてヤミは立ち上がる。

「ヤミ、私にえつちい事をして良いのはソラだけです。私が体を許すのは彼だけ。それ以外は全て処刑します！」

ルビー「いや、君ホントにヤミちゃん！？？とんでもキャラ崩壊……」

 $\vdots \vdash \vdash \vdash \vdash \vdash \vdash \vdash \vdash \vdash \vdash$ [illegible]

ルビーが自分の所のヤミとはまったく違って違い過ぎる事にツツコミ入れようとした時、髪を全部拳に変えたヤミの北斗百烈拳を喰らう。

ヤミ「あなたは既にえっちい方です」

ルビー「ゴハツ!!!」

最後にワケの分からない事言っ て全ての髪を巨大な拳に変えてルビィをボッスンさんの所までぶっ 飛ばした。

すると、空からヒラヒラと何枚もの写真が振ってくる。

「ヤミ、ん？なんですかコレは？」

ヤミは空から降ってきた写真の一枚を手取る。

ヤミ「!?!?!」

ヤミは写真を見て顔を赤くして驚く。

なにせその写真には自分とボツスンさんのキャラであるケンジが一緒に風呂に入っている写真だったからだ。

そしてすぐさま火炎放射器を取り出して降ってくる写真を消し炭にする。

新八「ドチクシヨ……!!!!!!!!」(血涙)

ケンジがなのはと寝ている写真やお風呂を一緒に入っている写真をまたま見てしまった新八は両手にチェンソーを持って振り回しながらボッスンさんの所に行った。

さっきチェンソー投げたと言うのに……

銀時「ぎゃ あああああああああああああああああああ！！！」

銀時は真王さんの所から来た呪怨の子供から逃げていた。

サチコ「ソラお兄ちゃん。遊ぼう」

ソ  
ラ  
「  
:  
:  
:  
:  
:  
:  
」

真王さんの所のキャラであるサチコはソラの周りを飛んでいるが、ソラは死んだフリしている。

黒龍「サチコちゃん！そろそろ時間なんで帰ってください！」

サチコ「ええ！？まだソラお兄ちゃんと遊んで…」

サチコが文句言う前に黒龍が強制的にサチコを真王さんの所に帰した。

ちなみに呪怨の子供も。

## 第二十五訓：スピードが速い奴はかなり厄介（後書き）

黒龍「それじゃあ贈り物コーナー始めま〜す」

『鳴神 ソラさんから銀時LOVEズにFateのアサシンの服を着た銀時の写真を、ソラLOVEズには高校生なソラの写真』、『新八にはケンジがボッスンさんのなのはとヤミと一緒に風呂に入っている写真となのはのベットでなのは、ケンジ、ヤミの順で一緒に寝ている写真』、『ケンさんから新八に遊輔となのは、蓮華の三人と一緒に歩いている写真、万事屋メンバーにはHERO's EPISODEのイメージED3と第五十五話と第五十六話が入ったDVD』、『銀時とソラには運が上がる不思議な腕輪を差し上げます（本当は腕輪を着けたら好意を持っている人がいたら性的に狙われる不思議な腕輪です。）』

新八「ドチクショーーーーー!!!!!!（血涙）」

新八は思いつきりケンさんから贈られた写真を破る。

銀時「メアリまんま閣下じゃん」

アリス「まさしくレオ閣下だな」

リリス「胸が大きいですね…」

DVDを見て感想を述べる万事屋メンバー。

なのは・ライダー・シルバー

『銀さ〜ん（ギントキ）（銀時〜）／／／／』

フェイト「ソラ／／／」

アリス「ソラ、やるぞ」

アリア「にゃ／／／ソラ／／／」

リリス「ソラ様／／／」

ヤミ「ソラ／／／」

セイバー「ソラ／／／」

銀時とソラは即効で逃げた。

黒龍「おお！！腕輪を付けたと同時の猛ダッシュ！！」

## 次回予告

フェイト「次回、『お宝は取ったもん勝ち』にテイクオフ」

## 第二十六訓：お宝は取ったもん勝ち（前書き）

黒龍「遅くなつてすみません。実は新小説を色々と作っているのと、中々時間が取れずに投稿が遅くなつてしまいました。本当にすみません」

黒龍は土下座する。

銀時「もつとしっかりやれよ」

神楽「まったくアル。早く私の出番が欲しいネ」

黒龍「あ、たぶん神楽の出番は先になります」

神楽「ふざけんなコラアアアアアア！！！」

黒龍「ぎゃああああああああああああ！！！！」

黒龍は神楽にボコボコにされた。

ユーノ「あ……あははは……『リリカル銀魂ライダー』始まります  
……（苦笑）」

## 第二十六訓：お宝は取ったもん勝ち

新八とナナシが戦っていた頃。

銀時とアルフは睨み合って互いの様子を伺っていた。  
そして先にアルフが仕掛けた

アルフ「おりゃー！」

アルフは爪で銀時を引き裂こうとするが、銀時は木刀でアルフの爪攻撃を払いのける。

アルフ「ちっ！」

銀時「おらアー！」

銀時は横薙ぎに木刀を振ってアルフを斬ろう。

アルフ（速い！！）

銀時の木刀を振る速さに驚いたアルフは咄嗟に上に跳んで避ける。  
そしてアルフの後ろにあった木は横に真つ二つに斬られ、そのまま  
斬られた上の部分が地面に落ちる。

アルフ「なっ！？」

アルフはその光景を見て驚愕した。

アルフ（魔法も使わずにあの太い木を切るなんて、なんて出鱈目な  
奴だー！！）

アルフはまさかここまで銀時が強いとは思わず内心驚愕していた。身体能力だけでここまでできるなんて思わなかったからだ。

アルフ（手加減なんてしていたらこっちがやられちゃう！）

地面に降りたアルフは爪を地面に食い込ませる。

アルフ（でも、ソラ達の家族を傷つけるワケには……！）

フェイトのためにも傷つけずに目の前の銀時と言う男の相手をしな  
ければいけない。

アルフがどうすれば言いか迷っていると、

フェイト「アルフ！」

フェイトが戻って来た。

フェイト「ジュエルシードは回収したよ。引き上げよう」

そう言つてフェイトはアルフを連れて飛んで行った。

銀時「あ、おい！」

銀時は追いかけようとしたが、なにぶん相手は空を飛んでいるので  
飛べない自分には追跡が不可能だと気づき諦めて木刀を腰に挿した。  
そして銀時がフェイト達が飛んで行った方角を見ていると、

なのは「銀さん！」

銀時「なのは」

バリアジャケット姿のなのはが飛んでやって来た。

そして銀時の近くに降り立ったなのはは申し訳なさそうな顔で銀時に謝る。

なのは「ごめんなさい銀さん！ ジュエルシードあの子に取られちゃったの！」

なのはは巨大猫の所に付いた時には既に黒い魔導師にジュエルシードを取られていたと銀時に説明した。

なのは「銀さんに任されたのに、何も出来なかったの……」

なのはは悲しそうな顔で俯いていた。

銀時が体を張って自分をジュエルシードの元まで導いてくれたのに対し、自分は何も出来なかった事が悔しくてなにより悲しかった。落ち込んでいるなのはの頭に銀時は手を置く。

それに気づいたなのははゆっくりと顔を上げる。

銀時「ま、しゃあねえよ。取られたんなら取り返せば良いだけの話だ。そう自分を責めんじゃねえよ」

銀時はそう言ってなのはの頭をゆっくりと撫でた。

なのは「銀さん……」

なのはは銀時に慰められた事でつい嬉しくなり涙を流しそうになるが、すぐに笑顔を作って言う。

なのは「うん！」

なのはは今度あの魔導師に遭ったら銀時のためにも次は頑張ろうと思った。

その後銀時となのはは戻って来たユーノと新八からナナシの話を聞き、なのははナナシの強さを聞いたなのはは不安そうな顔をし、銀時は険しい顔でナナシを更に警戒した。

ちなみに銀時達がフェイト達と月村邸で戦っていた頃、月村邸で近くでも戦いが行われていた。

住宅街の道路には二人の子供と一人の白髪の成人男性くらいの男が対立するように立っていた。

無縁「よオ、そろそろ死ぬ覚悟はできたか？」

白髪の男は大人の姿になった『善悪無縁』だ。

無縁は笑みを浮かべながら転生者の二人の少年、中身オッサンであろう二人に話し掛ける。

転生者 A「ハア、ハア……くそ！」

転生者 B「なんなんだお前……！？」

杖を構えてバリアジャケット姿の二人はは肩で息をしながら無縁を



無縁「……バオウザケルガ」

無縁の手から転生者Aが出したと同じようにバオウを出す。しかも転生者Aの出したバオウよりも倍でかかった。

転生者A「なんじゃそりやアアアアアアア！！？？」

転生者Aが驚く中無縁のバオウは転生者Aのバオウを飲み込み、そのまま転生者二人に向かって行く。

転生者Bは慌てて高速移動する魔法であるソニクムーブを発動して逃げるが、逃げ遅れた転生者Aはそのままバオウに飲み込まれてしまった。

転生者A「うわアアアアアアアアアア！！！！」

転生者Aがいる地点は大爆発が起こり、土煙が舞う。

転生者B「テメエ……！！」

そしてソニックムーブで無縁の後ろに回り込んだ転生者Bは無縁を睨み付ける。

無縁はゆっくりと後ろを振り向く。ニヤリと笑みを浮かべていた。

転生者B「笑ってんじゃねえー！！！」

転生者BはSSSランク以上の砲撃を無縁に放つ。

だが、砲撃は無縁に当たるが無縁は無傷のままだった。

転生者B「チクシヨーーーー！！！！」

攻撃が効かない事に転生者Bは地団駄を踏み、これ以上の戦いはマズイと思い飛んで無縁とは反対方向に逃げ出す。

その姿を笑みを浮かべながら見ていた無縁の瞳は紫色に光る。

無縁「相手が俺じゃなきゃア、良かったのになア」

そう言った無縁の体から三枚の紫色のメダルが飛び出し、無縁の手が光ると無縁の手にはメダルを三枚入れられる挿入口がついたベルトのような物が握られていた。

それは『仮面ライダーオーズ』に出て来るベルト、『オーズドライバー』である。

これをベルトに巻いて『コアメダル』と言う特別なメダルをオーズドライバーに三枚入れれば、仮面ライダーオーズに変身できるのだ。そして無縁の体から出た紫色のメダルは恐竜系と呼ばれるコアメダルなのだ。

無縁はオーズドライバーを腰に巻く。そして無縁の体から出て浮かび上がっていた三枚の紫のメダルはそのままドライバーの本体にあるメダル三枚入れるための挿入口に紫のメダルがセットされると傾く。

そして右腰についているオースキャナーが浮かび上がり、斜めになった本体に合わせる様にスライドしてメダルスキャンする。

無縁「……変、身」

無縁がそう呟いた後にドライバーから音声が流れる。

ドライバー<プテラ、トリケラ、ティラノ！プゥトゥティラ>のザウルス♪>

そして無縁の体は紫の色のアーマーのような物で覆われ、顔は仮面が装着される。

その姿はまさしく紫色の恐竜のようなアーマースーツと言える様な姿で、顔がプテラノドン、胴体がトリケラトプス、下半身がティラノザウルを模った姿になっている。

それこそまさしく『仮面ライダーオースプテティラコンボ』の姿だ。

そして変身が終わるとプテティラから冷気が放たれ周りが凍りつく。

プテティラ「さアて、行くか」

背中についている翼竜の羽のような紫色の羽・『エクスターナルフィン』を広げて飛翔する。

転生者B「チクショー！！ なんなんだアイツは！？ 攻撃が効かないなんてチートなんてレベルじゃねえぞ！！」

転生者Bは焦っていた。

彼が聞いた話では善悪無縁はセコイ能力しか持たない上に卑怯卑劣な戦い方で相手を貶めるような小悪党だと聞いていた。

なのに実際会ってみたら自分達の攻撃は無効化させるは、攻撃は自分達が放つのよりもずっと強い威力のモノを放つのだ。出鱈目しか言いようがなかった。

転生者B（フェイトにフラグ立てんのは後回しだ！ 今はアイツから逃げる…！）

そこまで思った時、

ドカツ！！

転生者B「グハッ！！??」

頭に何かを叩きつけられたような衝撃が走り、そのまま地面に叩きつけられた。

そして転生者Bが落ちた地面は砕け土煙が舞う。

そして落ちた転生者Bを腕を組んで見ているのは翼竜の羽を羽ばたかせているオーズプトティラコンボだった。

実はさつきプトティラはすぐに転生者Bに追い付いた後、ティラノサウルスの尻尾のような紫の尻尾・『ティルディバイダー』を伸ばして転生者Bの頭を叩きつけたのだ。

プトティラ「悪いが、逃がす訳にはいかないんでなア」

そしてプトティラはゆっくり地面に降り立ち、羽を閉じる。

そして土煙の中から転生者Bが歩いて出て来る。

転生者B「て、テメエ……！！」

バリアジャケットのお陰で落下の衝撃は防げたらしく、さつき攻撃を喰らって頭の血から流す以外は傷はなかった。

プトティラ「まだ生きたかア。そんじゃア、とどめだなア」

プトティラはそう言うと、地面に右手を突っ込む。その影響で周りの地面に亀裂が入る。

そしてプトティラが手を地面から引っこ抜くとその手にはティラノサウルス頭がついたような紫色のアックスのような武器『メダガブリユー』が握られていた。

そして次に『仮面ライダーオーズ』に出てくるメダル・『セルメダル』を一枚取り出してメダガブリユーの挿入口に入れて、恐竜の顔の部分を下にスライドさせる。

メダガブリユー<ごっくん!>

メダガブリユーから音声が鳴った後、プトティラはメダガブリユーを変形させて小振りなバズーカのような形・『バズーカモード』に変える。

そしてプトティラが転生者Bに向かって構えるとメダガブリユーの砲身にセルメダルのエネルギーが溜まっていく。

そしてメダガブリユーから軽快な音声が流れる。

メダガブリユー<プーっ>ティラのひっさっつっ>

そしてプトティラが引き金を引くとメダガブリユーから紫色の破壊光線が放たれる。

転生者BはSランク攻撃をも防ぐ事のできる障壁で防ごうとするが、障壁はガラスのようにいとも簡単に砕け散ってしまい、転生者Bは紫色の極光に飲み込まれる。

転生者B「ぎゃあああああああああああああああああああ  
!!!!」

転生者Bが悲鳴を上げて後爆発して絶命する。

そして転生者を殺した終わったプトティラは変身を解き、無縁の姿に戻る。

無縁「さアて、月村邸に向かうかア」

無縁はそのまま家の屋根から屋根へと飛び越えて月村邸に向かう。

無縁が月村邸に付く頃には既にフェイト達と銀時達の戦闘が終わっている頃だった。

無縁は木の枝に乗って隠れながら銀時達の様子を見ていた。

無縁（フェイトが飛び去っていくところを見たが、もう終わっちまっ  
てみたいだなア）

無縁は目を細めて銀時達の様子を見ていた。

新八とユーノが銀時となのはにナナシの事を話しているところだった。

これからどうしようか考えている新八が無縁の目に止まった。

無縁（アイツは、使えるかもなア……）

無縁はニヤリと笑みを浮かべるとそのまま帰って行った。

時刻は夕方。

ジュエルシードを回収したフェイトとアルフとナナシは拠点である高級マンションに帰っていた。

ナナシは台所で夕食を作り、フェイトとアルフは今回のジュエルシード回収で見つけた銀時達の事で話し合っていた。

アルフ「フェイト、ソラ達に家族が見つかった事を教えるのかい？」

フェイト「うん。っと言つても時の庭園に帰ってからだけどね」

フェイトは苦笑してアルフの問いに答える。

何故今回のジュエルシード探しにソラ達が現れなかったと言うと、実の所フェイト達はソラ達をジュエルシード探しに連れて行かなかったのだ。

母親であるプレシアに絶対連れて行けと言われなかったフェイトは、自分達家族の問題であるジュエルシード探しにソラ達、特にソラを巻き込ませたくないと考えてアルフとナナシを連れて黙って地球に転移したのだ。

アルフ「やっぱり、ソラ達にもジュエルシード探しを手伝ってもらった方が良かったんじゃないかい？ 見た感じソラ達は腕が立ちそうだしさ」

フェイト「ダメだよアルフ。やっぱりこれは私達の問題だから無関係なソラ達を巻き込めないよ」

アルフ「うつ……」

フェイトの意見も最もなのでアルフは押し黙る。

そしてフェイトは「それに……」と言つて言葉を付け足す。

フェイト「ソラ達を危険な目には遭わせたくないから」

真剣な意思の籠った瞳で言うフェイトに対し、アルフは諦めたように言う。

アルフ「……分かったよ」

フェイト「それにしても……」

そう言つてフェイトは台所を見る。

フェイト「私も料理が作れるようになったし、私が作っても良かったんだけど」

フェイトの言葉を聞いてアルフは顔を青くしながらフェイトの肩を掴む。

アルフ「いやいやいや！！ フェイトはジュエルシードの回収で疲れてるんだからゆっくり休んでよ！！」

フェイトの料理がかなりヤバイ事を知っているアルフは必死でフェイトに料理を作らせないようにする。

ちなみにジュエルシード集め中はずっとナナシに料理を作ってもらふ事はナナシと話し合つて既に決めている。

必死に言うアルフにフェイトは戸惑う。

フェイト「えっ！？……でも、それはナナシも同じなんじゃ……」

アルフ「いや、フェイトは魔力使っているけどナナシが使ったのは体力だけだろ！？ だからフェイトの方が疲労が溜まってるとて！

！  
」

支離滅裂な事言っ てなんとか誤魔化すアルフにフェイトは目を白黒させる。

結局フェイトはアルフになんとか丸め込まれて料理を作る事はなかった。

アルフはなんとか無事に食事が出来る事に涙を流した。

翌日。

万事屋の銀時、新八、ライダーと真撰組の近藤、土方、沖田、山崎は高町家と一緒に海鳴温泉来ている。

ちなみにアリサは執事の鮫島とすずかは姉の月村忍と一緒に来ている。

何故銀時達と一緒にいるかというと、なのはの親である土郎や桃子に誘われて一緒に温泉に行く事になったのだ。

銀時達としても温泉と言う心体がリフレッシュできる上に美味しい料理が食べられると思ったのですぐに着いて行くと言った。

そして女湯ではなのは達が温泉に入っていた。

ライダー「良い湯ですね」

ライダーは気持ち良さそうな顔で温泉に浸かっていた。  
眼鏡は曇るのでちゃんと外している。

ちなみに昔からの訓練甲斐があつてか、眼鏡やマスクを外してもライダーは魔眼である『キュベレイ』の力を抑える事ができるようになった。

眼鏡やマスクを今でも付けているのは念の為である。

なのは「本当に良い湯ですよね」

ライダーの隣で、なのはが気持ちよさそうに一緒に温泉に入ってる。

なのは（それにしても……）

なのはは目線はライダーの『ある部分』に向く。

なのは（ライダーさん胸、大きいな……）

なのははライダーのグラビアアイドルも嫉妬しそうなほどの豊満で形の良い巨乳と自分の未発達の胸を見て敗北感を覚える。

なのは（銀さんも胸の大きい女の人が好きなのかな……？）

ついネガティブな考えをしてしまったなのははすぐに首を横にブンブン振って消す。

なのは（これから毎日牛乳飲んで胸を大きくするの！！　それで銀さんを私に振り向かせてみせるの！！）

なのははこれから自分の胸を大きくする努力をしようと心の中で誓った。

この考えが後に未来でなのはが原作のなのはよりも一部分を大きくする切っ掛けになるとはまだ誰も知らない。

アリサ「やっぱり温泉はいつ来ても良い物よね。着て良かった」

すずか「そうだね」

気持ち良さそうに入るアリサの言葉にすずかが同意する。そしてアリサの腕の中には、

ユーノ「キューキュー!!」

男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。  
顔も赤くなっている。

なんとかアリサの腕から抜け出そうとするが、如何せんフェレットと言っ小動物の力では人間の力に勝てるはずもなく、無駄な足掻きしか出来なかった。

アリサ「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって」

すずか「可愛いね」

一緒に入っているアリサとすずかは勘違いしながらユーノに触れる。

ユーノ（新八さん！ 銀さん！ 土方さん！ 近藤さん！ 山崎さん助けて〜!!）

ユーノは念話で隣の男湯に入っているであろう男性陣に助けを求めた。

だが、魔導師でない彼らに念話が届くことはなかった。  
これがユーノ淫獣説の始まりとは、まだ誰も知らない。

隣の男湯。

新八と士郎と近藤と山崎は静かに大人風呂に浸かっていた。

士郎「良い湯だね」

近藤「いやゝまったくですな」

新八「……ええ」

山崎「ホントだね」

三人は頭に畳んだタオルを乗せて気持ち良さそうに温泉に浸かっていた。

子供風呂に浸かっている沖田が近藤に質問する。

沖田「あり？　　そう言えば土方さんや旦那はどうしやしたか？」

近藤「ん？　　トシや万事屋はサウナに入っている筈だ」

士郎「確か恭也も入っているはずだ」

新八「そう言えばサウナ入ってからかれこれ二十分は経ってますよね？」

近藤と士郎と新八が思い出す。

それを聞いた沖田は「へ」と言って面白そうに笑みを浮かべていた。  
なにせ銀時と土方と恭也の三人が一緒にサウナに入っているのだから間違いなく面白い展開になっていると思ったからだ。

沖田の予想通りサウナ室は面白い事になっていた。

銀時「あのさ……土方くん、恭也くん。そろそろ出た方が良  
いんじゃない？ もう二十分以上も入っているぜ？ まあ俺は大  
丈夫だけど」

土方「何言ってんだ？ テメーの方こそ大丈夫か？ 俺はまだまだ  
余裕だぜ」

恭也「ふん。銀時、お前はもう出る。凄い量の汗を流しているぞ。  
これ以上此処に居たら死ぬな。まあ俺は大丈夫だがな」

と言うか三人共サウナに入り過ぎたせいでもうかなりの汗掻いて汗  
で余分な老廃物出すどころか、余分な水分まで体から垂れ流してい  
る。

もしこれ以上此処にいたらドクターストップ掛かるほどだ。  
だがどれだけ水分を失おうとこの三人は出て行かない。  
なんせ……、

銀時・土方・恭也

（（コイツより先に根を上げてたまるか！！））

と銀時は土方、土方は銀時、恭也は銀時を睨みながら絶対コイツより先に出ないと誓う。

つまり意地を張って誰もサウナ室から出て行こうとしないのだ。なんか気に入らない奴より先にサウナから出たら何か悔しいじゃん敗北感感じるじゃん、みたいな感じだからだ。

銀時「俺は全然大丈夫だから温度上げるぜ」

銀時は近くにある焼け石に水を掛けて水蒸気を発生させる事により湿気を更に濃くして室内温度を上げる。

土方「そうか？　なら俺はまだまだ水分が足りてるからな。ちょっと運動でもしようかな」

土方はそう言って腕立て伏せを始める。

恭也「フツ……サウナ室での、運動も、中々斬新だな！」

恭也は腹筋をし出す。

これ以上体から水分抜いて、コイツら死ぬ気か？と思うような行動を取る三人。

正直高過ぎるプライドと言つのも考えものだ。

そして長い時間高温多湿のサウナに入って大量汗を流している今の状態で更に室内温度上げた上で運動なんてしているもんだから…、

銀時「……どうだ？　もう根を上げたか？　良いんだぜ？　もう出たいって言って良いんだぜ？　言えよ。な？」

銀時は柱を土方と間違えて話し掛け…、

土方「すうゝ……テメーこそそろそろ出たらどうだ？……アレ？  
にしてもこのタバコ味しねえな？」

土方は桶をタバコと間違えて吸い…、

恭也「……………」

恭也は腹筋を曲げたままピクリとも微動だにしなかった。

銀時と土方は認識もできないほどの幻覚を見て、恭也は石造のように動かない始末。

とりあえずもうはつきり言ってヤバイ。どれくらいヤバイかと言うと、末期の肺ガンの患者なのにタバコをめっちゃ吸っているバカくらいヤバイ。

そして幻覚なんて見るまでになつてしまふくらい限界がキていた銀時はバタツと倒れてしまう。

土方「なっ！？ お前……！！」

それを見た土方は慌てて銀時に近づいた。

そして土方は銀時の体を転がして仰向けの状態にする。銀時の容体を確かめるためだ。

仰向けの状態にされた銀時は乾いた笑い声を出しながら自嘲気味に言う。

銀時「ハハハ……意地張って死ぬとは俺もヤキが回ったもんだな」

土方「お前……」

銀時「俺はもうダメだ。だからよお、俺の最後の願いだ。テメーに新八や神楽やソラやアリスやアリアやリリスやライホースやヤミやセイバーやライダー、そしてなのはの事を任せるぜ……」

遺言を言う銀時の両足を土方が持ち上げ、出口まで銀時を引きずる。

土方「ふざけんな。何勝手に自分のモン他人に押し付けてんだ。テメーはそんな柄じゃねえだろ。自分のモンは最後まで自分が背負うもんだろ。テメーのモンを背負うなんざ真っ平ゴメンだ」

銀時「……わーったよ。離しな。俺だってこんな所でくたばってられねえからな。自分の足で出てやるよ」

銀時の言葉を聞いた土方は銀時の足を離す。  
その時、

近藤「まったく……何時までサウナに入っているつもりなんだアイツ等？」

土方たちが戻ってくるのが遅かったので様子を見に来た近藤。  
そしてサウナ室のドアに手を掛ける。

近藤「おーいトシ。いつまでサウナに――」

そして近藤の目に映ったのは……

銀時「って言うと思ったかアアアアアアア……!!」

と後ろから隙が出来た土方を殴ろうとする銀時。いくら待っても土方がサウナ室から出ないので強硬手段に出たのだ。そして殴られそうになっている土方は、

土方「テメーの考えなんざお見通しなんだよ!!」

避けて銀時の頭を腕で押さえ込んで出口まで突っ込んで行く。ちなみに出口には近藤が突っ立っている。

近藤「えっ!？」

状況がまったく読めない近藤は動く事ができずに、

ドカツ!!

近藤「ゴハッ!!!!??」

そのまま二人のタツクルをモロに喰らう。そして近藤にタツクルした銀時と土方は倒れた後に起き上がって口論する。

銀時「先に出たのはお前だよな!! 俺の方が後だったよな!!」

土方「ふざけんな!! お前のつま先が先に出てただろ!!………  
………って、アレ？」

土方は目の前で白目剥いて仰向けで気絶している近藤に気がつく。ちなみにぶつかった衝撃で近藤が腰に付けていたタオルが取れてチンコが晒されている。

土方「……なんで近藤さんこんなところで寝てんだ？」

銀時「あ、本当だ。風引くな」

その後サウナ室でダンゴ虫のように固まっていた恭也は、士郎に発見される頃にはカラカラに乾いたミイラのような姿になっていた。あ、死んでないから。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はい。今回も質問コーナー始めます」

近藤「アシスタントを務める近藤勲だ！ よろしく頼む」

銀八「前回言ったとおりゴリッラがアシスタントです」

近藤「ゴリッラって何！？」

銀八「じゃあ早速質問いきま〜す」

銀八は近藤のツッコミを気にせずに質問を読み始める。

銀八「ペンネーム『勇者王 真オーズ』さんから、  
『では質問です。まずはソラに。』

石破ラブラブ天驚拳を習得した！ さて、誰と使う？

次の質問です。ソラLOVEズに。

ソラにもし「愛している。お前が欲しい」と言われたらどうしますか？」……じゃあ、ソラ答えなさい」

ソラ「そもそもあんな技は使わない」

銀八「まあさすがにはずいもんな、あの技」

そしてソラバースが立ち上がって答える。

フェイト・リリス・ヤミ・チェーン・セイバー

『私の全てを捧げます！！』

アリス「フツ…言わなくても分かるだろう？」

アリア「にゃ…全部…／／／／」

銀八「ムカつく答えありがとうございました！！」

銀八は嫉妬のあまり質問の手紙を地面に叩きつける。

近藤「俺もいつかお妙さんとラブラブ天驚拳を！！」

銀八「いや、無理だから」

銀八は即答する。

銀八「じゃあ、『勇者王 真オーズ』さん廊下に立ってなさい」

近藤「じゃあ次だ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『明久』銀さんに質問です『新八さんの今後はどうなると思いますか？』」

ムツツリーニ「……………質問『銀さんは魔力を使えるなら何する？』」

「

フォックス「銀時LOVEズにトリコの服を着た銀時の写真を、ソラLOVEズにはコックの格好をしたソラの写真をプレゼント」  
……………本当に新八君はどうなるんだ……………」

近藤は最近の新八の不遇な扱いを思い出して涙を流す。

銀八「まあ、あいつが侍として復活する事を祈ろうぜ」

そして銀時が現れて答える。

銀時「正直どうなるかは俺にも分からねえ。まあ、ロリコン卒業して欲しいけどな。それと、魔力でかめはめ波打ってみたい」

答えた銀時は戻って行く。

銀八「はい、『鳴神 ソラ』さん………と言つかルイージ。ぱつつあんの侍復活まで精神を強く保ってください」

近藤「次だ。ペンネーム『ボッスン』さんから、

『ディエンド「質問です」

新八。君はもし、なのはちゃんとお通ちゃんを選ぶとしたらどちらを選びますか？

ヤミちゃん。君はもしソラさんにピーー！やピーー！などの命令されてもソラさんの命令を実行しますか？

転生者達、新八と無縁に同じ質問をしますがケンジ君はこちらなのはちゃんとこちらのヤミちゃんと一緒にお風呂に入ったり、寝ています。羨ましいですか？』……なんか答え難い質問が来たんですけどー！！？？」

質問の内容を見た近藤が驚きの声を上げる。

そして質問を聞いた新八は…

新八「ど、どうしたら良いんだ！？ 僕はなのはちゃんとお通ちゃんのどっちを選べば良いんだ！？ 僕はなんて罪深い男なんだ！！」

頭を抱えて悶えだす。

銀八「はい、ウザイ答えありがとうございました」

近藤「新八君…」

銀八は心底嫌そうな顔をし、近藤は涙を流していた。

銀八「つつか2の質問にヤミの奴答えられんのか！？」

とてもじゃないがあのヤミが2のセクハラ質問に答えられるとは思

わなかった。

ヤミ「（コクリ）／＼／＼／＼」

銀八「頷いちゃったよ！？ 顔真つ赤にしながら頷いちゃったんだけど！？ お前ホントにヤミか！？」

ヤミ「うるさいです…！」

ドカ！

銀八「ゴハッ！！」

銀八は髪を拳に変えたヤミの鉄拳を顔面に喰らう。

そして3の質問を聞いた人達は…

新八「ケンジイイイイイイイイイイ！！（血涙）」

新八は血涙流しながら物体Xを大量にケンジに向かって投げる。

転生者達

《《ケンジ殺す！！》》

転生者達は殺気全開にしてケンジの所に向かった。

無縁「はア？ くだらねエな」

無縁は軽くあしらった。

銀八「なんかこのコーナーに出て来るアイツが変だと思っただけど

…」

近藤「俺もそう思うぞ」

二人は普段の態度と違う無縁に首を傾げていた。

銀八「じゃあ『ボッスン』さんは転生者達や物体Xに気をつけてください」

近藤「次行くぞ。ペンネーム『真王』さんから、

『真王』精神的にきついと思うぞ、あの二人に。さて質問。『守護女神達（ネプテューヌ）ではなくチート・ザ・ハード達にこと）についてどう思いますか？順番に応えてくれ』」

サチコ「私も」。『作者さんはデフォルトの貞子さんか萌の貞子ちゃんどっちが好き？』」

真王「思い切った質問だな。ファントムは？」

ファントム・ザ・ハード「これだよホロロ」

『転送スレバ死ナナイ』

真王「・・・で？どうしろと？」

ファントム・ザ・ハード「うん『もし転送するなら誰がいい？』って、作つといた」『：なんか怖い質問来たんですけどオオオオオオオオオオオオ！！？？』」

3の質問を見て顔を真っ青にさせる近藤。

銀八「俺なら銀時の野郎に送ります!!」

近藤「いや、いくら万事屋に嫉妬してるからってそれはないんじゃないか!？」

銀八「良いんだよ! 憎い奴も消せて、尚且つ自分を助けるんだから寧ろ一石二鳥じゃねエか!!」

近藤「とんでもなく最低な選択肢なんだけど!？」

どれだけ万事屋に嫉妬しているんだ?、と驚いてしまった。

銀八「つで、2の答えは順番に答えると……チートはその名のおりチート、ゴッドは偉そう、サタンは第二の魔王、バーサークは戦闘狂、ジャイアントはでか過ぎじゃね?、エレメントは多彩、ドラゴン は生真面目、マッハはアホっぽい、ファントムはこええよ!、クイーンはドS、バグは昆虫博士、ナースはコンパ二号、シャドウはコミュニケーション力なし、サムライは銀時二号、ロリータはガキ、ソニックはミュージシャン、マゾチックは生粋の変態、プラントは森っ子、エッチはドスケベ、ビーストは単純バカ」

近藤「いや、答えたのは良いんだが…なんかテキトーだったり酷い言い方があつただけど…」

近藤は銀八のテキトーかつ罵倒が入り混じった答えに頬を引き攣らせる。

銀八「多いんだからこう言うシンプルな感じで良いの」

銀八があっさりとした切り替えしをする。  
そして2の答えは…

黒龍「萌えですかね。なんかそっちの方が見栄え良いですし」

銀八「ま、デイフォルトだと怖さがまだ残る可能性があるからな」

近藤「そう言うものか？」

近藤には良く分からなかった。

銀八「じゃあ『真王』さんは色々な小説を短い間に投稿できて凄いと黒龍が驚いていました」

近藤「作者ももう少し早く投稿できもんか…」

近藤が腕を組んで投稿の遅い黒龍の事に悩む。

銀八「アイツも受験生な上に新しい小説投稿してんだから仕方ねえよ」

作者である黒流の多忙さを考えて銀八はため息をつく。

近藤「そうだな……じゃあ次の質問。ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』ナナシは強いな・・・質問です。』

1・フェイトに質問。もし仮面ライダーキバになればどうしますか？

2・山崎に質問。何でアークナイトとバトミントン対決してたんですか？

3・なのはに質問。高町桃子さんと白き皇帝どっちが怖い？

『以上です』『』

銀八「ええ、マズ1の答え」

フェイト「ん」。やっぱり自分の大切な人達を守りたいな」

フェイトは少し考えて答える。

銀八「つつか2だけど、なんでアイツアークナイトとミントンしてるの？」

山崎「あ、なんかアークナイトがミントン対決を申し込んできたので」

銀八の疑問に山崎が低い姿勢で答える。

近藤「さすがは真撰組の一人だ！どんな相手にも臆しないその姿勢は良いと思うぞ！」

近藤は笑いながら大声を上げる。

銀八「つつかなんでアークナイトがミント勝負申し込んでくんだよ！！」

そして3の答えになのはは…

なのは「どっちも怖いのおオオオオオオ!!!」

涙を流しながら声を上げた。どちら怒らせたら怖いのは一緒だったからだ。

銀八「それは俺も同感だ。じゃあ『白騎士君』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『支配者』さんから、

『支配者』では質問です。さあ。皆さんこの最凶『ヘドロボ軍団』にどうやって対抗しますか？因みに言っておきますがこのヘドロボ達は一体一体の魔力がEXランクの上にたとえ惑星を吹き飛ばすくらいの威力の攻撃を受けてもびくともしません。しかも大きさは富士山並みです。もちろんチート能力による攻撃は一切効きません。と言う訳で黙ってボコボコにされてください。特に銀時とソラなのはとフェイトとセフィロスは（黒笑）では皆さんさようなら。ギヤーハハハハハッ！ああ、それと今回新八を狙わない理由はこれ以上いじめるのがかわいそうになったからです。後任務終了次第ヘドロボ軍団は新八に差し上げます。ボデイガードにでもして下さい。ですがなのはを護ろうとしたりしたら貴方もターゲットになりますので」支配者アアアアアアアアアアアア！！！なんつうもん超越してんだアアアアアアアアアア！！！」

銀八は支配者さんが贈って来たヘドロボ軍団に対して恐怖で顔面蒼白にさせて叫んだ。

近藤「いやアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

近藤なんかは恐怖のあまり蹲って涙を流していた。  
さすがに屁怒組そっくりのロボが襲ってくると言う場面は想像絶する地獄絵図だ。

銀八「し、支配者！！ テメーホントいい加減にしろオオオオオオオオオオオ！！！」

銀八は支配者に対しての怒りのあまり質問のはがきを地面に叩きつける。

銀八「そしてこれは嫌がらせばかりするテメーへの報いじゃアアアアアアアアア！！！」

そして銀八は支配者に向かって大量の物体Xを投げつけた。

銀八「よし、後は黒龍になんとかしてもらおう」

さすがに今回は黒龍の手腕で事態を収拾してもらおうと決める銀八。

近藤「じゃ、じゃあ『支配者』さんは廊下に立って……」

近藤は顔を青くしながら弱々しく言う。

銀八「次、ペンネーム『なっぺ』さんから、

『なっぺ』さて、質問。新八は【なのはという女性】が好きなの？

【小学生のなのは】が好きなの？」「……」

銀八は横目で新八を見る。

新八「もちろん女性として好きなんです！」

銀八「まあ、今のはマシな答えだな」

さすがに小学生として好きなどと答えたらもう新八はただのロリコン野郎だっただろう。

銀八「じゃあ『なっぺ』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『黒神』さんから、

『春蘭

「まずは私からだ、志村新八、貴様は武士の誇りに泥を塗っている！！だから貴様の様な変態男はいつかぶった切ってくれるウウウウ！！」

ウッソ

「次は僕ですね。新八君……頼む、なのはは諦めてくれ。これ以上ボクの知っている新八君のイメージを崩さないで……くれ……」

と、質問を終えたウッソは涙を流す。

実は新八の良さを知っている数少ない人物であり、ウッソはこの小説の新八のロリコン振りを見て悲しくなり、どう思っただけ信じていいのかわからなくなった。

剣心

「最後は拙者でござる。新八殿、貴殿の行いは正直言っただけ見損なっただけござる。侍の身でありながら他人の者を親衛隊の鉄の掟やらで他人の物を奪ったあげくに幼き少女にいやらしく見るとは、もはや貴殿は侍ではない上に剣を握る刺客はないでござる。そなたの墮ちぶりにここにいるゲスト達は失望していて、特に貴殿を信じていたウッソ殿は泣いてしまったでござる……それでも侍を目指すのであれば、攻めてなのは殿は諦め軍曹殿から奪った『リリカルなのはグッツ』を全て返すでござる。そしてウッソ殿に謝罪を申し入れよ！

「……っで、ダメガネ新八の答えは……」

新八「ちよつとオオオオオオオオオオオオ！！！？？」僕が  
なにやったつて言うんですか！？　なんですかこの四面楚歌！？  
なのはちゃん好きになる事がそんなにいけない事なんですか！？」

銀八「なのはを好きになる事じゃなくて、小学生のなのは好きにな  
んのがダメなんだよ。お前ホントにこのままだと口リコン落ちする  
ぞ」

新八「誰がロリコンじゃアアアアアアアアア！」」

新人は銀八にパンチ喰らわせようとする。

銀八「はい、退場！」

ドカ！！

新八「あべしつ！！」

銀八は木刀をバットのように振つて新八をぶつ飛ばした。

銀八「じゃあ『黒神』さん、コラボ長編頑張ってください。それとぱっつあんはいつか侍らしく活躍させようと黒龍の奴も考えてますんで」

近藤「俺としても新八君には侍として戻って欲しい…（涙）」

近藤も涙を流しながら新八の侍復歸を願う。

銀八「次、ペンネーム『ケン』さんから、  
『ケン』あるよ」では。レッツ質問」

新八へ

俺や統夜達は今のお前に失望しています。こちらのなのも同じです。

幼女にいやらしく見て、軍曹から鉄の掟というくだらないもので『リリカルなのはグズ』を奪い侍を目指している事に怒っている事を受け入れてほしい。

もしなのはを諦めず、変態ロリコンオタクのまま侍を目指すのであればそれなりの制裁が来る事を忘れずに・・・

俺自身も新八が変態ロリコンオタクのままというのは我慢ならいんですよ。

万事屋メンバーへ

新八を蒼穹の騎士団で一番厳しい教官二人の所でスパルタに鍛えさせた方がいいと思いませんか？

・ 統夜と遊輔、はやての三人とのガチの模擬戦とかも付けますんで・

アーチャーへ

俺の作品であるHERO・S EPISODEに出て来たデバイスや武器の中で興味のあるものってありますか？

ケン「以上です」『……』

銀八は横目で新八を見る。

新八「変態ロリコンオタクってどう言う意味だコラアアアアアアア  
ア！……！」

新八は怒りを露にして天に向かって叫んだ。

銀八「どうやらまだ認められないようだな」

近藤「新八君……」

近藤は涙を流して落ち込んでいた。  
そして2の答えは……

ソラ・銀時・リリス・セイバー・ライダー・神楽・ライホース・ア  
リア・ヤミ

『『良いんじゃないか（アルか）（ですか）』』

アリア「にゃ……良い」

とあっさり答えた。

近藤「即答だな……」

銀八「まあ、今の新八には良い薬だと思ったんだろ」

銀八も新八を鍛え直して立派な侍に戻って欲しいと思った。  
そしてアーチャーの答えは……

アーチャー「そうだな……中々良い物が多いが、強いて言うならペ  
ンドラゴンブレイドだと言えよう。黒神の所でもそうだったように

あの武器の力は宝具に匹敵するほどだ。それに心装と言う物も興味深い」

アーチャーは顎に手を当てながら冷静に答える。

銀八「ま、あつちの武器多い上に性能が良い物が多いからな」

近藤「うむ、そうだな。では、『ケン』さんは廊下に立っていてくれ」

銀八「次、ペンネーム『月光閃火』さんから、

『1・新八に質問…今閃火が逆鱗を發動して新八を貶した人達に天誅を与えているが、とりあえず止めに行くか？

輝刃「フウ…しかし、懲りない人達もたくさん居るな…ん？この紙は…閃火からの質問が書かれた紙だな…何々？」

2・黒龍さんに質問…もうこれ以上、新八を貶められかねない描写は勘弁してくれないか？このまま新八が貶されたら…俺の理性が擦り切れかねない…（汗）。by・月光閃火

輝刃「…完全に苦痛の叫びだな…（汗）。だが、閃火もそれほど参っている…という事だろうな…。いくらオールマイティーな力を持つと、根本はやはり『人間』だからな…。』…では、1の答え」

新八「いやいや、止めに行きませんよ。折角月光閃火さんが制裁を加えているんですから」

銀八「嬉しそうな顔で言うな…っで、2の答え」

黒龍「とりえあず、自重します」

黒龍は頭を下げ、謝る。

近藤「大丈夫だろうか…？」

銀八「そこは後のお楽しみだな。じゃあ『月光閃火』さんは廊下に立ってなさい」

近藤「次行くぞ、ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』さんから、『一つめは次の歌を聞いた感想はどうでしたか？

二つめは、

美己「ミサカから質問します」とミサカはミサカ10032号です」とミサカは補足してから本題に入ります」

「あなた方はこの腐留苦去主フルコースを食べれますかとミサカは問いつつも食べなければ強制的に食べさせます」とミサカは脅迫します」

……なんと熱い歌だ！！」

銀八「つつか暑苦しい歌なんだけど…」

男塾の歌を聞いた二人はそれぞれ逆の反応を見せる。

ちなみに歌詞添削違反してしまうかもしれないので、あえて歌詞は載せない事にしました。

銀八「つつか2の腐留苦去主フルコースなんて食べるだけねえーだろうが！！」

銀八は顔を真っ青にして叫ぶ。

なにせメニユーが、前菜を白石茱子シンゲンジャーが（ザビツシュ入り）、スープをシャマルが（色は真紫でザビツシュ入り）、魚料理はヒルデ（

べるぜバブ）の魔界料理が、肉料理は吉井晶が（見た目は普通）、メインディッシュはお妙が、デザートは姫路瑞希が（見た目は普通）、ドリンクは乾さんの乾特製ドリンクシリーズがそれぞれ担当しているとしてもないフルコースなのだ。

近藤「あんなの食べたら死んでしまう！！」

近藤も涙目になって叫ぶ。

銀八「はい、『武田軍兵士 清坂 剣麻』さんは初めての質問ありがとうございます。次、ペンネーム『黄色いのなにか』さんから、『近藤に質問。近藤は世間からゴリラって言われていますけど近藤の両親のどちらかがゴリラだったのですか？それともバブルス星からやってきたゴリラだったのですか？』……実際どっちなの？」

近藤「どっちも違うから！！俺の両親はどっちも純然たる人間だから！！」

近藤は必死で自分の親はゴリラではないと主張する。

銀八「ええ、『黄色いのなにか』さん。近藤の両親はどっちもゴリラだったみたいです」

近藤「違うから！！」

銀八「はいはい。そして今回の質問はこれで終わりです」

近藤「今回の質問も個性豊かな質問ばかりだったな」

銀八「個性過ぎるけど……んじゃ、次回もお楽しみにイ」

前回ヤミにセクハラしてしまったボツスのキャラであるルビーは作者であるボツスに半ば無理やり説得させられて渋々ヤミに謝罪とと物体Xを貰いに来た。

仲間であるキラさんとアスランとシンとケンジと美柑とボツスさんのなのはとフェイトとはやてとヤミ（ボツス）を連れて。

ヤミ「なんのようですか？」

ケンジ達を連れてやって来たルビーに敵意剥き出しで睨むヤミ。  
ヤミの視線にビビってしまうルビー。

ケンジ「あ、あの落ち着いて。俺たちはただ物体X……じゃなかった。フェイトの料理を貰いに来ただけだから」

美柑「ルビーも反省してるから許してくれないかな？ ヤミさん」

ルビー「本当にあの時はごめんなさい！！」

二人のフォローを好機と見てルビーは綺麗に頭を下げ謝る。

ヤミ「……………仕方ありません」

少しの間黙っていたヤミはため息を吐く。

それを聞いてさっきまで不安で暗くなっていたルビーの顔がパーッと晴れる。

ルビー「それじゃあ!!」

ヤミ「許しますから私から半径3メートル以内には近づかないでください」

ルビー「それ許したの!? 全然に許された気がしなただけど!」

ツツコンだ後に落ち込みながら渋々ヤミから3メートル以上離れるルビーをなのはやフェイトやはやては慰める。

とりあえずヤミへの許しを貰うと言う関門をクリアしたゲストたちは次のフェイズに移行する。

アスラン「あの、ヤミ。実は僕たちは物体……じゃなくてフェイトの料理が欲しいんだけど、君からフェイトに作ってもらうように頼んできてくれないかい？」

アスランは顔を引き攣らせながら頼み込む。

アスラン自身あんな極悪料理を貰うのはご免だが、これも自分の作者の頼みなので仕方なく、仕方なくヤミに頼み込む。

ヤミ「『アレ』が欲しいんですか? 物好きですね」

キラ「ま、まあ……こっちにも色々と事情が、ね」

キラは頬を掻きながら苦笑する。

ヤミ「……そうですか。では、フェイトに頼んできます」

ヤミは府に落ちないと言った感じだったが素直に承諾した。

一時間後

ヤミ「持って来ました」

ヤミはピンク色のクッキーが入ったバスケットを持って来た。

アスラン「あ、ありがとう…」

アスランは顔を青くしながら受け取る。

ちなみに彼らは待っている間、出て来たアリスに無理やり声優ネタやらされていた。

やらされたモノはというと、代表してキラが『そらのおとしもの』のあのスケベ主人公のセリフを言うと言うかなり恥ずかしいと言うモノだった。

お陰でキラは恥ずかしさやら情けなさのあまり両手で顔を隠して涙流しながら誰にも目を合わせようとはしなかった。

ケンジ「それで最後に頼みたいんだけど、新八や転生者達や無縁に『あるモノ』を渡したんだけど、アイツら居る？」

また前回みたいにヤミに焼却されるのはマズイので、ケンジは誤魔化しながらヤミに聞く。

ヤミは首を横に振る。

ヤミ「彼らならどこかに行ってしまったので今はいません」

ケンジ「そうなんだ」

メンドーな事を回避出来た事に胸を撫で下ろすケンジ。  
あんなもん見せた暁には間違いなく処刑にされていたに違いないからだ。

ヤミ「ですが、無縁の居場所だけは分かります」

ケンジ「えっ!？」

ヤミの言葉を聞いて驚くケンジを尻目にヤミは一つの巨大なモニターをリモコンを使って出す。

そしてモニターの画面が映ると、そこには一人の転生者が必死の形相で逃げているのが映っていた。

転生者「ぎゃああああああああああ!!! こっちこないでエ  
エエエエエエエエエエ!!!」

無縁「ギヤハハハハハハハハ!!! この世界に来たのを後悔する  
んだなア三下アア!!!」

ブツン

無縁が狂った笑い声を上げながら出て来た事で画面が消える。

ゲストキャラ達

『……………』

ゲストキャラ達はそれを見て啞然とした。

ケンジ「いや、アレ誰EEEEEEEE!!??」

自分の知っている無縁とはキャラが思いっきりブレまくっている事に大声を上げるケンジ。

ケンジ「アレどっかで見た事あるキャラそっくりなんだけど!？」

ヤミ「私には分かりません」

ヤミはあっさりと答える。

ちなみにヒントは科学と魔術が交差する世界。

ルビー「と、とりあえずもう帰ろう?　なんか疲れた…」

げんなりとしたルビーがケンジを落ち着かせる。

ケンジ「そうだな…」

ケンジも落ち着き、色々疲労たつぷりと言う感じに同意した。

そしてヤミとさよならしてボッソンのゲストキャラ達は帰って行った。

この後、支配者さんから来たヘドロボ達は銀時達をボコボコにした。ちなみに助かったのは黒龍を脅して身代わりを作らせたアリスとアリアとセフィロスだけである。

後はターゲットにされなかった新八とヤミと沖田とリリスだけであ

る。

あ、全員生きているのであしからず。

## 第二十六訓：お宝は取ったもん勝ち（後書き）

黒龍「いやゝ今回は久々の無縁登場でした。では、早速贈り物コーナーいきます」

『鳴神 ソラさんから銀時LOVEズにトリコの服を着た銀時の写真を、ソラLOVEズにはコックの格好をしたソラの写真』、『なっぺさんからスマツシュボール』、『黄色いのなにかさんから新八とトツシーに1／1なのはとフェイトの人形』

銀時「吼太に言われたんでなっぺにシューー!!」

銀時はスマツシュボールをなっぺに向かって投げた。

新八「なのはちゃアアアアアん!!」

トツシー「フェイトちゃアアアアアん!!!」

二人はそれぞれなのは人形とフェイト人形に抱きつく。

なのは人形『新八君大好きです／／／』

フェイト人形『トツシーさん大好きです／／／』

新八・土方

『ぬおオオオオオオオ!!!!』

銀時「うおっ!? テンション上がりやがった!!」

黒龍「哀れだ…」

次回予告

近藤「『旅行先では意外な出会いが有ったりする』にテイクオフだ  
！！」

第二十七訓：旅行先では意外な出会いが有ったりする（前書き）

黒龍「本当にマジですみません！！　今受験なので時間が削り取られている状態が続いています！！」

銀時「コイツがマトモに投稿できんのは十二月頃になるからな」

神楽「こんな駄作者に付き合っている皆様誠にすみませんアル」

アリス「コイツは拷問してでも早く投稿させるから安心しろ」

黒龍「いやああああああああああああ！！！！」

フェイト「あ……あははは（苦笑）。『リリカル銀魂ライダー』  
始まります」

## 第二十七訓：旅行先では意外な出会いが有ったりする

銀時と土方と恭也がサウナ室で意地の張り合いしていた頃。  
隣の女湯。

なのは達はゆっくり温泉に浸かって、まったりしていた。  
ちなみにアリサの腕に抱えられているユーノはアリサとすずかにも  
みくちゃされてしまつてぐったりとしている。

なのは達がくつろいでいる時、ガラガラ、と女湯の扉が開いて誰か  
が入って来た。

なのは（ん？ 誰か入って来たのかな？）

なのはだけでなく他の面々もその新しく入って来た女性に視線を向  
ける。

実の所、今この女湯にはなのは達以外の客が入浴してなかったので、  
なのは達の興味は自然に新しい入浴者に集まつたのだ。

「うわゝひろゝい！」

なのは（あ、女の子だ。私より年上なの）

さほどの湯気が立っていなかったのですぐに入浴者の姿は確認でき  
た。

綺麗な黒髪をボーイッシュな短髪にした女の子で、はっきり言えば  
美少女だろう。

歳からしてなのはより上だと言う事が背丈で分かった。それに胸の  
膨らみもあるし。

大体歳からして十四、五歳くらいだろう。

（イメージはキングダムハーツのシオン）

黒髪の少女は笑顔で興味深そうに温泉を見渡している。まるで初めての光景を見て興奮している子供のようにだった。

なのは（温泉来た事ないのかな？）

なのはは黒髪の少女の反応を見て、温泉に来た事はないのかと考えた。

そして少女は温泉を見渡した後にゆっくり歩いて体に巻いてあるタオルを取って温泉に浸かる。

黒髪の少女「気持ち〜」

緩んだ顔で嬉しそうに温泉に浸かる少女。若干頬がほんのり赤く染まっている。

黒髪の少女が気になったなのは近づいて声を掛けた。

なのは「気持ちいいですか？」

黒髪の少女「ふえっ!？」

突然声を掛けられて少女は驚いた顔をする。

それを見たなのは慌てて謝る。

なのは「ご、ごめんなさい!! 驚かすつもりは無かったの!」

頭を下げて謝るなのはを見た黒髪の少女は戸惑いながらも何でもないと言う風にフオーする。

黒髪の少女「だ、大丈夫だよ！　つい温泉に夢中になって、声を掛けられた事に少しビックリしただけだから！」

黒髪の少女の言葉を聞いてなのは「良かった」と安堵して胸を撫で下ろす。

そんななのは黒髪の少女は顔を近づけながらマジマジと見ている。

なのは「……あの、私の顔に何か付いていますか？」

黒髪の少女の視線に気づいたなのは苦笑しながら聞く。

黒髪の少女はハツとなって顔を離しながら慌てた様子で言う。

黒髪の少女「ご、ごめん！　知り合いにそっくりだったからつい……」

申し訳なさそうに言う黒髪の少女の言葉を聞いたなのは興味深そうに聞く。

なのは「私に良く似ているんですか？」

黒髪の少女「うん、とっても……」と言ってもあなたよりずっと大人なんだけど」

黒髪の少女は苦笑しながら言う。

なのは黒髪の少女の言葉を聞いて「へえ」と興味深そうな声を漏らす。

なのは「一度会ってみたいなあ」

なのは言葉を聞いて黒髪の少女は視線を逸らしながら気まずそう

にしている。

なんて言うか、なのはに似ていると言う女性の話題に触れなくなさそう感じた。

その後、なのははさっき聞こうと思っていた質問をする。

なのは「……それで、温泉はどうですか？」

黒髪の少女「温泉？……うん。思っていたよりもずっといい所だから着て良かったあ」

黒髪の少女は笑顔で答える。

なのは「温泉初めてなんですか？」

なのはは黒髪の少女の言葉を聞いて首を傾げる。

黒髪の少女「普段はその……事情があつてこう言う場所には中々これなくて」

なのははの質問を聞いた黒髪の少女は頬を掻きながら少し目を逸らして言い難そうに口籠る。

なのは「あ、別に良いですよ無理に話さなくて！」

なのはは言い難そうにしている黒髪の少女の様子に気づき、慌てて喋らなくて良いと言う。

なのはと黒髪の少女がそうこうしていると、親友であるなのはが知らない女の子と話しているのに気づいたアリサとすずかもやって来る。

アリサ「なのは、誰と話してるの？」

アリサは不思議そうな顔で首を傾げながらなのはに近づいて聞く。

すずか「その人は？」

なのは「アリサちゃん。すずかちゃん」

自分に疑問の声で聞いた来た二人に気づいたなのはは二人の名前を言う。

ちなみにさっきまでアリサの腕の中で顔を真っ赤にしてぐったりしていたユーノは今、美由紀に捕まって遊ばれている。

見知らぬ二人が来た事で黒髪の少女は首を傾げる。

黒髪の少女「？」

首を傾げる黒髪の少女に気づいたなのはは自分の友達を紹介する。

なのは「あ、この二人は私の友達のアリサちゃんとすずかちゃんなの」

なのはに紹介された二人は挨拶をする。

すずか「どうも」

アリサ「よろしく」

黒髪の少女「う、うん」

少しぎこちない感じに黒髪の少女は返事をした。

そしてアリサはなののはに対してさっきした質問をする。

アリサ「なののは、さっきから気になってたんだけど、この人は？」

なののは「えっと……あつ！」

アリサに質問されたなののは少し考える仕草をした後、何かに気づいて声を漏らす。

アリサ「ど、どうしたの？」

なののは声を聞いて少し戸惑っているアリサ。ちなみに他の二人もアリサ同様なのはの声に戸惑っている。

なののは「……まだ、名前聞いてなかったの……」

なののはの言葉を聞いてアリサとすずかと黒髪の少女も呆れたように首をガクツと落とす。

アリサ「あんたあれだけ話しといてまだ名前聞いてなかったの!？」

間の抜けたなののはの言葉を聞いて少し怒ったアリサは両手でなののはの頬を引っ張る。

まあアリサとしてもなののはがたまにドジやらかしてしまう事は小学1年の時からの付き合いなので知っているが、やはり怒る時は起るようだ。

なののは「いひゃい！いひゃいほ！ありはひゃん!-!」

すずか「あ、アリサちゃん落ち着いて……!」

痛がるなのは少し不憫に思ったさすがアリサを宥めようとする。その光景に黒髪の少女は少し汗を流して呆然としていたが、少し経って可笑しいのかクスツと笑みを零した。その姿をなのは達が気づく事はなかったが……。

そしてすずかに宥められて落ち着いたアリサはなのはの頬を引っ張るのを止める。

アリサ「まったく……ホントなのはは間が抜けてるわね」

ため息を吐きながら言うアリサの後ろには少し赤くなった頬を涙目で擦っているなのはをすずかが苦笑しながら慰めていた。

アリサは黒髪の少女に顔を向ける。

アリサ「じゃあ改めて自己紹介するわね。私はアリサ・バニングスよ」

性格が反映しているのか、少し強気な感じに言うアリサに続いてなのはとすずかも自己紹介する。

なのは「私は高町なのはなの。よろしくね」

すずか「私は月村すずかです。よろしくお願いします」

笑顔で挨拶するのはとすずか。

そして自己紹介をした三人に釣られたように黒髪の少女も自分の名前を言おうとする。

黒髪の少女「アタシは……」

だが、自分の名前を言う所で口ごもり、どこか悩んだ様子を見せる。なんて言うか、名前を言うかどうか迷っている感じだ。

なのは・すずか・アリサ

『？』

三人は黒髪の少女が名前を言わない事に不思議そうな顔をする。

黒髪の少女は少し思案した後、意を決したようにして改めて自分の名前を言う。

黒髪の少女「アタシの名前はシオネ。よろしく」

シオネはぎこちない笑みを浮かべながら挨拶をした。

そして女の湯の隣の男湯。

新八（気持ち良いな。こんな立派な温泉なんて行った事ないし、得しっちゃったなあ）

新八は本当にリラックスした顔で温泉に浸かっていた。

こんなに立派な温泉に来たのは新八も初めてなのだからこつちも気持ち良さそうな顔をするのは仕方ないだろう。

なんて言うか、今までの疲れが抜けていく感じだ。

実の所、新八は過去に銀時や神楽や姉であるお妙と一緒に『仙望境』  
と言う温泉宿に行った事があるのだ。

だがそこは有名な霊界スポット。つまりスタンド（これは銀時が勝手に付けた）、っと言うか霊が集まりやすい場所なのだ。

しかも新八には霊視と言う、つまり霊を見る力があつたようで、とてもゆつくり温泉になど浸かれず、挙句の果てには霊に取り付かれて十万十四歳の閣下になつてしまったと言つとんでもない思い出があるのだ。

正直そんなヤクザより遙かに怖い存在が集まるような恐怖の温泉宿とこの海鳴温泉じゃリラックスできる差は天と地だ。

とまあこんな具合に新八がゆつくりと体の疲れを温泉と言う場所で癒すのはかなり久しぶりなのだ。

新八（それにしても、近藤さん。銀さんたちを呼びに行つて帰つてこないけど、どうしたんだろ？）

さつき近藤はサウナ室から帰つてこない銀時と土方と恭也を呼びに行つが、中々帰つてこないのだ。

近藤が帰つてこない事に不思議がつている新八の耳にある声が聞こえてくる。

「お前なにやってんだよ！！」

新八（ん？　なんだろ？）

聞こえてきた声が気になった新八は声がした方を見る。

黒髪の青年「ん？ 工事してんだよ」

少し天パの掛かった黒髪の青年が腰にタオル巻いた状態で、女湯と男湯を隔てている壁に工事現場で良く見るようなドリル系の重機を使って穴を開けようとしていた。

赤髪の青年「いや明らかに覗きしようとしてんだろ！！ 馬鹿かお前は！！」

そんな黒髪の青年にツツコミを浴びせるのは、ツンツンした比喻表現で言うなら髪がバーツとした感じのちよつと荒い感じの赤髪を後ろに傾けた青年。そして顔には緑色のヒシ形の模様が両目の下にある。

（イメージはキングダムハーツのアクセル）

エクセル「バツキャロー！！ 良いか？ 温泉来たら女湯の覗くのは定番だろうが！ 理解したか？」

赤髪の青年「なんだよその修学旅行みたいなノリは！！ つうか目立つ事してんじゃねえーよ！！ サイラスに目立つ事するなって言われたのもうお前は記憶してないのか！？」

エクセルにアクセルと呼ばれた青年は青筋浮かべながら怒鳴るようにツツコミをする。

アクセル「とにかくそれ止める！！」

そして中々ドリルを手放さない馬鹿にアクセル苛立ったのか、エ

クセルが持っているドリルを取り上げようとするが、エクセルは抵抗する。

エクセル「やゝめゝろゝよゝ！　コレなかったら俺はどうやって女湯覗くんだよ！？」

アクセラル「だから覗くんじゃねえー！！　そもそもドリル使って女湯覗こうとするバカなんてお前くらいだー！！」

新八「……あの、何やってるんですか？」

妙な三人の客の奇行を見て気になった新八は近づいて戸惑い気味にアクセラル達に声を掛ける。

声を掛けられたアクセラルとエクセルは動きを止めて新八に顔を向ける。

アクセラル「……いや、あの……」

新八「あの、じゃなくて、何やってたんですか？　もしかして女湯を覗こうとしてたんですか？」

アクセラル「……もしかして、見てたか、さっきの？」

アクセラルの問いを聞いて新八は無言で頷く。

それを見たアクセラルは汗をダラダラと流す。

そしてアクセラルはパン！　と両手を合わせると頭を下げて焦りながら弁解する。それを見た新八は少しビクリする。

アクセラル「た、頼む！　今は見なかった事にしてくれ！　実は内の連れが温泉来たせいで少しはしゃじまったんだ！　二度とさ

せないようにするから、旅館の人には言わないでくれ！」

新八「え、えーっと……」

新八は頬を搔きながらどうしようか考える。

なのはの裸を見られなくなつた新八としては覗きをしようとしていたから注意して止めようとしていたのは事実だ。だが、旅館の人に言つて警察に連行してもらおうとまでは思つていなかったし、まさかこうも早く罪を認めて頼み込んでくるとは予想外だったので、どう対応したらいいか少し困つてしまつたのだ。

どうしようか考えている新八にエクセルは顔を近づけてガン飛ばしながら言う。

エクセル「おい眼鏡。さっきの事は誰にも言うなよ。もし誰かに告げ口したら、このドリルでお前の頭に風穴開けるぞ？」 あくん？」

ズガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

エクセル「ぎゃあああああああああああああああ  
！！！！！！」

アクセルが冷めた視線でエクセルの頭にドリルで風穴開ける。そのためエクセルの頭から鮮血が噴射する。

ドリルで頭を彫られている馬鹿はあまりの痛みに悲鳴を上げる。

その光景を新八は失笑しながら見ていた。  
そしてアクセルが気絶してしまったエクセルの髪を引っ張っ

てやって来る。

アクセル「じゃ、じゃあ俺達はこれで」

アクセルはそのままエクセルの髪を引っ張ってそそくさと温泉から出て行った。

ちなみにエクセルは気絶したままなので髪の毛引っ張られてズルズル、と引きずられている。

新八（なんか、変わった人たちだな……）

新八は呆然としながら温泉から去って行くのを見ていた。

その後すぐに銀時と土方が温泉をとくに出て、恭也がミイラみたいに干乾びているを知って大慌てした。

なのはとアリサとすずかは充分に温泉に入ったので、温泉を出て浴衣を着て廊下を歩いていた。  
ユ一ノはなのはの肩に乗っている。  
なのは達が温泉は良かったなど、楽しそうに温泉の感想を話している…

金髪の少年「何か面白い事ないかな」

なのは達の正面を薄い金髪の小学生くらいの少年が後頭部に両腕を回して少しつまらなさそうに歩いていた。

容姿からして活気そうで落ち着きのない感じの子供だ。

（イメージはメタルファイトベイブレードの天童遊<sup>てんどう ゆう</sup>である）

金髪の少年「ん？」

金髪の少年は自分の方に楽しそうにやって来るなのは達に気づく。だが、金髪の少年の視線はなのはでも、アリサでも、すずかでもなくなのはの肩に乗っているフェレットであるユーノに向いていた。

金髪の少年「うわ〜」

金髪の少年はユーノを見ると見る見るうちに瞳をキラキラと光らせる。

その様はまるで、珍しい物を見つけて興奮する子供のようにであった。そして少し興奮気味になのは達に近づく。

金髪の少年「ねえねえ！」

なのは「ふえっ!？」

いきなり近づいて来た金髪の少年に驚くなのは。

すずかやアリサも近づいてきた少年を見て戸惑っている。

少年は驚くなのはを気にせずにユーノを指差す。

金髪の少年「それイタチでしょ？ 少し僕に触らせてくれない!？」

なのは「え、えつと……」

目をキラキラさせながら聞いてくる少年に戸惑うなのは。いきなりの事だったので、どう答えて良いか分からなかったのだ。

そんななのは変わりにアリサが不機嫌そうに声を掛ける。

アリサ「ちよつとアンタ！ 初対面の相手に何？ いきなりユーノを触らせるとか。なのはが困ってるじゃない！ それとユーノはイタチじゃなくて『フェレット』って言うの！」

すずか「あ、アリサさんちゃん落ち着いて……！」

眉間に皺を寄せて文句を言うアリサをすずかが宥める。

そんなアリサに構わず自分のペースで話す少年。

金髪の少年「へえ、そのイタチってユーノって名前なんだ」

関心したように言う少年に対してアリサは更に不機嫌になる。

アリサ「だから、イタチじゃなくてフェレット！ それと人の話はちゃんと聞きなさい！」

プンス力怒るアリサに気づいた少年が笑顔で後頭部を掻きながら言う。

金髪の少年「あ、ゴメン。僕、イタチみたいな珍しい動物は中々見た事なかったらか」

アリサ「……アンタ一発殴りましょうか？」

何度訂正してもイタチと言う少年に対して頭にキタアリサが握り拳を作る。額に青筋も浮かんでいる。

すずか「あ、アリサちゃん本当に落ち着いて！ あの子だって悪気

がない、はず……」

青筋を浮かべている上に目元を黒くしているアリサをさすが慌てて羽おい締めして止める。

ただ、言ってる事には自信があまり見受けられなかった。

アリサ「いや、間違いなくコイツは私をコケにしてるわ。離してす  
ずか。一発ぶん殴らない気が済まないから」

なのは「あ、アリサちゃん！ 暴力はダメなの！」

そこでなのはも加わってなんとかアリサを宥めていた。

金髪の少年はアハハハと笑っていたので余計にアリサの怒りが増大した。

ちなみに、この金髪の少年普段から軽い感じで、言っしまえば無邪気なのである。

だから本人にはほとんど悪気ない。

そして落ち着いたのだが、少し疲れた感じになったアリサはなのはに顔を向ける

アリサ「……もう良いわ。なのは、それでこの子にユーノを触らせてあげるの？」

アリサに聞かれたなのはは少し考える仕草をした後に「うん」と頷く。

とりあえず害はなさそうなのでユーノを攫わせてもなんら問題はな  
いと思ったのだろう。

そしてユーノを両手に持って金髪の少年の前に出す。

なのは「優しくね？」

金髪の少年「うわゝ！ やったー！！」

少年は嬉しそうに目を輝かしてユーノを手取る。

少年の手にあるユーノは少し汗を流していた。

なのは（ごめんね、ユーノ君。少しの間だけ我慢してて）

なのはは心の中でユーノに謝り、エールを送った。

金髪の少年「マフラー」

少年はユーノの体を伸ばして首に巻いて言葉通りマフラーのようにする。

どうやら喜び過ぎてなのはの言葉は聞いていなかったらしい。

ユーノは体を引っ張られてキューキュー！と鳴いている。

それを見てなのは達は苦笑して、心の中でユーノを心配していた。

そしてなのは達のいる廊下に一人の女性が歩いていた。

日本人には似つかわしくはないオレンジ色の髪をし、グラビアアイドルよりも上だと言えるくらいのスタイル抜群の女性だ。

フェイトの使い魔であるアルフだ。今は狼の姿ではなく、人間の姿になっている。

アルフ「さうて。一風呂浴びようかね」

偶然か必然か、ジュエルシードの反応が海鳴温泉に近くにあったのだ。

そのためにフェイトやナナシと一緒にこの温泉旅館に泊まりに来たのである。

そして浴衣を着ているアルフは温泉に入るために廊下を歩いていた。

アルフ「ん？ あれは……」

温泉を楽しみにしているアルフの前になのは達の姿が目映った。それは前のジュエルシードの回収の時に居た魔導師である事に気づく。

アルフ（あの子はこの前フェイトの邪魔をした白い魔導師じゃないか！ まさかアイツも此処に来ていたなんて……もしかしてジュエルシードに気づいて……）

なのはが家族旅行でこの海鳴温泉旅館に来た事を知らないアルフは勘違いをする。

実際はなのはとユーノはこの近くにジュエルシードがある事をまったく知らない。

アルフ（なら、忠告しといてやるか）

アルフはニヤリと笑みを浮かべて尖った歯を見せた後になのはに近づく。

そしてユーノを弄っている金髪の少年に近づくと同時に声を掛ける。

アルフ「ちょっと良いかい？」

アルフの声に反応したなのはとアリサとすずかの視線が声の主であるアルフに向く。

そして自分の後ろから声が聞こえた少年も振り返ってアルフに顔を向ける。

しかもそれだけではなく、少年は後ろにいたアルフに驚きもせず、まるで自分の後ろに居たのが分かっていたかのように笑顔で問い掛ける。

金髪の少年「何？ お姉さん？」

アルフ「!!!!????」

少年に声を掛けられたアルフに悪寒が走った。

それは狼であるアルフの野生の勘なのか、それとも動物の本能なのかは分からない。

だが、アルフの本能ははっきりと告げていた。

——目の前の少年は危険だと……。

アルフの軽快信号が鳴り響き、アルフは少し顔を青くしてしまう。そして汗を流しながら言う。

アルフ「い、いや！ な、なんでもないよ！ つい知り合いと間違えちまって！ 悪かったね！ あはははは……」

乾いた笑い声を出しながらアルフは温泉の方に向かった。そんなアルフの様子を呆然と見ていたなのは達。

そしてアリサは少し怪訝そうな顔で言う。

アリサ「なんだったのかしら？」

すずか「さあ？」

アリサとすずかは首を傾げる。

そして少年はなのはにユーノを渡す。

金髪の少年「イタチありがとう。楽しかったよ」

なのは「う、うん。あと、何度も言うけどフレットなんだけど…」

なのはは苦笑しながらユーノを受け取る。

少年は笑顔でお礼を言い、そのままなのはの横を通る。

その時、少年はなのはの耳元で呟いた。

金髪の少年「……またね、エリス」

なのは「えっ？」

なのはは呆けた声を出し、振り返って歩いて行く少年を見た。

アリサ「どうしたの？」

なのは「う、ううん。なんでもないの」

首を傾げながらなのはの行動を疑問に思うアリサになのはは首を振って問題ないと言う。

アリサは少し納得してなそうだったが、特に大した問題ではないと

思ったのでそれ以上は追求しなかった。

アリサ「じゃあ卓球しに行きましょう」

すずか「そうだね」

なのは「うん」

アリサの言葉に二人は頷いて卓球のある場所に向かう。  
その時なのはまた後ろを振り向いて思った。

なのは（“エリス”って誰なんだろう？）

名前を間違えた？ いや、自分は一度も名乗っていない。それにアリサが自分のことを“なのは”としっかり呼んでいる。

例えフレットであるユーノのことを何度訂正してもイタチだと言ってしまうような物覚えが悪い少年でも、さすがにまったく違う名前で呼ぶほど頭の悪い子とは思えない。

なら、何故『エリス』などと言う言葉が出てきたのか。

なのはには少年の言葉が何を意味していたのか分からなかった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！』』

銀八「はゝい。今回も質問コーナー始めまゝす」

フェイト「今回のアシスタントを務めるフェイト・テストロッサです」

フェイトはペコリと礼儀正しく頭を下げる。

銀八「相変わらず律儀な奴だな」

フェイト「アハハハ……リニスに礼儀作法はきっちり教えられましたから」

フェイトは苦笑して頬を掻く。

銀八「まだ出てないキャラの名前言っちゃったな。まあ良いけど」

銀八は、はあ……、と息を吐いて間を空ける。

銀八「んじゃ、早速質問いくぜ。ペンネーム『月光閃火』さんから、  
『1・新八に質問……というか勧めだ。とりあえず、閃火に視力が良くなる波動を掛けてもらえ。閃火なら快くやってくれるぞ？

ああ……とりあえず人並みに視力を良くしてやるからよ。次は俺からだ。

2・黒龍に質問……やっぱり新八の為にも新八のカップリング相手となるキャラ、作ってやろうかな？

輝刃「そういえば、閃火はオリキャラの設定生成が得意だったな…」  
「……だからあの新八<sup>メガネ</sup>彼女はいるから2は良いです」

フェイト「なんで質問されていない銀八先生が答えるんですか!？」

勝手に2の質問に答えた挙句、却下発言してしまう銀八にツツコムフェイト。

銀八「だって俺が彼女いねえのにあのロリメガネに彼女できんのはかなりム力つくんだよ!!」

フェイト「あなたホントに大人!？」

思いつき私情をぶちまける銀八にフェイトは呆れる。  
とは言え、さすがにこのまま答えないと言うのもアレなので、黒龍が出てきて2の質問に答える。

黒龍「ええつと、じゃあオリキャラの設定を贈ってくれませんか？  
見て判断しようと思います」

銀八「チッ……」

黒龍の言葉を聞いた銀八はあからさまに舌打ちする。それほど新八に彼女ができるのが気に入らないと言うか、嫉妬しているようだ。  
それをフェイトは苦笑して見ていた。  
そして1の質問された新八は……

新八「あ、じゃあお願いしても良いですか。やっぱり視力は良い方が良いですし」

とお願いする。

銀八「あつ？ 何言つてんだお前？ そんな事したらマジでお前キヤラが立たなくなつて、地味度が更に増すぞ」

新八「地味度つてなんだ！？ 良いでしょう！！ 目が良くなりたいつて思つたつて！！」

とは言え、新八から眼鏡を取ったら本体がなくなってしまうのてい  
ろんな意味でヤバイ事態になってしまう。

新八「僕の本体は眼鏡じゃねええええ！！！！」

地の文にツツコム新八。

銀八「とりあえず……『月光閃火』さんは新八の視力を良くしないで  
良いです。本当にどうしようもないくらい地味になってしまうの  
で」

新八「実も負担も無いこと言わないでください！！」

酷い言われように新八はつい涙を流してしまう。

さすがに今の新八の扱いを見てフェイトも少し同情してしまった。

銀八「じゃあ次。ペンネーム『真王』さんから、

『レーティア』じゃあ質問タイムよ。『自分になりたい職業つて何  
？あ、ソラの妻つてのはなしの方向で』」

ギルシア「今度は俺だ『自分がスマブラキャラでたとえるなら誰な

んだ？』」

リル「あゝ」

レーティア「どうしたの？」

リル「ああうにやむにやむあぶぶばびぶばゝ」

銀時「どんな呪文唱えてるんだよ？」

レーティア「『子育てするならどんな子にするの？』だって」

銀時「え？何で分かんのか？お前エスパー？」

レーティア「オ・ヤ・コの愛よ？」

真王「そう言う解釈でいいのか？」『……スゲーな親子の愛……』」

銀八は常軌を逸した親子の愛に驚き半分呆れ半分と言った顔をする。

フェイト「子供を育てるなら優しい子に育てたいなあ……」

3の質問でフェイトはソラと結婚をして子供のいる暖かい家庭を想像して頬を赤く染める。

銀八「おゝい、帰ってこゝい」

自分の世界にとっぷり浸っているフェイトに声を掛けるが反応が無い。

フェイトは時折頬を抑えて顔を真っ赤にしながら顔を左右に振った

り、なんか知らないが“えへへへ”とニヤけながら涎垂らしている。

銀八「ダメだこりゃ……。そんじゃ、1はとりあえずなのはに答えてもらいます。一応職就いてないし」

なのは「銀さんのお嫁さんなの!!!／＼／」

顔を真っ赤にしながらなのはが断言する。

銀八「ああそうですかい。カーツペ!!」

あからさまに嫉妬した銀八は床に唾を吐く。  
そして2の質問は……

銀時「リンクじゃね?」

新八「僕はルイージさんでしょうか。雰囲気似てますし」

神楽「私はマリオネ! 私の心が真っ赤に燃えるアル!!」

桂「俺はカツオだ!!」

銀八「いや、カツオなんてキャラいねえよ。いんのはお前の頭の中だろ」

銀八は冷ややかに桂にツツコム。

銀八「そんじゃ、『真王』さんはコラボ長編頑張ってください」

銀八がそう言った後、自分の世界から帰還したフェイトが次の質問を読む。

フェイト「次いきます。ペンネーム『ボッスン』さんから、  
『ボッスン』質問です」

ヤミちゃん、君はルビー君が男だって分かっていましたね。ルビー君はTOLOVEるのモモさんに似ているのに。ルビー君が男だって分かったのはどうしてですか？

無縁、君の一番好きなライダーとオーズ以外になりたいライダーは何ですか？ネタバレになるなら答えなくてもいいです。

新八君と転生者の皆さん、黄金のキバにトラウマを持ちましたか？

……た、確かにあの時のすずかは怖かった……」

フェイトはキバになって転生者を血祭りに上げたボッスンさんの所のすずかを見て涙目になる。

銀八「こっちのすずかの大違いもいいところだよな」

銀八は冷や汗流しながら同意する。

そしてそのめちゃくちゃ怖いにボッスンさんのすずかに制裁を受けた新八は……

新八「……………」

顔を真っ青にしてガタガタ震えていた。

そしてモニターが現れてそこにはボッスンさんのすずかに襲われた転生者たちが映っていた。

転生者　　すずか怖いすずか怖いすずか怖いすずか怖い  
すずか怖いすずか怖いすずか怖いすずか怖いすずか怖い  
すずか怖いすずか怖いすずか怖いすずか怖い

銀八「めちゃくちゃ怖がつてんですけどオオオオオオオオオオオ  
オ!!!!!!」

銀八が顔を真つ青にして叫んだ。

フェイト「じゃ、じゃあ1で質問されたヤミの答え」

フェイトは顔を真つ青にしながら質問されたヤミに答えを促す。

ヤミ「直感です」

銀八「めちゃくちゃアバウトだなおい！」

フェイト「でも、なんとなく納得できちゃうのはなんでだろ？」

フェイトは苦笑いしながら首を傾げた。

そして2で質問された無縁は……

無縁「なりたいライダーとかねエよ」

と小指で耳をほじくりながら答えた。

銀八「なんつつか、アイツのキャラが掴めねえな」

フェイト「そ、そうですね」

フェイトは苦笑して相槌を打つ。

銀八「んじゃ、『ボッスン』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『天破』さんから、

『破』そうだったそうだった。そんじゃ、まずは新八君、銀さん、そっちのなのはさん、そっちのフェイトさん、無縁君に質問です。

『次の中から戦って勝てると思う人を選んでくださいw

？相手がE×クラスの敵だと仮定した場合の無還者

？破壊衝動発動状態のドーナ・クライオン

？『骸達の狂躁曲』発動状態のリン・アルデイス

？満月時（不死&常時魔力回復状態）のメビア・アルデイス…のどれかで『」

春斗「俺の目がおかしくなければ、どれを選んでも秒殺される気がするが」

天破「一応コメントも届いてるよ？

『無還者』敵の警戒度をE×へ上昇。魔力完全開放・能力全開放・障壁全開。 “ 任務開始 ” 『」

？ドーナ「きゃはは？ 貴方はわたしを殺したい？ わたしは貴方を苦しめたい！ ほら、選んで？ バラバラにされて家族に届けられるか、虚数空間で餓死するか、ちよつとずつ水で溺れ死にたいか

「！」

リン「ほら始めましょ♪ 塵掃除の時間ですっ♪ ほら剣持って♪  
銃持って♪ 鋸持って——五月蠅い塵を、殺しましょっ？」

メビア「死を恐れぬ者は弱い。そして護るべき者を持つ者は更に弱い。見せてあげよう、世界最後の真租であるこのメビアの戦い方を。——そういえば君の大事な人は、今家で仕事してる頃だよね？」

「以上です」……いや、どんな無茶振り質問！？

生粋のチート軍団と戦えなんて言うとしても質問に銀八は驚く。そして質問された新八と銀時となのはとフェイトの答えは……

新八・銀時・なのは・フェイト

『どれも勝てる気がしなんですけどオオオオオオオオオオオオ！』

「！！？？？？」

と叫んだ。当然の反応だ。

そして無縁は……

無縁「ま、メビア辺りが妥当だろオナ」

と実にメンドーそうに答えた。実際本人はあまり興味ないらしい。

銀八「無縁は何考えてんだかマジでわかんねえ……」

勇気か、それとも馬鹿か、なににせよ無煙の考えは理解できない銀八だった。

銀八「そんじゃ『天破』さん。黒龍は投稿キャラの登場を楽しみにしています」

フェイト「次、ペンネーム『支配者』さんから、  
『支配者』では、

松平のつつあんへ

なのはとフェイトがあなたの娘の事をブサイク婆と罵っていました。  
如何しますか？（黒笑）

ヤミちゃんへ

タイヤキの他に好きな食べ物がありますか？

銀時、なのは、フェイト、新八、ソラ、セフィロスの六人へ

地獄男という私の部下があなたたちに”地獄汁”というものを飲ませようと襲い掛かっています。如何しますか？因みに地獄男は無敵です。そして”地獄汁”はかの”シャマパイの数百倍の不味さです。  
（黒笑）」「……なんで嘘言うのオオオオオオ！！！」

とんでもない嘘質問にフェイトは涙を流して叫ぶ。

だが、それも虚しく質問を聞いた松平はずんずんやって来る。

松平「……………」

なのは「い、いめんなさい……！」

フエイト「こ、これは私たちが言ったんじゃないんです！！　だから許してください！！」

二人は必死に松平に弁解する。さすがの二人の松平の威圧感に負けて謝る事しかできなかった。

もうダメだと思った二人だが……

松平「いやいや。おじさんもお譲ちゃんたちみたいな可愛い子に手を出すほど腐っちゃいないから安心なさい。ま、家の娘のことあんま悪く言わないでくれればそれでいいからよ」

松平はそう言っただけなのはとフエイトの頭をポンポンと軽く叩いた後に去って行った。

銀八「ああ、まああの破壊神は基本女の子には優しいからな。良かったなお前ら。美少女で」

銀八にそう言われた二人は緊張の糸が途切れてへなへな座り込む。そして2で質問されたヤミの答えは……。

ヤミ「……ソラの手料理です／＼／＼」

フエイト「私だってソラの手料理が好きだもん！／＼／＼」

恥ずかしそうに言うヤミに対抗してフエイトも顔を赤くして主張する。

銀八「はいはい。良かったな」

銀八はそれをウンザリした感じに嫌味を言う。

銀八「つで、3で質問されたお前等の感想は？」

銀時・新八・なのは・フェイト

[illegible]

四人は頭を抱えて涙を流し、

ソラ「……」

ソラは無言で顔を青くし、

セフィロス  
フツ  
……

セフィロスに至っては何か微笑を浮かべていた。

銀八「あの墮天使だけ考えが謎だ……。とりあえず、『支配者』さんはドSな質問とゲストはほどほどに」

そして地獄男に地獄汁飲まされようとしているフェイトはまだ顔を青くさせながら次の質問を読む。

「フェイト「つ、次いきます……。ペンネーム『白騎士君』さんから、白騎士君」おお！オーズが出るとは。では質問します。」

1・無縁に質問。オーズになれるならガンダムシリーズやスーパーロボットシリーズにもなれるんですか？

2・銀さんに質問。マジンカイザーに勝てますか？

『以上です』

レナード「今度は俺からの質問だ。」

3・黒龍さんに質問。もし闇鍋やるなら俺と作者、銀八先生を連れて来ます。後、こっちのフェイトの料理も持って来ますので。

『以上だ』『……』

無縁「さアな」

1の質問にあまり積極的に答えない無縁。どうやらあまり自分の情報は明かさないようだ。

そして2の質問に銀時は……

銀時「いや、無理じゃね？」

と若干引き気味に答える。確かに大きさに無理がある。

銀八「それで、3の質問はどうなんだ黒龍？」

黒龍「まだ闇鍋とかそう言うのは考えていませんけど、もしかしたら閑話休憩みたいな感じに他の小説のゲストも交えてやるかもしれません」

どうやら、そう言うアイデアが今の質問で生まれたようだ。

銀八「絶対力オスになる予感大だな。そんじゃ、『白騎士君』さんは廊下に立ってなさい」

フエイト「次です。ペンネーム『なつぺ』さんから、  
『なつぺ』じゃあ今回の質問。銀さんの木刀はなんで折れないんですか？ 身体能力がどうか、技術がどうかというレベル超越して  
るくせに、何の仕掛けも無いとか有り得ないです」

ベス「ギャグ世界の住人に理屈を求めても意味ないでしょうに」

なつぺ「そういうこと言っちゃいけない。無い理屈を無理矢理求めるのが今回の目的なんだから」

吼太「……………何の意味が？」

なつぺ「意味なんてない。今回はドがつくほど苦いお茶を用意しました。これ一万杯ぐらい超軽く飲み干せないと男とは言えませんよねー？ 特に、銀さんと土方さんと恭也さん。…………まさか飲めないとか言いませんか？ あ、ついでにもう一つ質問。三人のお茶飲んだ感想とか聞きたいです。ではではこの辺で！」あ、確かにそれは私も気なる」

フエイトとしても銀時の木刀である『洞爺湖』の異常な強度に対して興味を持っていた。

銀八「ええ、銀時の木刀とはある惑星の金剛樹と言う木から作られているからです。後は自分で調べてください」

フエイト「かなりアバウトだ！？」

銀八「良いんだよ。それで、あの三人のは様子はと言うと…………」

銀時「ニガブハッ！！」

土方「オブハッ!」

恭也「ブウウーーーーー!!!!!!」

フェイト「全員凄まじい勢いでお茶を吐き出してるんですけど!」

銀八「相手より一滴でも多く飲もうとした結果だな。ま、俺としちゃ面白いけどな」

銀八はニヤニヤしながらお茶を飲んで苦しむ三人を見ていた。

銀八「そんじゃ、『なっぺ』さんはお茶どうもありがとうございました」

S 行なったなっぺにお礼を言う銀八を見てフェイトは苦笑していた。

銀八「次、ペンネーム『ケン』さんから、

『ケン』立派だね。んじゃ質問しますかね」

九兵衛へ

軍曹からリリカルなのはグッズを訳の分からない掟で奪った新八をどう思いますか?

犯罪行為をやってるから・・・お妙の名誉を守る為に喝を入れてやってください。

黒龍さんへ

恋姫無双の主人公である実力は新八より劣る一刀は出るのですか?

もし出るなら弄られキャラにした方がいいと思います。第二の新八キャラとして・・・

なのはとフェイトへ

第二十六訓：お宝は取ったもん勝ちの後書きにて、なのは人形を新八が、フェイト人形を土方が発情して、抱きついていました。手遅れになる前にO H A N A S H Iしてあげてください。彼らもそれで目が覚めると思いますから。

ケン「以上です」……たぶん間違いなく九兵衛は新八を侍失格だと言いますね。それと、一刀は出す予定はないそうです」

そして3の質問を聞いたなのはとフェイトは…

なのは・フェイト

『『新八<sup>さん</sup>と土方<sup>さん</sup>は最低です』』

と新八と土方を軽蔑の籠った眼差しで見るフェイトとなのはだった。

銀八「ギャハハハハ！！！！あのマヨラーも侍失格だな！！！」

新八はともかく、土方の株が下がったことに大笑いする銀八。  
よほど面白いようだ。

銀八「そんじゃ、『ケン』さん。黒龍はソラとアリスの登場を楽しみにしています」

フェイト「次。ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』さんから……  
『美己』坂田銀時、土方十四郎、高町恭也の三人に質問。あなた



す。これはどういうものかという、ありとあらゆる特殊回避、特殊防御、チート能力によるダメージ回復、攻撃自体を無かったことにするetc・・・などを一切無効化するものです。これはソラやセフィロスでも防げません。  
では発射・・・あ、ターゲット設定が作者を含めたメンバー全員になつて・・・ま、いつか。『……なんつうもん贈りつけてくんの!?』

フエイト「最悪だよオオオオオオオオオオオオ!!!」

とんでもない物が来ることに涙を流すフエイトと顔を青くする銀八。そしてこんな状況で動き出したのは新八だった。

新八「作者ガード!!!」

新八は思いっきり黒龍をぶん投げて物体Zの群れにぶつけた。  
そのお陰で他のキャラに物体Z弾が行くことはなかった。

黒龍「あばぢよばああああああああああああああああああああああああああ!!!」

意味不明な悲鳴を上げて黒龍は逝った。

フエイト「ええええええええええ!!!??」

容赦ない新八の行いにフエイトは驚愕する。

銀八「助かったから良いけど、たぶん新八の奴は今までの恨みが籠ってんだろっな」

銀八は呆れた目ですっきりした顔の新八を見ていた。

銀八「つで、A・S編とSTRIKERS編に出す為のラスボスは一応考えてあるから大丈夫だそうです。んじゃ、『勇者王 真オーズ』は廊下に立ってなさい」

1の質問を黒龍に変わって答える銀八。

銀八「次、ペンネーム『きつと木の精だ』さんから、『木の精だ』んじゃ取り敢えず質問いつてみつか。

なのはに質問　なんか今回温泉の件で巨乳に憧れを抱いたようですが……………銀さんが貧乳属性だったらどうするんですか？…  
…全くの余談ですが某運命的な魔術士同士が聖なるコップを取り合  
ってしばきあう世界柄は、その世界の主人公がそれだったためにヒロインの一人がこの世の全ての絶望に身を染めたそうです」

恭平「余談だから詳しい事はセイバーかライダーにつて…………こつちの二人はあいつらの事知らないんだっけ？」

こなた「それはそうとして次行くよ！作者さんに質問ではなくてお願い！！

今はまだストーリーも整ってなくて無理ですけど、何時かコラボ小説を書かせてもらえませんか？

以上うちの人の心の声を代弁しました！」

恭平「次は俺からの質問だな、取り敢えず一家の代表としてフェイトに質問を送るぞ！

ふと思ったんだけど大飯喰らい＋大所帯ってかなりきびしいんじゃない？エンゲル係数とかどうなってんだ？……一応そもその事は聞かないぞ？原作でも明確になってないしな」

木の精だ「んじゃ一巡して俺で締めるわ、新八君に質問な 一時君の名前がこつちじゃモブキャラと同格になりかけて、以降の話の流れ次第じゃまたそうなる可能性ありただけどう思うよ？」『……新八がモブでも別に良いな」

新八「良くないわアアアアア！！ 例え地味は百歩譲って許せても、モブキャラ扱いだけは絶対認めません！！！」

自分のモブキャラ扱いを断固否定する新八。確かにモブキャラになつてしまった色んな意味で終わってしまうのは明白だ。そして2で質問されたなのは……

なのは「じゃあ私はどうすれば良いの！！？？」

これからどうやって自分の胸を育てていけば良いか分からなくて頭を抱える。

銀八「とりあえず、銀時が貧乳派ではないと思っけどな<sup>アイツ</sup>」

さすがに原作でも銀時が貧乳好きだなんて描写はなかったのでののはの悩みはあんまり意味の無いものだと思つた銀八だった。そして2で質問された黒龍は……

黒龍「是非お願いします！！ きっと気の精ださんのコラボ小説を楽しみにてしています！！」

黒龍は期待に胸を膨らませながら頼んだ。コラボ依頼はにじファンで作者をしている者には嬉しい事なのだろう。

銀八「マジで嬉しそうだな。んで、フェイト。お前とこホントに家計とか大丈夫なのか？」

アルフ以外にも大食らいが増えたのだから、さすがにフェイトの家計も火の車直面だと思った銀八。

だが……

フェイト「大丈夫です。母さんは研究者として働いていた時の貯蓄があるので」

となんの問題もないと言う感じに答える。

銀八「さすがは大魔導師って呼ばれてるだけはあるなおい」

銀八はマジでプレシアの稼ぎに驚いてしまった。

フェイト「それじゃあ『きつと気の精だ』さんは廊下に立たなくて良いので、ソラと私のラブストーリーをお願いします／＼／＼」

銀八「何顔赤くしてとんでもないお願いしてんだよ！！??」

フェイトのとんでも発言に驚く銀八。ここでまさかボケかますとは思わなかった。

銀八「まったく……次。ペンネーム『黒神』さんから、質問します。」

なのはへ

アニメで放送された志村新八の、ギャルゲーにはまるオタクぶりにはどう思いました。

近づきたくないほど軽蔑しましたか？（黒笑）

神楽へ

僕の小説では今だに新八は出ていませんが、貴女は早く出てきて欲しいと思いますか？

それともまだ出なくてもいいと思いますか？

アーチャーへ

是非とも、自分が投影したい宝具とはなんなのか詳しく聞かせてください。』……黒！？ 最初だけ黒！？」

なのは「……………」

銀八「しかもなのははなのはで声に出さないくらいドン引きしてんだけど！！」

なのはの反応を見て何故か悲しくなった銀八だった。  
そして2で質問された神楽は……

神楽「まあ随分話数も重ねたアルからな。もうぱつつあんも出して  
もいいんじゃないネ？ それにもし新八を江戸に置いておくとアニメオ  
タクが更に酷くなる気がするアル」

と少し同情が混じった回答をする。

神楽としてもちよくちよく出てきては落ち度しか見せない新八に呆  
れていた。

なのでいっそのこと出して改心させた方が新八のためだと思ったの  
である。

銀八「んで、最後に質問されたアーチャー、お答えを」

アーチャー「やはり私としては約束された勝利の剣、もしくは全<sup>ア</sup>  
て<sup>ヴァロン</sup>遠き理想郷、そして天地乖離<sup>エヌメエリシュ</sup>す開闢の星と言えよう。あの三つは宝  
具の中でもその力は最高峰と言っても過言でもない。ならば、投影  
できるできないはともかく、投影し扱いたいのであれば上記の三つ  
が理想的だと私は思う。ただ、私が出会ったこともない宝具がこの  
世にある可能性もあるため、現時点ではこの三つが私が投影したい  
と思える理想的な宝具になるだろう」

銀八「説明ありがとうございます！！」

説明を終えて帰っていくアーチャーに頭を下げる銀八。

まあここまでしてもらったのだから仕方ない。

銀八「そんじゃ、『黒神』さんは長編頑張ってください」

フェイト「次が最後ですね。ペンネーム『正宗の胃袋』さんから、  
『土方以外の真撰組の皆さんに質問。後書きで土方がフェイト人形  
を抱きしめて発情していました。こんな男が真撰組の副長なのが恥

ずかしいと思いますか?』……いやアアアア!』」

ドカツ!!

土方「ッ!!??」

土方の変態行動に我慢の限界がきたフェイトは土方の頭をバルディッシュで力チ割った。

そしてそんな土方に対しての真撰組の反応は……

近藤「トシイイイイイイ!!」

山崎「副長オオオオオオ!!!!」

沖田「そんじゃ、ダラしない土方に代わり俺が真撰組副長になりま  
さア（黒笑）」

と近藤と山崎は涙を流し、沖田は勝ち誇った黒い笑みを浮かべていた。

銀八「もう土方はおしまいだな。そんじゃ、『正宗の胃袋』<sup>アイツ</sup>さんは  
廊下に立ってなさい」

フェイト「今回も質問多かったですね」

銀八「だな。じゃ、今回はこれで終わりです」

支配者さんのところから来た地獄男は頼まれたとおり新八、銀時、なのは、フェイト、ソラに地獄汁を顔面にぶつけた。

あ あ あ  
あ あ あ  
あ あ あ  
あ あ あ  
あ あ あ  
！ ！ ！  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ  
あ あ

特大の悲鳴を銀時となのはとフェイトと新八が上げる。  
新八に至つては目と鼻と口と耳から噴水のように鮮血を噴出させた。  
そしてソラだが、彼だけは悲鳴を上げないで気絶した。

ちなみに地獄男の標的であるセフィロスは探してもどこにもおらず、地獄男はセフィロスだけは明らかにできなかった。

真王さんから、『レーティア』と『リル』がやって来た。  
ケンさんから、『エステル』と『メアリ』がやって来た。  
どうして来たのかは感想版を見れば分かります。

レーティア「えっと……これどう言うこと?」

リル「あつ？」

エステル「何があつたんですか？」

メアリ「酷い目に遭ったってことは分かるわね」

やって来た四人は目の前の光景に呆然としていた。  
なにせ銀時と新八となのはとフェイトとソラが気絶して倒れている  
のだから。

黒龍「それはですね……」

黒龍は地獄男によって上記の人たちが気絶体になってしまったのだ  
と話した。

黒龍「まあそう言う事なので、今回はお相手はできないので」

レーティア「仕方ないわね」

リル「まう」

メアリ「ご愁傷様」

エステル「いつか良いことがあります」

四人はそれぞれの作品へと帰って行った。

## 第二十七訓：旅行先では意外な出会いが有ったりする（後書き）

黒龍「今回出て来た人たちはあの組織の人たちです」

銀時「おゝい、ネタバレになんぞ」

黒龍「そんじゃ、贈り物コーナーに入ります」

『鳴神 ソラさんから銀時LOVEズに翔太郎の服を着た銀時の写真を、ソラLOVEズにフィリップの服を着たソラの写真』、『武田軍兵士 清坂 剣麻さんから腐留苦去主スパー』、『なっぺさんからドがつくほど苦いお茶』

黒龍「贈って頂いた皆様ありがとうございました」

### 次回予告

フェイト「次回、『温泉は身も心も裸にする』にテイクオフ」

## 第二十七訓：温泉は身も心も裸にする（前書き）

黒龍「ホントマジ遅れてすみません！ とにかく早く投稿できるように頑張ります」

銀時「この小説完結でいいのか？」

ソラ「さあな」

ライダー「『リリカル銀魂ライダー』 始まります」

## 第二十七訓：温泉は身も心も裸にする

アルフ「なんだっただい！？ あのカキは！？」

アルフは自分の両腕を擦りながらさっきなのは達と一緒にいた金髪の少年の事を思い出す。

あの少年を見た時に感じた悪寒は勘違いではないだろう。

狼であり、使い魔である自分があんな子供に悪寒を感じた。それはアルフの心を大きく揺さぶった。

アルフ（大きな魔力を感じられないし、殺気をぶつけられたわけじゃないの悪寒を感じるなんて……まったく！ 不気味で仕方ないよ！）

魔力も殺気も感じない少年に悪寒を感じた。つまり、あの少年にあるであろう『何か』に対して悪寒を感じたと言う事だ。

それはたぶん動物であるアルフの『野生の勘』と言うモノが直感的にあの少年の『何か』に反応したのであるう。

アルフ（今回のジェルシード探し……正直アタシは不安で仕方ないよ……フェイト）

最初に見つけたジュエルシードで早々敵と言う名の邪魔者には出くわす。しかも相手は手強い。

それにこの旅館では妙な少年に出くわす。

今回のロストロギアである『ジュエルシード』の回収では間違いなく自分にもフェイトにも良くない事が起こるとアルフは感じ始め、暗い顔をする。

だが、すぐに顔を横に振る。

アルフ（こんな事じゃダメだ！　アタシがフェイトを守らないと！）

アルフはネガティブな考えを振り払い、自分を鼓舞する。

使い魔である自分が主であるフェイトを守らず誰がフェイトを守る  
と言っのだ。

自分以外でフェイトを守ってくれるであろうソラ達は時の庭園に置  
いてきた。

ナナシだってフェイトを何時でも守ってくれるとは限らない。

自分が命を掛けてフェイトを守っていかなければならないのだ。

アルフ（とりあえず、温泉でも入って気分転換しないとね）

アルフは強気な顔を作って温泉のある場所に向かう。

すると、ある人物を見付ける。

アルフ「アイツは……！」

その人物とは……

銀時「だーチクショー！　あのマヨラーとシスコンのせいでゆっく  
り温泉に浸かれなかったじゃねエーか！　入り直しだよコノヤロー  
！」

不機嫌そうに温泉の前にいる銀時だった。

不機嫌なせいでさっきから愚痴を漏らして頭を掻いている。

アルフ（アイツも此処にいたなんて……）

銀時が此処にいた事に驚くアルフだが、なのはと行動を共にしているからして、なのはがいるんだから銀時がこの海鳴温泉旅館に居てもおかしくない、と思ったアルフだった。

アルフは銀時を見た時に咄嗟に物陰に隠れて、銀時をジーっと見ていた。

ただ、物陰から銀時を見ているアルフを子供が見て「ママー。あの何やってるの？」と母親に質問し、母親が「しっ！ 指差して見ちゃダメ！」と子供に注意していた。

とある親子に奇異の目で見られている事を知らないアルフは銀時を警戒した目で見ていた。

さっきはなのはに脅し紛いの警告をしようとしたが、銀時にそうはしなかった。

それは、アルフが銀時が凄く強い奴だと分かっているからだ。アルフからしてみれば、なのはは大した事ないが、銀時は別だ。あ、新八の事はすっかり忘れている。

銀時の強さは一回対峙しただけだが、本能的に強いと感じた。だから咄嗟に物陰に隠れて見ているのだ。

アルフ（どうしようかねエ）

銀時の前に無闇に出てまた一戦交えたとして勝つのは困難だ。とりあえず銀時に気づかれないようにして、男湯に銀時が入るのを待っているアルフ。

そして何故だか銀時は中々男湯と書かれたのれんをくぐろうとはせずに、さっきから混浴と男湯ののれんを交互に見ていた。

アルフ（何してんだい、アイツ？）

アルフは銀時が中々温泉に入らない事に首を傾げる。

何故銀時が温泉に入らないかと言うと……

銀時（どうすっかなあー？ 男湯に入ってたあのマヨラーかシスコンに鉢合わせすんのやだしなあ……でもだからと言って、混浴入んのもなあ。なんか、女とかに鉢合わせして気まずい感じになるのもやだしなあー。どうすっかなあー？）

と顎に手を当てながら考えていた。

どうやら土方と恭也にまた男湯で鉢合わせするのを嫌がって混浴に入るか男湯に入るか迷っているようだ。

男湯に入れば土方か恭也に鉢合わせする可能性があるが、二人が入らないであろう混浴に入ればゆっくり温泉に浸かれる。ただ、女性が入っていた場合は気まずい空間が出来てそれはそれはで疲れる。いや、いきなり殴られるか悲鳴上げられる可能性もなくもないが。だからどちらかに入れば良いか迷っているのだ。

銀時（しゃあねえ。混浴にするか。大体男と一緒に入るような混浴に女が入るなんてまずありえないし。それに、どうせ入ってくる奴なんて水着着装している奴だけだろ）

銀時は頭を掻きながらどちらに入るか決めると、混浴ののれんをくぐって入っていく。

そんな銀時の姿をアルフは見ていた。

アルフ（あ、混浴に入った）

もう銀時は居ないのだからこのままアルフは女湯に入ろうと思った。  
その時……

アルフ（あ、そうだ……！）

とある事を思い付き、悪戯が隠れた笑みをニヤリと浮かべて尖った歯を見せる。

銀時「あ……やっぱ一人の温泉ってのは気持ち良いな」

体を洗った銀時はゆっくり湯船に使って温泉を満喫していた。すると、ガラララと温泉のスライド式扉が開く。

銀時「ん？」

音に気づいた銀時が扉の方に目を向ける。

誰か入って来たのだろうか？ 湯気のせいで姿が見えないがたぶん男が入って来たのだろう予想する。

そして入って来た人物がペタペタと足音を立てながら自分の所にやって来る。

自分の前にやって来た所で湯気が晴れ、姿がはっきりと映る。

アルフ「よっ」

そこには笑顔で手を振るアルフが体にタオル巻いて立っていた。

銀時「……………」

その光景に銀時は呆然とし、目を白黒させる。

[illegible]

顔には出していないが内心で銀時はシャウトしていた。

銀時（ちよつ！？　これどう言う事！？　なんでこんな美人が混浴に入ってくんの！？　何コレ！？　どう言う事なのコレ！？　そう言えばジャンプの発売日って何時だっけ！！！？）

銀時が内心パニックになっているのも仕方ないだろう。

なにせスタイル抜群の美女が不意打ち気味に自分の入っている温泉に入ってきたのだから驚かないのも無理はない。まあ混浴だから可能性はゼロではないが……

こう言うエロゲみたいな場面にまったくと言って良いほど遭遇して  
いるいない銀時は未だに啞然としている。

リリカルなのはの世界に来る前は、自分が風呂に入っている時にライダーやシルバーが強引に入ってきて来ると言うハプニングに遭遇する事はそれなりあるのだが、さすがに知人と他人とじゃ衝撃にはかなり差がある。

それが目を惹くような美女なら尚更だ。

銀時（お、落ち着け俺！ 此処は混浴！ なら別に女が入って来るのなんざ当たり前だ！ さつきだつてこの位の予想はしてたじゃん！！ 全然ビックリする事じゃないじゃん！！ 銀さんぜくんぜんビックリしてないから！！）ただ女が入って来た事に驚いただけだ

から！……アレ？ 結局ビクリしてね？)

自分を落ち着けようと自分に言い聞かせる銀時。まあパニックってワケの分らない思考の渦に陥っているが。

そしてあからさまに心では動揺しているが顔はボーカーフェイスでいる銀時を見たアルフは……

アルフ（あれ？ 案外驚かないね）

と銀時があまり驚かない事を不思議に思った。内心ではメツチャ動揺しているとはアルフが知る由はない。

実の所アルフは銀時が混浴に入るところを見て、自分も混浴に入ると言う大胆な事を思いついたのだ。

よくよく考えてみれば、銀時は人間の時の自分の姿を知らないし、いきなり襲われることはないだろう。

これからもジュエルシードを巡って戦うであろう銀時の事を知っておきたいと思った。

それに銀時にソラ達の事を伝えるのも目的の一つだ。

そして何より、温泉に入るために木刀を持っておらず力が半減しているであろう銀時と話すなら無防備な今が一番の好機だと思ったからだ。

それなら、もし正体をバラして銀時が襲って来てもどうにか対処する事ができるからである。

アルフは銀時の入っている湯船に入る。入る時にはちゃんとマナーとしてタオルを取っている。

まあこう言う時にマナーを守る必要はないと思うが。タオル取ったアルフに対して銀時はまた驚く。

そしてアルフは銀時に顔を向ける。

アルフ「また会ったね。あの時は油断したよ」

銀時「えっ！？ ど、どこかで会いましたか？」

動揺してしまっているせいで敬語で話してしまう銀時。

それに目の前の女性とは会った事が記憶にまったくないので更に動揺してしまう。

動揺し過ぎたせいで汗をダラダラ流す。

アルフ「まあ、この姿じゃ分からないか。……じゃあ、これならどうだい？」

と言うとアルフの体が光り輝く。その光景に銀時はギョツとする。そしてアルフはあっという間にオレンジ色の毛並みの狼に変身した。

アルフ「思い出したかい？」

アルフはそう言った後、湯船から出て体をブルブル振って毛についてお湯を飛ばす。

銀時「……………」

さっきからビックリする事ばかり自分の目の前で起きている事に銀時は何も言えずに呆然と立ち尽くす。

そして徐々に我に返ってきたのか、呟く。

銀時「……に」

「アルファに？」

銀時「に、人間が『犬』になったアアアアアアアアア  
アアアア!!!!!!??」

アルフ「アタシは狼だアアアアアアアアアア！！！！！」

銀時の叫びとアルフの怒声が混浴に響き渡った。

銀時「へえゝなるほどな。お前等の所にソラたち居たんだな」

アルフ「ああ。まあ近い内にアンタ等の所に戻ると思うよ」

ソラ達の事を聞いた銀時は特に驚く様子もなく淡々と述べ、アルフは自分達が一度『時の庭園』に戻ったらソラ達を銀時達の所に行かせる」と説明した。

えっ？　なんで敵対関係であるはずの銀時とアルフがこうもピリピリした状態も作らずに和やかに会話しているかって？

さっきアルフが狼に変身したのを見て衝撃を受けた銀時が叫んだ後に、我に返った銀時はアルフを警戒していたのだが、アルフから敵意を感じられない事と彼女の口から話がしたいと言う言葉を聞いた銀時は話を聞く事にした。

バトルジャンキー  
戦闘狂どころか戦うとかメンドーな事が嫌いな銀時としてもアルフと話し合うだけで済むならそっちの方が断然良いので、素直に話に

応じたのだ。

そしてアルフからソラ達が自分達の本拠地でもあり家でもある『時の庭園』にソラ達が居候している事を教えて今に至ると言う訳である。ちなみに二人共湯船に入って話をしている。アルフは狼の姿から人間の姿に戻っている。

とりあえずアルフの話によりはソラ達が元気にやっていると聞いた銀時は少しだがホッとしたような顔を見せた。

銀時「まあソラ達が無事な事は分かったけどよ、なんでわざわざ俺にそれを教えてくれんだ？ 一応敵同士じゃなかったっけ？」

銀時としてもそこが謎だった。わざわざ敵である自分に対面すると言う危険を犯したり、みすみす自分達の情報を晒すようなマネをするアルフの行動の糸が読めなかったからだ。

アルフ「まあ確かにそうだけど、ソラ達の家族みたいなもんだろア  
ンタ？」

銀時「まあな……」

銀時ははつきりと肯定にせず、曖昧に答える。まあ素直じゃない銀時なのだからこう言う回答になるのは仕方ないだろう。時たまこれでアリスにツンデレ扱いされて弄られたりする。

銀時の様子を見たアルフは苦笑する。

アルフ「だから、アンタはそれなりに信用できる奴だってアタシになりに思っ  
てこう言う事をしたってワケさ」

銀時「アイツ等も随分信用されてんだな……」

銀時は少し呆れたような顔で頬杖して言う。

アルフ「フェイトもアタシもソラ達の家族が見つかったらすぐに無事を教えておきたかったからね。まあ、フェイトの事やジュエルシード集める理由までは言えないけど」

アルフは苦笑する。

いくらソラ達の家族と言っても自分達が敵対している魔導師の仲間なので自分達の情報をあまり言う事ができなかった。

銀時「ま、礼は言っとくぜ。後、そこまでよくばんねえから安心しろ」

銀時は少しフォローを入れる。

銀時としてもアルフの気持ちは分かっているんで、そこまで深くは追求しようとはしなかった。

ソラ達の事が聞けただけでも銀時としては充分だったからだ。あ、桂はどうでもいいらしい。

銀時（ま、なのはには悪いけどな）

フェイトの事を知りたがっているであろうなのはの事を考えれば、フェイトの使い魔であるアルフが居る今ほどフェイトの事を聞けるチャンスはないが、そこら辺は聞けないので仕方ない。

そして銀時は横目でアルフを見る。

銀時「ちょっと聞くけどよ、ソラやあのフェイトってガキは仲良いのか？」

銀時の問いかけにアルフは「えっ？」と声を出し腕を組んで考える。その時、アルフの両腕で豊満な胸が持ち上げられたりした。

アルフ「んゝまあなんて言うかそれなりに仲が良いよ。フェイトも心を開いているし、特にソラに懐いちまってるからね」

これはアルフがフェイトを見た上での正直な感想だ。

ソラ達、特にソラに会ってからフェイトは良い意味で変わった。

前までほとんど見せる事のなかった笑顔を時折見せるようになるし、自分の正直な気持ちを相手に伝えるようになった。

自分で料理を作りたいと言ったのが良い例だ。まあそこだけは例えフェイトがしたい事でもさせてはいけない事だと理解した。

とにかくソラと会ってからフェイトは自分の望んできた姿になってきたのだ。

アルフ「フェイトが良い意味で変わった事についてはアンタんとこのソラには感謝してるよ」

アルフは笑顔で銀時にお礼を言う。

銀時「それは俺にじゃなくてソラに言え。後、フェイトってガキの事あんま知らねえ俺にそんな事言っても分かんねえよ」

アルフからフェイトの事はあんまり聞かされてないのでフェイトが変わった事は良い事だと言われても良く分からない銀時はダルそうに答える。

それを聞いたアルフは手を合わせて苦笑しながら「ゴメンよ」と謝る。

銀時はフェイトの変化について嬉しそうに話すアルフを横目で見な

がら思った。

銀時（どうやら、フェイトってガキもこのアルフって奴も話を聞く限りじゃわりい奴じゃなさそうだな。寧ろお人よしも良いとこだ）

これからは本気でアルフやあの黒い魔導師であるフェイトを敵対視する必要はないと銀時は考えた。

そしてこんなお人よしであるアルフやフェイトと言う魔導師達が困っているのなら、ソラ達がどう言う行動を取るか銀時にはすぐ予想できた。

銀時「なあアルフ」

アルフ「ん？」

声を掛けられたアルフは銀時に顔を向ける。

銀時「たぶんソラ達は、俺達のところには来ないでお前達の手伝いをするだろうな」

アルフ「えっ？ どうしてだい？」

アルフは不思議そうな顔をする。なんで銀時がこんな事を言うのか分からなかった。

銀時はアルフの方を見ずに遠くを見つめる。

銀時「親しくなっちゃまったお前等が困っていると見て、見ねえ振りができないバカだからな」

アルフ「……………」

銀時の言葉を聞いてアルフは何も言わなかった。

短い間しか一緒に過ごさなかった自分よりも長い間一緒に過ごした銀時だからこそ今の言葉が出て来たのだろう。

それにアルフとしてもソラ達がそう言う人間だとは少なからず分かっていた。

だから何も言い返さずに銀時の言葉を受け入れたのだ。

そして一言……

アルフ「いい奴等だね、アンタの家族は……」

と呟いた。

銀時は何も答えずにまた頼杖を突いて別の方向を見ていた。

そして少しの沈黙が続いた後、銀時は横目で温泉に浸かっているアルフを見る。

銀時（そう言えば、さっきからフェイトってガキの事しか言わねえな、コイツ）

魔導師の使役する使い魔と言う存在がどう言うものなのか銀時にはイマイチ分らない。

だが、アルフが純粹に主人であるフェイトをいつも気にかけていて、どれだけ大切にしているかは充分伝わってくる。

だが、そこについては銀時として少しだが、納得できない事があった。

銀時「なあ。お前にとってあのフェイトってガキは大切なのか？」

アルフ「ん？……ああ、そうだよ。命を掛けたって守りたい存在さ」

銀時の声に反応したアルフは銀時に顔を向け、決意の籠った強い瞳で答える。

目をみただけでアルフの覚悟が伝わって来た。

銀時「でもよ、それじゃあお前は自分を大切にしていなじゃねえか？」

アルフ「えっ？」

アルフは銀時の言葉を聞いて呆けた声を出す。  
その後、戸惑いながら言う。

アルフ「あ、アタシはフェイトが幸せならそれで良いから」

そう言うアルフの言葉を遮って銀時が頭を掻きながら話す。

銀時「でもよ、お前がフェイトってガキの幸せを願っているように、フェイトってガキもお前の幸せを願ってるんじゃないか？」

アルフ「それは……」

アルフは押し黙る。確かにフェイトは自分の事も良く気遣っている。寧ろ自分の事を気にして欲しいと思っている程だ。

フェイトが使い魔である自分を大切にしていると言う事は伝わっている。

銀時「ま、俺がお前等の関係について深く言うつもりはないけどよ、お前が傷ついて悲しむ奴がいる事だけは忘れんなよ」

銀時はそう言って立ち上がる。

そしてアルフの頭をポンポンと叩く。

銀時「俺が言いてえのはそれだけだ。まあなんか困った事が有ったらしいな。助けてやるからよ。あ、俺万事屋だから払うもんは払ってもらおうと言いてえところだが、ソラたちが世話になつてゐる事だし、特別サービスでチャラにしといてやるよ」

そう言うとき銀時は湯船から出て出口に向かう。

そしてあらかた歩くと顔を後ろにいるアルフに向ける。

銀時「頼れる奴つてのは居た方が良くもんだぜ」

銀時はそう言つて頭を掻きながら混浴を出て行つた。

アルフは銀時の言葉を聞いて呆然と湯船に浸かつていた。

アルフ「……変わった奴だね」

我に返つたアルフはそう呟いた。

今までフェイトの事ばかりで自分の事は二の次だつた。フェイト以外でこうもはつきり自分を助けようなどと言つて来る人物は銀時が初めてだ。

使い魔である自分を氣遣う者など主であるフェイト以外今までいなかった。

銀時の嘘ない言葉はアルフにとってはとても暖かく感じた。

アルフ（なんだろう？ 胸が苦しいような？）

アルフは少しなんとも言えないような胸の苦しさを感じて自分の胸のを触る。なんて言うか苦しいのに全然嫌じゃない感覚だ。

それに今のアルフの頬は温泉に浸かつて温まつたなのか、はたまた

別の理由なのかほんのり赤く染まっている。

アルフ「なんなんだいもう！！／＼／＼」

自分の感情が分からなくなったアルフは湯船のお湯をバシャッ！つと顔に掛ける。

アルフ（誰かを頼る……か……）

その後アルフは湯船に長く浸かって少しのぼせた。

旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。そして森の一本の木の上に座っている一人の少女が居た。バリアジャケットを着たフェイトだ。一通りジュエルシードの探索を終えたフェイトは「ふう〜」とため息をつく。

フェイト（ジュエルシードの場所は特定できた。後は夜に封印するだけ）

フェイトは旅館の方に視線を向ける。

フェイト（アルフ、温泉楽しんでるかな？）

アルフに今新たな感情が芽生えたなど知る由のないフェイト。

フェイト（私も、ソラと温泉に入りたかったな……）

危険な目に遭わせたくないと思って時の庭園に置いて行こうと決めたのは自分だが、やはりこう言う温泉旅館でソラと一緒に楽しめたかったと思ってしまうのは彼女の小さな願いだろう。

そう考えるとつい後悔して悲しそうな顔をしてしまう。

この光景からフェイトが同情するくらい儚げな可愛い少女だと見えてしまう。

フェイト（でももし、ソラと一緒に旅館に来て……そ、それで一緒に温泉に入ったら……）

だが、フェイトはついソラと一緒に温泉に入った時の妄想をホワンホワンと膨らませる。

~~~~~

フェイト「お、温泉って気持ち良いねソラ！／＼／＼／＼」

フェイトは顔を真っ赤にしながら自分の横で温泉に浸かっているソラに声を掛ける。

今のフェイトは恥ずかしさや嬉しさが入り交ざっているような感じだ。

ソラ「そうだな……」

フェイト「体が温まるよね！！／／／／／」

フェイトは更に顔を紅潮させて言う。っと言うか、恥ずかしさのあまりいつものフェイトのキャラじゃなくっている。

ソラ「そうだな……」

ソラはまた素っ気無く答える。

その後、『でもよ』と言った後、優しくフェイトの顎を指で掴み、彼女の顔を自分の顔に近づける。

フェイト「ふえッ！！？？／／／／／」

フェイトはいきなりの事に呆けた声を出してしまい、顔を真っ赤にさせる。

ソラ「まだ体が暖まらなくてな。お前が暖めてくれないか？」

フェイト「そ、ソラ……／／／／／」

フェイトは抵抗もせず、期待したような目でソラを見る。

ソラ「安心しろ。優しくしてやるからよ」

ソラは微笑を浮かべて、フェイトの髪をさらりと撫でる。

ソラの言葉一つ一つを聞いたたびにフェイトの心と脳に雷を落としたような凄まじい衝撃が走り、フェイトは完全にソラの虜となっていた。

フェイト「き、気持ち良くてくれないとやだよ／／／／／」

ソラ「ああ、お姫様」

そしてフェイトとソラは互いの唇を近づける。

~~~~~

フェイト「エへ……エへへへへへ／／／／（鼻血）」

フェイトは鼻血出して完全に自分の世界にトリップしていた。  
そして更には……

フェイト「ソラ~~~~~そんなとこ触っちゃったら私……／／／／  
で、でもでもソラが触りたいなら……／／／／／私の全てはソ  
ラのモノだから……／／／／えっ？最後まで……？／／／／う  
ん、レッツパリーしょ……／／／／」

鼻血を垂れ流し体をクネクネさせて悶えていた。

たぶんとうぶんは誰が声を掛けても自分の世界から抜け出せないだ  
ろう。

つつかホントこの人は誰だ？

ナナシ「誰ですか、アレ？」

ナナシはそんなキャラ崩壊まっしぐらのフェイトを遠くから見て少  
し引いていた。



る。

銀八「だってさー、ドSなお前がいるとメンドーじゃん。だから今回はないにする」

心底メンドくさそうな顔で言う銀八。実際その通りなのだから仕方ない。

黒龍「勝手に決め——」

銀八「へい、作者はとっと退場しやがれ！」

ドカツ!!

黒龍「なんでエエエエエエエエエエ!!??」

黒龍は木刀で空高くぶっ飛ばされて星になった。

銀八「じゃ、今回は俺一人でやらせてもらいます。じゃあ早速トッパッター『真王』さんから、

『ネプギア』えつと『こっちでソラさんたちがレギュラー参戦しますけどどう思いますか!』」

真王「『屁怒組たちが現れて屁怒組式体洗いはどう思いますか?』そして、『裏超次元学園でノクターン書くとするとソラ×???にしますか?』」……」

銀八は質問読んで顔を真っ青にして冷や汗をダラダラ流す。

なにせ、ソラバースの視線が明らかに自分に突き刺さっているからだ。もし、不用意な発言をしたら何をされるか分かったもんじゃない。

ない。

銀八「……と、とりあえず、3の答えはソラ×ソラバーズでお願いします」

銀八は引き攣つた笑みを浮かべ、ソララバーズは少々納得がいかない顔をしながらも席に戻つた。

難を逃れた銀八は汗を拭う。

銀ハっつで、1の答えはとしては、作者である黒龍はレギュラー参戦させてもらったことに喜んでいました。それで、2の屁怒紹式体洗いは最悪じやアアアアアアアアアアアア！！！！」

銀八は顔を真っ青にして叫ぶ。

正直、原作で銀時たちが屁怒組一家に教えた体の洗い方はただの拷問以外の何ものでもない。

銀八「……それじゃあ『真王』さんはこれからソラたちをよろしくお願いします。次、ペンネーム『白黒』さんから、  
『質問します。』

無縁に質問です。

もし、なのはの世界以外ならどこの世界に行きたいですか？

ヅラ（桂）に質問です。

一番お気に入りの変装はなんですか？

ソラに質問です。

自分の理想の女性に近い人は誰ですか?』……そんなじゃ、質問された奴順番に答えろ」

無縁「他に行きたい世界だア? そオだなア、とある魔術の禁書目録<sup>インデックス</sup>ぐらいだな」

頭を掻きながら答える無縁。

銀八「お前はやっぱり一方通行ばくね?」

銀八は心底無縁は一方通行に似てきてないかと思った。  
次に質問された桂は、

桂「俺も数多の変装をしてきたが、やはりキャプテンカソーラの変装がお気に入りだ」

と腕を組んで答える。

最後に質問されたソラは、

ソラ「悪いが理想がねえから答えられないな」

銀八「俺の理想の女は綺麗な大人の女つてところだな」

何故か質問されていない銀八が答えてしまう。

銀八「じゃあ『白黒』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム

『ボッスン』さんから、

『ボッスン(作者)』質問です」

芽亜「私、TOLOVEるダークネスのキャラの黒咲芽亜がします。皆さんに聞きます。ルビーさんにどんな女の子の服を着てほしいですか？一応説明しますが、ルビーさんは髪の色と性別以外はTOLOVEるのモモさんに似ています」

ルビー「それを聞いてどうするの？（汗）」

芽亜「ルビーさんをその服を着せます」

ルビー「嫌です」

芽亜「次の質問はこのガンダムUCのユニコーンガンダムの武器のビーム・マグナムに似た武器、カオス・マグナムはどう思いますか？このカオス・マグナムのエネルギーは黒神さんのシャマパイと黒龍さんの物体Xと支配者さんの地獄汁と全作品のかなり不味い料理を混ぜた物を使っています。この武器は一発撃つと星が破壊されます。人に向けて撃つと形を残さずに溶けて死にます。この武器を持つて戦争がある所に行くと直ぐにこの武器を持っていただけで戦争が直ぐに終わります」『それどんな反則兵器！？』

最強と言うか、最凶の武器の存在に顔を真っ青にさせる銀八。

銀八「そんじゃ、1の質問に答えるのはこの五人で」

銀八の言った五人とは、

桂「なら俺は和服を推薦しよう！」

フェイト「私のバリアジャケットで良い、かな？」

なのは「私の通っている小学校の制服なの」

銀時「トラブルのモモの服で良くね？」

アリス「女性物全般だ（黒笑）」

この五人だった。

銀八「最後のアリスは徹底的にルビーに服着せる気満々だな。そんなじゃ、『ボツスン』さんは廊下に立ってなさい。やっぱ一人は疲れるな……」

銀八は一息ついて、次の質問に移る。

銀八「次、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、

『ソロ』質問だ『それぞれKHの魔法を使えるならどれに自分は長けてると思う？』

私からも黒龍さんから質問です。平成主人公ライダーを主役にしてのクロスオーバー小説を書くならどう言う作品とクロスさせますか？自分は龍騎×アイドルマスター、W×おまもりひまり、ブレイド×けんぷファーと言うのを書いてます。

ネス「質問『無縁をプティラコンボにしたのはメダルの性質が無だからですか？』……俺はキンハの魔法なら甘いもんをいくらでも出す奴だな」

リリス「いや、ありませんからねそんな魔法！？ それと私ならやつぱりサンダーだと思います」

1の質問には代表してリリースが答えた。ついでにツツコミも。  
2と3で質問された黒龍は、

黒龍「そうですね、ディケイド×リリカルなのはとかが良いかもしれません。それと3はネタバレになるのでちよつと言えませんが、まあ無だからプティラにしたワケじゃありませんけど」

銀八「いや、結局ネタバレしてんじゃねえか!!」

いつの間にか戻って質問に答えた黒龍に銀八はツツコム。

銀八「……『鳴神 ソラ』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『なつぺ』さんから、

『なつぺ』今回の質問。神楽、最近銀さんチームにいないせいか、”新八よりも”出番が減ってきてるように感じますが、そこどこどー思います？ あと今回はわんこそばを用意しました」

吼太「普通だな」

なつぺ「直径5kmの器だけだね。男なら吼太の立てた記録ぐらい簡単に抜けますよね。特に銀さんとか土方さんとか恭也さんとか」

吼太「何か狙ってないか？」

なつぺ「いんや何も？ 多く食べられれば他の人より凄いやな〜っ  
て思ってるだけで。あと一応、わんこそばじゃない通常のサイズの蕎麦も用意しました。両方とも、中身はトウード作の最高級蕎麦です。ちなみに食いかけで残したらトウードから鉄拳が飛んでくるのでご覚悟下さい」『……』

銀時・土方・恭也

『ぎゃあああああああああああああ！！！！！！』

張り合つて食べ過ぎて挙句、食い切れなくて残したのでトウードの鉄拳を喰らった三人。

神楽「テメー！！ 眼鏡のくせして私の出番取るんじゃないねエー

！！！！！！！！！！」

新八「ちょッ！？ それは作者さんのせい、つて、うぎゃあああああああああああああ！！！！！！」

出番取られて怒り狂った神楽に鉄拳制裁される新八。  
それを見た銀八は、

銀八「……『なっぺ』さん、カオスになりました」

カメラ目線で言う。

銀八「……そんなじゃ次。ペンネーム『白騎士君』さんから、  
『白騎士君』今後の続きが楽しみだ。では質問します。『

1・なのはに質問。この中で異名を一つ選んで下さい。

1・魔神皇帝

2・破壊神

3・白き冥王

2・銀さんに質問。人間サイズのマシンカイザーなら勝てますか？

3. 皆に質問。もしマジンカイザーを手に入れたらどうする？

「以上です」

「命知らずにもほどがあんだろ!!」

1の質問を見た銀八は顔を青して叫ぶ。

なのは「碌な異名がないのオオーーーー！！！」」

怒ったのはは白騎士君に向かつてデイベインバスターをぶつ放す。それを見た銀八は当然の反応だな、と思った。

そして2で質問された銀時は、

銀時「たぶん勝てんじゃね？　まあ俺マジンカイザーあんま知らないからわかんないけど」

と答える。銀時の中ではマジンカイザーはマジンガーZのパワーアップバージョンだと思っている。

アリス「私はマジンカイザーを手に入れたら世界制服でもするか」

銀八「正義のロボットで悪の組織みたいなことしようとしてるんですけどこの人!？」

とんでもない回答をするアリスに銀八はツツコム。

銀八「それじゃあ『白騎士君』さんは廊下に立つてなさい。次、ペンネーム『ケン』さんから、

☞ 万事屋メンバーへ

真祖と煌天使、霸王色の覇気に目覚め、チート級の強さを持つ統夜をどう思いますか？

ソララバーズの皆さんへ

ソラとアリス、リリスの三人が僕の作品に出る予定です。

万が一イチャイチャラブしているシーンがあったらどうしますか？（黒笑）

黒龍さんへ

銀さんとソラは魔導師に目覚める事はありませんか？『おいしいいいいなんて質問——』

セイバー「なんでアリスとリリスは出れて私は出れないんだアアアアアアア！！！！」

フェイト「理不尽だアアアアアアアアア！！！！」

ヤミ「私の方がソラに相應しい！！」

アリア「府に落ちない……！！」

ドカアアアアアアアアア！！

銀八「ぎゃああああああああああああああああああ！！！！！！」

ケンの作品である『HERO・S EPISODE』ヒーローズエ

ピソード』にゲスト出演できなかったソララバーズは怒りのあまり銀八に一斉攻撃する。

銀八の断末魔が木霊した。

銀八「――いてて、酷い目に遭った」

黒焦げ状態から復活した銀八は傷む部分を擦る。

銀八「はあ……とりあえず1で質問された万事屋メンバーは答える」

ため息をつく銀八。そして万事屋メンバーは順番に答える。

ソラ「色々持っているな」

銀時「チートだな」

アリス「興味ないな」

アリア「にゃ………凄いと思う」

リリス「さすがに凄いですね」

神楽「中々やるアルな」

新八「僕じゃとてもついていけないなあ……」

セイバー「一度手合わせをお願いしたいですね」

ヤミ「興味はある、と言ったところでしょうか」

ライダー「興味深い力を持っていると言ったところですね」

銀八「ま、主人公でもあるしな。最後に質問された黒龍の答え」

黒龍「まだ先ですが、二人が魔導師に近い存在になるとだけ教えておきましょう」

曖昧な答えをする黒龍。

銀八「どうなんだか。……『ケン』さんはこれからもソラたちをよろしく願います。次、ペンネーム『月光閃火』さんから、  
『輝刃』……何かオマケの辺りが凄まじい気が……（汗）。あ……質問……行くぞ？まずは俺からだ。」

1・新八を蔑んできた人達に質問……というか罰執行タイムだ。次の2つの内、どれか1つの罰を受けてもらう。もちろん、パスも拒絶も無しだ。

1……某・『アイテムなんぞ……使ってんじゃ……ねえエ、エ、エ、エ……』  
「……………」  
『……』の人による折檻バトル  
2……世界中のものすごく臭い食べ物の匂いを延々と嗅ぐ

うわぁ……（汗）それはさすがにキツイよなあ……（汗）。ま、自業自得だから当然か……。次は俺からだ。

2・銀時に質問…もしもこの世に甘いモノが無くなったら、やっぱり死にたがりになる？

輝刃「…それは銀時にとっては地獄だろうな…（汗）。」「…よし、1の質問は見なかったことにするか」

真顔でとんでもない発言をする銀八。

なにせ自分も質問コーナーでは新八蔑んできたことがあるので、罰を受けたくなかった。だから見なかった事にする。

パスも拒絶もなしなら無視と言う、かなり強引なやり方をする銀八なのであった。

銀八「それで、2で質問された銀時は答えなさい」

銀時「うわっ……そりゃマジでキツイな。俺にとっちゃ地獄の苦しみだぜ」

本当に辛そうな顔をする。どれだけ甘い物が好きなのか丸分かりである。

銀八「俺だって想像したくねえな、そんな世界。……つうワケで、

『月光閃火』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『勇者王

真オーズ』さんから、

『では質問です。』

まずはプレシアさんに。アリシアを生き返らせることなんですが、アルハザードに行くよりもジュエルシードに直接アリシアを生き返らせるようお願いの方がいいと思います、どうなんですか？

次は無縁に。オーズプトティラコンボになれたのなら、紫のメダルの力を使ってジュエルシールドを破壊することはできるんですか？

最後は黒龍さんに………ていうかリクエストですけど。

………ユーノの扱いを良くしてあげて下さい！（土下座）

個人的にユーノは好きなキャラなので、マジで頼みます！（せめて戦闘で活躍させてあげるとか、新カップリングを作ってあげるとか）

『………』

銀八が質問を読み終えると、モニターが現れる。画面が映ると、そこにはプレシアが映っていた。

プレシア それは難しいわね。ジュエルシールドは願いを歪んだ形で叶える物だから、アレ単体でアリシアを蘇らせるのは難しいわ

1の質問にプレシアが答えたので、モニターは消える。次に質問された無縁は、

無縁「さアな。やってみねエとなンとも言えねエな」

とメンドくさそうに答える。

銀八「つで、最後の質問だけのどうなの作者？」

黒龍「別に構いませんよ。俺もユーノ嫌いじゃありませんし。まあカップルリングくらいは考える所存です」

銀八「はい、つうわけで『勇者王 真オーズ』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『HARU』さんから、

『銀八先生とソラ大好き娘に質問。』

自分達の中に一番心が汚れて、性格が最悪な女は誰ですか？（神楽、フェイト、なのはを覗く。）

何か「アリスが一番最悪な女で、アバスレだ!!」とsibuga  
kiさん所の天の助とガ王と首領パッチが言っていました♪……い  
や、何嘘言っちゃってんのオオオオオオオ!!!!」

HARUの嘘発言に顔を青くする銀八。  
そして遠くの方で、

天の助&ガ王&首領パッチ

「お許くださいアリス様アアアアアアアアアア！！！」

バカ三匹の断末魔が聞こえた。

[illegible]

耳を塞いで必死に今の悲鳴をなかつたことにする銀八。  
そんな時、顔にベツトリと血を付けたアリスがやって来る。

アリス「——そうだな、私としてはお妙だと思うぞ」

銀八「いや、笑顔でとんでもない事言ってるんですけどこの人！？  
つか怖い！？」

アリスにビビる銀八を置いて、他の面々も答えていく。

フェイト「私は、いないかな」

リリス「あり……いません……」

アリア「にゃ……お妙」

セイバー「いないと思います」

ヤミ「あ……いえ、なんでもありません」

チェーン「あ……ではなく、おた……あの、忘れてください」

銀八「お妙とか言った奴は勇氣あるな！」

アリス「くくく……まっただな」

含み笑みを浮かべるアリス。

銀八（いや、お前も言いかけてたからね！？）

アリス「どうした？」

銀八「なんでもありません！」

ジト目で見てくるアリスを見て銀八は勘が鋭！？、と思った。

銀八「お、俺は命が惜しいのでいません。はい」

もしここでアリスなんて言ったら何されるか分からない。銀八だつて命は大切にする。

銀八「じゃあ、『HARU』さんは嘘を付くのは自重してください。次、ペンネーム『支配者』さんから、

『支配者』と言うわけで今回の質問はなぜ黒龍さんはセフィロスだけを特別扱いしているのかと言うことを聞きたいです。皆さんの意見もお聞かせください。銀時達は酷い目にあっているのにセフィロスだけが猫かわいがりされているのに我慢できないでしょうから

後、なのはとフェイトに質問

自分達の世界で一番嫌いな人間は誰ですか？

名前を必ず言いなさい』……そうだよな。俺も気になる」

銀八はジト目で黒龍を見る。

黒龍「まあ簡単に言うと、俺としてはセフィロスには中々やられて欲しくないから、ですかね？ ほら、支配者さんだって、ダークワゴン閣下がギャグキャラにぶざまに負ける姿は嫌でしょ？ まあ、そんな感じですよ」

銀八「そう言うもんか？ 俺も優遇されてえんだけど」

黒龍「いや、銀八先生は酷い目に遭うのが似合ってるから大丈夫です」

銀八「全然大丈夫じゃないんだけど!？」

銀八は黒龍のともでもない発言に思わずツツコム。  
そして2で質問されたなのはとフェイトは、

なのは「私はいないかな？」

フェイト「私も」

と与えられた条件も無視して答える。どうやら本当に嫌っている人間は彼女達にはいないようだ。

銀八「なのはとフェイトはピュアだからな。ま、そう言うワケなん  
で、『支配者』さんは廊下に立つてなさい。次、ペンネーム『正宗  
の胃袋』さんから、

『ソララバースと銀時ラバースに質問。必ず惚れさせる薬がありま  
すけど副作用としてお尻から魔法が出てしまいますけどそれでも使  
いますか?』……」

ソララバース

『『いない(です)(いりません)』』

銀時ラバース

『『同じく』』

銀八「そりゃそうだ。そんじゃ、『正宗の胃袋』さんは廊下に立つ  
てなさい。次、ペンネーム『黒神』さんから、

『遊戯

』ではまず僕の質問。銀さん、僕らのところの銀さんは『青眼』<sup>ブルーアイズ</sup>使  
いで、リリカル銀魂の方の銀さんは『ブレイシルバー』手いうデバ  
イスを手に入れて魔剣士になっていますけど、貴方から見えてどう思  
いますか?」

十代

「んじゃ次は俺の質問だな…質問は、神楽へ。もし自分が使用する

デッキだったらシンボルカラーは赤だから『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を中心としたデッキがいいんじゃないか？」

遊星

「最後は俺の質問。新八へ、少女をいやらしい眼で見たあげく、寺門親衛隊と言ったらない掟で他人の者を奪った時点で貴様はもう立派なロリコン犯罪者だ。罪を償って牢屋に入っている！」「ようし新八。お前はとつと牢屋に――」

新八「入るかアアアアアアアアアア！――」

ドカアッ――！

銀八「ごはッ――！」

新八は怒りに任せて銀八にアッパーカットを炸裂させる。

銀八の体は宙を浮き、そのままスッ！、と地面に落ちる。

新八「こうなれば、この僕の『マジシャンデッキ』で、不動遊星――！ 貴様を倒す――！」

新八はデッキを持って遊星に挑戦しに行った。ちなみにデッキは女性魔法使いと美少女ばかり入ったデッキである。

完全に自分の趣味趣向丸出しだ。

銀八「――――いてて。たく、新八の野郎……」

起き上がった銀八は赤くなった顎を擦る。

銀八「……そんじゃ、1で質問された銀時、どう思う？」

銀時「『<sup>ブルーアイズ</sup>青眼』使いなのは良いけど、『ブレイシルバー』はただの  
コスプレじゃねえか!!」

銀時は頭抱える。『ブルーアイズ』使いなのは自分のシンボルカラー  
ー合っていてさほど問題ないが、『ブレイシルバー』を使った時の  
自分はただのコスプレイヤーなのであまり喜べなかった。

銀八「んで、2の神楽の反応はと言うと――」

神楽「――クイーンはただ一人!! この私だけネエエ!!」

銀八「早速ネタに走ってんじゃねえか!!」

いきなりバーニングソウルを使うキングのマネをした神楽に驚く銀  
八。

銀八「まあそう言うワケなんで、『黒神』さんは新小説の方も頑張  
ってください。次で最後だな。ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣  
麻』さんから、

『ハーケン・ブロウニング』ふう、やれやれ。それじゃ、俺から  
ガールたちにクエスチョンするぜ? スリーサイおっとソーリー、  
忘れてくれ。

どうして戦いに身を投じるんだい? 誰でもバトルするのは訳  
が有る筈だ。無理にとは言わない、ただ少し気になっただけさ」

前田慶次「俺からは、嬢ちゃんたちの恋の行方を応援するぜ!」

マユリ(bleach)「私から坂田銀時と天道ソラに聞きたいこ  
とが有るヨ? 私の実験、コホン・・・もとい改造を受けたいかネ  
? 私は何時でも君たちのことを歓迎するヨ?」

アレディ・ナアシュ「私からも質問したいことが。あなた方はい

つもどのような修練をしていますか？ 私もまた日々の修練を怠っておりません。皆様はどうなのでしょう？」『……』

代表してなのはとフェイトが答える。

なのは「私は誰かに傷ついて欲しくないから。そして、私を助けてくれる銀さんや皆のために戦いたいんです」

フェイト「私は母さんの笑顔を取り戻すために戦っています」

銀八「ま、男だろうが女だろうがそれぞれ戦う理由があるってことだな」

銀八が納得するように言う。

そして2で質問されたソラと銀時は、

ソラ・銀時

『『断固拒否』』

即効でそう答えた。だって何されるか分からないから。そして3は代表してセイバーとフェイトと銀時が答える。

セイバー「私は剣の腕を磨くための修練をしています」

フェイト「私は魔法の訓練を」

銀時「俺はサラサラヘアーになるように頑張ってます」

銀八「それ訓練じゃねえだろ！俺もやってるけどさー！」

やる気の無い銀時の発言にツツコム銀八。

銀八「はい。つつワケで、『武田軍兵士 清坂 劍麻』さんは廊下に立ってなさい。……ふう……今回これで終わりだな」

銀八はやつと質問コーナーが終わった事にため息を付く。

銀八「そんじゃ、予告しておくけど、次回のアシスタントはセイバになるのでよろしくお願いしま〜す」

ボッスンさんの所から今度はルビーと黒咲芽亜がやって来た。（詳しい事情は感想版を見てください）

連れてこられてルビーは合流したアリスやリリスやフェイトやなのはに女装させられていた。

どうやら女の子そっくりのルビーに女装させて楽しいらしい。つと言うか完全なワルノリだ。

もうあらゆる服を着せられている。しかもアリスがドSなためか、ルビーの精神をガリガリ削るコスプレをさせられたりした。

例えば、ゴスロリとかメイド服とかゴスロリとかメイド服とか——って、メイド服とゴスロリばっかじゃん！！、とか言うツツコミはさて置き、ルビーの精神は磨り減っていき、

ルビー「もう嫌だアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

涙を流してダッシュで帰って行った。

芽亜「あゝあ、さすがに悪ノリが過ぎたかな？」

芽亜は苦笑して頬を掻く。

アリス「では、残りの服はこの風呂敷に入れておくから、後はそっ  
ちの好きにしる」

芽亜「オツケッ」

芽亜はどでかい風呂敷を背負って帰って行った。

## 第二十七訓：温泉は身も心も裸にする（後書き）

黒龍「今回もたくさんの贈り物が贈られてきました。今回はこちらになります！」

「なっぺさんから直径5kmの器に入ったわんこそばと普通のわんこそば」、「勇者王 真オーズさんからユーノに特殊ストレージデバイス『ネオゲッター』」、「新八とトツシーにキスをする」と『新八君ずつと一緒に居てください。』と喋るスクール水着を着用して猫耳をしたなのニャン人形とフェイニャン人形1/1」

黒龍「贈って頂きありがとうございました」

ソラ「ほお、中々美味しいなこの蕎麦<sup>ズルズル</sup>」

アリス「そうだな（ズルズル）」

ユーノ「このデバイス、僕には扱いきれないかもな……（苦笑）」

新八「なのはちゃん!!」

トツシー「フェイトちゃん!!」

ブチユツ!!

なのは人形「新八くんずつと一緒に居て下さい」

フェイト人形「トツシーくんずつと一緒に居て下さい」

新八・トッシー

『『よっしゃああ————！！！！！！』』

黒龍「うわっ、最悪……。 (ズルズル)」 ↑蕎麦食ってる

## 次回予告

次回は温泉で銀時たちが出会った謎の人物たちがまた……。

黒龍「次回、『女子と混浴に入れると嫉妬を招く時もある』にテイ  
クオフ！」

第二十八訓：女子と混浴に入れると嫉妬を招く時もある（前書き）

黒龍「今回は銀さんがまたおいしい思いをしますよ」

銀時「はあっ！？ 俺に何か起こんのかよ！？」

黒龍「では、『リリカル銀魂ライダー』が始まります」

銀時「いや話し聞けよ！！」

## 第二十八訓：女子と混浴に入れると嫉妬を招く時もある

銀時は混浴でアルフからソラ達の話聞いた後、自分の泊まっている部屋に戻って新八、ライダー、土方、近藤、山崎、沖田、なのは、ユーノを集めた。

アルフから聞いたソラ達の情報を新八達に話す為である。

そして一通りアルフから聞いた内容を新八達に話した。あ、さすがに混浴で話を聞いたなんて言えないので、廊下で話を聞いたと言う嘘は付いた。

新八「じゃあライホースさんを抜いた他の皆さんは、昨日遭遇した魔導師の女の子達と一緒に居るって事ですか!？」

新八は驚いた顔で銀時に聞く。まさかソラ達が敵対している魔導師達と一緒にいるのはかなり予想外だったらしく、新八はかなり驚いていた。

新八の言葉を聞いた銀時は頷きながら答える。

銀時「ああ。って言っても連中の本拠地?……みたいな場所に居るみてえでな、今は一緒に居ないとよ」

新八「いや、なんで“?”が付くんですか？」

新八は銀時の曖昧な言い方にツツコム。

ユーノ「それにしても、銀さんの話を聞く限りだと、昨日の魔導師達は悪い人達ではなそうですね」

ユーノは右前足で顎を触りながら考えるように言う。

確かに、昨日の一件で敵対関係になっているのにも関わらず、ソラ達が無事であると無理してでも教えてくれるところから、とてもフェイト達が悪い魔導師とは思えなくなってきた。それは他の面々も同じだった。

なのは「なら、次会った時にはお話して仲良くなれるかもしれないって事ですよね？」

なのはは少し興奮したように言う。

なのははフェイトと初めて会ってからフェイトの事が気になっていた。

フェイトの綺麗でどこか寂しそうな目を見てからと言うものの、フェイトの事が気になって頭から離れなかったのだ。だから、できるならきちんと話をしたいと前々から思っていたのだ。

なのはの言葉を聞いた銀時は腕を組んで言う。

銀時「そこはどうだろうな？ 別に悪い連中じゃなくても、アイツ等にはアイツ等のジュエルシードを集める理由ってのあるみてエだからな。素直に話を聞くとはい限らないぜ？」

なのは「そう、なんですか…」

銀時の言葉を聞いてなのははシユンとするが、すぐに気を取り直して言う。

なのは「それでも、ちゃんとジュエルシードを集める理由を聞きたいの！」

銀時「そうかい」

なのはの決意の籠った言葉を聞いた銀時は微笑を浮かべてなのはの頭をポンポンと軽く叩く。

新八や近藤や山崎はなのはの決意のある言葉に対して感動し、ライダーと土方は子供にしてはしっかりしていると感心していた。あ、沖田はアイマスク付けて寝ている。

土方「にしても、まさか桂の奴までこの世界に来てたとはな」

土方は思い出したようにタバコを吸って言う。

さつき銀時から桂もソラ達と一緒にいると聞いた土方と近藤と山崎は驚いていた。

ちなみにちゃんと桂がこの世界に来たワケも銀時と新八は話したのだが、その『来た理由』を聞いて土方と山崎は呆れていた。

\*桂がどうやってリリカルなのはの世界に来たかは、第十一訓：始まりは突然を見てください

沖田「つで、どうするんですか近藤さん？ やっぱ桂の野郎は捕まえるんですかイ？」

沖田はアイマスクを上げて寝転がりながら聞く。

近藤「当然だ！ 俺達は警察として職務を全うする為に、攘夷志士である桂を捕まえねばならん！」

近藤ははっきりと桂を捕まえると宣言する。例え異世界であっても真撰組局長としての務めを忘れてはいない。

近藤と沖田の話を聞いていたなのはは銀時に顔を向ける。

なのは「銀さん。桂さんって、悪い人なんですか？」

なのは不安そうな顔で小首を傾げて銀時に聞く。その仕草がまた可愛いと思う読者も少なくはないだろう。

ユーノ「そう言えば、前に桂さんって方の事は聞きましたけど、一体どう言う人なんですか？ 銀さん達の知り合いなのに、なんで警察組織の人間である近藤さん達に追われているか分からないんです  
が……」

ユーノも不安そうな顔で銀時に聞いた。

実の所、なのはとユーノは前に同じ万事屋メンバーであるソラやアリスやアリアやリリスや神楽やライホースについては色々話したのだが、一緒にこの世界に來た桂やエリザベスの事はあまり詳しく話していなかったのだ。

その時は、なのはとユーノの頭の中では桂は銀時達の知り合いか友達みたいな人物だと想像していたのだが、近藤達の雰囲気を見てどう言う人物なのか分からなくなってしまったのだ。

なのはとユーノに質問された銀時は頬杖付いて床に寝そべりながら言う。

銀時「ん……テロリスト」

なのは・ユーノ

『『えっ！？』『』』

銀時の斜め上の回答なのはとユーノは啞然としてしまう。

なのは「どう言う事なんですかそれ！？」

ユーノ「なんで銀さんがテロリストと知り合いなんですか!？」

そして我に返った二人は銀時に詰め寄る。

新八「ちょっと銀さん！ 確かにその言い方は間違ってますけど、二人を混乱させるように言わないでください！」

新八がもつと気の利いた言い回しができないかと言う風に文句を言い、ライダーがなのはとユーノを落ち着けて桂の事を説明する。

桂は攘夷志士と言う、なのはの世界で言う所の政府である幕府を打ち倒そうとする集団のリーダー的存在だが、誰も傷つかない方法で国を変えようとしている穏健派であると説明した。

桂の人柄は基本はボケまくる変な人だが、基本は真面目な根の良い人であると新八がフォローを入れて説明した。

なのは「そうなんですか」

ユーノ「桂さんって方も、さほど悪い方ではないみたいですね」

なのはとユーノは銀時達の知り合いがそれなりに良い人であると分かって安堵する。

土方「ま、俺達にしてみればアイツもただの犯罪者だ」

土方はタバコを吸いながらクールに言う。

穏健派にしろ、過激派にしろ土方にとっては桂も捕まえるべき存在なのには変わらない。

そんな土方に新八が待ったを掛ける。

新八「でも土方さん。捕まえるも何も、この世界では桂さん犯罪者じゃありませんし真撰組もないのにどうやって桂さんを取り締まるって言うんですか？」

新八の意見も最もだ。そもそも桂はこの世界では犯罪者どころか一般人Aみたいな存在だ。

それに桂を捕まえる権限もこの『リリカルなのは』の世界ではどこにもない。

土方「そんなの関係ねえよ。攘夷志士は攘夷志士だ。どこの世界でもそれは変わらねえよ」

スッパリとクールな意見で新八の意見を聞き入れない土方だが、近藤が握り拳を作って手をポンと叩く。

近藤「おお、なるほど。なら桂をこの世界で捕まえる事はできないな」

土方「いや、何あつさり言いくるめられてんだよ！？ あんたはこの世界でも真撰組局長だろ！！」

簡単に新八の意見を納得してしまう近藤に土方がツツコム。  
そんな土方の肩に沖田が手を置く。

沖田「まあまあ、良いじゃないですか土方さん。そんなガチガチの考え方じゃなくて臨機応変に行きやしよう。臨機応変に。俺としてもそっちの方がらく……正しい事だと思いますぜエ」

土方「今“楽”って言おうとしたよな！？ 明らかにメンドーだか

らそつちの意見に賛成したよな!？」

土方の言うとおり沖田も別の世界は別の世界と割り切っていく事にしたみたいのだが、実の所元の世界で桂を追いかけるのがメンドーだからと言うのが本音なのは土方にはすぐに分かった。

土方は沖田にツッコミを浴びせた後、疲れたようにタバコをふうつと吐く。

土方「じゃあねえ。この世界で、桂を捕まえるのはなしだ」

土方は渋々納得する。

新八「あの、なんかすみません」

新八は申し訳なさそうに言うが、内心では安堵している。

さすがにジェルシードと言う問題があるのに近藤たち真撰組が桂を追いつけ回すと言う問題が新たに出来ては、とてもじゃないがジェルシード探しに支障が出てしまうからだ。

新八「あ、そう言えば山崎さんは桂さんを捕まえない事に反対しないんですか？」

さっきまで会話を黙って聞いていたジミーこと真撰組密偵である山崎に新八が思い出したように聞く。

山崎も紛いなりにも真撰組の一人なのだから、何か反対の意見を言ってくるもおかしい。

山崎「まあ、俺としては桂を捕まえる事にそこまで執着してないから」

山崎は真撰組らしからぬの発言と想つてか、控え目に言つ。  
すると、銀時が肩を揉みながら立ち上がる。

銀時「さあて、もう話す事もなさそうだし俺はその辺でもブラブラしてゐるか」

そう言つて部屋を出て行くとする銀時にライダーが声を掛ける。

ライダー「そう言えばギントキ、アルフとかいう方との混浴はどうでしたか？」

銀時「まあ、さすがの銀さんも戸惑つたね、アレには………  
…はっ!!」

ライダーの言葉を素直に乗つて答えた銀時は一瞬思考を停止させた後に自分の言つた言葉の重大さに気づき冷や汗をドツと流す。

そして油の切れたブリキの人形のように首をギギギと後ろに曲げる。

銀時「……見てたの？」

ライダーは無言で頷く。

銀時はその言葉からライダーが自分とアルフが混浴の温泉に入る所を見た事が分かつた。

実の所ライダーは、銀時が混浴に入つたの見た時に自分も後からこつそり入ろうとしたのだが、アルフが先に混浴に入ってしまったのだ。それで、隠れて銀時とアルフの様子を見ていたのだ。

ライダーは立ち上がり、それに続いてなのはも立ち上がる。しかも二人からは黒いオーラが出ていた。

そして二人は無言で銀時の腕をガシツと掴んで部屋の外に連れて行

く。

銀時「えっ!?! ちよつと待ってちよつと待って!! なに!?!  
何なのコレ!?!」

銀時は二人の行動の意図が良く分からず戸惑う事しかできなかった。  
ただ何か怖い事が起こるだろうとは直感的に分かった。

そしてドアがボタンと閉まり、銀時の姿は見えなくなった。

その光景を見ていた沖田を除いた他の面々は顔を真つ青にして冷や汗を垂れ流して呆然としていた。

新八にしても女性と一緒に風呂に入った銀時に言いたい事が山ほどあったが、二人の黒いオーラが怖すぎて何も言えなかった。

そして部屋を連れ出された銀時からの断末魔が響く……事はなく、

銀時は混浴の前まで二人に引きずられただけだった。その後も、O

H A N A S Iや死刑執行を受けなかったのだ。

銀時「え、えつと……これはどゆこと?」

銀時は座りながら汗を流して黙っているのはとライダーに質問する。

二人のオーラのせいで此処まで黙って引っ張られたワケだが、何故混浴の前まで連れてくるのか分からず、二人の意図がまるで見えなかった。

二人は銀時の問いに答えず、銀時の手を取って立ち上がらせる。

銀時は二人を交互に見ながら戸惑い一色の顔をしていた。  
一体何がしたいんだ？、と言いたそうな顔をしていた。

なのは「別に私達はアルフさんって人と一緒に温泉に入った事には怒ってないよ」

ライダー「どう考えてもギントキに非はありませんから。アレは言わば事故です」

銀時「あ、そうなの。なら俺行くわ」

何故自分とアルフが混浴に入った事で二人が怒る理由が分からなかったが、怒ってないならそれで良い。

此処に連れてきた理由などを知りたかったが、とりあえず今は二人から離れないとマズイ気がした銀時はどこかに行こうとするが、二人の手の力が強くどこにも行けなかった。

銀時「……あの、離してくんない？」

銀時は汗を流しながら二人に手を離すように言う。  
二人はゆっくり手を離さない理由を言う。

ライダー「ですがギントキ……」

なのは「女の人と銀さんが一緒に温泉に入ったら妬いちゃうの」

銀時「え？『焼』いちゃう？ 何！？ 俺を焼く気なのか！？」

なのはの言った言葉の意味を間違える銀時に構わず二人は喋り続ける。

ライダー「ですから……」

なのは「一緒に温泉に入ろう」

銀時「……………えっ？」

笑顔でとんでもない事を言う二人の言葉を聞いた銀時は少しの間フリーズした後に呆けた声を出す。

銀時「……………えっと……………もしかして此处に？　しかも俺達三人に一緒に？」

混浴と書かれたのれんを指差す銀時の問いに二人は頬を赤く染めながら無言で頷く。

自分達から言った発言とは言え、やっぱり恥ずかしいらしい。

銀時「……………いやいやいや！！　それはダメだろ！！  
それはマズイだろ！！　色んな意味で！！」

なのは「でも銀さんはアルフさんって人と一緒にお風呂入りましたよね？」

ライダー「なら、私達と一緒に入っても問題ない筈です」

銀時「いや、さっきアレは事故だって言っただけだろ！？　言ってること支離滅裂じゃねエか！！」

銀時はツツコミをして二人と一緒に風呂に入らないようにしている。アルフとの事は彼女の独断のと言う名の事故のために銀時に非はな

いが、此処でなのはとライダーと一緒に風呂に入ってしまったえば、もう言い訳のしようがないと思ったからである。

いくら男で性にちゃんとした興味がある銀時でもこればかりは受け入れる事はできない。

それにもし銀時が二人と一緒に入ってしまったえば、どこぞのなのはファンやライダーファンとか、FFF団的な人達に殺されてしまうだろう。

なのは「ダメ、なんですか……？（涙目＋上目遣い）」

ライダー「ギントキ……（涙目＋上目遣い）」

銀時「ぐっ！？」

銀時は胸に罪悪感と言う名の衝撃を受ける。

十歳にも満たない少女、しかも美少女が涙目で更には上目遣いで頼み込んでくる。

そんななのはの姿を見たらロリコンなら一発だろうし、そうでない大人でもグツと来てしまいか、罪悪感に襲われるだろう。

ライダーなんかは普段しっかりして凜とした顔をしている分、涙目＋上目遣いをしたらそのギャップは半端なかった。

似合わないどころか、寧ろ似合っているくらいである。

そしてそんな美女と美少女の姿を見て銀時はかなり動揺する。

だが、強い意志で耐える。

銀時「だ、ダメだ！！俺ロリコンじゃないし！！新八に殺されるから！！」

なのは「うう……（レベルアップ涙目＋上目遣い）」

ライダー「……………（レベルアップ涙目＋上目遣い）」

銀時「見るなアアアア！！ そんな目で俺を見るなアアア！！  
なんか俺が悪い事してるみてえじゃねえか！！」

必死に抵抗する銀時に二人が追い討ちを掛けた。

なのは「うう……………（更にレベルアップ涙目＋上目遣い）」

ライダー「……………（更にレベルアップ涙目＋上目遣い）」

銀時「刺さったアアアアアア！！！！ 俺の胸に何かぶっさっさった  
アアアアアアアア！！！！」

銀時は自分の胸を抑えて苦しむ。最早銀時のライフはゼロだった。

銀時「……………分かった。その目を止める。混浴入ってやるから」

銀時は右手を前に出して胸を押さえながら汗を流して了承する。

なのは「ありがとう銀さん／＼／＼／」

ライダー「感謝します／＼／＼／」

さつきとは打って変わって二人は笑顔で銀時にお礼を言う。

銀時はこの時、嵌められたと思った。

銀時となのはとライダーが温泉に一緒に入ったシーンは皆様のご想像にお任せしますが、読者の声でこのシーンが描写される可能性があるかもしれません。

その頃、別の部屋では、なのは達と一緒に温泉に入っていたシオネと言う少女と、新八に女湯を覗いている所を指摘されたエクセルと言う黒髪の青年とその連れであるうアクセルが居た。それに廊下でなのは達に会った金髪の少年が居た。

アクセル「お前ホントいい加減にしろよ！！ サイラスにあんまり目立つ事はするなって釘刺されるのをもう忘れたのか！？」

アクセルは額に青筋浮かべながら頬杖付いてつまならそうにしているエクセルに怒鳴る。

怒鳴られているとうのエクセルは欠伸かいている。

その態度にアクセルの怒りが更に増す。そしてエクセルの胸倉を掴む。

アクセル「お前に何その態度？ 喧嘩売ってんのか？」

エクセル「うるせえーな！！ 終わった事に対してグチグチ言うなんてみっともないと俺は思います！！」

アクセル「逆ギレするお前がみっともないわ！！」

いきなり逆ギレするエクセルにアクセルは額に更に青筋を増やしてツツコム。

アクセラル「それにユウもユウだ！　なんで“あのガキ”とわざわざ接触したんだよ！？　俺達の存在は公にできないのはお前も分かっただろ！」

アクセラルはエクセル同様軽率な行動をした金髪の少年――「ユウ」にも文句を言う。

アクセラルとしてはユウの会ったあのガキ――なのはとの接触は極力避けると言われていたのに、それをユウは無視してあっさり接触してしまったのだから文句を言うのも仕方ない。当のユウは寝転んでPSPしていた。

ユウ「……ん？　何か言った？」

アクセラル「お前等……人の言バカにすんのも大概にしがれエエエエエエエエ！！！」

怒りが限界に達したアクセラルは躍り出てエクセルとユウに襲い掛かる。

シオネ「落ち着いてアクセラル！！　暴れたら女将さんに怒られるから！！！」

シオネが必死でアクセラルの体を抑えてを止める。

アクセラルは尚も暴れだす。

アクセラル「離せシオネ！！　このバカ二匹のせいでサイラスにいつも愚痴を言われる俺の苦勞を記憶させてやる！！！」

エクセル「おいおい、目立つ事するなって言ったのはアクセラルじゃん。ダメだろ騒いじゃ」

「アクセルル、お前が言うなアアアアアアアアアアアア！！！！！」

ドカ！！

エクセル「ゴハツ！」

アクセルはずっとふざけまくっているエクセルにアップパーカットをお見舞いする。

エクセルの体が勢いのあまり宙を舞う。

それを見てユウは大笑いし、シオネはアクセルを落ち着かせるようにと頑張っている。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒全員

銀八先生！

銀八「はい。今回も質問コーナー始めます。そして全開言ったとおりアシスタントはこの人——」

セイバー「ソラのサーヴァント——セイバーです。今回はアシスタントを勤めさせて頂きます」

凜とした顔でお辞儀をするセイバー。

銀八「はい。丁寧な自己紹介ありがとうございました。では、早速最初の質問を読んでもください」

セイバー「分かりました。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから、  
『明久』質問！『皆さんはこっちのメンバーで戦いたくない人は誰？』」

私もまた前回と同じ質問をしますがちよつと変えて…『良くあるリリなのと東方など定番クロスを除いて平成ライダーとクロスオーバーさせるどう言う作品にしますか？』

ネス「アルフさんに質問『壊れたフェイトさん見てどう思いますか？』」  
「一つ言っておきますが、私は誰とでも臆することなく戦います！」

彼女なら例え魔王とでも勇敢戦うだろう。

銀八「さすがは騎士王だな。俺は冥王とだけは戦いたくないって答えが多そうだな」

なのはそっくりで、しかもなのは以上に魔王らしい冥王とはやりたくないと思うのは当たり前だ、と銀八は思った。

そして2で質問された黒龍は……

黒龍「そうですねえ……インフィニットストラスISとか良いんじゃないですかね？」

と少し間考えて答える。

銀八「なんか、どう言う内容になるか想像できないんだけど……」

さすがにISと仮面ライダーのコラボとなると、どんな作品になるか予想できない銀八だった。

銀八「んで、最後に質問されたアルフの答えは――」

アルフ「フェイトオオオオオオ！！！！ カムバツーーーーーク！！！！」

涙流しながらいつものフェイトに戻って欲しいと心の底から願うアルフであつた。

銀八「まあ、アルフの気持ちも分からないではないな」

セイバー「恋は人を変えます」

銀八「まさか騎士王様からその言葉が聞けるとは思わなかったんだけど！？」

セイバーの予想外の言葉に驚愕する銀八。

銀八「……そんじゃ、『鳴神 ソラ』さんは廊下に立ってなさい。

次、ペンネーム『真王』さんから、

『真王』（無視）では質問タイム。『神をどう思いますか？（神とは光の象徴だが誰の味方もしない存在。しかも不都合なことになるとその世界を消滅する<sup>リセット</sup>という）』『リリースってアウトフレームモードにムチムチ化は出来ないんで？出来ないんだつたらタバネさんが直々にそれとおまけを改造してくれるよ（例えば魔力で原爆作れるとか）』『人に光あれば闇もある。闇があるとすれば自分はどんな奴だと思いますか？（予想：闇銀時は高杉の様に破壊つくす奴）』そ

れでは」……」

セイバー「そんな神は神にあらず。誰の味方もしないならともかく、自分の都合で世界をリセットするのは許せません」

もしそんな神がいたらセイバーが『エクスカリバー約束された勝利の剣』で滅殺し  
そうである。

ただ、神としては平等に成り行きを静観するなら、寧ろ神らしいと思っ  
た。

万能の力を持っているのだから、どっちかに肩入れするようなマネ  
はあまり好ましくないらしい。

銀八「ムチムチモードんで、2で質問されたリリスだけど……。お前って、本当に  
そう言う体になれないの？」

リリス「なれるんだったら最初からなってますよオオオオオ！！  
それなら私だっていくらでもソラ様誘惑できますもん！！　って  
言うか、できるんだったらお願いします！！」

自分の幼児体系に対して悲しくなったりリリスは涙を流し、拳句はお  
願いしてしまう。

セイバー「くっ……！　私だって胸が小さい事を気にしていると言  
うのに……！」

セイバーは悔しそうに握り拳を作る。昔はさほど胸の大きさについ  
て悩んではいなかったが。ソラと言う好きになつた異性があるので、  
最近では気にし始めたのだ。

銀八「まあ、牛乳飲んでバストアップ体操すれば？」

セイバー「分かりました。牛タン食べてアルゴリズム体操します」

銀八「誰がそんな事しろって言ったよ！！」

らしくない間違いをするセイバーに銀八は思わずツツコム。

銀八「んで、3の質問だけど、お前はつきり言ってどんな自分を想像するよ？」

セイバーに質問する銀八。

セイバー「そうですね……自分の使命を忘れ、ただ戦うことだけに愉悦の喜びを見出すような存在になってしまうのではないでしょうか？」

銀八「ふう〜ん。なんか、マジでそうなりそうだな」

銀八はそんな風になったセイバーをどこかで聞いた事あるが、思い出せなかった。

銀八「じゃあ、『真王』さんは廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『ナナフシ』さんから、

『ナナフシ』質問行きます！」

銀時「ま、まずは俺からだ！そっちの俺以外の奴らに質問。俺には義妹の咲が居るんだが……咲と戦って勝てる自信あるか？咲は攘夷戦争で“冷血の鬼姫”と恐れられた武神なんだ。“冷血の鬼姫”状態になると、顔が無表情になり、無表情なのに鬼の様な目線の鋭さを感じるんだ。強さは俺の次に強い」

ナナフシ「何か、ソラ、アリス、アリアなら勝てる気がすると思う

んだが」

葵「次は私です。旦那はシルバーを使っている時はありますか？攘夷戦争が終わってから見ないんですが」『はあー！？ 何！？ あっちの銀時の野郎には義妹が居るのか！？』

まさか銀時に妹が出来た事に驚きを隠せない銀八。

セイバー「しかし、ギントキの義妹とは興味深いですね」

銀八「つつか、アイツの義妹はなんかアイツに惚れてる感じがすんだけど？」

しかもヤンデレっぽいところがあるので、なお驚きである。

銀八「それで、お前は勝てると思うか？」

セイバー「ギントキに次ぐ強さですからね、そう簡単には勝てないでしょう」

セイバーの言うとおり、攘夷戦争で『冷血の鬼姫』と呼ばれるほどのだから、相当な実力者の筈だ。

他の面々にしても、そう簡単に勝てるとは限らないと銀八も思った。

銀八「そう言えば、最近銀時の奴シルバー使ってないよな」

2の質問で思い出したように言う銀八。確かに最近はシルバーの姿を見てない。

それに対して銀時は、

銀時「まあ最近じゃあシルバーを使うほどの戦いになってねえしな」

シルバー「それは酷いぞ銀時！ 使ってくれないと私は寂しいぞ」

銀時「はいはい。分かったから、とりあえずあんま引っ付くな」

シルバー「良いではないか」 たまに銀時の温もりを感じさせてくれても」

銀時「ちよっ！ 胸が当たってんだけど！？／／／／」

銀時はシルバーの豊満過ぎる位の胸を押し付けられて顔を赤くさせる。

銀八「カーッペー！！」

ラブコメ展開している二人に対して銀八は床に思いつきり唾を吐く。セイバーはそれらの光景を見て、色んな意味で呆れていたと同時に自分もソラとラブコメしたい、とか思ったりした。

銀八「そんじゃ、『ナナフシ』さんは廊下に立ってろ！！」

セイバー「八つ当たりは見つとも無いですよ？」

銀八「うっせ！ 次、ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』さんから、

『小牟』むふふ。 フェイトがいい感じにキャラ崩壊しとるのお。ほんじゃあわしからぬしらに質問じゃあ！ 次の内ぬしたちにとつてムフフな展開はどれじゃ？」

1・好きな人と似てる人が同性とニヤンニヤンしてる。

2・自分の好きな人に尻を叩かれる。

3・好きな人（受け）×好きな人に似てる人物（攻め）。

4・お姫さま抱っこをされる。

5・好きな人に背中を預けて戦う。

さあ、どれじゃ!!」

アシエン「私から質問しちゃいますことよ。天パとマヨ、それとシスコンに質問。パンツ一丁で街中を走れば好きな物をやるうと言われたらやりますのですますか？」

美己「ミサカからも質問を行います。

ラヴァーズに質問。あなた方は商品が好きな人を好きにしていという条件なら、全裸でフルマラソンできますかとミサカは無理難題な事を聞きます」……なんかとんでもねえ質問してんだけど!？」

そして代表してフェイトとアリスとセイバーが答えた。

フェイト「私は4で!!／／／／」

アリス「フツ……私も4だ」

セイバー「私は5です」

銀八「フェイトはスンゲーやって欲しそうな顔だな、おい」

銀八はこのままフェイトがキャラ崩壊したらどうなるんだろう?、と思った。

次に質問された銀時と土方と恭也は、

銀時・土方・恭也

『『そんな事やるか!! つつか殺すぞ!!』』

と怒りを露にしていた。

そして最後に質問されたソララバーズは、

リリス「それは無理ですよオオオオオオオ！！！！／／／／」

アリス「ふむ……まあ別に構わんぞ。他人の目など気にはしない。

まあソラが痴女に惚れられているなどと言う噂が立つのは不本意だから、さすがにやるかどうかは分からんな」

アリア「にやゝ……アリスと同じ」

セイバー「さすがにそれは……！！／／／／」

フェイト「わ、私は……その、えつと……／／／／」

ヤミ「えつちいのは嫌いです！！／／／／」

リリスとセイバーとヤミは恥ずかしそうにし、ヤミに至っては手を刃にしている。

フェイトはどうやらどちらにしようか迷っているようだ。

アリスとアリアなんかは別に構わないと言った雰囲気だ。

銀八「いや、セイバーとヤミとリリス以外の奴はどう考えても異常なんですけど！？　そんなのマジでやったらお前ら痴女扱いされるだろー！！」

さすがの銀八もあの三人はどれだけソララブなのか想像できなくて戦慄を覚える。

銀八「とりあえず、『武田軍兵士　清坂　劍麻』さんは無理難題な

質問はお控え下さい」

セイバー「次です。ペンネーム『ボッスン』さんから、  
「ヤミ」質問です」

芽亜「私は新八さんと土方さんのロリコンを治したい為にこんな事をしました」

バーナジ「どんな事を？」

芽亜「まずは新八さんと土方さんが集めているのお通さんのグッズや魔法少女リリカルなのはのグッズなどがある物を全て売りました。次に新八さんと土方さんが銀さんLOVEズとソラさんLOVEズと神楽ちゃんと松平さんの娘さんの下着を盗んだ事と松平さんの娘さんと屁怒組さん一家とお妙さんとお通さんと銀さんLOVEズとソラさんLOVEズと神楽ちゃんの悪口を言った事と屁怒組さんの花屋を全てボロボロにした事と転成者達にこの変態カスロリコンどもがと言った事の情報を流しました。なのはちゃんとフェイトちゃん、最後に新八さんと土方さんにこのクス変態オタクカスロリコンダメ侍、死ぬ！！！と言つて、最強の必殺技を放ってください」  
うおおおおおおおおい！！！！？？　なにとんでもない嘘情報をとんでもない連中に送つてんだよ！！？」

さすがの銀八もこの質問には顔を蒼白にさせた。

そして気づく……セイバーがいつの間にかいない事に。

そして遠くの方から、

新八・土方

「助けガオsがj語派j顔jゴアw jg j話おごあjこうえあj  
ごあじよくあじよgじゃをjくおjごわじよじゃ!!!!!!!!!!!!!!

「！！！！」

と言う最早断末魔とも悲鳴とも呼べないような叫び声を上げた。  
どうやら、さっき嘘情報を聞かされた人たち全員にリンチされているようだ。

最後にフェイトとなのはの、「新八<sup>さん</sup>と土方<sup>さん</sup>最低！！」と言う言葉と、  
ズドカアアアアアアアアアアン！！！！

と言う大爆発と、

新八・土方

『『光になるウウウウウウウウウウ！！！！』』

と言う断末魔が木霊した。

銀八「ぼ、『ボッスン』さアアアアアアアアアん！！！！　これ  
ほぼあんたのこのキャラのせいだからアアアアアアアアアア！！！！」

最早哀れな二人に対して同情することしかできない銀八は思わず叫んでしまった。

そして、遠くから、

土方「芽亜らアアアアアアアアア！！！！　殺してやらエエエエエ  
エエエエええええええ！！！！」

と大爆発した土方の声が響き渡った。たぶんボッスンさんの所に向かったのだろう。

銀八「そりゃあ怒るよな！」

当然の反応だと銀八は思った。

銀八「じゃあとりあえず次。ペンネーム『月光閃火』さんから、

『1・新八の事を蔑んできた人達に質問』というか前の質問の補足だ。前の質問で挙げた罰だが、もし『無視』なんて愚行をしたら…その罰二つを倍で受けてもらうからそのつもりで…。ちなみに、またパスしたりしたらその倍を…という具合に倍々増加で受けてもらうからあしからず。

…色んな意味で恐え…（汗）。次は俺からだ。

2・アリスに質問…というか一言…黒いな。完璧にどす黒くてなのは（獄皇）超えちまつてるぐらい黒いな…（汗）。うん…アリスの異名【深淵ノ総主】ノワール・ハデス確定。（キツパリ）『……あ——』

前回質問を無視した銀八に迫る物が——！！

——ヤバイ映像なので少しの間お待ち下さい——

銀八「し、死ぬかと思った！！」

セイバー「良く生きてましたね」

とりあえず1の質問で来た罰をなんとか耐え抜いた銀八。セイバーは銀八の生命力に感心する。  
そして2で質問されたアリスは、

アリス「そうか」

と淡白に答えた。

銀八「あれ？ お前ならあんな事言われた怒ると思うんだけど？」

アリス「フツ……ああ言うこと言われて無闇に突っ込むなど言う愚考をすると思うか？ それにアイツはああ言うことを言って鎌ってほしいだけな『寂しい』奴なんだから。ああやって黒い事を言えば自分に構ってくれると思っている『可哀想な』奴なのだろう。そもそも、『オール・マスター万達者』であるアイツに挑んではこっちがやられてしまうではないか」

銀八「まさかの言葉攻めでしたんですけど！？」

物理的ではなく、精神的に攻撃してくるとは思ってなかった銀八は驚愕する。

アリス「まあ良い。とりあえず月光閃火の所に行ってみよう。まあ私は『何も』しないけどな」

アリスは黒い笑みを浮かべて月光閃火さんの所に行った。

銀八「ああ、ああ言う相手は敵に回したくねえな。その場の感情で動かない分厄介だし。そんじゃ、『月光閃火』さんはアリスに気を付けてください」

セイバー「私も彼女とだけはあまり戦いたくありません。では、次ですね。ペンネーム『勇者王 真オーズ』さんから、

『真オーズ』では改めて、質問です。まずは皆さんに。この前新八と土方がなのはとフェイトの等身大人形を持って激しく腰を振って、股間から青いゲッタービームを発射していましたがどう思いますか？ その時の映像を送るので答えてください」

アルト「あんたどれだけ新八と土方が嫌いなんだ！？」

真オーズ「全部」

スザク「即答！？」

真オーズ「では次の質問です。今度は黒龍さんに。シリーズ全般に搭乗するオリジナル敵組織のメカは考えてありますか？ もし無いなら言って下さい。いいアイデアがあるので」

アルト「何だろう、嫌な予感しかないんだが．．．」

スザク「安心して。僕もだから」

真オーズ「最後の質問です。またまた黒龍さんに。オリジナル転生者を3人（内2人は主要メンバーと絡ませる主役ポジで、残り1人はモブ）考えました。もしよかったら教えます」『……うわっ、あいつら最低だな」

セイバー「あの二人は侍失格ですね」

1の質問で教えられた二人の新八と土方の所業を見て軽蔑の視線を二人に向ける銀八とセイバー。  
そして2と3で質問された黒龍は、

黒龍「いや、メカとかはそれなりに考え付いているので大丈夫です。それと、転生者の方ですが、一応採用するかどうか分かりませんが、参考やアイデアとして見ても良いので、送っても構いませんよ。ただ、本当に採用するかどうか分かりません。色々今後の展開は考えているので」

銀八「ま、そう言うワケだ。じゃあ『勇者王 真オーズ』さんは廊下に立ってなさい」

セイバー「次、ペンネーム『ケン』さんから、  
『ケン』さあ・・・質問をしよう・・・」

黒龍さんも含む皆さんへ

猫耳をしたなのニャン人形とフェイニャン人形に発情した新八と土方を見てどう思いますか？

俺的にはこの二人は蔑ろにされても文句は言えないと思います。

松平のつつあんへ

猫耳をしたなのニャン人形とフェイニャン人形に発情した新八と土方を見てどうしますか？

万事屋メンバーへ

武田道場ならぬ屁怒紹道場（ボスが武田信玄の格好をした屁怒紹様で似たような技も使う）に参加してみたいですか？」……どう考えてもあの二人は侍失格と言うより人として失格だと思いました」

新八と土方の所業に対して完全に呆れてしまうセイバー。

銀八も同じだった。

この質問コーナーだけで二人の株は大分下がってしまっている。そして2で質問された松平は、

松平「最早あいつ等は侍でもなんでもねエ、ただのオタクだア。特にトシの奴は見損なつたなア」

軽蔑の眼差しで新八と土方を見ていた。

銀八「つつか3の質問の屁怒紹道場なんかには絶対参加したくねえー！！」

セイバー「それは私も同感です」

そんな怖い同情は勘弁だと思ふ二人だった。

銀八「つつワケで、まずは『ケン』さんが屁怒紹道場に参加しない」

セイバー「次です。ペンネーム『白騎士君』さんから、

『白騎士君』では質問にいきます。』

皆に質問。実は別の小説でフェイトはレナードに女装の服を着せさせて写真を取りました。こっちも完全にフェイトのキャラが崩壊してます。鼻血を出して（笑）どう思いますか？後、撮られたレナードのコスプレ写真を送ります。思い切り笑って下さい（笑）

『以上です』……別に興味ありません」

セイバーはレナードのコスプレ写真をポイツと捨てる。

銀八「ぎやははははは！！ 似合ってんじゃないか！！」

銀八はレナードのコスプレ写真を見て大笑いする。

セイバー「それにしても、別の小説のフェイトもキャラ崩壊が激しいようですね」

銀八「——そうだな。まあ、こっちのフェイトもヤバイとこまでいつちまってるけど」

銀八は笑うのを止めて同意する。  
そして他の面々も続々と答える。

ソラ「アイツは女装させられているのか」

銀時「つつか、あっちのフェイトもキャラ崩壊起こしてんだな」

アリス「……女装写真か……」

ソラ「妙な事考えてないか？」

アリス「そんな事はないぞ（ニコリ）」

銀時「うわっ、嘘っぱいな」

銀八「とまあ、こんな具合の反応を見せていますね。では、『白騎士君』さんは廊下に立っていないさい」

セイバー「次です。ペンネーム『正宗の胃袋』さんから、

『新八に質問。もしもなのはが『新八君、私の事が好きならアニメオタクとアイドルオタクを辞めてくださいなの』』って言われたら辞めますか?』……」

質問された新八は、

新八「ど、どうすれば良いんだ!?　なのはちゃんの気持ちは嬉しいけど、お通ちゃんを捨てる事もできない!!　僕はなんて罪深い男なんだ!」

頭を抱えて本気で悩んでいた。

セイバー「……見ていてあまり良い気持ちがないのですが……」

銀八「……まあそう言ってやるなよ。アイツに良い出会いがたぶんある筈だから」

セイバー「今のままではそれは遠そうです」

銀八「だよな。……じゃ、『正宗の胃袋』さんは廊下に立ってなさい」

セイバー「今回はこれで終わりですね」

銀八「そう言う事だ。今回も結構な量だったけどな。黒神のところに割に振った方が良くね?」

銀八は黒神さんのリリカル銀魂の質問コーナーのように質問を七つだけ答えるようにした方が良いんじゃないかと思った。

セイバー「まあ、まだ作者には余裕があるから大丈夫だとは思いますが」

銀八「それだとあいつが壊れそうだけどな」

セイバー「それでは、次回もお楽しみにください」

銀八「次のアシスタントはライダーです」

勇者王 真オーズの所から、何故か怒ってやって来たルルーシュとオズマにそりゃあもうボコボコにされました（笑）

新八・土方

『ぎゃ ああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！！』

二人の断末魔が木霊した。

悔しい理由は感想版をチエツク。

第二十八訓：女子と混浴に入れると嫉妬を招く時もある（後書き）

黒龍「いやゝ銀さん役得でしたなゝ」

銀時「俺がなのはファンやライダーファンに殺されないかが心配で  
それどころじゃねえよー!!」

黒龍「では、贈り物コーナーいきまゝす」

『鳴神 ソラさんからソラLOVEズに刑事なソラに逮捕されたソ  
ラLOVEズの写真を、銀時LOVEズ（＋アルフ）に歌舞伎役者  
な銀時の写真』、『真王さんからソラに飲ませるとソラが性欲暴走  
＋増殖を起す特殊媚薬』、『なつぺさんから無縁にジングスカンキ  
ヤラメル、女性陣に最高級メロンパフェ、男性陣は【強靱な肉体ツ  
クル君】』、『なのはに森羅の制服、フェイトにフェイトサイズの  
ネージュの服、セイバーにアルフィミイの服、ライダーに楠舞神夜  
の服』、『バリアジャケットの姿をしたなのはとフェイトの1/1  
人形を差し上げます。キスをする』、『ずっと大好きよ。』と喋りま  
す。（キスをしたらお登勢&アゴ美の姿になる）

黒龍「送ってくださった皆様ありがとうございます」

フェイト「こ、この媚薬を使ってソラと――!! / / /」

フェイトは媚薬の入ったお茶をソラに飲ませようとしたが、コテツ  
とこけてお茶を零した。

フェイト「そんなアアアアアア――!!（涙）」

無縁「なんだアこのキャラメル？　いらね」

無縁はキャラメル捨てた。

黒龍「塵と化すウウウウウウウウウウ！！！」

何故か男性陣全員に無理やり『強靱な肉体ツクル君』に入れられた黒龍。

アリス「ふむ、中々メロンパフェだな」

アリスはメロンパフェに堪能していた。（黒龍の断末魔聞きながら）

なのは「にやははは……これって、コスプレなのかな？」

フェイト「あ、この服結構良いかも」

セイバー「少し、胸が苦しいですね」

ライダー「意外にしつくりきますね」

黒龍「全員コスプレしつちやたんですけど！？」

新八「なのはちゃん！！」

トツシー「フェイトちゃん！！」

二人はフェイト人形となのは人形にキスした。

お登勢人形とアゴ美人形に変わった。

新八・トッシー

『うぎゃあああああああああ！！！』 ↑吐血

次回予告

温泉を楽しんでいたのはは、また寂しい目をした少女に再会を果たす。

それは一体どんな結果を生むのか？

今、侍と魔法が交差する。

新八「いや、なんでインデックス風！？」

セイバー「次回、『子供の夜更かしはダメ』にテイクオフ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4963s/>

---

リリカル銀魂ライダー～異世界鎮魂歌～

2011年11月23日15時50分発行